

蒼青の勇者と剣の勇者の姉妹とその友達達は異世界でも最強

ジェットプテラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある異世界を救った蒼青の勇者、鞆波氷水と剣の勇者天木錬は結婚して二人の姉妹授かってすくすく成長しました。

だけどある日異世界召喚されてあら大変蒼青の勇者と剣の勇者の姉妹は友と協力してピンチを切り抜ける

まだ蒼青の勇者は盾の勇者を影から応援をするが終わっていないく投稿して誠にすみませんでしたm () m

目次

日常生活終わり	1
トータスと契約	9
パーティーと王女	20
ステータス	30
オルクス大迷宮の準備	45
生徒会と粛清	52
オルクス大迷宮	64
ベヒモスと初変身(前編)	75
ベヒモスと初変身(後編)	82
整理整頓	93
探索開始	98
探検と再会の序章	105
再会	114
整理整頓、アテナ&雷槍編	119
整理整頓、ハジメ&香織、前編	125
整理整頓、ハジメ&香織 中編	133
整理整頓、ハジメ&香織 後編	142
整理整頓、黒花&牙十郎&優花	148
整理整頓、黒花&牙十郎&優花と合流	157
訳アリマシマシの吸血鬼	165
整理整頓 inアレーティア	177
迷宮の箱庭	184

オルクス大迷宮の最終攻略	192
クリア報酬	202
休息	212
今後の予定	218
異世界食堂、洋食の猫屋、オルクス大迷宮最深部店オープン前編	227
異世界食堂、洋食の猫屋、オルクス大迷宮最深部店オープン後編	236
最初のギフト	243
ギフトの試運転	256
兎とケルベロス	265
話し合い	272
亜人族の国フェアベルゲン	283
アルフレリック	292
話し合い	299
特訓一日目	311
特訓二日目	320
特訓八日目〜最終日	328
ハウリア族の初陣	336
抗争終結	343
大樹と別れ	352
ブルツクの街	360
大迷宮（その前）	368
ライセン大迷宮	378

ライセン大迷宮の目的地	390
ライセン大迷宮のボス戦 前編	399
ライセン大迷宮のボス戦 後編+攻略完了	408
風呂騒ぎ	425
異世界食堂	434
二回目のギフトの確認	442
馬車旅	453
フューレンで騒動	462
依頼と交渉	471
再開	478
信頼と侮辱の関係	488
真実の歴史	497
探索と救助	504
黒龍退治	512
自重聴取	521
豊穰の女神	529
魔物駆除	541
事件処理とJudgment Time	549
依頼報告	563
ホテルの出来事	577
壊滅作業	586
ホルアドの冒険者ギルド	595
遠藤浩介	607
再開の救助 前編	617
弾丸裁判	627

異世界食堂	in エリセンとその後	870
異世界食堂	in エリセン	860
エリセンと再会		850
終了と合流		841
変わる未来（嘘）		831
グリュエーン大火山の報告		824
ひと段落		815
暴かれる記憶		805
変わりゆく心		795
タイムループの仕組み		785
光輝更生作戦最終フェーズのタイムループ		776
嘘つきのシスターの診断		767
愛の亡霊（嘘）		758
作戦開始		748
下ごしらえ終了		740
ひと時の休憩		730
罪人と光輝が決めた裁き		720
気づいた正義の正体		712
嘘の宣言と救い無き救い		701
純粹の悪意と仕組まれた裏切り		689
嘘つきの模擬戦		678
模擬戦		668
計画発動前夜		659
光輝精神改造計画		650
戦闘終了後		640

ギフトの整理整頓	879
特典確認 中編	888
特典確認 後編	897
メルジーネ海底遺跡	907
メルジーネ海底遺跡	907
戦争と和平	921
亡霊とメイル・メルジーネ	933
ひと時の別れ	943
ギフトの整理整頓 in エリセン	954
ギフトの整理整頓 in エリセン 其の二	963
ギフトの整理整頓 in エリセン 其の三	973
リリアーナ・S・B・ハイリヒ	982
王都襲撃	992
ユエ達 SIDE	1003
シア&チロル	1013

日常生活終わり

「Ziririririri」 「ガチャ」

「もう朝か」

とベッドから起き上がり

私の枕元にある籠から

「翼愛、おはようシャル」

とウサギのような妖精が出て来た。

「おはよう、シャルル」

と私のパートナーに挨拶して自分の部屋から居間に移動した。

居間には母さんがキッチンで料理していて、父さんは椅子に座って新聞を読んでいた。

「母さん、父さん、おはよう」

「おはようシャル」

「おはよう、翼愛とシャルル」

「ああ、おはよう」

「それにジャベリンにラケルに「マツハキヤリバー」も」

と朝ご飯を作っている母さんの手伝いをしているペンダントをしている少年と同じぐらいの身長少女にも挨拶する

「おはようケル」

「おはよう翼愛ちゃん」

『おはようございます、翼愛さん』

「黒花は？」

「朝トレ」

と父さんが答えて

「あの子張り切っていたわね」

と嬉しそうに答えて

「翼愛とシャルル、顔を洗ってきなさい」

「はい」

「分かったシャル」

と私は洗面所に行って顔を洗って

「翼愛、タオルシャル」

「シャルル、ありがとう」

さて、この小説を読んでいる皆さんそろそろ自己紹介させて頂きます。

初めまして○○高校の生徒会長、さやなみ・A・よくあい 鞆波・A・翼愛です。

1人で自己紹介しながら一旦自分の部屋に戻りクローゼットから

○○高校の制服を取り出して着替えていると

「翼愛、リボンシャルル」

「ありがとう」

そしてこの子は私のパートナー、シャルル。

私の戦闘や生徒会の仕事を手伝ってくれる頼もしい存在の子

着替えて居間に戻るとすると

「ただいま」

私の妹が帰って来た。

「黒花にゴロミ、お帰りそしておはよう」

「お姉ちゃん、おはよう」

「おはよう」

この子は私の自慢の妹、さやなみ・A・くろか 鞆波・A・黒花

黒花は運動は抜群に良く私ともう一人の三人組で部活の助っ人をやっている。

ただ勉強は難あり。

ゴロミはシャルルと同じ立場でいいかな？

「あたいの説明雑だぞ」

「え、えっと何のことかな。」

取り敢えず、母さん、黒花が帰って来た」

「黒花、シャワー浴びなさい」

「はい」

と黒花は風呂に向かった。

危なかった私の考えを読まれていたかも

と考えながら居間に戻った。

母さん達の事も自己紹介もしないと

今朝ご飯を作っている人は私の母さんの鞆波・A・氷水

旧名は鞆波氷水、女優で在りながら声優に歌手など幅広く活動している。

その隣で母さんの手伝いをしてペンダントをしている少年はラケル

シャルルのお兄さんの存在で母さんの秘書をやっていて身長が低くて子供秘書で有名、今は人になっているがシャルルと同じ妖精の姿が本当の姿。

ペンダントは母さんの「インテリジエントデバイス」名前は「マツハキヤリバー」

母さんの愛機、ラケルのその隣にいるのは鞆波・A・ジャベリさん
母さんの義理の妹でラケルと一緒に母さんの秘書をやっている。

そして椅子に座って新聞を読んでいる人は私の父さん、
鞆波・A・鍊、旧名は天木鍊、見た目は何処に居るサラリーマンだけど、私と父さんに母さんと尚文おじさんの交渉技術を叩き込まれている為、父さんは会社では上に食い込んでいる。

家族構成を喋っていると

「さっぱりした」

制服姿になった黒花が居間に来て

「皆んな運んで」

「は〜い」

と全員朝ご飯を運んで

「いただきます」

と朝ご飯を食べ初めた。

こうして見ると普通でありふれた家族だけど、読んでいて感じが良い人は分かっています私達家族は普通じゃない。

その理由は私の両親が勇者である。

母さんと父さんは異世界に召喚されて母さんは蒼青の勇者で父さんは剣の勇者で、召喚した異世界で波と呼ばれた世界を破滅へと導く厄災を起こしていた黒幕である女神メディア・ピデス・マーキナーを尚文おじさんを中心にして神殺しを起こして世界を救った勇者に

なった。

そしてその血を私と黒花を引き継いでいるみたいで。力に目覚めたのは私と黒花が小四の夏休みの時で家族で山に行き黒花と一緒に山の崖の近くで遊んでいたら黒花がいた場所が崩れて私は急いで黒花が落ちた場所に行き、無我夢中で手を伸ばしたら手から魔力紐が出て来て黒花の手を結んで何とかかなり、その後、母さんと父さんが来て黒花を助けてその後両親の本当の姿を知って母さんと父さんから最低限の護身術と殺す意味を覚えてもらった。

と私の家族紹介終わったら

「ご馳走様でした」

と食べ終わって食器をキッチンに持っていて自分の部屋に戻り机の上に置いてある星形の銃と

「シャルル」

「はいシャル」「ポン」

「ラブリーコミュニケーション」に姿を変えたシャルルを鞆に入れて

「姉ちゃん早く」

「は〜い」

とキッチンの上に置いてあった弁当を取って

と玄関に行くと頭の上にゴロミを乗せた黒花と父さんが居て

「行ってきます」

「行っていくる」

「行ってらっしゃい」

と〇〇高校に今日も登校した。

く移動く

〇〇高校の二年??組のクラスに入って

「おはよう」

『おはよう』

と私達の息が合った挨拶してある程度の人は返してくれた。

私と黒花はそれぞれの席に座り、黒花はゴロミを頭に乗せながら机の上で寝ていて、私は前に座る、鳥の羽みたいなオレンジ色のロングヘアの友達に

「おはよう、アテナ」

「おはよう、翼愛」

挨拶をした。

この子は騎竜アテナきりゆうアテナ、私と黒花と一緒にしよっちゅう部活の助っ人をやっている。

其の為私達の事は色んな学校で有名で、勝利を呼び込む女神としてアルテミスズーの呼び名で有名になっている

「生徒会の仕事大丈夫か？」

「大丈夫ちゃんと休んでいるから」

「そう」

と会話して朝のHRの十分になりそうな時に教室に最後のクラスメイトが入ってきた。

彼の名前は南雲ハジメ、私の友達で、初めて会ったのは彼の親がゲーム会社のレコードの仕事を母さんが受けて、黒花と一緒に見学して、その時に会社の中で出会った。

それとこのクラスは殆どハジメ君の事をよく思っていない。

その理由は一人の女子生徒の存在にある。

「南雲君、おはよう！今日もギリギリだね。」

「あはは・・・おはよう白崎さん。昨日までに終わらせないといけない作業があつたんだ」

ニコニコと微笑みながら一人の女子生徒がハジメの元に歩み寄る。

この学校でもハジメにフレンドリーに接する数少ない例外であり、この事態のもう一つの原因でもある女子生徒。

名前は白崎香織

腰まで伸びている黒髪、おっとりとした目が特徴の女の子でこの学校では三大女神の1人であり、優しさに溢れた美少女だ。

因みに香織とハジメは仲の良い友達です。

友達の切っ掛けは高校一年生の時に私が香織をハジメの家に連れて行って一緒にゲームした事から始まった。

そのせいでクラスメイトの男子生徒には我慢ならないみたいで、「何故、あいつだけ！」と醜い敵愾心を向けている。

ちなみハジメ君の言った昨日までに終わらせないといけない作業
両親の手伝いで白崎さんは知っている。

とゆうか私が教えた。

「あいからずだね」

「そうだな」

とアテナと一緒にクラスの光景を見ていると

「おはよう。南雲君。いつも大変ね」

まず最初に挨拶したのは香織の親友の八重樫雫

ポニーテールにした長い黒髪がトレードマークで鋭い瞳ながらも
柔らかさも感じられるためカツコイイという印象を与える。

身長172cmという女子にしては高く、引き締まった身体つき、
その凛とした佇まいは侍を想像させ、彼女と私、そして香織さんを合
わせた三人が〇〇高校の二大女神と呼ばれる女子生徒だ。

実際、彼女の家は八重樫流という剣道場を営んでおり彼女自身小さ
い頃から剣道をやっているため一度も大会では負けたことがなく美
少女剣士として雑誌に載ることも多く熱狂的なファンもいる。

後輩の女子からは、アテナと一緒に「お姉様」と呼ばれているが本
人はあまり嬉しくないようだ。

其れと私、アテナ、黒花はよく雫の剣道の相手をしている。

本人曰く私達だと本気で踏み込めるみたい。

「おはようさん、ハジメ。親御さんの手伝いもいいがあんまり無茶す
んじゃねえぞ」

次に挨拶したのは香織と幼なじみの坂上龍太郎

短く刈り上げた髪に気合の入った目、身長は190cmもあり柔道
部ではエースとして活躍している。

一年の頃は正しく脳筋と呼ばれる人種だったのだが私が〇〇高校
の部活の実力を知る為片っ端から仮入部してその時の柔道部の相手
が龍太郎君で、組み手をしたところ彼の動きは読みやすかった為、私
は彼のスピードとパワーを借りて背負い投げをして勝負は一瞬で終
わってしまい観戦していた物や負けた本人でさえも呆然としてし
まった。

その帰り際「なんでそんなに強いんだ?！」と質問を受けたので「龍太郎君の動きは本能に従った動きしか出来ていないから考えて動けばもつとよくなるよ♪」とアドバイスしたのだがどうやら彼は勉強が苦手みたいだったので教えてあげることにした。

最初は苦戦したものの慣れてくるとスポンジが水を吸うかのよう知識を吸収しはじめ今ではクラスで10位以内に入る成績を残している。

今では良き友人で有り私、黒花、アテナの組手相手になっているそんな彼も最初はハジメのことを毛嫌いしていたのだがテスト期間中に一緒に勉強することになりその時にハジメの親がゲーム会社の社長で技術を学ぶために親の仕事を手伝っていることを知り、人それぞれに努力の意味が違うことを知りハジメと和解。
今では名前で呼び合う仲だ。

この二人は、ハジメと友好的な関係なのだが問題は彼なのだ。

「香織、また彼の世話を焼いているのかい? 本当に、香織は優しいな」
天之河光輝。

外見は、美少年と表現するのが一番しっくりくるだろう。

容姿端麗、成績優秀、文武両道の完璧超人。

名前の時点で勇者っぽい彼はまさに『現代の勇者』と呼ばれるような男。

サラサラの茶髪と優しげな瞳、百八十センチ近い高身長に細身且つ引き締まった体。

月二回以上は学校に關係なく告白を受ける筋金入りのモテ男だが、私として絶対に彼氏にしたくないタイプだ。

なんとというか、樹おじさんと元康おじさんを足して二で掛けたような性格をしている。しかも、性格は母さん達にボコられる前の悪かった頃の方だ。

「光輝君、あの性格が無ければ完璧なのに」
「確かに」

すると後ろの扉からガラガラと扉が開く。

クラスメイト全員を見ると

其処には鞆を持っている中学一年生と見間違える赤髪の少年が居た。

そして何事もなく戻った

「雷槍、如何した？」

とアテナが席立ち赤髪の少年の少年の下に向かった。

赤髪の少年の名前は騎竜きりゆうらいやう雷槍

騎竜アテナの弟で年は私達より一つ下でうちのクラスメイトの中の村恵里と谷口鈴に匹敵する身長でクラスメイトや先輩達によく可愛がられている。

「姉さんの弁当が僕の鞆に入っていたから届けに来た。」

「弁当？」

とアテナは自分の席に戻り自分の鞆に手を入れて探り出して徐々に慌て顔になり

「わりつい、わりいい」

とアテナは雷槍から弁当を受け取って鞆に入れた

「それじゃあ僕は自分のクラスにm」「!!」「!!」「!!」

雷槍が言い切る前に私達の背過ぎに悪感が走った。

それは寝ていた黒花が飛び起きるぐらいに

そしてハジメ達が立っている場所から魔法陣が表れて徐々に教室中に広がって来る

「アテナ、此れて」

私は推測でかもしれなと思いいアテナに質問した。

「間違いない私達召喚されるぞ」

「ですよね」

と逃げる事ができないと判断して私は咄嗟に自分の鞆を取って光は教室全体を包みこんだ。

光が消えた頃、教室には誰もいなかった。

椅子や机などはまるで先程まで誰かがいたかのような痕跡を残していたが、いるべきはずの人だけがその姿を消していた。

後にこの事件は世間を騒がせる集団神隠し事件として広まることとなる

トータスと契約

光が収まり、私は目を開くと最初に目に行ったのは、縦横十メートルはありそうな壁画で、後光を背負い、長い金髪を靡かせ、薄っすらと微笑む中性的な顔立ちの人物が描かれていた。

背景には草原や湖、山々が描かれており、その人物は両手を広げている。

実に美しい、素晴らしい壁画ではあるが、よく見るとその笑顔から何か恐ろしいものを感じる。

如何にもこの世界は私の物と言っている。

次に目が行くのは大理石をふんだんに使ったのであろう、美しい光沢を放つ滑らかな白い石造りの建築物、美しい彫刻が彫られた巨大な柱によってドーム状の天井が支えられて出来たその巨大な空間、その最奥にある台座の様な場所に私達がいる。それを取り囲む様に、聖職者の如き装いに身を包んだ30人以上の人々が祈りを捧げるかの様な格好で跪いていた。

そして

「アテナ、まさかと思うけどクラスメイト全員いる？」

「間違いないね。」

「これも最悪の状態だよ」

「とアテナが後ろを向いた。」

「私も釣れて後ろを見ると」

「ね、姉さん？」

黒花の隣に立ち戸惑って居るアテナの弟、雷槍が居た。

「確かに最悪の状態だね」

「だよ」

「とアテナと軽く会話していると誰かが歩いている音がして全員、音がする方を見た。」

集団の中から一番豪華な法衣を纏い、30センチはありそうな長さの烏帽子を被った70代ほどの老人が前に出た。

「と言っても、老人と表現するには纏っている覇気がすごく、顔の皺

や老熟した目がなければもつと若く見えたかもしれない。

老人は数枚の円盤が吊り下げられた錫杖を鳴らしながら、深みのある落ち着いた声でツカサ達に話しかけてきた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ラングバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

手に持った錫杖を鳴らしながら、イシユタルと名乗った老人は、好々爺然こうこうやぜんとした微笑を浮かべ、そう話し掛けた。

「異世界召喚経験者、アテナさん」

「何？」

「イシユタルをどう思いますか？」

私が質問するとアテナは嫌な顔をして

「前回私と雷槍を召喚した人達と同じ」

「そうですか」

その後大聖堂から場所を移し、巨大なテーブルが幾つも並んだ、恐らく晩餐会等を催す為の広間に通され、クラスメイト達は思い思いの席に着いて、私も手に持っていた鞆を椅子の隣に置いて座った。

因みに私達の席は大分前で私その右隣にアテナ、雷槍、黒花に座った。

そして私の左隣は畑山愛子先生

今年25歳になったらしいが、150センチ程の低身長で且つ童顔である事から実際の年齢の半分位にしか見えず、ボブカットの髪を跳ねさせながら威厳ある教師を目標にして生徒の為にとあくせく走り回る一生懸命な姿勢と、その悉くが空回つてしまう残念さのギャップに庇護欲を掻き立てられる生徒も少なくなく『愛ちゃん』の愛称で呼ばれ親しまれている。

その向かい側は天之河君、龍太郎君、香織、雫

ハジメ君は少し後ろに居る。

そして全員が用意された椅子に座ると、まるでタイミングを見計らったかのようにカートを押しながらメイド達が入ってきた。

それも日本の某地にいる様なエセメイドや、外国のおばさんメイド

ではない。男子の夢を具現化したかの様な美女・美少女メイドだったのだ。

地球では見られない本物のメイドの姿に男子達は大興奮だ。

それを目の当たりにした女子達が氷河期もかくやという冷たさを宿した視線を向けていて私達は呆れていた。

そして全員に飲み物が置かれて

「さて、飲み物は行き渡ったでしょうか？

あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。

一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され」

その後、イシユタルの説明を聞いて簡単に纏めると

この世界はトータスと呼ばれている。

トータスには大きく分けて3つの種族がある。

一つは私達と同じ人間族。二つ目は魔法の才能に優れた魔人族。

三つ目は様々な獣の特性を持った亜人族。

人間族は北一帯、魔人族は南一帯を支配しており、亜人族は東の巨大な樹海の中でひっそりと生きているらしい。

この内、人間族と魔人族が何百年も戦争を続けている。

魔人族は数こそ人間に及ばないものの個人の持つ力が大きいらしく、その力の差に人間族は数で対抗していたそうだ。

戦力は拮抗し大規模な戦争は此処数十年起きていないらしいが、最近、異常事態が多発しているという。

それが、魔人族による魔物の使役だ。

魔物とは、通常の野生動物が魔力を取り入れて変質した異形の事だ、と言われている。

この世界の人々も正確な魔物の生態は分かっていないらしく、それぞれ強力な種族固有の魔法が使える強力で凶悪な害獣と認識しているらしい。

今まで本能のままに活動する魔物を使役できる者は殆どいなかったし、使役できたとしても精々が1匹、2匹程度だった。

その常識が魔人族によって覆されたのである。

この意味するところは、人間族側の「数」というアドバンテージが崩れたということ。

つまり、人間族は滅びの危機を迎えている。

と聞いて私とアテナはイシユタルの説明を聞いて数秒たって

「はあー」

と小さくため息を吐いた

そして私は

《アテナ、此れて間違いなく》

アテナに向けて念話を送った

するとアテナから

《間違いない、遠回しに私達に戦争に参加しろと言っている》

と念話で会話していると

「あなた方を召喚したのは「エヒト様」です。

我々人間族が崇める守護神、聖教教会の唯一神にして、この世界を創られた至上の神。

おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。

このままでは人間族は滅ぶと。

それを回避するためあなた方を喚ばれた。

あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持っています。

召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があったのですよ。

あなた方という「救い」を送ると。

あなた方には是非その力を発揮し、「エヒト様」の御意志の下、魔族を打倒し我々人間族を救って頂きたい」

と予想通りの答えで私は呆れて天井を見て。

《アテナの予想通りだね》

《そうだな》

とアテナと念話で会話して居ると私の左隣にいる愛子先生が勢いよく立ち上がり、抗議を始めた。

「ふざけないで下さい！結局、この子達に戦争させようってことでしょ！そんなの許しません！ええ、先生は絶対に許しませんよ！

私達を早く帰して下さい！きつと、ご家族も心配しているはずですよ！あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」

愛子先生が言っている事は御もつともだが

《アテナ、此れって帰してくれないよね》

《そうだな、間違い無く帰してくれないな》

と確信した事を念話で確認していると

「お気持ちはお察しします。

しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」

場が凍りついて重く冷たい空気が全身に押しかかっているようだ。

誰もが何を言われたのか分からないという表情でイシユタルを見る。
やる。

私達は予想通りの過ぎる答えが出て冷静を超えて呆れている。

「ふ、不可能って……ど、どういう事ですか!? 喚べたのなら帰せるでしょう!？」

「先ほと言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。

我々があの場にいたのは、単に勇者様方を出迎えるためと、エヒト様への祈りを捧げるため。

人間に異世界へ干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意志次第ということですね」

「そ、そんな……」

愛子先生は脱力したようにストンと椅子に腰を落とす。

《アテナ、これって》

《帰して欲しければ戦争に参加しろ。

一種の脅しだね》

私達が冷静に分析している間に周りのクラスメイト達が騒ぎ出す。

「うそだろ? 帰れないってなんだよ!」

「いやよ! なんでもいいから帰してよ!」

「戦争なんて冗談じゃねえ! ふぎけんなよ!」

「なんで、なんで、なんで……」

クラスメイト達はパニック状態になっている。

黒花と雷槍は慌てっていない。

勿論私とアテナは冷静を保ちながらモールス信号で会話しながらイシユタルの様子を観察する。

顔には出ていないがその目には僅かながら侮蔑の感情が込められている気がする。

《アテナ、今のイシユタルさんを如何思う?》

《多分エヒトに選ばれておきながら如何して喜ばないのか、かな》

《そうだね。私も同じ考えをしていた》

と私とアテナは会話で会話している間にもクラスメイト達はパニックを起こしていたが直ぐに収まると思う。

その理由は光輝君が立ち上がりテーブルを

「バンッ」

と叩いた。

当然注目が集まる。

見せてもらおうか、君の演説を。

「皆、ここでイシユタルさんに文句を言っても意味がない。

彼にだつてどうしようもないんだ。

……俺は、俺は戦おうと思う。

この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。

それを知って、放っておくなんて俺にはできない。

それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。

……イシユタルさん? どうですか?」

「そうですね。

エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんまい」

「俺達には大きな力があるんですね? ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうです。

ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。

俺は戦う。

人々を救い、皆が家に帰れるように。

俺が世界も皆も救ってみせる!!」

握り拳を作って宣言する光輝君。

それと無駄に歯がキラリと光る。

悪くない演説で

「へっ、お前ならそう言うと思ったぜ。

お前一人じゃ心配だからな。

……俺もやるぜ?」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないわよね。

……気に食わないけど……私もやるわ」

「雫……」

「え、えっと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ!」

「香織……」

そして、その言葉は聞いて不安になっていた生徒達には希望と捉えられたらしく、

他のクラスメイト達（私とアテナ、黒花、雷槍、ハジメを除く）も賛同した。

愛子先生はオロオロしながら「ダメですよ」と涙目で訴えているが誰も聞いてはくれなかった。

だけど光輝、此れは少しやり過ぎ。

少し止めないと

《少し流れを止める アテナ、黒花、雷槍手伝って》

とアテナ、更に黒花、雷槍にも念話を送り

《分かった》

《了解》

《分かりました》

とアテナ達から合図を受け取り母さんと尚文おじさん、直伝の交渉技術とことん味わってね。

と思つて両手に口を添えて

「私は反対!」

と大きな声を挙げて全員注目して、続いて

「あたしも反対だな」

「私も」

「僕も」

とアテナ、黒花、雷槍と声を挙げた。

「翼愛達、話を聞いていたのか？このままではこの世界の人達が滅亡するかもしれないんだぞ!」

「聞いていたよ。」

「ただ確認したくて少し大きな声を出させてただくだけ」

「確認？」

「うん。」

「イシユタルさん」

「何でしょう？」

「魔族の特徴を言ってくれませんか？」

「魔族の特徴ですか？」

「はい」

「特徴ですか？」

「とイシユタルは少し考えている。」

「それとイシユタルさん、間違った情報もしくは嘘を流さないで下さい。」

「其れをやればエヒト様の怒りを買いますよ」

「ええ、存じています。」

魔族の特徴は私達にそっくりで、耳は僅かに尖っていて、肌も浅黒く、さつきも言った様に魔法の才能に優れた種族、そして冷徹無慈悲、それぐらいですかね」

よし、クラスメイト全員聞いた。

「翼愛、こんな時に何言っているんだ？」

「関係有るんだな、これが」

「如何な意味ですか？」

「この戦争に参加すれば耳や肌色が違う人間と殺し合いをしなければいけないの」

「こ、殺し合いつて……」

「そう、魔族も冷徹無慈悲なのは彼らも守るものが在るから敵を殺すんだよ」

私が言った事にクラスメイト達は自分のやろうとしていたことに気がつき、顔を青ざめさせた。

「でも…俺達には力がある！強い力があるなら、それは彼らを助けるために使うべきじゃないか！」

「力がある…か。だけど、力は使いようで、どんな素晴らしい道具も使い手が素人じゃ、その価値を示せないのと同じだよ」

と普段の学校生活で見せない眼の色を見せて

「ぐっ」

と後ろに下がらせたが

「皆、安心してくれ！俺がいる限りそんなことはさせない！」

その言葉でクラスメイトの顔が休らいた

「これ以上の話し合いは意味をなさないから、イシユタルさん、私達はこの世界の戦争に参加します。」

ただし、条件があります。」

「……ほう？」

「なっ!?待て、翼愛！何を勝手に「いいから黙っていなさい！光輝」
「今は翼愛に任せようぜ」

天之河君が私を止めようとしたが雫と龍太郎君がそれを必死に抑える。

「ありがとう、雫、龍太郎君

先ほども愛子先生が述べた通り私達は貴方方のせいで誘拐された、いわば被害者になります。

それなのに無条件で戦争に参加しろとは虫が良すぎではないでしょうか？無論、今から出す条件は双方が納得するものなのでご安心を」

「……まあ、良いでしょう」

「ありがとうございます。」

では、そこに居る貴方」

私の近くにいたメイドに指を指しながら声をかける。

「今すぐに紙とペンにインク、更にナイフを持ってきて欲しいけど」
メイドはイシュタルがコクリと頷くのを確認すると私の指示に従った。

しばらくしてからメイドがカートに紙とペン、インクとナイフを乗せながら戻ってきた。

「貴方には代筆をお願いしよう……イシュタルさん、良いですか？」

「ええ、構いません」

「では、始めます。私が出す条件は4つ。

・一つ目は衣食住の保障

・二つ目はこの世界のことについての地理、歴史などの資料、情報の提示

・三つ目は戦争に意欲的でない者は後方支援にまわしてもらう

・四つ目は全ての依頼に対して報酬を用意する

これが条件です」

「……まあ、これなら良いでしょう」

イシュタルがペンを持ち、その紙にサインをしようとした時

「イシュタルさん、少し待って下さい」

とイシュタルを少し止めて紙を取って

何故かこの世界の文字は読める。

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き幻想に隠されている真実を見せよドライファ、マジック、アンチ、アンロック」

と小声で母さんと父さんが救った異世界の呪文を唱えて魔法を発動したが変化なしと

「どうかされましたか？」

「いえ、不備がないか確認しています。」

と言って次に愛子先生に渡して

「愛子先生、確認お願いします」

「え、でもさつき翼愛さんが確認したはずですが」

「保険です」

「保険ですか？」

「はい、学生である私が抜け穴を見落としてそのまま通ります。

その場合、抜け穴を使って最悪クラスメイト達が死人が出ます」

と私が言う

「わ、わ、分かりました」

少し慌てて紙を見つめて文章を読んだり、逆さ読み、縦読み、紙を透かしたりなど色んな方法で確認して

「不備は在りませんでした」

と愛子先生から紙を受け取りイシユタルの前に出した。

「では書かせてもらいます」

イシユタルが持っているペンを紙にサインをしようとした時

「ああ、それからサインをした後は血判もしてくださいね」

「……何故でしょうか？」

「確かにサインをしたなら血判なんてする必要はありませんがサインだけではあなたがこの条件を守るともかぎりません。

保険の為に本人の物だと分かる血判をするんですよ」

「……」

イシユタルはその言葉に黙ってナイフで自分の指を切り血判を押した。

「どうやら、これで契約は成立ですね」

私は満足そうにしながら紙を筒状に丸めて懐の胸ポケットに仕舞う様に見せかけて

《シャルル、空間魔法の魔法陣を胸ポケットの入り口に張って》

《はいシャル》

とピンク色の魔法陣が胸ポケットの入り口に出て来て其れに入れてイシユタルに右手を差し出す。

「これからは共に魔族を倒すために良き関係でいきましょう」

「……ええ、こちらこそ」

「フフフ……」

二人は笑いながら握手をしていたが決して目は笑っていなかった。

パーティーと王女

戦争への参加を表明した以上、私、黒花、アテナ、雷槍以外のクラスメイト達は戦いの術を学ばなければならない。

いくら規格外の力を潜在的に持っていると言っても元は平和に浸かりきっていた日本の高校生だ。いきなり魔物や魔人と戦うなど不可能である。

私達は経験者なので戦闘なのはできます。

しかし、その辺の事情は把握している為この聖教教会本山がある【神山】の麓にある【ハイリヒ王国】にて受け入れ態勢が整っているらしい。

私とアテナ、雷槍は椅子の隣に置いた鞆を持ってイシユタルの案内の元、聖教教会の正面門まで移動する事になった。

下山してハイリヒ王国に行くためだ。

その間

《シャルル、ラケルと「マツハキヤリバー」母さんの「シヨドウフォン」父さんの「ビードルフオン」後尚文さんの「飛電ライズフォン」のどれかに繋がった?》

私のパートナーのシャルルに念話を送った

《駄目シャル、さつきから連絡しているけど繋がらないシャル》

《そう、アテナ、雷槍君は?》

黒花、アテナ、雷槍にも念話で連絡を入れた。

《こつちも駄目だ》

《僕もです》

《そう引き続き連絡を入れて》

《分かったシャル》

念話で会話している間、聖教教会の正面門までやってきた。

聖教教会は【神山】の頂上にあるらしく、凱旋門もかくやという荘厳な門を潜るとそこには雲海が広がっていた。

クラスメイト達は太陽の光を反射してキラキラと煌めく雲海と透き通るような青空という雄大な景色に呆然と見惚れていた。

どこか自慢気なイシユタルに促されて先を進むと、柵に囲まれた円形の大きな白い台座が見えてきた。美しい回廊を進みながら促されるままその台座に乗る。

台座には巨大な魔法陣が刻まれていた。柵の向こう側は雲海なので大多数の生徒が中央に身を寄せる。それでもクラスメイト達は興味が湧くのは止められないようでキョロキョロと周りを見渡していると、イシユタルが何やら唱えだした。

「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれんー 『天道』」

その途端、足元の魔法陣が燦然と輝きだした。そして、まるでロウプウェイのように滑らかに台座が動きだし、地上に向けて斜めに下っていく。

「どうやら、先ほどの『詠唱』で台座に刻まれた魔法陣を起動したようだ。」

ある意味、初めて見る『魔法』に私、黒花、アテナ、雷槍以外のクラスメイト達はキャツキャツと騒ぎ出す。雲海に突入する頃には大騒ぎだ。

私達は魔法見たこともある。

其れも使ったこともあるから驚かない。

でも最初に魔法は私も驚いたな

その間、お昼ご飯の弁当を食べながら待っていると雲海を抜けて地上が見えてきた。

眼下には大きな町、否、国が見える。

山肌からせり出すように建築された巨大な城と放射状に広がる城下町。

ハイリヒ王国の王都だ。

台座は王宮と空中回廊で繋がっている高い塔の屋上に続いているようだ。

さて今はそんなことよりもこの世界でどう生き延びるかを考えて置かないと

私は思考を切り替えてから、この先待ち受ける試練に向けて覚悟を決めるのだった。

く移動く

王宮に着くと、私達は真つ直ぐに王座の間に案内された。教会に負けないくらい煌びやかな内装の廊下を歩く。

道中、騎士っぽい装備を身につけた者、文官らしき者、メイド等の使用人とすれ違うのだが、皆一様に期待に満ちた、あるいは畏敬の念に満ちた視線を向けて来る。

私達が何者なのか、ある程度知っているようだ。

美しい意匠に凝らされた巨大な両開きの扉の前に到着すると、その扉の両サイドで直立不動の姿勢をとっていた兵士の二人がイシュタルと勇者一行が来たことを大声で告げ、中の返事を待たずに扉を開け放った。

イシュタルはそれが当然のように悠々と扉を通る。天之河、龍太郎、雫、香織、私、黒花、アテナ、雷槍は普通に扉を潜り、クラスメイト達は恐る恐るといった感じで扉を潜った。

扉を潜った先には真つ直ぐ延びたレッドカーペットと、その奥の中央に豪華な椅子ー玉座があった。玉座の前で覇気と威厳を纏った男が立ち上がって待っている。

その隣には王妃と思われる女性、その更に隣には十歳前後の金髪碧眼の美少年、十四、五歳の同じく金髪碧眼の美少女が控えていた。更に、レッドカーペットの両サイドには左側には甲冑や軍服を纏った者達が、右側には文官らしき者達が三十人以上並んで佇んでいる。

玉座の手前に着くと、イシュタルは私達をそこに止め置き、自分は国王の隣へと並んだ。

そこで、おもむろに手を差し出すと国王は恭しくその手を取り、軽く触れない程度にキスをした。

今の仕草でこの国を動かしているのが分かった。

《アテナちよつと良いかな》

《翼愛、丁度良いあたしも同じ事を考えていた》

《この国を動かしているのは》

神エヒト

と私とアテナの考えがハツモタ

そこからはただの自己紹介だ。

国王の名をエリヒド・S・B・ハイリヒといい、王妃をルルアリアというらしい。

金髪美少年はランデル王子、王女はリリアーナという。

後は騎士団長や宰相等、高い地位にある者の紹介がなされた。

ちなみに、途中、ランデル王子がの目が香織に吸い寄せられるようにチラチラ見ていたことから彼女の魅力は異世界でも通じるようだ。

ただランデル王子には残念だけど香織はもう好きな人が居るんだなこれが

とご愁傷様ですと心の中で合唱した。

その後は異世界料理を振る舞われた。

因みに私、アテナ、雷槍の鞆は皆に気が付かないようにシャルルの空間魔法に入れた。

見た目は洋食と変わらないが、たまに出てくるピンク色のソースや虹色の飲み物に生徒達は興味深々のようだ。

私と黒花は母さんと父さんが勇者の為よくメルロマルク王国のパーティーに招待されて異世界の料理は食べなれている。

パーティーで酒に酔った元康おじさんと樹おじさん、よく母さんのアイアンクローを食らったり。

黒花が興味本位で「母さんと尚文おじさんどっちが酒に強いのか」と言って実際に勇者一同にやって父さん、元康おじさん、樹おじさん酔いつぶれて母さんと尚文おじさんが調子こいて城の酒蔵を空っぽにしてメルティ女王に怒られた事も会った。

其れとアテナと雷槍は異世界召喚での経験者為落ち着いている。

ランデル王子はしきりに白崎に話しかけているのをクラス男子はやきもきしながら見ていた。

また、この晩餐会には貴族等も参加しており、少しでも「神の使徒」である自分達にお近づきになりたいのか、生徒達に積極的に話していた。彼らも悪い気がしないのか、男子は可愛い令嬢に言い寄られ鼻の下を伸ばしていたり、女子はイケメンの貴族がスマイルを見せると顔を赤くしていた。

無論私、黒花、アテナ、雷槍にも貴族達が来て話が来た。

黒花とアテナは料理を素早く食べて貴族と話していて

雷槍は令嬢に囲まれていた。

其れで私は貴族が挨拶すれば作り笑いをして挨拶を返してグラスを持ちながら少し離れたテラスからクラスメイト達と貴族を眺めていた。

すると

「翼愛」

「アテナ」

アテナがテラスに来て一緒にクラスメイト達と貴族を眺めていた。

早く終わらないかな、明日訓練あるし、それに

私はグラスに入っているジュースを飲みながら貴族達が嵌めている指輪やネックレスなどの宝石に注目していると

「パーティーには参加されないのですか？」

「!？」

急に声をかけられ少し驚いたけど、私は心を落ち着かせ声が聞こえた方向を見ていると先程、自己紹介されたリリアーナ王女がいた。

「初めまして、リリアーナ王女。

私の鞆波・A・翼愛と申します。

気軽にヨクアイとお呼び下さい。」

私は少しでも彼女に考えを悟られないように作り笑いを作りながら母さんの教わった挨拶をした。

「同じく騎竜アテナと申します。

私はアテナとお呼び下さい」

アテナも作り笑いして私と似た挨拶をした。

「はい、初めましてヨクアイ様とアテナ様。

私わたくしのことはリリイとお呼び下さい」

「よろしいのですか？」

「はい！親しい方にしか呼ばせませんが、これからは共に魔人族を倒すのですから、ぜひ呼んで欲しいのです」

いくら別世界の住人とはいえ王族に気安くするなど普通なら死刑

に値するも、王族の願いを無下にするわけにもいかず私達は言う通りにした。

「では、ありがたく呼ばせて貰いましょう」

「はいー」

彼女は何故か友好的に話してくれるが、こちらとしてもこの世界に住んでいる人と友好関係が築きたかったので正直助かる。

特に王族の王女はだとそれなりに発言力は高い

すると、先程まで明るい顔をしていた彼女の表情は暗くなっていた。

私は具合でも悪いのか？と思いをかける。

「どうしましたか？リリイ」

彼女は恐る恐るといった感じで口を開く。

「その……：ヨクアイ様とアテナ様は私達のことがお嫌いですか？」

予想もしなかった質問に私達は内心驚いた。

「……………どういうことでしょうか？」

「その……：先程から私達を見る目が疑ってるような視線で……それにも笑顔をつくられていますが目が笑っていないので……………」

「……」

私達は内心、作り笑いをしていたことを後悔していた。

あまり感情をあらわにしないようにしたのが裏目に出してしまったからだ。

これ以上隠していても仕方ないと判断し正直に話した。

「……………あなたの言う通り、私達はあなた達を信じていない。……というよりも呆れています」

「あたしも同じだ」

「……………どうしてでしょうか？」

「あれをご覧ください」

私はそう言いながら今も晩餐会で一番盛り上がっている場所を指差す。

指した場所はクラスメイトの女子と令嬢に埋もれて助けると言わんばかりに手を伸ばしている雷槍がいた。

「雷槍!!!」

とアテナは雷槍がいる女子の山に飛び込んだ

「何かすみません」

「いえいえ」

とグラスのジュースを飲み干してグラスをテラスに置いて

「まず、私達は神の使徒と呼ばれていますが、元は人も殺したことがない自分の将来のために勉強していただけの子供です。それなのに突然この世界に連れてこられて戦争を強要させるなど呆れて言葉が出ません」

「そ、それは……………」

彼女が何か言おうとしたが私は直ぐに言葉を続ける。

「しかも彼らは我々を『選ばれた者』と呼び持ち上げることで自分達は特別なんだと思わせようとしている。

その証拠に見て下さい」

私が続けて指を指した方向には貴族達に言い寄られて幸せそうな表情をしている生徒の姿だった。

「それに正直に言つてこの世界の人々は本当に存亡の危機にあるのかどうか信じられないですよ」

「そんなことはありません！実際私達は魔人の脅威に晒されていて「ならば何故、貴族達はあんなにも心の底からパーティーを楽しんでいるのですか?」!!!それは……………」

母さんは女優で、父さんは会社で上に食い込んでいて、其れで両親は勇者であり、よくパーティーに招待される。

そこでは、母さんと父さんの様に良い人も居れば、犯罪をおかした者や平気で嘘をつく者等悪い人も居る。

其れを見分ける為に母さんの指導の下で相手の目、口、仕草などの動きだけでその者が何を考えているのか教えてもらった。

ちなみに今の貴族達の表情からは、これで自分達は魔人族と戦わなくてすむ、という完全に戦争を私達に丸投げするき満々なのだ。

「あの貴族達は自分達の世界の問題だというのに我々に押し付ける気なんですよ。」

実際戦争をしているのにあんなにも宝石を着けている時点で不自然なんですよ」

「……」

彼女は反論の仕様がいないのか黙っていた。

「つまり、この国の人達にとって我々は『神の使徒』、という名前の便利な戦争の道具という事で「申し訳ございません!」!!!」

続けて俺が自虐的に言おうとした瞬間、なんとリリアーナ王女が王族でありながら自分に頭を下げたのだ。

「えつと……なぜ、頭を下げるのですか?」

私は王族に頭を下げさせたことに、内心焦りながら質問をした。

「私達が不甲斐ないばかりに皆様をご家族から引き離してしまい、そればかりか私達の世界の事情に巻き込んでしまったからです」

「だけど、リリアーに責任があるわけでは「それでも、このトータスに生きる者として、ましてや王族として謝罪しなければならぬのです!」……!!!」

そう言つてガバツと顔を上げた彼女の目には涙が溜まっていた。私を感じたのは王女を泣かせてしまったという焦りではない、彼女の表情からは決して嘘をついていない。

眼を見ても本当に自分達に申し訳ないと心の底からそう思っているのだ。

私ははリリアーならば他の者達よりも私達の手助けをしてくれる、確信めいた物を感じた。

「……リリアー、貴方が本当に申し訳ないと思っているならばお願いがあるんだけど良いかな?」

「私ができることであればなんなりと!」

私のお願いを彼女は即答する。

これならば安心だろうと考えた俺は頭を深く下げ彼女に言った。「お願い!もしも戦争で心に傷ができた者がいればその子達には戦争には参加させないようにして欲しいの!」

私が彼女にこれを頼んだのには理由がある。戦争は人を殺すための場所だ、いくら自分達がこの世界の人の数倍、数十倍の力を持つて

いるとはいえそれはあくまでも人族の枠での話だ。

では、魔族が人族よりも数倍、数十倍の力を持っているとすれば戦ってもこちらにも恐らく死人がでるだろうクラスメイトが殺された光景を目にすれば心が壊れる者が出るだろう。

普通ならばその者達には戦争に参加しなくてもいいのだがあのイシュタルやそれに従順している国王が素直に療養させるとは思えない。

下手をすれば、無理矢理にでも戦争に参加させる恐れがある。

だが、自分の意思で謝罪してくれたリリイならばそんな者達を戦争に参加させることはないだろう。

私がいきなり頭を下げたことに驚いたのか彼女は一瞬固まったがすぐに復活して慌てていた。

「あ、頭をお上げください！私でよければ全力でご支援いたします」
「本当?！」

リリイが了承してくれたのがよほど嬉しかったのか私は無意識のうち彼女の手を握ってしまった。

そして空気が続いたがそれをぶち壊してくれる者が現れた。

「お姉ちゃん何やっているの?！」

私の妹、鞆波・A・黒花だ。

私とリリイは直ぐに手を離れた。

「黒花如何したの？」

「お姉ちゃんがパーティー会場にいなかったから探しに来てみれば、お姫様と何話していたの?！」

「此れは約束」

「は、はい約束です。」

ヨクアイ様とリリイだけの約束です」

「そう」

と言つて黒花は会場に戻った

「リリイ、さっきの約束忘れないでね」

「はい」

と私はそう言つてリリイの返事を聞いて会場に戻り料理を再度堪能

能した。

晩餐が終わり解散になると、一人に一室ずつ与えられた部屋に案内された。私と黒花は同じ部屋になって部屋には天蓋てんがい付きの高級ベッドが置いてあった。私の家の部屋は天蓋はなかったがこのベッドにも負けない高級な物のため、私達はそこまで抵抗感はなかった。

私は明日行われる訓練のためにさっさとベッドに潜り込むと同時に意識を落とした。

ステータス

行き成りですが貴方に質問です。

Q. 私、黒花、アテナ、雷槍以外の元々平和な国の高校生だった生徒がある日突然戦場に放り出されたらどうなりますか？

・
・
・

A. 私達を残して死にます。

ということで翌日から私達一行は早速訓練と座学を受けることになる。

「勇者御一行、協力感謝する！私はハイリヒ王国騎士団長を務めるメルド・ロギンスだ！」

神の使いの教育係を半端な者には任せられないという理由で選ばれたみたいで、当の本人は「むしろ面倒な雑事を副長に押し付ける理由ができて助かった！」と豪快に笑っていた

私から見てもルドさんは机で書類作業より戦闘が得意な気がする。

でも其の事は言わない約束ですよ

と考え事をしてしているとメルドさんが

「早速だが全員にこの『ステータスプレート』を配布する！」

と言ってメルドさんの部下の騎士達が12センチ×7センチ位の銀色のプレートを貰い、不思議そうに配られたプレートを見る私達に生徒達に配り終えたのを見計らってメルドさんが説明を始めた。

「よし、全員に配り終えたな。

このプレートはステータスプレートと呼ばれていてな、文字通り自分の客観的なステータスを数値化して、示してくれる物だ。

また最も信頼のある身分証明書にもなる。

これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ？」

と昨日の士官達が向けていた畏敬の念からは想像もつかない程気楽な口調で話した。

本人曰く「これから戦友になろうってのに何時までも他人行儀に話

せるか！」と、他の騎士達にも普通に接する様に忠告したそうだ。

生徒達も遙か年上の偉い人から慇懃な態度を取られては居心地が悪くてしよすがなかつたので、その方が良かった。

「プレート的一面に魔法陣が刻まれているだろう。」

そこに、一緒に渡した針で指に傷を作つて魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。

それで所持者が登録される。

「ステータスオープン」と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。

ああ、原理とか聞くなよ？ そんなもん知らないからな。

神代のアーティファクトの類だ」

成程ねこの世界はステータスの魔法は無いのね

「アーティファクト？」

アーティファクトという聞き慣れない単語に天之河が質問をする。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。」

まだ神やその眷属達が地上にいた神代に創られたと言われている。

そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。

普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。

身分証に便利だからな」

なるほど、と頷きクラスメイトは、それぞれが針を指に刺し、血を垂らしていく。

私も同じくして指先に針をチョンと刺し、プクと浮き上がった血を魔法陣に擦りつけた。

すると、魔法陣が一瞬淡く輝いた。

そして私のステータスプレートの表面に文字が浮かび上がり見ると

|||||

鞆波・A・翼愛

17歳、女

レベル1

天職：弓士

筋力：25

体力：50

耐性：25

敏捷：100

魔力：50

魔耐：50

技能：弓術、先読、狙撃、乱撃、縮地、剣術、格闘術、槍術、斧道、
光魔法適正、

風魔法適正、気配感知、気配遮断、闇魔法完全無効、短剣術、言語
理解、

|||||

此れも見て思った事

やっぱりレベルが下がっている。

しかも

私は隣に居る黒花に

「黒花」

「お姉ちゃん」

「ステータス如何になっている?」

「やっぱりレベルが下がっている」

「見せて」

と黒花のステータスプレートを見ると

|||||

鞆波・A・黒花

17歳、女

レベル1

天職：魔導士

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

魔耐：10

技能：双銃、先読、乱撃、縮地、格闘術、闇魔法適正、気配感知、重
複詠唱、気配遮断、

見稽古、言語理解

|||||

確かにレベルもステータスも低下している。

と言っても弱体化してもこれは酷いと思っていると

と黒花のステータスを見ていると肩を捕まえて振り返ると落ち込
んでいるアテナと苦笑いしている雷槍が居た。

「どうしたのアテナ？」

すると

「ステ・・・」

「捨て？」

「あたしのステータスが低下していた」

とアテナは自分のステータスプレートを出した

私を見ると

|||||

騎竜 アテナ

17歳、女

レベル1

天職：ヴァルキユリ

筋力：100

体力：100
耐性：100
敏捷：50
魔力：100
魔耐：100
技能：槍術、劍銃術、先読、狙撃、炎魔法適正、気配感知、部隊強化、誇負のドツペル

|||||

「アテナは異世界召喚経験者だけど、別の異世界は経験なしだからアテナ、大丈夫だよ。」
元のステータスは健在だから
と言いながらアテナのステータスプレートを返した。

「どうゆうこと？」
「母さんが言うにはその異世界でレベル上げっても別の異世界に行けば一からやり直して元のステータスはその異世界にあるの」
「つまり？」

「ニューゲーム」
「なら良かった」
とアテナはホッとしていると

「翼愛先輩、僕のステータスを隠蔽出来ませんか」
と雷槍はステータスプレートを出して来た
のあの事か
と雷槍のステータスプレートを受け取り見ると

|||||

騎竜 雷槍
16歳、男
レベル1

天職：オーバードナイト

筋力：500
体力：500
耐性：500
敏捷：500
魔力：500
魔耐：500

技能：槍術、全属性耐性、物理耐性、剛力、縮地、先読、剣術、高速魔力回復、

限界突破、電気魔法適正、魔力操作、気配感知、魔力感知、気配遮断、毒耐性、

麻痺体制、石化耐性、雷帝、ロード・バロン、クラック、言語理解

|||||

「弱体してもあいからずだね」

「はい」

「分かったよ」

と魔法で雷槍のステータスプレートの隠蔽しようとしたら

「力の根源も「全員見れたか？」後だね」

「はい」

「説明するぞ？まず、最初にレベルがあるだろうか？それは各ステータスの上昇と共に上がる。

上限は100でそれがその人間の限界を示す。

つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思ってくれ。

レベル100ということは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。

そんな奴はそうそういない」

つまりレベルが上がるからステータスが上がるわけじゃなくて、ステータスの上限値のどの位置にいたかがレベルで表されるという事か。

根本的に母さん達が活動していた世界と違うね

と考えていると

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法道具で上昇させる事も出来る。」

また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。

詳しい事は分かっていないが、魔力が身体スペックを無意識に補助しているのではないかと考えられる。

それと後で、お前達用に装備を選んで貰うから楽しみにしておけ。

何せ救国の勇者御一行だからな、国の宝物庫大開放だぞ！」

なるほどねこの世界は腕前重視なのね

と更に考えていると

「次に『天職』ってのがあろう？ それは言うなれば『才能』だ。」

末尾にある『技能』と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。

天職持ちは少ない。

戦闘系天職と非戦系天職に分類されるのだが、戦闘系は千人に一人、ものによつちやあ万人に一人の割合だ。

非戦系も少ないと言え少くないが……百人に一人はいるな。

十人に一人という珍しくないものも結構ある。

生産職は持っている奴が多いな」

成程ね魔族に負けそうな理由の一つね。

と思ひ浮かべていると

「後は……各ステータスは見たままだ。

大体レベル1の平均は10くらいだな。

まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！ 全く羨ましい限りだ！ あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。

訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

やはり異世界あるあるの一つ大抵異世界に行く人間のステータスはバグり気味

急いで雷槍君のステータスを隠蔽しないと

「力の根源たる蒼青の娘が命ずる、理を今一度読み解き真実を幻想に

隠せツヴァイト、フロントム」

と少し雷槍のステータスプレートが光、再度、雷槍のステータスプレートを見ると

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

騎竜 雷槍

16歳、男

レベル1

天職：騎士

筋力：50

体力：50

耐性：50

敏捷：50

魔力：50

魔耐：50

技能：槍術、全属性耐性、物理耐性、剛力、縮地、先読、剣術、高速魔力回復、限界突破、

電気魔法適正、気配感知、魔力感知、気配遮断、毒耐性、麻痺体制、石化耐性、言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

よし、こんなものかしら

「雷槍君出来たよ」

雷槍のステータスプレートを返した。

少しして

「ありがとうございます。」

翼愛先輩」

と雷槍にお礼を貰っていると

「天之河光輝

転職・勇者

ステータスは全て100

メルドさんがハジメ君のステータスプレートを見るとメルさんの顔が「うん？」と笑顔のまま固まり、ついでに「見間違えか？」というようにプレートをコツコツと叩いたり光にかざしたりする。

そして、ジツと凝視していた。

私も気になりプレートを確認すると

|||||

南雲ハジメ

17歳 男

レベル：1

天職：錬成師

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

魔耐：10

技能：錬成・言語理解

|||||

ステータスの数値が平均のオール10に加え、技能はたったの2つしかなかった。

ザ・凡人、確かに顔が青くなるのも領けるものだ。

だが、私はハジメの天職に注目した。

「錬成師」……多分鍛冶師の職業。

正にハジメのためにあるような天職じゃないの！

なにせハジメの親はゲーム会社の社長、その手伝いをしていたハジメの頭の中には様々な知識が詰め込まれている。

もしかしたら、この世界にあの武器も造ることが可能かも。

メルド団長はもの凄く微妙な表情でプレートを返した。

「ああ、その、なんだ、錬成師というのは、まあ、言ってみれば、鍛冶

職のことだ。

鍛冶をする時に便利なんだが……」

歯切れ悪くハジメの天職を説明するメルド団長。

今まで戦闘中心の天職なのに最後当たりで非戦系天職が来るとフオローしにくいからね

その様子を日頃から（特に香織関係で）ハジメを目の敵にしている男子達が食いつかないはずがない。

その筆頭である檜山大介がニヤニヤしながら声を張り上げる。

「何だよ南雲。お前非戦闘系の鍛冶職か？そんなんでどうやって戦うんだよ？」

「ちよつとステータス見してみ……ぶつはははっ、なんだこれ！完全に一般人じゃねえか！」

「ぎやははは、むしろ平均が10なんだから、場合によっちゃその辺の子供よりも弱いかもな」

「ヒヤハハハ、無理無理！直ぐ死ぬってコイツ！肉壁にもならねえよ！」

馴れ馴れしくハジメと肩を組む檜山だが、ほとんどの生徒はそれを止めることすらせず一部の男子はハジメを嘲笑っている。

その光景を香織や雫、そして一部の生徒達が不快そうな目で見ており、私は内心ため息をついた。

ハジメ君の凄さを知らなくてステータスで判断するのはダメだな
と思っていると

「笑うな!!」

と覇気がある声がして全員声が見るとアテナがご立腹だった。

「あ、あのアテナさん」

檜山が声を掛ける。

「人を見ずにステータスだけで判断するの馬鹿がやることだ！」
「で、でも」

「そう言うお前は何なんだ？檜山。」

ハジメをバカにする権利がお前にあるのか。

お前達もだ。

ハジメを笑う理由がどこにある？全員言ってみろ。」

アテナが覇気が効いた声を発しながら嗤っていた生徒達をアテナが睨むと一部の生徒は一斉に視線を逸らす。

「ああ？南雲の天職とステータスが余りにもシヨボ過ぎて、嗤いしか出ねえだろう」

檜山は開き直るかのように意見をする

私は援護射撃する為

「分かっていないね、檜山君

さつきメルドさんが言っていたはずだよ。

天職とは才能だ。

すなわちハジメ君には錬成師の才能があるという事、そうですよね？メルドさん」

「無論だ」

私の質問にメルドさんは肯定してくれた。

「で、でもそんなシヨボいステータスじゃ、南雲に強い武器なんて創れるわけねえよ！」

檜山はそれでもハジメをバカにする。

「確かに、今のままでは強い武器なんて創れない。

だけど、成長次第によっては城の宝物庫にある物よりも強い武器が創れるはずだよ。

何せゲーム会社でデザインなどをやっているからね。

ハジメ君」

「う、うん」

「そうなのか？よく考えてみれば確かにな。

なんたって勇者御一行の一人だからな。

成長すればアーティファクトも創れるかもしれん！」

メルド団長が全力で賛同すると先ほどまで嗤っていた生徒達はバツが悪そうな顔をする。

そしてアテナは

「檜山、斎藤、中野、近藤」

魔力：1000

魔耐：10

技能：土壌管理、土壌回復、範囲耕作、成長促進、品種改良、植物系鑑定、肥料生成、

混在育成、自動収穫、発酵操作、範囲温度調整、農場結界、豊穰天雨、言語理解

|||||

先生も十分チートです

案の定ハジメ君の目は死んだ魚のような目をしながら遠くを見ました。

私はハジメ君から畑山先生のステータスプレートを取り、その後

「あれっ、南雲君！どうしたんですか！」

とハジメを揺さぶる畑山先生、でメルドさんは

「作農氏だど!？」

まさか実在したとは

急いで協会に連絡を!!

この世界の食料関係が一変するかもしれない!!」

と大声で部下に指示をした。

「畑山先生すみません」

「翼愛さん、南雲君が南雲君が」

「先生落ち着いて下さい今から説明しますから」

と畑山先生の天職と技能を説明して終わったら

「南雲君すみませんすみません」

謝り倒し状態になった

「メルドさん」

「何だ？」

「少し移動しましょ」

「どうゆうことだ？」

「ハジメ君の心に追い打ちを掛けたくないの」

とハジメ君を指した。

「そうだな」

と少し移動して私達は移動してステータスプレートを見せた。

私と雷槍は他のクラスメイトと同じ反応で、黒花は天職と技能が噛み合っていないくて更にステータスが南雲君と同じ数値なのでさつきと同じ微妙な反応して、アテナは部隊強化などを見てホクホクしていた。

オルクス大迷宮の準備

ステータスプレートを貰って一日が立ち現在私達はハジメ君を探している。

探している理由は武器を作って欲しい為である。

理由は二つ、まず一つ目の理由は宝物庫に黒花とアテナの得意武器の銃が思った通りに無かったから、ゲーム制作で銃等をデザインをして居るハジメ君を探して銃の制作を頼もうとしている。

因みに私と雷槍は宝物庫で自分に合った武器が合った。

私は風魔法が付与されている弓で雷槍は雷魔法が付与されている槍にしたみたい

二つ目の理由はハジメ君の魔力向上を目指している。

魔力は体の筋肉と同じで使い続けるとより強くなる。

と考えているとハジメ君がよく居る場所、王立図書館に到着した。入り口で図書館を見渡すと本を読んでいるハジメ君が居た。

私たちはハジメ君に近づいて

「ハジメ君」

「翼愛さんに黒花さんに騎竜さんにそれと騎竜雷槍君」

「はい騎竜雷槍です。南雲先輩」

「其れで頼みたい事があるの」

「頼み事ですか？」

「そう、銃を作ってくれないかな？」

「出来るけどただ」

「ただ？」

「僕が調べた範囲なんだけど、どうも無煙火薬が無ければ黒色火薬も無いんだ」

「作れる？」

「作れるけど…」

「時間が無いんだね」

「うん」

「其れなら大丈夫V」 (^ | ^) V

とブイサインをしながら笑顔で言った。

「翼愛さんどうゆう意味で？」

「火薬は私達で何とかするから、ハジメ君は銃のパーツと被甲ありの弾丸と雷管付きの薬莖の三点を錬成で作る事OK？」

「翼愛、私達で？」

「黒花、アテナ、雷槍も含まれているから」

「翼愛さんがなんか考えていることが分かった、だからお願いします」
「そうと決まったら工房に向かわないと」

「その前にメルドさんn」

「大丈夫。此処に来る前にメルドさんに会って『工房を貸して下さい』と頼んだら直ぐにOK貰ったから今すぐ工房で作業が出来るよ」

「準備が良いね、翼愛さん」

「生徒会長ですから」

く移動く

メルドさんが用意された工房に到着した。

メルドさん曰くつい最近まで使われていたが今は使われていないので少し埃を被っている。

「それで翼愛さん、銃は人数分作るの？」

「いや、黒花とアテナの分で十分。」

私と雷槍は宝物庫で見つけたから」

「そうなんだ。」

それで黒花さんと騎竜さん銃の種類は？」

「私は二丁拳銃で、リボルバー」

「あたしは三八式突撃歩兵銃辺りで」

「まあ出来ない事は無いけど」

「それでハジメ君この工房で足りない物ある？」

「ないけど」

「そう、そr「翼愛先輩、そろそろ訓練の時間です」

と雷槍が自分の腕時計を見せてきた。

「え、もうそんな時間」

取り敢えずメルドさんに暫く訓練に参加しないで伝えるから」

「ありがとうございます」

と私達は工房を後にした。

く移動く

訓練場に到着した。

如何も私達が最後みたいだ。

「遅いぞ翼愛達」

「ごめんね光輝君」

と光輝に言われてそのまま黒花、アテナ、雷槍と別れて私はメルドさんの下に行き

「メルドさん、耳貸して下さい」

「おう、何だ？」

「ハジメ君はしばらく訓練に参加しません。

錬成と武器創作に時間に掛けます」

「そうか、それじゃは訓練するぞ」

「あの南雲君は？」

と香織が手を挙げながらハジメ君の事を聞いて来た

「ああ、ハジメ君は天職が錬成師の為私達とは別の訓練しています」

メルドさんの代わりに私が説明した。

「そうゆうことだ」

とメルドさんの指示の下訓練が開始された。

と言っても私、黒花、アテナ、雷槍にとっては準備運動みたいなもので簡単だった。

く訓練く

訓練が終わり私達はハジメ君が居る工房に戻ろうとしたら

「翼愛ちゃん達」

と呼ばれて私達は後ろを見ると香織が居た。

「香織、どうしたの？」

「訓練が始まる前南雲君は別の訓練しているって言ったよね」

「言ったよ」

「出来れば南雲君の訓練見せて欲しいんだけど良いかな？」

「如何しますか？翼愛先輩」

と雷槍が質問して来た。

多分私達の作業に邪魔にならないし

「良いよ」

「本当ー!」

「それじゃあ行くよ」

と私達は香織を連れてハジメ君の工房に向かった。

く移動く

「ハジメ君居る?」

と言うと

「翼愛さん」

と作業しているハジメ君が返事してくれた。

私達は工房に入り

「それで例の物は?」

「銃のパーツは後になりそうだから先に弾丸と薬莖を作った。

もちろんリボルバー用と三八式突撃歩兵銃用の弾丸と薬莖を分けている」

とハジメ君が後ろを向きながら床に置いてある四つの箱に指を刺した。

床に置いていた四つの箱の中を見たら確かにリボルバー用と三八式突撃歩兵銃用の弾丸と薬莖を分けている

「これ全部南雲君が作ったの」

「そうだよ。」

魔力が多ければもう少し作れたんだけど? 白崎さん!!」

香織がいる事にハジメ君は驚いた。

「香織はハジメ君が別の訓練しているって言ったら見に行きたと言って来たの」

「へ、へえ」

「其れでハジメ君」

「あ、そうだった。」

言われた通りに被甲を纏わせた弾丸と雷管には起爆薬はもう入っているから」

「ありがとう」

「さて私の作業しないと」

とりボルバー用の弾丸と薬莖を其々の箱から一つずつ出して机に置いて更に近くにあつた小さな金槌を手に取り机に置いた。

「さてやりますか」

と両手を合わせて魔力を集めた。

今日の座学でメルドさんが連れてきた魔法使いが教えてくれた練習方法の応用

集めた魔力を小さく圧縮して薬莖に詰め込めた。

エアースペースを確保したいから割ありは魔力は七で空気は三で良いかな

と詰め込め終わったら弾丸を薬莖の上に置き金槌で軽くトントン叩いて、魔方式のリボルバー用の弾が完成した。

「さて、実験しますか。」

ハジメ君悪いけど鉄パイプを作ってくれないかな？

銃の様に」

「良いけど」

と近くにあつた鉄を触り

「錬成」

すると鉄が変形してリボルバーの銃口と同じぐらいの長さで太さの鉄パイプが出来た。

鉄パイプを覗くと確りとライフリングが出来ていた。

「次に」

私は工房に合った煉瓦を手に取り工房の端に十段のタワーを作った。

一段目、二段目、三段目、四段目は土台になる様にピラミッド様に煉瓦を置いて五段目はハジメ君が作った鉄パイプを置いて其れを囲むように煉瓦を置いて残りの段は鉄パイプを抑える様に煉瓦で抑えた。

そして先ほどの弾を詰め込んでその後ろに煉瓦を縦に置いてその上にケガキ針を置いて向かい側に樽を置いてその下にバケツを置い

「ここに水撃を望む、水球」

と樽に水を満タンになるまで入れた。

そして机に置いた金槌を手に煉瓦のタワーに戻り
「今から発射試験します。」

ので耳を防いでください」

と言って金槌を振り上げて振り下ろそうとしたら

「ちよつと待て翼愛さん」

「何ハジメ君？」

「そうゆうのは僕がやるから」

「分かった」

とハジメ君に金槌を渡して私は黒花達が居る場所に行き

「其れでは発射試験します」

と私と同じセリフを言って金槌を振り下ろした。

「ダアンツ」

とすごい音がして樽に穴が開き水が流れた。

「成功だねハジメ君」

「そうだね、翼愛さんにしてもよく思いついたね。」

発射薬の代わりに魔力で代用するなんて」

「漫画に載っていたアイデアがあったのでやってみただけだから。」

それよりも弾丸と鉄パイプ確認しないと」

「そうだね」

と私は穴が開いた木箱の中を見た。

中には潰れた弾丸があった。

私は素手で触った。

少し熱いけど人が触れる暑さだった。

「ハジメ君、そっちは？」

「葉莖に鉄パイプも変化なかったよ」

「良かった。」

エアースペースを確保が十分だったのか心配だったから」

「後は翼愛さん達が弾丸を作って」

「ハジメ君が銃のパーツを作るで行こうか」

「了解」

「翼愛ちゃんと南雲君、ちよつと良いかな？」

香織が話しかけてきた。

「何かな？香織」

「私もその作業に参加したいんだけど良いかな？」

「理由を聞いても良いかな？」

「南雲君、魔力が少ないから錬成すれば魔力切れを起こしやすいから治癒師である私が居れば作業が早くなると思うんだけど良いかな？」

「ハジメ君はどう思う？」

「僕は賛成かな」

「宜しくね香織」

「お願いします。」

白崎さん

「此方こそお願いします。」

と此処に銃作成メンバーが完成した。

生徒会と肅清

ハジメ達と銃の制作で一週間が過ぎた。

愛子先生は自分の天職・作農師の為、各地の村や町に畑仕事をする為に出張している。

一応出張する前に愛子先生に私がコピーした契約書を持たしている。

其れで私達は

「バズーカをお姉ちゃんに向けて発射して直ぐに両手に二丁拳銃に持ち替えて其れでミサイル破壊して爆発の煙を煙幕代わりに張り突撃する」

「なら私は花の呼吸、伍ノ型 徒の芍薬の風圧で煙幕を払い、黒花を目視しだい翼の加速を使って花の呼、吸肆ノ型 紅花衣で黒花を斬る」
「其れに合わせてスライディングして直ぐに方向転回して黄昏乱れ撃ちを撃つ」

「右足に地面に付けて其れを軸にして回転して左足でブレーキして花の呼吸、式ノ型 御影梅で全弾を防ぐ」

と黒花と言葉を使いイメージしながら戦闘している。

とある漫画でやっていた方法でイメージ力を鍛えられる方法だ。

と戦闘しながら訓練施設に到着すると

「あ、会長」

と戦闘を中断してみると四人グループがいて赤いマントと赤いサイズを持って居るクラスメイトが手を振っていた。

「皆！」

「会長、待って居ました」

「会長、宜しくお願い致します」

「翼愛生徒会長、宜しくお願い致します」

「此方こそお願いね、ルーズ、牙十郎、刷庫、鷹音」

紹介しましょうこのメンバーが〇〇高校の生徒会です。

副会長、白狼^{はくろう} 牙十郎^{がじゅうろう}

私の右腕で剣道部所属で彼の剣は雫よりも素早く光輝よりも強く

て特に彼に二刀流したら私も呼吸を使わないと付いて行くの難しく素早い剣戟が繰り出せる。

会計、ねらめ狙眼、たかね鷹音

計算の速さは私よりも早くサバゲ部所属でハンドガンを使った狙撃が得意で私も気を抜けばヒットされそうになる。

書記、いんがみ印紙、さつこ刷庫

文字の文字や絵の書き写しは私も早い美術部所属でイラストや漫画などを描いている。

生徒会全補佐、ロビールーズ・R・ブレット

私達の手が足りない時に手づだつてくれるから助かっている。

応援団のチアリーダー部隊所属でフラッグ担当で高難易度のパフォーマンスしている。

〇〇高校の生徒会は二つ名が在りキャラクター生徒会と呼ばれている。

理由は私含めた生徒会メンバーが色んな作品のキャラクターに似ているみたいで

私は相田マナ、白狼 牙十郎は神山誠十郎、狙眼 鷹音はティアナ・ランスター、印紙 刷庫は紙谷美香、ルーズ・R・ブレットはRuby Roseに似ているみたい

因みに黒花は桂城悠那、アテナは天羽奏、雷槍はエリオ・モンディアルに似ているらしい

「対戦形式は二対一でどうかな？」

と腰に装備しているハジメ特性の刀に手に掛けて

「私はどちらでも良いよ」

「俺もだ」

「ええ、私も其方で」

「え、えつと」

刷庫以外自分の獲物を抜いた。

ルーズは背中にあったサイズを持ち。

牙十郎は左右の腰に装備しているハジメ特性の刀を抜いて。

鷹音は両足に装備しているホルスターから連射可能なクロスボウ

取り出して私と黒花に向けて来た。

刷庫はてんばっている。

「其れで決まりですね」「パン」

と黒花が手を叩いて

「二対一の模擬戦闘、時間はハジメ君が来るまで、スタート」

と私と黒花は左右に分かれて其れを追いかけるように私の方はルーズと牙十郎が追いかけて来て。

黒花の方は鷹音が追いかけて、刷庫は棒立ちしていた。

「刷庫、何している!!こっちに来なさい」

「あっはい」

と鷹音に呼ばれて黒花の方に追いかけた。

私は少し苦笑いしていると

「随分余裕そうですね、会長」

とルーズが赤い薔薇の花びらを出しながら突っ込んで来た。

私は予め手に掛けていた刀を抜いてサイズの刃と私の刀の刃を合わせて其れを滑らせるように受け流してやり過ぎすと背中から牙十郎が両手の刀を構えながらこっちに來てルーズはサイズを地面に刺してUターンしてサイズを回しながら再度こっちに來て挟み撃ち状態になった。

私は

「フウウウ」

と短い時間で出来るだけ深い呼吸して

「花の呼吸、式ノ型 御影梅」

とルーズと牙十郎の同時連続攻撃を同時に連続で防いで最後の方で右手で刀を逆手持ちをして左手で鞘を抜いて右手の刀で牙十郎の二本の刀を受け止めて左手の鞘でルーズの回転するサイズの持ち手に当てて回転を止めた。

其のまま鏢迫り合いになって私は少し弾いて其のまま後ろに飛んでルーズと牙十郎から離れた。

黒花の方を見ると鷹音が撃ったクロスボウの矢をキャッチャーして其のまま鷹音に投げ返した。

鷹音は其れを攻撃を交わすか相殺でやり越している。刷庫の妨害魔法はブレイクダンスの応用で回避している。視界を戻すとルーズーと牙十郎が目の前まで来ていた。

私は予備動作を出来るだけ早く小さくしながら体を捻りながらジャンプして

「フウウウ、花の呼吸、陸ノ型 渦桃」

とすれ違う様に斬撃を繰り出した。

ルーズーと牙十郎は私がジャンプした事に危機感をもって攻撃を中断して防御に回った。

着地してターンしてルーズーと牙十郎に突撃した。

ルーズーと牙十郎も構えながら突撃して来た。

「花の呼吸、式ノ型 御影梅から花の呼吸、伍ノ型 徒の芍薬に懇切接
続」

激しい斬撃の打ち合いしてお互い離れた。

「うん、やっぱり二人同時に相手をするのはきついね」

「そう言いながら呼吸を乱していないですが、会長」

「はあああ」

と苦笑いで返すと

「会長会長あれて」

とルーズーが私の後ろに指を刺す

私は後ろを向くと檜山、斎藤、中野、近藤の四人組と無理矢理に訓練施設からは死角になっている人気のない場所に連れていかれるハジメが居た。

「会長あれは」

「間違いないね」

私は黒花、鷹音、刷の方を向いて

「黒花、鷹音、刷庫、合流、ハジメ君が来た」

と黒花、鷹音、刷庫に合図を送ると黒花、鷹音、刷庫が来た。

「ハジメは？」

「あっち」静かに

と言いながら全員にハンドサインで指示を送る。

「了解です」

「分かった」

「分かりました」

「はい」

「了解」

とハジメが連れていかれた場所の外から隠れながら中を観察する

「ほら、さっさと立てよ。楽しい訓練の時間だぞ?」

檜山、中野、斎藤、近藤の四人がハジメを周りを取り囲む。

「会長どうしますか?」

牙十郎が質問して来た。

「あの四人がハジメ君に手を出したら私が突撃する。」

回収宜しく」

と黒花、鷹音、刷庫にハンドサインを送ると全員首を振った。

すると

「ぐあ?」

ハジメの後ろに居た近藤が剣の鞘で殴ったのだ。

ハジメが悲鳴を上げ前のめりに倒れた。

私は呼吸を使い直ぐに更に追撃が加わられたため詠唱の予備動作している中野の背後に回り。

「ほら、なに寝てんだよ?焦げるぞ。ここに焼撃「待ちなさい!!」ぐうっ!」

中野の肩を鷲掴みして無理矢理私の方に向けさせて右腕を掴み一本背負いをして其のまま拘束する。

それと同時に鷹音があらかじめ紐付き矢をセットしていたクロスボウで矢を発射してハジメの向こう側の壁に刺さり

「「かい」スリッパ×4」いて「うあああ」何だ滑る「ハジメ君」いつて」

私に注目した檜山、斎藤、近藤は刷庫が妨害魔法のスリッパを発動した

スリッパの対象は檜山、斎藤、近藤、鷹音で鷹音は予め寝転んでい

た為こける要素はなく檜山、斎藤は派手にこけて近藤は手に持って居る槍を杖代わりにしてこけるのは防いだが鷹音がクロスボウで発射した紐付き矢を類寄せてスライディングして近藤をこけさせた。

鷹音がハジメは捕まえてもう一つあらかじめ紐付き矢をセットしていたクロスボウを黒花に向けて発射した。

黒花は矢をキャッチャーして紐を引っ張ってハジメと鷹音を回収した。

私は中野の拘束を解いて呼吸を使つて素早くハジメ君に行き

「光を癒せ、回復」

簡単な回復魔法でハジメ君の傷を癒した。

「大丈夫？ハジメ君」

「大丈夫だよ」

「いつから？」

「えっと翼愛さんが刀から桜吹雪出しながらルーズさんと牙十郎君との攻撃を防いでいた途中から」

「御免ね気がづかなくて」

「良いよ助かったから」

ハジメ君の安否確認を終えて私達は檜山、中野、斎藤、近藤を向いて

「檜山君、中野君、斎藤君、近藤君、君達何をしていたのかな？」

「いや、誤解しないで欲しいんだけど、俺達、南雲のt「特訓にしては一方的な感じがあったんだけどな。」

其れに私達其処で見ていたんだけどな」

と檜山の弁明を潰して更に目撃していた事を言うと、檜山、中野、斎藤、近藤を顔青白くしていく

「そう言えば檜山君、中野君、斎藤君、近藤君」

「「「あっはい」」」

「そう言えば君達メルドさんが建てた訓練結構な頻度サボっていたよね」

「いっいえ、そんなk「ならそれ私達見せてくれないかな？」今からですか？」

「そう」

「とつと言いまして」

「まさかと思うけどハジメ君を虐める行為が訓練という建前を立てていないよね」

「いいいいえそんな事は在りません」

「ならOKね。」

それとこの事はメルドさんに報告するね」

檜山、中野、斎藤、近藤が絶望的に顔を暗くする

「会長会長、メルドさんが来た」

とルーズが報告で後ろを見ると確かにメルドさんが来た。

他にも天之河を筆頭に龍太郎や八重樫、白崎も来た。

「メルドさん」

と大きな声を呼んでメルドさん呼んだ。

こつちに気がついたのかメルドさんを筆頭に天之河、龍太郎、八重

樫、白崎が来た。

「どうかしたか?」

「つい先ほど檜山君、中野君、斎藤君、近藤君が訓練と言いながらハジ

メ君にリンチしていました」

「なあ本当か」

「ハジメくん!」

私の報告を聞いて、白崎さんはハジメに駆け寄る。

「はい生徒会メンバーが全員と黒花が見ましたので」

「成程」

「翼愛さん、檜山達は、南雲の不真面目さをどうにかしようとする稽古だったんじゃないのか?」

「え」

と天之河が的外れな事に腑抜けた言葉を言ってしまった。

「ゴホン証拠映像もありますので見せます。

ので少し待ってください」『雷槍君』

《何でしょう。》

《翼愛先輩》

《ハジメ君にサーチャー付けている?》

『はい付けています』

ハジメ君の方を少しぼんやり丸くて黄色の球体があった

《映像取っているかな?》

《ええ取っています》

《なら少し来て》

《分かりました》

と念話を切って直ぐに

「雷槍君」

と私は雷槍を呼ぶと

「此処に」

と忍者よろしく雷槍が登場した。

皆驚いている。

「証拠映像」

「分かりました」

と雷槍が自分の腕に付けている腕時計を操作するとそこから映像のようなものが出て、するとそこには……

「え、これって?」

「南雲君!?!」

そう、そこにはハジメの姿が映っていたのだ。

これには元々知っている私と黒花以外は驚いていた。

何せ雷槍の腕時計はただの腕時計は無く「インテリジェントデバイス」のストラッパー」だ

檜山達の悪行は私達も知っているからこのままハジメ君に何もしないと限らないと思いきやサーチャーをハジメ君に付けていた。

すると映像の中のハジメが突然倒れる。

後ろには檜山達が映っていた。

これに檜山達はこの後起こる出来事を察知し瞬時に顔を青くする。

その後は予想通り、檜山達がハジメをここに連れていき囲んで不意打ちした。

これを見ていた天之河以外は檜山達を軽蔑の目で見ていた。

特に香織はどす黒いものを垂れ流していた。

そして、そこに私が急に中野の背後がから現れて肩掴んで回し一本背負いの所で映像は終わった。

映像が終わる頃には檜山達の顔は青から完全な白に変わっていた。まるでこの世の終わりとも言いいたい顔で。

だが、そんなこいつらを置きメルドさんは烈火のごとき顔で震えていた。

「貴様ら、どうやらかなり体力が有り余っているらしいな？」

するとメルドさんは地面を思いつき蹴ると

「こんなことをしている暇があるなら、さっさと訓練してこい！このの、バカタレども!!!」

「ひいっ!!?!」

メルドさんの余りの迫力に檜山達は逃げるように訓練施設に戻った。

だが、ここでも天之河が食いつく。

「待ってください、メルドさん。これには南雲にも非があります。

いつも図書館や工房に籠っている南雲を檜山達は何とかしようとしたんですよ」

「はあ?」

さすがの私も言葉を失った。

あの映像を見て何でそんな考えを思い浮かぶとは、元々天之河は妄想が酷いのは知っていたけど、此処までおかしくなったのではないかと疑ってしまった。

現に龍太郎は何言ってるんだコイツといった目で、白崎は信じられないといった感じで、八重樫は手で目を押さえながら天を仰いでいた。

「ただ、殴りたかっただけだろう」

さすがのメルドさんも天之河に呆れていた。

天之河の醜態をこれ以上見たくないのと、天之河の勘違いを正すために私は意見をします。

「天之河君は何を勘違いしてるのか知らないけどハジメ君はちゃんと

「確かにすごいですね」

メルドさんは感心し、龍太郎もハジメを誉めていた。

刷庫も興味津々でみている

八重樫もハジメの努力が実を結んでいることに喜んでいた。

「で、でもそんな技能じゃ戦闘には何の役にもたたないじゃないか！」

天之河はそれでもハジメを否定していた。

「当たり前だよ。ハジメと刷庫には後方支援にまわってもらうんだからな」

「なっ!? 皆が前線で戦っている時に刷庫は兎も角南雲も安全圏に入れるつもりなのか!？」

「勿論無理に不慣れな戦場にいるよりも自分ができる範囲でサポートに徹してもらおう方がいいから」

私はこれ以上、天之河と口論になるのは時間の無駄と判断し訓練施設に向かう。

「白崎、ハジメ君を治してくれたこと、ありがとう」

「大丈夫だよ翼愛ちゃんが直してくれたお陰でハジメ君に傷が無かったから」

と会話しながら訓練場に向かってしていると

「待て！ 話しはまだ終わって「!!」ガッ!？」

天之河が私の肩を掴もうとしたため、肩を掴もうとした手の手首を強く掴み其のまま足払いして思いつきり大振りで振り下ろした。

固い鎧を着ている天之河は受け身を取れずにそのまま地面激突して背中を痛めた。

そのまま立ち去ろうとすると「ガシッ」と足を掴まれた。

そこに視線を向けると

「ま……て……はな……しは……おわ………つて」

何と天之河は背中での痛みで動けないはずなのに必死に私の足を掴んでいるのだ。

これは天之河が持っている『物理耐性』のおかげか、それとも天之河の執念がしつこいだけなのか、少なくとももうんざりするほどの事なのは確かだ。

私は足に力を入れて天之河を引き剥がした。

「龍太郎君、御免けど彼の始末は任せたまよ」

「……ああ、さすがにこれは光輝が悪い。」

すまねえな、ハジメ」

龍太郎はハジメに謝罪をし、天之河の身体を担ぐ。

「いつもあんなことされてたの？ それなら、私が……」

「いや、そんないつもってわけじゃないから！ 大丈夫だから、ホント気にしないで！」

「でも……」

「南雲君、何かあれば遠慮なく言っっちゃおうだい。香織もその方が納得するわ。」

それとごめんなさいね？ 光輝も悪気があるわけじゃないのよ」

「アハハ、うん、分かってるから大丈夫」

「ハジメ君、香織、雫、訓練が始まるよ。行こう？」

その後の訓練では小悪党組はメルドさんや他の騎士の人達から罵詈雑言を浴びせられながらいつもの十倍の訓練メニューを泣きながらおこなっていた。

訓練が終了した後、メルド団長が言った。

「明日から、実戦訓練の一環として『オルクス大迷宮』へ遠征に行く。

必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との実戦訓練とは一線を画すと思ってくれ！ まあ、要するに気合入れろってことだ！ 今日にはゆっくり休めよ！ では、解散！」

このクラスの殆どが初めて体験するであろう、『実戦』の幕開けだった。

オルクス大迷宮

私達は現在、オルクス大迷宮のホルアドに居る。

オルクス大迷宮はこの世界の七大迷宮と呼ばれている一つである。この世界には七大迷宮という有数の危険地帯が存在する。

尤も、現在明確に場所が判明しているのはグリュューエン大火山や亜人族の住まうハルツエナ樹海、そしてハイリヒ王国の南西にあるオルクス大迷宮の三つだけである。

残りの四つは判明していない

そして私達が調べた情報によると、オルクス大迷宮は危険地帯でありながら冒険者や傭兵、新兵の訓練に最適な場所とされている。

その理由は階層によって魔物の強さがわかりやすいほど違うため、どの階層まで行けるかがわかればそれが本人の強さの目安になるというのが一つ。

もう一つは魔物の体内に存在する特殊な鉱石『魔石』の質が大迷宮の魔物の方が高いからだ。

魔石とは、魔物の証とも言える器官で上質な魔石を粉末にして魔法陣を描くことに使えば、より強力な魔法が発動するようになる。

この魔石は戦闘以外でも重宝されることの多い品で、これ目当てに迷宮に潜る冒険者も少なくないらしい。

また、魔石が良質な魔物ほど強力な固有魔法を使う。

固有魔法とは魔物がそれぞれの種類ごとに一つしか持っていない魔法のことだ。

魔物は魔力を持っているだけの獣であり、人間のように魔法陣や詠唱といった能力が使えない。その代わり固有魔法は一つしかない代わりに詠唱も魔法陣も無しで使える、魔物の脅威の理由でもある。

と頭の中で整理整頓していると

「ここがオルクス大迷宮、なんだがお祭り会場みたいだ」

「まあ、大迷宮で採れる魔石だの素材だのは人気だからな……ここは絶

好の稼ぎ場所なんだろうな」

ハジメは少し引いて居てアテナが返した

「そうね、黒花とルーズは興奮しているから」

「はぁー、会長注意して来ます」

「鷹音、大丈夫だから」

私達のパーティーは私、黒花、アテナ、雷槍、ハジメ、ルーズ、牙十郎、刷庫、鷹音の九人メンバーになる

因みにハジメ、刷庫は事故防止を身に着けるために入るだけで次回は城で魔道具と魔導書の作成に入る。

と生徒会のメンバーと会話して居ると

「南雲君達おはよう」

「香織、おはよう」

「おう、おはよう」

「香織ちゃん、おはよう」

「香織先輩、おはようございます」

「香織、おはよう」

「香織さん、おはようございます」

「香織、おはよ」

「香織さん、おはようございます」

私、アテナ、黒花、雷槍、牙十郎、鷹音、ルーズ、刷庫の順番で挨拶を返す。

「白崎さん!? 天之河くん達ならもつと前の列に」

「うん、でもその前に合挨拶して起きたくて」

「あーうんおは」

ハジメが挨拶しようとした瞬間殺意が籠った視線がして私は弓矢、アテナは三八式突撃銃、黒花は二つのリボルバー、雷槍は槍を取り出して視線の下に向けて構えたが先程の視線はすでに無くなっていた。

「よっ翼愛ちゃん達行き成り如何し居たの!?!」

「誰がかハジメ君に向けて殺意が放たれていただけ」

と言いながら武器を仕舞った。

「それ本当なの!!」

私が言った事に凄いい勢いで食らいついた。

「人数も多いしハジメ君は私達の側に居るから大丈夫だから」

「うっうん、」

「其れにハジメ君が崖に落ちたら私が縄を握り拳がら落ちるから其れを引っ張て」

「うん分かった」

私は香織に少し約束して入り口に向かった。

その入口はRPGのダンジョンにありがちな薄暗い陰気なそれではなく、博物館の入場ゲートの様な整備された物であり、制服を着た受付嬢らしき存在がいる窓口まであった。

どうやら日本における登山計画書の様にステータスプレートをチエックし、出入りを記録するとの事。

とはいえ日本のそれみたいに対象者が行方不明になった時の捜索に役立つる訳では無く、死者・行方不明者を正確に把握する為、戦争を控え多大な死者を出さない様、注意を喚起するのが目的であろう。

他にも七大迷宮と言う危険地帯でありながらその特性故に人気が高いオルクス大迷宮、殊に浅い階層は魔石等の良い稼ぎ場所としても集まりやすく、嘗ては命知らずな輩がノリで挑んで命を落としたり、犯罪の拠点とする人間が多く存在したりで不穏な空気が漂っていたらしく、魔人族が何時襲い掛かって来るか分からないのにそんな内憂を抱えていられるかと思つた王国が冒険者ギルドと協力して設立した経緯から、現地の警察的な役割も担っている様だ。

尚、ゲート脇の窓口では素材の売買もしている様で迷宮に潜る者等の金回り関係で重宝しており、事実その周囲では露店等も所狭しと並び立っており、それはまるでお祭りの様である。

そんな広場の喧騒を他所に私達はメルド達騎士団の後を追う様に迷宮へと入って行つた。

迷宮の中は緑光石という特殊な鉱石が埋まっている鉱脈のおかげで松明やランタンもいらぬほどの明るさだった。

しばらく進んでいるとドーム状の広間に出た。七、八メートル位はありそうな場所だ。

その時、物珍しげに辺りを見渡していると我々の前に、壁の隙間という隙間から灰色の毛玉が這い出てきた。

「よし、光輝達が前に入る。

他は下がれ！交代で前に出てもらうからな、準備しておけ！あれはラットマンという魔物だ。

すばしっこいが、たいした敵じゃない。

冷静に行け！」

その言葉通り、ラットマンと呼ばれた魔物は結構な速度で飛びかかってきた。

灰色の体毛に赤黒い目が不気味に光る。

ラットマンという名称に相応しく外見はネズミっぽいが・・・二足歩行で上半身がムキムキだった。

八つに割れた腹筋と膨れ上がった胸筋の部分だけ毛がない。

まるで見せびらかすように——正直に言ってキモチワルイ。

正面に立つ光輝達——特に前衛である雫の頬が引き攣っている。やはり、気持ち悪いらしい。

間合いに入ったラットマンを天之河、雫、龍太郎の三人で迎撃する。その間に、白崎と恵里、谷口が詠唱を開始し魔法を発動する準備に入る。

天之河は純白に輝く聖剣を視認も難しい程の速度で振るって数体をまとめて葬っている。

この聖剣、光属性の力を宿しており光源に入る敵のステータスを下げ、自分の身体能力を自動で強化するという、聖剣と呼ぶにはいささか嫌らしい性能を持つ。

龍太郎は、天職が『拳士』であることから籠手と肘当てをつけている。

どつしりと構え拳を放つたり、柔道部ということもあって相手を引き付けてその勢いを利用して地面に叩きつけてから頭蓋骨を粉砕するという正に『柔と剛』を使った戦いをしている。

雫は『剣士』の天職持ちでハジメ君が作った刀で抜刀術の要領で抜き放ち、一瞬で敵を切り裂いていく。

その動きは洗練されていて、騎士団員を感嘆させるほどである。しばらくその戦いぶりを見ていると、詠唱が響き渡った。

「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ——
螺旋炎、」

三人同時に発動した螺旋状に渦巻く炎がラットマン達を吸い上げるように巻き込み燃やし尽くしていく。

「キィィイツ」

という断末魔の悲鳴を上げながらパラパラと降り注ぐ灰へと変わり果て絶命する。

気がつけば、広間のラットマンは全滅していた。

他の生徒の出番無しである。

「どうやら、天之河達召喚組の戦力では一階層の敵は弱すぎたらしい。」

「ああ、うん、よくやったぞ！ 次はお前等にもやってもらうからな、気を緩めるなよ！」

「ただな……今回は訓練だからいいが、魔石の回収も念頭に置いておけよ。」

明らかにオーバーキルだからな？」

生徒の優秀さに苦笑いしながら気を抜かないように注意するメルド団長。

しかし、初めての迷宮の魔物討伐にテンションが上がるのは止められない。

頬が緩む生徒達に

「しようがねえな」

とメルド団長は肩を竦めた。

そこからは特に問題もなく交代しながら戦闘を繰り返し、順調に階層を下げて行った。

「よし、次はヨクアイ達の番だ！ 気合い入れていけ！」

メルド団長の気合いの入った言葉を聞きながら私達は前に出る。

「フォーメンションスーリップロックで」

「「「「「了解」」」」」」

刷庫とハジメが前に出て刷庫は魔導書を開けて、ハジメは手を地面に触れて

「スリープ、オール」

「錬成」

ラットマン達を転ばせて起き上がる前に錬成で変形した地面で拘束して私は弓矢、アテナは三八式突撃銃、黒花とハジメ君はリボルバー、鷹音は連射可能な二つのクロスボウを使ってヘッドショットで倒して雷槍、ルーズ、牙十郎は接近して其々の武器の槍、刀、サイズで倒す。

「メルドさん終わりました」

「おっおう手際が良くって少し驚いた」

とメルドさんに報告していると

「銃!? 鞘波さん、何で南雲、アテナ、黒花さんが銃を持っているんですか!？」

「銃? ハジメ達が持っているアーティファクトのことか?」

クラスメイト達は一部を除きざわつき、メルド団長を含めた騎士達は疑問の声飛び。

「はい、あの武器は私達の世界で創られている武器で、クロスボウの進化系で弓矢以上の威力と飛距離を持ち、魔法のように詠唱も要らずの画期的な武器です」

「そんなに?」

「ええ、まだ試作の物ですが完成して量産することが出来れば一般の兵士でも魔物を簡単に倒せるようになるでしょね」

「ほお、それは楽しみだな」

私がメルドさんに銃の説明をすると後方ではクラスメイト達がハジメのことを「スゴイ! スゴイ!」と誉めまくっていた。

だが、予想通り驚きつつも天の河と檜山達はハジメが活躍したことに面白くなさそうな顔をしていた。

「よし、下がっていいぞ。ちゃんと魔力回復薬を飲むようにな」

私達の出番も終わり、全員で魔力回復薬の入った小瓶を取り出し飲み順調に階層を下っていく。

そして二十階層に到着した。

現在の迷宮最高到達階層は六十五階層らしいのだが、それは百年以上前の冒険者がなした偉業であり、今では超一流で四十階層越え、二十階層を越えれば十分に一流扱いだという。

「よし、お前達、此処から先は一種類の魔物との戦闘だけじゃない、複数種類の魔物が混在したり、連携を組んで襲い掛かったりして来る。今までが楽勝だからと言ってくれぐれも油断するなよ！今日はこの二十階層で訓練して終了だ！」

その探索前に発せられたメルドからの掛け声に改めて気を引き締めた一行だったがやはりと言うべきか何の滞りも無く進み、やがて次の階層に繋がる階段がある部屋へと辿り着いた。

その部屋は鍾乳洞の如くツララ状の壁が飛び出したり、或いは溶け出したりと複雑な地形、奇襲されたら対応に梃子摺りそうなフィールドである。

此処を探索し終えたら今日の実戦訓練は終了だと言われたのもあつてか一行の大半は何処か弛緩した様な心持ちの中、せり出した壁の為に隊列を横に広げる事が出来ず、一列になって進んでいた。

すると先頭を行く天之河達のパーティとメルドが立ち止まった。

「擬態しているぞ！周りを良く注意しておけ！」

私とアテナは武器を構えて壁に向けて放つそれが壁に当たるとその壁は嫌な悲鳴をあげながら倒れていく。

それをよく見ると壁ではなく壁に擬態した魔物だった。

「ほおー、ヨクアイとアテナ、よくロックマウン트의擬態を見破ったな。みんなも気をつけろ。」

こんな魔物がうじゃうじゃいるからな。

其れとこの魔物の名前はロックマウントだ！二本の腕に注意しろ！豪腕だぞ！」

メルド団長の声が響く。

天之河達が相手するようだ。

飛びかかってきたロックマウン트의豪腕を龍太郎が拳で弾き返す。天之河と雫が取り囲もうとするが、鍾乳洞的な地形のせいで足場が

悪く思うように囲むことができない。

龍太郎の人壁を抜けられないと感じたのか、ロックマウントは後ろに下がり仰け反りながら大きく息を吸った直後、

「グウガガガアアアアアアア——！！」

部屋全体を振動させるような強烈な咆哮が発せられた。

「ぐっ!?!」

「うわっ!?!」

「きやあ!?!」

体をビリビリと衝撃が走り、ダメージ自体はないものの硬直してしまふ。

ロックマウントの魔力を乗せた咆哮で一時的に相手を麻痺させる固有魔法『威圧の咆哮』だ。

光輝達前衛は身動きがとれなくなってしまう。

ロックマウントはその隙に傍らの岩を持ち上げ、香織達後衛に投げつける。

香織は防御の魔法を展開するが、その瞬間信じられない光景を目撃する。

なんと、投げられた岩もまた擬態したロックマウントだったのだ。

擬態を解きながら見事ナル○ンダイブを決め、やたら血走った目と荒い鼻息で迫る姿に思わず香織達は魔法の詠唱が途切れてしまった。

私とアテナは直ぐにダイブ中のロックマウントの眉間を狙いつけて攻撃した。

ダイブ中のロックマウントの眉間を居抜かえて絶命し白崎達目の前で落ちた。

「大丈夫?・白崎、恵里、谷口」

ロックマウントを倒した私はすぐさま三人の安否を確認した。

「あ、ありがとう、翼愛」

「ありがとう」

「いや、助かったよ」

白崎と谷口とは私がロックマウントを倒したのだと気づくと感謝を述べた。

「貴様…よくも香織を…許さん!」

気持ち悪さで青ざめていたのを死の恐怖と勘違いした天之河君は、場所など無視して必殺の一撃を放たんと動き出す。

「万翔羽ばたき、天へと至れ」

「あ、馬鹿者!」

天之河君が広範囲系の攻撃魔法の詠唱を聞いて私は直ぐに駆けつけて飛んで、メルドさんは止めようとす

「天翔「母さん直伝虚刀流 落花狼藉」ぜしよ!!」

天之河君の脳天目掛けてかかと落としをするが時すでに遅し。

詠唱は完成していて光輝は大上段に振りかぶった聖剣がを勢いよく振り下ろすさせ、聖剣が纏っていた巨大な光が斬撃へと変化して周囲の壁ごとロックマウンツ達を殲滅していく。

そして天之河君は私が繰り出した落花狼藉で大きなたん瘤を作り頭を抱えながら座り込んでいた。

「ああ、うん、ヨクアイ、止めるにしても流石にかかと落としは無いぞ。

俺でも精々拳骨だ」

「分かりました。

次回は気を付けます」

とメルドさん会話していると

「あれ、何かな?キラキラしている…」

崩れた壁から何かを見つけたのだろう、香織がその方へ指さした。それに全員が振り向くと其処には、青白く発光する鉱物が花咲くかの如く壁から生えていた。

その輝きはまるでインディゴライトを内包した水晶の様だった。

「ほお、あれはグランツ鉱石だな。

大きさも中々だ、珍しい」

グランツ鉱石とは、所謂宝石の原石らしき物である。

特に魔力的な効果がある訳では無いがその輝きが貴族のご婦人・ご令嬢方に大人気であり、加工して指輪やイヤリング、ペンダント等にして送ると大変喜ばれるとの事。

求婚の際に選ばれる宝石トップ3に入るそうだ。

「素敵…」

と香織は目をキラキラしていた。

私はグランツ鉱石を指を刺しながらハジメの方を向き視線で

『あれ大丈夫？』

と送るとハジメ君は首を振った。

どうやら『鉱物鑑定』を使ったのだろうと思う、ここにいる中で鉱物に詳しいハジメが否定するのだから間違いないだろう。

私は畏の可能性が高い事をメルドさんに伝えようとする

「だったら俺らで回収しようぜ！」

そう言っただけで唐突に動き出したのは檜山だった。

グランツ鉱石に向けてヒョイヒョイと崩れた壁をよじ登っていく。

「こら！勝手なことをするな！安全確認もまだなんだぞ！」

「あのバカ！」

しかし、檜山は聞こえない振りをする。

私は直ぐ弓矢を持ち弦を引っ張って檜山の右手に狙いつけて矢を放つが既に遅く、矢が檜山の右手に到着する前に檜山の右手がグランツ鉱石に触ると

「いかんトラップだ!!」

今すぐそいつから手を放せッ!!」

と私達の足元に魔法陣が展開されて

「こっこの魔法陣は!!」

「教室の時と同じ!!」

部屋の中に光が満ち、真由美達の視界を白一色に染めると同時に一瞬の浮遊感に包まれる。

私は直ぐに着地体制を取り上手く着地をする。

直ぐに見渡すと一本だけの橋だけが在り橋の下を見たら底が見れない崖があった私は思い出してメルドさんに向かい

「メルドさん大変です。」

「此処は六十五階層です」

「だろうな、お前達、すぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。」

「急げ！」

雷の如く轟いた号令に、わたわたと動き出す生徒達。

しかし、迷宮のトラップがこの程度で済むわけもなく、撤退は叶わなかった。

階段側の橋の入口に現れた魔法陣から大量の魔物が出現したからだ。

更に、通路側にも魔法陣は出現し、そちらからは一体の巨大な魔物が。

その時、現れた巨大な魔物を呆然と見つめるメルドさんの呻く様な
眩きがやけに明瞭に響いた。

「ま、まさか……ベヒモスなのか？」

団長の絶望したかのような声が辺りに響き渡るのだった……。

ベヒモスと初変身（前編）

オルクス大迷宮は百階層に及ぶとされているが、現時点での最高到達階層は六十五階層止まり、然もその記録は百年以上も前の冒険者が成し遂げて以来更新できておらず、今では四十階層越えでも超一流扱い、よって百階層ある大迷宮のうち六割以上がほんの一握りの戦士にしか辿り着けない領域、四割近くに至っては存在するのか疑問符すら浮かんでしまう未知の世界なのである。

その要因の一翼、四割近くの階層を未知の世界たらしめる要因を担っているのが、通路側の魔法陣から出現した巨大な魔物、ベヒモスだ。

某日本屈指の人気RPGにおいても強敵として知られる名を冠したその魔物は、直径10m位の魔法陣に見合った巨体、頭部に兜を取り付け、赤黒い光を瞳から放ち、鋭い爪と牙を打ち鳴らし、兜から生えた角から炎を放つ、例えていうなら太古に生息した恐竜トリケラトプスが様々な強化改造を施して蘇った存在といった方が良いか、最高到達階層である六十五階層に住まう魔物として、嘗て『最強』として知られた冒険者ですら歯が立たなかった存在として有名なその姿に呆然と眩くしかないメルドだったが、

「アラン！生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ！カイル、イヴァン、ベインは障壁を最大出力で！何としてもベヒモスを食い止めるぞ！光輝！お前は生徒達を引き連れて早く階段へいけ！」

メルドはすぐに指揮を執るが、光輝が反論する。

「待つてください！俺たちもやります！あの恐竜みたいなヤツが一番ヤバイでしょう！俺たちm「天之河君、少し黙ろうか」

私は天之河の肩を掴み天之河を回し

「え、翼あ、ぐふ」

と天之河の腹に掌底を叩き込んだ。

腹の中にある空気を全部抜かれて地面に手を付き呼吸が乱れて肩で呼吸している。

「メルドさん、私は天之河君を連れて後ろに行き生徒会全員で退路を

確保します」

「あつあ頼む」

私は天之河の襟を掴んだ。

「それと、アテナ、雷槍、黒花」

と大声で呼ぶと

「読んだか？翼愛」

とアテナ、雷槍、黒花が来た。

「うん、読んだよ。」

聞くけどあれやれる？」

と私は開いてる手でベヒモスを指す。

「あれか、弱体しているから普通にやれば無理けど」

満点笑顔で

「変身すれば行けるかもな」

「そう、雷槍君は？」

「僕も姉さんと同じ意見です」

「黒花は？」

「私は火力不足ですから倒すのは無理ですね」

「そうアテナと雷槍はベヒモスの足止め、黒花サポートで、出来れば討伐をお願いします」

「よしやるか」

「分かりました、翼愛先輩」

「了解、お姉ちゃん」

私が指示して天之河の襟を掴みながら走った。

「よっよ？よぐあいざん、ずじぐるじい」

「御免ね少し急いでいるから」

と言いながら飛んでクラスメイトの肩を足場にして前が出る。

「「「会長」」」

「御免ね皆天之河君を連れてくるのが遅くなったから」

「いえ会長早い方です」

「正直言つてクラスメイトがパニックに落ちていますので会長と同じカリスマ性の天之河を連れてくれ助かります」

「此れ本物?!」

ルーズは興奮しながら質問して来て刷庫は服を触りながら考えていた。

「皆、質問あるかも知れないけど今はあれを片付けるよ」

とトラウムソルジャーの方を指を指した。

「そうですね」

「行きましょうか」

皆気合い入れ直した。

「翼愛、何で最初から出さなかったんだ」

と復帰した天之河がいちやもん付けて来た。

「乙女には秘密が一つか二つもあるのよ」

「ふさげているのか!!」

そんな力があるならメルドさん達を危険に晒す必要が無かったはず

「其れは大丈夫あそこには」

「ドゴオオオ——」

と爆音が鳴り響いた。

其方を見るとベヒモスが顔を上に挙げながら直立姿勢になっていた。

「私の親友と妹が居るから」

翼愛OUT↓アテナON

私達は翼愛を見送って

「そんじゃあ行くぞ」

「はい」

とベヒモスに向かって歩くと

「おい待って」

とメルドが呼び止めた

「お前達も後ろに行けあれはベヒモス：65階層の魔物で、かつて最強と呼ばれた冒険者でさえ勝つことができなかつた化物だ！さっさと行け！私はお前達を誰一人として死なせるわけにはいかないんだ！」

「忠告ありがとうな旦那。

けどあたしと雷槍はあれよりもやばい奴と殺り合っていたんだ。

あれぐらいで逃げねよ」

と言つてベヒモスの方に歩いた

メルドはアテナを止めようとしようと動こうとしたが長年の感なのか何故か止めろとしなかった

アテナはベヒモスの前に出た時にはベヒモスは突進して来た。

「!!逃げろアテナ」

とメルドは大声でアテナを呼ぶが

「Croitzalronzell Gungnir zizz
1」

アテナが歌を歌うと胸元のペンダントが光出してアテナの体を光が包み込みそしてベヒモスが激突して風塵が舞つて暫くして風塵が収まると

「よしよしよし良い突撃だったが」

と言いながら巨体のベヒモスの突進をアテナは両手で受け止めた。

姿も変わってメカっぽいデザインなのに何処かゴジラをイメージさせる鎧を着こんでいた。

アテナは左足を力を込めながら後ろに向けて

「怪獣王のゴジラの力を持った「ガングニール」を着たあたしを殺すには威力が足りなかったな」「ドゴオオオ——」

と後ろに向けた左足をベヒモスの顎に目掛けて一気に戻した。

凄い威力で巨体のベヒモスが直立姿勢になっていた

「行け雷槍、黒花」

「分かりました、姉さん」

「了解」

と黒花が付いている腕時計〔YSPウオッチ〕に〔ゴロミの召喚メダル〕をセットして

『カモン！ゴースト！』

と腕時計から光出して其処から黄色のボールが縦横無尽に飛び跳ねて其れが落ち着くと、其れが尻尾でコルク銃を持った猫ぽい何か

になった。

「ゴロミちゃんよ」

「てかまだ変身してねーのかよ」

「御免んさい」

「バラバラで変身した方が良いかなて」

「良いから変身しろ」

「分かりました」

「行くよゴロミ」

「おう」

「変身」『マンゴー』

『ワイイー』『ロックオン♪×♪』

黒花は「ワイルドボーイ変身メダル」を「YSPウオッチ」にセットして、雷槍は「マンゴーロックシード」のロックを開錠して「戦極ドライバー」にセットして洋風の音楽がなつて雷槍の真上にチャックが現れてチャックが開くと其処からマンゴーが出て来た。

「変身」

『チェ〜ンジフォーム！妖怪ヒーロー！ワイルドボーイ』『カヒユン、カモーン!!』

黒花は左手を挙げてにして一周する様に円を描くように手を動かして(変身)の文字が現れて直ぐに左手を下げながら顔に近づけて「YSPウオッチ」のベゼルを回した。

雷槍は「戦極ドライバー」の「カッティングブレード」をおろす。

ゴロミは尻尾のコルク銃を投げてゴロミは無数の光の帯になり黒花に纏いついて其処からカウボーイの格好した黄色の猫になりコルク銃は独特なデザインの二丁のマグナムになり。

雷槍は真上のマンゴーが開き雷槍の方にゆっくりに降りて其れを被つるとライダースーツが展開されて

『マンゴーアームズ！ファイト・オブ・ハアンマァー！』『ワイルドボーイ！ワイルドに見参！』

マンゴーが展開されてマンゴーをモチーフされた鎧が装着されて手にはマンゴーをイメージされたメイス「マンゴパニッシャー」装備されて

いて仮面ライダー Baron になった

「てっ格好キメて居るけどベヒモスの体制が戻って来ているから必殺技ぶっばなせ」

「分かりました。」

姉さん」

「OK、ベイビー」

とワイルドボーイは今度は「ワイルドバズーカのコマンドメダル」を取り出して其れを

『ワ—イ！エグゼキュート！』『カヒュンカヒュン、マンゴーオーレ』
 Baron は「マンゴパニツシャー」にエネルギーが集まり其れをハンマー投げの要領で振り回してワイルドボーイの手にはいつの間にかバズーカ砲が握って

「ワイルドバズーカ！」

ワイルドボーイのバズーカ砲からミサイルが飛び出して、Baron は「マンゴパニツシャー」から花切りマンゴー型のエネルギー弾を飛ばした。

それらがベヒモスの顔面に当たった

ベヒモスと初変身（後編）

ベヒモスの顔面に黒花Ⅱワイルドボーイのワイルドバズーガと雷槍Ⅱ仮面ライダーバロンのマンゴーオーレが当たって煙が拳がった。

アテナは一人と一匹に近づき

「雷槍とくrじゃなくてワイルドボーイ。」

「どうだ?」

「やっぱりレベルと同じで威力が落ちています」

「YES、ミーのワイルドバズーガはもう少し威力はあるぜ」

と会話をしていると煙が晴れると片方の角が折れたベヒモスが居た。

「雷槍とワイルドボーイ、二人合わせて角一本か」

「流石この世界をの最強を退けた事がありますね」

と悠長に会話して居るとベヒモスの頭上で魔力を集めて魔力の塊が出来ている

「いかん、お前達下がれ!!!」

「姉さん此処は下がりましたよ」

「そうだな」

「YES」

と大人しく後ろに下がった。

「メルドさん下がりました」

「あ、ああそうか」

其れと後で其れについて説明してもらおうz「団長! 障壁!!」

メルドさんの部下の誰かがベヒモスが攻撃の準備を整えてその魔力其のまま放出したのを捉えてメルドさんに報告。

大急ぎでハイリヒ王国最大戦力が全力で多重障壁を展開する。

「『全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を通さず——『聖絶』!!』」

二メートル四方の最高級の紙に描かれた魔法陣と四節からなる詠唱、さらに三人同時発動。一回こっきり一分だけの防御であるが、何

物にも破らせない絶対の守りが顕現する。純白に輝く半球状の障壁がベヒモスの攻撃を防ぐ！

障壁とベヒモスの攻撃の激突したさいすさまじい衝撃波が発生

「すごいな、下がって正解だったな」

「そうですね。姉さん」

「YES、ミーでも無事ですまないぜ」

「さてどうやって倒すか」

「僕達の攻撃はレベル低下で攻撃も下がっています」

「あたしの今のスタイルの専用技なら倒せると思うが」

「歌が必要でもんね」

「ならミー達が動き回って攻撃その間にミスアテナがチャージするか？」

「いやそれだと橋が揺れて後退が遅れる」

「なら如何やってあれを足止めするだ。アテナガール」

「其処が問題なんだ」

と考えていると

「あ、アテナさん達」

と声がする方を見るとハジメが居た。

「ハジメ！何でこんな所にいるんだ」

「いやアテナさん達が翼愛さんに呼ばれて後ろに行きそれで入れ替わる様に翼愛さんが天之河君をの襟を持ちながら来たから心配して来たけど心配要らなかつたみたいだから僕は戻るよ」

とハジメが振り向くとアテナはハジメの肩を掴み反転した。

「えあ、アテナさん」

ハジメは急な出来事に驚き

「丁度良い手伝ってもらうぞ」

「え、手伝う？」

「旦那!!」

「何だ」

「今から立てた作戦を実行したいんだが良いか？」

「何だ?!」

アテナOUT

翼愛ON

私は天之河君の襟を掴んで皆の目の前に到着して更に私が秘密にして居た事、キュアハートに変身が出来る事をばらして其のまま戦闘に入った。

私の後ろから攻撃して来たトラウムソルジャーを裏拳で首の骨を折り更に居たトラウムソルジャーが首の骨が折れたトラウムソルジャー事私に攻撃して更に目の前から別のトラウムソルジャーが後ろに居るトラウムソルジャーの攻撃に合わせて攻撃して来たが、私はソマルトキックで目の前のトラウムソルジャーの首を蹴り上げて後ろに居たトラウムソルジャーの頭を上片手で逆立ちしながら

「パーティーターブルキックコース」

ともう片方の手をトラウムソルジャーの頭について回転しながら蹴りを放って周りのトラウムソルジャーを蹴散らして両手を曲げて一気に戻すことで空中に浮かぶ。

ただ飛ぶだけだど後方に居る弓や杖持ちのトラウムソルジャーの良的になるので

「ラブハートアロー」

と叫ぶと「ラブハートアロー」が現れて私は直ぐに「ラブハートアロー」に「ハートアローラビーズ」をセットして手前に伸びるタッチパネルに並んだ4つのハートを

「とっ！ん！ん！ん！ん！ん！ん！」

順番になぞってパワーをチャージするとピンク色のハートが現れてそして後方のトラウムソルジャーに狙いつけて

「プリキュアハートシュート」

と後方に居るトラウムソルジャーを放った。

ピンク色のハートが後方のトラウムソルジャーに向かって行けどトラウムソルジャーを飲み込んで爆発してそのまま着地した。

周りを確認すると牙十郎君と雫ちゃんは連携しながらトラウムソルジャーを撃退して龍太郎君とルーズは其々の撃退方法でトラウムソルジャーを倒し鷹音ちゃんが二人が倒し損ねたトラウムソル

ジャーをを十八番の射撃で倒して刷庫ちゃんは天之河君にバフを山盛りに掛けてその後天に天之河君の神威を打ち込んでトラウムソルジャーを蹴散らす。

あと少して階段を確保する時にメルドさん達が来て

「皆！続け！階段前を確保するぞ！」

メルドさん達たちの参戦によりトラウムソルジャーの包囲網を押し切ったクラスメイト達。

これで逃げられると何人か安堵の表情を浮かべたが、その者たちは橋と通路を遮ろうとする骸骨を蹴散らす光輝に訝しげな顔を向けた。目の前に逃げ道があるのだから、早く逃げたいと思うのは当然だろう。

だが事情を知る者はまだ安堵できない。

「馬鹿者！まだ坊主達があの化け物の足止めしてるんだ！」

言われて、顔を上げて橋の方を見て少し困惑するような光景が目映った。

「……あの化け物、埋まってねえか？」

「其れにあれって？アテナさん達か？何かバロン、ワイルドボーイが居るんだ、何アレ？」

上半身が床に埋め込まれたベヒモスがそこにいた。

体勢も前傾になりすぎ、後ろ脚での踏ん張りも利かなくなりつつあるように見えてその上二人と一匹がベヒモスを袋叩きして居た。

「南雲君だよ！アテナちゃん達？と一緒に足止めに残ったの！」

「そうだ！坊主達があの化け物を抑えているから撤退できたんだ！前衛組！ソルジャーどもを寄せ付けるな！後衛組は遠距離魔法準備！ベヒモスのパワーなら全身埋めてもまだ出てくる！三人と一匹？が撤退するとき、一斉攻撃であの化け物の足止めをするぞ！」

腹の底まで響くような指示に気を引き締め直すクラスメイト達。

私も「ラブハートアロー」を構える

翼愛OUT

アテナON

あたしが作戦を説明して

「本気なのアテナさん」

「ああ本気だ。」

「旦那良いよな?」

「本当なら許可できないがあの時ベヒモスを蹴り上げた強さがあるなら特別に許可を出す」

「ありがたいな旦那」

とメルドは皆が居る後ろに行き

「行くぞ雷槍、ワイルドボーイ、ハジメ」

「OK, ベイビー」

「はい」

「分かった」

と私、雷槍、ワイルドボーイが前に出て

? BGM 君ト云ウ音楽デ尽キルマデ?

その後ろにハジメが待機して居る。

私は「アームドギアの槍」を取り出して雷槍は「戦極ドライバー」の「カッティングブレード」を下し、ワイルドボーイは「黄昏乱れ撃ちのコマンドメダル」を取り出して其れを「YSPウオッチ」にセットして

『カヒユン、マンゴースカッシュ』『ワイー!エグゼキュート!』

必殺コマンドを入れてバロンの「マンゴパニツシャー」にエネルギーが集まり、私と雷槍は一緒に「アームドギアの槍」と「マンゴパニツシャー」を振り挙げてワイルドボーイは二丁拳銃を構えて

「WPパニツシユメントブレイク」「黄昏乱れ撃ち」

私と雷槍は同時に「アームドギアの槍」と「マンゴパニツシャー」を振り下げて衝撃波を繰り出し、ワイルドボーイは二丁拳銃を乱射する。

攻撃をを諸に食らって怯んでその間に私と雷槍は左右の前脚に移動して、ワイルドボーイは今度は「ワイルドアクトのコマンドメダル」を取り出して其れを「YSPウオッチ」に

『ワイー!エグゼキュート!』

セットした瞬間に走り大ジャンプして

「行くぞ、雷槍」

「分かった。」

姉さん」

「いっせのっせ」 「ワイルドアクト」

と攻撃した。

前脚を攻撃されたベヒモスがバランスを崩し体勢も前傾になりその上ワイルドボーイの弾丸の雨に撃たれた

攻撃した二人と一匹は直ぐにハジメの後ろに行き

「「今だ！ハジメ」」

「うん。」

錬成！」

ハジメが錬成を発動すると、バランスを崩し体勢も前傾になって体制を直そうとしたベヒモスに石が纏わり付いて動きが止まった。

周囲の石を砕いて頭部を抜こうにもハジメが錬成して直してしま
うのだ。

そして

「ハジメ下がれ派手なのをぶちかます」

「うっうん」

とハジメが後ろに行き

「その胴体にてっかい穴を開けてやる」

と言いながら「アームドギアの槍」を自分の胸に刺した。

「アームドギアの槍」はみるみるとアテナの体に入った。

すると頭のコジラの顔をイメージしたバイザが前に出て、強く足を踏み込み、尻尾を地面に叩き込んで背中が青白く光り出して

★KING∞ATOMICBREATH

と青白い熱線がベヒモスに放たれた。

その威力が強くその証拠に地面を抉り乍ら進んで居る。

此れは刷庫が天之河にバフを山盛りに掛けて天之河の最大の攻撃である神威を超える。

その攻撃が当たり大爆発した。

「どうだ」

「姉さんフラグですよ」

「マジか」

と煙が晴れると瀕死になりながら四本脚で立って居る。

雄叫びを上げながらこつちに前脚を上げてアテナ達を押し潰そうと来た。

アテナは其れを地面に罅を入れながら受け止めて其れを押し返して

「逃げるぞ」

「OK」

「わかりました姉さん」

「うん」

と私、雷槍、ワイルドボーイ、黒花は其々変身解除した。

其れを皮切りに階段前に陣取ったクラスメイトから放たれた、あらゆる属性の攻撃魔法がベヒモスを打ち据える。

ダメージはやはり無いようだが、しっかりと足止めになっていた。しかしその直後、アテナは困惑した。

無数に飛び交う魔法の中で、一つの火球がクイツと軌道を僅かに曲げたのだ。

其れも見え見えの悪意が込められていた。

火球を追いかけるようにピンク色のハートが追いかけて追いつく瞬間火球は意志が在る様に交わし段々私達に近づいて火球の狙いがハジメと分かり

「ハジメ伏せろ」

「う、うん」

と言いつつアテナは背中に担いでいた三八式突撃銃をバットの様に振るうが其れも交わされ

「雷槍、ハジメ!!!避ける!!!」

アテナの呼び声を聞きハジメと雷槍は反射的に回避しようとするが火球の追尾性能は高く、躲しきれず命中、爆発した。

ハジメと雷槍は来た道を引き返すように吹き飛ばす。

ハジメは錬成ばかりを鍛えたおかげか、魔力と対魔ばかりが上がっていたのでまだ立てて、雷槍はトータスに来る前からチート級の体を持って居てレベルが低い上級生の魔法攻撃なら耐えられる。

どうにか逃げようとすが、悪いことは重なるモノだ。

怒り狂ったベヒモスが跳躍し、頭部を赤熱化させて降ってくる。

オルクス大迷宮に来て、間違いなく最大火力の一撃だ。

迫りくるベヒモスを見て2人はなけなしの力を振り絞って、その場を飛び退いた。

直後、怒りの全てを集束したような激烈な衝撃が橋全体を襲った。ベヒモスの攻撃で橋全体が振動する。

「うおっ！」

「おっとと」

さすがのアテナと黒花もその振動にバランスを崩し、倒れてしまう。

着弾点を中心に物凄い勢いで亀裂が走り、橋が悲鳴を上げる。そして遂に・・・橋が崩壊を始めた。

度重なる強大な攻撃に晒され続けた石橋は耐久限度を超えたのだ。

『グウアアアア!?!』

崩壊の中心地にいたベヒモスは崩壊から逃れようともがくが、意味をなさず奈落へと落ちていった。

「雷槍、ハジメ!!」

起き上がったアテナは2人の元へと駆ける。あと少しで必死に這いずる2人の手に手が届く距離にたどり着く。

そして2人の手を掴だ瞬間、黒花含む足場が完全に崩壊して落ち始めた。

アテナOUT

翼愛ON

翼愛は「ラブハートアロー」を構えていつでも発射出来るように準備して居て、アテナが立って居る場所が青白く光りベヒモスに当たり大爆発を起こした。

クラスメイト達はアテナ達がベヒモスを倒したと思い込んで気を

緩めて浮かれているが、私は気を緩めない。

理由はまだベヒモスの鼓動が聞こえるからだ。

「馬鹿！気を緩めるなまだベヒモスを目視出来ていない。

構え直せ」

とメルドさんがそう言いクラスメイト達は構え直した。

そして煙が晴れると瀕死になりながら四本脚で立って居る。

雄叫びを上げながら前脚を上げてアテナ達を押し潰そうと来た。

アテナは其れを地面に罅を入れながら受け止めて其れを押し返して

「今だ!!!」

放て!!!」

全員が其々の遠距離攻撃を繰り出した。

あらゆる属性の攻撃魔法がベヒモスを打ち据える。

ダメージはやはり無いようだが、しっかりと足止めになっていた。

しかしその直後、無数に飛び交う魔法の中で、一つの火球がクイツと軌道を僅かに曲げたのだ。

翼愛は最初、誰かの操作から外れた火球だと思い弾着予想してこのまま行けばハジメ君達に当たると予測して「ラブハートアロー」を構えて火球に狙いを付けてピンク色のハートを放った。

「ラブハートアロー」から放たれたピンク色のハートは火球を追いかけて行き追いついたと思った瞬間、火球は意志が在る様に交わした。

翼愛の思考少し止まった。

何せ誰かの操作から外れた火球だと思い弾着予想して矢を放ったのにまるで誰かが自分が放ったが火球が操作が外れました、と嘘を言っているもので、誰か嘘を言っているのか考えてしまい思考を戻すと火球はハジメと雷槍に当たり。

ハジメと雷槍は来た道を引き返すように吹き飛ぶ。

二人とも直ぐに立ち上がり直ぐに逃げようとするが、悪いことは重なるモノだ。

怒り狂ったベヒモスが跳躍し、頭部を赤熱化させて降ってくる。

オルクス大迷宮に来て、間違いなく最大火力の一撃だ。

迫りくるベヒモスを見てハジメと雷槍はジャンプでその場を飛び退いた。

直後、怒りの全てを集束したような激烈な衝撃が橋全体を襲った。ベヒモスの攻撃で橋全体が振動する。

私は何とかバランスを取るが悪い事が起きる

ベヒモスの攻撃着弾点を中心に物凄い勢いでハジメ達を囲むように亀裂が走り、橋が悲鳴を上げる。

私は最悪のビジョンが予測出来て

《シャルル、ロープ》

《分かったシャル》

と空間魔法でフック付きロープを取り出して其れを右足に括り付けて走ろうとする瞬間、遂に・・・橋が崩壊を始めた。

翼愛は呼吸を使い自分が出せる最大速度で走り

「メルドさん、お願いします」

「おっおい」

とメルドさんの小手にフックを付けて走り

「香織！」

「翼愛ちゃん!?!」

とロープの束を投げた。

香織は私の意志を理解してキャッチして翼愛はそのまま橋の下の奈落に飛び込んだ。

ロープの長さがいっぱいになるまで翼愛は落ちてとうとうロープの長さが限界になりその時、黄色の閃光がジグザグになりながら上に上がって来て其れを目視すると

「雷槍君!!」

「よぐヴあヴいぜんばヴい!!!」

槍型のアームドデバイスの「ストラダー」を起動してバリアジャケットを纏っている雷槍、雷槍の背中に黒花を背負って左脇にアテナを抱えて口には服の襟を噛まれているハジメだ

翼愛は直ぐに両手を広げて穂を掠りながら柄を両手で掴んだ。

「お姉ちゃん」

「よぐヴあヴいぜんばヴい、だずがりまじだ」

「翼愛助かった」

「雷槍君ごめん、何言ってる居るのか分からない」

《すみません、今ハジメ先輩の襟を噛んでいますので》

と雷槍から念話が聞こえた

「御免ね。」

それとありがとうね雷槍、「ストラダー」

《いえ》

『font:ul20』You are welcome『font』

と会話して居ると少しずづ上がっている

「兎に角「ストラダー」が咄嗟に起動して雷槍君が瓦礫を足場にして此処まで上がって来て」

《確かにあの時翼愛先輩があの場所に居なかったら奈落に真つ逆さまでしたよ》

と会話して居ると急に落ちる感触を感じたが止まって

《姉さん、翼愛先輩、黒花先輩これって》

「ちとやばいな」

「黒花、上見て来て」

「了解」

と黒花が上に上がるとする瞬間、落下始めた

「雷槍、翼愛、飛べ」

「どおおおお」

「どおおおお」

とアテナが何か言ってる中、私達は吹き出た水に飲み込まれた

整理整頓

「お？、お？…ろ？く？いおい、おきろ、よくあい、おい、起きろ翼愛」
誰かの呼び声に私は

「う、うくん」

瞼を開けた。

「よう、起きたか」

目に移ったのは川の近くで焚火しながら真つ赤なドレスを着ているアテナと

「翼愛先輩、おはようございます」

バリアジャケットを着ている雷槍君が居た。

「此処は？」

私は頭を抱えながら体を起こした。

「多分だがオルクス大迷宮の下層だと思う。

其れと服は濡れていたから勝手に着換えさせたから

因みにシャルルが用意したものだから」

身体を見ると確かにオルクス大迷宮に入った時とは別の服になっていた。

その周りには自分の服が全てロープで近くにぶら下げられている。

「別に良いよ。

階層は？」

「すみません、其処は分かりません」

「だな水鉄砲で此処まで流されたから」

「そう」

周りを見るとハジメ君と黒花が居なかった。

「アテナ！雷槍君！ハジメ君と黒花は」

「いや見てね」

「僕もです」

「そう」

と後ろの壁に体を預けた。

「翼愛、落ち着いているな。」

てつきり焦って探すって飛び出しそうに」

「私こう見えても焦って探そうと飛び出しそうなの。」

でも多分大丈夫だと思うの」

「其れって感か？」

「其れもあるけど確信もあるの」

「翼愛先輩、其の確信とは？」

「うん、黒花はサバイバルは強いし私の妹だから

ハジメ君は錬成師だから穴を掘って安全圏内を作っている筈だから」

「そうだな」

「取り敢えずお昼ご飯にしない」

「そうだな」

「姉さんに翼愛先輩、緩くありませんか」

「雷槍、休める内に休まないとやられるぞ」

「其れに今お昼ごろだからね。」

シャルル、カップ麺セット出して」

「分かったシャル」

「それはそうですけど」

と会話しながらカップ麺セット（カップ麺、メッシュテーブル、鍋）を三人分出した。

近くの川で水を鍋に入れて焚火の上にメッシュテーブル置き更の上に鍋を置いて蓋をした。

「それでこんな事になった理由を探そうか」

「そうだな」

「そうですね」

とこんな事になった理由を思い出そうと記憶を探った。

「まず今回の訓練はオルクス大迷宮で実践訓練で二十階層まで潜って」

「あたしと翼愛がロックマウン트의擬態を見破って」

「天之河先輩が大技を放つ準備しましたが翼愛先輩が止めましたが大技は放たれました」

「それで壁が崩れて宝石が出て来て」

「あの檜山^{バカ}が宝石に目が眩んで勝手に動いて」

「其れが転移系トラップでした」

「其れで私達は一気に六十五階層に降りて」

「そこでベヒモスとトラウムソルジャーの挟み撃ちに会った」

「翼愛先輩と天之河先輩が退路確保に後方に向かい」

「アテナ、雷槍、黒花がベヒモスの足止めして」

「その後にハジメが来てあたしが立てた作戦を実行して」

「その後にハジメ先輩が錬成でベヒモスの動きを止めて」

「後方に居る皆がベヒモスに魔法攻撃して」

「それでハジメが火球を食らって？」

其処まで言う私、アテナ、雷槍は黙り込んで鍋の蓋が「カタカタ」鳴り始めた。

私は鍋の蓋を取って

「アテナ、雷槍、カップ麺は何が良い？」

今出ているカップ麺は醤油、塩、豚骨だけど」

「あたしは豚骨」

「僕は塩で」

「となると私が醤油になるね」

とお湯をカップ麺に入れて其処ら辺に落ちている石をカップ麺の蓋の上に置いて

「シャルル三分宜しく」

「分かったシャル」

「あと鍋も」

「分かったシャル」

とシャルルにカップ麺の三分間を頼んだ。

私は鍋のお湯を捨てて私の隣に空間魔法陣が現れて其処に鍋を入れた。

「それである火球は事故の寄せていたけどあれは意図的に操作していたね」

「そうだな。」

あれが誰かの操作から外れた火球が私のフルスイングを避ける芸当が出来ないからな」

「雷槍君、あの火球誰が放った物か分かる？」

「えっとですね。」

火球の移動を逆算して多分ですが檜山先輩辺りから発射された物だと思っています」

「そう、ありがとう雷槍君」

「いえ」

「それでどうするんだ？」

翼愛」

「何が？」

「何がつてハジメに火球を撃った奴だよ」

「それね。」

しっかりと罰を与えるつもりだよ。

これは〇〇高校の生徒会長なりの私のけじめの仕方だから」

「そうか」

「三分立ったシャル」

「もう時間か」

「翼愛先輩、姉さん頂きましょう」

「そうね、頂こう」

とカップ麺の上に乗っている石をどかし蓋を退かスーパの素を入れて混ぜて

「「頂きます」」

とカップ麺を食べて

そして乾いた服に着替えて

「どうするカップ麺のカップ？」

「其れは川に流したら」

「おいおい生徒会長がそんな事やって良いのかよ」

「まあ本当はやってはいけないけどハジメ君や黒花にはメッセージになるからね」

「其れもそうか」

そう言つてカップ麺のカップを川に流した。

「そんじやあそろそろ行くかうか」

「そうだな」

「はい」

と其々の変身アイテムを取り出して

『シャルル』

「ストラダー」

「プリキュア！ラブリンク!!」

「セットアップ」

C r o i t z a l r o n z e l l G u n g n i r z i z z
l

『L・O・V・E』

『font:ul20』セットアップ『font』

「漲る愛！キュアハート!!」

と其々変身を完了して前に進む。

ハジメと黒花を探す為に

とこの時翼愛は思いも指定なかった。

奈落に落ちたのが自分たちの他に居たことに

探索開始

奈落に落ちてカップ麺を食べて其々変身してオルクス大迷宮10層（仮）の探索を始めた。

100層（仮）にも緑光石が有り探索できる。

で現在私達は

「キュウー」「ギョルルル」

「紙絵！」

100層（仮）の魔物と戦闘している。

私の相手は後ろ脚が発達した兎型の魔物だ

因みにアテナと雷槍の相手は、雷槍の場合は尻尾が二本ある白い狼型の魔物で、アテナの相手は熊型の魔物

私達は一時的に別れて其々魔物を対処している。

因みに兎型の魔物は後ろ脚が発達している為、疑似的にONE P I E C Eの六式の月歩と嵐脚が使って来る。

と皆様に魔物の説明していると

「キュウー」「ギョルルル」

兎型の魔物が月歩を使いながら私に目掛けて嵐脚を飛ばして来た。

私は

「剃」

剃を使ってその場から姿を消して兎型の魔物の後ろに回り

「鉄塊＋嵐脚」

と兎型の魔物に蹴りを入れるが、私が後ろに居ると察知した兎型の魔物は月歩で方向転換して私の蹴りに合わせて嵐脚を入れて来たが、

「キュウウウー」「ボキ」

兎型の魔物の脚がバキバキに折れた。

折れた理由は単純で兎型の魔物は嵐脚一つに対して私は鉄塊と嵐脚の合わせ技でありその上プリキュアの力を合わせている為、私が蹴り勝つ、そして

「月歩、から嵐脚、回転落とし」

と月歩で空を蹴って空中で回転しながら兎型の魔物の上を取り兎

型の魔物の頭に目掛けて嵐脚を叩き込んだ。

叩き込められた兎型の魔物はすごい勢いで地面に激突した。

私は着地して兎型の魔物を見ると頭が完全に潰れてもう頭と顔が無い兎型の魔物の死体が地面に減り込んでいた。

私は地面に減り込んだ兎型の魔物を引っこ抜いた。

「翼愛、終わったか？」

と後ろからアテナの声が聞こえて振り向くと多分熊型魔物の返り血を浴びたアテナと頭が潰れて上半身しかない熊型魔物を引きずっていた。

更に

「姉さんに翼愛、先輩此方も終わりました」

と雷槍の声が聞こえて私とアテナはその方向を見ると真つ黒な炭と化した白い狼型の魔物をバインドで引きずって居た。

「それじゃあそれぞれ対処した魔物を報告しましょうか」

「だな」

「はい」

「じゃあ私から。」

私に対処した兎型の魔物は後ろ脚が発達している為、疑似的にへ〇
NE P I E C E の六式の月歩と嵐脚が使って来る」

「そうか、じゃあ次はあたしだな。」

あたしに対処した魔物は熊型魔物で此奴の固有魔法？なのかわからないが爪から斬撃を飛ばして来る」

「次に僕です。」

僕が対処した魔物は尻尾が二本ある白い狼型の魔物で固有魔法は雷を飛ばして来ます。

固有魔法は纏雷です」

とお互い報告しているとアテナは雷槍の報告に疑問を持って待ったを掛けた

「おい雷槍なんで白い狼型の魔物の固有魔法を知っていてその上固有魔法の名前まで知っているんだ」

「えつと姉さん」

「なんだ」

「此れ聞いて怒らないで下さい」

「分かった。」

「怒らないから言ってみよ」

「はい、食べました」

「魔物の肉か」

「はい」

暫くして静音が流れて

「雷槍、てめー何喰っているんだ。」

「この死ぬていのかボケナスが」

「ちよっ痛い痛い姉さん

まだ死ぬたくないから離して、離して下さいお願いします」

とアテナは自分の弟である雷槍がやった事に怒って雷槍に容赦の欠片も無いアイアンクローをぶちかました。

「ちやんと食べた理由を話しますから」

と雷槍がそう言うのとアテナはアイアンクローして居た、手を離した。

「下らん理由だったら今度は武装色有のアイアンクローをぶちかますぞ」

と言いながら腕を真っ黒にしながら手を開けたり閉じたりして居る。

「はい、食べた理由は敵の情報が欲しくて食べました。」

一応魔物の肉の性質は分かって居ましたが、僕の肉体なら食べても大丈夫だと思ひまして変身した後で食べました」

と言いながら雷槍の服の下から蔦が出て来て雷槍の腕に蔦が纏われてその蔦が爆発した。

腕は異形の腕になっていた。

「それでも私達に一言、言わないか」

と言いながらアテナは雷槍の頭に拳骨を入れた

「はい、すみませんでした」

「雷槍、お前は私の唯一無二の弟で有り家族なんだから無茶するな」

「はい」

「其れで雷槍君」

「はい何でしょ？」

翼愛先輩」

「魔物肉を食べて体に変化あつたかな？」

「白い狼型の魔物の肉を食べて数秒後にお腹が居たくなりましたが直ぐに収まりました。」

直ぐにステータスプレートを見てステータスを見たら変化していませんでした」

「おい雷槍、ステータス直ぐに見せろ」

「はい」

と雷槍は直ぐにステータスプレートを差し出してアテナは受け取り私とアテナは中身を確認する。

|||||

騎竜 雷槍

16歳、男

レベル10

天職：騎士

筋力：300

体力：300

耐性：300

敏捷：300

魔力：300

魔耐：300

技能：槍術、全属性耐性、物理耐性、剛力、縮地、先読、剣術、高速魔力回復、限界突破、

電気魔法適正、気配感知、魔力感知、気配遮断、毒耐性、麻痺体制、石化耐性、胃酸強化、

纏雷、言語理解

|||||

「この纏雷は雷を纏わせる程度みたいで」

と雷槍はそう言いながら腕をバチバチと雷を走らせた。

「そうか」

「所でこれも食べて良いですか？」

と言いながら雷槍は私達が倒した魔物を指した。

「情報も分からないし」

「翼愛先輩の非常食を減らす為にも」

と私と雷槍はアテナを見た。

「好きにしろ」

「だかな魔物の肉を食べたらステータスプレートでステータスを確認するぞ」

とアテナから条件付きで許可が出た。

「ありがとう」

と雷槍は魔物の肉を食べて直ぐに私とアテナは確認した。

|||||

騎竜 雷槍

16歳、男

レベル10

天職：オーバードナイト

筋力：1500

体力：1500

耐性：1500

敏捷：1500

魔力：1500

魔耐：1500

技能：槍術、全属性耐性、物理耐性、剛力、天歩〔＋空力〕〔＋縮地〕、先読、剣術、

高速魔力回復、限界突破、電気魔法適正、魔力操作、気配感知、魔力感知、気配遮断、

毒耐性、麻痺体制、石化耐性、雷帝、ロード・バロン、クラック、胃

探検と再会の序章

現在、私達はオルクス大迷宮百階層（仮）から下りの階段で降りてオルクス大迷宮百一階層（仮）を探索している。

「なあ、翼愛、雷槍」

「何ですか？姉さん」

「どうかした？アテナ」

「雷槍がさっきの階層で見つけたあの薬莢あれハジメが扱えるか？」

私は雷槍が拾った薬莢を上に見つめて

「うくん、薬莢の大きさから見て弾丸の大きさと込められる魔力の量を考えて多分無理かな」

「だよな、でも現に薬莢を作れるのはこの世界でハジメしかないよな」

「はい、僕も同じ考えです。」

姉さん

「万が一ハジメがこのサイズの薬莢にピッタリな銃を作ってハジメが使うとしたら」

「私なら錬成して台を作って銃を固定してトラップとして使うね」

「僕なら飛び上がって引き金を引いてその衝撃を利用しながらバク転しながら乱射します」

「雷槍どうゆう銃の使い方だよ。」

まあ翼愛の使い方が一番ハジメに有っているな

「だけどくまなく探してそんな台が無かったよね。」

因みに私が探した場所にはそんな台や穴が無かったよ

「はい僕の所も無かったです」

「あたしもだ。」

どうにも腑に落ちないな

と会話して居ると急に見聞色の未来予知が起きて私達が光を浴びて雷槍以外、石化した未来が見えて

「アテナ、雷槍君、石化する散会して、刺」

「行き成りか」

「僕は石化耐性があります」

アテナと雷槍に警告を流して剃を使って物陰に隠れてアテナは「ガングニール」の槍を地面に指してその槍を変形させて盾の様に身を隠して雷槍は石化耐性がある為そのまま棒立ちしてそして部屋全体が光出した。

そして光が収まって直ぐに私は

「剃」

と剃で発光元の下に行くと壁にトカゲ型の魔物が張り付いていた。

私は

「嵐脚」

で前足と後ろ脚を一気にそぎ落として

「雷槍君、パス」

「はい」

とそのままトカゲ型の魔物もサッカーボールの感覚で雷槍に目掛けて蹴ってそのまま

「ハア！」

と雷槍が持つて居る「ストラダー」で斬り倒した。

「終わったか？」

「終わったよ」

と盾状態になった槍から隠れていたアテナが出て来て

「こいつが発行の元凶か？」

「はい、光出した時このトカゲ型の魔物を目撃して石化耐性の技能が発動して居ました」

「そうか」

「探索の続きしろうか」

「だな」

「はい、翼愛先輩」

とこの後オルクス大迷宮百一階層（仮）を隅々まで探して得たものはバジリスク（仮）の肉と六本脚が有る猫と羽を散弾銃のように飛ばすフクロウは長いから短く訳してショットアウル（仮）命名した。

そして雷槍が食べて手に入れた能力は夜目だけ。

そして

オルクス大迷宮

百一階層

降ります

百二階層

とアテナが戦闘で歩いていると

「ボチャ」

とアテナの足から水たまりに入った音がした。

「どうかしたの？アテナ？」

「何か泥沼みたいな場所みたい足を突っ込んだ」

「一応調べる？」

「僕もこの先何かあるのか知らないので知る必要があります」
「だな」

問うゆう事で泥水？をコップに入れて百一層の戻った

オルクス大迷宮

百二階層

上がります

百一階層

百一階層に戻り最初に火を入れてみた。

すると物凄い勢いで引火してコップが溶けた。

「これタールだ」

「げ、あの先あたしと雷槍不利じゃん」

「そうですね。」

「姉さん」

「なら私が前に出るよ」

「頼んだ。」

「翼愛」

「お願いします。」

「翼愛先輩」

と私が先頭で

オルクス大迷宮

百一階層

戻ります

百二階層

百二階層に戻った私は

「シャルル」

「翼愛何シャルか？」

「セイザブラスター」と「タテキュータマ」を出して」

「分かったシャル」

とピンク色の魔法陣が現れて其処から「セイザブラスター」と「タテキュータマ」が出て来て私は左腕に装着して「タテキュータマ」にマウスライドして「セイザブラスター」に「タテキュータマ」

『タテキュータマ』

をセットして「タテキュータマ」を手前に倒して

『セイ・ザ・アタック』

とタールの沼に向けて引き金を引いた。

すると不可視の盾が現れて其れを足場代わりにした。

「随分便利な使い方だな」

「見ていたアニメでこんな感じで足場を作っているシーンが有ったから」

「まあこれでべとべとにならないな」

と会話しながら「タテキュータマ」の不可視の盾で足場を作っているとまた見聞色の未来予知が起きて今度は私目掛けて鮫型の魔物が口を開けながらこつちに襲て来る未来が見えた。

私は止まり

「観えた？」

「ああ、バツチリ観えた」

「はい観えました」

と会話して居ると見聞色の未来予知で見た通りに私目掛けて鮫型の魔物が口を開けながらこつちに襲て来た。

私はクールに

「嵐脚」

で斬り倒した。

この後も階層を降りた

階層にもいろいろな種類があり

階層全体が毒霧で満ちていたりといった風に。

毒階層ではアテナの「ガングニール、幻獣型ギア」の★DRAGO N∞DUSKをぶちかまして階層を蒸し焼きにして汚物を消毒したり。

また地下迷宮なのに密林みたいな階層に出たこともあった。

そこは物凄く蒸し暑い上、鬱蒼としていて、

樹上では巨大なムカデや密林の樹木に擬態して襲ってくる樹の魔物がいた。

ここは雷槍の技能、雷帝で階層を雷を辺り一面に降らしまくって数秒で階層はを焼きの野原になった。

焼きの野原にしてもやる事は変わらず隅々まで探索する。

探索している焼けた赤い果物が見つかった。

雷槍は毒味もとい試しに食べてくれて、味はスイカによく似てい美味しいそうでここん所保存食ばかりだったのでは新鮮の果物はより美味しく感じた。

実に、何十日ぶりかの保存食以外の食い物だったので、完全にハジメと黒花の探索を忘れて果物狩りしてしまった

存分に収穫を、果実の実りを満喫して残りはシャルルの空間魔法に仕舞い、迷宮攻略を再開した。

そんな感じで階層を突き進み、気がつけばオルクス大迷宮（仮）百四十九階層までやって来ていた。

ちなみに、現在の彼らのステータスはこうである

|||||

鞆波・A・翼愛

17歳、女

レベル40

天職：弓士

|||||

騎竜 雷槍

16歳、男

レベル39

天職：オーバードロードナイト

筋力：2000

体力：2000

耐性：2000

敏捷：2000

魔力：2000

魔耐：2000

技能：槍術、全属性耐性、物理耐性、剛力、天歩〔+空力〕〔+縮地〕、

先読、剣術、

高速魔力回復、限界突破、電気魔法適正、魔力操作、気配感知、魔

力感知、気配遮断、

毒耐性、麻痺体制、石化耐性、雷帝、ロード・バロン、クラック、胃

酸強化、纏雷、

風爪、言語理解、遠目

|||||

になっている。

正直言ってこの世界の基準を軽く突破している。

この世界の強さ基準はハイリヒ王国ではメルドさんで風の噂でハイリヒ王国のその隣のヘルシャー帝国では皇帝ガハルド・D・ヘルシャーも強いと小耳に挟んだ。

遠からず皇帝ガハルド・D・ヘルシャーにで会う筈だ。

理由は彼は強い奴は自分の軍に取り込もうとする悪い癖があるみたいだ。

と考え事をしながらオルクス大迷宮（仮）百四十九階層からオルクス大迷宮（仮）百五十階に続く下りの階段を降りていると。

「なあ翼愛、雷槍」

「どうかしたのアテナ」

「何でしょう姉さん」

「いや幾らハジメと黒花を探して思ったことが有るんだ。

可笑しくないか」

「どうゆう事？」

「何も隠れていても食料が確保が出来ずに飢え死に魔物に体を食べられていても荷物位は残るにハジメや黒花の武器や持ち物が見つからい上に更に謎が増えるばかりだ」

と言いながらアテナは葉莢を取り出した。

「雷槍が見つけた葉莢よりも一回り小さい口径の葉莢が見つかるし」

「多分だけどハジメ君と黒花が合流したんじゃない？」

「だとしてもこの謎はどう説明する」

折れた刀の刃と折れたナイフを出した

「うゝん其処が問題だね。」

ハジメ君と黒花のメイン武器は銃、ナイフは兎も角、刀はハジメ君は使わないし、一応黒花は刀を使うけど、ハジメ君に会えば全ての謎が分かるはず」

「だな」

と階段を降り終えると

「ドパツ、バンツ、バツバンツ」

「グザツ、ズツバン」

とこの迷宮では絶対鳴らない音が聞こえて私は足を止めた。

「どうかしたか翼愛」

「いつ今銃声音が聞こえた」

「マジか」

「雷槍！」

「はい」

と雷槍は手を地面に置いて電力を流した。

暫くして

「えつとですね。」

この階層で区切られた部屋が其処に五人と何か箱みたいな物で拘

束されている一人が居ます」

「はあ？」

私とアテナは少しフリーズした。

「おいおい雷槍、其れはねーぞ。」

あの時落ちた時はあたしと翼愛、雷槍、黒花そしてハジメの四人だけだぞ。

なんで三人増えているんだ」

「知らないんです」

「取り敢えず行こう。」

そうすれば分かるから」

「だな」

「はい」

と私達は走った襲って来る魔物は倒すと大きな扉が見えて

「雷槍君この先」

「はい」

「開けるぞ」

「おう」

と扉を開けると其処には大きい蠍型の魔物と其れを応戦している白髪と赤眼の少年少女と金髪の布一枚だけの少女とワイルドボーイが居た。

再会

私達は扉を開けると其処には二本の尾を持つて居る蠍型の魔物と其れと応戦している白髪と赤眼の男性が二人女性が二人の計四人と金髪の布一枚だけの少女とワイルドボーイが居て咄嗟に私達は扉のふちに隠れた。

《アテナあれどう見る?》

《どう見るて男性と女性が手に持つて居るの何処からどう見ても銃だよな》

《はい、後あの銃は他だの銃ではなくレールガンが組み込まれてます》

《理屈分かる?》

雷槍君《

《はい、あれは纏雷を利用したレールガンです》

《なるほどな銃とレールガンの仕組みも分かつて居て更にワイルドボーイ居るし》

《間違いなくハジメ君達だよ》

《ですね。》

《ですかどうします》

《何が?》

《どのタイミングで入るか悩みますね》

《ああ、確かに変に入って敵と認識されたら一溜りも無いな》

と念話で作戦開示して居ると

《アテナ、雷槍君、あれどうかな》

《《あれ?》》

と私達が見ると金髪の少女が男性の一人に抱き着きながら首過ぎかぶと噛みついていて一人の女性は羨ましいそうに見て他の二人は呆れながら二人を守る様にワイルドボーイと一緒に陣を展開していた。

《丁度良いな》

とアテナは《《 GANG ニール 》》を解除して

《僕も賛成です》

と雷槍も《ストライダーのバリアジャケット》を解除した。

《二人が賛成なら私も賛成》

私もキュアハートを変身を解除して「セイザブラスター」は先程
タールの沼で予め腕にセットして居たので

「シャルル、ワシ」

「分かったシャル」

魔法陣から「ワシキュータマ」を取り出して「ワシキュータマ」を
マウスライドして鷲のイラストが完成させ

『ワシキュータマ』

『マンゴー』

『セイ・ザ・チェンジ』

『ロックオン♪♪』

「スターチェンジ」

「変身」

「Croitzalronzell Gungnir zizz
l」

『カヒユン、カモーン!!』

マンゴーアームズ！ファイト・オブ・ハアンマアー！』

と私はワシピンクになり雷槍は仮面ライダーバロンマンゴーア
ームズになりアテナはガングニール斧戦士型ギアを纏った。

私は直ぐに「キューザウエポン」の上からミドル、コアの順でパ
ーツを組み合わせて

『キューアックス』

を作り更にワシピンクに付いて居る翼を広げて雷槍と一緒に蠍型
の魔物に向かって

行きながら私は「セイザブラスター」から「ワシキュータマ」を外
して「キューザウエポン」のコアパーツに

『カヒユン、マンゴースカツシユー!』

『ギャラクシー!』

にセットして、と蠍型の魔物の二本の尾を私が左で雷槍が右で叩き

込んだ。

蠍型の魔物と戦闘して居たグループは私達の乱入に驚いていたが

「アテナ」

「姉さん」

「任せろ」

と構っている暇もなく

「行くぜ」

★ANTARES∞BUSTER

と蠍型の魔物の殻に罅が小さいが入ったが直ぐに修復し始めた。

「おいお前ら其処退け」

と左腕が無い青年の言葉のままにその場を引き

「今だ、アレーティア」

「うん、蒼天」

とこのフロアを埋め尽くしそうな位デカイ火球が生成され其のまま蠍型の魔物に落ちた。

と火球が消えて私は左腕が無いの青年と金髪の女性に向かったが左腕が無いの青年は手に持って居る銃をこっちに向けて金髪の女性は腕をこっちに向けて来た。

私は両手を挙げた。

視線をアテナの方に向けると銃を構えている女性とクナイを持って居る女性に抑えられて雷槍の方を見ると刀を持って居る青年に抑えられていた。

「お前ら何者だ」

と左腕が無いの青年に質問されて

《どうする？アテナ、雷槍君》

《どうするも何も》

《変身を解除して説明しましょう》

《だね》

「一応君の知り合いだけど口で言うより実際に変身を解除してから話
がしたいんだけど良いかな？」

「当たり前だろ良いから変身解除しろ」

「じゃあ言葉通りに」

と変身解除しようと瞬間

「ガサ」

と小さいが何か動いた音がして私は目線に移すと蠍型の魔物が微かに動いていた。

「ハジメ君悪いけど変身解除するのは後で良いかな？」

「奇遇だな俺も丁度用事が出来た」

「ワシキュータマ」を右手に持ち「セイザブラスター」にセットして「ワシキュータマ」を二回手前に倒して

『ギャラクシー！』

と左腕が無いの青年とほぼ同時に蠍型の魔物の方に向けて引き金を引き攻撃をかました。

攻撃は殻を剥がすだけで終わった。

「固いね」

「ああ俺達もあれには手を焼いたからな、だが後は俺達に任せろ」

と左腕が無いの青年が蠍型の魔物に行き殻が？がれた場所に立ち筒状の物を取り出して

「此れでも食らっつけ」

と二本の尾を持って居る蠍型の魔物の体内に筒状の物入れて左腕が無いの青年が飛び引き、白髪のスレートロングヘアの女性が

「聖絶！」

と蠍型の魔物は結界の中に閉じ込めて其のまま蠍型の魔物は体内爆発した。

「これで終わったね」

「だな」

「.....」

無言で互いをじつと見る2人。

その沈黙を先に破ったのは翼愛だった。

ワシピンクの変身を解除し

「それにしても随分変わったね」

生身の姿を見せる。

「ハジメ君」

「おめえ達が変わらなすぎるんだよ。」

妹も俺達と同じぐらい変わっているんだよ」

とワイルドボーイの方を見るとワイルドボーイは変身解除すると黒髪の金目だったはずが今じゃあ白髪の赤眼になっていて身長は少し伸びているが胸はあいからずに成長していなかった。

「久しぶりだね黒花」

「お姉ちゃんも」

と再会を噛み締めていると

「おい分かるのか黒花て」

「分かるよなんせ私は〇〇高校の生徒会長ですから。」

髪の毛の色と目の色を変えたり骨格丸々変えただけでは私の目は誤魔化せないから誤魔化させるなら声帯に心臓音を変えないとね。

因みに」

ともう一人の青年を指さし

「白狼 牙十郎君に」

スタイルが良い白髪のストレートロングヘアの女性を指し

「白崎香織ちゃん」

こつちもスタイルは良く白髪のちよつと長いボブカット女性を指し

「園部 優花ちゃん」

と全員の名前を言ったら金髪の少女以外全員驚いていた

「あ、後は」

と私は金髪の少女に行き

「アレーティアちゃん

如何かな正解かな？」

「ああ正解だ」

私は思わずピースをした

整理整頓、アテナ&雷槍編

ハジメ達と合流してこれまで起きた事を整理整頓する為話し合いたいた為ユエが封印されていた部屋から出てハジメの錬成で錬成した。

部屋に移動した。

ユエが封印されていた部屋も安全だけど本人が嫌がつて居たから移動して現在は

「「「「「ずずずずずうううううううううう」」」」」

物凄い勢いでカップ麺を食べている。

アテナの能力でおかわり用のお湯を沸かして、雷槍はおかわりのカップ麺におかわり用のお湯に注いで、私は時間が立ったおかわりのカップ麺をかき混ぜて、そして

「豚骨ラーメン出来たよ」

と言った瞬間に手に持って居た豚骨ラーメンのカップ麺が無くなっていてハジメの方を見ると

「ずずうううう」

と片手で器用に豚骨ラーメンを食べていて

私は直ぐに切り替えてかき揚げうどんのカップ麺にかき揚げを乗せて

「かきあげうどんgg?」

と言いつ切る前に直ぐに無くなり香織の方を見ると

「ぐぐ、ずずうううう、ぐぐ」

とかき揚げを食べた後にうどん食べて又かき揚げを食べていた。

私は又直ぐに切り替えて塩焼きそばのお湯を捨てて蓋を開けて粉末粉を入れて

「塩やきそば?」

此れも言いつ切る前に今度は牙十郎の方を見ると

「ずずうううう」

牙十郎が食べていた。

私は直ぐに三分経った台湾ラーメンのカップ麺をかき混ぜて

「台湾ラーメン？」

完全に食品名を言い切る前に取られて黒花の方を見ると

「ずずうううう」

と黒花が台湾ラーメンを食べていた。

私は気にせずカレー飯が三分経ちかき混ぜて

「カレー？」

と最初の部分を言い切る前に素早く取られた。

今度は優花の方を見ると

「パク、パク、パク」

優花がカレー飯を食べて居た

と次は鍋に入れていたパスタが茹で上がりパスタを取り出して皿

に盛りつけて、湯銭で温めたカルボナーラソースを掛けて混ぜて

「k？」

と今度はすつくと横から手が出て来てカルボナーラを盛りつけた

皿を取られた。

私は横を見ると

「くるくる」パク」

ユエがフォークでカルボナーラ巻き食べていた。

そして落ち着いた時にとうとう言いたい事を言った。

「皆、食べるの早くない？」

「すみません会長、ここん所、碌な物しか食べて居なかったもので」

「碌な物？」

私が疑問に思っているつと

「狼の魔物肉に兎の魔物肉、後ハジメ君の腕を切り落とした熊の魔物肉」

「バジリスクの焼肉に六本足の猫の丸焼きと羽を散弾銃の様に飛ばすフクロウの丸焼き、他にもあるよ」

「いい言わなくて良い。」

確かに碌な物しか食べて居ないね」

「だろ一応優花が居てくれて多少マシな飯だったな」

「それでも黒花は兎も角ハジメ君達魔物肉を食べて平気だったね」

「ああ此奴ののお陰だ」

とハジメ君が鉱物を取り出した。

鉱物は青白く発光していて少しずつ魔力放出していた。

「こいつは俺の鑑定しても分からないかったから適当にポーシヨンと名付けた」

「へえ、言つとくけどそれ膨大な魔力が集まった結晶石だよ」

「マジか、どういで体力や魔力や異常状態が一発で治るわけだ」

「其れで生き残れたんだ」

「ああ、だか俺が今気になつているのお前達の正体だ」

「私？それなら〇〇高校の生徒会長n「いや其処じゃない」じゃあ何処なの？」

「俺達を知りたいのアテナ達の方だ」

「あれ私の事は聞かないの？」

「一応翼愛、お前の事は黒花から聞いている」

「そう聞くけど私の事はなんて？」

「蒼青の勇者と剣の勇者の長女」

「あつているね。」

蒼青の勇者と剣の勇者の事は「

其れも聞いた。

様々な異世界で起きていた波を収める存在」

「なら説明不要ね」

「ああその通りだ。」

だから俺達を知りたいのはアテナ達の方だ」

「だそうだよ。」

アテナ、雷槍」

「聞こえていたぞ」

「はいこれから共に行動するので隠し事は無しにします」

とアテナと雷槍がこっちに来た。

「そんじゃあ、あたし達の事説明するぞ」

「ほう」

「見ての通り僕達が使う武器や能力は見ての通り翼愛先輩達と同じ

様々な物語の登場人物が使っていた物です。

僕が使っているのはリリカルなのはStrikersに登場するエリオ・モンディアルの「ストラーダ」と仮面ライダーバロンです」「そんであたしが使っているのは天羽奏の「ガングニール」とエリザ・ツエリスカの魔法一式だ」

とアテナはハジメに向けて指輪を見せた。

「そんで其れを何処で手に入れた？」

まさかと思うが、翼愛と黒花の両親みたいに異世界転生して特典として手に入れたとかじゃないよな」

「其処は違うな」

「違う？」

「はい僕達が異世界に行けたのは異世界の神、黒の神と親交が深い神によつて異世界召喚されました」

「ふん、そんでどんな異世界だった？」

「ああ、あたし達が召喚された異世界は黒の魔王の世界だった」

と其れを聞いたハジメは

「おいおい待って待って其処で確か主人公が白き神を崇めている謎の研究機関、白の秘蹟に誘拐されてその上実験体にされたが脱走して逃げたが白き神の命を受けた十字軍の侵略で主人公は戦乱に飲み込まれる話だぞ」

「ああそんで物語のカテゴリーがヤンデレハーレム」

「ハアア、そんで姉さん、クロノさんのヤンデレハーレムに落ちそうになってパニックになって「ガングニール」でクロノさんの頭を数回叩きまくってクロナさんのハーレムメンバーに殺されかけましたもんね。」

ハアア」

と雷槍が笑っていると

「何言って居るだ馬鹿野郎あれはあたしが絶対思い出したくない黒歴史だ」(。D。?)「ぐりぐり」

「痛い痛いすみません話が盛り上がって居たもんで」(T ^ T)
とアテナが雷槍の頭をグリグリし始めた

「やば、思い出したただっけで身震いして来た」

とアテナの体がブルブルし始めた。

「それで僕達が召喚された目的は人類をゲームの駒としていない神が気まぐれで白き神に与えた転生者を抹殺する事です」

「具体的には？」

「はい姉さんは現在クロナさんのハーレムメンバーに追いかけられた記憶が蘇る「思い出させたのは雷槍てめだぞ」はいすみません」

と言いながらアテナは部屋の隅で縮こまっていた。

「ので代わりに説明します。」

その問題の神が転生させた人間は違法人体実験を繰り返して処刑されたサイコパスな研究員です。

神はその研究員に特典としてアカメが斬るに登場する帝具「神ノ御手かみのみパーフェクター」を与えたんです」

「アカメが斬るの「神ノ御手パーフェクター」か。」

たしか装備した者の手先の精密動作性を数百倍に引き上げる物だったか?」

「はい正解です。」

ハジメ先輩、「神ノ御手パーフェクター」を手に入れたサイコパスな研究員は別の支部の白の秘蹟で強化人間の改造実験や洗脳実験してみたいで強化兵士を戦場に出されて黒の神の方は敗戦が続いた模様で黒の神は敗れそうになりそうと悟り親交が深かった神に頼んで僕と姉さんが選ばれました」

「成程な」

「僕と姉さんはクロノさんと一緒に戦場を駆けていました」

「戦闘経験ありだな」

「はい、その通りです。」

ですがとある戦闘で僕が敵に捕まりその上例の転生者に体を弄られました」

と言いながら雷槍は自分の腕に植物の蔓が纏われて其処から蔓が破裂した腕は異形の腕になっていた。

「その腕ロードバロンなのか?」

「はいハジメ先輩のゆう通り、僕はロードバロンに改造されました。

改造目的はクロノさんと騎竜アテナの抹殺です」

「つまりあれか洗脳した雷槍をだせばアテナとクロノは手出し出来ずに倒せると考えた」と

「はいですが姉さんが容赦なく僕を殴られました」

「容赦ねな」

と皆が部屋の隅っこで蹲っていたアテナを見た。

「しょうがねだろ身内が殺されず連れ去られた時は大抵何かされた後に戻って来るものだから」

「確かにベターだな」

「ええあの時の姉さんの感が当たって居ましたし」

「それよりこっちはぶっかり教えるとか不公平だ。」

「どうやって生き残った？偽りなく話せ」

「良いが質問させてもら」

「何にがだ？」

「お前達は俺達の敵か？」

「私は違うね。」

敵になれば妹と戦うから」

「あたし達も違うな」

ハジメは友達だからな」

「はい僕も姉さんと同じです」

「そうか」

とハジメは過去に起こった事を話してくれた。

整理整頓、ハジメ&香織、前編

…真つ暗な闇の中で、誰かに起こされる形でハジメは目を覚ました。

「ハジメ君…よかった!」

「白崎…さん…?」

ハジメの視界に映ったのは、涙を浮かべている香織の顔。

「ここは…それに、何で白崎さんが此処に…?」

ハジメは自分達がいた場所が洞窟内の川だと気づき、すぐに川から出る。

「翼愛ちゃんがハジメ君達を助ける為に奈落に自ら飛び込んで落ちたの。」

でも落ちる前にこのロープを私に渡して落ちた。

其れで翼愛ちゃんがハジメ君を掴んだ合図が合って皆で引き揚げていたの。

でも途中でロープが切れて皆の手からすり抜けたんだけど私、牙十郎君、優花ちゃんが何とか掴んで踏ん張っただけど立って居た足場が崩れて其の後、壁から噴き出してた水に流されて…偶々別の横穴に流されたから助かったみたい…」

香織はかろうじて流されていた時のことを覚えており、それをハジメに語る。

「そんな危ない事しなくても良かったのに、翼愛さんが此処に居るなら翼愛さん達と合流して脱出する予定だったのに」

「うっん、それでもあの時にロープを離したらあの時の約束が果たせないと思ったの」

川から上がった2人は、香織が用意した炎魔法で焚き火を囲み暖を取る。

「翼愛ちゃん達は…気がついたらここにいないくて…多分、どこか別の水路に落ちたと思うんだけど」

「そっか…でも、まずはどうにかして地上に繋がる道を探さないとね」

一人だったらどうなっていたかはわからないが、少なくとも香織が

いるお陰で多少は冷静になれた。

ある程度服が乾いたのを確認し、ハジメと香織は出口を探して歩き始めた：

↳移動中↳

緑光石があるおかげで比較的明るかった洞窟だが、上層の迷宮と比べると人が歩いた跡がなかったためデコボコで歩きづらい。

それがハジメ達の抱いた印象だった。

そしてハジメが導き出した答えは今いるこの場所は間違いなく大迷宮でも未到達の場所と推測した

だとしたら、今までよりさらに危険な魔物がいる可能性が十分に考えられた。

しばらく歩くと、ハジメと香織の視界に一匹の魔物が入る。

「あれは…ウサギ？」

その外見はウサギに酷似していたが、足が異様に発達しており、何よりも気持ち悪いラインが全身に走っていた。

「あれがこの階層の魔物……っ！」

警戒していたハジメ達だが、直感的に横に飛ぶ。

自分達の存在に気がついた魔物『蹴りウサギ』がまるで砲弾のような威力の蹴りをこちらに放ってきたのだ。

「うわっ!？」

咄嗟に香織を庇って避けられたものの、地面の一部が抉れるほどの威力。

下手したらこの魔物達は、65層で自分達が戦ったベヒモスよりも強いかも知れないと感じて考えた香織は手の震えを抑えながら杖を構える。

「ハジメ君！早く逃げてー！」

目の前の怪物相手では、戦いに優れているわけではない自分がどれほど時間を稼げるのかはわからない。

だが、ハジメを失いたくないという気持ちだけで香織は蹴りウサギの前に立った。

「白崎さん……！」

どこまでも自分を助けしてくれる香織の姿を見て、怯えていたハジメはぐつと歯を食い縛る。

(逃げられるかよ…逃げられるはずないだろ！)

香織は自分の身も顧みず助けてくれた。

なのに彼女を置いて逃げたら、それこそ香織に顔向けなぞできない。

ハジメは数少ない武器である試作銃を取り出し、使おうとするが…

「……………え？」

いつまで経っても攻撃が来ない。

香織とハジメは恐る恐る顔を上げると、そこには巨大な熊の魔物に食われている蹴りウサギの姿があった。

ぐちゃぐちゃと生々しい音を立て、蹴りウサギを捕食した熊。

熊はこちらに気づくと鋭い爪のついた腕をふるい、ハジメは衝撃波で壁に叩きつけられてしまう。

「ぐうっ!？」

「ハジメ君！」

壁に激突したハジメに駆け寄る香織。

だが…

香織はハジメの『左腕の肘から下』が無くなっているのに気が付く。

「あ…あああああ!？」

遅れてやってきた激痛と、腕が切断されたという現実にはハジメは絶叫する。

「腕が…腕があああ!？」

原理はわからないが、ひとつだけ理解できた。

あの熊の魔物によってハジメは腕を切断され、食われていたということ。

出血が止まらず、香織は治癒魔法を使うという考えすら頭から消えて必死に止血しようとしている。

だが、熊の魔物は香織とハジメを視界に捉える。

その目はハジメ達を『敵』ではなく単なる『餌』としか見ていない、人間として生活している時は決して向けられることのない視線だっ

た。

「あ……！」

その視線に、香織は死を覚悟するが…

「に…逃げない…と…」

ハジメは恐怖心に支配されながらも香織の手を引つ張って逃げ出し、近くの壁に走る。

絶望的な状況でも、ハジメが無意識に選んだのは『香織を守ること』。

ハジメは錬成を発動させて二人が通れるだけの小さいトンネルを開けた。

「あ、ぐううう…れ、錬成！」

想像を絶する激痛に涙と鼻水で顔を汚しながら、ハジメは香織とともに錬成で開けた穴に入る。

だが、目の前で獲物を逃がしてしまったことで熊は怒りを顕にした。

「グウルアアア!!」

雄叫びをあげながら斬撃を放つ固有魔法『風爪』を使い、ハジメ達の作ったトンネルを攻撃する熊。

壁がどンドン削られていくことに恐怖したハジメは、必死に錬成を目の前の壁に使い道を開く。

「うあああああ！錬成！錬成！錬成!!」

持ち得る魔力を全て費やし、必死に逃げるハジメと香織。

「来るな！来るな！来るな！来るなああああ！」

立ち向かう気力もへし折れてしまったハジメが願ったのは単純なこと。

死にたくない。

香織を死なせたくないという思いだけだった。

く錬成中く

どれほどの時間が経ったのか。

魔物の声も聞こえないほど奥に潜り、ハジメの魔力が底を尽きた。魔力切れと失血によって意識が遠のくハジメだったが、暖かい人の

温もりに包まれる。

いつの間にか香織がハジメを抱きしめており、彼女は泣きながらハジメに謝っていた。

「ごめんなさい…もつと…私が、戦えてたら…私がもつと強かったら…」

彼女なりの贖罪なのか、切断された腕の出血は香織の魔法によつて既に止まっている。

だが、いかに優秀な治療師といえどできるのは傷の治療だけであり肉体の復元や失われた血を戻すことはできない。

ハジメは、既に自分の命の炎が尽きようとしていた事を理解していた。

「ううん………白崎…さんのおかげ…で、少しは楽になったよ…」

血を流しすぎて、既に意識が朦朧としている中でハジメは香織の手を右手で優しく掴む。

「僕の方こそ…結局足引つ張つてごめん…ずっと、白崎さんには迷惑かけっぱなしだった…ね……」

「違う…違うよ！私、ハジメ君が迷惑かけたなんて一度も思ったことない！」

少なくとも、今香織が生きていられるのはハジメのおかげだ。

こんな状況でも、ハジメは無意識に香織と共に逃げようとした。生きようとした。

「ほんの少しでも…ハジメ君と一緒に最期の瞬間までいられるなら…それでもいい」

香織はハジメをギュツと抱きしめる。彼の命が尽きる瞬間まで、絶対に離すまいと。

「…ねえ…白崎…さん。この際…だから言っておきたい…ことがあるんだ…」

「うん…」

ハジメは、香織に想いを打ち明ける。

「最初は…正直、迷惑だったかな…ずっと…一人でいたのに、毎日…世話…焼いてくるんだもの」

「でも……そのうちにわかった。

ううん。わからないふりをやめた……白崎さんが朝話しかけてくるの……少し憂鬱だった……けど、ちよつとだけ楽しくて……」

「うん……うん……」

涙が止まらない。

それでも、香織はハジメの言葉を一字一句聞き逃さなかった。

「僕は……白崎さんのことが、ずっと好きでした……」

「そっか……私達、ずっと両思いだったんだね……」

例えここから出られなくても、最期だけはお互いの心が通じ合った状態で終わりたい。

「私も……あなたが好きです。」

最初に出会ったときから……世界の全てよりも、ずっと……」

死の間際に伝わった二人の心。

最初の口付けは、血と涙の味がした……

（ロード中）

水滴が頬に当たり、口に入るとハジメと香織は目を覚ます。

「私達……まだ、生きてる……?」

「どうして……?」

水滴が口の中に入ったことで、失われていたはずの血が戻るような感覚を覚える。

「この水のおかげ……?」

2人はすぐ真上にある穴の天井を見上げると、そこから水滴が絶えず落ちてくる。

「まだ……生きていられる」

そう思ったのも束の間。

あの熊の魔物の唸り声が遠くから聞こえて、ハジメ達は思わず身を寄せ合った。

戦いに不向きな力しかないハジメと香織だけではあの熊を倒すことはほぼ不可能。

腕を食われた痛みと恐怖がまたしてもよみがえり、ハジメは香織に強く抱きついた。

香織もまた、戦意がとうの昔に折れてしまっていた。自分がここまで生きていられたのはハジメのおかげ。しかしそのハジメの心が折れている以上、最早香織だけではどうしようもなかった。

「恐怖中」

あれから…どれほどの時間が過ぎたのだろうか？

一日…二日…それとも一週間？

2人とも、時間の感覚はなくなっていた。

寄り添っているお互いの体温だけが、かろうじて自分も相手も生きていると認識させてくれた。

本来なら餓死してもおかしくないが、天井から滴り落ちる水の持つ癒しの力で二人の命はつながっていた。

ほんの少し口に含むだけで体力は癒え、物を口にせずとも死なずに済んでいる。

その上、出血の激しかったハジメが失血死しなかったことから、失った血をつくる力も秘められているらしい。

…だが、空腹感と腕の幻肢痛だけはどうしようもなかった。

「……………っ……！」

時折、ハジメの呻き声が香織の心を現実を引き戻す。

この時、香織はハジメを助けることができないう自分を心底呪った。(どうして…どうしてハジメ君がこんな目に遭わなきゃいけないの…？)

誰かに迷惑をかけたわけでもない。

むしろ皆の命を助けるためにアテナ達と共に命をかけて戦ったのだ。

だがその結果、ハジメ達は奈落の底へと落とされるといふあまりにも残酷な仕打ちを受けた。

(翼愛ちゃん、アテナちゃん、黒花ちゃん、優花ちゃん、雷槍君、牙十郎君はどこかに行つて…ハジメ君は…)

腕を失い、激しい痛みと苦しみに苛まれるハジメの姿は香織にとって何よりも辛かった。

水を口にするのをやめ、命を絶とうと考えてから三日。それでも2人は死ぬことができず、心の中で同じことを考えていた。

早く…死にたい…早く…死にたく…ない

矛盾する思いが2人の脳裏をよぎる。

この空間に閉じこもって八日目。

2人の精神に変化が生じていた。

どうしてまだ生きているのか。

もう、生きる気力なんてない…

だが、互いに無意識のうちに掴んだ手が2人の心を引き上げた。

(違う…本当は死にたくない)

(何故?)(何故?)(何故?)(何故?)

(こんな状況になっても…何故俺(私)は『生』を望む?)

生きようと思えた理由。

それはずっと隣にあった。

「俺は香織を…」「私はハジメ君を…」

「死なせたたくない…一緒に生きていたいから…!」

(異世界のことなんてもう私達には関係ない…)

(俺達の目的を…俺達の『道』を阻むものは全て敵だ!)

ここにはいない大切な人、助けてくれた人を見つけ出す。

そして彼を見つけて…『8人で一緒に自分達の帰るべき場所へ帰る』。

そのためなら…

「邪魔をする敵は全て…殺す!」

この瞬間、ハジメ達の砕かれた心はより強靱に、より強大になった。

整理整頓、ハジメ&香織 中編

薄暗い洞窟の中を走る二尾の狼の魔物。

狼たちはこの洞窟に住む蹴りウサギを今日も食い殺していた。

それは、彼らにとつてごく当たり前の光景。

強き者が弱き者を食らう、自然の摂理。

強者の側に立っていた彼らは、だからこそ仕掛けられていた罠に気づくのが遅れてしまった。

「グルウア!?!」

二尾狼達が嵌った落とし穴。

それを作ったのはハジメだった。

あれから、ハジメは己を襲う飢餓感をねじ伏せながら錬成を磨き続けた。

元々王宮にいた頃からそれなりに練度を高めていた錬成はより範囲を広げることができるようになり、ハジメは無数のトラップを仕掛けて獲物がかかるのをひたすらに待ち続けた。

常に襲って来る飢餓感と腕の幻肢痛。

それに耐えられたのは絶対に帰るといふ強い意志と、共にハジメの心を支えてくれた少女の存在が何よりも大きかったのは言うまでもない。

そして、ついに最初の獲物がトラップにかかった。

「さて…ようやくかかったな。喜べ…お前らが俺達の最初の獲物だ」

かつてのように温和な目つきではなく、別人のように変貌した目のハジメと、横に立っている香織。

ハジメは掘り出していたいくつかの鉱石を複数握ると、錬成によって作り出された槍のような武器を握る。

「死にな…!」

ハジメは槍の先端を罠に嵌った二尾狼に突き刺すと、二尾狼は悲鳴を上げる。

「やっぱりそう簡単には死んじやくれねえよな!」

ハジメは槍を二尾狼の身体から抜いて又、槍を刺すを繰り返すが槍

の刃先が折れた。

「壊れても俺はいくらでも武器を作れるんだよ！お前が死ぬまでな！」

槍の刃先を作り直して突き刺し、深くねじ込む作業を繰り返すと、やがて二尾狼は事切れた。

「悪いが、謝罪はしねえぞ？お前らだつて生きるためなら俺達を食おうとするんだからな…お互い様つてやつさ」

落とし穴から二尾狼の死体を引っ張り出すハジメと香織。

やがて、香織はハジメによつて改造されたアーティファクトの治療師の杖から追加武器『仕込みナイフ』を引き抜き、二尾狼の血抜きをする。

「サンキュ、香織」

「ハジメ君も、お疲れ様」

ハジメは血抜きをして軽くなった二尾狼の死体を担ぎ、香織と共に早足で拠点に戻る。

暗闇の中、調達された緑光石がぼんやりとハジメ達の拠点の中を照らす。

ハジメ達の拠点には透き通るような青い宝石が置いてあった。

これこそ、ハジメ達の命をつないだ謎の水（ハジメ達は便宜上『ポーション』と呼んでいる）を作り出している鉱石である。

まだハジメ達は知らないが、この石は『神結晶』と呼ばれる歴史上でも最大級の秘宝であり、現代では遺失物扱いされている代物。

大地に流れる魔力が千年という長い時間をかけて偶然出来た魔力溜まりに集まってできた代物であり、いわば魔力そのものの結晶である。

結晶化したあと、さらに数百年もの時間をかけて内包する魔力が飽和状態になることで魔力が液体へと変化して溢れる特性を持つ。

ハジメと香織は血抜きをした狼の皮を剥いで、ナイフで切り分けた肉を拠点内の焚き火の前で焼く。

正直な話、腹が減っている今は生でもかぶりつきたかったものの香織もこれを食べる以上、少しでもましな状態で食べたほうがいいとい

うハジメなりの配慮だったりする。

(念のためポーチに火打石とか入れといて正解だったな…)

ハジメは肉を焼いている炎を見つめながらぼんやりと考えていた。

「そろそろ焼けたみたいだよ、ハジメ君」

香織はハジメから借りたナイフで狩った狼の肉を小分けにして皿に乗せ、ハジメに渡す。

因みに、この皿はハジメがそこらへんの鉱石から錬成したものであったりする。

「ありがとな、香織」

ハジメは少し微笑みながら皿を受け取る。

その様子を香織はすこしだけ楽しそうに見つめていた。

「……………なんだよ?」

「ううん。ただ、今のハジメ君も好きかなって」

真っ向からの好意に弱いハジメは顔を背ける。

「…いいから、さっさと食べようぜ」

照れているのが丸わかりだったため、香織は微笑ましく感じながらも魔物の肉をハジメとともに食した。

狼の魔物の肉は、お世辞にも美味しいとは言えない。

むしろ不味かった。

血抜きをしたとはいえ、未だ僅かながら残る血生臭さ。

筋が多く、普段なら食べようとさえ思わない食感に獣臭さ。

それでも、約10日ぶりの食事はハジメ達につかの間の満足感すら与えてくれた。

だが…

「ぐっ!?がああああ!」

「ハジメ君!?…うっ!」

ハジメと香織は体の中からの激痛に倒れる。

「なんだ…これ!」

「体が…碎ける!」

自分達の手を見てみると、どんどん体が崩れていき、血が吹き出る。

「が…:香《font》《color》《shake》《vib》

…織！水を…飲め！」

ハジメは咄嗟に自作の容器に移していたポーションのうち一本を香織に渡して、自らももう一本を手にとって飲み込む。

だが、体が修復されていくそばからまた体が破壊されていく。

（壊れて…戻って…いつまで続くんだよ!?!）

激痛に苛まれていたのはハジメだけでなく香織も同じだった。

だが、香織の視線の先には痛みで声にならない叫びを上げているハジメの姿があった。

（ハジメ…君…）

自分の体の崩壊は少しずつ収まっていき、崩壊直後よりはマシになっていった香織。

しかし、ハジメの肉体の崩壊は留まらずより一層激しくなっている。

（死なせ…ない！絶対！）

香織は無我夢中で杖を取り、杖に刻まれた魔法陣を媒介に治癒魔法を自らにかける。

「天の…息吹、満ち満ちて…！」

「香…織…何やってんだ…？」

ハジメの視界に入ったのは、ポーションを半分残した香織が自らに治癒魔法をかけているところ。

「聖浄と…癒し…を、もたらさん…——天恵」

香織は自らの体を蝕む魔力を、治癒の力として使う。

「ハジメ君…これ…を…」

香織は残ったポーションをハジメに渡し、倒れる。

「くっそ…ふざけんな…マジふざけんな、香織！」

ハジメは香織の手を必死につかみ、飛びそうな意識を保つ。

（お前が死んだら…俺が戦おうって決めた意味がねえんだよ！お前が俺を置いて死ぬなんて…絶対に嫌だ！）

ハジメは残ったポーションを取ると、それを崩壊していた手にかけて修復。

その手で香織の手を掴みながら叫んだ。

「これなら……文句ねえだろ！」

ハジメの手に付着したポーシヨンが香織の手に触れ、暴走していた香織の魔力を正常な状態に戻していく。

(そういや……魔物の肉って食ったら体が崩れるって前読んだ本に書いてたな……腹減りすぎて忘れてるとか、間抜けすぎんだろ俺……)

「う……あ、あ、っ！……ようやく収まりやがった……」

それから数十分。

崩壊と再生を繰り返したハジメの体はようやく落ち着くがその姿は以前とはまるで異なる外見になっていた。

日本人特有の黒髪は魔物の肉を食べたせいかな真っ白になり、中肉中背だった彼の体も細身ながらしっかりと筋肉がついた逞しい体に。

その上身長も10センチほど伸びていた。

「よかった……ハジメ君……生きてる」

そんな彼と手を繋いでいた香織も外見が多少変化している。

身長こそあまり伸びていないものの、体つきがより女性らしさを意識する体型に。

彼女の黒髪はハジメ同様色が変わっているが、どこか幻想的な銀髪に変化。

「……何か、お互い外見が変わっちゃったな……それに、思い切った無茶しやがって」

「う……ごめんなさい」

バツの悪そうな表情の香織を見ると、怒る気すら失せてくる。

「いや。とにかく俺達は生きてる。だけど……」

ハジメは、自分の右手に浮かぶ赤黒い線を見る。

「この線……魔物にでもなっちゃったのか？……そうだ、こういう時こそ……」

上半身を起き上がらせたハジメはポーチからステータスプレートを取り出す。

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：8

天職：錬成師

筋力：100

体力：300

耐性：100

敏捷：200

魔力：300

魔耐：300

技能・錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物分離」「+高速錬成」・魔力操作・

胃酸強化・纏雷・言語理解

「：凄い。ステータスがここまで強くなってるなんて」

ハジメのステータスは初期の光輝と同等か、あるいはそれ以上にまで跳ね上がっている。その上、新しい技能が三つも追加されていた。

「纏雷：これって、この狼の固有魔法だったやつか？」

二尾狼は電撃を飛ばして相手を焼き殺していた。

だとしたら、この狼の肉を食らったことでハジメと香織も相手の固有魔法を自らに宿したということになる。

だが、検証の結果固有魔法の特徴が多少変化していることが判明。

二尾狼のように電撃を飛ばすことはできず、あくまでも名前通り『雷を纏う』能力に絞られている。

恐らく、人間の体に宿ったことで人の身で使えるレベルまで変化したのだろう。

ちなみに、同じ魔物を食らった香織のステータスは…

|||||

白崎香織 17歳 女 レベル：10

天職：治癒師

筋力：80

体力：220

耐性：120

敏捷：190

魔力：400

魔耐：400

技能：回復魔法「+回復効果上昇」「+イメージ補強力上昇」・光属性適正・高速魔力回復・

纏雷「+電気治療」・胃酸強化・魔力操作・言語理解

|||||

「一部のステータスが俺より低い：妙だな？香織のステータスは俺より高かったはずなのに：」

元々能力の低かったハジメがここまで上がっている以上、香織のステータスは自分よりも高くなっていると予想していた。

しかし、一部のステータスはハジメが上回っているため困惑の聲が出る。

「多分：さつき水以外にも回復魔法使った影響だったりするのかな：？」

「：だめだ、理由がはっきりとわかんねえ。でも：可能性としては回復魔法を使ったこともな」

香織からステータスプレートを見せてもらったハジメは、やがて香織だけが最初から持っていた纏雷の派生技能に対して注目する。

「電気治療：纏雷の使い方は直接攻撃以外にもあるのか：ん？」

ハジメはこれまで周囲から削り取った鉱石を突然集める。

「は、ハジメ君？」

「……………香織。この状況を打破できる武器が作れるかもしれねえ」

洞窟の中を跳び回る蹴りウサギは、獲物を探して洞窟の中を進んでいた。

すると、一瞬だがウサギの視界に人影が映り：

「ドパンー！」

蹴りウサギの意識は永遠に刈り取られた。

「試し撃ちは中々：だな」

蹴りウサギを殺したのは、ハジメが作り出した新しい武器。

音速を超える速度で最短距離を突き進み、絶大な威力で目標を殺す現代兵器。

「大型リボルバー拳銃・ドンナー」である。

全長35センチ。

この階層では最高の硬度を持つ『タウル鉱石』を銃身と弾丸に使用し、さらに弾丸には同じくここで発見した燃燒石を圧縮して入れている。

「香織の「ヴァイス」はどうだ？」

「大丈夫だよ。私としてはドンナーよりヴァイスの方が使いやすいかな……」

香織が使っているのはドンナーと同じリボルバー拳銃の「ヴァイス」。

だが、レーゲンはドンナーより銃身がやや短く弾丸の燃燒石も僅かに減っているため威力自体はドンナーと比べ僅かに下がる。

その分軽いため取り回しやすく、扱いやすさではヴァイスに分がある。

「とりあえず威力に関しては申し分ないみてえだな……纏雷を使えば威力はさらに跳ね上がる」

ドンナーもヴァイスも、2人の手に入れた纏雷によつて電磁加速をさせることで小型のレールガンとして使うことが可能。

その威力は現代の対物ライフルを遥かに超える性能を誇っていた。

「さて……奴にリベンジするためには……」

そう言うと、ハジメ達は蹴りウサギを捌いて。

食事中

動き出してから数日。

ハジメも香織も蹴りウサギを食らったことで会得した新しい技能を試していた。

「新しく手に入れた技能が『天歩』に『縮地』に『空力』……それに、狼を食べても上がらなかつたステータスがまた急上昇したってことは」「ああ……恐らく、一度食った魔物から技能を得たりステータスを上げ

るのは一回限りなんだろうな」

いずれも移動系の固有魔法だが、纏雷と比べて癖の強すぎる魔法に最初は悪戦苦闘した。

だが、数日かけてどうにかコツを掴み新たな技能をどうにか自分のものにした二人は、ついに行動を開始する。

「この階層の魔物は俺たちがこの数日確認しただけで3種類…そのうち狼とウサギは食った」

「ということとは…私達が狙うべき相手はただ一つ！」

この階層の主であり、かつてハジメの腕を喰らい二人を絶望の底に叩き落とした爪熊。

「残るは…テメエだ！」

爪熊を見つけたハジメが引いたドンナーの銃声が、開戦の合図となる。

「よう、久しぶりだな…今日はあの時の礼をしに来た」

香織もハジメも、ヴァイスとドンナーを構える。

(あの時俺の腕を食い…俺たちの心まで砕いたこいつ)

(この魔物を仕留めない限り…)

「俺(私)達の心は、前に進めない！」

整理整頓、ハジメ&香織 後編

爪熊に対して先制攻撃を仕掛けたハジメと香織は、二手に分かれて攻撃をする。

「香織は右から頼む！俺は左から！」

「わかった！」

ハジメはドンナー、香織はヴァイスを持って銃撃を始める。

音速を超える攻撃に戸惑う爪熊だが、突然デタラメにその爪を振るう。

「っ!？」

ハジメの脇腹に微かな痛みが走り、見てみると僅かながら裂傷が出来ていた。

(距離はあつたはずなのに!?…いや、確かあの時も！)

ハジメの脳裏に走ったのは、最初に爪熊に襲われたときのこと。

バックステップで距離をとり、ハジメは叫ぶ。

「気をつける香織！こいつの固有魔法は爪に刃を纏わせる！」

「そっか！だからあの時ハジメ君の腕も…！」

かつてハジメを吹き飛ばし、左腕を切断した衝撃波の正体は、爪熊の放った固有魔法『風爪』だった。

「なら…！」

ハジメはドンナーをホルスターにしまい、ポケットから残していた閃光グレネードを取り出して爪熊の足元に放る。

この洞窟ならば緑光石が豊富にあるうえ、ハジメと香織の魔力も以前より増えていたため閃光グレネードの制作自体は洞窟でも簡単に行えるようになった。

そのため、使うことに躊躇いはない。

突然の強烈な光を直視した爪熊は絶叫し、目が見えない状態でデタラメに爪を振るう。

その隙を見逃すハジメと香織ではなく、ドンナーの弾丸が左腕を、レーゲンの弾丸が右腕を吹き飛ばす。

「はっ…どうだ？腕を持ってかれた気分は？」

ハジメはおもむろに爪熊の左腕を拾うと、それを咀嚼。

激昂した爪熊はハジメに迫ろうと走るが、ハジメは爪熊の背後にいた香織に目配せをする。

「俺にばっか気い取られてんじゃねえよ、バカが」

次の瞬間、爪熊の首に香織の杖が突き刺さり、香織は『纏雷』を発動。

「グルルルオオオオ!？」

本家である二尾狼には及ばないものの、高圧電流を浴びた爪熊は絶叫して動きが止まる。

その隙にハジメのドンナーが爪熊の両足を撃ち抜き、完全に動きを封じた。

手足を破壊されてもおハジメ達を睨む爪熊。

それに対し、ハジメはドンナーを向ける。

「残念だったな…あの時、俺達を殺し損ねたのが失敗だったってことだ」

ハジメの放つ弾丸が、爪熊の眉間を貫いた。

「ふう…お疲れ様、ハジメ君」

「ああ…香織もな」

ハジメ達は爪熊の毛皮を剥いでから爪熊の肉を口にしたことでステータスの向上を行った。

もともと、ハジメの場合先ほど左腕を食べたので単に空腹を治めるのが理由だが。

「…何か、思ったより達成感とかはなかったね」

「ああ…だけど、これで俺達は前に進めた気がする」

かつて自分達の心を砕いた強敵を打ち砕いたことは、ハジメ達にとって大きな前進だったと言える。

「邪魔する敵は全部殺す…そして」

「うん…翼愛ちゃん達も見つけて、私達は帰るんだよね」

ひよつとしたらまだ翼愛達はこの階層のどこかにいるかもしれない。

そんな僅かばかりの期待を胸に、2人は歩き出した。

移動

と少し歩いて居ると目の前に有る周り角から

「さてどうしましょう?」

と人の声が聞こえた。

ハジメはドンナー、香織はヴァイスを取り出して角で銃を構えた

「お?俺?た?達?を置いて?行け」

「そうはいきません。」

お姉ちゃんと合流したら腹いっぱいになりますよ」

「て?言つて?何?日??たっけかな?」

「10日ですね」

「く?花が?隠?て居た、レーシヨン?が7日め?で切れて3日目

水生活?そろそろ げ?か?い」

「そう言わないで下さい」

と女の声と弱い男の声が出た。

「俺達以外にも奈落に落ちた奴が居たのか?」

「会話を聞いて10日て言ったから多分、翼愛ちゃん達かなしれない

し優花ちゃんたちかも」

「かもしれないが声を擬態出来る固有魔法を持つて居る魔物かもな」

と会話して居ると急に会話が聞こえなくなった

「如何するハジメちゃん」

「合図で一気に出る」

「了解」

「3・2・1、GO」

とハジメと香織は角を一気に出ると其処には横に居た男女が居た。

そしてそこに居た人物は

「牙十郎君と優花ちゃん」

と香織は二人の下に行こうとしたが

「待て香織」

「如何したのハジメ君?」

「一人足りない」

とハジメがそう言う

「変身」

『font:234』ワイイ!』

と後ろから声と電信音が聞こえてハジメと香織は後ろを向いたがそこには誰も居なかったが。

急にハジメと香織の視界が縦に右回り出した。

下を向いたら

『チェ〜ンジフォーム!妖怪ヒーロー!ワイルドボーイ』

と低い姿勢で大きな腕時計をして居る白髪のポニーテールでポニーテールの髪で顔が分からないが女性と足元には黄色のサークルが有り其処には文字が有り(変身)と書かれていた。

そしてハジメは理解した。

この女性は自分たちの足を足払いして同時にサークルを完成させた。

それと女性の正体も

そしてそのまま大きな時計のベゼルを回した。

すると女性はそのまま無数の黄色の光が来て女性の体を包み込んでカウボーイの格好した黄色の猫になり何処から来たか独特なデザインの二丁のマグナムを取り

そしてハジメと香織は地面と接触して其々独特なデザインの二丁のマグナムを脳天に付けた

「ワイルドボーイ!ワイルドに見参!」

とキメ台詞を言った。

「悪いねミーの連れが今にも死にそうだから食料をわ?け?て???もしかしてハジメボーイとカオリガールか?」

「そうだ。」

だから解放して変身解除しろワイルドボーイ事鞆波・A・黒花」

「Ow、Sorry」

と言うとマグナムを離して変身を解除した。

そこに居たのは体格などは変わっておらず変わった部分は髪の色が黒から白に変わり目の色が黒から赤になった黒花だった

「久しぶりですねハジメ君と香織ちゃん」

と友達と会った感じでハジメ君に近づいた

「黒花俺達に分かるのか？」

「はい、直観ですが何とかハジメ君と香織ちゃんと分かります」

「そうかそれにしても変わって居ないな黒花」

「そうとも言えませんが。」

其れよりも助けて下さい」

と黒花は後ろを向きながら指を指した。

そこに居たのは今にも死にそうな牙十郎と優花が居た。

香織は

「うん、絶対、私達全員で帰るって……だから……！助ける」

と二人を助ける為にも走り二人の下に行った。

↳治療中↳

治療したと言ってもただポーションを飲ませただけ

「ハジメ君助かったよ」

「この恩は忘れない」

「別にそうたいそうな物じゃない。

香織と一緒に俺達を引き上げてくれた借りを返したただけだ」

「俺達？」

「しよすがねだろ此処は強い魔物がうじゃうじゃいるからな。

お陰で腕取れたわ」

とハジメは腕が無い方を見せた。

二人は絶句したが何故か直ぐに落ち着いた

「そうだよね此処じゃあ上の魔物と比べ物にもならないし」

「俺達が五体満足居られたのは黒花が居たからで黒花や生徒会長が居ない中この場所で生きられたハジメたち凄いことだな」

「そうなるわな。」

俺から質問良いか」

「何おだ？」

「アンタらはどうやって生き残れたんだ。」

此処には食えない強い魔物がうじゃうじゃ居て直ぐに干からびるぞ」

「其れは黒花のお陰なんだ」

整理整頓、黒花&牙十郎&優花

微かに有る意識で小さく聞こえる川の流れ音と水の感触で徐々に意識が戻って来た。

私が目を開けて体を起こして周りを確認する。

辺りにはお姉ちゃんやハジメ君が居なくて代わりに牙十郎君と優花ちゃんが居た。

私は直ぐに二人を川から引き揚げて万が一異世界に飛ばされても良いように地球のサバイバルポーチを持って居る。

まあお姉ちゃんのパートナーのシャルルが使える空間魔法は覚えていないのでコンパクトで小さい奴しかありませんがね（笑）

とそんなことを思っている間に無意識に折り畳み式のウツドストープの組み立てが終わり其処に燃料を入れて火打石で火を入れた。

次に私と牙十郎君と優花ちゃんの服を干す為にロープと組み立て式の組み立て式の巻き割り斧付のピッケルで物干しを作り其処に下着を残して服を干した。

次に安全を確認する為に私と一緒に行動するパートナーを呼ぶ為に私が付けている腕時計「YSPウオッチ」に「ゴロミの召喚メダル」をセットして

『カモン！ゴースト！』

と腕時計から光出して其処から黄色のボールが縦横無尽に飛び跳ねて其れが落ち着くと、其れが尻尾でコルク銃を持った猫ぽいつい何かになった。

「ゴロミちゃんよ」

そうこの子が私のパートナーはゴロミちゃん

お姉ちゃんのパートナーがシャルルの様に私のパートナーはゴロミちゃんです。

「黒花、此処何処だ？」

「さあ、何分私もついさつき目が覚めましたので分かりません」

「だよな」

「だから探索します」

「そんじゃあGO！」

「GO」

と進もうとしたら目の前に二足歩行している熊型の魔物が現れて沈黙の十秒が流れて熊型の魔物は右手をを振り挙げて振り下ろそうとしたが

「嵐脚!!」

先に嵐脚を繰り出して熊型の魔物の右手を切り落とした。

右手を斬り降ろされた熊型の魔物は少し後退して残っている左手で攻撃しろうとしたがその間に私はゴロミちゃんを頭の乗せながら熊型の魔物の頭上に移動して

「指銃!!」

と熊型の魔物の脳天に指銃を打ち込んだ。

撃ち込まれた熊型の魔物は少しフラフラ移動してうつ伏せに倒れた。

私は二人が居る拠点に持って帰った。

拠点に戻ったら二本尾の狼型魔物の群れが牙十郎君と優花ちゃんを襲いかかようとしたので私は直ぐにコートの中に入って居るハジメ君が銃を持ち二本尾の狼型魔物に二発の銃弾をぶち込んだ。

狙いは牙十郎君と優花ちゃんに噛みつこうとした二匹の二本尾の狼型魔物だ。

噛みつこうとした二匹の二本尾の狼型魔物は不意打ち気が付き弾丸を躲した。

私は

「剃!!」

剃を使いその場に消えて先程銃弾を躲した二本尾の狼型魔物の片方の頭上の上に移動して銃をピツタリに頭を付けて引き金を引いた。ゼロ距離から放たれる弾丸二本尾の狼型魔物の脳天を打ち抜きすぐさま

「剃!!」

また剃を使いもう片方の二本尾の狼型魔物の頭上の上に移動して

同じように銃をピツタリに頭を付けて引き金を引いた。

勿論先程の二本尾の狼型魔物の様に絶命した。

残りの二本尾の狼型魔物の群れは一度私から距離を取り私の事を敵と認識して威嚇をして来たが私には負け犬の遠吠えしか聞こえない。

そして二本尾の狼型魔物の群れは私に目掛けて襲い掛かったが

「剃!!」

と又同じ様に剃を使い二本尾の狼型魔物の群れをすれ違う様に一直線に後ろに行つた

すれ違つた二本尾の狼型魔物の群れはゆっくりと倒れた。

私は死んでいるか確認するとしつかりと二本尾の狼型魔物の脳天に銃弾跡があつた

あの時二本尾の狼型魔物の群れとすれ違う間に持つて居た銃で二本尾の狼型魔物の群れに一匹ずつに丁寧に脳天に銃弾を撃ち込んだ。

そして私が倒した魔物は適当に山積みして服を確認した。

折り畳み式のウツドストーブのお陰で服の濁きが早かつたので私は服を取り替えて牙十郎君と優花ちゃんも服に着させた。

そして二人が起きるまで拠点を襲つて来る魔物を狩つて待った。

数分後

「うう〜うん」

と牙十郎君が意識が戻り始めた。

そして体を起こすと

「おはよう、牙十郎君」

「ああ、おはよう黒花く?ん?」

と少し驚いた顔をしていた。

「どうかしたの?」

「いや、後ろの其れは?」

「これ、私達の事を襲つて来た此処の階の魔物たちだよ」

「そ、そうですか。」

それと此処の魔物の強さは?」

「そうだね。」

大体上の階層魔物の目じやない」

と私は上を指しながらそう言った。

「う、上ってあのベヒモスですか」

「うん」

「まじか」

「う、ううくうん」

「優花ちゃんが起きそう」

「本当だ」

と言つて居ると優花も起きた。

「黒花に牙十郎君、此処は？」

「分かりません」

「俺もついさつき起きたばかりだから分からない」

「そう、所で後ろの其れは」

と私の後ろに指を指した。

私と牙十郎は振り向くと私が倒した魔物の山が目映った。

「ああ此れ

私が倒した魔物の山。

因みに此処の魔物は上の比じやないから」

「そうですかて、まさか上よりも強い魔物倒したの」

「はい」

「ちよつと待て私達此処の世界に着て一か月もたつてないだよ」

「そうですか？」

「何言つて居るの顔辞めてくれる」

「確かに俺達はこの世界に来て一か月この世界の人間の限界の六十五階層にたどり着くのは無理でその六十五階層よりも倒すことなんてできないはず。」

会長がプリキュアに変身したと事に関係有るんですか？」

「そうですね。」

此処じやあ隠し事は命取りになりますの全部話します」

と私は両親や自分の事其れとゴロミちゃんの話をした。

「大体わかりました。」

黒花君の両親は異世界召喚された経験がありその血を姉妹である会長や黒花君も持って居る事ですね」

「自分達始めての経験だと思っていたのにまさか経験者が居た何て其れを早く言いなさい」

「いや、聞かなかったので」

と牙十郎君は私の説明を聞いて簡単に纏めた。

優花は頭を抱えていた

「それで此処をどうやって脱出考えませんか」

と牙十郎と優花は顔を青くした

「此処にはやばい魔物がうじゃうじゃ居て」

「その上日帰り感覚でオルクス大迷宮に挑戦しましたので食料が無い」

「食料ならありますよ」

と私はポーチからフリーズドライ食品とカロリーメイトを出した

「本当ですか」

と牙十郎と優花がグイッとこっちに来た。

「其れに此れって地球の奴ですよね」

「うん、紙コップにシリコン製の耐熱鍋もあるから」

「ありがとうございます」

「ありがとう」

「其れで私が持って居る食品は大体私一人分で一週間持つようにしているから。」

食べる回数を減らして更に私は魔物肉を食べるとし?」

私がそう言うと二人は

「待て待て其れって黒花ちゃんが魔物肉を食べて自殺するて事?!」

「そんな事しなくていいから一緒に戻ろ」

と二人は慌てながら止め来た。

「自殺するつもりもありません私には此れが有りますので」

と「YSPウオッチ」「ワイルドボーイ変身メダル」を見せた。

そして「ワイルドボーイ変身メダル」を「YSPウオッチ」にセツトして

『チェンジフォーム！妖怪ヒーロー！ワールドボーイ』

「ワールドボーイ！ワールドに見参！」

に変身した。

「今のミーは魔物と同じ存在、だから魔物肉を大丈夫だぜ」

「そ、そうゆう事なら」

「うん、お願いします」

「サンキュー」

で早速なんだが魔物肉を食べてみる。

もし食べてみて害が無かったら」

「俺達の食料になるですね」

「YES」

そんじやあまずは」

とワールドボーイ言いながら魔物の死体の山から熊型の魔物を引っ張り出した

「其れなら私が解体するわ」

と優花が優先して解体した。

そして解体した熊型魔物肉は

「此れどうやって焼く？」

「それならミーに任せな」

とワールドボーイは変身を解除して黒花に戻りポーチから小さな金網と塩コシヨウの瓶を取り出した。

「はい」

「はいって」

「サバイバルでは必要でしょ」

「そうだけど」

「火はウツドストープで」

「はいはい、牙十郎君此れサイコロにして」

「了解した」

と優花は熊型魔物肉を空中に投げて牙十郎は居合切りの構えして自分と同じ目線になった瞬間、抜刀して熊型魔物肉はサイコロになり小さな金網に乗ってそのままウツドストープの火で焼いた

「はい焼き終わったよ」

「待って居たぜ」

焼いている間に黒花はワイルドボーイ変身して居た。

「そんじやあ頂くぜ」

と熊型魔物肉のサイコロステーキを食べた。

「如何味は？」

「まずいな。」

人間にはお勧めできない奴だわ」

「だよね魔物肉は食べてはいけないって言って居たものね」

と軽く会話しながら最後の奴を食べて数秒後に

「うぐ!？」

とワイルドボーイが急に腹を抱えて苦しみ出した。

「ち、大丈夫、やっぱり食べちゃたら駄目だった奴だよね」

「吐かせる」

「す、ストップ。」

お腹がビツクリしただけだ」

とケロツと治った。

「良かった。」

黒花が死んだら私達で生き抜くなんてできそうにも無いから」

「俺も同じだ」

「結論から言うると此れは人間が食べたらず死ぬ奴だぜ」

「やっぱりか」

「となると私達の食料は」

「ミーンが持って来た奴だぜ」

「だよね」

「迷惑掛けて済まない」

「気にするな」

と言いながら変身を解除して

「困った時は助け合いですよ」

とワイルドボーイから黒花に戻ると

「ちよ、く、黒花」

と優花が驚きながら私に指を指した

「どうかしました」

「か？か、か」

「か？」

「黒花君一回川に行つて自分の顔を見た方が良いぞ」

「？分かりました」

と牙十郎のゆう通り川に行つて自分の顔を見ると白髪のポニーテールに赤眼の自分が写つて居た。

「見た目が変化しただけですが？」

「いやいやワイルドボーイに変身する前は黒髪の黒目だったのに変身解除したら白髪の赤眼になつて居たのよ」

「と、兎に角ステータスプレートを」

「分かりました」

とステータスプレートを取り出して自分のステータスを見た

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

鞆波・A・黒花

17歳、女

レベル10

天職：魔導士

筋力：300

体力：300

耐力：250

敏捷：300

魔力：200

魔耐：250

技能：双銃、先読、乱撃、縮地、格闘術、闇魔法適正、気配感知、重複詠唱、気配遮断、

魔力操作、胃酸強化、風爪、見稽古、言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

|| || || || || || || || || ||

「ねえ」

「何ですか」

「これ魔物の固有魔法入って居ない」

「確かに人間は陣や詠唱でしか魔法発動しか出来ないに対して魔物は直接操作出来る。」

その上に魔物は固有魔法を必ず一つ持って居ると言われている。

つまり魔力操作が魔物の直接操作の原因で風爪は熊型の魔物は固有魔法かな」

「試しにやってみる？」

「お願いします」

と私は立ち上がり右腕に力を籠める右腕に血液がものすごい勢いで流れていくのが分かるそして力が溜まった右腕を挙げて其のまま振り下ろした。

振り下ろした右手から風の鎌鼬が繰り出された。

牙十郎と優花は驚きが止まらなかった

黒花は右手を握ったり開いたして感触を確かめていてそれが終わると

「二人ともそろそろ行きましょう」

と言ってウツドストーブの火を消して片付けてポーチに仕舞い休憩していた場所から移動した

牙十郎も付いて行く。

「ち、ちよつと待って」

優花も遅れて黒花と牙十郎を追いかけた

整理整頓、黒花&牙十郎&優花と合流

私達は此処を探索する事になった。

取り敢えずの目標はお姉ちゃん、アテナちゃん、雷槍君、ハジメ君、香織ちゃんを見つけたる事と更に此処の魔物を私に抜きで牙十郎君と優花ちゃん倒す事

理由は単純で私だけなら此処を簡単に切り抜ける事が出来るが今は牙十郎君と優花ちゃん居るので二人を守りながらは厳しいと判断して今は私の下で探索のなか特訓中

特訓内容は技能抜きで索敵しながら移動して発見したら私に報告して答え合わせてから戦闘開始

戦闘フォーメーションは最初は私が前衛で牙十郎君と優花ちゃんが後衛で援護射撃して弱ってきたら交代して私の援護無しで魔物を倒すが今の特訓になっている。

最初は二人ともてこずっていたが今は何とか倒せるが、今の私達が抱えている問題は食料問題だ

今の所は二人とも一日二食で何とか生きているが残り四日間で食料が尽きてしまう

ので今は一刻も早くお姉ちゃんを見つける事が一番の目標になって居る

「ではお姉ちゃん再会レッツゴー」

「「おおおお」」

7日後

私は今頭にゴロミを乗せて右肩に牙十郎君を左肩に優花ちゃんを体を支えながら歩いてた

四日前で食料が尽きて食事は水だけになった。

最初の三日前は体に変化が無かったが

二日前の半日で優花ちゃんが戦闘中に急に倒れて私と牙十郎君で素早く倒して簡単に診断すると疲労と食事不足で倒れたのだが此処では重症になってしまっただが今は早くお姉ちゃんを見つけないといけないと優花ちゃんを私の肩で体を支え探したが見つからず。

今日になり牙十郎君も歩くのが困難になった。

そんな中でも魔物は襲って来るので私は牙十郎君と優花ちゃんを地面にやさしく置いて五秒で片づける。

そして私は二人の容態を見る

二人とも疲労と食事不足衰弱していた。

そして吐いた言葉が

「さてどうしましょう?。」

「黒花、如何するにも食料は切れているのに」

こうゆう時は切り捨てる事も大切ですがお姉ちゃんならまず見捨てる事はしないですね。

ですが私の特典はバリバリの戦闘ばかりで誰かを助ける事が

と考えていると

「お?俺?た?達?を置いて?行け」

と牙十郎君が自分を置いてけと言つて来た

「そうはいきません。」

お姉ちゃんと合流したら腹いっぱいになりますよ」

「て?言つて?何?日??たっけかな?」

「10日目ですね」

「く?花が?隠?て居た、レーション?が7日め?で切れて3日目で水生活?そろそろ げ?か?い」

優花ちゃんも諦めだした。

「そう言わないで下さい。」

兎に角私g?。」

と言いつ切る前に

「俺達以外にも奈落に落ちた奴が居たのか?」

「会話の中で10日目と言つたから多分、翼愛ちゃん達かなしれないし優花ちゃんたちかも」

と人の声が聞こえた。

男女の声でお姉ちゃんと優花ちゃんの名前を言つて居た。

私は口到人差し指でを当てて静かにと合図を送つてゴロミちゃんを近くに隠れた事を確認して天井に張り付いて様子を伺つた

暫くすると角から一気に男女が出てきた。

そしてそこに居た人物は

「牙十郎君と優花ちゃん」

出て来た人物はハジメ君と香織ちゃんの気配していたが見た目が似ていが薄つすらと面影はあつた。

私は検証するために様子を伺いて

「牙十郎君と優花ちゃん」

と香織？は二人の下に行こうとしたが

「待て香織」

「如何したのハジメ君？」

「一人足りない」

とハジメ？がそう言うのと

「変身」

『ワイー！』

〔YSPウオッチ〕に〔ワイルドボーイのメダル〕をセットして

『チェ〜ンジフォーム！妖怪ヒーロー！ワイルドボーイ』

と天井から地面に着地した時に低い姿勢を取り男女の足元を足払いで狩って同時に足元には黄色のサークルを作った

そしてハジメは理解した。

この女性は自分たちの足を足払いして同時にサークルを完成させてそしてそのまま大きな時計のベゼルを回した。

隠れていたゴロミが無数の光になり私に纏わりついてカウボーイの様な猫になりゴロミのコルク銃が二丁のマグナムになり私は其れを取る。

そしてハジメ君？と香織ちゃん？二丁のマグナムを脳天に付けた

「ワイルドボーイ！ワイルドに見参！」

とキメ台詞を言った。

「悪いねミーの連れが今にも死にそうだから食料をわ？け？て」

と言いつ切る前に私は確信した。

「もしかしてハジメボーイとカオリガールか？」

「そうだ。」

だから解放して変身解除しろワイルドボーイ事鞆波・A・黒花」
「Ow、Sorry」

「とゆうわけ」

「成程な。」

大体理解した」

「其れで次はハジメ君の番だよ」

「ああ、分かって居る」

「俺達が助かった理由は此れのお陰だ」

とバスケツトボールぐらいの青白く輝く結晶を取り出した。

「此れは？」

「俺にも分からなかったから取り敢えずポーシヨンと名付けた。

此奴のお陰で俺達は生きている。

無かったら今頃クマ公に食われているわ」

「良かったね。」

所でハジメ君の白髪と赤眼は」

「ああ、お前が考えている通り魔物を食べた」

「だよね。」

どうやって乗り越えたの？

私はワイルドボーイに変身して乗り越えたよ」

「俺達は、まあ、危うく死にかけたんだが、ポーシヨンのお陰で助かった」

「ポーシヨンで？」

優花ちゃんが尋ねると

「ああ此奴を飲めば怪我や体力はだけじゃなく魔力も回復する。

体が破壊される前にこいつを飲んだからギリギリ助かったんだ。

まあ、それでも死ぬほどの激痛が長時間続いたがな。

要は破壊と再生を繰り返して身体が再構成されたようなもんだ。

おまけにステータスだけじゃなく、魔物の持つ魔力操作や技能も習得できた」

そう言うハジメに牙十郎君は何かを考え込む表情をした。

「どうしたの？ 牙十郎」

それに気付いたハジメが問いかけると、

「ハジメ君。つまり、魔物を食べれば強くなれるとっ考えて良いんだな？」

牙十郎君はそう言う。

「まあ、簡単に言えばそうだが……………」

すると、白崎さんは決意をした表情をして、

「ハジメ君、俺にも魔物を食べさせてくれ！」

と牙十郎君はハジメ君に土下座する

「なっ!？」

牙十郎君の言葉にハジメ君は驚愕の声を漏らした。

「何言ってる!？聞いてたのか？いくら神水があると言っても想像を絶する苦しみなんだぞ！」

ハジメはそう言うが、

「分かって居るだかこのままじゃ俺は足手まといになる」

「例えそうだとしても、お前は必ず俺が護ってやる！ だから……………！」

ハジメ君の言葉に牙十郎君は首を横に振り顔を上げて。

「ハジメ君の気持ちは嬉しいが俺は〇〇高校の副会長白狼 牙十郎だ」

自分の役職を言う。

すると、

「南雲、私も食べる」

優花ちゃんもそう言い出した。

「優花？」

「私達も此処の魔物と戦ったけどに手も足も出なくて。

殆ど黒花ちゃんのお陰で此処に居る様なもので、ここを脱出するために強さは必要だから……………」

「それは否定しねえが……………」

「自分の身ぐらいは自分で護るよ！」

「わーっただよ。好きにしな」

割と投げやりに許可を出すハジメ。

すると、ハジメは私の方を向き、

「黒花は如何する?」

そう聞いてきた。

「ワイルドボーイになれば食えるし今じゃなれたから」

「そうか」

ハジメはそう言うのと、今まで仕留めた魔物から比較的新しい二尾狼の肉を切り分けようとしたが。

「それ私ができる」

と優花ちゃんが自ら言った

「そうか」

とハジメはそう言うのと後ろに下がって代わりに優花ちゃんが出て慣れた手つきで二尾狼の肉を切り分けた

「ハッキリ言うが味もクソ不味いからな、そっちの方も覚悟しておけよ?」

ハジメは一応注意しておく。

そして、私の金網で二尾狼の肉を焼き塩コシヨウで味付けして焼き終わると

「クソ不味いのは変わらねえが、ちったあマシだな。

肉を口に入れたら神水で流し込め。

いいか? 肉を喰ったら絶対に神水は飲め! 死ぬぞ!」

重ねて注意するハジメ。

錬成で作ったコップで神水の溜まり場から神水を掬って肉の傍に添える。

牙十郎君と優花ちゃんは牙十郎君は魔物の肉に手を伸ばす。

それを見た優花ちゃんも少しおっかなびつくり肉に手を伸ばした。

2人は口元に持ってきた肉に一瞬躊躇したが、思いつきり目を瞑って、ほぼ同時に肉に噛みついた。

肉の塊を口に含み、口を押さえながら咀嚼。

度々吐きそうな表情を見せながらも、コップに入った神水を煽ると、無理矢理飲み込んだ。

呑み込んでから少しは何ともなかったが、

「……………あゝっ!!?」

「……………うぐつ!!?」

ほぼ同時に2人に異変が起こった。

「あゝあゝ……………!!? ぐあああああああああああああ
あゝ!!?」

「いぎつ……………!!? ぎいあああああああああああ
!!?」
悲鳴を上げる2人。

体の各所から血が噴き出し、更に体中の骨が砕けるようにバラバラになりながらも、神水の効果で即座に修復され、それがまたバラバラになる。

「ぎあつ……………!!? あああああああああああ
!!?」
「いぎつ……………!!? ぐあああああああああ
!!?」

牙十郎君と優花ちゃんは二人とも苦しみお互い手を取った

「ゆう?か?さん……………」

「き?ば?じゆ?ろ?く?ん」

やがて、徐々に牙十郎君と優花ちゃんの悲鳴が小さくなっていき、やがて落ち着いた。

「はあ……………はあ……………」

「はああああ……………ふうふう……………」

それぞれが息を整えている。

改めて見ると、2人にもハジメと同じような変化が起こっていた。

牙十郎君とは髪がハジメと私の様に同じように白く染まり、瞳も赤くなり、優花ちゃんは元々染めているらしいので栗色の髪は変わらないが、その根元は僅かに白くなっていて、瞳も同じように赤くなっている。

そして、二人とも私には無かった体の変化があった。

優花ちゃん体付きがより女らしくなり、大人の色気と言わべきものが出てきているのだ。

スタイルも良くなっており、雫ちゃんに迫るほどだ。

牙十郎君もハジメ君と同じ位体付きが良くなっていた。

訳アリマシマシの吸血鬼

優花ちゃんと牙十郎君が魔物肉を食べてパワーアップして上に行く道を探したが見つからず代わりに下に行く階段を見つけた。

私達は下に行く事にした。

どうやら真オルクス大迷宮は階層ごとにテーマがあるようだ。

火気厳禁のタールの海の中でサメと戦ったかと思えば、

別の階層は階層全体が毒霧で満ちいて毒霧の中から毒鱗粉を撒く蛾が居たい

毒液を吐き出してくる虹色のカエルが存在する猛毒マシマシの階層だったり。

また地下迷宮なのに物凄く蒸し暑い上、鬱蒼としてまるで密林みたいな階層に出てそこは、樹上では巨大なムカデがカサカサと這いまわっていた。

その上、その巨大ムカデは、いきなり頭上から降ってきたかと思うと、体の節ごとに分離してバラバラになって襲って来た。

他には密林の樹木に擬態して襲ってくる樹の魔物がいた。

いわゆるトレントという奴だ。

このトレントモドキ、ピンチになると頭部をわっさわっさりと振り赤い果物を投げつけて来たのだが、これには全く攻撃はなく、皆で試しに食べてみたのだが、これが、血生臭い魔物肉に慣れた舌にはめっちゃくちや美味かったのだ。

我を忘れて数十分硬直してしまう程に、ちなみに見た目はリンゴだったが味はスイカによく似ていた。

実に、何十日ぶりかの新鮮な肉以外の食い物、ましてそれは瑞々しい天上の果実である。

完全に狩人と化した全員は、トレントモドキを狩り尽くす勢いで襲いかかり

存分に収穫を、果実の実りを満喫する、迷宮攻略を再開した時には、既にトレントモドキはほぼ全滅していた。

そんな感じで階層を突き進み、気がつけばここまでやって来ていた。

ちなみに、現在の彼らのステータスはこうである

|||||

南雲ハジメ

17歳 男

レベル：49

天職：錬成師

筋力：880

体力：970

耐性：860

敏捷：1040

魔力：760

魔耐：760

技能：錬成「+鉱物系鑑定」「+精密錬成」「+鉱物系探査」「+鉱物分離」「+鉱物融合」「+複製錬成」、魔力操作、胃酸強化、纏雷、天歩「+空力」「+縮地」「+豪脚」、風爪、夜目、遠見、気配感知、魔力感知、気配遮断、毒耐性、麻痺耐性、石化耐性、言語理解

|||||

白崎香織

17歳 女

レベル：49

天職：治癒師

筋力：500

体力：600

耐性：650

敏捷：500

魔力：1200

魔耐：1200

技能・回復魔法「＋回復効果上昇」「＋回復速度上昇」「＋複数同時
発動」「＋イメーシ補強力上昇」「＋浸透看破」「＋範囲回復効果上昇」
「＋遠隔回復効果上昇」「＋状態異常回復効果上昇」「＋消費魔力減少」
光属性適性「＋発動速度上昇」「＋効果上昇」「＋持続時間上昇」「＋
連続発動」、高速魔力回復「＋瞑想」、魔力操作、胃酸強化、纏雷・
天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」、風爪、夜目、遠見、気配感知、魔
力感知、気配遮断、毒耐性、麻痺耐性、石化耐性、言語理解

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

園部優花

17歳 女

レベル：49

天職：投術師

筋力：700

体力：650

耐性：500

敏捷：1300

魔力：900

魔耐：900

技能・投擲術「＋投擲速度上昇」「＋飛距離上昇」「＋遠隔回収」「＋
遠隔操作」、火属性適性「＋消費魔力減少」「＋発動速度上昇」「＋効果
上昇」「＋属性付加」、雷属性適性「＋消費魔力減少」「＋発動速度上昇」
「＋効果上昇」「＋属性付加」、気配感知、魔力操作、胃酸強化、纏雷、
天歩「＋空力」「＋縮地」「＋豪脚」、風爪、夜目、遠見、魔力感知、気
配遮断、毒耐性、麻痺耐性、石化耐性、言語理解

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

鞘波・A・黒花

17歳、女

レベル10

天職：魔導士

筋力：900
 体力：900
 耐性：700
 敏捷：900
 魔力：750
 魔耐：750

技能：双銃、先読、乱撃、縮地、格闘術、闇魔法適正、気配感知、重
 複詠唱、気配遮断、魔力操作、胃酸強化、風爪、見稽古、纏雷、天歩
 「十空力」「十縮地」「十豪脚」、夜目、遠見、魔力感知、毒耐性、麻痺
 耐性、石化耐性、言語理解

白狼 牙十郎

17歳 男

レベル1

天職：劍士
 筋力：1000
 体力：1000
 耐性：800
 敏捷：1000
 魔力：500
 魔耐：500

技能：劍術、二刀流、神速、縮地、先読、限界突破、フェンリルの
 加護、気配感知、魔力操作、胃酸強化、纏雷、天歩「十空力」「十縮地」
 「十豪脚」、風爪、夜目、遠見、魔力感知、気配遮断、毒耐性、麻痺
 耐性、石化耐性、言語理解

|||||

下の階層に降りる事に私、優花ちゃん、牙十郎君の武器が壊れてハ
 ジメ君が新し武器を作ってくれる

私のはマテバM2007をモデルにしてハジメ君のオリジナルな

強化が程化さえている。

尚私の為に二丁作ってくれた。

色は白と黒だ

ハジメが付けた名前は白い方が〔Wei・er Zauberer〕で黒い方が〔Schwarze Hexe〕だ

ハジメ君に意味を聞いたら〔Wei・er Zauberer〕は白い魔法使いで〔Schwarze Hexe〕が黒魔女だそうだ

優花は投げナイフの他に投げられる物なら何でも技能補正かかる事が分かりブーメランに手裏剣、苦無に槍、其れと使い捨てのグレネードなど作った。

牙十郎君此れと言って刀の形の変更点は無いけど使っている鉱石が変わった。

私達が使っている武器の鉱石はこの世界で二番目で固い鉱石タウル鉱石を使っている

因みに世界一固い鉱石はアゼンチウム鉱石だそうだ。

私達はこの五十層で作った拠点にて鍛錬を積みながら少し足踏みをしていた。

階下への階段は既に発見しているにも関わらず。

ここまで駆け足、特に直上の四十九階層でかなりの激戦が展開されたので、

休息したいというのもあったのと、

それにこの五十層は他の階層と比べると明らかに異質だったからだ。

というのも、まずこの階層には魔物が一体も存在せず。

脇道の突き当りにある空けた場所に荘厳な両開きの巨大な扉があり、

その扉の脇には二対のサイクロプスのレリーフが半分壁に埋め込まれるように鎮座していたのだ。

「明らかに何か仕掛けがありますねこれ？」

私はそう呟く。

「この石像って動き出しそうよね？ 多分、扉を開けようとする動き

き出すんじゃない？ 門番みたいにさ」

「さながら中ボスの『門番ゲートキーパー』ってか？」

香織ちゃんの言葉の後にハジメがそう言うと、そのまま扉に向かって歩いていく。

私達は何が起きてもいい様に身構える。

ハジメが扉に触れるがまだ何も起こらない。

しかし、ハジメが押ししても引いても扉はビクともせず、仕方なく錬成を行使しようとした瞬間、バチバチツという音と共にハジメが弾かれた。

「うおっ!？」

「ハジメ君!？」

吹き飛ばされたハジメが後ろに倒れ、白崎さんが駆け寄る。

扉に触れていたハジメの手が煙を上げている。

白崎さんは慌てて回復魔法を行使した。

すると、

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

野太い雄叫びが部屋中に響き渡った。

ハジメと白崎さんは咄嗟に飛び退き、警戒する。

「ハッ！ 予想通りか！」

そう言うハジメの視線の先で、扉の両隣りに掘られていた2体の一つ目巨人が表面の鉋石辺を撒き散らしながら動き出そうとしていた。

その姿はまんまサイクロプスと呼ぶべき風貌だ。

埋まっている下半身を抜き出し、侵入者を排除しようとして動き出す。

その瞬間、

「ドパンツ！ドパンツ！ドパンツ！」

「ザシュツ！ズガンツ！ドパンツ！」

4種類の音が鳴り響いた。

三つの「ドパンツ！」の方はハジメ君と香織ちゃんと私の「ドンナー」〔Weier Zauberer〕「ヴァイス」で右のサイクロプスの一つ目を撃ち抜き、頭を爆ぜさせた音。

「ザシュツ！ズガンツ！ドパンツ！」の方は園部さんが背中に背

負っていた投げ槍に雷魔法を付与して投擲し、左のサイクロプスの目を貫いて、牙十郎君の刀での風爪、私の「Schwarze Hexe」銃弾の後ろの壁に礫にした音だ。

「哀れだな……………」

「あはは……………」

いつから設置されていたのかは知らないが、少なくとも百年単位の年月が経っているだろう。

漸く役目を果たす時が来たと張り切っていたのだろうが、両者とも登場から僅か数秒で退場することになったのだ。

哀愁が漂わないでもない。

「悪いが、空気を読んで待っていてやれるほど出来た敵役じゃあないんだ」

「隙だらけだったから、つい……………」

ハジメと優花ちゃんはそう言う。

私達は状況を見てチャンスと思ったから攻撃しただけだ

どちらが酷いかは分からないが……………

すると、ハジメは扉にある二つの窪みを見て、『風爪』でサイクロプスの体内から魔石を取り出す。それを扉の窪みにはめ込むとピツタリとはまり込んだ。

直後、魔石から赤黒い魔力光が迸ほとばしり魔法陣に魔力が注ぎ込まれていく。

そして、パキヤンという何かが割れるような音が響き、光が収まった。

「思った通り……………！」

ハジメはそう言うのと扉に手を掛ける。

すると、ゆっくりと扉が開いた。

扉の奥は真っ暗で何も見えない。

私達は『夜目』の技能があるので見えているかもしれないが。すると、ハジメは扉を大きく開けた。

その時、

「……………だれ？」

女の子の声が聞こえた。

「誰か？そこに居るの?？」

「お願い？私を?？」

すると、ハジメが目を見開き、

「すみません間違えました」

と言いながら扉を閉じろとした

あんまりのでき事に

「まっ?!」「待って?」「待て待て!」

と香織ちゃん、牙十郎君、優花ちゃん、謎の少女が待ったを掛けた。
「待ったと言ってもこんな奈落の底の更に底で、明らかに封印されているような奴だぞ。」

絶対ヤバイって。

見たところ封印以外何もないみたいだし……脱出には役立ちそうもないし、スルーするだよ普通」

「そうだけでも黒花が接触しているし」

「えっマジ」

とハジメが謎の少女の方を見ると確かに黒花が謎の少女に接触していた。

「えつと名前は何ですか?」

因みに私の名前は鞆波・A・黒花です」

「できれば使いたくないけどアレーティア・ガルディエ・ウエスペリ
ティリオ・アヴァタール」

「あ、まレーテリム「違うアレーティア・ガルディエ・ウエスペリ
リオ・アヴァタール」

「封印理由は?」

「私、先祖返りの吸血鬼……すごい力持ってる……だから国の皆のため
に頑張った。でも……ある日……家臣の皆……お前はもう必要な
いって……おじ様……これからは自分が王だって……私……それで
もよかった……でも、私、すごい力あるから危険だって……殺せない
から……封印するって……それで、ここに……」

「どっかの国の王族だったかな?」

「……（コクコク）」

「殺せないとは？」

「……勝手に治る。怪我しても直ぐ治る。首落とされてもその内に治る」

「それは凄いですね。」

他には？」

「魔力、直接操れる……陣もいらぬ」

今まで食らったことない攻撃がなのかそれとも再生に魔力を使つたのかどちらなのか分からないが肩で呼吸していた。

「最後にここから……この迷宮から出られる方法知ってる？」

「それは……知らない」

「分かりました仲間と相談しますので少し待つてください」

と皆の下に戻った。

「名前はまレーテリま・かろてりれ・うれずへいテリいを・まうまターろ」

「待て待て黒花さん、殆ど名前を間違えています」

「そうだ正しくはアレーティア・ガルディエ・ウエスペリテイリオ・アヴァタールだ」

「すみません私より長い名前は苦手なんで」

「とり合えず長いがアレーティアで呼びましょ」

「はい」

「そうだな」

「俺も賛成です」

「私も其れで良いよ」

とアレーティアの呼び名を決めて

「先程アレーティアは再生能力有の魔力の直接操作持ち」

「確かに有力だが、絶対何かあるぞ」

と皆でアレーティアの方を見た

「……お願い！……助けて……」

とアレーティアが助けを求め。

その声からは必死さが伝わってくる。

暫くするとハジメ君がアレーティアの方に行きアレーティアを封印されている立方体に触ってハジメが私達に振り返る。

「なあ……………」

ハジメが何か言おうとした時、

「ハジメ君のしたい様にすればいいよ」

香織ちゃんが笑みを浮かべながら言った。

「ハジメ君には、ハジメ君らしい選択をして欲しい」

「それに、ここまで必死になってる女の子を放っておくのも、何か後味悪いしね……………」

香織ちゃんという言葉に優花ちゃん続き、

「俺も反対はしない。罨の可能性も無い訳じゃないが、この子の様子を見る限りその可能性は低いと思う」

「罨が有ったら壊せばいいですし」

全員がそう答える。

ハジメが軽く笑みを浮かべ、女の子が封印されている立方体に錬成を掛けた。

立方体赤い電を出した

「ぐっ、抵抗が強い！……………だが、今の俺なら！」

ハジメは更に魔力をつぎ込む。

そこまでやってようやく魔力が立方体に浸透し始める。

ハジメは更に魔力を上乗せすると女の子を封じる周りの石が徐々に震え出す。

「まだまだあー！」

少女はハジメの迸る紅い魔力を目を見開きながら見ている。

直後、女の子の周りの立方体がドロツと融解したように流れ落ちていき、やがて体の全てが解き放たれ、女の子は地面にペタリと女の子座りで座り込んだ。

どうやら立ち上がる力が無い様だ。

ハジメも座り込み息を荒くしている。

どうやら全魔力を使い切ったらしい。

ハジメが神水の入った容器を取り出し、口に含もうとした所で、そ

の手が金髪の少女に掴まれた。

その女の子は真っ直ぐにハジメを見つめ、

「……………ありがとう」

震える声で小さく、しかしハッキリとそう告げた。

ハジメは照れ臭くなつたのか顔を背ける。

すると、

「……………名前、なに？」

そう言えば自己紹介もしてなかったな。

「ハジメだ。南雲 ハジメ。お前は？」

其々自己紹介すると、はアレーティア何度も「ハジメ、ハジメ、」とその名を心に刻みつけるように何度も繰り返した

「人の名前を一生懸命に覚えて所悪いが、取り敢えずだ……………」

「？」

ハジメは着ていた外套を脱ぎだしてそれをユエに差し出す。

「これ着とけ。いつまでも素っ裸じゃあなあ」

「……………」

言い忘れたがユエは何も着ていない。
元々裸で封印されたのか、それとも服が風化してしまったのか。
其処は分からなかった

「ハジメのエッチ」

「……………」

何を言っても墓穴を掘るだろうと予想出来ているのか押し黙って
神水を飲むハジメ君。

すると、まるでアレーティアちゃんとハジメの間を遮るように香織
ちゃんが割って入った。

「初めまして、アレーティアちゃん！ 私は白崎 香織！ ハジメ君
の“恋人”だよ!!」

明らかに『恋人』を強調して言う香織ちゃん。

その言葉にユエが青天の霹靂の如き衝撃を受けて目を見開いてい
る。

「……………そう、私はアレーティア。」

「ハジメ」に助けられた『女』

しかし、すぐに真つ直ぐに見つめ返すとそう言い返した。

その言葉に白崎さんはムツとすると、

「そうなんだ。助けてもらったって事は、ハジメ君にとってアレーティアちゃんは『娘』みたいな存在って事だね……………」

ニコニコと笑いながらも二人の間に火花が散っているように見えるのは決して気の所為では無いだろう。

「……………修羅場？」

優花ちゃんが二人の様子を見てそう零す。

「だな……………」

牙十郎君はその言葉に同意する。

その瞬間、

「！！！！！！！！！！」

アレーティア以外同時に何かに反応した。

ハジメは距離が近かった香織ちゃんとアレーティアちゃんを片腕で強引に抱え、私、優花ちゃん、牙十郎君はその場を全力で飛び退いた。

その直後、天井から巨大なものが落下してきて目の前に着地する。

砂煙を巻き上げて現れたそれは、一言で言うなら巨大な蠍。

ただし尾が2本あり、鋏も四本だ。

「上等だ。…………殺れるもんならやってみろ」

ハジメは白崎さんとユエを降ろすと、ポーチから神水を取り出すとユエの口に突っ込んだ。

整理整頓 i n アレーティア

「その後私がワイルドボーイに変身して皆で蠍型の魔物戦闘して」

「翼愛達が乱入して来た」

「成程ね。」

御免ね。

直ぐに合流できなくなってる」

「別に気にしてないから良いぞ」

「そうですね」

とハジメ君と黒花と今までの出来事を話し合って

「其れで気になっている事が在るけど良いかな」

「何だ？」

「何でしょ？」

と私はハジメ君と黒花は一回離れた。

カルボナーラを食べ終わってココアを飲んでいるアレーティアに近づいた

「アレーティアちゃん」

「何？」

「アレーティアちゃんて魔法得意？」

「うん、得意」

「具体的には？」

「全属性の魔法に適性が有って詠唱も魔法陣も無しで発動できる」

とアレーティアちゃんがドヤ顔決めた。

「其れは全属性に適性が無い俺への当てつけか？」

何故かハジメ君がキレている。

「そ、それじゃあ次にアレーティアちゃんは王族だったんだよね」

「うん」

「どうゆう流れ王になり、どうゆう理由で封印されたの？」

「其れは十二歳の頃に先祖返りで力に目覚めて？その時からずっとこの姿。」

十七歳の時には吸血鬼族の王位に付いて居た。

二十三歳のある日、突然叔父様が王位に就く事になって私は化け物として処刑される事になった。

でも再生の力で死ぬ事は無かった。

最後には封印される事になって気が付いたらあの部屋に」

「成程、だからあんな場所に居たわけだ。

ってことはさっきのモンスターとの戦いも放っておいて平気だったのか？」

「あの時は再生のに必要な魔力が無かった」

「魔力が有れば一瞬でチリににされない限り再生できる？なんだそりゃ」

とハジメ君がぼやいている間、私は皆が出してくれた情報を整理整頓して仮説を組み立てた。

「ちよつと良いかなアレーティアちゃん？」

「何？」

「多分だけどアレーティアちゃんを簡単に殺す方法を私、知って居るかもしれない」

「！！！！！！！！」

と私が吐いた言葉に此処にいる全員が驚いている

「どうゆう事だ。

翼愛」

「教えて欲しいな、ヨクアイチャン」

ハジメ君と香織ちゃんが私に殺意を向けて来た。

香織ちゃん片言になつて居た。

「其処は詳しく話すから。

ねえアレーティアちゃんさっきの会話で「あの時は再生のに必要な魔力が無かった」て言ったよね」

「うん」

「その再生の力って魔力に依存しているよね」

「？うん」

と間合いを開けてアレーティアちゃんは私の質問を返した。

「ちよつと試したい事が在るから手出してくれる」

「分かった」

とアレーティアちゃんは右手の掌を出してくれた。

私はナイフを取り出してアレーティアちゃんの右手の掌に痛みが無いように綺麗に斬った。

切られた部分は少し血が出て来たが直ぐに収まりアレーティアちゃんが着ている服で右手を拭くと切られた部分は最初から無かったように綺麗な右手の掌しかなかった。

「其れじゃあ今度は

シャルル」

「はいシャル」

「魔力封じの手錠を」

「分かったシャル」

とシャルルは魔法陣を展開させて魔力封じの手錠を出した

「翼愛、魔力封じの手錠シャル

後鍵も出して置いたシャル」

「ありがとう」

とシャルルから魔力封じの手錠と其の鍵を貰いアレーティアちゃんの右手の手首に手錠を掛けて又同じように手の掌を綺麗に斬った。

切られた部分は血が出て来たが、今度は一向に出血が止まらず出て来る

私は急いで魔力封じの手錠をに鍵を指して魔力封じの手錠を外した

魔力封じの手錠を外した瞬間アレーティアちゃんは右手の掌の切り傷の出血が止まった。

「やっぱアレーティアちゃんの再生は魔力切れや魔力が無い場所じゃ再生しない。

えつとハジメ君、魔力が無い谷の名前は？えつと」

「魔力が無い谷はこの世界には無いが魔力を分解する谷なら有る。

その名もライセン大峡谷だ」

「そうそう、つまりライセン大峡谷でアレーティアちゃんを簡単に殺せる」

「確かにそうだな。」

「言われてみれば」

「ハジメ君」

「何だ？」

「アレーティアちゃんが封印されて居た状態で会話できて居たよね」

「!?言われてみれば中途半端な封印状態だった」

「つまり」

「ああ俺も気が付いた。」

「と私とハジメ君は口元が緩む」

「えっと翼愛ちゃんとハジメ君、何が気が付いたの？」

「ちよつと用事が出来た。」

「直ぐに戻るから」

「俺も用事が出来たから」

「と私とハジメ君はアレーティアちゃんが封印されて居た場所まで」

「戻った。」

「戻り中」

「と私とハジメ君はアレーティアちゃんが封印されて居た場所に」

「戻って来て何かてかがりを探して」

「あ、あったよ。」

「ハジメ君」

「本当か」

「と私が見つけた場所を見ると何かをはめ込める穴が有った。」

「ちよつと待ってね」

「と「セイザブラスター」を付けている左腕を前に出して」

「シャルル」

「はい今度は何シャル」

「今度は「ケンビキョウキョウタマ」を」

「分かったシャル」

「とシャルルは魔法陣を展開させて「ケンビキョウキョウタマ」を出」

「した」

「翼愛、「ケンビキョウキョウタマ」シャル」

とシャルルから「ケンビキョウキュータマ」を受け取り「セイザブラスター」に「ケンビキョウキュータマ」を

『ケンビキョウキュータマ』

セットして「ケンビキョウキュータマ」を手前に倒して

『セイ・ザ・アタック』

と例の穴に向けて引き金を引いた。

空中に星型のディスプレイが現れて其処に映るのは何かの紋章だった。

「ハジメ君」

「分かって居る。」

今スケッチしている」

と錬成で石板を作り其れを削って例の紋章を描いている。

「書き終わったぞ」

と私はハジメ君が書いた絵を見るとそっくりに例の紋章が掛かっていた。

「後は」

「焼くなり煮るなりだな」

と私はハジメ君は例の紋章がある穴を手に掛けた

十分後

「はあ、はあ、はあ」

と私とハジメ君は四つん這いになりながら息を切らせていた

そして私は顔を上げて見つめる先は例の紋章がある穴だ

この穴ビクとも変化が無かった。

ハジメ君の錬成とドンナーでの攻撃やキュアハートやワシピンクに変身した私の攻撃でされビクとも連携しない。

「ハジメ君」

「何だ」

「此れって」

「言うな。」

「此れと同じ紋章でしか作動しなみたいだな」
「だね。」

「戻ろうか」

「だな」

と私とハジメ君は立ち上がり皆の下に戻った
（移動中）

「どうだったハジメ君、翼愛ちゃん」

「収穫はあったよ」

「ああ、アレーティアが封印されて居た場所にこんな感じ紋章が彫られていた穴があった。

こんな感じの」

とスケッチした石板を皆に見せた。

「他には」

「其れだけだ」

「其れだけ？」

「ああ俺の錬成やキュアハートやワシピンクに変身した翼愛の攻撃にも耐えられる位の強固な作りだった」

「多分だけど此れと同じ紋章の何かを入れないと作動しないタイプと見て良いかも」

「そう」

「此れも踏まれて私は一つの仮説を立てた。

アレーティアちゃん聞く」

「うん、聞く」

私はアレーティアちゃんの瞳を見る。

真っ直ぐで綺麗な瞳だった。

「分かった。

仮説だけど多分、アレーティアちゃんの叔父様は何から遠ざける為此処に封印と言うので幽閉したんだと思う」

「幽閉？」

優花ちゃん頭に疑問を浮かべていた

「魔力を遮断するだけに良いのに封印の手段を取り」

「アレーティアと会話出来るような中途半端な封印にを施した」

「でもお姉ちゃんあの魔物は」

黒花は疑問に思っている事を吐いた。

「其れは分からない」

「翼愛も分からないんですか」

とアテナは呟いた。

「そうよ。」

分かるとしたら」

「例の穴ですね。」

翼愛先輩」

「正解、雷槍君」

「となると会長此れからの目標は」

「ええ、アレーティアちゃん此処の迷宮で確か」

「この迷宮は叛逆者の一人が作ったと言われている」

「叛逆者？」

ハジメ君が疑問に持って居ると

「叛逆者、神代に神に挑んだ神の眷属の事。」

この世界を滅ぼそうとしたと伝わっている。

で合っているかな。

アレーティアちゃん」

「うん合っている。」

そしてその目論見は神によって見破られ彼らは世界の果てに逃走した。

その果てが七大迷宮と呼ばれ最深部には叛逆者の住処が有ると言われている」

「つまりは其処に地上への道があるかも知れないですね」

「うん」

「とゆう事でオルクス大迷宮の最深部の叛逆者の家まで頑張おー」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

迷宮の箱庭

アレーティアが封印されていた階層で整理整頓してオルクス大迷宮の最下層にある反逆者の住まいを目指し、探索を始めた。

先頭をハジメ君と牙十郎君と雷槍君&アテナが担当して真ん中は香織ちゃんと優花ちゃんと黒花で後方は私、アレーティアちゃん、で編成した。

魔物とエンカウントしたら私の「セイザブラスター」ハジメ君のドーナ、香織ちゃんのヴァイス、アテナの「エリザ・ツェリスカの五連ライフル」、黒花の「Weier Zauberer」と「Schwarze Hexe」、優花ちゃんの投擲、アレーティアちゃんの魔法で遠くから攻撃してハチの巣にする。

遠距離攻撃が効かない魔物は牙十郎君の刀と雷槍君「ストラーダ」で魔物を切り刻むん、の繰り返しで階層を攻略していた。

その間に起きた事はまずハジメ君が手に入れた石の正式名はこの世界では伝説級の秘宝「神水」と分かった。

アレーティアちゃんがハジメ君に告白した。

だけどハジメ君には香織ちゃんが居るので修羅場に入ると思っていたが事前にアレーティアちゃんは香織ちゃんに相談していた為香織ちゃんからOKが出た。

ハジメ君は其の事に戸惑っていたが私が「ハジメが思っている事を嘘偽り無しで一番で実行しなさい」と言っただけでハジメ君は其の事を受け入れた。

其れと優花ちゃんと牙十郎君が恋人の中になった。

なり染は魔物肉を食べて苦しみながら手を繋いだ事で恋が芽生えたそうだと。

色んな事が在り今は

「・・・今度は樹海か」

「密林もあつたからそこまで驚かないけど、本当に迷宮内なのか疑つちるね」

十メートルは優を超える木々に、男子高校生の平均身長ほどある雑

草、うっとおしいにもほどがある。

「それに・・・」

地響きと共に巨大な爬虫類型の魔物の群れが9人の前に現れた。

「テイラノサウルスだな」

「あの頭の上にある花は何だ？」

「分からないけど？」

と会話して居ると巨大な爬虫類型の魔物の群れが襲って来た。

私達はそれぞれの武器を取り出して

「「「「敵は殺す」「「「「「」」」」」」

と戦闘を開始した。

私は「セイザブラスター」で遠くの敵を撃ちヘッドショットで仕留める。

近づいた魔物は

「嵐脚」

で首を跳ねる。

私は戦闘をしながらみんなの事を見る。

まずハジメ君、香織ちゃん、アレーティアちゃんはお互いの背中を預けてドンナーとヴァイスと魔法で乱れ撃ちをしている。

次にアテナちゃん雷槍君のペアはアテナが「エリザ・ツェリスカの五連ライフル」で遠くに居る魔物を撃って居た。

アテナに撃ち抜かれた魔物は撃ち抜かれた部分から発火して一瞬で火だるまになり消し炭になり近づいた魔物は雷槍君の雷で炭になった

最後に優花ちゃんと牙十郎君のペアは優花ちゃんの正確な投擲で倒されている。

倒し切れていない個体は牙十郎君がトドメを刺して居る。

最後に黒花はわざと魔物を近づかせて「Weier Zauberer」と「Schwarze Hexe」のゼロ距離射撃で確実に仕留めている。

倒した魔物が四桁を超えた辺りで

「翼愛、可笑しいぞ」

「どうかしたの？」

「此奴らさつきから倒しているんだけど一向に減らない」

「確かにそうだな。」

「雷槍の雷の結界を学習しないでただ突っ込んで来る」

「其れに」

「どいつもこいつもお花を付けてやがる」

とハジメ君とアテナが大声で叫んだ。

「それにしても、流行ってるのか？」

「……可愛い……」

「シユールだよね（苦笑い）」

「知らない」

「知るか」

「分からないです」

「分かりません」

と悠長に会話して居ると

「皆、こいつら花で操られている」

と牙十郎君が教えてくれた。

「牙十郎先輩、何か分かりましたか」

と雷槍が質問すると。

「此奴ら幾らでも突っ込んで来るからイライラしながら私が手裏剣で一網打尽で首を跳ねたけど一匹だけ首を斬れずに代わりに花を斬ったら急に倒れて暫くすると起き上がって怒り狂った感じで花を踏みつけた」

と木の枝にぶら下がりながら体験したことを報告している優花ちゃんの後ろから爬虫類型の魔物が襲って来たが私達は無視した。

無視した理由は単純で爬虫類型の魔物の横から手裏剣が飛んで来た。

其のまま爬虫類型の魔物の首を跳ねて優花ちゃんの手に戻った。

「それって銀魂の屁怒組に寄生していた寄生植物パラッパーヘヴンかな？」

「いや明らかに違うだろ。」

温厚な人格になるどころが何の躊躇なく俺達を襲ってきているぞ
「そうなる」と此れは操作系か」

「だな」

「となると操作している本体を叩かないと駄目ですね」

「そうだね。」

黒花の案で賛成で良いかな」

「「「「賛成」」」」」

と私達は移動した。

勿論爬虫類型の魔物は襲って来た。

私は後ろに居る爬虫類型の魔物は無視して前から来る爬虫類型の魔物を倒しながら爬虫類型の魔物を操っている本体を探した。

く探し中く

私達は一つの洞窟の前に居た。

「ハジメ君此処？」

「ああ？間違いないえ」

「ハジメ君、根拠は」

「この方角に逃げている時だけ魔物の動きが激しくなった。

まるでここには行かせんとばかりにな」

「つまり此処が親玉の住処だね」

「そうだな。」

追手が来る前に入り口を塞ぐぞ。

次に外へ出るのは奴を倒した後だ」

とハジメ君の錬成で入り口は閉じた。

私達は其のまま進むと広場に出た。

「気配は感じないが嫌な予感がするな？」

「そうね。」

ハジメ君変身するね」

と言いながら「ワシキユウタマ」を取り出して回すライドした。

「はい、僕も変身します」

と言いながら雷槍君は「戦極ドライバー」を腰に装着して

『バナナ』

『ワシキュータマ』

『ロックオン♪☒♪』

『セイ・ザ・チェンジ』

「変身」

「スターチェンジ」

『カヒュン、カモーン!!』

バナナアームズ! ナイト オブ スピアー!』

と私はワシピンクに雷槍君は仮面ライダーバロンバナナアームズに変身した

「迷宮には気配を消す魔物が居る。

注意は怠るなよ」

「ハジメ君注意するよ」

「分かった」

「分かりました」

「了解」

「分かりました。

ハジメ先輩」

「了解」

「うん」

と会話して居ると後ろから気配がして振り返ると無数の弾丸が飛んで来た。

私達は直ぐに散開して其々の武器を取り出して構えたが気配が消えていた。

「何だ今のは?」

とハジメ君が疑問に思っている

「皆……逃げて!」

私はアレーティアちゃんの警告を聞いて私は直ぐに三つのパーツを取り出して「キューソード」を組み立てて両腕で「キューソード」を持ち上に挙げて。

いつの間にか向けられていたアレーティアちゃんの手に収束していた風が刃が私達に発射されていた。

私は振り挙げていた「キューソード」を振り下ろしてアレーティアちゃんの風が刃を相殺した。

他のメンバーも躲すか相殺でやり過ごした。

「危ねえっ」

「アレーティア!?!」

まさかの攻撃に戸惑うがアレーティアちゃんの頭の上にある物を見て納得した。

彼女の頭の上にも花が咲いていたからだ。

それも、彼女のためにあつらえた様な真つ赤な薔薇が。

そして私は思い出した。

ハジメ達5人は魔物肉を食べ続けたことで得られた毒耐性で無力化できた。

しかし、これまでユエは魔物の肉ではなくハジメの血液を飲むことで食欲を満たしており、彼ら同様に毒耐性を得ていたわけではない。

そのため、ユエのみ魔物に寄生されて操られてしまい、ハジメ達に攻撃を仕掛けてくるようになった。

因みに私はワシピンクの装甲で防いでアテナは火の魔法で花を燃やした。

そしてアレーティアちゃんの後ろからアルラウネ型の魔物が現れてそのままアレーティアちゃんを上下の運動を多用させながら攻撃させて来た。

私達はそれぞれで対処してどうやってアレーティアちゃんを助けるようと考えた

接近組が近づいて切り落とせば良いのだが、突然ユエが自分の片手を首に突きつけると言う行動に出た。

「近づくなんて事かな?」

アルラウネ型の魔物に人質にされた。

「あの玉は胞子だったってところか? やってくれるじゃねえか……」

その時アレーティアちゃんが

「お願い…撃って!!」

と人質されたヒロインが言いそうなセリフ言った。

「ハジメ君、後ろ居るアルラウネ型の魔もn」

「え？いいのか？助かるわ！」

私が言いかけるているのにハジメ君は躊躇なく発砲した。

「ドパンツ！」とドンナーの炸裂音が聞こえた。

私は恐る恐る見るとアレーティアちゃんを操ってた寄生花を撃ち抜き更にアレーティアちゃんの頭上にあつたアルラウネ型の魔物の顔が弾丸によつて破裂していた。

結果的に魔物は倒せたものの、弾丸の衝撃波でアレーティアちゃんの頭皮が一部「ジョインツ！」という奇怪な音と共に削れてしまった。私とアテナはハジメ君のドンナーで撃ち抜かれたアルラウネ型の魔物に近づいて「キューソード」で心臓を突きさして次にアテナの火の魔法で火だるまにして消し炭にした。

そしてアレーティアちゃんとハジメ君は

「アレーティア、無事か？違和感とか無いか？」

気軽な感じで無事を確認するハジメをアレーティアちゃんはジトツとした目で頭をさすりながら睨んでいた。

「……撃った……」

「あ？そりゃあ……撃つていいって言うから……」

「………ためらわなかった………」

「戦闘中にあそこまで待ったんだぞ」

「ぐう」

「いったい何が不満なんだ」

「ぐう」

「~~~~? うう~~~~っ?!」

ハジメ知らない」

「お? お〜い何で機嫌悪くなるんだよ?」

「ハジメ君」

私はハジメ君に呼びかけた。

「ん?」

ハジメ君がこちらを振り向いた時、

「「「………ないわ〜」」」

黒花以外の女子組で冷めた目でそう言った。

その後ハジメ君は黒花以外の女子組から一時間説教された。

オルクス大迷宮の最終攻略

私達が説教してこの後も探索した。

具体的には並み居る敵を射殺か爆破、露骨な魔物を逆に罠をはめて射殺したい、階層丸ごと放火して殲滅し色々やって只今私達が落ちてきた場所から丁度百層目の場所に着いた。

これは私達の推測だが、恐らくオルクス大迷宮は100層より下にもう一つ大迷宮が広がっており、それが私達の今いる奈落だったのかもしれない。

「長い道のりだったな」

「そうだね。最初は何度も死ぬ思いをしたけど、どうにかここまでこられた」

と牙十郎君と優花ちゃんが吐いた。

彼女たちは黒花に守れて自分から進んで魔物肉を食べたから其れなりの強い

「ハジメ君この先、間違いなく何かいるね」

洞窟のような場所が終わり、広がったのはまるでどこかの建物のようになっている空間。

9人の視線の先には彫刻の彫られた扉があった。

「ああ、感知系の技能には何の反応も無えが…この先にヤバイ奴がいるのは間違いないな」

「そうだな。」

この気配からして此処がこの迷宮のラスボスだな」

「はい僕もお姉ちゃんと同じです」

「最高じゃねえか。」

ようやくゴールにたどり着いたってことだろ?」

ハジメ君はそう啖呵を切る。

「……んっ!」

「うんっ! 私達が力を合わせれば、きっと大丈夫!」

アレーティアちゃんが頷き、香織ちゃんが心を奮い立たせるようにそう言う。

覚悟を決めて先に足を進めると、オルクス大迷宮の六十五階層に出会ったベヒモスの召喚の魔法陣よりも大きい召喚の魔法陣が浮かび上がった。

「おいおい、なんだこの大きさは？ マジでラスボスカよ」

「……大丈夫……私達、負けない……」

その大きさにハジメ君は引き攣った笑みを浮かべていた。

それでもアレーティアちゃんてこの後も探索した。

具体的には並み居る敵を射殺か爆破、露骨な魔物を逆に罠をはめて射殺したい、階層丸ごと放火して殲滅し色々やって只今私達が落ちてきた場所から丁度百層目の場所に着いた。

これは私達の推測だが、恐らくオルクス大迷宮は100層より下にもう一つ大迷宮が広がっており、それが私達の今いる奈落だったのかもしれない。

「長い道のりだったな」

「そうだね。最初は何度も死ぬ思いをしたけど、どうにかここまでこられた」

と牙十郎君と優花ちゃんが吐いた。

彼女たちは黒花に守れて自分から進んで魔物肉を食べたから其れなりの強い

「ハジメ君この先、間違いなく何かいるね」

洞窟のような場所が終わり、広がったのはまるでどこかの建物のようになっている空間。

9人の視線の先には彫刻の彫られた扉があった。

「ああ、感知系の技能には何の反応も無えが……この先にヤバイ奴がいるのは間違いないな」

「そうだな」

この気配からして此処がこの迷宮のラスボスだな」

「はい僕もお姉ちゃんと同じです」

「最高じゃねえか」

ようやくゴールにたどり着いたってことだろ？」

ハジメ君はそう啖呵を切る。

「……んっ！」

「うんっ！ 私達が力を合わせれば、きつと大丈夫！」

アレーティアちゃんが頷き、香織ちゃんが心を奮い立たせるようにそう言う。

覚悟を決めて先に足を進めると、オルクス大迷宮の六十五階層に出会ったベヒモスの召喚の魔法陣よりも大きい召喚の魔法陣が浮かび上がった。

「おいおい、なんだこの大きさは？ マジでラスボスかよ」

「……大丈夫……私達、負けない……」

その大きさにハジメ君は引き攣った笑みを浮かべていた。

それでもアレーティアちゃんは表情を崩さずにハジメ君の腕を握った。

「アレーティアちゃん！ どさくさに紛れて何してるのかな？」

「香織ちゃん、今はそんな事をはほつといて行くよ。」

黒花、アテナ、雷槍君チェンジ・スタンバイ

「はい」

「行くぞ」

「分かりました」

と其々の変身アイテムを取り出して

「シャルル」

「変身」

『バナナ』

「プリキュア！ラブリック!!」

『ワイイ!』

『ロックオン♪♪』

「L・O・V・E」

『チェンジフォーム！妖怪ヒーロー！ワイルドボーイ』

「変身」

「Croitzal ronzell Gungnir zizz
l」

「ワイルドボーイ！ワイルドに見参！」

『カヒュン、カモーン!!』

バナナアームズ! ナイト オブ スピアー!』

私はキュアハート、黒花はワイルドボーイ、雷槍君は仮面ライダーバロンに変身してアテナは「ガングニール」を装着した。

更に私は左腕に「セイザブラスター」を装着して、雷槍君はストラダーを取り出して

「ストラダー」

『ワシキュータマ』

『font:ul20』Yes『font』

『セイ・ザ・チェンジ』

「セットアップ」

「スターチェンジ」

『font:ul20』set up『font』

と追加変身してキュアハートの衣装の左胸のハートの部分にワシピンクの星が追加されて背中にはワシピンクの翼が装着されている。

此れはお母さん直伝の重ね着変身。

お母さんの場合はキュアマーメイドと天羽々斬を中心にして色々に変身していたけど

私の場合はキュアハートとワシピンクしかないから名乗るなら

「みなぎるスピード・愛^{ラブ}スター! キュアハート、ワシピンクカスタム!!」

因みに私と一緒に重ね着変身した雷槍君はただ仮面ライダーバロンとバナナアームズのアーマーの間に「エリオのバリアジャケットのコート」が装着されていて右手には「バナスピアー」、左手には槍に変形した「ストラダー」を持っている。

言うなれば仮面ライダーバロン、ストラダーカスタムになる。

と私達の変身完了した丁度あつちらも召喚が終わって居た。

体長が大体30m、色違いの6つの頭と長い首を持つヒュドラ型の魔物が現れた。

「ククルウアアアン!!」

鳴き声を上げて、6つの頭の眼がこちらを睨む。

すると、赤い鱗を持つ大蛇の頭が口を開き、その口から火を吹いてきた。

それは固まって行動している私達全員を呑み込むほど、だが私達はあえて動かず其のまま棒立ちした。

移動しない理由は

「聖絶！」

光の障壁が私達を包み、炎から護る。

香織ちゃんの防御魔法だ。

其のまま赤い鱗を持つ大蛇の頭が口から出て来た炎は其のまま香織ちゃんの防御魔法で防がれた。

そして私達全員動き出した。

ハジメ君とアテナが右、アレーティアちゃんと黒花が上、優花ちゃんと牙十郎君が左に散らばる。

ヒュドラは6つの頭の内、赤がハジメ君とアテナに、緑がアレーティアちゃんと黒花に、青が優花ちゃん牙十郎君に対処する行動を見せる。

私と雷槍君は待機している。

理由は単純でヒュドラ型の魔物が新たな行動したら直ぐに行動できるように待機して居る。

と説明している間にも、赤が火炎弾を、緑が無数の風の刃を、青が冷気の息を吐いた。

何とも分かり易い色と属性の関係

ハジメ君は駆け抜けながらその火炎弾を避けて流れるような動きで回避して、アテナは避けずに火炎弾に被弾しているにもダメージが無いように真っ直ぐに移動してドンナーと槍を向け、ユエは更に上昇することで風の刃を躲し、ワイルドボーイは月歩で縦横無尽時で風の刃を躲し、優花ちゃんと牙十郎君は跳躍することで冷気の息から逃れる。

その直後、

「はあっ！」

「喰らっておけ」

★SAGITTARIUS∞ARROW

お返しとばかりにハジメ君がドンナーを数発発砲。

アテナは「ガングニール」の必殺技を繰り出した。

『ワイイー・エグゼキュート！』

「凍雨……………」

「黄昏乱れ撃ち！」

ユエが氷の刃を無数に降らせ、ワイルドボーイの無数の弾丸が放たれて

「はっ！ せやっ！」

「てつやああああ」

優花が炎を纏った手裏剣と雷を纏った苦無を無数に投げ、牙十郎君が居合切りで斬る。

弾丸と閃光が赤い頭の鱗を貫き、無数の氷の刃と弾丸が緑の頭に当たり突き刺さり、炎の手裏剣と雷の苦無とが青い頭に降り注ぎ、居合切りの斬撃で青い頭が切り落とされる。

「クルウアン！」

白頭が叫ぶと、吹き飛び、斬り落とされた3つの頭を白い光が包み込んだ。

私は「キューソード」を組み立て、私と雷槍君は強く踏み込んで白頭に向かった。

そして私は「キューソード」を振りかぶって、雷槍君は

「ストラーダ」カートリッジ

『font:ul20』Yes『font』「ガチャ、ガチャ」

「ストラーダ」から薬莖が二つ出て来て「バナスピアー」と「ストラーダ」に雷が付与されて行く、そして白頭に攻撃するが私と白頭の間には黄色い頭が割り込んだ。

黄色い頭はまるでコブラの様に横幅を広げると、私と雷槍君の攻撃を受け止めた。

それは周りの頭よりも防御力があるみたいで、無傷ではないけど傷が小さい。

そして白い光に包みこまれた傷付いた頭達は回復していた。

そして回復した頭はもう一度火炎弾、風の刃、冷気の息を繰り出した。

私達は散会した。

「炎を吐いてくる赤に回復担当の白、おまけに防御担当の黄色かよ…
バランス良すぎて嫌になるぜ！」

ハジメ君は物陰に隠れ、慣れた手つきでドンナーの弾丸をリロードする。

「皆、役割確認して良い」

「今更か」

「御免、アテナが黄色い頭担当、私が黒頭を担当、後は赤青緑白は呼ばれて居ない皆で担当するのは如何かな？」

「何となくわかるが一応理由効くけど」

「アテナは黄色い頭の防御力を貫通できる威力を持って居る。」

黒頭は多分だけど闇魔法系統だと思う」

「確かにあたしなら黄色の頭の防御を貫通出来るけど」

「翼愛、もし黒頭が闇魔法系統としてどうやって攻略するのだ」

「簡単だよ。」

私は闇魔法系統を完全に無効化する力を持って居るの」

「そうか、なら頼んだ」

「任せて」

と私は翼を展開して空を飛んだ。

勿論の事ヒュドラ型の魔物の其々の首が私を捉えてが赤、緑、青が其々火炎弾、無数の風の刃、冷気の息を吐いた。

私は精密な翼操作で攻撃を躲し黄色の頭も噛みつきようとしたが、私にとっては遅すぎて「セイザブラスター」にセットしている「ワシキュータマ」を操作して

『セイ・ザ・アタック』

「セイザブラスター」の必殺技を黄色の頭の口に叩き込んだ。

そして黒頭が私を目を光らせながら見つめた。

多分黒魔法を使っているんだけど、予測通りに私には効かないようだ。

私は「キューソード」を分解して「キューショット」にして「セイザブラスター」と「キューショット」の二つで黒頭の目を乱射する。黒頭は私に闇魔法が効かないを気が付かず闇魔法使っていた為目を閉じるのを忘れていて其のまま私の射撃を諸に喰らった。

私の射撃を目で喰らった黒頭はあんまりの痛みで野垂れ回った。

その間に私はもう一度「キューソード」を組み立てて「セイザブラスター」にセットされている「ワシキュータマ」を外して

『ギヤラクシー』

と「キューソード」にセットして翼を左右それぞれ別々の方向に推進力を出して駒の様に回り出して黒頭に突撃して

「せいやあああー」

と黒頭に一閃入れた。

そして私は右足だけ地面に着地して少し回り左足でブレーキを掛けて「キューソード」を大振りで振った。

大振りで振った「キューソード」からピンク色の斬撃が繰り出されて其のまま黒頭に命中した。

斬撃を喰らった黒頭は最初に喰らった攻撃と同時に首を二か所、輪切りに切り落とされて絶命した。

私は周りを見ると

アテナが高くジャンプして黄色の頭は其れを攻撃と本能で感じて防御形態になったが

「此れでお終いだ」

《color:#ff8c00》★GRAVITY∞PAIN

がアテナが繰り出したGRAVITY∞PAINにいと簡単に貫かれて

「天灼」

『ワイイ！エグゼキュート！』

『バナナスカッシュ』

「ワイルドバズーカ！」

と其々の攻撃が炸裂して赤、緑、青、白を倒した。

「やったぜ」

「終わった」。誰もがそう感じ気を緩めるが、私、ワイルドボーイ、アテナ、雷槍君の四人は胴体だけになったヒュドラ型の魔物をじつと見ていて

「アテナ、雷槍君、後始末お願いね」

と私と黒花は耳に手で防いだ。

「分かった」

「分かりました」

とアテナは変身を解除して

「Croitzalronzell Gungnir zizz
l」

もう一度「ガングニール」の起動聖詠を歌った。

と丁度ヒュドラ型の魔物の胴体が動き出した。

「ガングニール幻獣型ギア」を纏た。

ヒュドラ型の魔物の胴体から新たな首が出て来た。

アテナは「エリザ・ツェリスカの五連ライフル」を取り出して其のまま地面に刺すと「エリザ・ツェリスカの五連ライフル」は宙に浮いてアテナの上空に魔法陣が現れて其のままに入ると金の装飾が入れた巨大な銃が現れて巨大な銃の銃口を上に向けながら其のままキヤッチャーした。

次に「ガングニール幻獣型ギア」の槍を空中に投げて其のまま槍の持ち手が吸い込まれる様に巨大な銃の銃口に入ると槍が変形して巨大な銃の竜の頭の形をした銃口に変形した。

その間にもヒュドラ型の魔物の胴体から出て来た首は口からブレスを吐く準備に入った。

アテナは落ち着いたように

「雷槍、レールガン」

「はい」

と雷槍君はアテナが持つて居る巨大な銃の銃口に行き

「ストラーダ」ドラゴン・ブレイク・パイルモード」

「f
は、ド、ゴ、ン、ブ、レイ、ク、パ、イル、モード
Yes, Dragon Break Pile Mode
0」

nt』

「ストラーダ」を刺した。

刺された「ストラーダ」は変形して巨大な銃のバイポッドになって、今度を「バナスピアー」を刺した。

そして雷槍君はアテナの後ろに行く

「魔法陣展開」

アテナの足元にベルカ式の魔法陣が現れて其処からバインドが出て来てアテナの射撃体勢を邪魔にならないように巻き付き巨大な銃の前後にベルカ式の魔法陣を数珠繋ぎ展開されてチャージが始まった。

ヒュドラ型の魔物もチャージを始めた。

私は念の為皆を確認すると今起きている光景に唾然している。

「皆、今すぐ耳を防いで口を開けて」

と言うと

「おい皆直ぐにやれ」

とハジメが何をやるのか分かり皆に焦りながら指示を出した

直ぐに皆は耳を防いで口を開けて

ベルカ式★DDRAGONS∞NIGHTTSUN

が「バナスピアー」をそのまま使った弾丸が放たれた。

無論ヒュドラ型の魔物もブレスは放った。

数秒程度均衡していたが直ぐに崩れてヒュドラ型の魔物もブレスを「バナスピアー」の弾丸は真つ二つに切り裂き更にヒュドラ型の魔物の上半身を抉り後ろの壁をを貫通していた。

上半身を無くなったヒュドラ型の魔物は大きな音を立てながら倒れた。

アテナは振り返り

「ふえ、終わったぞ」

私は耳から手を外して

「お疲れさま」

とアテナとハイタッチした。

クリア報酬

アテナと雷槍君がヒュドラ型の魔物を倒して私とアテナがハイタッチしたら

「翼愛」

「何かしら？ハジメ君」

「いつあいつが生きていた分かった？」

「ハジメが代表で皆が疑問思っている事を言ってきた。」

「私は音かな。」

生き物が死んで動かないなら音がしないけどあのヒュドラ型の魔物から微かな音がしたの。

「黒花達は？」

「私は勘です」

勘と答えた黒花

「あたしは気配だな」

「僕も気配です」

気配と答えたアテナと雷槍君

「まじか」

とそう吐いて地面に倒れた。

「ハジメ君!」

私は急に倒れたハジメ君を心配した。

「気にするな。」

急に今までの疲労が来ただけだ」

其れを濁きに

「御免、私も」

「私も急に」

「すみません会長、俺もです」

と香織ちゃん、優花ちゃん、牙十郎君も床に座るか倒れる。

「しようがないよ。」

死と危険の隣り合わせの毎日だからねこの先が安全地帯だから今まで貯めて来た疲労が来たんだと思うから私達が運んでおくよ」

「済まない。」

「其れじゃあ寝る？わ？ZZZ」

「とハジメ君が寝て」

「私達？も？ZZZ」

「おやすみなさ？い？ZZZ」

「お休みです。」

「会ちよ？う？ZZZ」

香織ちゃん、優花ちゃん、牙十郎君もハジメ君に付いて行く感じで寝た。

「皆、勝手だけと言っちゃった」

「しようがないねな」

「とアテナが優花ちゃんと牙十郎君を両肩で米俵持ちの様に持ち上げて」

「其れじゃあ私は香織ちゃんにします」

「と黒花をおんぶした。」

「私はハジメ」

「アレーティアちゃんはハジメ君をおんぶする」

「となると私は皆の武器だね」

「と皆が使った武器を集めた。」

「翼愛、行くぞ」

「OK」

「と私達はでかい扉に向かった。」

「鬼が出るか？」

「蛇が出るか？」

「開けm「ズズ……ズズズズズズズズズズズズ」！」

「黒花が言い切る前に何かが動く音に、咄嗟に音の聞こえた方向へ視線を向ける。」

「すると、あの全長十メートルはあるバカでかい扉が独りでに開いていた。」

「私達は警戒したが何も起きない」

「行きましようか」

「だな」

と扉をくぐると

「……反逆者の住処？」

私達はただただ、周囲の光景に圧倒され呆然とした。

まず、目に入ったのは太陽だ。勿論、此処が地下迷宮である以上本物の太陽じゃない。

頭上には円錐状の物体が天井高く浮いており、その底面に煌々と輝く球体が浮いている。

僅かに温かみを感じる上、人工物のような無機質さを感じない。

だからこそ、思わずそれを「太陽」と称したと思う。

あの疑似太陽一つを見ても、此処を作った者が如何に規格外の存在かよく分かる。

少なくとも、太陽&月の力の「ヒカリキュータマ」なら再現できる私は兎も角今のハジメ君があの疑似太陽を再現することは不可能だ。

「……水の音？」

次に、注目するのは耳に心地良い水の音。

扉の奥のこの場所はちよつとした球場くらいの大きさがあるんだが、この空間の奥の壁は一面が滝になっており、天井近くの壁から大量の水が流れ落ち、川を形成している。

滝の傍特有のマイナスイオン溢れる清涼な風が疲れた体と荒んだ心を癒やしてくれる。

よく見れば川の中には魚が泳いでいる。もしかしたら、地上の川から魚も一緒に流れ込んでいるのかもしれない。

何にせよ、私達の食料を確保出来た。

調味料はシャルルの空間魔法に入って居るが保存食品が底が付きそうだった。

最悪私達も魔物の肉を食べる覚悟していた。

暫くは美味しい魚料理なる。

「……畑まである」

川から少し離れたところには大きな畑まである。

今は何も植えられていないみたいだが、主の生前は作物に満たされてたんだろな。

その周囲に広がっているのは、もしかしなくても家畜小屋か？

動物の気配はしないが、それも世話をする人間が居なくなっただらろな。

水、魚、肉、野菜、果物と素があれば、此処だけで何でも自炊できそう。

緑も豊かで、あちこちに様々な種類の樹が生えている。

「こいつは凄いな。此処だけで人が暮らすための要素が完結してる」

「そうだね。」

「其れとハジメ君達を寝かせる場所」

「そうだな」

と私達は川や畑とは逆方向には、明らかに人為的に作られた建築物が存在する場所に向かった。

建築したというよりは岩壁をそのまま加工して住居にした感じだけど。

その建物に隣接した太い柱とカーテンに囲まれた神殿のような場所へ歩みを進める。

「ここならハジメ君達を寝かせられそうだ」

「んっ！」

予想通り、此処がベッドルームだったみたいだな。

イメージとしてはパルテノン神殿が一番近いかな？

そんな感じの場所の中央に天蓋付きの高級感溢れるベッドが何個か設置され、清潔な純白のシーツが敷かれている。

私達はそれぞれのベットにゆっくりとハジメ君達の体をベッドに寝かすと、私はアレーティアちゃんに視線を向けて一つの頼み事をする。

「アレーティアちゃん、ハジメ君達を見て欲しいの？ 私達は危険な場所がないか調べてくるから」

「……任せて」

此処が反逆者の住処というのは間違いないけど。

だからといって、此処が本当に安全な場所なのかは分からない。
アレーティアちゃんにハジメ君達を任せた私達は、ベッドルームに隣接する建物へと足を踏み入れる。

「翼愛、油断せずに行くか」

「分かって居るよ」

石造りの住居は全体的に白く石灰のような手触りだ。

全体的に清潔感があり、温かみのある光球が天井から突き出す台座の先端に灯っている。

疑似太陽の小型版を使ってるかな？と予測を立てる。

これまで薄暗い場所にいた私達には少し眩しいくらいだ。

どうやら三階建てらしく、上まで吹き抜けになっているのが見取れる。

取り敢えず一階から見回ることにする。

暖炉や柔らかな絨毯、ソファのあるリビングらしき場所、台所、トイレを発見した。

どれも長年放置されていたような気配はない。

人の気配は感じないが、私達が何者かの気配を探れていないだけか、人以外の何かが維持管理しているかは分からないな。

ただ、私達の感覚からすれば後者が正しい気がする。

何というか、異世界から帰った時の家のような、暫く人が使っていないかったんだと分かる独特の空気がする。

私達はより警戒しながら進み、更に奥へ行くと再び外に出た。

其処には大きな円状の穴があり、その淵にライオンのような動物の彫刻が口を開いた状態で鎮座している。

彫刻の隣には魔法陣が刻まれており、試しに魔力を注ぐとライオンモドキの口から勢いよく温水が飛び出す。

何処の世界でも水を吐くのはライオンというのがお約束と思った。

「まんま、風呂だね」

でも嬉しい、何ヶ月も風呂に入って居ないから」

「そうだな」

今から入るか」

「まだ探索中だから後で」

「だな」

「私達は思わず頬を緩める。

今までダンジョン居た私達は魔法から水を出し、体を拭くくらいのこととはしていただけ。

「だから此処で風呂に入れるのは嬉しいです。

安全確認が終わったらたつぷりと堪能しよう。

「おっ、いい湯だな」

とアテナがそつと手を入れてみると丁度いい湯加減みたいだ。

「よし、絶対に後で皆で入よう」

「おおおおおー」

「お、お」

雷槍君は少し顔を赤くしていた。

と少し浮かれていた。

それから、二階で書斎や工房らしき部屋を発見したが、書棚も工房の中の扉も封印がされているらしく開けることはできなかった。

無理矢理破ることも考えたが、それで中の貴重品が壊れては元も子もない。

仕方なく諦めることにして後でハジメ君に教えておこう。

他の場所の探索を続ける。

そして、俺は三階の奥の部屋に向かう。三階は一室しかないみたいだ。

奥の扉を開けると、そこには直径七、八メートルのこの世界で今まで見たこともないほど精緻で繊細な魔法陣が部屋の中央の床に刻まれている。

「いっそ、一つの芸術と言ってもいいほど見事な幾何学模様だ。

しかし、それよりも注目すべきなのはその魔法陣の向こう側、豪華な椅子に座った骸。

既に白骨化しているその骸は黒に金の刺繍が施された見事なローブを羽織っている。

薄汚れた印象はなく、お化け屋敷などにあるそういうオブジェだと

言われれば納得してしまいそうだ。

その骸は椅子にもたれかかりながら俯いている。

この姿勢のまま朽ちて白骨化したのか？　だが、どうしてこんな場所？

魔法陣しかないこの部屋で骸は何を思っていたのか。

寝室やリビングではなく、この場所を選んで果てた意図はなんなのか。

恐らく、この骸は反逆者と呼ばれていた者達の一人なんだろうが、苦しんだ様子もなく座ったまま果てたその姿は、まるで誰かを??もしくは私達を待っていたかのように思える。

一見すれば怪しい場所だ。だが――。

「行くか」

地上への道を調べるには、この部屋が鍵なのだろう。

書庫と工房の封印……この部屋を調べるしかない。

それに、此処まで来た人間を拒絶する意図が反逆者にはない。何となく、そんな気がする。

私達は自身の直感を信じ、魔法陣へと踏み出した。

その瞬間、カッと純白の光が爆ぜて部屋を真っ白に染め上げた。

直後、何かが私達頭の中に侵入し、走馬灯のように奈落到落ちてからのことが駆け巡る。

やがて光が収まると、目を開けた私の眼の前には黒衣の青年が立っていた。

「試練を乗り越えよく辿り着いた。

私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えは分かるかな？」

このオルクス大迷宮を作った、オスカー・オルクス。

どうやら、この人が【オルクス大迷宮】の創造者らしい。

私達は驚きながら彼の話を聞く。

「ああ、質問は許してほしい。

これはただの映像記録のようなものでね、生憎君の質問には答えられない。

だが、この場所に辿り着いた者に世界の真実を知る者として、我々が何のために戦ったのか……メッセージを残したくてね。

このような形を取らせてもらった。

どうか聞いてほしい。

……我々は反逆者であつて反逆者ではないということ。」

そうして始まったオスカーさんの話は、私達が聖教教会で教わった歴史にアレーティアちゃんから聞かされた反逆者の話とは大きく異なる、ある意味では予想通りの内容だった。

それは神を僭称する者とその子孫達の戦いの物語。

神代の少し後の時代、世界は争いで満たされていた。

人間族と魔族、様々な亜人族達が戦争を続けていた。

争う理由は様々だ。

領土拡大、種族敵価値観、支配欲、そして一番の理由は「神敵」だからだ。

今よりずっと種族も国も細かく別れていた時代、それぞれの種族、それぞれの国が、それぞれの神を祀り、その神からの神託で人々は争いを続けていた。

だけど、そんな何百年と続く争いに終止符を討たんとする者達が現れた。

それが当時、「解放者」と呼ばれた集団である。

彼らには共通する繋がりがあつた。

それは、全員が神代から続く神々の直径の子孫であつたということ。

そのためか解放者のリーダーは、ある時偶然に神々の真意を知ってしまった。

何と、神々は人々を駒に遊戯のつもりで戦争を促していたのだ。

解放者のリーダーは神々が裏で人々を巧みに操り、戦争へと駆り立てていることに耐えられなくなり、志を同じくする者を集めた。

彼らは「神界」と呼ばれる神々がいると言われている場所を突き止めた。

解放者のメンバーでも先祖返りと言われる強力な力を持った七人

を中心に、彼らは神を僭称する者達に戦いを挑んだ。

……いや、挑もうとした。

だけど、その目論見は戦う前に破綻してしまう。

神を僭称する者は人々を巧みに操り、解放者達を世界に破滅を齎せうとする神敵であると認識させ、解放者が守ろうとしている人々自身に相手をさせた。

その過程にも紆余曲折はあったものの、結局、守るべき人々に力を振るう訳にもいかず、神の恩恵も忘れて世界を滅ぼさんと神に仇なした反逆者のレッテルを貼られ、解放者は一人、また一人と討たれていった。

最後まで残ったのは解放者の中心たる七人のみ。

世界を敵に回し、彼らは自分達では神を僭称する者を討つことはできないと判断した。

そして、バラバラに大陸の果てに迷宮を創り潜伏することにした。試練を用意し、それを突破した強者に自分達の力を譲り、いつの日か神を僭称する者の遊戯を終わらせる者が現れることを願って。

長い話が終わり、オスカーさんは穏やかに微笑む。

「君が何者で何の目的で此処に辿り着いたのかは分からない。

君に神殺しを強要するつもりはない。

ただ、知っておいてほしかった。

我々が何のために立ち上がったのか」

「オスカーさん……」

「……君に私の力を授ける。

どのような使うも君の自由だ。

だが、願わくば悪しき心を満たすためには振るわないでほしい。

話は以上だ。

聞いてくれてありがとう。

君のこれからが自由な意志の下にあらんことを」

そう締めくくるとオスカーさんの記録映像はスッと消える。

同時に私達の脳裏に何かが侵入してくる。

ズキズキと痛むが、それがとある魔法を刷り込んでいるためと理解

できたので大人しく耐える。

やがて痛みも収まり少しの静音が支配して

「蒼青の勇者、鞆波・A・氷水と剣の勇者、鞆波・A・錬の姉妹、鞆波・A・翼愛と」

「同じく鞆波・A・黒花」

「其れと異世界の帰還者、騎竜アテナ」

「とその弟の騎竜雷槍」

「二」貴方達の意志、私「僕達が引き継ぎます」「二」

休息

私達はオルクス大迷宮の創造主のオスカー・オルクスからのクリア報酬を手に入れて私達はアレーティアちゃんが居る場所まで戻った。

「アレーティアちゃん」

「翼愛、どうだった？」

「此処は安全で三階で面白いものが見えるよ」

「面白い物？」

「行ってみてからの楽しみ」

「分かった。」

其れじゃあハジメ達をお願い」

とアレーティアは寝室から出ようと扉に近づいた。

「うん分かった。」

其れと此処浴室が有るから皆を風呂に入れておくよ」

と私がそう言うのとドアノブを掴もうとしていたアレーティアが止まった。

「ハジメを風呂に!？」

「うん、そうだけど」

「ハジメは寝ているよ」

「其処は大丈夫だよ。」

ハジメ君と牙十郎君の男の子は雷槍君にやらせるから」

「僕かですが」

「うん、流石に女子の私達がやると問題になるからね。」

私と黒花は香織と優花をやるから」

と言うと

「私はハジメをやる」

とアレーティアが堂々と宣言して来た。

私は少しフリーズして

「御免、上手く聞き取れなかったからもう一回」

「だから、私がハジメをやる」

「ハジメ君の体を洗うのを」

「うん」

私はアテナの顔を見る。

「いやあたしの方を見ても答えでねぞ」

私は少し考えて

「雷槍君、は如何かな?」

「僕は何とも

でも身長的にもありますし二人なので僕は助かりますので」

「だそうだけど、アレーティアちゃんは どうする?」

「私は構わない」

「決まりね。」

私、黒花、アテナで香織と優花でアレーティアちゃんと雷槍君はハ

ジメ君と牙十郎君を洗うで良いかな?」

「はい、構いません」

「私はやると言って居ないが先に言わない方が悪いか」

「僕は構いません」

「同然」

「其れじゃあ決定

其れと浴槽は一つしかなかったから先に女子からね」

「二〇K」

と私は直ぐに行動した。

私はクローゼットに入って居る女性服を数枚確保して扉を開ける為に先頭に立ち、アテナは香織、黒花は優花をおんぶして浴槽の脱衣所に向かった

浴槽の脱衣所に到着すると脱衣所に備え付きの長い椅子に寝転がすと今まで着ていた服を脱がした。

勿論私達も入るので着ていた服を脱ぎました。

着ていた服は汚れがあるので此れも脱衣所に備え付きの洗濯機もどきに入れて

「えっと、アテナ」

「どうした?」

「此れどうやって操作するの」

「いや私も分からないぞ」

「お姉ちゃんとアテナさん、どうかしませうか？」

「黒花、この洗濯機もどきの操作が分からないの」

「こゆううのは思いつ切りでやると良いですよ」

と黒花が

「ピッピッピッ、ポチ」

勝手に操作すると

「ガタゴトガタゴト」

と洗濯機もどきが激しく振動した。

私達は直ぐに後ろに下がり警戒すると暫くすると

□

と止まり、私達は恐る恐る近づく洗濯機もどきから

手足が出て来て腕と脚が伸びてロボットになった。

見た目は僕のヒーローアカデミアに出て来るヒーロービルボード

チャートJPのNo. 8ウオッシュユだった

そして洗濯機もどきロボットは私達を無視しながら移動して脱衣所を出る。

私達も釣ら得て脱衣所の外を見ると洗濯機もどきロボットがお腹から盥を出してホースから水を出して盥に入れた。

頭から私が入れた洗濯物を盥に入れて手洗いで洗濯し始めた。

「!?」

「選択は洗濯機もどきロボットに任せて私達はお風呂に入るかな？」

「だな」

「賛成です」

と私達は入った

女子入浴中（※今回は入浴シーン無しで）

私達は風呂から出て体を拭いて私が持って来た女性用の服を着て又私を扉を開ける為に先頭に立ち、アテナは香織、黒花は優花をおんぶして寝室に戻った。

「戻ったよ。」

アレーティアちゃんと雷槍君、ハジメ君と牙十郎君をお願いね」

「うん、分かって居る」

「では行きますね」

アレーティアはハジメ、雷槍は牙十郎をおんぶした。

「其れと黒花、洗濯機の事お願いね」

「分かりました」

と黒花が先頭に立ち扉を開けて寝室から出た。

アレーティアと雷槍は黒花に釣られて寝室から出た。

「其れじゃあは晩飯を作りましょうか」

「だな」

と私とアテナは屋敷から出て川に行き

「シャルル」

「何シャル?」

「「イテキュータマ」を」

「分かったシャル」

とシャルルが魔法陣から「イテキュータマ」を貰って

『イテキュータマ』

を「セイザブラスター」に「イテキュータマ」セットして手前に倒して

『セイ・ザ・アタック』

とエネルギーの矢を乱射する。

するとエネルギーの矢に射抜かれた数匹の魚が浮いて来た。

私達は直ぐに回収して調理場に急行してお魚を五人分捌いて残りは此処にある冷蔵庫で保存する。

調理場フライパンで焼いてバジルソルトで味を調える。

焼き魚のバジルソルト焼きが完成した。

ワゴンに焼き魚のバジルソルト焼きを乗せて食堂に移動して食堂の机に乗せた。

丁度良い所に

「翼愛先輩、ハジメ先輩と牙十郎先輩の体洗いが終わりました」

「いいタイミングよ。」

「晩御飯が出来たから」

「お姉ちゃんのご飯だ」

と晩御飯を食事して私達はアレーティアを三階に連れて行き

「此処がクリア報酬が貰える場所だ」

「はい、その地面ある魔法陣に入ると僕達の記憶を探られるみたいでオスカーも試練を突破したと判断されれば神代魔法を覚えられます」

「……どんな魔法？」

「生成魔法で魔法を鉱物に付加して、特殊な性質を持った鉱物を生成出来る魔法

ハジメ君にある魔法だと思う

一応取っというて損はないと思う」

「……ん……ヨクアイが言うなら」

アレーティアも魔法陣の中に入る。

すると先程私達が魔法陣に入った時と同じ登場したオスカーが現れて

「試練を乗り越えよく辿り着いた。

私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創った者だ。反逆者と言えば分かるかな？」

と私達と同じセリフを言い長話が再び始まった。

そしてアレーティアも神代魔法の生成魔法を覚えた。

因みに私、アテナ、雷槍、アレーティアはあんまり適性が無く黒花は皆無だったみたいだ。

その後私達は寝室に行き今着ている服からクローゼットに入って居る寝巻に着替えて私達は其々のベッドで寝た。

翌朝

私が起きるとハジメ君が寝ているベッドにアレーティアと香織が潜り込んでいる。

牙十郎のベッドには優花が潜り込んでいた。

黒花は朝トレに出ている。

アテナはがさつに寝て、雷槍は姿勢よく寝ている。

私はベッドから出て寝巻から昨日着ていた服に着替えて洗面所に

行って顔を洗って調理場に行き冷蔵庫から昨日取った魚を全て取り出して今回の味付けは味噌にする。

魚を捌いて次に出汁パックの袋破いて寸土鍋に水と一緒にを入れて煮込む。

其れで出汁が出て来たら魚の切り身を入れて又煮込む。

んで味噌で味を調べて完成

川魚の雑煮の味噌汁が完成すると同時に

「起きやがれおめーら!!」

「バチバチバチ」

とハジメが起きた。

今後の予定

私は直ぐに剃を使って寝室に行くのと全員起きていた。

「皆おはよう」

「あ、ああおはよう」

「翼愛ちゃんおはよう」

「おはよう」

「翼愛、おはよう」

「会長、おはようございます」

上からハジメ、香織、ユエ、優花、牙十郎の順で挨拶を返してくれた。

「それより翼愛、此処は何処だ？」

ハジメが代表でもみんなの疑問を言って来た。

「此処はこの迷宮、オルクス大迷宮の最深部の101階層でオルクス大迷宮創造主のオスカー・オルクスの屋敷」

「!!!」

ハジメ、香織、優花、牙十郎は驚いて居た。

アレーティアちゃんは予めここを見ている為驚きは無い

「此処が反逆者の住処」

「そうなるね。」

其れと朝食が出来ているから食堂に来てね」

と私は寝室から出る

「ち、ちよつと待て」

「どうかしたの？」

「俺達ついさっき起きたばかり何処にどこが有るのか分からないぞ」

「其れなら大丈夫アレーティアちゃんが皆の道案内するから」

「うん任せて」

「そうか」

と私は又剃を使って調理場に戻って川魚雑煮込みの味噌汁を仕上げ

「シャルル」

「はいシャル」

「紙のお椀を」

「任せるシャル」

と魔法陣を展開してシャルルは手を突っ込んで紙のお椀を取り出した

「有り難う」

「どういたしましてシャル」

私はシャルルから紙のお椀を貰い川魚雑煮込みの味噌汁が入って居る寸土鍋を食堂の机に運んだ。

そして食堂の窓を開けて紙のお椀の袋を破って人数分だけ取り出して盛りつける。

盛りつけているとハジメ、香織、アレーティア、優花、牙十郎、黒花、アテナ、雷槍の順で食堂に入って来た。

「今日の朝食は其処に会った川から取った川魚雑煮込みの味噌汁だよ」

「そうか、野菜とか肉は入って居ないのか」

「ああ、其れね御免入って居ない」

一応畑は在ったけど何も育っていないなかつたからね無い」

「そうかそれにしても久しぶりだな味噌汁は」

「そうだね。」

ハジメ君」

「確かに私達召喚されてから」

「味噌汁を飲んだ事が無かったな」

「そうだな」

「はい」

「お姉ちゃんのお味噌」

「？」

アレーティアは私達の世界の味噌汁のを知らないので話に付いて来れない

「取り敢えず朝食にしましょ」

「そうだな」

と皆其々好きな席に座り

「「「「「いただきます」」」」」」

「「「「いただきます？」」」」」

と其々のペースで味噌汁を食べる

「お変わりは其処に在るの寸土鍋から取ってね」

「「「「OK」」」」」

とハジメ達は寸土鍋が空になるまでお変わり続けた。

「食った食った」

とハジメ達は味噌汁で満足している中

「皆に見せたいものがあるの?」

「見せたいもの?」

「うん」

「あれか」

「あれですね」

「うんあれ」

「うん」

アテナ、雷槍、黒花、アレーティアはあれの事だと確信した。

「兎に角付いて来て」

と私は食堂を出る。

その後をアテナ、黒花、雷槍、アレーティアも続き

ハジメ達も其れに釣られえて付いてくる。

三階の部屋にだどりつくと

「あれは?」

ハジメはオスカー・オルクス死体を指差した。

「あれはオスカー・オルクス亡骸でこの部屋はオルクス大迷宮の到着者にギフトを送る部屋みたいの」

「ギフト?」

「兎に角あそこにある魔法陣の上に立つとわかるから」

「ああ、分かった」

「後皆で一緒に魔法陣の上に立ってね」

「はい」

と私のゆう通りにハジメ、香織、優花、牙十郎は魔法陣の上に立つると、魔法陣から光が放たれその光が弱まっていくと、オスカー・オルクス亡骸からオスカー・オルクスのホログラムが現れて

『試練を乗り越えよくだどり着いた。私の名はオスカー・オルクス。この迷宮を創ったものだ。反逆者と言えればわかるかな?』

私達の時と同じ内容を喋った。

中身は全て同じで

『……君に私の力を授ける。

どのように使うも君の自由だ。

だが、願わくば悪しき心を満たすためには振るわないでほしい。

話は以上だ。

聞いてくれてありがとう。

君のこれからが自由な意志の下にあらんことを』

そう締めくくるとオスカー・オルクスの記録映像はスッと消える。

同時にハジメ達が頭を抱えて苦しみ出した。

暫くしてハジメ達は落ち着き出して

「そうそう言い忘れていたけどクリア報酬は神代魔法で使い方は脳に直接に強制的にラーニングされるから」

「「其れ先に言え」って」「ください」

「ごめんごめん。」

でもこの神代魔法はハジメ君が一番使いこなせる気がするから」

「ああこの神代魔法は俺の為にあるようなものだ」

「あ、それと」

私はオスカー・オルクス亡骸に近づいてオスカー・オルクス亡骸が嵌めている指輪を取って

「ハジメ君」

ハジメに目掛けて指輪を投げる

「おっと」

ハジメは指輪を上手くキャッチした。

「多分だけこのオルクス大迷宮のクリアの証だと思う」

「良いのか俺が貰って」

「オルクス大迷宮の神代魔法一番使いこなすハジメが一番相應しいと思うから。」

「皆は反対意見はある？」

「無い」

「私は賛成かな」

「私も反対はない」

「俺も会長の意見に賛成です」

「あたしも無い」

「ハジメ先輩が一番相應しいです」

「私はお姉ちゃん意見に賛成です」

「だそうだ」

「なら頂くぞ」

「其れと此れから何だけどハジメ君は如何するの？」

「取り敢えずこの神代魔法を集めて元の世界に戻る為に旅をするつもりだか」

「其れなんだけど私達も集めるだけと最後の方は少しの場合少し違うんだよね」

「とゆうと？」

「この世界に蔓延る邪神エヒトを打ち取るつもり」

「理由は多分だけど私達の世界は神とかの非科学的者物が薄れて来ている世界でもし私達の世界にエヒトが来て今度は私達の世界を第二のトータスにすべく介入すると思う」

「そうだな俺もそのパターン物語を呼んだ事が在るからな」

「うん、ハジメ君！私達も戦うよ、ハジメ君達との、大切な人達との日常を、世界を守る為に！」

「ん！」

ハジメ、香織、アレーティアは賛同して

「私も牙十郎と結婚したいし」

「そうだな」

と続いて優花、牙十郎も賛同してくれた。

「となると決まりだな」

「はい僕達、騎竜姉弟も全面的に支援します」

「全員意見一致しました」

「其れじゃあこの世界、トータスに蔓延る邪神を打ち取る!!!」

「!!!」「おおおー!!!」「!!!」

「あくくく取り合えず、あの死体を片付けるか。ここはもう俺らの物だし」

「ん……畑の肥料……」

ハジメとユエの慈悲の無さにオスカー・オルクス亡骸が風もないのにカタリと項垂れた。

「なんでやねん」

「っ!?!」

アレーティアの言葉に私はハリセンをどことなく取り出してアレーティアの頭を叩く。

ユエは急に頭を叩かれてびっくりする

「死人にたいして失礼なことを言ったアレーティアちゃんが悪いからね」

「確かに今のはアレーティアが悪いな」

「そうだね」

「!!!」「うんうん!!!」

「っ!?!」

味方をしてくれると思っていた皆の言葉にユエはショックを受けた。

「オスカーさんが創ったこの住処を一望できる場所を探して、そこに墓を立てるか」

「そうだね。肥料扱いはさすがに可愛そうだもん」

3階の部屋から出た飛羽真達は別れてオスカーが創ったこの住処を一望できる場所を探した。

そして、そこに墓石を立て、埋葬した。

オスカーの埋葬を終えると屋敷に戻り。

「入れるといいんだけど」

オスカー・オルクス亡骸が嵌めていた指輪がカギだと思い封印されている書斎の扉の前に居る。

ハジメが指輪を書斎の扉に近づける。

すると、扉に施された文様と指輪の文様が共鳴し、施された封印が解除され、中に入れるようになった。

中に入った私達は一番の目的である地上への道を探るべく、書棚の中を調べていくとこの住居の施設設計図らしきものを見つけた。

通常の青写真ほどしつかりとしたものではないが、何処に何を作るのか、どの様な構造にするのかということがメモのようにつづられていた。

「うし、見つけたー！」

設計図を見ていたハジメが歓喜の声を上げる。

「見つけたのかハジメ君？」

「ああ。」

3階のあの魔方陣がそのまま地上に施した魔方陣と繋がっているらしい。

オスカーが嵌めていた指輪を持っていないと発動しないようになってるみたいだ」

「・・・貰って置いてよかったね」

「それと面白いもんも見つけた。

一定期間ごとに清掃をする自律型のゴーレムが工房の小部屋にあつたり、天上の球体が太陽光と同じ性質を持っていて作物の育成が可能らしい」

「やけに綺麗だったのはその清掃用のゴーレムのおかげってことかな」

「そうだと思う。」

おまけに工房にはオスカーが生前に作っていたアーティファクトや素材が保管されてる。

此奴は武器を創ったり強化したりするのに使えそうだな」

「道具は使ってなんぼだが、感謝して使うぞ？」

「分かってる」

「翼愛さん、これを」

他の資料を探しながらハジメの話を聞いていた私はに雷槍が1冊の本を私に渡す。

「これは・・・手記かな？解放者の仲間、中心となっていた7人との何気ない日常について書かれてるみたいだけど・・・ん？」

手記を見ていた私はその内の一節を見てページをめくっていた手を止め、内容をよ〜く読む。

「ハジメ君、このページの一節を読んでみて」

「ん？何か重要なことでも書かれてたのか？・・・これは」

「オスカーと同じように試練の意味を創った迷宮が有るみたいで。

その迷宮をクリアすれば創設者達の神代魔法が手に入れることが出来る。」

抱けど、どの迷宮でどんな魔法が手に入れることが出来るかまでは書かれていない、回っていけば・・・」

「・・・地球に帰える方法やエヒトを打ち取る方法が見つかる」

「うん今後の方針ができたね」

「ああ、そうだな」

その後、私達は迷宮の正確な場所が示された資料を探すが見つかられず、現在確認されている【グリュューエン大砂漠の火山】、【ハルツィナ樹海】、目星をつけられている【ライセン大峡谷】、【シユネー雪原の氷雪洞窟】から調べていくしかないだろうが、

【魔人領内にある【シユネー雪原の氷雪洞窟】は最後だね】

「んじゃ、次は工房に行くか」

これ以上、めぼしい物は出てこないだろうと判断した私達は工房へと移動した。

指輪で扉の封印を解除して中に入る。

工房内にはいくつもの小部屋があり、その全てを指輪で開くことが出来た。

中には、様々な鉱石や見たこともない作業道具、理論書などが所狭しと保管されており、錬成師にとって楽園が見紛う程である。

「・・・・・・・・」

「どうかしたのハジメ君?」

腕を組んで思案するハジメに香織が尋ねる。

「・・・なあ、翼愛」

「ハジメ君の事だからしばらく此処に留まって学び、他の迷宮攻略のための準備をしたいんでしょ?」

「よくわかったな」

「私も同じこと考えてたから。」

神と戦うことを想定して最後に戦ったヒュドラを軽く倒せるほどまでには強くなっておかないと神殺しなんて夢のまた夢だからね。

皆は?」

「あたしと雷槍はお前達に付いて行くは」

「僕もお姉さんに賛成で」

「私も色々鍛えたいし」

「俺も優花と同じだ」

「香織、ユエはどうする?」

「ハジメ君が残るなら私も残るよ」

「・・・ハジメと一緒にならどこでもいい」

9人はオスカーが作ったこの住処に残り、可能な限りの鍛練と装備を充実を図ることになった。

異世界食堂、洋食の猫屋、オルクス大迷宮最深部店 オープン前編

私達がオルクス大迷宮に住み着いて五日目。

ハジメはオルクスの工房で籠りきで作業してハジメ以外の私達は模擬戦していた。

模擬戦の組み合わせは、私VS牙十郎、黒花VS優花、アレーティアVSアテナで行い雷槍と香織は審判をしている。

アレーティアVSアテナの場合

「どうしたどうしたもつともつと撃つて来い」

「本当にただの人間？」

本当はハジメと同じ魔物肉食べた人間？」

「私は魔物肉食べて居ないわ」

アレーティアは片っ端から魔法を撃つてアテナはそれらを槍で打ち落とす。

黒花VS優花の場合

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ」

「バアン、バアン、バアン、バアン」

「ガキン、ガキン、ガキン、ガキン」

優花は立体的に動きながらクナイや手裏剣など投擲武器を投げて

黒花はWeier ZaubererとSchwarze He

xeで優花の投擲武器を的確に打ち落としている。

私VS牙十郎の場合

「ハアアアア」

「甘い、そして返しの花の呼吸伍ノ型、徒の芍薬」

「会長こそ甘いです」

と剣術を繰り広げている。

私の徒の芍薬を全部捌き終えた牙十郎は直ぐに一閃を入れてきたが私は鞘で刀を持って居る手の手首を叩き持つ手が緩んだ瞬間を刀で弾き

「ハアッ」

「ぐっう」

と鞘で牙十郎の腹を殴り膝をカックンさせて人間が力が入れにくい体制にして刀を首に付けた。

「其れまで勝者、翼愛先輩」

と雷槍の判定を聞いて私は刀を牙十郎の首から外した。

「流石です。」

会長」

「私達の方が実戦経験があるからねそう簡単に勝たせないから」

「そうですね」

「其れにあっちも終わりそうだし」

「あっち?」

と私はとある場所を見て牙十郎と雷槍も釣られてその場所を見ると

「バアン、バアン、バアン、バアン、バアン、バアン」
「バアン、バアン、バアン、バアン、バアン、バアン」

「なあ!？」

と黒花のWei・er ZaubererとSchwarze Hexeの計十二発の弾丸の全てが優花の投擲武器に当たり更に全ての弾丸が跳弾を起こして優花の投擲武器を全部を打ち落とした。

「?でしょ私が投げた投擲武器、百個全部打ち落とs!!?」

と優花が驚いて出来た隙を黒花は一瞬で間合いに入って一発の弾丸を素早く空中に投げて

「グッハあ!!」

優香のお腹に黒花は発勁を繰り出して更に

「グッう!!」

一本背負いで優花の背中から投げて落ちてきた弾丸をWei・er Zaubererのシリンダーに吸い込まれる様に入って優花の脳天に付けた

「参った」

「勝者、黒花」

「私も」

「私も」

「俺も」

上からアテナ、雷槍、黒花、アレーティア、香織、優花、牙十郎の順で答えた。

トータス召喚された際に、言語理解というのスキルを与えられていた。

ゆえに、この異世界ではずっと地球の文字とは違う、独自の文字を使っていた。

しかし、この扉のプレートに書かれている【洋食のねこや】という文字は、この世界の文字ではなかった。

なんと、私達が元いた地球、それも出身国である日本の文字で書かれていた。漢字とひらがなである。

「ハジメ君此れって」

「ああ、異世界食堂の扉だ」

「だよね」

そう私達はこの扉の正体を知っている

異世界食堂

毎週土曜日、特別営業の日になると異世界に繋がる、マジックアイテムのドアベルが鳴る櫛の扉。

食堂の名は『洋食のねこや』。

そして、「あちらの世界」ではこう呼ばれている——『異世界食堂』と。(Pixiv)

そう私達の目の前にはその異世界食堂の扉がある。

「ハジメ君達」

「分かって居る」

私達は異世界食堂の周りを調べた

もし何かの罫だったら一巻の終わりなので回りを探って

「報告、此方罫なし」

「俺も無し」

「私の所も無かった」

「無し」

「あたしと」

「僕の所も無かったです」

「私も」

「俺も」

と全員の報告を聞いて直ぐに行動した。

ドアノブの方は私、黒花、アテナ、雷槍、の順に並び、反対側はハジメ、アレーティア、香織、優花、牙十郎の順で並び

私は

『シャルル』

『何シャル』

『鏡』

『分かったシャル』

シャルルの空間魔法陣から飾りつけも無いただの鑑を取り出して

『開けるね』

『OK』

とハンドサインで異世界食堂の扉を鈴が鳴らないように慎重に開けてそして鏡を入れて中の様子を確認すると異世界食堂の原作と同じ風景が写って居た。

『どうだ？』

『原作と同じ』

『よっしゃー！』

とハジメは思いつ切り喜んだ。

私は異世界食堂の洋食の猫屋の扉を開けた。

「チリンチリン」

と鈴の音とともに

「いらっしやい。何名様ですか？」

扉を開けた途端、ダンディな店主の声が賑わっている食堂に響く。

「九名です」

「アレッタ、九名様、ご案内してくれ」

「はい、マスター！　ねこやにようこそお客様！　此方のテーブルへ

どうぞ」

と原作と同じ金髪のウエイトレスが飛び出してきて、私達を空いたテーブルへと案内する。

私達はウエイトレスの案内で座る。

「こちら、メニューになります。お客さん、東大陸語は読めますか？」
「多分だけど読めるけど出来れば日本語のメニューを八人分でお願
いします」

「あれ、お客様は九人ですよね？」

「そうですが一人片腕が無いので読み聞かせみたいな感じで」

「あ！そんなんですか。」

ならニホンゴのメニューを八人分を用意します」

とウエイトレスは店の奥に行った。

「アレーティアちゃんとハジメ君、勝手だけ良かったかな？」

「うん構わないハジメ達の世界の文字を知りたいから」

「構わない。」

むしろ助かる」

「なら良かった」

と会話して居ると

「お待たせしました。」

日本語のメニュー八人分です」

と日本語のメニューを持って来たのはウエイトレスではなくこの
食堂のオーナーのコックだ。

「あ、ありがとうございます」

「所でお客様は日本人ですか？」

コックがそう言ってアレーティア以外ピックと反応して

「理由を聞いていいですか？」

「いや別に大した事ではないですが」

家のアレッタが日本語のメニュー八人分と言った時は驚きました
ので気になりましたので」

「其れじゃあ聞くけど東京の××市の○○高校のクラス一斉が行方不明
になった事件あります」

「いや東京は知って居ますが×市や○高校は知らないですしの俺が知って居る範囲でクラス一斉が行方不明になった事件は無いですね」

とオーナーのコックを聞いた時

「はあく、後は想像に任せます」

「そうさせてもらいます」

とコックは調理場に戻った。

「翼愛、異世界食堂がある世界は俺達の世界じゃなかったな」

「そうね。」

もし私達の世界だったらここを通過してクラスメイトを避難できた

けどね」

「そうだな」

「ですが今は此処で食事しませんか」

「「「「「賛成！」「「「「「」」」」」」」」」」」」

と八人分の日本語メニューを取りメニューを見た。

因みにアレーティアはハジメと一緒にメニューを見た

そして

「すみませ 、『注文は？』「「「「「!!」」」」」」」」」」」」

と呼ぼうとしたがウェイトレスしているクロが既に待機して居た

「私はお好み焼き広島焼で」

「私はカルボナーラで」

「私はマルゲリータ」

「私はナポリタン」

「俺達は此処で食える揚げ物全品大盛とご飯大盛五人分で」

私はお好み焼き広島焼、アレーティアはカルボナーラ、香織はマル

ゲリータ、優花はナポリタン、ハジメ、黒花、アテナ、雷槍、牙十郎

は此処で食える揚げ物全品とご飯大盛五人分を頼んだ

『分かりました。』

カルボナーラ、マルゲリータ、ナポリタン、揚げ物全品大盛とご飯

大盛五人分、お好み焼きですね。

あとお好み焼きひろしまやきが出来るか分かりませんので少々お

待ちください』

とクロは置くに行った。

私達は料理が出来るまで待とうとしたら

「すみませんが」

「はいなんでしよう？」

私が振り返ると侍の男性と陰陽師の男性が居た。

確か侍の男性は好み焼き豚玉で陰陽師の男性好み焼きシー

フードミックスを何時も頼んでいる常連客だ。

「お主先程好み焼きを頼んだ御座るか？」

「ええ、頼みました」

「其れでぶたたまやしいふうどみつくすとは別のお好み焼きひろしまやきをたのみましたよね？」

「はい」

「すみませんがそのひろしまやきは何でしょうか？」

と侍の男性と陰陽師の男性は私が頼んだ広島焼きを疑問に思っていた

「広島焼きh 『マスタに確認したら出来る事です』 有り難う御座います」

とクロが報告して来た。

ついでに

『()注文は？』

と侍の男性と陰陽師の男性の注文を聞いた。

「お好み焼き！ひろしまやきそおすたつぷりで」かつおぶし多めで

と同じタイミングで同じメニューを頼んだ。

「何故同じものを注文するでござるか」

「其れは此方の台詞です。」

普段のぶたたまはどうしたんですか？」

「未知のお好み焼きがあると知って興味があるのでござる。」

其方こそ普段食べるしいふうどみつくすしかたべないお主が何故

ひろしまやきと言う物を注文するでござるか？」

「ひろしまやきがどうやって作られていうか気になっております」

と口喧嘩を始めたが

『ひろしまやきそおすたつぷりでとひろしまやきかつおぶし多めのお好み焼き?承知いたしました』

「お?およろしく頼むでござる」

と口喧嘩は収まって

「取り敢えず二人ともお好み焼き広島焼きが知りたいんですよ」

「そうでござる」

「ええその通り」

「そうですね」

私は椅子を動かして

「相席良いですか?」

「ええ構いません」

「構わないでござる」

「お好み焼き広島焼きはお好み焼きの始まりの地広島と言う場所から始まった始まりの焼きなんです」

「なんと!?!」

「其れはホントですか!?!」

とこっちに向かって体を出した。

異世界食堂、洋食の猫屋、オルクス大迷宮最深部店 オープン後編

「二人とも落ち着いて下さい」

「むう、そうでごさるな」

「そうですね」

私は二人を落ち着かせ席に着かせた。

「順に追って説明しますね。」

雷槍君

「はい、何でしょ？翼愛先輩」

と私は雷槍を呼んでこっちのテーブルに来た。

「雷槍君、「ストラーダ」でインターネット？げられる？」

「分かりませんが「ストラーダ」」

「《font:ui20》Yes, you can connect to the Internet.」

《font》

「其れは良かった。」

「其れではお好み焼きの説明をします。」

「おお」

「ええ宜しくお願いたします」

「まずお好み焼きの一番最初、つまりお好み焼きの素になった粉物の

料理から説明から行きますね」

「こなもの？」

「興味深いですね」

「では先ず日本と言う場所の時間軸で大体1300年前に吉備真備と

言う人物から前餅が作り方が伝わって後にお好み焼きの素になった

料理です。」

「ストラーダ」

「《font:ui20》Yes, you can connect to the Internet.」

と「ストラーダ」から空中ディスプレイが現れて前餅の映像が流れ

236

た。

「これが好み焼きの素になった料理でござるか？」

「其れで作り方は？」

「作り方は小麦粉を水をといて平らに焼いただけのシンプルな料理です」

「確かにその料理なら拙者たちも出来るでござる」

「たが好み焼きにしては程遠いですが」

「其れで時間が進み千利休と言う人物が前餅を改良した料理ふの焼が出ました。」

「ストラーダ」

『font:ui20』Yes『font』

「ストラーダ」の空中ディスプレイに映っている前餅の映像からふの焼の映像に切り替わった。

「此れもこなものと言う料理でござるか？」

「はい」

「其れで作り方は？」

「はい、この料理は小麦粉ではなくうどん粉と言う粉と水と酒を練って出来た生地を薄くのばして焼いて味噌を塗って丸めた料理です。」

「この料理も拙者たちも出来るでござる」

「ええですがうどんこやみそなど聞いた事が無い食材ですから先ずはうどん粉やみそを捜さないといけません」

「むむそうでござった」

「更に時間が進み一銭洋食が生まれました。」

ちなみのこの料理は製作者が分かりません。

「ストラーダ」

『font:ui20』Yes『font』

「ストラーダ」の空中ディスプレイに映っているふの焼の映像から一銭洋食の映像に切り替わった。

「先程のふの焼よりは大きいが」

「ふの焼と変わりませんね」

「確かに変わりはありませんが塗られている物が違いふの焼は味噌で

「一銭洋食はお好み焼きソースの素になったソースウスターソースが塗られています」

「なんと其れは誠か」

と侍がまたこっちにグイッと来た。

「落ち着いて下さい」

「其れですわ。」

此れだから山猿は？」

「何だと!!」

「落ち着いて下さい」

と二人を落ち着かせて

「更に時間が進み日本と言う場所がアメリカ言う場所が戦争にを仕掛けたんですが戦争に負けて物資が足りない時に生まれたのが？」

『お待たせしました。』

お好み焼きひろしまやきとひろしまやきそおすたつぷりでとひろしまやきかつおぶし多めお持ちしました』

と私達の机にお好み焼き広島焼と広島焼そおすたつぷりと広島焼かつおぶしおおめが運ばれて机に置かれた。

「僕も自分の席に戻ります」

「うんありがとう」

雷槍は「ストラーダ」の空中ディスプレイを消して自分の席に戻った。

「此れが広島焼でござるが」

「確かに私達が普段食べて居るしいふうどやぶたたま違うお好み焼き？此れは何でしょう？」

と陰陽師が机に置かれたヘラに気が付いた。

「其れh「其れも早くお好み焼きひろしまやきと言うのがどんな味が興味が付かないでござる。」

いただきます！」「ち、ちよっと待って」

侍が私の制止を振り切って箸で斬るが

「なかなか切れないでござる」

と広島焼に斬れない事に不安に思っていた。

「此れだから山国のお侍はせっかちですね。

ひろしまやきは此れを使って食べるんですよね?」

とヘラを持って私に質問して来た。

「はい此れはヘラと言う食器で広島焼はこれで切って食べるです」

私はヘラを少しずらして手で木の部分を叩いて上に打ち上げて落ちて来たヘラを逆手持ちでキャッチして広島焼を#のマークで切る

侍も陰陽師は其々ヘラで広島焼を切っている

「其れでは気を取り直して」

「「いただきます」る」

と私は異世界に召喚されて以来食べて居ない広島焼を食べて美味しいと思ひハジメ達の方を見た。

ハジメ、黒花、アテナ、雷槍、牙十郎は大盛の揚げ物と白米をを凄い勢いで食べている。

アレーティア、香織、優花は女子会のような感じでご飯を食べて居る。

私はこの風景を守らないといけないと思った。

そして

「あつという間に平らげてしまいましたね」

「拙者もでござる」

「そうですね」

「忘れる所でした。

少し質問良いですか」

「はいなんでしよう」

「お好み焼きの始まりの焼を知って居たのでこのかつおぶしが何か知って居ますか」

「知って居ます」

「おお其れはよかった」

「ではこのそおすも」

「そおすは分かりませんが今から調べれば分かります」

「そうか」

「雷槍君」

「ふあい」

「飲み込んでから来て」

「ゴックン、はい今行きます」

と雷槍君が来た。

「鰹節は鰹と言う魚から作られます。」

「ストラーダ」

『font:ul20』Yes『font』

と「ストラーダ」から空中ディスプレイが現れて泳いでいる鰹の映像が流れた。

「これが鰹」

「はい」

「この魚がペラペラのかつおぶしになるのが不思議ですね」

「ですので加工映像を流します。」

「ストラーダ」

『font:ul20』Yes『font』

「ストラーダ」の空中ディスプレイに映っている泳いでいる鰹の映像から動画サイトにあった鰹節の加工映像に切り替わった。

二人はその映像が穴が開きそうな位見つめる

く視聴中く

「成程これがかつおぶしの秘密がわかりました」

「では今度はそおすを」

「ええ分かって居ます。」

「ストラーダ」と何処でもできるお好み焼きソースの作り方の動画を」

『font:ul20』Yes『font』

「ストラーダ」の空中ディスプレイに今度はお好み焼きソースの作り方の動画が流れた。

此れも二人はその映像が穴が開きそうな位見つめる。

く視聴中く

「成程今まで疑問に思っていたそおすが解明できたでござる」

「ですがうすたーそおすとゆう新たな謎が生まれました」

「そうでござるな」

「すみません」

「あ、はい」

とアレツタがこっちに来て

「紙とペンを」

「あ、はいわかりました」

アレツタは直ぐに裏に行き紙とペンを持って来た。

「(ストラーダ)はウスターソースの原材料を表示して」

『font:ul20』Yes^{はい}『font』

と「ストラーダ」の空中ディスプレイにウスターソースの原材料が映った。

私は慣れた手つきで文字を書き写した。

「はいウスターソースの原材料を書き写した。」

後は異世界食堂の文字と其方の文字に詳しく人に書き直せば分かるから」

私はウスターソースの原材料を書き写した紙を渡した。

「おお、片付けない」

侍は紙を受け取り

「流石、お好み焼きの歴史に」

「かつおぶしにそおすを教えてください」

「かたじけない」

「お主」

「ええ分かって居ます」

「流石に拙者たちが貰ってばかりで締まるわないので」

「貴方と貴方の連れの食事代を奢らせて欲しい」

「そんな」

「拙者たちが出来るのはせいぜい此れぐらいしかできないでござる」

「ではお言葉に甘えてお願いいたします」

「そうかではまたお好み焼きを教えてください」

「そうですね」

と侍と陰陽師は席に立って

「ではさらば」

「ええ」

と去った。

私は

「シャルル」

「はいシャル」

「母さんに電話を」

「え、でも今まで繋がらなかったシャルよ」

「此処は異世界食堂つまり」

「そうシャル。」

やってみるシャル」

とシャルルは「ラブリーコミュニケーション」に変身して母さんに電話した。

「ラブリーコミュニケーション」のバイブレーションが鳴り響きそして

「繋がったシャル」

私は「ラブリーコミュニケーション」を取って

「もしもし、母さん」

『翼愛、翼愛なの』

と私のお母さん鞆波・A・氷水の声を聴いて

「う、うん私、鞆波・A・翼愛だよ」

私は目から涙が出た。

最初のギフト

私達の通信は異世界を超えて通話ができるが今回私達が召喚された異世界トータスは私達の通信が一切繋がらなかった。

だか私達の前に現れたトータスは別次元である異世界食堂では

『翼愛、翼愛なの』

「う、うん私、鞆波・A・翼愛だよ」

と通信が繋がった

『翼愛今どこかしら？』

「一応異世界食堂だけど此方で起きたこと全部報告するね」

『ええ、お願いするは』

（説明中）

「が、私達が体験した事です」

『成程ね、翼愛達が召喚された異世界は邪神エヒトによる神の遊戯板の世界に其れを解放を心目指して敗れた解放者達ね』

「はい、私達は邪神エヒトを撃つつもりです」

『なあ、そんな危ない事はしないで帰って来なさい』

「そうしたいのは山々んだけど多分クラスメイト全員分の帰る準備をすると絶対邪神エヒトもしくは手下が来ると思う」

『確かに考えられるわね』

「其れと母さんの方は？」

『一応こちらも調べられる範囲で調べれたわ』

「それで分かったのは？」

『翼愛達の教室から邪女神メディア・ピテス・マーキナーと似た力が検出されたわ』

「つまり邪神エヒトは異世界人」

『そうなるわね』

「取り敢えずわち「お姉ちゃんそろそろ行きますよ」分かった少し待つてください」

『ええ、通信は其のまままでお願いね』

「はい」

と黒花に呼ばれてカウンターに行く

「お客さん今回は代金払ってくれた人達がいるんで今日は其のまま帰って構いません」

「マジか」

「それじゃあ」

「「「「「ご馳走様でした!」」」」」」

と異世界食堂を抜けると異世界食堂の扉は消えて

私は通信を再開して

「其れでお母さん、私達はクラスメイト全員を安全に帰す為に邪神工ヒトを撃ちます」

『分かったわ取り敢えず今いるメンバーと話したいわ』

「分かりました」

「ハジメ君達」

「うん?何だ翼愛」

「母さんが皆に話たいみたいで」

「何言つて居るんだ今まで通信が出来ないって言つて居たのに」

「実は異世界食堂で通信したら母さんに繋がったの」

「マジか!」

ハジメ達がこっちに来た

私は通信のスピーカーをONにした。

「母さん、スピーカーを入れた」

『分かったわ、初めましての方もいると思うから自己紹介するわね。』

鞆波・A・翼愛と鞆波・A・黒花の母親の蒼青の勇者、鞆波・A・氷水よ』

アテナ、雷槍、ハジメ、香織、牙十郎は知っている為リアクションは無いが

「あ、初めまして奈落の底で白狼 牙十郎の恋人になった園部優花です」

「私はハジメの妻のアレーティア・ガルデイエ・ウエスペリテイリオ・アヴァタール」

とさりげなく恋人宣言をした優花は兎も角、妻宣言をしたアレー

ティアは香織からジド目の視線が向けられている

『色々ありそうけど先ずはハジメ君達が今居る異世界の状況は理解して居るね?』

「ああ、解放者の一人が残したメッセージを聞いたからなこの世界は神の遊戯板とな」

『ええ其れで翼愛達は安全に帰ってきて欲しいけど』

「無理だろうな俺達も最初はそう思っていたが翼愛に避けて通れないと言ったからな」

『ええ私も其れを聞いたわ。』

だから貴方達にギフトを送ります』

「「「「「ギフト?」「「「「「」」」」」」」

と皆はシンクロして疑問に思った

『神いえ邪神に挑むのは生半可な戦力では返り討ちにあいます。』

ので私が持つて居るコネで翼愛達が持つて居る特典を全員に送ります』

と母さんがそう言うとは「セイザブラスター」と「ラブリーコミュニティン」、黒花は頭にゴロミちゃんを乗せながら「YSPウォッチ」、アテナは「ガングニールのギアペンダント」と「エリザ・ツェリスカのソウルジェム」、雷槍は待機状態の「ストラダー」と「戦極ドライバー」とバナナ、マンゴ、オーズの「ロックシード」を皆が見える用に出す。

「マジか!」

『正しい物だけ選んでいるだけでは強くなりません』

「つまり?」

と香織が疑問を言った。

『私がランダムで選びます』

「それじゃあ!」

と優花が不満が飛び出しそうになったが。

『ですが本来なら皆さんの戦闘を見て選びますが今回は音声しか届いて居ませんので皆さんが得意武器を言えば其れに関係するものを用意します』

「其れじゃあ先ずはハジメ君から」

「俺からか、そうだな、俺は銃が良い」

『ハジメ君は銃ね』

「次は香織ちゃん」

「えつと私は出来れば槍かな」

『香織ちゃんは槍と』

「次はアレーティアちゃん」

「私は魔法」

『アレーティアちゃんは魔法』

「次は優花ちゃん」

「私は職業が投術師だから投擲武器全般で」

『優花ちゃんは投擲武器全般』

「次は牙十郎君」

「俺は刀でお願いします」

『牙十郎君は刀ね』

「私は銃かな」

『翼愛は銃』

「私もお姉ちゃんと同じ銃で」

『黒花も銃』

「あたしは格闘戦が出来る奴を」

『アテナちゃんは格闘戦』

「僕は居合刀で」

『雷槍君は居合刀ね。』

其れじゃあ皆楽しみにしていてね』

と母さんからの通信が切れた。

「其れじゃあ皆楽しまして待とうね」

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

〜一週間後〜

ハジメの試作品オートメールが完成して

「バン、バン、バン、バン」

「バン、バン、バン、バン」

今私はハジメと黒花の二丁拳銃の格闘術「ジユウクンドー」での模擬戦を行っている

流石に実弾は危ないので二人ともハジメ作の模擬戦専用のゴム弾を使っている。

黒花は流石にハジメの試作品オートメールと試作銃、シユラークのテストなので手加減している

手加減の内容はハジメが避けない時は撃たない。

リロードはハジメはスピードローダーを使って黒花はスピードローダーを使って居はいけけないが黒花は球切れした片方の銃を空中に投げて更に弾丸六発を空中に投げて一発でシリンダーの全部の穴に弾丸を入れてキャッチして直ぐに発砲する。

の繰り返ししてお互いの銃が顔を捉えた瞬間。

「ぐおおん!!」

「ぐへえ」

突然段ボールがハジメの頭上に現れて其のままハジメの頭に落ちて来て

「ハジメ」君」

と先に動いたのアレーティアと香織で私達は少し遅れてハジメの下に移動した

「大丈夫ハジメ君」

「大丈夫だ」

と頭に大きなたん瘤を乗せながら答える

「今治療するね」

「ああ有り難う」

「ハジメ君この段ボールは多分母さんの贈り物だ」

「じゃ何で俺の頭上に現れたのだ？」

「多分まぐれ」

「まぐれか」

「其れよりも開けるね」

「好きにしろ」

と私は段ボールを空けて中身を確認すると入って居たのは「音銃剣

錫音、ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック、ヘンゼルブレイメンワンダーライドブック」「ギアトリンガー、ゼンカイガオールのセンタイギア+レジェンド戦隊ギア」刀と巻物「トロピカルパクト、キュアフラミンゴのハートクルリング」「ジユウオウザライト」と「キューブライノス、キューブクロコダイル、キューブウルフ」「ワイズドライバーと指輪一式」「LBCSオーティーンMk-2」「風双剣翠風、猿飛忍者伝ワンダーライドブック、こぶた3兄弟ワンダーライドブック」「マスターライセンス」が入って居た。

「ご丁寧に其々の名前が書かれている付箋が張って合っていた。

私は「音銃剣錫音、ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック、ヘンゼルブレイメンワンダーライドブック」以外を段ボールに入って居る物を全部取り出して

「皆受け取って」

と投げる皆は其々自分のを受け取る。

ハジメは目をキラキラしている。

私は「音銃剣錫音」と「ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック」を取り出した

「其れじゃあ皆一人ずつ行くよ」

私は「ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック」のページを開く。

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

とある森に迷い込んだ小さな兄妹の、おかしな冒険のお話……』

閉じたワンダーライドブックを音銃剣錫音にセットする。

「音銃剣錫音」からポップ調の待機音が鳴り響き、私の背後に巨大な「ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック」が空中に出現し、トリガーを弾く。

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

トリガーを弾いた事でワンダーライドブックが開き私は音銃剣を構える。

「変身！」

力強く突いた音銃剣からエネルギーの斬撃が解放されたれ、背後に出

現された巨大なワンダーライドブックから無数のお菓子が飛び出して、私の周囲を回転しながら包み込む。

そして、私の身体に装甲が纏って先程放たれた斬撃が戻りバイザーへと変化して

『銃剣撃弾！』

銃でGO！GO！否！剣でいくぞ！音銃剣錫音！

錫音楽章！

甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを斬り刻む！』

と音の剣士「仮面ライダースラッシュ」に変身完了した。

「次は？」「俺が行く」ハジメ君ね」

と私はハジメにそう言うのと

『ザ・ワールド！』

「ああ前から変身している翼愛達を見ていて憧れと嫉妬を抱いていたが氷水さんが変身アイテムを貰えると聞いてワクワクして今日変身できるとかサイコーだ。

と言いながら「ジュウオウザライト」のキューブを回し、絵柄をサ伊に合わせる。

「本能覚醒！」

『ウオー！ウオー！ライノース！』

そしてライトのボタンを太ももで押し、ジュウオウザライトを上に掲げる、すると金、黒、銀色のエネルギーキューブが現れてそして変身を完了させると

「世界の王者！ジュウオウザ・ワールド！」

とハジメはジュウオウザ・ワールドのキメ台詞決めた。

「うお、本当に変身できた」

とハジメはハイテンションになっているが私は無視して

「次は黒花行く？」

「はい」

と「ギアトリンガー」に「ゼンカイガオーンのセンタイギア」をセツトして

「チェンジ全開！」

「ギアトリンガー」のハンドルを回して

『25バーン!』

『ババン!ババン!ババン!ババン!』

と待機音が流れて引き金を引くと

『font:94』ババババーン!ゼンカイ!ガオーン!』

「動物パワー!ゼンカイガオーン!」

と黒花もゼンカイガオーンのキメ台詞決めた。

「次は雷槍君かな?」

「あ、はい翼愛先輩これは刀ですか」

「そうだね試しに刀を抜いてみて」

「はい」

と刀を抜くと鉛色に鈍く光る刀身だった。

「雷槍君、其れを両手で強く握って」

「こうですか?」

と雷槍が刀を強く握ると鉛色に鈍く光る刀身が黄色に染まった。

「翼愛先輩これは」

「うん間違いないね。」

鬼滅の刃の刀「日輪刀」だね」

「となるとこの巻物は」

と雷槍は巻物を紐を解いて中身を見ると雷の呼吸が掛かっていた。

「此れは雷の呼吸の指南書だね」

此れが雷槍君の特典だね」

「はい」

「其れじゃあ次はアテナだね」

「マジか、確かに格闘戦と言ったがプリキヤアかよ」

「トロピカルパクト」と「キュアフラミンゴのハートクルリング」を見

て愚痴を言った

「言ってもしようがないから行ってみる」

「分かった。」

プリキュア!トロピカルチェンジ!」

「トロピカルパクト」の鍵穴に「キュアフラミンゴのハートクルリン

グ」をセットして開錠して「トロピカルパクト」を開けて

「レッツ！メイク！キャッチ！

チーク！

アイズ！

リップ！

ヘアー！

ドレス！」

徐々に姿が変わり

「はためく翼！キュアフラミンゴ！」

とキュアフラミンゴに変身した。

「良かった翼愛みたいなフリフリの可愛い系じゃ無くて」

「私は在れ気に入っているんだけど」

「そうは言っても次行くぞ」

「そうだね。」

次はアレーティアちゃんだね」

「うん、だけどどうやって使うの？」

「えっとねまず「ワイズドライバー」を腰に装着して」

「こう？」

とアレーティアは私のゆう通りに「ワイズドライバー」を腰に装着して

「次は？」

「ワイズドライバー」の左右日対処になっているレバーを上下反対にする」

「分かった」

『シャバドウビ タッチ ヘンシン シャバドウビ タッチ ヘンシン』

「次は」

「今度はこの指輪を左人差し指に嵌めて「ワイズドライバー」の手とハイタッチする」

私は「チェンジウィザードリング」をアレーティアに投げた
「うん」

アレーティアは「チェンジウィザードリング」を受け取り左人差し指に嵌めて「ワイズドライバー」の手とタッチした

『チェンジ ナウ』

とアレーティアの前に仮面ライダーワイズマンの魔法陣が現れてそのまま通過すると仮面ライダーワイズマンに変身した。

「如何かなアレーティアちゃん」

「すごい魔力が上がっている」

「其れはよかった次は香織ちゃん」

「翼愛ちゃんこれ何かな」

と香織は「LBCCオーデインMk-2」を不思議そうに見る

「多分これは「LBCCオーデインMk-2」だね」

「えるびしーえす?」

「問い合えず変身した方が説明が早いから」

「うんそうだね。」

それでどうやって変身するの?」

「えつとねLBCCコネクト!オーデインMk-2!と言えば変身できる」

「分かった。」

「LBCCコネクト!オーデインMk-2!」

『カウンタースystem起動、スキンフィールド展開、コネクト・コンプリート』

と「LBCCオーデインMk-2」が消えて香織の身体にオーデインMk-2のようなアーマーが現れて徐々に衣服が変わり変身が終わった。

「此れが私の特典?」

「うん、飛べるし結構早いから慣らし運転した方が良いともういよ」

「翼愛ちゃんがそうゆうなら行くね」

と香織は慣らし運転で飛んで行った。

「次は優花ちゃんね」

「はあく私は投擲武器と頼んだけど何で剣なの」

「ああ、大丈夫少しずつらせば手裏剣になるから」

と私は優花が持つて居る「風双剣翠風」を少し手に持つて少しずらすと「風双剣翠風」が手裏剣になった

「ほら手裏剣に」

「ああ、確かに手裏剣ね」

「其れじゃあ変身してみろうか」

「分かった。」

「だいたいこんな感じかな」

と優花は「猿飛忍者伝」のページを開く。

『猿飛忍者伝！』

とある影に忍は疾風！あらゆる術でいざ候！』

閉じたワンダーライドブックを「風双剣翠風」にセットする。

「風双剣翠風」から和風の待機音が鳴り響く

「ごめん翼愛次は如何すればいい？」

「「風双剣翠風」を分断するの」

「分断、こうかな？」

と優花は「風双剣翠風」を分断させ

『双刀分断』

ライドブックを開かせて優花は構えて

「変身！」

二刀流になった「風双剣翠風」からエネルギーの斬撃が十文字に解き放たれ、

『壺の手、手裏剣！』

背後に出現された巨大なワンダーライドブックから風が吹き出して飛び出して、優花の周囲を回転しながら包み込む。

『式の手、二刀流！風双剣翠風！』

そして、優花の身体に装甲が纏って先程放たれた斬撃が戻りバイザーへと変化して

『翠風の巻！甲賀風遁の双剣が、神速の忍術で敵を討つ！』

と風の剣士、仮面ライダー剣斬に変身完了した。

「大体予想していたけどまんま忍びね」

「ちゃんと注文通りでしょ？」

優花は分断した「風双剣翠風」を手裏剣にして投げて

「そうね。」

注文通りね」

「最後は牙十郎君」

「俺のは？」

「うん特捜戦隊デカレンジャーのデカマスターの「マスターライセンス」ね

牙十郎君にピッタリな奴」

「会長がそう言うなら変身は知っているんで行きます」

と牙十郎君は構えて

「エマーゼンシー！デカマスター！！」

「マスターライセンス」が開いた。

「白狼 牙十郎の要請から、マスターライセンスが開くとともに、デカベースから形状記憶宇宙金属デカメタルが転送される、そして、超微粒子状に変換されたデカメタルが牙十郎の全身を包み、変身完了するのだ」

行き成りジユウオウザワールドに変身して居るハジメが急に解説をしていた。

「フェイスオン！」

とその間にも牙十郎君変身完了していた。

私はハジメの下に行き。

「急に如何したの？ハジメ君」

「いや、なんかやつといた方が良いと思ってやってみた」

「そう、取り敢えずハジメ君に黒花、アテナも決め台詞言ったから牙十郎君もやろうか」

「あ、はい。」

ゴホン

百鬼夜行をぶった斬る！地獄の番犬！デカマスター！」

と少し不純物が混じって居るけど牙十郎君も決め台詞を言った。

「此れで皆の特典が確認できたね」

「ああ」

「うん」

「そうだね」

「はい、お姉ちゃん」

「ああ」

「はい翼愛先輩」

「うん」

「はい会長」

上からハジメ、アレーティア、香織、黒花、アテナ、雷槍、優花、牙十郎君が答えた。

「それじゃあ次は？」

私は変身を解除して

「異世界食堂に行こうか」

「ああ、そう言えば今日土曜の日か」

ハジメも変身を解除して雷槍以外全員、変身を解除した。

「そろそろ扉が現れるころだから行こうか？」

「」「おとおおー」「」

私達は異世界食堂向かった

ギフトの試運転

母さんから特典を貰って2カ月が立ち現在私達は

「今日こそ翼愛ちゃんから一本取る」

「簡単に取らせないよ」

私はワシピンクに香織は「LBCSオーデインMk-2」を纏った空中模擬戦をしている。

今日は此処を出る為チーム戦の模擬戦をしている。

振り分けは私、黒花、アテナ、雷槍VSハジメ、アレーティア、香織、優花、牙十郎の振り分けになっている

私は周りを見渡すと黒花はゼンカイガオーンに変身して40番目のスパー戦隊、動物戦隊ジュウオウジャーのジュウオウイーグルの能力を使って飛行して。

其れを追いかけるように仮面ライダー剣斬、忍者ぶた3に変身した優花が分身して三人がかりで黒花を追いかける。

ハジメはジュウオウザワールド、牙十郎はデカマスターに変身して、対するはアテナでキュアフラミンゴに変身して二対一で戦闘している。

最後はアレーティアは仮面ライダーワイズマンに変身してワイズマンの魔法とトータスの魔法を交互に組み合わせて魔法を撃ち其れに対して雷槍は雷の呼吸と「日輪刀」で魔法を避けたり切ったりしている。

と皆の様子を見てみると

「翼愛ちゃん大分余裕だね」

私は香織の声が聞こえて私は翼を巧みに操作して後ろから来る弾丸を避けて体をを後ろに向けるとサイレンサーを付けた「ヴァイス」を構えている香織が目に入って私は左手には「セイザブラスター」右手に「キューウエポン」のキューショットを構えて連射する。

香織は「LBCSオーデインMk-2」の盾を構えながら回避行動を取る。

私はその間に「キューウエポン」のキューショットからキュースピ

アに変えて壁に刺して私は進路を無理矢理上に変えて香織の上を取るつもりが香織も私と同じ方法で進路を変えて私の後ろをキープする。

「流石に同じ手で負けるつもりは無いから」

「其れは残念」

私は「キューウエポン」のキョースラツシュからキョースラツシュに変えて逆手持ちして香織に接近戦を持ち込む。

「せいー！」

「ハアあ!!」

香織はサイレンサー付き「ヴァイス」を槍に持ち替えて私の「キューウエポン」のキョースラツシュを受け止めてつばぜり合いになり私は空いている左手で「音銃剣錫音」を逆手持ちで持ち攻撃するが香織は其れに察知して私を弾いた。

私は「キューウエポン」のキョースラツシュからキョーショットに変えて更に「音銃剣錫音」を

『銃奏』

銃奏モードに変えて香織は槍をサイレンサー付き「ヴァイス」に持ち替えた。

そして私は後ろ向きながら飛行しながら「キューウエポン」のキョーショットと銃奏モードになった「音銃剣錫音」で連射して香織は盾を構えながら「ヴァイス」連射した。

私はマルチタスクをこなしながら翼を操作して回避しながら黒花と優花の方に行く。

そして香織が放った一発の弾丸を私は「音銃剣錫音」の銃奏モードから

『剣盤』

剣盤モードに変えて

「ハア!!」

と弾丸の弾道を「音銃剣錫音」で逸らした。

逸らした弾丸は

「優花ちゃん避けて」

「「え?！」」

三人掛け分身した優花が一同にこつちに向いた。そして弾丸は掛け分身した一体に当たって消滅した。弾丸が当たって消滅した個体は本体では無かった。

「よかった」

「他人を心配している暇はないよ香織ちゃん」

私はよそ見をしている香織の懐に潜り

「しまった!!」

と香織は「ヴァイス」を構えるが距離が近すぎて上手く構えられず私は香織の手首を握って捻る。

「痛いー」

と香織は「ヴァイス」を落として私は一旦離れて「キューウエポン」のキューショットからキュースラッシュに変えて「ワシキュータマ」をセットして

『ギョラクシー!!』

と香織に突撃する。

香織は槍を構えてカウンター待ちをして私は引き金を引いて私はキュースラッシュを香織は槍を振ってそのまますれ違いしてそのまま数秒たち

「ああ今回も負けちゃったか」

と香織が纏っている「LBCSオーティーンMk-2」が強制解除されて重力に釣られて落ち始めた。

私は直ぐに香織の下に行くが

「風壁」

と風魔法でゆっくりと落ちて地面に着地した

私は其れを見て私も地面に着地した。

「ああ、今日こそ翼愛ちゃんから一本取るつもりが」

「そう簡単に取りらせるつもりは無いからね」

「そうだけど」

「其れより皆の結果見ない?」

「そうだね」

私と香織は皆が居る場所に移動する。

模擬戦の結果

優花は香織の言葉で一瞬黒花から目を離してしまいその間に26番目のスーパージョウ戦隊、忍風戦隊ハリケンジャーの超忍法・影の舞にやられたようだ

ハジメ&牙十郎VSアテナとアレーティアVS雷槍は流石に決着がつかず引き分けになった。

少し休憩してそれから私達は

「皆……俺が作った武器と翼愛さんの母親から貰ったアイテムや俺達の力は、地上では異端だ。」

聖教教会や各国が黙っているということはないだろう」

「だね。」

実際、母さんも不思議な目で見られた事が有るといったからね」

「うん」

「兵器類やアーティファクトを要求されたり、戦争参加を強制される可能性も極めて大きい」

「そうだろうな」

「実際僕達も経験しています」

「教会や国だけならまだしも、バックの神を自称する狂人共も敵対するかもしれない」

「そうだな」

「エヒトルジュエを討つと定めた以上、この世界全てを敵に回す可能性も十分にある。」

そもそも聖教教会に喧嘩を売る行為だし、命が幾つあっても足りないね」

「うん！」

「私とハジメ君達なら乗り越えるよ」

「けど、俺達は最強だ。」

全部なぎ倒して、世界を越えよう」

「」「」「ああ／うん！」「」「」「」

「んじゃあ、行きますか。」

「神殺しを兼ねた地球へ帰るための手段を探す旅に」

旅の目的を語った後、私達は魔方陣が放つ光に包まれた。

そして光が収まると洞窟だった。

「なんでやねん」

魔方陣の向こう側は地上だと無条件に信じていたハジメは、代り映えしない光景に思わず半眼になってツツコミを入れた。

「はあああ。」

しょうがないんじゃないか

あの迷宮を作ったのは神を撃とうとした解放者だから自然と隠すんだと思うの」

「「うんうん」」

「あ、ああ、そうか。」

確かにな。

反逆者の住処への直通の道が隠されていないわけはないか」

私達のの指摘にハジメはハツとする。

そのまま道なりに進み、途中のトラップや封印された扉はオルクスの指輪が反応して解除されていった。

更に進むとやがて新鮮な空気の流れを感じるようになり、更に光が見えてくる。

その光を潜れば、待望の地上へと出た。

「よっしゃあああー!! 戻ってきたぞ、この野郎おー!!」

「んっー!!」

「此処まで頑張った甲斐が有ったねハジメ君」

香織とユエを抱きしめたまま、ハジメはくるくると廻り

「長かったね」

「そうだな、優花」

と牙十郎と優花は抱きしめ合った

「皆喜んでいの中悪いけど魔物に囲まれているから」

私は「音銃剣錫音」を取り出した

「数90です」

と黒花が数を教えながら「ギアトリンガー」を取り出した。

「見た目はホークっぽい奴だな」

とアテナは「ガングニールのギアペンダント」を取り出して

「一人十匹にしませんか」

と雷槍「戦極ドライバー」と「バナナロックシード」を取り出した。

「全く？無粋な奴らだ」

「そうだね。」

もう少し余韻に浸らせてほしかったね。

アレーティアちゃん

「うん」

「でも試し切りには丁度良いと思いますよ」

「そうだねいつも模擬戦しかわからなかったからね」

と其々自分の獲物を取り出した

「其れじやあスタート」

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

『猿飛忍者伝！』

『バナナ』

「チェンジ全開！」

『とある森に迷い込んだ小さな兄妹の、おかしな冒険のお話…』

『とある影に忍は疾風！あらゆる術でいざ候！』

『ドライバーオン ナウ』

『ロックオン♪♪』

『25バーン！』

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

『双刀分断』

『シャバドウビ タッチ ヘンシン シャバドウビ タッチ ヘンシ

ン』

『ババン！ババン！ババン！ババン！』

『ザ・ワールド！』

「二」変身！「二」

『font:94』バババーン！ゼンカイ！ガオーン！』

「エマージェンシー！デカマスター!!」

「本能覚醒！」

「Croitzalronzell Gungnir zizz
l」

「LBCSコネクト！オーデインMk-2！」

『銃剣撃弾！』

『壺の手、手裏剣！』

『チェンジ ナウ』

『カヒュン、カモーン!!』

「フェイスオン！」

『ウオー！ウオー！ライノース！』

『ババババーン！ゼンカイ！ガオン！』

『カウンターシステム起動、スキンフィールド展開、コネクト・コンプ
リート』

『銃でGO！GO！否！剣でいくぞ！音銃剣錫音！』

『式の手、二刀流！風双剣翠風！』

『バナナアームズ！ナイト オブ スピアー！』

『世界の王者！ジユウオウザ・ワールド！』

『百鬼夜行をぶった斬る！地獄の番犬！デカマスター！』

『動物パワー！ゼンカイガオン！』

『錫音楽章！』

『翠風の巻！』

『甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを斬り刻む！』

『甲賀風遁の双剣が、神速の忍術で敵を討つ！』

其々変身完了して私達は変身完了して90匹が居る魔物軍団に突
入した。

結果一分以内に片づけた。

そして私達は変身解除したがハジメは変身解除しなかった。

「ハジメ君如何したの？」

「いややってみたい事が有ってな。

いいか？」

「別に構わないけど皆は？」

「私はハジメがやりたい事は賛成だよ」

「うん、私も」

「はい私も問題ありません」

「あたしは良いぞ」

「僕も姉さんと同じです」

「私もOK」

「俺もだ」

「よし行くぞ」

〔ジユウオウザライト〕を二回押した。

『ジャンボ』

キューブライノス、キューブクロコダイル、キューブウルフははるか遠くに行った。

ハジメは気にせず今度はサイに合わせてボタンをまた押すと

『キューブライノス』

と音流が流れると地面が地響きを起さる。

更に徐々に地響きが大きくなる。

その地響きの正体はトレーラーのようなサイ、キューブライノスが来た

「来た来た。」

「そんじゃあ行つて来る」

とキューブライノスが乗って行き

『ジャンボ』

キューブライノスに搭載されている二つのキューブが飛び出して変形して

『キューブクロコダイル、キューブウルフ』

キューブクロコダイル、キューブウルフなり更にハジメは

「動物合体」

『ライノス、クロコダイル、ウルフ、ウオーウオーウオー』

キューブライノスに変形して

『9』

右側にキューブクロコダイルが来て

『7』

右手になり

『8』

キューブウルフが頭になって

『トウサイジユウオウオー』

「完成トウサイジユウオウオー」

とトウサイジユウオウオーになった。

「よっしやああー!!夢にまで見た巨大ロボだ」

と大興奮してトウサイジユウオウオーがドタバタと動き始めた。

足元に居る私達は風圧が凄い事になっている

「ちよつと止まれやがれーハジメ」

とアテナが大声で叫び

「ああ悪い。

興奮して」

とトウサイジユウオウオーが大人しくなった。

「取り敢えず私達をトウサイジユウオウオーの頭に載せて」

「ああ分かった」

とトウサイジユウオウオーの左手が私達の下に来て私達は其れに乗りトウサイジユウオウオーの頭まで運ばれて私達はトウサイジユウオウオーの左手からトウサイジユウオウオーの頭に乗り換えた。

高さは高速ビル並みの高さで風が少し強かった

「そんじや移動するぞ」

とトウサイジユウオウオーが歩き始めた

兎とケルベロス

私達がトウサイジユウオウの頭に乗って移動している。

今私達が居る場所はライセン大峡谷で此処はこの世界、トータス一で魔法が使えにくい場所であると本で読んだ事が有る。

アレーティア曰く倍以上の魔法を使えば問題ないと言って来た。そして私達の目的地は樹海である。

峡谷抜けるには砂漠か樹海の二つがあるのが補給無しで砂漠横断はきついで補給しやすい樹海側に決まった。

後ブルックと言う町が近いのでそちらもよるつもりだ

と思いついて返していると何か気配を感じて私は「セイザブラスター」と「ワシキュータマ」を取り出して

『ワシキュータマ』

『セイ・ザ・チェンジ』

「スターチェンジ」

とワシピンクに変身してワシピンクの翼で空を飛びトウサイジユウオウの顔まで行く

「ハジメ君この先に大きい気配と小さい気配が二つ有るから偵察するね」

『ああ、頼む』

と私はワシピンクの翼で空を飛び気配がする方に行った。

気配がする方に行く

「だずげでぐだざざい！ ひっー、死んじやう！ 死んじやうよお！ だずけてえく、おねがいしますう〜！」

と黒い何かを背負っている白髪のうさ耳少女、兎人族が双頭ティラノに追われていた。

流石に私の目の前で捕食されるのは私も目覚めが悪いので「キューウエポン」を組み立てて「キューソード」私は空中で一回転してから双頭ティラノの方に向かう。

落下スピード+自身が出せるスピードの二つで加速しながら

「ワシキュータマ」を「セイザブラスター」から外して「キューウエポ

ン」に

『ギャラクシー!!』

と「キューソード」の刀身に大きなエネルギー刃が出て来て双頭テイラノの片方の頭を

「ハアア」

と切り空中に浮かぶ。

直ぐに体制を切り替えて溪谷の壁に足を付けて三角飛びの要形で飛んでもう片方の双頭テイラノの頭を切り空中に飛ぶ。

両方の頭を斬られた双頭テイラノは千鳥足になりそしてバランスを崩して倒れ更に切り飛ばした頭も落ちて来て

「ふぎやあああああゝゝゝ」

と相当な衝撃で兎人族の少女が倒れた。

ついでに兎人族の少女が背負っていた黒い何かも地面に落ちてその正体が分かった。

黒い何かは黒髪で傷だらけの犬人族の女性だ

見た目は黒髪のロングヘアで兎人族の少女と変わらない

私は兎人族の少女の目に前に着地して

「大丈夫?」

「ぼくり、助はい、助かりましたがいまじだ」

と顔をぐじやぐじやになりながらもこつちを見ていて

と顔を腕で吹いて此方視見て

「所でどちら様でしょうか?」

「そうね。」

今変身解除するね」

とワシピンクを解除しようと瞬間、私達の居る所に大きな影が現れて

『なんか見つかったか?』

とハジメの声がして私と兎人族の少女は其方を見ると太陽の光で出来た影で黒く染まって赤い目が怪しく光りるトウサイジユウオウが現れた。

其れを見た兎人族の少女は

「ぎゃあああああ——

—だずげでぐだざり、たりべとあおだをじたように《助けてください、ダイヘドアを倒したように》」

兎人族の少女はビビって泣き出した

『おい翼愛、そのウサギ、何か言って居るが分からないが大体は俺のトウサイジユウオウに文句言って居る残念ウサギを黙らせておけ』
「取り敢えず分かった」

と私は兎人族の少女の方に振り向こうとした瞬間膨大な殺気を感じて急いで兎人族の少女振り返ると兎人族の少女が背負っていた黒い犬人族の女性がいつの間にか起きていてさらに目を疑うようなことが起きていた。

黒い犬人族の女性の髪の毛の中から二つの犬の顔が出て来て、黒い犬人族の女性の顔と二つの犬の顔は地獄の番犬のケルベロスの様な狂犬の顔をしていた。

黒い犬人族の女性は足に力を込めてそして地面にはつきり跡が残る勢いでトウサイジユウオウの方に飛んで行った。

「チロルちゃん!」

と兎人族の少女は黒い犬人族の女性、名前はチロルみたいで行き成りの出来事に驚いて居た。

私は別の事に驚いて居た。

チロルの髪の毛が徐々に変化し始めて大きな右腕に変形した。

「ハジメ君避けて!!」

『ハア!?!』

流石にハジメも今日の前で起きたことに状況が飲み込めず

「ガールルル!!」

トウサイジユウオウはチロルの巨大な右腕の大振りのパンチを諸に喰らって傾き始めた。

トウサイジユウオウ何とかバランスを取ろうとするがチロルがトウサイジユウオウの顔に着地してさっき飛んだ等に足に力を込めてトウサイジユウオウの顔を蹴った。

『やばいバランスが』

と二回目の衝撃で完全にバランスを崩して地面に倒れて土煙が上
がった私と兎人族の少女は土煙が晴れるまで顔を覆っている

「シアちゃんから離れろ」

と私を殺そうとする声が聞こえて其方を見るとトウサイジユウオ
ウを殴り倒した右腕を大振りに構えているチロルがこつちに向かっ
て飛んで来た。

私は直ぐに「キューソード」を構えてセットしている「ワシキュー
タマ」を外して「オウシキュータマ」を

『ギャラクシー!!』

セットして両手で大振りに「キューソード」を挙げて

「ガルルル!!」

「はああ!!」

とチロルは巨大な右腕の大振りのパンチを繰り出して私は力強く
「キューソード」を振り下ろした。

衝撃はすごく私は地面を引きずりながら下がりがりチロルの攻撃を受
け止めた。

チロルは直ぐに左腕を大きな犬の顔になり私に噛みつこうとして
いた私は直ぐに離れようとしたが「キューソード」が動かなかった。

私は直ぐに其方を見ると巨大な右腕を形成している髪の毛が私の
両手ごと拘束していた。

私は焦らず直ぐに

「シャルル、「ケンビキョウキュータマバランスカスタマズ」

「分かったシャルル」

「セイザブラスター」の方に魔法陣が現れて其処に「ケンビキョウ
キュータマ、バランスカスタマズ」が

『ケンビキョウキュータマ』

セットされて左足で操作して左手で「セイザブラスター」のグリッ
プを握って

『セイ・ザ・アタック』

スキルを使って私の身体が小さくなってチロルの拘束を抜けたそ
の後、左手の大きな犬の顔の攻撃は躲して

「ケンビキョウキョウタマバランスカスタマズ」を「セイザブラスタ」外して

「次は「オオクマキョウタマ」を」
「はいシャル」

と魔法陣が現れて私は「ケンビキョウキョウタマバランスカスタマズ」を其処に入れて代わりに「オオクマキョウタマ」が出て来て私は「セイザブラスタ」にセットして

『オオクマキョウタマ』

『セイ・ザ・アタック』

スキルを使つて元の大ききになってワシピンクを变身を解いて「音銃剣錫音」と「ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック」を取り出して

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

とある森に迷い込んだ小さな兄妹の、おかしな冒険のお話…』

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

「变身」

『銃剣撃弾！』

銃でGO！GO！否！剣でいくぞ！音銃剣錫音！

錫音楽章！

甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを斬り刻む！』

と仮面ライダースラッシュに変身して更に「ブレーメンのロックバンドワンダーライドブック」をとりだして何時でも仕掛けるように構える

チロルは直ぐに私の方を見て仕掛ける私は「音銃剣錫音」から「ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック」を取り外して「ブレーメンのロックバンドワンダーライドブック」をセットする瞬間

「だめ〜〜」

シアがチロルに体当たりして溪谷の壁にぶつかった。

私は呆れて思わず变身を解除してしまった。

直ぐにシアがチロルを引っ張りながらこっちに来て

「すみません」「ドカン」すみません「ドカン」すみません「ドカン」

とシアは涙目になりながらチロルの頭を持ちながら謝り倒しをしている。

其れも地面に罅が入る勢いで

「私達は貴方達に敵対は有りません。」

私が有れにビビった為チロルちゃんが過剰反応しちゃって本当にすみませんでした。「ドカン」

「私は良いけど私の連れが」

私はシア達の後ろを見る

シアは私に釣られて後ろを見ると

「おい」

「ひいいいー!」

ジュウオウザワールドの野性大解放を発動しているハジメが居た。

「おい、お前らは俺達の敵か?」

「違います」「ドカン」違います「ドカン」本当にすみませんでした。「ドカン」

「ならなぜ攻撃した?」

「すみません」「ドカン」すみません「ドカン」本当にすみませんでした。「ドカン」

私がアレにビビった為チロルちゃんが過剰反応しちゃって本当にすみませんでした。「ドカン」

「アレでトウサイジュウオウの事か?」

「はいトウサイジュウオウの事です。」

本当にすみませんでした。「ドカン」

「ハジメ君彼女たちも敵対心が無いし此処は大目に見ない。」

其れにシアちゃん相方のチロルちゃんが死にそうだし」

「え?チロルちゃんが」

とシアが恐る恐るチロルの方を見るとチロルの口から魂のような物が飛び出して今にも昇天しそうになって居て二つの犬の顔が一生懸命にチロルの魂のような物を口の中に戻そうといていた。

「ぎゃあああああ、死なないでチロルちゃん」

シアはチロルに力強く抱きついた

「バキボキバキボキ」

と体から骨が軋む音が鳴りチロルの魂のような物が口に戻ったが
「痛い痛い痛いシアちゃん痛い」

とチロルは悲鳴を挙げていた。

其れを見ていたハジメは

「はあく翼愛がそう言うなら今回は大目に見るか

其れに怒る気も失せた。

香織今にも死にそうな方を治療しろ」

「うんハジメ君、分かった。

シアちゃんだっけ、チロルちゃんを治療したいから放してくれるかな？」

「はあ!!そうでした」

とシアは何か思い出して直ぐにチロルを解放してくれた。

「友達に殺されそうだった」

チロルはそう言って気を失った。

「チロルちゃん!!死なないで」

とシアは涙を流しながらまた抱きつこうしていたが

「お前はこっちだ」

とハジメはシアの髪の毛を掴んで引つ張った

「痛いです」

「少しは我慢しろ。」

どうして樹海に居る筈の兎人族と犬人族がライセン大峽谷に居るんだ？」

「話しますから放して下さい」

取り敢えずシアとチロルは引き離して香織はチロルの診断、私達はシアから自重聴取する事にした。

話し合い

チロルの治療は香織がやって

「私は兎人族のハウリアの長の娘シア・ハウリアと言います。

此方が？」

「私は犬人族のハウンド族だったチロル・ハウンドと言います。

現在私はハウリア族の一員です。」

「では？お話しさせていただけますね」

「うん、お願いね」

「私達ハウリア族は亜人国~~国~~フェアベルゲン~~国~~にある樹海の奥の集落で暮らしていました。

でも私達のせいで一族は国から追われる事になってしまったのです。

亜人族は本来魔力を持って居ないのですが、私達は魔力を持ち直接操作できます。

更に私の固有魔法は未来視、仮定した先の未来を見る力を、チロルちゃんの固有魔法は髪の毛の操作、髪の毛を自在に操作できる力を持って居ます。

これらは魔物と同様の力を持つという事

捕まれば間違いなく処刑されるでしょう。

一族は樹海を後にし北の山脈へと向かいました。

ですがその途中で帝国兵に見つかってしまったのです。

ハウリア族は争いを苦手とする一族、ですがチロルちゃんのお陰で半数以上は逃げられました。

途中から帝国兵が私達を殺すつもりで攻撃して来て其れをチロルちゃんが庇ってつくれたんです。」

「成程ねあの傷はその時の物なんだね」

「はい」

「続けますね。」

私が大岩をチロルちゃんと帝国兵の間に投げてその間に逃げて全滅を避けるために魔法が使えないこの谷へと逃げ込んだのですが、モ

ンスターが襲ってきて、お願いします。

私達をー私の一族を助けて下さい」

「断る」

つと、ハジメは特に表情を変えることなく端的に答えた。

「ちよ、ちよ、ちよつと！何故です！

今の流れはどう考えても『なんて可哀想なんだ、安心しろ！俺が何とかしてやる！』とか言つて爽やかに微笑むところですよ！

流石の私もコロつといっちゃうところですよ！

何、いきなり美少女との出会いをファイにしてるんですか！」

「御免ねハジメ君は自分が利益にならない事はしない主義でね。

私の場合チロルちゃんを差し出してくれたらやるけど」

「チロルちゃんをですか。

それは？」

「所で何で犬人族が兎人族と一緒に行動しているの？」

「えつと？」

「私が説明します」

チロルが手を挙げた

「お願いね」

「はい私はご覧の通り顔が三つあって左がベロで」

「バウ」

「右がベルです」

「ワン」

「それで先程私の自己紹介で私の一族ハウンド族だったと言いました」

「言ったね。

まるでチロルちゃん以外全滅したように」

「いえハウンド族は全滅して居ません。

ただ私は忌み子なので殺されそうになりました」

私はチロルの身体が震えていてベロとベルが慰めてくれている

「チロルちゃんきついなら言わなくていいから。

香織ちゃんにか心を落ち着かせる魔法ないかな？」

「いえ、だっ大丈夫です。

はっ話します。

ベロとベルは五歳の時に突然現れました。

フェアベルゲンでは忌み子が発覚したら直ぐに殺すのが掟で私は直ぐにベロとベルを髪の毛の中に隠して過ごしました。

ですが私が寝ている時にベロとベルの存在がばれて薄っすらと目を覚ますと刃物を持って居る両親が見えて其処から意識がはつきりする切り裂かれた両親と其の返り血を浴びた私が居てたまたまお隣さんが来てしまい私は殺されると察知して直ぐに逃げました。

勿論ハウンド族の人達は私を殺そうと武装して追いかけて来ました。

私は必死に逃げて逃げるのに必死で崖に気が付かずに落ちてしまい流れる先でシアちゃんに出会いました」

「はい、チロルちゃんが忌み子なのは直ぐに分かりましたが私と同じ忌み子なので殺せずに村に連れてって傷を治しました」

「其処からハウリア族に生きて住まわせてくれました。

ですからハウリア族を生かせる為なら私の命を貴方達に捧げて構いません」

「チロルちゃん!？」

「なら私も」

「だそうけど、どうするハジメ君?」

「犬は俺のトウサイジウオウを殴り倒す実力が有るから連れてって良いがウサギの方は実力はたかが知れているから連れて行かない」

「そんな」

シアは兎耳を垂らして落ち込んだ

「まあ取り敢えず仕事の内容はハウリア族の生存で報酬はチロルちゃん身柄と亜人国フェアベルゲンの案内でいい?」

「理由を聞いていいですか」

落ち込みながら質問して来た。

「理由は単純でフェアベルゲンは常に感覚をが狂ってしまう霧があるから案内を頼みたいの。」

「皆も良いかな?」

「構わない」

「私も案内が欲しかった」

「はい、お姉ちゃんが言うなら」

「あたしも翼愛の案に賛成だ」

「僕も姉さんと同じです」

「私は翼愛ちゃんに案に賛成」

「私も香織と同じ」

「会長が言うなら従うまで」

とハジメ、アレーティア、黒花、アテナ、雷槍、香織、優花、牙十郎も全員賛成してくれた。

「というわけだ喜べウサギと犬、犬の身柄とお前達を樹海の案内に雇わせてもらう。」

「支払いはお前らの命を助ける事で良いか?」

「お願いします」

「でハジメ君、移動手段は?」

「此れを使う」

とオスカーの指輪を出すとハジメの隣に魔法陣が現れて車が現れた。

オスカーの指輪には宝物庫と言う空間魔法の概念がふんだんに使われているマジックアイテムで車の方は魔力駆動四輪と言う魔力で動く車である。

ハジメが運転席に座り、白崎とアレーティアが助手席に座り、黒花、アテナ、雷槍、優花、牙十郎、シア、チロルが後列、私が屋根の上に乗って移動した。

移動の途中

「え、それじゃあ、ハジメさん、アレーティアさん、クロカさん、ライヤリさん、カオリさん、ユウカさんも魔力を直接操れたり、固有魔法が使えると……」

「ああ、そうなるな」

「うん、そうだよ」

「……ん」

「まあね」

「死ぬつもりでやればできました」

「僕は大人前からですね」

しばらく呆然としていたシアだったが、突然何故か泣きべそをかき始めた。

チロルはおろおろ始めた

「……いきなり何だ？ 騒いだり落ち込んだり泣きべそかいたり……情緒不安定なヤツだな」

「……手遅れ？」

「手遅れって何ですか！ 手遅れって！ 私は至って正常です！

……ただ、私とチロルちゃんだけじゃなかったんだなと思ったなら……何だか嬉しくなってしまうって……」

「「「「「……」」」」」

その言葉にどれだけの意味が込められているのかは私とアテナには分からない。

それはきつと同じ境遇の者達しか完全に理解できないだろう。

暫く走っていると、遠くで魔物の咆哮が聞こえた。

「！ ハジメさん！ もう直ぐ皆がいる場所です！

あの魔物の声……ち、近いです！

父様達がいる場所に近いです！」

私は其れを聞いて直ぐに魔力駆動四輪の屋根に有る蓋をあけると其処からさつきと同じ殺気を出しながらチロルが飛び出して来て屋根の上に立ち、足に力を籠めて踏み込んで飛んだ。

チロルの踏み込みで魔力駆動四輪が宙に浮いた。

ハジメは着地すると同時ハンドル操作で何とか体制を立て直して落ち着いた時に私はチロルが居た場所見るとアザンチウム鉱石で出来た魔力駆動四輪の屋根が凹んでいた

私は直ぐに頭を逆さまにして

「御免ねハジメ君

魔力駆動四輪の屋根を凹ませて」

「いや、助かった。

もし翼愛が屋根の蓋を開けなかったら今頃どうなってるか分かんぞ」

「そう」

「てか残念ウサギあんな強い奴が居るなら俺達の助け要らないだろ」

「其れなんですけど？チロルちゃん、私達に来た攻撃を庇った上に帝国兵が連続で攻撃して来て防戦一方なっちゃいました」

「そうかよ」

と私達はハウリア族の下に行った。

魔物はチロルが全部片づけていた。

「ハジメ殿とヨクアイ殿でよろしいか？」

「ええ」

「そうだな」

「私はシアの父で族長をしておりますカム・ハウリア

娘と親友のチロルを助けて下さい更にチロルを治療していただき
なんとお礼を言えば？」

「礼は受け取っておくだがチロルの身柄と樹海の案内と引き換えって
ことは忘れるなよ」

「樹海の件はもちろんです」

チロルの件は？」

「その件は予め聞いて本人の許可を取っているから」
「？.そうですか」

「グズグズしていると魔物が集まって来る。

ひとまずは峽谷こいを出るぞ」

私達は移動した。

勿論ハジメのゆう通りに魔物が襲って来たが私達が簡単に倒して
峽谷の入り口の坂の前に着いた。

私達が坂を上っていると

「あの？ハジメさんとヨクアイさん本当に良いんですか」

「何か？」がだ？」

「この先には帝国兵がいます。

「このままだと同じ人間族と戦う事に？」

「それがどうかしたのか？」

「えっと？ 私達を守る為に同族と敵対する事になるのでは？ と？」

「？ 何か勘違いしておるようだから言っておくがな。」

お前らを守るのは樹海の案内とチロルの身柄を確保が終わるまでだ。

邪魔する奴は魔物だろうが人間だろうが殺す。

それだけだ」

「一応穏便に済ませるつもりでやるから」

と私はハジメよりも一歩、二歩先に歩く

「おいおい、マジかよ。生き残ってやがったのか。」

隊長の命令だから、仕方なく残ってただけなんだがなあ〜こりゃあ、いい土産ができそうだ」

三十人の帝国兵がたむろしていた。

帝国兵は、兎人族達を完全に獲物としてしか見ていないのか、戦闘態勢をとる事もなく、

下卑た笑みを浮かべ舐めるような視線を兎人族の女性達に向けている。

兎人族は、その視線にただ怯えて震えるばかりだ。

ちよつとくらい味見してもいいつすよねえ？ だの、二、三人なら好きにしるのだのと

声が聞こえる。

「ああ？ お前誰だ？ 兎人族……じゃあねえよな？」

小隊長とか呼ばれていた男がようやく私の存在に気がついたようだ。

私は、帝国兵の態度から素通りは無理だろうなと思いつながら、営業スマイルしながら会話に応じる。

「ハイ！ 人間です。」

これから帝国に居て峡谷から拾て来た兎人族と犬人族を売るつもりです」

「う〜んまだ若けえのにまたずいぶん商魂がたくましいねえ

まあ、いいや、そいつら皆、国で引き取るから置いていけ」

小隊長の言葉に、兎人族たちの怯えが、震えが一層強くなり、私の背中へと伝わってくる。

私は笑顔を崩さずにポーカーフェイスを続ける

「其処を何とか、こいつらは先に私達が先に拾いましたので帝国の慣例上、

奴隷の占有権はこちらにあると思いますので」

小隊長の唇が侮りに歪む。

「……小娘、口の利き方は分かってるようだな、だが俺達が誰かはわからないみたいだが？」

「私はこちらの権利を主張しただけです、それにあなたたちが軍属だつても理解してます

帝国軍人ならどうか帝国の法に従つて欲しいです！

勿論タダで……とはいいませんっ！」

私は自分の衣服から小袋から取り出して小隊長の掌に握らせる、

小隊長は直ぐに小袋の中身を確認するとダイヤ、クリスタル、サファイア、ルビー、トパーズ、エメラルドなどなどの鉱石類が小袋にびっしり入って居る。

全員で一晩豪遊できる程度の価値はあるだろう。

「これで皆さんでお酒でも飲んでください」

「なかなかいい心がけじゃねえか、唯の世間知らずの小娘だつて思つてたがな

けど最近はどうも帝国の御法が及ばない辺境の地もあるつて話だぜ、なあ皆！」

「ハイ！小隊長殿の仰せの通りでありますッ！」

小隊長の呼びかけに残りの兵士共がゲラゲラと笑い囃し、

その視線が私、アレーティア、香織、優花、アテナに集中する。

「ちよいと世の中の厳しさってヤツを教えてやる、くつくつく、

そっちの嬢ちゃんたち、えらい別嬪じゃねえか、後ろの奴らの四肢を切り落とした後、

目の前で犯して、奴隷商に売っぱらってやるよ」

その言葉に私はポーカーフェイスが少し崩れてハジメは少し手が動いて居た。

「そうですか」

「つまり敵ってことでいいよな？」

ハジメがドンナーを取り出した

「ああ〜渡る世間は敵ばかりってな、世の中は親切なおじさんばかりじゃないんだよ〜」

まずは震えながら許しをこっす!？」

と小隊長が言い切る前に私が蹴りを入れてバランスを崩した小隊長をハジメがドンナーを構えて

ドバン!!？」

一発の破裂音と共に、小隊長の頭部が砕け散る。

突然、小隊長の頭部が弾け吹き飛ぶという異常事態に、

「え? 詠唱をはじめろ!」

「奴らを殺せ」

兵士達が半ばパニックになりながらも武器を構え、帝国兵の前衛が飛び出したのだが

その前衛たちもハジメの銃撃によって頭部を粉碎される。

あつという間に帝国兵は一人になり

私は「音銃剣錫音」を取り出して

『銃奏』

に銃奏モードにして生き残った帝国兵に脅しの為に帝国兵の身体ギリギリに地面を撃つ

「ひい」

帝国兵は完全に怯えている。

「君に聞きたい事が有るんだけど良いかな？」

「何でも話すから!!」

頼むから!

殺さないで」

「分かって居るよ。」

私が聞きたいのはすでに捕まれている兎人族は何処かな?」

「そ？それなら帝国に移送済みだ？もうどうしようもない？」

「成程ね」

「は、話したから見逃してくれ」

「良いけど私は殺さないけど私のボディーガードは殺すよ」

「え」

「私のボディーガードは一度敵と認識すると必ず殺す主義だから」

「だ？だったら頼む殺さないと頼んでくれ」

「無理、其れが彼のポリシーだから」

此処で提案があるの」

「てっ提案!？」

私は衣服の下から小瓶を取り出した

「この小瓶には飲んだ人を眠る様に殺す即刻性の毒が入って居る。」

言いたい事分かるね」

と帝国兵は私から奪う様に小瓶を受け取って直ぐに飲んで倒れて毒殺の自殺した

「あ、あのさっきの人は見逃してあげても良かったのでは・・・」

それは私達に声をかけたシアも例外ではなくおずおずと尋ねた。

「・・・1度、剣を抜いた者が、結果、相手のほうが強かったからと言って見逃してもらおうなんて都合がよすぎ」

「其れに見逃したら又同じ事が繰り返すかもしれないから」

「そ、それは・・・」

「・・・そもそも、守られているだけの貴方達がそんな目をハジメ達に向けるのはお門違い」

アレーティアは静かに怒っているようだ。守られておきながらハジメ達に向ける視線の負の感情を宿すなど許さないと言わんばかりである。

「ふむ、ヨクアイ殿、ハジメ殿、アレーティア殿、申し訳ない。

別に、貴方達に含むところがあるわけではないのだ。

ただ、こういう争いに我らは慣れておらんのでな・・・少々、驚いただけなのだ」

「ハジメさん、ヨクアイさん、アレーティアさん、すいません」

シアとカムが代表して3人に謝罪する。3人は気にしてないという様に手を振るった。

すると、ハジメは無傷で手に入った馬車や馬を見ていう。

「せっかくだ有効活用させてもらうか」

馬車を魔力駆動四輪を連結させて馬に乗る者と馬車に乗る者に別れて貰い、一行は樹海へと進路をとった。

因みに帝国兵の死体はアテナの火魔法で焼却し、残った骨はアレーティアの土魔法で地面に穴を開けて、そこに埋めた。

亜人族の国フェアベルゲン

七大迷宮の一つにして、深部に亜人族の国フェアベルゲンを抱える【ハルツィナ樹海】を前方に見据えて、私達が牽引する大型馬車二台と数十頭の馬が、それなりに早いペースで平原を進んでいた。

シアとしては、初めて出会った「同類」であるハジメ達と、もつと色々話がしたいようだった。

ふとユエが

「……ハジメ、さつききどうして纏雷を使わずに戦ったの？」

「ん？」

「其れ私も気になる」

ユエが言っているのは帝国兵との戦いのことだ。

あの時、ドンナーを攻撃する時、纏雷を使わなかった事にユエは疑問を持って居た。

誰が参戦しようがすまいが結果は「瞬殺」以外には有り得なかっただろうが、どうも帝国兵を倒した後はハジメは物思いに耽っているような気がして、ユエとしては気になったのだ。

「ん、まあ、確かめたいことがあってな……」

「……確かめたいこと？」

ユエが疑問顔で聞き返す。

皆、興味深そうな眼差しを向けている。

「ああ、それはな……此れからは街中で戦う場面も出てくるかもしれない。敵にレールガンを放って木っ端微塵するのは良いが、背後の民家や住人まで吹っ飛ばす訳にも行かないだろう

人間を殺しても特に何も感じなかったから、随分と変わったもんだと、ちよつと感傷に浸ってたんだよ……」

「……そう……大丈夫？」

「ああ、何の問題もない。これが今の俺だし、これからもちゃんと戦えるってことを確認できて良かったさ」

「あ？あの一！」

皆さんの事、もつと教えてくれませんか？

旅の目的とか、今までしてきた事とか。

皆さんの事もつと知りたいです」

「私も知りたいです」

樹海に到着するまでまだ少し時間がかかる。

特段隠すことでもないので、暇つぶしにいいだろうと、私達はがシアとチロルにこれまでの経緯を語り始めた。

結果……

「うえ、ぐすつ……ひどい、ひどすぎますう、皆さんもがわいぞうですう。そ、それ比べたら、私はなんでめぐまれて……うう、自分になぎけないですう」

「うえ、ぐすつ……そうだね」

号泣した。

滂沱の涙を流しながら「私は、甘ちゃんですう」とか「もう、弱音は吐かないですう」と呟いている。

どうやら、自分達は大変な境遇だと思っていたら、私達の方が自分以上に大変な思いをしていたことを知り、不幸顔していた自分が情けなくなったらしい。

しばらくメソメソしていたシアだが、突如、決然とした表情でガバツと顔を上げると拳を握り元気よく宣言した。

「皆さん！ 私、決めました！ これからは、このシア・ハウリアが陰に日向に皆さんを助けて差し上げます！

遠慮なんて必要ありませんよ。

私たちは数少ない同類で仲間。共に苦難を乗り越え、望みを果たしましょう！」

「現在進行形で守られているのに何を言っているんだ？」

ハジメの冷ややかな言葉が突き刺さった。

「ダイヘドアだったかな？ あれから逃げ回るだけだど俺達の旅には同行は難しいな」

「完全に足手まといね」

「せめてチロルちゃん位の力が合ったらいいんだけど」

「……さり気なく『仲間みたい』から『仲間』に格上げしている……厚皮ウサギ」

ハジメの言葉が冷水になった所に牙十郎、優花、ユエの言葉が追い打ちとなる。

「な、何て冷たい目で見るとですか……心にヒビが入りそう……といふかい加減、ちゃんと名前を呼んで下さいよお」

意気込みに反して、冷めた反応を返され若干動揺するシア。

そんな彼女に追い討ちがかかる。

「……つてか、アンタは単に旅の仲間が欲しいだけだろ?」
「!?」

ハジメの指摘にシアの体がビクツと跳ね上がる。

「なるほど、一族の安全が一先ず確保できたら、お前、アイツ等から離れる気なんだろ? そこにうまい具合に“同類”の俺らが現れたから、これ幸いに一緒に行くつてか? そんな珍しい髪色の兎人族なんて、一人旅出来るとは思えないしな」

「シアちゃんとチロルちゃん存在自身が一族には迷惑が掛かるし、一族の気質的に一人で飛び出したら全員が探しに来てしまうだろうから、旅の道連れが必要で」

「……あの、それは、それだけでは……私は本当に皆さんを……」

凶星だったのか、しどろもどろになるシア。

実は、シアは既に決意していた。何とんでも京矢達の協力を得て一族の安全を確保したら、自らは家族の元を離れると。

シアとチロルがいる限り、一族は常に危険にさらされる。

今回も少ないがの家族を失った。

次は、本当に全滅するかもしれない。

それだけは、シアには耐えられそうになかった。

もちろん、その考えが一族の意に反する、ある意味裏切りとも言える行為だとは分かっている。

だが“それでも”と決めたのだ。

最悪、チロルと一緒に旅に出るつもりだったが、それでは心配性の家族は追ってくる可能性が高い。

しかし、圧倒的強者である私達に恩返しも含めて着いて行くと言えば、割りかし容易に一族を説得できて離れられると考えたのだ。

見た目の言動に反してシアは、今この瞬間も「必死」なのである。もちろん、シア自身がハジメ達に強い興味を惹かれているというのも事実だ。

ハジメの言う通り「同類」であるハジメ達に、シアは理屈を超えた強い仲間意識を感じていた。

一族のことも考えると、まさに、シアにとってハジメ達との出会いは「運命的」だったのだ。

「別に、責めているわけじゃない。だがな、変な期待はするな。俺達の目的は七大迷宮の攻略なんだ」

「そう言うことだ。」

其の必死さと気持ちは買うけど、迷宮の奥は地獄だ。

悪いが、アンタじゃ足を踏み入れた瞬間が人生の終わりだから、同行を許すつもりはねえよ」

ハジメとアテナの全く容赦ない言葉にシアは落ち込んだように黙り込んでしまった。

同じ魔導四輪に乗る、私達は特に気にした様子がないあたりが、更に追い討ちをかける。

シアは、それからの道中、大人しく四輪の座席に座りながら、何かを考え込むように難しい表情をしていた。

その隣でチロルはオロオロしながらシアを励ました。

そんな事していると亜人族の国フェアベルゲンの入り口、ハルツィナ樹海にたどり着いた。

「それでは、皆さん。」

中に入ったら決して我々から離れないで下さい。

皆さんを中心にして進みますが、万一はぐれると厄介ですからな。

それと、行き先は森の深部、大樹の下で宜しいのですな？」

「ああ、聞いた限りじゃあ、そこが本当の迷宮と関係してそうだからな」

「？樹海が迷宮じゃないの??」

「ああ俺もそう思っていたが

オルクス大迷宮に居たような魔物が樹海に居るとしたら？」

「はい、雷槍君答えて」

「あ、はい

巫人達が住める場所ではないと思います。

翼愛先輩」

「そうだ。

族長から聞いたのだが最深部にある巨大な樹、〃大樹ウーア・アルト〃其処は神聖な場所として滅多に近づくものはいないらしい。

迷宮があるとしたら多分そこだ」

ハジメが予測立てている中

「うーん」

チロルが頭を抱えながら唸り出した。

「如何したのチロルちゃん？」

「頭が痛いのか？」

私と香織が心配した。

「いや、頭は痛くないんですけど何か忘れてる気がするんです」

とチロルは言いながら又頭を抱えながら唸り出した。

「ハジメ殿達、お話し中のところ申し訳ない。

できる限り気配は消してもらえますかな。

大樹は、神聖な場所とされておりますから、あまり近づくものはありませんが、特別禁止されているわけでもないのです、フェアベルゲンや、他の集落の者たちと遭遇してしまうかもしれません。

我々は、お尋ね者なので見つかるかと厄介です」

とカムが気配を消して欲しいと頼んで来たが

「いやその必要はない」

「アテナ殿、其れはどうゆう意味ですか」

「大分先に武装した集団が居る」

「な、なら逃げましょうー！」

「いやもう遅いあつちはもう感じてこっちに来て居る」

アテナがそう言うとかム達は忙しなくウサミミを動かして索敵をし

ている。

そして、何かを掴んだのか苦虫を噛み潰したような表情を見せた。シアとチロルに至っては、その顔を青ざめさせている。

私達も相手の正体に気がつき、面倒そうな表情になった。

その相手の正体は……

「お前達……何故人間という！種族と族名を名乗れ！」

虎模様の耳と尻尾を付けた、筋骨隆々の虎人族が包囲する。

彼等の手には抜身の剣が握られており、いつでも攻撃できるよう身構えている。

「あ、あの私達は……」

カムが何とか誤魔化そうと額に冷や汗を流しながら弁明を試みるが、その前に虎人族の視線がシアを捉え、その目が大きく見開かれた。

「白い髪の兎人族に黒髪の三つ首の犬人族だと……？……貴様ら……報告にあったハウリア族か……亜人族の面汚し共め！」

長年、同胞を騙し続け、忌み子を匿うだけではなく、今度は人間族を招き入れるとは！反逆罪だ！

もはや弁明など聞く必要もない！全員この場で処刑する！総員k
「ドン」!？」

ハジメは虎人族が言い切る前にか「ドンナー」を素早く抜いて発砲した。

その後、威圧を放って虎人族を見えない鎖で拘束した
理解不能な攻撃に凍りつく虎人族の頬に擦過傷が出来る。

もし人間のように耳が横についていれば、確実に弾け飛んでいただろう。

聞いたこともない炸裂音と反応を許さない超速の攻撃に私達以外硬直している。

その間に私達も私は「音銃剣錫音、銃奏モード」、黒花は「Wei・er Zauberer」と「Schwarze Hexe」、アテナは「エリザ・ツェリスカの五連ライフル」、雷槍は「ストラード」、香織は「ヴァイス」アレーティアは魔法を、優花は「風双剣翠風、手裏剣モード」牙十郎は刀を構えて

「今の攻撃は、刹那の間に数十発単位で連射出来る。周囲を囲んでいるヤツらも全て把握している。」

お前等がいる場所は、既に俺達のキルゾーンだ」

「な、なっ……詠唱がっ……」

詠唱もなく、見たこともない強烈な攻撃を連射出来る上、味方の場所も把握していると告げられ思わず吃る虎人族。

それを証明するように、私達は隙を付けこまれないよう注意しながら其々の獲物を其々に方向を向けた。

その先には、奇しくも虎の亜人の腹心の部下がいる場所だった。

霧の向こう側で動揺している気配がする。

と静音が数秒間支配して

「……その前に、一つ聞きたい」

虎人族のリーダーが質問して来た。

「どうぞ」

私は答えた

「……何の目的でこの樹海へと来た」

虎人族の質問は端的だった。

「樹海の深部、大樹の下へ行きたい」

ハジメが答えた

「大樹の下へ……だと？ 何のために？」

てつきり亜人を奴隷にするため等という自分たちを害する目的なのかと思っていいたら、神聖視はされているもの大して重要視はされていない。大樹が目的と言われ若干困惑する虎人族。

「大樹」は、亜人たちにしてみれば、言わば樹海の名所のような場所に過ぎないのだ。

「私達は真ハルツィナ大迷宮への入口があるかもしれないの。」

私達は七大迷宮の攻略を目指して旅をしている。

ハウリア族は案内のために雇ったの」

「真ハルツィナ大迷宮？何を言っている？七大迷宮とは、この樹海そのものだ。」

一度踏み込んだが最後、亜人以外は決して進むことも帰る事も叶わ

ない天然の迷宮だ」

「いや、それはおかしい」

「なんだと?」

妙に自信のあるハジメの断言に虎の亜人は訝しそうに問い返した。

「大迷宮というには、ここの魔物は弱すぎる」

「弱い?」

私達を除外してハジメは言葉を続ける。

「そうだ。」

大迷宮の魔物つてのは、どいつもこいつも化物揃いだ。

少なくとも【オルクス大迷宮】の奈落はそうだった。

それに……」

「なんだ?」

「大迷宮は『解放者』と呼ばれる者達が考えた試練だ。

亜人族は簡単に深部へと行ける。

もしこの樹海そのものが大迷宮というのなら試練としては簡単すぎて試練になってない。

だから、樹海自体が大迷宮つてのはおかしいんだよ」

「……」

「だから私達はこう考える。

樹海は本当の迷宮の上澄み。

言ってみれば、潜るだけの資格があるか試すための修練場だと思うの」

ハジメと私の話を聞き終った虎人族は困惑を隠せないでいた。

2人の言っていることが分からないからだ。

普段なら『戯言』と切って捨てていただろう。

だが、圧倒的優位に立っている私達の言葉を虎の亜人は否定するこ
とが出来なかった。

「……お前達が国や同胞に危害を加えないというのなら、大樹の下へ
行くくらいは構わないと、俺は判断する。」

部下の命を無意味に散らすわけには行かないからな」

その言葉に、周囲の亜人たちが動揺する気配が広がった。

樹海の中で、侵入して来た人間族を見逃すということが異例だからだろう。

「だが、一警備隊長の私ごときが独断で下していい判断ではない。本国に指示を仰ぐ。」

お前の話も、長老方なら知っている方もがおられるかもしれない。お前に、本当に含むところがないというのなら、伝令を見逃し、私たちとこの場で待機しろ」

「私は構わないけど、ハジメ君は？」

「……いいだろう。さっきの言葉、曲解せずにちゃんと伝えろよ？」
「無論だ。」

ザム！ 聞こえていたな！ 長老方に余さず伝えろ！」
「了解！」

虎人族の言葉と共に、1つの気配が遠ざかっていった。それを確認したハジメは銃をホルスターに納め、「威圧”を解いた。重苦しかった空気が一気に弛緩する。あつさりと警戒を解いた私達に虎人族は訝しい眼差しを向け、中には臨戦態勢に入っている亜人もいたが

「!!」

アテナが覇気を放って虎人族の殺意を落とした。
私達は長老たちが来るまで待つて居た

アルフレリック

私達待つて居ると霧の奥から、数人の新たな亜人達が現れた。彼等の中央にいる初老の男が特に目を引く。

「ふむ、お前さん等が問題の人間族かね？名を何という？」

「人数が多いので代表だけ紹介させてもらいます。」

「私は鞆波・A・翼愛と」

「ハジメ、南雲ハジメだ。あんたは？」

「私は、アルフレリック・ハイピスト。」

フェアベルゲンの長老の座を一つ預からせてもらっている。

さて、お前さんの要求は聞いているのだが……その前に聞かせてもらいたい。

「解放者」とは何処で知った？」

自己紹介を済ませるとアルフレリックが私達に質問をする。

「うん？オルクス大迷宮の奈落の底、解放者の1人、オスカー・オルクスの隠れ家だ」

目的などではなく。

解放者の単語に興味を示したアルフレリックの問いに訝しみながらハジメが返答した。

「ふむ、奈落の底か……聞いたことがないが……それを証明できるものはなにかあるか？」

「……………」

「私はその場所まで飛んで運んで見せるのは？」

と私はそう言いながらワシピンクに変身した

「無理だな。」

お前さんが言っている事が本当に飛んでその場所に向かっている間に帝国が攻めて来るかも知れんからな」

とあっさりと拒否された。

「……ハジメ、オルクスの遺品は？」

アレーティアが指輪の事を思い出した。

「ああ。」

オスカーさんがオレ達に託してくれたあの指輪なら証明になるんじゃないか？」

すっかり彼らの中では快く託してくれたことになってるらしい。

「そうだな、それなら……」

ハジメは指輪を見せた。

指輪に刻まれている紋章を見たアルフレリックは目を見開いた。

そして、気持ちを落ち付かせるようにゆっくりと息を吐いた。

「なるほど……確かに、お前さん等はオスカー・オルクスの隠れ家に辿り着いたようだ。

他にも色々気になるところはあるが……よからう。

取り合えずフェアベルゲンに来るがいい。私の名で滞在を許そう。

ああ、勿論ハウリアも一緒にな」

アルフレリックの言葉にこの場にいる全亜人族が驚く。

かつて、フェアベルゲンに人間族が招かれた事など無かったのだから。

虎人族を筆頭に猛烈に抗議の声が上がる。

「彼等は客人として扱わねばならん。

その資格を持っているのでな。

それが、長老の座に就いた者にのみ伝えられている掟の1つなのだ」

アルフレリックが厳しい表情で周囲の亜人たちを宥める。

しかし、今度はハジメが抗議の声を上げた。

「待て。

何勝手に俺の予定を決めてるんだ？ 俺は大樹に用があるので

あって、フェアベルゲンに興味はない」

「いや、お前さん。それは無理だ」

アルフレリックそう言った瞬間

「あああ！」

と行き成りチロルが何か思い出した様に大声で叫んだ。

「ど、どうしたのチロルちゃん？」

全員チロルの方を見る

「大樹の周辺は特に霧が濃くて。

亜人族でも方角を見失うのですが、一定期間で、霧が弱まる日があつて大樹の下へ行くにはその時でなければ行けなくて。

次に行けるようになるのは確か12日後です。」

「ふむ、その犬人族のゆう通り12日後で合っているぞ。

この事は亜人族なら誰でも知っているはずだが……」

チロルとアルフレリツクから聞かされた事実には私達はポカンとした後、カムを見た。

見ればアルフレリツクもカムを見ていた。

そのカムはと言えば、

「あつ」

まさに、今思い出したという表情をしていた。

「カム？」

額に青筋を浮かべ自分を見るハジメに

「あ、いや、その何と言いますか……ほら、色々ありましたから、つい忘れていたと言いますか……私も小さい時に行つたことがあるだけで、周期のことは意識してなかったと言いますか……」

カムはしどろもどろになつて必死に言い訳をするが、全員からのジト目に耐えられなくなり

「ええい、シア、それにお前達も！ なぜ、途中で教えてくれなかったのだ！ お前達も周期のことは知っているだろ！」

遂に逆ギレした。

「なつ、父様、逆ギレですかっ！ 私は、父様が自信たっぷりな請け負うから、てつきりちようど周期だったのかと思つて……つまり、父様が悪いですう！」

「そうですね、僕たちも、あれ？ おかしいな？ とは思ったけど、族長があまりに自信たっぷりだったから、僕たちの勘違いかなつて……」

「族長、何かやたら張り切つてたから……」

逆ギレするカムにシア達も更に逆ギレし、他の兎人族達も目を逸らしながら、さり気なく責任を擦り付ける。

亜人族の中でも情の深さは随一の種族といわれる兎人族。彼等は、ぎやあぎやあと騒ぎながら互いに責任を擦り付け合っていた。

情の深さは何処に行ったのか……流石、シアの家族である。

総じて、残念なウサギばかりだった。

「……ハジメ、ヨクアイ」

このパーティーの代表である（※自然になった）ハジメと翼愛にアレーティアが声をかける。

「やっていいぞ」

「手加減してね。」

其れとチロルちゃんは抜いといてね」

「アレーティアさんやるなら優しくお願いします」

「チロルちゃん!?!」

何のために自分に声をかけたのか理由を察した私とハジメは許可を出す。

更にチロルも許可を出した。

シアと一部のハウリア族は驚いていたが

許可を得たアレーティアは其れを無視しながら互いに責任を擦り付けているハウリア族に近づく。

近づくアレーティアに気が付いたカムは

「お、お前達！ それでも家族か！ これは、あれだ、そう！ 連帯責任だ！ 連帯責任！ アレーティア殿、罰するなら私だけでなく一族皆にお願ひします！」

「あつ、汚い！ お父様汚いですよお！ 一人でお仕置きされるのが怖いからって、道連れなんてえ！」

「族長！ 私達まで巻き込まないで下さい！」

「バカモン！ 道中の、ハジメ殿達の容赦のなさを見ていただろう！

一人でバツを受けるなんて絶対に嫌だ！」

「あんた、それでも族長ですか！」

コントをやって居るハウリア族にアレーティアがスつと右手を掲げた。

行き先は亜人族が暮らす町、フェアベルゲン。

既に一時間ほど歩いている。

この行軍の速度から考えてどうやら、先のザムと呼ばれていた伝令は相当な駿足だった様だ。

暫く歩いていると、突如霧が晴れた場所に出た。

晴れたと言っても全ての霧が無くなった訳ではなく、一般の真っ直ぐな道が出来ているだけで、霧のトンネルの様な場所だ。

よく見れば道の端には誘導灯の様に青い光を放つ拳大の結晶が地面に半分埋められている。

そんな能力のアーティファクトなのか、そう言う性質の鉱石なのかは謎だが、そこを境界線に霧の侵入を防いでいる様だ。

私達様が青い結晶に注目していることに気が付いたのか、アルフレリックが解説を買って出てくれた。

「あれは、フェアドレイン水晶と言うものだ。あれの周囲には何故か霧や魔物が寄り付かない。フェアベルゲンも近辺の集落も、この水晶で囲んでいる。まあ、魔物の方は“比較的”という程度だが」
「四六時中霧の中じゃ気も滅入るもんね」

「・・・ん」

話を聞いていた香織が納得したように頷き、アレーティアもどことなく嬉しそうにしていた。

そうこうしている内にフェアベルゲンへと入ることのできる門の前へと到着した。

ギルが門番と思しき亜人に合図を送ると、重そうな音を立てながら門が僅かに開いた。

周囲の樹の上から私達に視線が突き刺さる。

私達は其れを無視して門をくぐった先で見たのは芸術だった。直系数十メートル級の巨大な樹が乱立し、その樹の中に住居があるように、ランプの灯りが樹の幹に空いた窓と思しき場所から溢れていた。所々にある極大の枝が絡み合った橋や通路は空中回路のようになつており、その大きさから優に数十人規模で渡れるであろう。

さらに、樹の蔓と重なり、滑車を利用したエレベーターのような物

や樹と樹と間を縫うように設置された木製の巨大な空中水路まである。

「「「「「」」」」」」

私達がポカンと口を開け、その美しい街並みに見蕩れていると、ゴホンツと咳払いが聞こえた。

「どうやら、気がつかない内に立ち止まっていたらしくアルフレリックが正気に戻してくれたようだ。」

「ふふ、どうやら我らの故郷、フェアベルゲンを気に入ってくれたようだな」

「・・・ああ、元々あった樹を壊すことなく作られた街。見事というしかないな」

アルフレリックの問いに一行を代表してハジメが称賛の言葉を送った。

「あたし達の世界なら間違いなく世界遺産に入るな」

「そうですね」

「ああ、こんな綺麗な街を見たのは始めてだ。空気も美味い。自然と調和した見事な街だ」

「ん……綺麗」

「こないいい所に住んでるなんて、亜人が羨ましいな」

「ええ、とても美しい街です」

「この光景、皆に見せたい」

アテナ、雷槍、牙十郎、優花、アレーティア、黒花最後に私の順で掛け値なしのストレートな称賛に、流石に、そこまで褒められるとは思っていなかったのか少し驚いた様子の亜人達。

だが、やはり故郷を褒められたのが嬉しいのか、皆、ふんつとそっぽを向きながらもケモミミや尻尾を勢いよくふりふりしている。

ハジメ達は、フェアベルゲンの住人に好奇と忌避、あるいは困惑と憎悪といった様々な視線を向けられながら、アルフレリックが用意した場所に向かった。

話し合い

フェアベルゲンに招待された私達は、アルフレリックの案内でとある一部屋に案内され、そこで「オルクス大迷宮」の奈落で知ったことを話した。

「なるほど……この世界は神の遊戯の盤であつたと……」

アルフレリックは溜息を吐きながらそう呟く。

「驚かないんだな？」

ハジメは気になつた事を聞いた。

「この世界は亜人族に優しくない。

今更だ」

神の事を聞かされたのに顔色一つ変えなかつたアルフレリックは呆れるように言う。

聖教協会の権威もないこの場所では信仰心などあるわけがなく、あるとすれば自然への感謝の念のみだとのこと。

「あんたらは『解放者』について知っていたのか？」

アテナがアルフレリックに質問した。

「では、私が知っている限り話そう。

古くから伝わる長老のの座に就いた者への言い伝えだ。

『七大迷宮は“解放者”という者達によつて創られた』。

曰く、『迷宮の紋章を持つ者に敵対しない事』『その者を気に入つたのなら望む場所へ連れて行く事』。

お前さんの持つていた指輪はその紋章の一つだつた。

故に敵対せず案内したのだが……全ての亜人族がこれを知っているわけでは無い。

それに、知つていてもそれを守らない者もいる……」

アルフレリックのセリフにタイミングよくドアが蹴り飛ばされた

「アルフレリック!! 貴様……どういふつもりだ? 人間と忌み子を招き入れるなど……!」

ドアを蹴破つて来たのは大柄の熊人族で見て分かるほどに額に青筋が浮かび上がっている。

「なに、口伝に従ったままで。お前達も各種族の長老の座にあるのだ。事情は理解できるはずだが？」

アルフレリックは冷静にそう言い返すが、

「こんな人間族の小僧共が資格を持つというのか!? 敵対してはならない強者だと!？」

熊人族の男はわなわなと拳を握ると、

「ふざけるなっ!! ならばこの場で試してやろう!!」

一番扉に近かったからか、雷槍に向かって殴りかかってきた。

あまりに突然のことで周囲は反応できていない。

アルフレリックも、まさかいきなり襲いかかるとは思っていなかったのか、驚愕に目を見開いている。

一瞬で間合いを詰め、亜人族の中でも、熊人族は特に耐久力と腕力に優れた種族だ。

その豪腕は、一撃で野太い樹をへし折る程で、種族代表ともなれば他と一線を画す破壊力を持っている。

それが雷槍に向かって振り下ろされた。

そしてアテナ以外の私達は心の中で

“あの熊人族死んだな”

と

「ッ……………」

「なっ!？」

その拳が雷槍に当たる直前にその熊人族の男の拳があっさりアテナが掲げた左の平手に止められていた。

「なにっ!?! 貴様、どうやも? 「おい?!」!!」

と熊人族の男が言い切る前にアテナが口を挟んだ。

アテナの言葉にどす黒く赤い殺気が漏れていた。

アテナの顔は暗くて見れないが間違いないく怒っているのが分かる

「お前、何を殴ろうとした?」

アテナはその拳を握り、どんどん力を強めていく。

骨からはなっちはいけない類の音が鳴り始め

「ぐああああああ!!」

熊人族の男は悲鳴を上げた。

その異様な光景を見ていたほかの亜人族は驚きを隠せずにいた。中には手で顔を抑えていたものもいた。

そしてアテナの顔が見えると目元は黒くなり目が赤く光り完全に【ネプテューヌ】のブランの怒り方をしていた

そして右腕が黒く染まり黒が右手に集まって桜色の靄になりその靄が龍の形になって

「姉さん、それ以上h?」

雷槍が静止させようとするが
おうりゆういっせん
「桜龍一閃」

アテナは熊人族を殴った。

殴られた熊人族の男は悲鳴を挙げずに吹っ飛び向こうの大木を貫通してその向こうの大木の幹まで減り込んだ。

「ふう、スツキリした」

とアテナはやり切った感があるが

「ふう、スツキリした、じゃないですよ」

と雷槍は迷いもなくアテナにドロップキックした。

「何するんじや、雷槍」

「姉さん、僕あれ位で殴られて傷一つ付かないの知って居ますよね」

「しようがないだろう」

あたしのたった一人だけの弟が殴られのを目にして黙って居られるか」

と行き成り姉弟喧嘩を始めて

私は

「すみませんアルフレリックさん

私達の仲間が」

アルフレリックに頭を下げた

「いや構わん。

あ奴も少し血が引いたはずだが

出来れば治療してくれば嬉しいんじやか」

「香織ちゃん、お願い出来る？」

「？本当はやらないけど流石にアレはやり過ぎと思うわ」

と香織は部屋から出た。

「……………で？ 俺の仲間を攻撃したって事は、アンタらは敵って事でいいのか？」

ハジメは蹴破られたドアの外にいた者達に声を掛けた。

アテナに吹っ飛ばされた熊人族は骨も内臓も香織でしか直せないぐらいに致命傷を負って居て香織のお陰でを取り留める事に成功した。

亜人族達は近い種族ごとに長老が居るようで、虎人族のゼル、翼人族のマオ、狐人族のルア、土人族のグゼ、犬人族のドッグ、そして森人族のアルフレリックが俺達と向かい合うように座っていた。

因みにさつき殴りかかってきた男はジンと言って、戦闘力では亜人たちの中で一、二を争う程の手練だったらしい。

「ん、確かにオルクスの紋章だねえ。実力もさつき見た通り。

僕は彼を資格者と認めるよ」

「俺は認めんぞ！」

狐人族のルアがそう発言する。

「で？ あんた達は俺等をどうしたいんだ？」

俺は大樹の下へ行きたいだけで、邪魔しなければ敵対することもないんだが……亜人族としての意思を統一してくれないと、いざって時、何処までやっていいかわからないのは不味いだらう？

あんた達的に、殺し合いの最中、敵味方の区別に配慮する程、俺はお人好しじゃないぞ」

相変わらずのハジメの過激な物言いに私は内心苦笑する。

「こちらの仲間を昏倒させておいて、第一声がそれか……それで友好的になれるとでも？」

その物言いには私が文句を付ける。

「殴ったのあくまで自衛でして。

普通ならあのまま雷槍くらいの子がジンさんのパンチを喰らってたら良くて大怪我。」

「其れに其処の黒髪の忌み子もとうの昔から処分が決まっている」
それを聞いた瞬間、

「そんな！　どうか……………どうか一族の命だけはお助けください！」

「そうです私とハウリア族は関係は無いです」

シアとチロルが必死に懇願する。

「やめなさいシア、チロル。

皆、覚悟は出来ている」

それを止めたのはカムだ。

「でも……………でも……………!!」

「お前には何の落ち度もない。

そんな家族を見捨ててまで生きたいとは思わん。

我らハウリア族はどんな時も一緒だ」

カムの言葉に泣き崩れるシア。

「大樹に行く方法が無くなった訳だが、どうする？　運よく辿り着く

可能性に賭けてみるか？」

それが嫌なら、こちらの要求を飲めと言外に伝えてくるゼル。

他の長老衆も異論はないようだ。

しかし、私達は特に焦りを浮かべることも苦い表情を見せることも

なく、何でもない様に軽く返した。

「その場合、私達はその発言した虎人族と犬人族の一族を皆殺ししま

す」

私は音を立てずにゼルとドックの後ろを取りゼルの首元にハジメ

が作った小刀、ドッグの首元に「音銃剣錫音」の刀身をピツタリと付

けた。

「いつの間に」

「クソ？」

と二人は後ろを振りもこうとするが

「はい、動かないでね」

と二人の首元に少し刀身を入れた。

すると二人は動けなくなつた。

「バツカじゃないの？」

「ああ、バカだな」

良く通る声で優花とハジメが言った。

「俺らはお前らの事情なんて関係ないんだよ。」

このままコイツらを処刑するって事は、俺達の邪魔をするって事だろうが」

ハジメはそう言いながらシアの頭に手を乗せ、

「俺達の行く道を拒もうって言うのなら、覚悟を決めてもらおうか？」

ハジメは微塵の揺らぎも見せずにそう言い切る。

「本気かね？」

アルフレリックの問いかけに、

「当然だ」

即答するハジメ。

「フェアベルゲンから案内を出すと言ってても？」

「何度も言わせるな。」

俺達の案内人はハウリアだ」

「なぜ、彼等にこだわる。」

大樹に行きたいだけなら案内人は誰でもよからう。

案内人を変えるだけで我々と争わずに済むのだ。

問題無からう」

「それに案内するまで助けてやるって約束したんだ。途中でいい条件が出てきたから鞍替えなんざ」

「……………格好悪いだろ？」

「其れにこうゆう仕事は信頼第一ですからね」

「そうだな」

「……………何を言っても無駄か……………」

アルフレリックはそう言って深いため息を吐いた。

「ならば、お前さん達の奴隷ということにでもしておこう。」

フェアベルゲンの掟では、樹海の外に出て帰ってこなかった者、奴隷として捕まったことが確定した者は、死んだものとして扱う。

樹海の深い霧の中なら我らにも勝機はあるが、外では魔法を扱う者に勝機はほぼない。

故に、無闇に後を追って被害が拡大せぬように死亡と見なして後追いを禁じているのだ。

……既に死亡と見なしたものを処刑はできまい」

「アルフレリック！ それでは！」

完全に屁理屈であるが、それは彼等の側にしてみれば脅しに屈した様なものだ。

当然、他の長老衆がギョツとした表情を向ける。

ゼルに到っては思わず身を乗り出して抗議の声を上げた。

「ゼル。」

わかっているだろう。

この少年達が引かないことも、その力の大きさも。

ハウリア族を処刑すれば、確実に敵対することになる。

その場合、どれだけの犠牲が出るか……長老の一人として、そのような危険は断じて犯せん」

「しかし、それでは示しがつかん！」

力に屈して、化物の子やそれに与するものを野放しにしたと噂が広まれば、長老会議の威信は地に落ちるぞ！」

「だが……」

ゼルとアルフレリックが議論を交わし、他の長老衆も加わって、場は喧々囂々の有様となった。

やはり、危険因子とそれに与するものを見逃すということが、既になされた処断と相まって簡単にはできないようだ。

悪しき前例の成立や長老会議の威信失墜など様々な思惑があるのだろう。

そんな長老達を見ながら京矢は空気を読んで言うべきか迷っているが、そんな中、ハジメが敢えて空気を読まずに発言する。

「ああ、盛り上がっているところ悪いが、シアを見逃すことについては今更だと思うぞ？」

ハジメの言葉に、ピタリと議論が止まり、どうということだと長老衆がハジメに視線を転じる。

ハジメはおもむろに右腕の袖を捲ると魔力の直接操作を行った。

すると、右腕の皮膚の内側に薄らと赤い線が浮かび上がる。さらに、「纏雷」を使用して右手にスパークが走る。

長老衆は、ハジメのその異様に目を見開いた。そして、詠唱も魔法陣もなく魔法を発動したことに驚愕を表にする。

「俺、はシア、チロルと同じように、魔力の直接操作ができるし、固有魔法も使える。

次いでに言えばこっちのアレーティア、黒花、優花、牙十郎もな。あんだ達という化物ってことだ。

だが、口伝では「それがどのような者であれ敵対するな」ってあるんだろ？

掟に従うなら、いずれにしろあんだ達は化物を見逃さなくちやならないんだ。

シア一人見逃すくらい今更だと思うけどな」

しばらく硬直していた長老衆だが、やがて顔を見合わせヒソヒソと話し始めた。

そして結論が出たのか、代表してアルフレリックが、それはもう深々と溜息を吐きながら長老会議の決定を告げる。

「はあく、ハウリア族は忌み子シア・ハウリアとチロル・ハウンドを筆頭に、同じく忌み子である南雲ハジメの身内と見なす。

そして、資格者南雲ハジメに対しては、敵対はしないが、フェアベルゲンや周辺の集落への立ち入りを禁ずる。

以降、南雲ハジメの一族に手を出した場合は全て自己責任とする……以上だ。

何かあるか？」

「いや、何度も言うが俺は大樹に行ければいいんだ。こいつらの案内でな。文句はねえよ」

「……そうか。

ならば、早々に立ち去ってくれるか。

ようやく現れた口伝の資格者を歓迎できないのは心苦しいが……」
「気にしないでくれ。」

全部譲れないこととは言え、相当無茶言ってる自覚はあるんだ。むしろ理性的な判断をしてくれて有り難いくらいだよ」

「そうですね、教会の相手だと、こうは行きませんので理性的な判断、感謝します。」

次回ここに来た時は手土産に帝国に攫われた亜人族でどうでしょう?」

「確かに同誌の開放は私も願っている」

と私達は部屋から出る。

しかし、シア達ハウリア族は、未だ現実を認識しきれていないのか呆然としたまま立ち上がる気配がない。ついさつきまで死を覚悟していたのに、気がつけば追放で済んでいるという不思議。「えっ、このまま本当に行っちゃっていいの?」という感じで内心動揺しまくっていた。

「おい、何時まで呆けているんだ? さつきと行くぞ」

ハジメの言葉に、ようやく我を取り戻したのかあたふたと立ち上がり、さつきと出て行くハジメの後を追うシア達。

アルフレリック達も、私達を門まで送るようだ。

シアが、オロオロしながらハジメに尋ねた。

「あ、あの、私達……死ななくていいんですか?」

「? さつきの話聞いてなかったのか?」

「い、いえ、聞いてはいましたが」

……その、何だかトントン拍子で窮地を脱してしまったので実感が湧かないといえますか

……信じられない状況といえますか……」

周りのハウリア族も同様なのか困惑したような表情だ。

それだけ、長老会議の決定というのは亜人にとって絶対的なものなのだろう。

どう処理していいのか分からず困惑するシアにユエが呟くように話しかけた。

「……素直に喜べばいい」

「そうだね。」

「此処は喜ぶ場面だね」

「アレーティアさんに力オリさん？」

「……ハジメ達に救われた。」

それが事実。

受け入れて喜ばばいい」

「うんうん」

「……」

アレーティアと香織の言葉に、シアはそつと隣を歩くハジメに視線をやった。

ハジメは前を向いたまま肩を竦める。

「まあ、約束だからな」

「ツ……」

シアは、肩を震わせる。

樹海の案内と引き換えにシアと彼女の家族の命を守る。

シアが必死に取り付けたハジメとの約束だ。

元々、“未来視”でハジメ達が守ってくれる未来は見えていた。

しかし、それで見える未来は絶対ではない。

シアの選択次第で、いくらでも変わるものなのだ。だからこそ、シアはハジメの協力を取り付けるのに“必死”だった。

相手は、亜人族に差別的な人間で、シア自身は何も持たない身の上だ。交渉の材料など、自分の“女”か“固有能力”しかない。

それすら、あっさり無視された時は、本当にどうしようかと泣きそうになった。

それでもどうにか約束を取り付けて、道中話している内に何となく、ハジメなら約束を違えることはないだろうと感じていた。

それは、自分が亜人族であるにもかかわらず、差別的な視線が一度もなかったことも要因の一つだろう。

だが、それはあくまで“何となく”であり、確信があったわけではない。

だから、内心の不安に負けて、“約束は守る人だ”と口に出してみたり“人間相手でも戦う”などという言葉を引き出してみたりした。

実際に、何の躊躇いもなく帝国兵と戦ってくれた時、どれほど安堵したことが。

だが、今回はいくらハジメでも見捨てるのではという思いがシアにはあった。

帝国兵の時とはわけが違う。

言ってみれば、帝国の皇帝陛下の前で宣戦布告するに等しいのだ。にもかかわらず一歩も引かずに約束を守り通してくれた。

例えそれが、ハジメ達自身の為であっても、アレーティアと香織の言う通り、シアと大切な家族は確かに守られたのだ。

先程、一度高鳴った心臓が再び跳ねた気がした。

顔が熱を持ち、居ても立ってもいられない正体不明の衝動が込み上げてくる。

それは家族が生き残った事への喜びか、それとも……

シアは、アレーティアと香織の言う通り素直に喜び、今の気持ちを衝動に任せて全力で表してみることにした。

すなわち、ハジメに全力で抱きつく！

「ハジメさくん！　ありがとうございますぅぅ！」

「どわっ!?　いきなり何だ!?」

「むっ……」

泣きベそを搔きながら絶対に離しません！　とでも言う様にヒシツとしがみつき顔をグリグリとハジメの肩に押し付けるシア。

その表情は緩みに緩んでいて、頬はバラ色に染め上げられている。

それを見たアレーティアと香織が不機嫌そうに唸るものの、何か思うところがあるのか、ハジメの反対の手を取るだけで特に何もしなかった。

喜びを爆発させハジメにじゃれつくシアの姿に、ハウリア族の皆もようやく命拾いしたことを実感したのか、隣同士で喜びを分かち合っている。

「あんな嬉しそうなシアちゃん久しぶりに見たな」

とチロルが嬉しそうに見ていた。

特訓一日目

「さて、お前等には戦闘訓練を受けてもらおうと思う」

フェアベルゲンを出て、大樹に近い場所に拠点を作ったハジメが唐突に言い出した。

その言葉にハウリア族はポカンとした表情を浮かべている。

「え、えつと……ハジメさん。戦闘訓練というのは……」

一族を代表してシアが尋ねると、

「そのままの意味だ。」

どうせ、これから十二日間は大樹へはたどり着けないんだろ？ ならその間の時間を有効活用して、軟弱で脆弱で負け犬根性が染み付いたお前等を一端の戦闘技能者に育て上げようと思つてな」

「な、なぜそのようなことを？」

ハウリアを代表してシアが尋ねるとハジメの据わった目と全身から迸る威圧感にハウリア達は震える。

「何故？ 何故と聞いたか？ 残念ウサギ？」

「あう、まだ名前で呼んで貰えない……」

シアの問いにハジメが威圧しながら答える。

「ハジメ君、私が理由を説明するから」

「……なら翼愛、後は任せた」

と説明が私に変わった。

「私達がハウリア族と交わした約束はフェアベルゲンの案内が終るまで守るというもので、

報酬でチロルちゃんを貰います。

それで案内が終わった後は、ハウリア族の皆さんは考えているのでしょうか？」

「それはまだ……」

ハウリア族達が互いに顔を見合わせ、ふるふると首を振る。

カムも難しい表情だ。

漠然と不安は感じていたが、激動に次ぐ激動で頭の隅に追いやられていたようだ。

あるいは、考えないようにしていたのか。
それとも、その両方なのか？

「それで皆さんは弱いです。」

チロルちゃん居ない、皆さんは悪意や害意に対しては逃げるか隠れることしかできない。

逃げるか隠れるが出来るフェアベルゲンという隠れ家すら失いました。

逃げ場のない皆さんは人間族や魔物の恰好の餌になります。

私の予想ではこのままだと間違いなく全滅します。

折角拾った命も無駄に散らすことになる。

それでいいのですか？」

私がそう言うとしアは拳を握り、

「そんなの………いいわけありません！」

ハッキリとそう言った。

その言葉に私達はは笑みを浮かべ、

「なら答えは一つ。」

強くなればいい。

約束の十二日間までなら手助けします。

どうしますか？」

私の問いかけにシアやカムを始めとしたハウリア族は顔を見合わせ、
せて頷き合うと、

「やります！ 私達に戦い方を教えてください！」

決意の籠った瞳でそう頷いた。

それで私達が建てた訓練の担当は

最初の六日間はハジメはシア以外のハウリア族の皆さんの下地を整える為、基礎訓練を施す。

黒花、牙十郎、優花、アテナ、雷槍はエヒトの戦いに備えて秘密の倉庫の資材を集める

アレーティアはシアのワンツーマンで戦闘訓練をする。

香織は十二日間の間、戦闘訓練で怪我を治す専念した貰う。

其れで私は

「え?えいつ」

とチロルが可愛いパンチを繰り出して来て私は其れを〔音銃劍錫音〕で受け流してチロルの足を引っかけて

「はわわああ、ぶへ」

と転んだ。

「ねえチロルちゃん」

「あ、はい」

「手加減して居るよね」

「?はい?」

「手加減しなくていいから本気で来て」

「?そんな事出来ません?」

「手加減できないのね」

「?はい?」

「はあ、しょうがないね」

「?すみません」

「別に気にしないでね。」

そうなるにあの手は使いたくなかったな」

「あの手?」

「ちよつと待っててね」

私はジャンプして木の枝に乗り移動する。

翼愛SIDE

←

チロルSIDE

この十二日間、ハウリア族の皆さんはハジメさんの訓練を受けていて

私は今、ヨクアイさんと模擬戦をしている。

翼愛さんは私のアレを真正面から受け止めた凄い人だ。

今までアレを真正面から受け止めてくれたのシアちゃんだけだ。

でもいつかアレでパパもママみたいにシアちゃんやヨクアイさんを殺しちゃうかもしれない自分が怖い。

と考えていると

「ワン」

「バウ」

とベロとベルが心配して来た。

最初は嫌だったけど今は慣れて今は私の大切な友達だ。

其れに忌み子なのに私を匿ってくれたハウリア族の皆さんには感謝しかない

もう離れないといけないな

と私は空を見上げていたら血の独特な匂いがした。

私は直ぐに構えて茂みに威嚇する。

そして茂みから出て来たの血まみれの翼愛さんだった。

ヨクアイさんの左手を見て動揺する。

ヨクアイさんが持つて居たのは長い白髪の赤いリボンが付いて居る白い兎耳の首だった

ハウリア族の見覚えのある赤いリボンと白い兎耳で白髪の子は一人しかないな。

私は恐る恐る

「?よう・ヨクアイ?さん?そ、其れは」

私は信じたくない。

ヨクアイさん達は十二日間の間、ハウリア族を守ってくれる約束して

約束を破ると信頼が落ちるて皆の前に言った。

だからヨクアイさんがそんな事は

「ああ、此れ?」

いや一向に本気に相手にしてくれないから、思わず殺しちゃった」

「はあ?はあ?はあ?じよ?はあ冗談?で?です?はあ、よ?ね」

自分でも分かる位、呼吸が乱れ始まる。

「冗談じゃないよ。

貴方が大切な友達シア、殺したから」

と私から見れる様に首を持ち直した

私の目に映ったのは私の一番の友達、シアの顔だった。

ヨクアイさんがシアを殺した!?

そして閉じって

『銃奏』

「音銃剣錫音」を銃奏モードして「ブレーメンのロックバンド」セットして引き金を引いた。

『銃剣撃弾！』

剣で行くぜ！NO！NO！

銃でGO！GO！BANG！BANG！音銃剣錫音！

錫音楽章！

甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを斬り刻む！』

仮面ライダースラッシュ、ヘンゼルブレーメンに変身して

直ぐに「音銃剣錫音」から「ブレーメンのロックバンド」を外して

『ブレーメンのロックバンド！イエーイ！』

必殺技を発射体制に入った。

そして

「がああああああ」

『錫音銃撃！イエーイ！』

のお互いが放った音は大きく響いて逆位相で打ち消してすぐさまチロルが殴りかかて来た。

私は

『剣盤』

剣盤モードにして私は受け止めた。

「コロスコロス、シアヲコロシタオマエヲコロス」

「シアを殺した結果此処まで怒りが沸騰する物か」

と私は「音銃剣錫音」を使ってチロルを逸らした。

チロルは直ぐにこっちに帰って来た。

私は「音銃剣錫音」を逆手持ちしながらある場所に向かう為バックステップをしながら

「コロス」

チロルの連撃を逸らす。

「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス
コロスコロスk？」

「チロルちゃん!!」

「!!? シア? チャン!？」

とシアがチロルに抱きついた。

チロルは戸惑っていた。

なんせ死んだ親友が生きていたからだ。

「チロルちゃん多分私が死んだ事で怒って居るけど私は生きれ居るか
ら」

「デモ、クビガ」

「此れの事でしょ。」

「シャルル」

「翼愛も随分人が悪いシャル」

とシャルルが空間魔法でシアの首が出て来た。

「うえ、自分の首見るのなれません」

とシアが気持ち悪く見ていた。

私は其れを無視してチロルに投げた

チロルは其れをキャッチして見ると

「?? ニンギョウ……?」

「そう、その人形は対象者の死を偽造する為使われる物なの」

と言いながら変身を解除する。

「つまり、わたしの早とちり」

と腰を抜かして

「うう? よがった。」

「じゃあちゃんがじんだっどおもっだよ」

とチロルが大泣きした。

「よしよしゞ (・ω・) (」

それとヨクアイさん」

「はい」

「二度とこんな事はしませんからね
チロルちゃんピユアで泣き虫ですから」

「残念ウサギ、それ、お前が言うか？」

「其れと此れは別です」

と訓練一日目終わり

特訓二日目

さて前回チロルにシアの生首人形を見せて、暴走状態に近い怒りを買って真っ直ぐに森を破壊しながら進んで実はドツキリでしたと言ってチロルを泣かせて翌日。

前回の実験の結果を踏まれて私は又シアとアレーティアに向かった。

「ぴゃああああつ」

とアレーティアが魔法を使ってシアを打ち上げて犬神家の一族の有名な状態になっていた。

「アレーティアちゃん、おはよう」

「おはよう」

「アレーティアちゃん、抜いていい？」

「どうぞ？」

私はアレーティアに確認を取ってから地面に刺さったシアを抜いた。

「シアちゃん、おはよう」

「あ、翼愛さん、おはようございます」

少しシアの目線が冷たかった。

前回チロルを大泣きさせた張本人だから

私は其れを気にせずに

「シアちゃん」

「お断りします」

「まだ私言っていないけど」

「いやこの前のこと忘れたと言わせませんよ」

「うん昨日の事ね」

「はい、どうせまた私の何かを使ってチロルちゃんに何かするんで

しょわ。」

「其れは？否定しない」

「やっぱりです。」

ですからお断りします」

「取り敢えず理由を言っただけなら」

「まあ、理由だけなら」

「其れじゃあ言うね。」

チロルちゃんアレは生き物の生存本能と防衛本能から来るものと分かったの」

「確かに私やハウリアの皆さんがピンチになった時によく見ます。」

「其れが如何したんですか?」

「本人は其れに気が付いて居ない。」

「だから本人の前で崖から飛び降りて」

「ちよつと待ってください」

「あれ、私なんか変なこと言った?」

「アレーティアちゃん」

「と私はアレーティアの方を見た。」

「んん、ヨクアイは何も変な事は言っていない」

「だってさ」

「いやいや、アレーティアさんも十分可笑しなこと言っています。」

「何で私が崖から飛び降りなくちゃいけないんですか!?!」

「さつき私が言った言葉、聞いて居ないの?」

「いや、聞いて居ましたよ」

「私が崖から飛び降りんですよね!?!」

「ならシアちゃん早速飛び降りる準備しましょ」

「私はシアの手を引っ張って移動した」

「待ってください。」

「嫌です」

「せめて私が納得する理由を言っただけなら」

「シアは力を入れて私を止めた。」

「何ってチロルちゃんのアレを生き物の生存本能と防衛機能から来るものを教えないとチロルちゃんは強くないと判断したの。」

「だからシアちゃんが飛び降りて其れをチロルちゃんがキャッチする。」

「その後私が説明するの」

「だからと言っても他に方法は無いんですか☒」

「あるにはあるけど時間は有限だから手っ取り早い方法が良いの」

「そんなく」

「ぶつくき言っている、アレーティアちゃん「バインドウィザードリング」出して」

「えっと???どれ?」

「龍の頭に鎖が絵が描いてある指輪」

「えっと?此れ?」

とアレーティアは龍の頭に鎖が絵が描いてある指輪、「バインドウィザードリング」を出した。

「そう其れ、其れをシアちゃんに発動して」

「うん、分かった」

とアレーティアは「バインドウィザードリング」を指に嵌めた。

其れを見たシアは

「チロルちゃんの為にも捕獲されてなるものです」

シアは急いで逃げるが、アレーティアは待機状態「ワイズドライブ」に指に嵌めた「バインドウィザードリング」を翳した。

『バインド ナウ』

と逃げているシアの周りにワイズマンの魔法陣が四つ現れて其処から魔法で出来た鎖が現れてシアに目掛けて飛んで行く

そして

「ふぎやあ!!」

と簡単にシアは鎖に簀巻きで獲られられた。

私とアレーティアは簀巻きで獲られえたシアに近づいて地図を開いて

「取り敢えず?出入り口に近いこの部分で落とそうか」

「私は構わない」

「ヨクアイさん、アレーティアさん、それ、本人の前で言うセリフですか」

私は地図を仕舞って

「其れじゃ手筈通りに」

「分かった。」

「?よっこいしょ」

アレーティアは身体強化魔法を使って簀巻きで獲られえたシアを担ぎ上げて私達は別れた。

「移動中」

私はある程度を歩くと目を瞑って意識を集中してチロルを捜す。

そしてチロルを見つめる。

微妙に見使いにくい場所に居る。

多分前回の事を引きずって居るだと思ふ。

私はチロルが居る場所に向かって

そして

「チロルちゃん」

と呼ぶととある場所がビクッと震えてチロルの身体の一部であるベルとベロが出て来た。

私は笑顔で手を振った。

ベルとベロは私に少し威嚇したが直ぐに戻って今度はチロルが私を警戒するように隠れるように出て来た。

「チロルちゃん」

「よ、ヨクアイさん??シアの生首人形?持って居ませんか?よね」

と恐る恐る質問して来た。

「流石に同じ人と同じネタは二回以上やらないよ」

「そ、そうです、か」

とチロルは少しほっとしている。

「今日は移動するよ」

「移動ですか」

「そう、移動するの」

「わ、分かりました」

とチロルは今まで隠れていた場所から出て来て私達は移動した。

移動中、私達は会話する。

「チロルちゃんのアレの正体が分かったの」

「アレですか?」

「そう、アレの正体は生物由来の生存本能と防衛本能から来ているの」「生物由来の生存本能と防衛本能？」

「そう生き物には生きて次の子を産んで守る本能があるの。」

多分チロルちゃんは其れが過剰に出やすい体質なの」

「そうですか？」

「先ず最初に出た時、つまりチロルちゃんの両親を殺した時の事なんだけど、大丈夫？」

私は歩きながら振り返ってチロルを見る

チロルは少し体が震えていたが

「いえ、大丈夫です」

と答えた。

私は

「そう、なら続けるね」

私は元の方角に戻って

「此れまでの話から得た情報から私が立てた仮説なんだけど

その時のチロルちゃんは少し寝ぼけていて刃物を持った両親を最低限の判断で刃物を使って攻撃する存在と認識してしまった。

そしてチロルちゃんの生存本能の防衛機能が働いて両親を殺した、と私は推測したの」

「そ、そうなんですネ」

と少しチロルの口調が震えていた。

「大丈夫、少し休憩する？」

「いえ、大丈夫です」

「なら続けるね。」

其れでチロルちゃんの防衛本能はハウリア族、全体に広がっているの」

「全体にですか？」

「そう、私はこう見れて気配探知などは私の十八番の一つで

私達と一緒にフェアベルゲンに移動している時でもハウリア族、全員を捉える様に気配を飛ばしていたの」

「そんな自覚は？」

「チロルちゃんは其れを無意識に行っている」

「む、無意識にですか!？」

「そう、思い当たる節は有ると思うよ」

「確かに誰かが助けて、て求めている気がしていざ行ってみると本当に有ったことが何回が有りました」

「どうして無意識にハウリア族、全員に防衛本能が働いている理由はハウリア族の皆さんに恩がある。」

と私は予測しているの」

「確かにハウリア族の皆さんには恩が有りますけど、其れだけでハウリア族、全員を捉える様に気配を飛ばすことなんて？」

「普通は出来ないけどチロルちゃんは其れを平然にしていたの」

「私てそんなに凄いんですか？」

「凄いよ。」

でも口で説明しても実感が分からないかもしれないから、やって見た方が良いでしょう」

と言って私達は目的地に到着する。

私達の目の前に映ったのは、

「あ、チロルちゃん助けて下さい」

魔法で出来た鎖に簀巻きされているシアを崖ギリギリに立たせてその鎖を持つて居るアレーティアが居た。

「よ、よっヨクアイさん、こ、これ、なっ何の真似ですか」

と動揺しながら右手で私の胸倉を掴みながら左手に髪の毛操作で刃を作って私の首筋に当てている。

「此れはゲームだよ。」

チロルちゃん」

「ゲーム?まさか!？」

「そう、此処からシアちゃんを回収する簡単なゲームだよ」

と私がそう言うとチロルは左腕の髪の毛操作で出来た刃を解除して拳を作り、私目掛けて

「ふさげるな!!」

拳を振り下ろしたが私は

「鉄塊!!」

と六式の鉄塊でギリギリで防ぐ

「シアちゃんの事を何だと思っているだ。

お前は!!」

とチロルはすごく怒って居たが

「私もチロルちゃんの成長を忙しすぎたのは流石にやり過ぎたと思った。

其れと私に夢中になって居て良いの?」

私は左手で右側を指す

「?まさか!」

とチロルも釣られて私が指した方向を見た。

アレーティアが簀巻きされているシアの鎖を手を離して

「アレーティアさん、絶対に離さないd?やばいやばい!!」

アレーティアが鎖を離れた事でシアのバランスが崩れ始めて

「チロルちゃん、たすく?あああああああ」

と崖から落下し始めた。

「シアちゃん!!」

私の胸倉を掴んでいた右手を放り投げるように放して、チロルとシアの距離は50m位もある距離を三步で到達して崖から飛び降りて空中でシアを捕まえて

「ベロおっ!!ベルっ!!」

「ワオオオオオオンツ!」

とベロとベルの大きな雄叫びが溪谷に鳴り響く

私とアレーティアは溪谷の下を見るとチロルがシアをお姫様抱っこで抱えて髪の毛操作で巨腕を作って地面に亀裂を作りながらも衝撃を和らげて着地していた。

私達は溪谷に居りて

「良かった」

「実験は成功ね」

「!!シアちゃん下がって」

私の声を聞くとチロルは直ぐにシアを自分の後ろに下げてチロル、ベロ、ベルの同時に威嚇する。

私は其れを無視しながら

「チロルちゃんのアレの正体は生物由来の生存本能と防衛本能から来る物だからその力をシアちゃんや仲間たちの為に使って居れば決して暴走する心配は無いの」

と私がそう言う

「何んか今まで心のどこかでつつかえていた物が取れた気がします」

「其れなら良かったよ」

「其れとヨクアイさん」

「うん？」

「シアちゃんを一度にもならず二度危ない事させたので、一発全力で殴らせてください」

「やってみなさい。」

「因みに私も特訓するから、変身しないから」

「そうですか。」

「では全力で行きます」

「来なさい」

と私とチロルの全力全開の組手が始まった。

チロルは力任せなので私は六式で相手をした。

因みに終わったのが特訓三日目の早朝で有った

特訓八日目〜最終日

現在私は

「はあああああ!!」

「があああああ!!」

とチロルと模擬戦している。

「剃!!」

と私は六式の剃を発動して

「嵐脚!」

と繰り出すが

「鉄塊!」

とチロルも六式を覚えているので鉄塊で防いで更に髪の毛操作で私の足に絡めて直ぐに右手で掴んで振り挙げて地面に目掛けて一気に

「があああああ!!」

振り下ろした。

「がはあああああ!?!」

私は背中痛みで思わず悲鳴を挙げてしまった。

チロルは追い打ちをする為に私に馬乗りしてペロは私の左腕を押えてベルは私の右腕を押えてチロルは左手で私の喉元を握りつぶすつもりで握って右手は拳を作って

「鉄塊拳法!」

と拳を振り下ろした。

そして寸止めで止めて、拘束を解いた。

「私の負けだね」

と言いなながら衣服に着いた埃を払った。

「や…やっ…と…ヨクアイさんから一本取れた」

とチロルは全身の身体の力を抜いて座った。

「おめでとう。」

六式も全部覚えたい次のステップに行くよ」

「はい、分かりました」

私達は歩いた。

二日目から五日目は私の事を親の仇と言わないばかり目で見つめていたが

流石に六日目になると少しは落ち着いて居た

そして今日初めてチロルから一本取られた事で今まで張りつめていた物が切れたみたいで目つきが戻った

「其れでヨクアイさん」

「うん何かな?」

「さつき次のステップに行くって言いましたけど具体的に何をしますか?」

「具体的にはハジメ君がそろそろハウリア族全員の土台が出来ている筈だから私達が色々な技術を教えるの」

「ヨクアイさんは六式で?」

「黒花は変幻無双流訓練担当、騎竜姉弟は覇気全般担当、牙十郎君は刀担当、優花ちゃんは短刀担当で送るの」

「:私は六式を覚えているから後やるのは?…」

「チロルちゃんは変幻無双流と覇気全般かな」

「其れで変幻無双流と覇気て何ですか?」

「変幻無双流は私達の母さん達が救った世界の最強流派で、体の気を使って相手を倒す。

此れが変幻無双流

もう一つの覇気は気とは違う意志の力を使う身体能力の向こうの能力で、此れは全ての人間に潜在する能力なの。

殆どの人間は開花させる事が無く一生を終えるの」

「其れってシアちゃん達も持って居る力なんですか?」

「うん、全員持って居る力だね。

それで覇気には三種類があつて、見れない鎧を纏う?」
私は持って居る刀を取り出して黒く染めた。

「武装色の覇気、ありとあらゆる物を聞く力の見聞色の覇気、それで最後に王の才能を持って居る人しか使えない霸王色の覇気の三つ」

「武装色の覇気、見聞色の覇気、それと霸王色」

「そう、其れで私は見聞色の覇気が得意で武装色の覇気が苦手それで霸王色の覇気は持って居ない。

黒花は武装色の覇気と見聞色の覇気、両方得意だけど霸王色の覇気は私と同じで持って居ない。

でアテナは武装色の覇気、見聞色の覇気得意で更に霸王色の覇気を持って居るの」

「そうですか」

と歩きながら移動すると

「あ、お姉ちゃん」

「翼愛」

「会長」

と黒花、アテナ、雷槍、牙十郎、優花が先に居た。

「御免んさい」

チロルちゃんの組手が思っていたより長くなっちゃって」

「いえ、大丈夫です」

「それより翼愛、チロルの状態はどうだ？」

「うん、私が教える六式は全て覚えているから」

「そうか」

「其れじゃあ皆行こうか」

「はい、翼愛先輩」

と私達はハジメが指定した場所に移動して到着して私達が見たのは

「数が多くないか？」

「生意気にも殺意を向けてきやがったので丁重にお出迎えしたんです。

なあ？皆？」

「そうなんですよ、ボス。

こいつら魔物の分際で生意気な奴らでした」

「きっちり落とし前はつけましたよ。

一体たりとも逃してませんか？」

「ウザイ奴らだったけど……いい声で鳴いたわね、ふふ」

「見せしめに晒しとけばよかったか……」

「まあ、バラバラに刻んでやったんだ、それで良しとしとこうぜ？」

困惑するハジメと香織、世紀末な不敵な笑みを浮かべるハウリア族の皆さんが居た。

私達は少しフリーズした

ハウリア族の皆さんが立ち去った後

「うん、完全にやり過ぎたな、コレ」

「ハジメ君、完全にやり過ぎよ、これは」

「うんそうだよ。」

ハジメ君

「だよなこれ翼愛達に見？ら？r」

とハジメは油が切れたロボットの様にギリギリと音を立てながら首だけこつちに向けた。

「それでハジメ君」

「ハジメサン、セツメイオナガイシマス」

私は目が笑ていない笑みを浮かべてチロルはカタコトになりながら髪の毛操作で両手、ベル、ベロで四つのドリルを作って

「[[[キュイイイイ]]]]」

と回転を始めた。

其れを見たハジメは冷や汗をかいて直ぐに香織の方を見た。

香織は両手を合わせて

「御免んさい」

「そ、そんな」

と其のまま説教タイムに入った。

それでハウリア族が如何してあそこまで変貌したのを遠い目をしたハジメと香織から私達は全てのきっかけである訓練二日目の話を聞く。

何でも兎人族の其の性質故か、魔物一匹殺すたびに変なドラマが始まったそうだ。

曰く、ハウリア族の男が絶命させた魔物に縋り付く。

まるで互いに譲れぬ信念の果て親友を殺した男のように。

曰く、魔物の首を裂いた小太刀を両手で握り、わなわな震えるハウリア族の女。

まるで狂愛の果て、愛した人をその手で殺めた女のような。

曰く、瀕死の魔物が、最後の力で己を殺した相手に一矢報いる。

体当たりによつて吹き飛ばされたカムが、倒れながら自嘲気味に

「ふつ、これが刃を向けた私への罰というわけか……当然の結果だな……」

と呟く。

そして、その度に始まるその訳の分からないドラマと言う三文芝居に遂にキレルハジメ。

終いには実は戦闘訓練中毎回足元のお花やら虫やらに気を付けていたと言うことに完全に激怒し、地球では俗にハートマン軍曹式の手段で訓練を施したそう。

更に怪我をしたハウリア族は香織が完璧に直すのでハジメは更に容赦なくやったそう。

そしてあんな状態になったそう。

「そうだとしても、限度っていう物が有るんじゃないの？」

「はい、その通りです」

ハジメは土下座の体制になっている。

「此れシアちゃん見たら大泣きするよ」

「はい、その通りです」

「取り敢えず。」

私達の方で、精神面の修行を中心にやらせるから

「お願いします」

と私達とハジメは交代して

「取り敢えず。」

皆OK?」

「はい、お姉ちゃんが考えている事は把握しました」

「ああ、あたしもOK」

「はい姉さんと同じです」

「会長、俺もOKです」

牙十郎君は刀担当

優花は短刀と投げ物全般担当です。

返事は？」

「……………サツ、
サー、 イ エツ サー
!!!」

と私達は特訓を始めた。

先ほどの調教が効いたのか世紀末の行動はしなく大人しく私達の指示を聞いている。

八日目

←

最終日

特訓最終日になり私は

「皆、集合」

ハウリア族一同を呼ぶ。

するとハウリア族一同、全員集まった

「はい、ヨクアイ殿、ご使命は」

「今から魔物の最終試験を行います。」

内容はこの樹海に存在する上位の魔物を1チーム1体狩って来て
ください」

「……………サツ、
サー、 イ エツ サー
!!!」

「では行くぞお前達!!」

「……………お
お お お お
!!」
ハウリア族一同はチームごとに分かれた。
そして

「おい、翼愛達」

と私達は振り返るとハジメ、香織と全く正反対の雰囲気纏わせて

いるユエとシアが来た。

「えへへ、うへへへ、くふふふ」

上機嫌のシアが奇怪な笑い声を発しながら緩みっぱなしの頬に両手を当ててクネクネと身を振らせた。

其れを

「……キモイ」

見かねたユエがボソリと呟くが。

「……ちよつ、キモイって何ですか！ キモイって！」

シアの優秀なウサミミは、その呟きをしっかりと捉えていた。

「嬉しいんだからしょうがないじゃないですかあ。」

何せ、ハジメさんの初デレですよ？ 見ました？ 最後の表情。

私、思わず胸がキュンとなりましたよ、これは私にメロメロになる日も遠くないですねえ」

「あるのか、そんな日？」

「ありますよお、必ず！」

「そんな事より、何があつたんだ？」

「同行者が一人増えた」

「其れてつまりシアちゃんも一緒に行くの」

「そうなんですよ。」

チロルちゃん」

とシアとチロルはお互い抱きしめ合った。

「此れから楽しくなりそうね。」

ハジメ君」

「そうだな」

「其れどういう事ですか!？」

「雷槍君、八日目の映像を」

「あ、はい。」

「ですかシアさんに刺激が？」

「其れはハジメ君のせいだから」

「おい翼愛待！t？」

「其れじゃあ雷槍君、GO!!」

「わ、分かりました。」

「ストラーダ」

『font:ul20』Yes, /font』

と「ストラーダ」に内蔵している八日目の記録映像を流した。

『数が多くないか?』

『生意気にも殺意を向けてきやがったので丁重にお出迎えしたんです。』

「なあ?皆?」

『そうなんですよ、ボス。』

「こいつら魔物の分際で生意気な奴らでした」

『きつちり落とし前はつけましたよ。』

「一体たりとも逃してませんか?」

『ウザイ奴らだったけど……いい声で鳴いたわね、ふふ』

『見せしめに晒しとけばよかったか……』

『まあ、バラバラに刻んでやったんだ、それで良しとしとこうぜ?』

とストラーダの記録映像は其処で止まった。

シアはハジメの方向を見てハジメは明後日の方向を向き出した。

「ど、どういうことですか!?!ハジメさん、父様達に一体何が!?!」

「ちよつと、目を逸らさないで下さい! こつち見て!」

「すうすうはあはあ……」

ハジメは深呼吸して

「別に、大して変わってないだろう?」

とハジメは しらを切るが

「貴方の目は節穴ですか!?!見て下さい! 一部の人は筋肉隆々になつ

て、其処の人は素手が黒光り出して大岩を壊しているんですよ!？」

「それは翼愛達のせいだ」

「そうね私達が教えた武術のせいね」

「ヨクアイさんも関わってるんじゃないですか!? まあ、あれはいいでしょう。」

でも、あの人を見て下さい! きつきからナイフを見つめたままウツトリしているじゃないですか!

あつ! 今、ナイフに “ジュリア” って呼びかけた!? ナイフに名前つけて愛でてますよ!?! 普通に怖いですく〜」

樹海にシアの焦燥に満ちた怒声が響く。

一体どうしたんだ? と分かってなさそうな表情でシアと私達のやり取りを見ているカム達。

先ほどのやり取りから更に他のハウリア族も戻って来たのだが、その全員が……何というか……: 武道家みたいな風貌になっている。

男衆だけでなく女子供、果ては老人まで。

シアは、そんな変わり果てた家族を指差しながら私達に凄まじい勢いで事情説明を迫っていた。

私達はというと、どことなく気まずそうに視線を逸らしながらも、のらりくらりとシアの尋問を躲わしている。

埒があかないと判断したのか、シアの矛先がカム達に向かった。

「父様! みんな! 一体何があつたのです!?! まるで別人ではないですか!」

縫り付かんばかりのシアにカムは、ギラついた表情を緩め前の温厚そうな表情に戻った。

それに少し安心するシア。

だが……

「何を言っているんだ、シア? 私達は正気だ。

ただ、この世の真理に目覚めただけさ。

ボス達のおかげでな」

「し、真理? な、何ですか、それは?」

ギラついた表所を緩め前の温厚そうな表情に戻りながらも訳の分

からないことをいうカムに頬を引きつかせながら尋ねたシアにカムは自信に満ちた様子で、

「この世の問題の9割は暴力で解決できる」

そう宣言した。

「やっぱり別人です〜！チロルちゃん優しかった父様は、もう死んでしまったんです〜!?!うわあ〜くん!!」

「よしよし」ゞ(・ω・・)

とシアはチロルに抱きつきチロルはシアの頭を撫でた

その間に

「ボス！ヨクアイ殿！手ぶらで失礼します！報告と上申したいことがあります！発言の許可を！」

「もう完璧に軍人ね」

「お、おう？何だ？」

歴戦の軍人もかくやという雰囲気には私は溜息をつき、やりすぎたかもしれないと若干どもるハジメ。

そんな2人の心情などお構いなしに少年は報告を続ける。

「は！課題の魔物を追跡中、完全武装した熊人族の集団を発見しました。

場所は大樹へのルート。

おそらく我々に対する待ち伏せかと愚考します！」

「あ〜、やっぱ来たか。

即行で来るかと思ったが……なるほど、どうせなら目的を目の前にして叩き潰そうって腹か。

なかなかどうして、いい性格してるじゃねえの」

「えっと？それで上申つてのは？」

「は！宜しければ奴等の相手は我らハウリアにお任せ願えませんでしようか！」

「う〜ん。カムはどうだ？こいつはこう言ってるけど？」

とハジメはカムたちの方を見た

「お任せいただけるのであれば是非。

我らの力、奴らに何処まで通じるのか……試してみたく思います。

なくにそうそう無様な姿は見せやしませんよ」

話を振られたカムは不敵な笑みを浮かべながら頷く。

そして、カムの言葉に周囲のハウリア族が全員同じように好戦的な表情を浮かべた。

「……出来るんだな？」

「肯定であります！」

最後の確認をするハジメに報告に来た少年が元気よく返事をした。

目を閉じ、深呼吸するハジメを見て私は嫌な予感がしたのか私は

「聞け！ハウリア族 s y ? 「ちよつと待て!!」ぐへ!？」

思わずハジメの後頭部を回し蹴りを繰り出して地面に減り込ませ
て

「アテナ、演説お願い」

「お、おう」

アテナが変わりに前に出て

「聞け！ハウリア族諸君！勇猛果敢な戦士諸君！今日を以てお前達は
最弱兔を卒業する！」

ハウリア族はもう淘汰されるだけの無価値な存在ではない！

力を以て自分に降りかかる理不尽を粉碎し、知恵を以て敵意を倒す
！

最高の戦士だ！私念に駆られ状況判断も出来ない熊人族にそれを
教えてやれ！

熊人族はもはや唯の踏み台に過ぎん！唯の熊野郎どもだ！

奴等に敗北を築き、その上に証を立ててやれ！

生誕の証だ！ハウリア族が生まれ変わった事をこの樹海の全てに
証明してやれ！」

「！！」
「各自武器はオールフリーで倒せ」

i r, y e s, s i r
S

「兎に角追い掛けるよ」

「?だな」

と私達は急いで追いかけた

抗争終結

ハウリア族を追いかけて私達が見たのは

「黒式、兎拳^{とけん}」

「がああああ!?!」

「」「族長!?!」」

腕が黒く染まったカムの渾身の拳を受けた熊人族の長であるジン・バントンは樹とぶつかりめりこんでしまった。

それを見た他の熊人達は長であるジンがやられたこととそれをやったのが最弱と言われていた兎人であることから2重の意味で驚いていた。

「なんなんだこれは・・・一体どうなってるんだ!?!」

と言うか、お前ら本当に兎人族かよ!?!」

ジンと共に私達を殺そうとやってきた次期族長と噂の高い熊人レギン・バントンは次々と蹂躪される仲間を見て大声でツツコミを上げる。

それもそうだろうなせなら、

「ほらほらほら! 気合い入れろや! 刻んじまうぞ!」

「アハハハハ、豚のように悲鳴を上げなさい!」

「汚物は消毒だ! ヒヤハハハハ!」

「兎人族が何で空飛べるんだよ!?!」

と六式の月歩で空を飛ぶハウリア族が居るからだ

「ちくしょう! 何なんだよ! 誰だよ、お前等!?!」

「こんなの兎人族じゃないだろう!?!」

「うわああああ!?! 来るな!?! 来るなああああ!?!」

様々な致命な斬撃が無数に振るわれ

何処からともなく飛来する正確無比な矢ら石に手裏剣

認識を狂わせる巧みな気配の断ち方

高度な連携。

そして何より狂的な表情と哄笑と未知な武術!

その全てが激しい動揺を生み、スペックで上回っているはずの熊人

族に窮地を与えていた。

「レギン殿！族長を連れて撤退を！」

「だが!？」

「このままでは全滅です。」

「殿は私が務めm」

「嵐脚!!」

「クペ!？」

「トントト!？」

一時撤退を進言してくる仲間に、族長であるジンを倒され、他の仲間まで殺られて腸が煮えくり返ってくることから逡巡するレギン。

その判断の遅さがハウリア一族にとっては最大の間隙で、撤退を申し出、殿を申し出したトントトと呼ばれた熊人族に大きな切り傷を受けた。

それに動揺して陣形が乱れるレギン達。

それを好機と見てハウリア族が一斉に襲いかかった。

霧の中から矢、石、手裏剣が飛来し、足首という実にいやらしい場所を驚くほど正確に狙い撃ってくる。

それに気を取られると、首を刈り取る鋭い斬撃が振るわれ、その斬撃を放った者の後ろから絶妙なタイミングで槍の突きが来る。

だが、それも本命ではなかったのか、突然、背後から気配が現れ致命の一撃となる大技を放たれる。

辛うじてそれを避けた者も体制が崩れた所に捕らえられた全身の骨を砕かれる。

ハウリア族はどのように連携と気配の強弱を利用してレギン達を翻弄した。

レギン達は戦慄する。

これが本当に、あのヘタレで情弱な兎人族なのか!？」と。

「どうした。『ピー』。野郎共!この程度か!この根性無しが!」

「最強種が聞いて呆れるぞ!この『ピー』。共が!それでも『ピー』。付いてるのか!」

「さっさと武器を構えろ!貴様ら足腰の弱った『ピー』。か!」

兎人族とは思えない罵倒に戦慄の表情を浮かべる熊人族達の心の

中は、（ほんとに此奴らに何があつたんだ!?!）と一致した。

暫くの間、熊人族は抗戦を続けたものの混乱から立ち直る前に満身創痍となり武器を支えに何とか立っている状態だ。

抗戦を続けながらなんとか気を失ったジンを回収したレギン達だったが、連携と絶妙な援護攻撃に休む間もなく、全員が肩で息をしている。

中には既に心が折られた者もいたのか頭を抱えて震えている者もいた。

そんなレギン達を大木の後ろにまで追い込み、取り囲むハウリア族。

「クツクツク、何か言い残すことはあるかね？最強種殿？」

「ぬぐう」

あくどい表情を浮かべ、皮肉な言葉を投げかけるカムにレギンは苦虫を噛みつぶしたような表情を浮かべる。

しばしの間考えこむと、

「……俺はどうなつてもいい。煮るなり焼くなり好きにしろ。

だが、仲間と族長は見逃して欲しい」

「なっ!?!レギン殿!?!」

「レギン殿！それは……」

レギンの発言に生き残った熊人族達がざわつき始めた。

レギンは自分の命と引き換えに生き残った仲間とジンの存命を図ろうとしたのだ。

「レギン、その必要は……ない」

「レギン!?!」

気を失っていたジンが目を覚まし、待ったをかけた。

「……頭に血が上り目を曇らせ、多くの同胞を失うことになったのは私の責任だ。

兎人……いや、ハウリア族の長殿。

勝手は重々承知している。私の命を渡す。

だから……どうか、生き残ったこの者達の命だけは助けて欲しい！この通りだ」

跪いてカムに頭を下げるジン。

最強種と呼ばれていた誇りを捨て、自分達を存命させるために頭を下げたジンにレギン達は何も言うことが出来なかった。

「だが断る。」

嵐脚」

という言葉と六式の嵐脚の蹴りだった。

「うお!?!」

咄嗟に身をひねり躲すレギン。

しかし、カムの蹴りを皮切りに、ジン達の間合いの外から一斉に矢やら石、手裏剣などが高速で撃ち放たれた。

敢えて下がって投擲で攻撃して来る者達もいる。

大斧を盾にして必死に耐え凌ぐレギン達に、ハウリア達は哄笑を上げながら心底楽しそうに攻撃を加える。

「なぜだ!?!」

呻くように声を搾り出し、問答無用の攻撃の理由を問うジン。

「なぜ? 貴様らは敵であろう? 殺すことにそれ以上の理由が必要か?」

カムからの答えは実にシンプルなものだった。

「ぐっ、だが!」

「それに何より……貴様らの傲慢を打ち砕き、蹴るのは楽しいのでなあ! ハッハッハッ!」

「んなつ!?! おのれえ! こんな奴等に!」

カムの言葉通り、ハウリア達は実に楽しそうだった。

手裏剣やクロスボウ、弓を安全圏から蹴るように放っている。

その姿は、力に溺れた者典型の狂気じみた高揚に包まれたものだった。

どうやら、初めての対人戦、それも同胞たる亜人族を殺したことに心のタガが外れてしまったようである。

簡単言えば、完全に暴走状態だ。

攻撃は苛烈さを増し、ジン達は身を寄せ合い陣を組んで必死に耐えるが……既に限界。

致命傷こそ避けているものの、みな満身創痍。

次の掃射には耐えられないだろう。

カムが口元を歪めながらスッと腕を掲げる。

ハウリア達はその意図を理解したのか狂的な眼で矢を、石をつがえるのを止めた。

助かったとは思わない、武器を使わずに直接トドメを刺すつもりなのだ。

ジン達は、ここが死に場所かと無念を感じながら体の力を抜く。

そして、心の中で、扇動してしまった部下達に謝罪をする。

カムの体が、レギン達の命を奪うべく引き絞られた弓から放たれた矢の如く打ち出された。

スローモーションで迫ってくるそれを、レギンは、せめて目を逸らしてなるものかと見つめ続け、そして……

「いい加減に……しなさあ~~~~い!!」

ジン達の前に二人の影が現れて一人は槍でもう一人は巨大な丸太を持って全てを吹き飛ばす光景を目のあたりにした。

「どう言うおつもりですか……:……アテナ殿とシア?」

「別にこいつらが死んでもあたしらは構わなかったが」

「私も構いません」

「二いいのかよつ!?!」

アテナの答えに虐殺を止めに来てくれたのかと思っていた熊人族達は、アテナとシアの言葉に思わずツツコミをいれた。

「当たり前です。殺意を向けて来る相手に手心を加えるなんてことをしたら逆にこっちがやられてしまいます」

「ふむ、では何故我々を止めたのだ?」

「そんなの決まっています!父様達が壊れてしまうからです!堕ちてしまうからです!」

「壊れる?墜ちる?」

シアの返答に訳が分からないという表情をするカム達。

「敵に容赦しないのは構わない

強くなつたことを実感してそれを喜ぶのも良い。

「だけど、甚振ることを楽しむのは話は別だ」

「い、いや、私達は楽しんでなど……」

アテナの発言にカムは否定するが、熊人族は心の中では（思いつ切りたのしんでただろうが!!）と肯定していた。

「やっぱり自覚無いか」

雷槍

「はい」

とアテナは雷槍を呼んで

「映像」

「分かりました。」

「ストラーダ」映像出して」

『font:ul20』Yes^は、い^い 『font』

とストラーダから映像が流れて先程の戦闘のシーンが流れた。

其処に映っていたのは狂気に飲み込まれているハウリア族だった。

此れを見たハウリア族は宿った狂気が吹き飛ぶほど、冷水を浴びせられた気分だ。

自分達家族の大半を嘲笑と愉悦交じりに奪った輩と同じ表情……実際に目の当たりにして来たからこそその醜さが分かる。

家族を奪った彼等と同じ……それはカム達にとって耐え難い事実だ。

「シ、シア、アテナ殿、私は……私達は……」

「皆少しは落ち着いたみたいね」

動揺しているカム達に私は霧の向こうから現われて安堵する。

「皆、初陣だから浮足立つは分かるけど理性の制御はまだまだ半人前ね

その理由がね？ハジメ君」

私は有る場所を見つめると明後日の方向を見ながらこつちに歩いてきたハジメが現れた。

「そうですよ。」

この原因を作ったのはハジメさん何ですよねえ。

まったく、戦える精神にするというのは解りますが、あんなのはや

りすぎですよ！

戦士どころかバーサーカーの育成じゃないですか！」

カム達を豹変させた原因を作ったハジメに対し怒るシア。

「しようがねだろ!!」

あーでもしなきや翼愛達に繋がられなかったからな。

其れと」

ハジメに文句を垂れるシアに言い訳しながら「ドンナー」を抜き発砲した。

撃った弾丸はこっそりと逃げ出そうととしていたジン達の前の木に当たり倒れてジン達の逃げ道を塞ぐ。

「なにドサクサに紛れて逃げ出そうとしてんだ？ 話が終わるまで正座でもしとけ」

ハジメはジン達に威圧を仕掛けた。

ハジメは威圧にガクブルしながら正座している彼等を尻目に、私はジンに近づいて

「熊人族のジンさん、貴方達は私達に敵対行動した為本来なら貴方達一族は全て滅ぼさる運命です」

「？そ、其処なんとか」

とジン達は私の言葉を聞いて頭を下げた。

「其処で条件付きで貴方達全員解放します」

「条件？」

あっさり帰っていいと言われ、ジンのみならず周囲の者達が一斉にざわめく。

「はい条件付きで。

フェアベルゲンに帰ったら長老衆に此れを渡して下さい。

シャルル」

「はいシャルル」

と私の横に魔法陣が展開されて私は其処に手を入れてカセットテープレコーダーを出した。

「……それは？」

ジン達は私が取り出した物に興味を示した。

「これは声のある程度声を入れるっ事が出来るマジックテープで今から其れを吹き込む。」

「因みに魔法無しで使えるから大丈夫です」

「つまり伝言か？」

「そう、今から声を入れます」

とカセットテーププレコーダーの録音ボタンを押して

「フェアベルゲンの皆さんこの度ジン達が生息する熊人族が襲撃して来ましたが此れを撃退。」

そして本来ならジンの一族は皆殺しにしますが条件付きで辞めませう。

条件の内容は貸し一つです」

とカセットテーププレコーダーの停止ボタンを押した

「……ッ!? それはっ!」

言伝の内容の意味を察したジンは怒鳴りそうになる。

そんなジンとは裏腹に私はどこ吹く風でジンの選択を待っている。

どうするべきかジンが思い悩んでいると、

「それと、追い打ちをかけるようだが、アンタの部下の死の責任はアンタ自身にあることもしっかり周知しておけよ? 最弱種と呼んでいた兎人族に惨敗した事実と一緒にな」

「ぐう!」

「因みに悪いけど飲み込まなければこいつ等にお前らの集落に攻撃すると命令するが」

とアテナの容赦ない言葉に

「わ、分かった、我らは帰還を望む!」

ジン達は飲み込んだ

ジンの回答を聞いた私は

「其れじゃあこれお願いね。」

「因みに?」

とカセットテーププレコーダーの説明して持たせて

「ああ、そうそう、其れを捨てたり、使い方を忘れたとか嘘は言わないで置けよ? もし、間違ったことを言ったり、約束を違えるような時

は・・・」

ハジメの全身から、強烈な殺意が溢れ出す。

もはや物理的な圧力すら伴っていきそうだ。

ゴクツと生唾を飲む音がやけに鮮明に響く。

「その日がフェアベルゲンの最後だと思え」

と熊人族は帰って行きハジメはカム達の前に行き

「あゝゝゝ、まあ、その、何だ、悪かったな。

自分が平気だったもんですっかり殺人衝動つてのを失念していた。

完璧に俺のミスだ。

すまなかつた」

今までの事を履まれて謝罪の言葉を口にしたが

「ボ、ボス!?!正気ですか!?!頭打ったんじや!?!」

「メディーク!メディーク!重傷者1名!」

「ボス!しっかりして下さい!」

ハジメが素直に謝罪の言葉を口にしたことに口を開けて目を点にするハウリア族。

だが、返ってきた反応にハジメは青筋を浮かべ、口元をヒクつかせる。

今回のことは流石のハジメも本心から自分のミスだと理解しており、謝罪の言葉を口にしたというのに、

「頭を殴れば未だ間に合うのでは……」

「そうだな、シアの言う通りだな」

返ってきた反応は正気を疑われるというものだった。

私はハジメの肩を触れて

「ドン（。㇇。）マイ」

「何が（#。㇇。）」

大樹と別れ

ハウリア族が熊人族を撃退して私達は大樹を目指して移動している。

「そう言えばシアの特訓は如何だったんだ？」

南雲がアレーティアに訊ねる。

「……………魔法の適性はハジメと変わらなかった」

つまり全属性に適性無し

「宝の持ち腐れか……………」

「ただ……………身体強化に特化してる。

正直化け物レベル。

多分通常のハジメの6割ぐらい……………少なくとも通常の力オリより身体能力は上。

しかも鍛練次第でまだ上がるかも」

「マジか？ 確かに化け物レベルだ。」

それと翼愛、チロルの方は如何だった？」

「魔法の適性は炎と闇でベルとベロからでも撃てる。

固有魔法髪の毛操作はある程度の操作できている

「武術は六式、変幻無双流、覇気全集は粗削りだけど全部覚えている」

「そうか、それにしても翼愛達がまさかONE PIECEの六式、覇気を覚えていたのが驚きだ」

「ひいおじいちゃんの武術は我流で兎に角アニメの動きを再現したら合格だからね」

「マジか、そのひいおじいちゃん風鳴弦十郎とかじゃないよな」

「風鳴弦十郎より風鳴訃堂に似ているかな。」

風鳴弦十郎はおじいちゃんの方だから」

「ああくなんかそつちがしっくりくるな」

「其れでハジメ君達の方は六式と覇気は如何なの？」

牙十郎君と優花ちゃんは六式は全部覚えている。

覇気はもう少し先で覚えられるはずだから」

「ああ、俺と香織も同じ感じだ」

「そう」

と歩いて居ると

「ボス！ 大樹が見えてきました！」

「よしでかした！ 最後まで気を抜くなよ！」

やがて森が開けるとそこには、

「何だこりや……………」

「枯れてる……………」

南雲と香織が呟く。

私達も予想が外れたのか微妙な表情だ。

私達は大樹についてフェアベルゲンで見た木々のスケールが大きいバージョンを想像していたのである。

しかし、実際の大樹は……見事に枯れていたのだ。

大きさに関しては想像通り途轍もない。

直径は目算では測りづらいほど大きい直径五十メートルはあるのではないだろうか。

だが、明らかに周囲の木々とは異なる異様だ。

周りの木々が青々とした葉を盛大に広げているのにもかかわらず、大樹だけが枯れ木となっているのである。

「大樹は、フェアベルゲン建国前から枯れているそうです。

しかし、朽ちることはない。

枯れたまま変化なく、ずっとあるそうです。

周囲の霧の性質と大樹の枯れながらも朽ちないという点からいつしか神聖視されるようになりました。

まあ、それだけなので、言ってみれば観光名所みたいなものですが……………」

私達の疑問顔にカムさんがそう説明する。

そしてその大樹に近付き、

「後は、石板がここにあるぐらいですな」

大樹の根元にある石板を指した。

私達は近づいて見た

「これは……………オルクスの扉の……………」

「……ん、同じ文様」

「つて、事はココで間違いは無いはずよね」

その石板には七角形と、それぞれの頂点にある紋様が描かれている。

すると、アレーティアが

「ハジメ、この紋様」

と何か気が付いて指し示した。

私達は其処を見た。

「間違いない。オスカーの紋様と同じだ」

そう言つて頷いた。

「どうやらここが大迷宮の入り口みたいだが……こつからどうすりゃいいんだ？」

ハジメが腕を組んで考える。

カム達に何か知らないかと聞くが返答はNOだった。

アルフレリックからも口伝は聞いているが、入口に関係する理由はなかった。

隠していた可能性もないわけではないから、これは早速貸しを取り立てるべきか？ と悩み始めるハジメ。

すると

「ハジメ……これ見て」

「ん？ 何かあつたか？」

アレーティアが石板の裏に何か見つけたのか私達も覗き込む。

そこには、表の七つの文様に対応する様に小さな窪みが開いていた。

「これは……」

「一つはオルクスの紋章よね」

「他のはきつと他の解放者の紋章だね。」

中にはアレーティアの封印の場所と同じ文様あるし」

「ハジメ？オルクスの指輪出して」

「ああ」

とアレーティアはオルクスの指輪を表のオルクスの文様と同じ窪みに嵌めてみる。

すると……石板が淡く輝きだした。

何事かと、周囲を見張っていたハウリア族も集まってきた。

しばらく、輝く石板を見ると、次第に光が収まり、代わりに何やら文字が浮き出始める。

そこにはこう書かれていた。

“四つの証”

“再生の力”

“紡がれた絆の道標”

“全てを有する者に新たな試練の道は開かれるだろう”

「……どういう意味だ？」

南雲が呟くと、

「……四つの証は他の迷宮の証じゃないかな？」

私がそう言う。

「紡がれた絆の道標は亜人の案内人って事じゃないですか？」

「うん私もシアの意見に賛成」

シアとチロルが続ける。

「再生の力は……私の再生能力とは違うみたい」

ユエが石板に触れても何の反応も示さない事からそう言うのと、

「じゃあ、再生に関する神代魔法って事かな？」

香織が仮説を立てる。

「だな再生系の魔法はいくつも存在するからな。

特定の再生系の魔法を鍵にすると其れが妥当だな」

とアテナが香織の仮説を強く裏付ける

「つまり今すぐ攻略は無理って事か……仕方ない。

面倒だが他の迷宮からあたるか。

先に三つの証を手に入れよう」

「賛成。

皆も良いよね？」

「「「「「異議無し!!」」」」」」

次の目標を決めるとハジメはハウリア族に集合をかけた。

「いま聞いた通り、俺達は、先に他の大迷宮の攻略を目指すことにする。」

大樹の下へ案内するまで守るという約束もこれで完了した。

お前達なら、もうフェアベルゲンの庇護がなくても、この樹海で十分に生きていけるだろう。

そういうわけで、ここでお別れだ」

「ハウリア族全員の為の隠れ里も用意しました。

守っていくのはハウリア族達次第です。」

そして、ハジメはシアを私はチロルをチラリと見る。

その瞳には、別れの言葉を残すなら、今しておけという意図が含まれているのをシアとチロルは正確に読み取った。

いずれ戻ってくるとしても、三つもの大迷宮の攻略となれば、それなりに時間がかかるだろう。

当分は家族とも会えなくなる。

シアとチロルは頷き、カム達に話しかけようと一歩前に出た。

「とうき」ボス、ヨクアイ殿！ お話があります！」……あれえ、父様？ 今は私達のターンでは……」

シアの呼びかけをさらりと無視してカムが一歩前に出た。

ビシツと直立不動の姿勢だ。

横で

「父様？・ ちよつと、父様？」

とシアが声をかけるが、まるでイギリス近衛兵のように真つ直ぐ前を向いたまま見向きもしない。

「あゝ、何だ？」

取り敢えず

「父様？・ 父様？」

と呼びかけているシアは無視する方向で、ハジメはカムに聞き返した。

カムは、シアの姿など見えていないと言う様に無視しながら、意を

決してハウリア族の総意を伝える。

「ボス、我々もボス達のお供に付いていかせて下さい！」

「えっ！ 父様達もハジメさんに付いて行くんですか!？」

カムの言葉に驚愕を表にするシア。

「チロルちゃん知っていましたか？」

「知らない」

とチロルに聞くがチロルは知らないみたいだ

十日前の話し合いでは、シアとチロルを送り出す雰囲気だったみたいで

「我々はもはやハウリアであってハウリアでなし！ ボスの部下であります！ 是非、お供に！ これは一族の総意であります！」

「ちよつと、父様！ 私達、そんなの聞いてませんよ！」

ていうか、これで許可されちゃったら私達の苦労は何だったのかと……「ぶっちゃけ、シア達が羨ましいであります!」?ぶっちゃけちゃった! ぶっちゃけちゃいましたよ! ホント、この十日間の間に何があつたんですかつ!」

「ハアアア」

カムが一族の総意を声高に叫び、シアがツツコミつつ話しかけるが無視され、チロルは苦笑いしていた。

何だ、この状況? と思いつつ、ハジメはきつちり返答した。

「却下」

「無理かな」

「なぜです!?!」

ハジメの実にあっさりした返答に身を乗り出して理由を問い詰めるカム。

他のハウリア族もジリジリと私達に迫る。

「足でまといだからに決まってるんだろ、バカヤロー」

「修行不足かな、今の皆さんだについて来れないから」

「しかしっ!」

「調子に乗るな。」

俺達の旅についてこようなんて百八十日くらい早いわ!」

「ぐすつ、誰も見向きもしてくれない……旅立ちの日なのに……」

傍でシアが地面にのの字を書いていじけているが、

「それは私も同じだから」

「うう、やっぱり私の心の友はチロルちゃんだけです」

チロルが励ます。

そして私達はハウリア族の見送りされながらフェアベルゲンを後にした。

ブルツクの街

私達はハジメが運転する、魔力駆動四輪で移動する。

そして町の門が見えて来た時、

「ハジメ君、其処に魔力駆動四輪を止めて」

「良いぞ、流石に此れに乗ったままあそこに入るは気が引けるからな」

とハジメは魔力駆動四輪を私が指定した場所に止めて私達は降りて、ハジメは魔力駆動四輪を宝物庫に仕舞った。

「アレーティアちゃんはアレーティアを捨てて改名ユエでいいんだよね?」

私はアレーティアに名前の確認をする。

「うん。」

此れからはハジメから貰ったユエで生きる」

「分かった。」

此れからユエちゃんね」

其れと皆に聞くけどこの世界の身分証明書Ⅱステータスプレートの改ざんした。

特にハジメ君を始めた魔物肉を食べた人達は」

「「「「あ!」」」」」

「忘れていたいたんだ」

「えつと? ほらつい最近まで濃厚な毎日を送って居たからな」

「そうだね。」

私達濃厚な毎日送っていたね」

「「うん、うん」」

「はあああ」

と其々感想言った。

「其れとハジメ君」

「次は何だ?」

「取れない首輪を二つ作ってくれない」

「「ええ!」」

とシアとチロルは驚いていたがハジメは

「成程な、待つて居ろ」

とハジメは錬成で直ぐに首輪を二個、作つて

「其れで片方だけ私に渡して」

「分かった」

と二個の首輪の片方を投げて私はキャッチして

「シャルル、あのスプレー出して」

「えっと確か、此れだったシャル？」

と空間魔法陣から一つのスプレー缶が出て来て私はキャッチする

そしてスプレー缶のラベルを見る。

目がハートマークの犬の顔が書かれていた。

掛かっていたラベルを確認している間にも

「シア首輪付けるぞ。」

それとチロル止めるじゃねーぞ」

「ちよ、やめえ、ハジメさん、どつから出したんですかつ、その首輪！

ホントやめてえゝそんなの付けないでえゝ、

チロルちゃん助けて」

「えっ…でもっ…」

とチロルはシアより私の方を見た。

正確に言えばチロルは私が持つて居るスプレー缶を見ている。

私は其れを無視してスプレー缶の蓋を取つて首輪に吹きかける。

すると

「[[うずうず]]」

チロルなどの犬人族は鼻が敏感故にスプレー缶から出た匂いを少

し嗅いでチロル、ベロ、ベルの体がうずうずしている

「はい、チロルちゃん掛けましょうね」

と私が近づくと

「……はい♡」

「ワン♡」

「チロルちゃん!」

と一人と二匹の目がハートマークに変わつて自分自ら首輪を掛ける出来事にシアは驚いて居た。

そしてチロル達は首輪を掛けると直ぐに首輪を嗅ぎ始めた。

「?チロルちゃん!?チロルちゃん!……チロルちゃんが変になった!?!」

「翼愛、何したんだ?」

「あの首輪に吹きかけたのはどんな犬でもまつしぐらに嗅いでしま
う、私独自に配合した匂いで、

その逆でどんな犬でも嗅ぐのを躊躇う匂いを私独自に配合した物
もあるの」

「成程な」

「チロルちゃんチロルちゃんしっかりして下さいチロルちゃん。

ヨクアイさん、チロルちゃんに何したんですが」

とこんな事も有ったが私達は徒歩で町の門に移動した。

町の入り口までやって来ると、

「止まってくれ。」

ステータスプレートを。

後、町に来た目的を教えてください」

門の脇にあった小屋から武装した男が出てきて、ステータスプレー
トの提示と町に来た目的を聞いてきた。

「こんにちは」

と私は挨拶して

「食料の補給がメインだ。旅の途中でな」

ステータスプレートを差し出す。

ユエとシアとチロルはステータスプレートを持っていないので出
せない。

「ふむ………錬成師に治癒師に投術師に弓士に魔導士に剣士に騎士
が二名か……そっちの三名は?」

ステータスプレートを提示してないユエとシアに視線が向く。

「あく、実はこっち金髪の方は前に魔物に襲われた時に無くしちまっ
てな………それでこっちの兎人族と犬人族は………わかるだろ?」

そう言うハジメ。

門番は

「それにしても随分な綺麗所を手に入れたな。

黒髪の犬人族は兎も角、白髪の兎人族なんて相当なレアなんじゃないか？

「あんたらって意外に金持ち？」

「私とハジメはアイコンタクトで合図を出して

「金持ちじゃなくて」

「ついさつき樹海に入って捕まえて来たばかりだからな」

「そうか、まあいい。通っていいぞ」

「有り難う御座います。」

素材を換金したいんですが。

冒険者ギルドが何処にあるか教えて貰えませんか？」

「ギルドだったら、中央の道を真っ直ぐ行けばいい。」

「店に直接持ち込むのならギルドで聞くといい。」

「簡単な町の地図をくれるはずだ」

「有り難う御座います」

「私達は門番に礼を言う」と

「ようこそ『ブルック』へ」

と私達は門をくぐり町へと入っていく。

街を見回りながら道なりに進む。

「王都と比べれば当然ながら小さいが活気がある。」

「中々活気があつていい街だな」

「そうだね」

「んっ……………」

ハジメの言葉に白崎さんとユエが頷く。

「クンクンクン」

「……………」

「で、いつまでむくれてんだ？シア」

小さくため息をついたハジメが振り返ると、首輪を嗅いでいるチロル、ベロ、ベルと半泣きになっているシアがいた。

「これです！

「なんですかこの首輪！」

これのせいで奴隷と勘違いされたじゃないですか！

ハジメさん達、わかっていて付けたんですね！

うう、酷いですよお、私達、仲間じゃなかったんですかあゝ
それとチロルちゃんは何時まで嗅いでいるんですが」

「だってこの匂い私達好みなんだもの」

とコントをしている途中で

「其れが有れば面倒事を色々解消できるからね」

「此れがですか!？」

「そうだぞ、奴隷でもない亜人が普通に街を歩けるわけないだろ？」

犬人族の女性は兎も角、愛玩奴隷としての需要が高い兎人族の女で
容姿もスタイルも抜群なんだ。

奴隷だと示してなかったら何回人攫いに狙われるか分からねえよ」
とハジメがそう説明するとシアの態度がコロツと変わって

「そんな面倒くさい事……って、何してんだ？」

ハジメが気付くとシアは頬に手を当てながらイヤンイヤンと首を
横に振っていた。

「も、もう！いきなり何を言い出すんですか？ 世界一可愛くて魅
力的だなんて………!」

都合よく脚色したシアを

「調子に乗らない!」

「あひいいいいいいいい!?!」

白崎さんのアイアンクローがシアの頭を締め付けられ

「クンクン? えつと……ごめんなさい。」

クンクン? シアちゃんはいつもああいうのだから? クンクン」

チロルが首輪を嗅ぎながらフォローするが、

「ああ…慣れるしかねえだろうな。」

其れといつまで嗅いでいる」

「すみません。」

なかなか辞められなくて」

「そうか」

ハジメ達は小さなため息をついた。

その間にも私達は冒険者ギルドにたどり着いた。私達を迎えたのは、意外にもアットホームな雰囲気。

大抵は荒くれ者の集まる場所だけど此処は内部は清潔感が保たれている希少タイプの冒険者ギルドの様だ。

入口正面にカウンターがあり、左手は飲食店となつていて、誰一人か冒険者らしき者たちが食事や雑談をしたりしているが、誰一人も昼から酒は注文していない。

私達はそんな様子を見ながら受付カウンターに行くと

「冒険者ギルド。」

ブルック支部へようこそ！ ご用件は何だい？」

冒険者ギルドに着くと、受付で出迎えたのは恰幅の良いおばちゃんだった。

大抵は冒険者ギルドの受付カウンターの担当は見た目麗しい人物が選ばれるが多い

「2人とも両手にとびきりの花を抱えてるのにまだ足りなかったかい？ 残念だったね、美人の受付でなくて」

「いや……そんな事考えてないから……」

ハジメがそう言うが少なくともテンプレとは違うと思ったはずだ。

「あははは、女の勘を舐めちゃいけないよ？ 男の単純な中身何て簡単に分かつちまうんだからね。」

あんまり余所見ばつかして愛想付かされないようにね？」

「？ 肝に免じておこう。」

それよりも素材の買取をお願いしたい」

「素材の買取だね。じゃあ、ステータスプレートを出してくれるかい？」

「ん？ 買取にステータスプレートの提示が必要なのか？」

ハジメの問いにおばちゃんが目を丸くする。

「おや、あんた冒険者じゃなかったのかい？ 買い取りにステータスプレートはいらんだけだね。」

冒険者と確認できれば買取額が1割増えるんだよ」

「あ、そういうシステムがあつたのか……」

「有り難う御座います。」

私達最近旅を始めたばかりで冒険者のルールを知らなかったです」
「そうかい。」

後はギルドと提携している宿や店は1〜2割程度は割引してくれるし、移動馬車を利用するときも高ランクなら無料で使えたりするね。

「どうする？登録しておくかい？登録には千ルタが必要だよ」

「……………せっかくだ。お願いしよう」

とハジメはステータスプレートをカウンターに置いた。

「皆は如何する？」

私もステータスプレートをカウンターに置いた

「私も」

「お姉ちゃんと同じです」

「そうだなあたしも別行動する時に色々便利になりそうだし」

「僕も姉さんの意見に賛成です」

「俺達も。」

「やっというて損は無いはずだから」

「うん」

香織、黒花、アテナ、雷槍、牙十郎、優花の順でステータスプレートを出した。

「後、そこに出してちょうだい」

「買取はここでやってくれるのか？」

「あたしは査定資格も持っているから問題ないよ」

ハジメはそう言われるままに魔物の素材が入った袋を出した

魔物の素材が入った袋から素材を取り出すと

「い、これは!？」

おばちゃんが驚愕の表情をする。

「とんでもない物を持ってきたねアンタ達。」

「これは……………樹海の魔物だね？」

「それにこっちは峡谷の魔物だね？」

「はい、正解です」

「ああ…ちよいと峡谷と樹海で滞在する用事があつてな。

やっぱ珍しいか?」

「そりゃあねえ。」

峡谷と樹海なんて並の冒険者じゃ命が幾つあっても足りないよ。

ここでの買取で良いのかい? もつと大きな町なら高く売れそうだけど……………」

「いや、気遣いはありがたいがここで構わない」

「今私達無一文ですから」

「そうかい少し待ってね」

と暫くすると

「はいお待たせ。」

全部で492000ルタだよ」

「冒険者登録もしておいたからね。あと、街の簡素な地図もサービスで付けとくよ」

「ああ、色々と助かるよ」

ハジメの受け取った地図を後ろから覗いてみる。

ハッキリ言つて簡単どころかデパートや遊園地のパンフレットに書いてある位の立派なガイドマップだった。

印刷機の無いこの世界では十分に金が取れるレベルだと思う。

「おばちゃん、このマップ技能を使って書いた?」

「嬢ちゃん、目が良いわね」

その通りよ」

「だとしてもいいのか? 十分に金が取れるレベルだぞ?」

「いいんだよ。」

あたしが趣味で書いてるだけなんだから」

「感謝する」

「ありがとうございます」

と私達は冒険者ギルドを後にした。

大迷宮（その前）

私達は貰ったガイドマップにオススメと書かれていた宿に到着すると、

カウンターらしき場所に行く

「いらっしやいませ！」

「ようこそマサカの宿へ！」

15歳くらい女の子が元気よく挨拶しながら現れた。

「本日はお泊りですか？」

「それともお食事だけですか？」

「宿泊だ。」

「このガイドブック見て来たんだが、記載されている通りでいいか？」

ハジメがそう聞くと、その女の子は納得したと頷き、

「ああ、キャサリンさんの紹介ですね。」

「はい、書いてある通りですよ。」

「何泊のご予定ですか？」

「あの人、キャサリンさんなんだ」

「多分昔何かでブイブイ言わせた感じがする名前だけど」

「まあどんな名前であれ、歳は喰うもんだから仕方ないけど」

「……………」泊でいい」

若干返事が遅れたことから、ハジメも少しはショックを受けたようだな。

「え、えくと、それでお部屋はどうされますか？ 6人部屋と3人部屋と2人部屋が空いてますが……………」

「私達の人数からどの部屋にするかを聞いてくる。」

「そうだな……………」

ハジメが少し考えると、

「6人部屋、3人部屋、2人部屋を1つで！」

「香織がそう答えた。」

「香織ちゃん、因みにその内訳は？」

私がそう聞くと、

「もちろんハジメ君、私、ユエで一部屋。翼愛ちゃん、黒花ちゃん、アテナちゃん、雷槍君、チロルちゃん、後シアで一部屋。後は牙十郎君と優花ちゃんの一部屋だよ！」

当然とばかりに香織は答える。

「あはははは」

私は苦笑いする。

「ちよつと待ってください！ 何で私はハジメさんと一緒じゃないんですか!？」

シアが異議ありとばかりにそう発言する。

「え？ だってシアはハジメ君の恋人じゃないでしょ？」

「わ、私だってハジメさんと一緒が良いです！」

「へえ？ ハジメ君と一緒にの部屋になってどうするの？」

「~~~~~っ！ ハ、ハジメさんに……………！ ハジメさんと、お、

大人の階段を~~~~~っ!!」

その瞬間、香織の背後が揺らめいて両手に刀を持った般若が浮かび上がった。

「覚悟はできてるのかな？」

「この残念ウサギ……………！」

と言いながら「LBCS オーティーンmk-2」を取り出した

それにしても香織はいつの間にもスタンドを覚えたのか？

シアは香織の背後に浮かび上がったスタンドにビビって少し下がる。

更に、

『ドライバーオン ナウ』

「今日がお前の命日……………」

『シャバドウビ タッチ ヘンシン シャバドウビ タッチ ヘンシン』

ユエも「ワイズドライバー」を起動させ指に「チェンジウィザードリング」を嵌めながら魔力を身体中から噴き上げさせてシアを威嚇する。

しかし、

「ううっ……！！ 今日こそカオリさんとユエさんを倒してハジメさんのヒロインに入ってやるですうっ!!」

シアは涙目ながらも気丈が確りして居て香織とシアに立ち向かう事を選んだ。

だが次の瞬間

「迷惑だろうが！ 何より俺がハズイ！」

香織とユエの頭に軽く拳骨が落とされ、シアの耳が引つ張られた。それをしたのはハジメだ。

「まあ取り敢えず香織ちゃんが決めた振り分けにしない？」

「まあそんな所だな

おい」

「あ、はい」

「さっきの部屋割りで頼む」

「わ、分かりました」

と私達は香織が決めた割り振りの部屋に行きまずは6人部屋に集まった。

「——さて俺は此れからとある者を作る作業に入るが」

手をゴキゴキ鳴らして

「その前に少しお説教タイムだ」

と言うと香織、ユエ、シアが少し震えて

「?そう言えば私達冒険用の服を探そうと思ってたんでした

ねえチロルちゃん」

「え、私はいm?」

「ほら、私を選んであげるから」

「?そう言えば私も見てみたい露店があった？」

「いいですね。

そしたら買い物しながら何か一緒に食べましょう！」

「オイ待?」

「ん……いい考え……」

「どういふ事でハジメさん行つてきます」

シア、ユエ、香織、後チロルを連れつて部屋から出た。

「?あいつら実は結構仲良いだろ?」

「かもしれないね」

「そんじやら、私と雷槍は買い出しするは」

「俺と」

「私はデートで」

アテナ、雷槍、牙十郎、優花も部屋から出た。

「皆出て言つたね」

「そうですね」

「で、翼愛と黒花はどうするんだ?」

「私は運動がてらで其処ら辺の魔物倒してきますね」

と言いながら窓の方に行き窓を開けて「ギアトリンガー」と「ハリケンジャーギア」を取り出してセットする。

そしてハンドルを回して

『26バーン!』

『ババン!ババン!ババン!ババン!』

と待機音が流れて引き金を引くと

『ババババーン!ハリケンジャー!』

とハリケンレッドの幻影が現れて其れが黒花の身体に入ると忍者の様に屋根の上を走つて行った。

「それじゃあ私は?ハジメ君」

「何だ?」

「チロルちゃんの武器作つてくれない?」

「いいぞ、どんな感じにするか?」

「遠距離武器で見た目は HELLSINGのハルコンネンIIあたりで」

「ああ、あれか、良いぜ作つておく」

「足りない材料が有れば調達するけど」

「一応材料は豊富が足りない時は頼んだ」

とハジメは作業に取り掛かった。

私はベットの所で寝っ転んで寝た。

暫くすると私は意識が覚醒して起き上がる。

「おう、起きたか」

「おはようハジメ君

武器は？」

「シアの方を専念したからな時間も無いしハルコンネンⅡはサイズも有るから此処では作れないからある物を作った」

「見せてくれる？」

「いいぞ」

とハジメは宝物庫から大型の狙撃ライフルを取り出した。

「これがご所品じゃないがハルコンネンだ」

私を見る。

「随分再現高いね」

「そうだろ、結構再現頑張ったからな」

「口径は？」

「30mm」

「装弾数は？」

「1発」

「装填方式は？」

「単発のブレイクオープン」

「使用弾薬は？」

「専用弾のアザンチウム鉱石弾と魔法式爆裂徹鋼焼夷弾」

「用途は？」

「化物殲滅用並び神殲滅用」

「破壊可能対象は？」

「汎用、全ての兵器に対して」

「カラーは？」

「1765Wのパールホワイト・1766Kのエレガンスブラック・1768Rのレディールージュ」

「価格は？」

「オープン価格」

「送料は？」

「無料で北海道、沖縄県、その他離島にお住まいの方はお問い合わせください」

「返品は？」

「可で7日以内、開封後・使用後も可能、送料はご負担いただきます」

「製造は？」

「トータス」

「輸入並び販売は？」

「ジャパネットハジメ」

「パーフェクトだ。」

ハジメ」

「感謝の極み」

とハジメが頭を下げると静音が響いて

「プツぷぷ」

「あははははは!!」

と私とハジメは思わず笑ってしまった

「まさか此処まで再現できると」

「俺も流石に其処まで再現できると思わなかったわ」

「ありがとうハジメ君」

「俺もこの銃は何時か再現したいと思って居たからな」

と言いながらハルコンネンを宝物庫に仕舞った。

暫くするとユエ達が帰って来た。

「じゃーん！」

ハジメさん見て下さい!!

どうです？

私達の服、似合ってますか？」

シアとチロルは買って来た服を見せて来た

(※シアは漫画版のコスチューム、チロルはもんれすのリングコスチュームです)

「冒険用の服なのに露出がほぼ変わってないんだが？」

「他の服だと窮屈で動きが鈍るんですよ」

「シアちゃん、チロルちゃんは武闘派だからね」

「そうですね」

「ワン」

「バウ」

「?まあ目的が果たせたならそれでいい。」

シア、こいつをお前に渡しておく」

ハジメが宝物庫からある物を取り出して渡した。

其れを受け取ったシアは

「うわっ!」

「すごく重たいんですけど?」

「お前用の新しい戦槌だ」

「何か持つところが小さいような?」

「とりあえず魔力を流してみろ」

「こ?こうですか?」

とシアが魔力を流すと

「カシュ」

「わわっ!」

と変形して立派な戦槌になった。

「戦槌型アーティファクト、ドリユツケンだ」

「すごい?!」

「他にもいくつかギミックを搭載してある。」

「お前の力を最大限生かせるようになってる筈だ」

「それとこつちがチロルの武器だよ。」

ハジメ君に頼んで作ってもらったハルコンネンだ」

「これ私の武器なんですか?」

「此れから行くライセンス大峽谷じゃあ魔力効率が落ちるから、魔力を使わない飛び道具を用意した」

「わ、私達の為に有り難う御座います」

「ワン」

「バウ」

「礼は構わないぞ。」

其れよりも頑張つて使いこなしてくれよ。

仲間になつた以上勝手に死んだらぶつ殺すからな？」

「ハジメさん言っている事が滅茶苦茶ですよ」

「そうね。」

其処は蘇生してからぶつ飛ばす方がしつくりと思うよ」

「いや、ヨクアイさんも無茶苦茶ですよ。」

「ワン」

チロル達に呆れた顔をされた

「でも、もちろんです！」

私とチロルちゃんでもっと強くなつて何処までも付いて行きますから」

く暫く時間が立ちく

私達はライセン大峽谷に居て

「一・撃・必・殺！ですう!!」

とシアがドリユツケン砲撃を振り下ろして背後から来る魔物を

「ドリユツケン砲撃モード!!」

此れでも食らえです！」

と砲撃で爆破させる。

シアの攻撃を回避した魔物は

「ドン!!」

チロルのハルコンネンの狙撃で打ち落とす。

「其れなりに使いこなせてるようだな」

「此れはもうハジメさんとの愛の結晶なので」

「あははは、

私はまだまだですよ」

「…しかしライセン大峽谷の何処かに迷宮が有るとはいえ…

丸三日さがしても見つからないのは骨が折れるな？」

「解放者が作った迷宮

敵に見つかつたらまずいからね」

「先に別の迷宮に向かいます？」

ドリユツケンの使い方なら一応慣れてきましたし？」

「とりあえず今日はもう日が暮れる。

野宮の準備に入ろう」

「そうね」

と野宮に入って現在私とハジメの二人で見張りをする。
テントからシアが出て来て

「如何した？」

見張りの交代はまだだろう」

「ち？ちよつとお花を摘みに？」

「こんな谷底に花は無いぞ？」

とハジメがデリカシーが無い事に私は思わずハジメの頭をハリセンで叩いた。

「もうハジメさん乙女に対するデリカシーが無いですよ」

「そうは言っても翼愛にハリセンで叩かれたんだが」

「ヨクアイさん、ありがとうございます」

とシアが花を摘みに行つた。

「？如何したの？」

「ああ悪い起こしちゃったか

何でもないただシアが小？」

ハジメがまたデリカシーが無い発言を言おうとしたのでハリセンを取り出した瞬間

「た？大変ですう」

こつちですこつちに来てくださあーい!!」

シアが大声で読んで来たので

「何だ何だ？」

とシアの元に行き

「如何したんだよ

紙でも忘れたか？」

「違いますよお、こつちです！

これです！

此れを見て下さい」

とシアが指さす方を見ると

「「!!」」

おいでませー!

ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪

「?・なんだコレ?」

ライセン大迷宮 ライセン大迷宮

おいでませ！

ミレディ・ライセンのドキワク大迷宮へ♪
の石板を見つけて

「？なんだコレ？」

ハジメはそう呟いた。

「？ユエ、翼愛

マジだと思うか？」

「ん…多分本物。名前がその証明」

ユエが注目したのは、『ミレディ・ライセン』の名前。

ライセン大峡谷の名こそ知られているが、ミレディ・ライセンの名前を知る者は地上にはいないはずだ。

解放者ミレディの名前も、ハジメ達はオスカーの屋敷の地下で初めて知った名前である。

「だが、これは信用して良いのか？」

何でこんなチャラいんだよ……」

「さあ？」

取り敢えず皆起こして来るね」

「ああ、頼んだ」

私はテントの方に戻った。

そして私は一人一人ずつ起こして説明する

「そんじゃ皆さん行きましょう」

「」「」「おおー」「」「」

と洞窟に戻ると

「あれ、シアは？」

私はそう言うとハジメは合う場所の壁に指さし

「シアは其処の回転扉に飲み込まれた」

「シアちゃん！」

チロルちゃんが何の迷いもなく回転扉に突っ込んだ。

「行こうか」

「そうだな」

私が先頭に立ち

「シアちゃん、チロルちゃん、大丈夫？」

回転扉を開けた瞬間、無数の風切り音が響いた。

私は腰に装備している「音銃剣錫音」を抜いて飛んで来たものを斬った。

飛んで来たものは矢であった

「ハジメ君」

「ああ、トラップだ。」

其れもご丁寧に全部が黒で統一されて作られた矢だ。

光を反射しないから奇襲、不意打ちにはもってこいだな」

「そうだね」

「ハジメ…ヨクアイ…」

「ん？」

「何かな？」

「シアは？」

ユエがそう言うと

「会長ここに居ました」

と牙十郎の声を聞いて後ろを振り向くと

回転扉に矢で縫い付けられた姿のシアとその矢を抜いているチロルが居た。

そして足元に盛大に濡れていた。

「そう言えば花を摘みに行っている途中だったね」

「ば〜い」

と私達はシアのフォローして

「きゃー」

ここから気合入れて行きますよお〜！」

「おおー！」

「ワン!!」

シアがそう言うのと何ともタイミングよく光が照らせて石板が現れた。

「見て下さいい石板が現れました」

とシアは近づいて

「なにになに？」

『ビビった？ねえ、ビビっちゃった？』

ニヤニヤ

こんな簡単なトラップに引っかけちゃった奴は相当マヌケだね

！ ぶふっ』

シアはそれを読んで一呼吸後して

「ふんぬー……ー……ーっ!!!」

シアがドリユツケンで石板を叩き壊した。

そしてドリユツケンを退かすと

下にも文字が有って

『ぎんね〜ん♪ この石板は一定時間経つと自動修復するよお〜プー
クスクス!!』

「!!ムキィー!!」

堪忍袋が切れたシアはドリユツケンを持ち上げて

「うぜえ〜ですう！」

「このっ？このお!!」

「し、シアちゃん落ち着いて」

餅つきウサギの如く振り下ろした。

其れも連続で

部屋全体が小規模な地震が発生したかのように揺れ、途轍もない衝撃音が何度も響き渡る。

発狂するシアを尻目にハジメはポツリと呟いた。

「この大迷宮も一筋縄でいかなそうだな」
「ん？」

「と言う事で皆さん忍耐には気を付けましょ」

「「「了解」」です」

取り敢えず私達は進んで

「ハア！」

アテナとチロルは回転ノコギリの刃を壊した

「——完全な物理トラップか」

魔力で感知できないのは厄介だな」

「し…死ぬかと思いました？」

「大丈夫、シアちゃん」

「大丈夫です。」

！
其れよりもあれぐらいハジメさん達の攻撃で壊してくださいよお

実際チロルちゃんとアテナさん破壊できていますよ」

「ああ…その事なんだが

——ユエどうだ？」

「ん…困った。」

まともに魔法が使えない

？使えても中級以下の魔法が数秒程度

ユエが試しに魔法を使おうとするが、すぐに魔力が四散する。

「ライセン大峽谷より遥かに強い魔法の分解作用が働いてる。

外部に魔力を放出するとすぐに分解される。

逆に言えば、体の内部の魔力には分解作用は働かない」

「つまり如何いう事か分るか？」

「え、えつと…？」

「つまり、この迷宮で一番上手く立ち回れるのは身体強化を主に扱う
お前ら二人つてことになる」

ハジメは歩きながらシアとチロルに声をかけた。

「でも…本当に私達の力で…」

シアとチロルも迷うが、香織とユエが肩を掴む。

「大丈夫。いざという時は私達がフォローするから」

「ん…もつと自信持つべき。私達が育てたんだから…」

「私も期待しているから」

師とも言える存在からの励ましに顔を上げた二人。

その瞳には決意の色が浮かんだ…

が…

「こんのアホウサギ！気をつけろと言ったそばからドジ踏みやがってええー！」

「ごめんなさ〜い!!」

滑り落ちながらハジメが怒鳴る。

階段を降りていた時、シアが何かトラップを踏んだようで、階段の段差が無くなり、急なスロープとなった事で私達は猛烈な勢いで階下に向かって猛スピードで滑り落ちている。

因みに私、黒花、アテナ、雷槍は咄嗟にジャンプして上手く着地して立ちながら滑って居る。

「シアあードリユツケンを床に叩き込め！」

「は…はいっ！」

ハア！、ハジメさん道が…！

この距離じゃ、間に合いません!!」

「黒花」

「はい、姉ちゃん」

と黒花は「ギアトリンガー」と「ルパンレンジャーギア」を取り出してセツトする。

そしてハンドルを回して

『42バーン！』

『ババン！ババン！ババン！ババン！』

『バババーン！ルパンレンジャー！』

とルパンレンジャーの幻影が現れて其れが光の球になり黒花、アテナ、雷槍の身体に入る。

「黒花、俺達は？」

「各自自分の奴で」

黒花の代わりに私が答えながら「アンドロメダキュータマ」を取り出して

『アンドロメダキュータマ』

「セイザブラスター」にセツトする

「そうかよ。」

シア！こつち向け！

しっかりと捕まってるよ」

牙十郎と優香の方は

「牙十郎」

「ああ分かって居る、優花」

と牙十郎と優香は滑りながら互いの手を握って居る

私達はその空間に放り出されると、床一面に鋭利な突起が無数に敷き詰められた光景が映った。

私は直ぐに

『セイ・ザ・アタック』

と私は鎖を生成、黒花、アテナ、雷槍はルパンレンジャーのフックショット、ユエ、香織、シアはハジメに抱きついてハジメは右手の義手に内蔵しているフックショット、チロルは

「ベロー！」

「ワン」

とベロを天井に向かわせて、牙十郎は優花に抱きついて優花は紐付きの短刀を天井に

「はあー！」

投げる。

それらが天井に刺さり向こう岸の横穴に入る。

「みんな生きてる？」

「はい生きています」

「あああたしもだ」

「はい、僕も」

「俺と優香も生きています」

「ほんと死ぬかと持った」

「私입니다」

「い？生きてる…助かった」

「さ…流石にちよつと焦ったぜ…

少し休憩するか」

「……………ん、あそこ」

ユエがある方向を指差した。

そこにはまた石板があり

『焦ってやんの、ダツサ〜い！』

このくらいで疲れるようじゃ、先が思いやられるね、ププー！』

ハジメは義手がミシミシ言うほど拳を強く握りながら。

「落ち着けユエ気にしたら負けだ」

「ん…奴の思うツボ…」

「シア、チロルもこんな気にするなよいいカモだぞ」

「づ——うう…はいです…」

「リョウカイ」

とチロルの言葉がカタコトになっている事に気が付いた私はチロルの方を見ると

目が赤くなって歯茎を慣らして髪の毛がゆらゆらと逆立って居た。

「チロルちゃん」

「ナンデスガ」

「此処で少しだけ休憩を取ろうか」

「そうだな。」

恐らく先はまだまだ長いぞ」

と私達は休憩して歩くとやたら長い通路に出た

「かなり広いね…」

こんな如何にもな所にトラップが無い訳が……………」

とシアが言った所で、足元で

「ガコン」

という音がなり。

「…フラグウサギめ…」

ユエが恨みがましい眼を向ける。

「わ、わざとじゃないですよお〜〜！」

シアが弁明するが、何処からともなくゴロゴロと言う音が。

「さてハジメ君

このパターンは？」

「この状況のパタンなら、通路ギリギリの大岩を転がしてくるだろうな」

とハジメの言う通りに通路ギリギリの大岩が転がって来た

「巨大な岩石です！」

「ハジメ？ 此処はひとまず逃げよう」

とユエ、シア、チロル、香織、牙十郎、優花は逃げる為に後ろを向くが

「ハジメ君!？」

「会長!？」

「ハジメ君出来る?」

「出来るぞ」

其れにいつもいつも…やられっぱなしじゃなあ?」

ハジメは左腕の義手の拳を握りしめ義手に搭載されている剛腕を発動して

「性に合わないんだよ!!」

岩石に殴り振動破碎を

「オオオオオオオオラアアアアアアアアアツ!!!」

発動する

気合いの入った声と共に拳を振り抜くと、岩石が粉々に砕け散った。

すると、クルッと回ってハジメはニツと笑って、

「どうだ? 少しはスツキリし——」

ハジメが言いかけてる時に再び

「ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ」

という聞き覚えのある音が聞こえて来た。

ユエとシアに浮かべていた笑顔のまま固まるハジメ。同じく笑顔で固まるシアと無表情ながら頬が引き攣っているユエ。

ギギギと油を差し忘れた機械のようにぎこちなく背後を振り向いた彼等の目に映ったのは……

金属で出来た巨大な鉄球が上から落ちてきたのだ。
が私は焦らず

「アテナ、黒花、宜しく」

「おう、任せておけ」

「はい、分かりました」

とアテナと黒花は前に出て、黒花は「ギアトリンガー」と「キョウリユウジャーギア」を取り出してセットする。

そしてハンドルを回して

『37バーン!』

『ババン!ババン!ババン!ババン!ババン!』

『ババババン!キョウリユウジャー!』

とキョウリユウジャーの幻影が現れて其れが光の球になりアテナに入って手には「ケントロスパイカー」持って居ている

黒花は直ぐに「ギアトリンガー」にセットさせている「キョウリユウジャーギア」を抜いて「ガオレンジャーギア」をセットする。

『25バーン!』

『ババン!ババン!ババン!ババン!ババン!』

『ババババン!ガオレンジャー!』

ガオレンジャーの幻影が現れて其れが光の球になり今度は黒花に入って手には「破邪百獣剣」持って居ている。

アテナと黒花は金属で出来た巨大な鉄球の方に向かって行き

「ハアアアア!!」

と「ケントロスパイカー」と「破邪百獣剣」で金属で出来た巨大な鉄球を壊すが直ぐに

「ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ」

と新しい音が鳴って来て

「あのヨクアイさん岩が来ても破壊してくれますよね?」

「いや」

と「ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ」

の他にも

「シュー!!」

と何か解ける音も聞こえて来て

「出来そう?」

「無理だな」

「無理です」

と即答で返されてそして私達の目に入ったのは明らかに溶解液をまき散らす黒光りする金属製の大玉だった。

「あー！」

クソ！

しっかりとバージョンアップさせてやがる！」

「其れよりも逃げるよ」

結局私達は全力で逃げることとなった。

その後、必死に逃げてなんとかやり過ごせたハジメ達は次の部屋に避難し、大岩の攻撃から逃げることに成功。

「くそ…ミレディ・ライセン覚えとけよ…！」

私、黒花、アテナ、雷槍以外、ゼエゼエと息を吐いていた。

「？出口が仕舞ったみたい…！」

「ほっとけ…もう二度と行きたくねえ

さあってお次はどんなトラップが…」

とハジメが言い切る前に石板が現れた。

「…ってあれ??」

何かこの部屋見覚え無いか？」

「ある。特にあの石板と水たまり」

とユエの言う通り私も見覚えある部屋で

「ここ、入り口だよね？」

「そうだな？」

すると、石板に文字が浮かぶ。

『ねえねえ、今どんな気持ち？』

お察しのとおり、ここはスタート地点です！苦勞して進んだらぶりだしに戻ったけど、今どんな気持ち？

ちなみに来た道を戻ろうとしても無駄だよ！この迷宮は一定時間ごとに変化してるから、マッピングも無意味です！

ねえねえ今どん』

最後まで見る前にシアが文字を、グリグリと踏みつける。

「は、ははは」

「フフフフ」

「フヒ、フヒヒヒ」

ハジメ、ユエ、シア、香織、牙十郎、優花、チロルの七者三様の壊れた笑い声が辺りに響いてその後、

「「「「「」」」」」」

迷宮全体に届けと言わんばかりの言葉にならない絶叫が響き渡ったのは言うまでもない。

因みに私と黒花は母さんと尚文おじさんの合同作成ダンジョンで、アテナと雷槍は黒の魔王の世界のターゲットの嫌がらせ行為で精神鍛えている為に耐えきった。

ライセン大迷宮の目的地

とある部屋の中、壁から放たれる青白い仄かな光が壁にもたれ掛かりながら寄り添うハジメ、ユエ、シアの三人の影を映す。

ハジメを中心にハジメの上にはユエ、右側に香織、左側にシアが座り込んで肩にもたれ掛かっている。

その近くで優花が作った料理を皆で囲んでゆっくりと食事をとっている。

「今日で一週間か」

「そうだね」

私達がライセン大迷宮に潜ってから1週間が経った。

食料は潤沢にあるし、全員が全員身体スペック的に早々死にはしないのが不幸中の幸いだ。

今のように休息を取りながら少しずつ探索を進めている。

その結果、この迷宮は内部構造が変化するが、変化にも一定の法則があることを突き止めたハジメはその法則だけでなく、ある程度の基本構造を記憶しながら少しづつではあるが迷宮を進んでいた。

その間、謎の液体やらトリモチやら金ダライなどの嫌がらせに強制スタート地点飛ばしなどの数々のトラップとウザイ文にハジメ達（私、黒花、アテナ、雷槍を除く）は体よりも精神が削られていた。

スタート地点に戻されること7回、致死性のトラップに襲われること48回、全く意味のない嫌がらせが169回。

最初こそ、心の内をミレディへの怒りで満たしてしたハジメ達（私、黒花、アテナ、雷槍を除く）だったが、3日目辺りにはもう試練とかどうでもいいからと理由でトウサイジユウオウで叩き壊してやろうとハジメ動いて私、黒花、アテナ、雷槍抑え込んで、4日目を過ぎた辺りから“どうでもいいやあ”みたいな投げやりな心境になっている。

“どうやら構造変化には一定のパターンがあることがわかった。” “マーキング”を利用して、どのブロックがどの位置に移動したのかを確かめていったのだ。

もうそろそろ進展があるかもしれない。

と私はそう思いながら優花が作った料理を食べる。

食欲を刺激する優花の料理の香りに食欲を刺激されながらハジメは両隣で眠る少女達に視線を向けた。

「気持ちよさそうに寝やがって……ここは大迷宮だぞ？」

「ってか、オレの分も残しておいてくれよ。」

「さつきから腹減って仕方ないんだぞ！」

「分かって居るよ♪」

と更にもう一つ食べる。

「一応ハジメ君達の分は分けているからだし丈夫だよ」

「そうか」

ハジメの苦笑い混じりの返答が響く。

見張り役なのでずっと起きていたのだが、ハジメは何となしに抱きしめられている腕をそつと解いて、ユエの髪を撫でる。

僅かに頬が綻んだように見えた。

ハジメの目元も僅かに緩む。

「むにゃ……あう……ハジメしゃん、大胆ですう、お外でなんてえ、……皆見てますよお」

「……」

シアの寝言に反応したハジメはシアの鼻を摘まんで

「？んっ？んう?! んんっー!？」

シアが息苦しくなり出して

「ぶはっ！ はあ、はあ、な、何するんですか！ハジメさん」

「ぜはぜはと荒い呼吸をしながら抗議するシア。」

「どうせロクでもない夢見ていたんだろ？」

「せつかくハジメさんがデレてくれた夢を見ていたのに」

「アホなこと言っていないで飯でも食っておけ」

「見張は頼んだ」

「任せてね」

と私達とハジメ達は交代した。

そして食事を終えて探索を再開する。

再び嫌らしい数々のトラップとウザイ文を修羅に染まりそうになりながらも、菩薩の心境でクリアしていくと

「……ここは?！」

「ああ。いかにも……だな」

香織の言葉にハジメが返す。

無数の甲冑が並べられた部屋の奥にはオルクスの最下層にあった…ヒュドラの間と同じ扉が見えたのだ。

全員が部屋に足を踏み入れると、壁際にある甲冑が全て動き出してゆつくりと歩いてくる。

「良かったな」

「どうやら当たりのようだな」

「全然良くないですよお」

シアは不気味な甲冑に怯えるが、

「シアとチロル一っだけ言っておく」

「は?…はい!」

「お前は強い。」

あんなゴーレム如きに負けはしない」

「そう、シアちゃん、チロルちゃんも十分強いから」

「うん。もしも大変だったら、いつだって私達が助けるから」

「ん…シア達なら大丈夫」

「はい、僕も強いと判断します」

「ああ、そうだな」

「会長の特訓にもついて来たし」

「私と牙十郎のタッグバトルも五分五分に持ってこれたから」

「だから行くぞ!」

私達の励ましに二人は力強く頷く。

「はい…シアちゃん!…いくよ!」

「ですう!このシア・ハウリア…全力で暴れますよ!!」

「魔力の分解作用が強い前衛は任せたぞ」

「はい」

「はい、行くよベロ、ベル」

「ワン！」

「バウ！」

とシアとチロルが突撃して

「でええええやああああ!!」

「ガルルル!!」

シアはドリユツケン振り下ろして甲冑を押しつぶして、チロルは足技で甲冑を蹴り飛ばして後ろの甲冑にぶつける。

今度はシア達の後ろに回った甲冑をドリユツケンに内蔵されている推進剤を使って一回転しながら後ろの甲冑を横なぎに飛ばす。

その間にもハジメは「ドンナー」と「シユラーク」、香織はヴァイス、私は「音銃剣錫音」黒花はWeier ZaubererとSchwarze Hexe

アテナは武装色で強化した槍、雷槍は「日輪刀」、優花は「風双剣翠風」牙十郎はハジメ作の刀で応戦する。

そしてユエの武装は？

油断したシアを甲冑が後ろから襲って来たが

「シアちゃん!!」

チロルが飛び蹴りで蹴り飛ばしたがハンマーを持って居た甲冑が攻撃して来て

「ぐううう」

咄嗟に防御したがチロルは吹っ飛ばされた

「チロルちゃん」

シアはチロルの下に行こうとしたが甲冑達は其れを見逃さずに五体同時に襲って来た。

「し、しまttt」

シアが自分の失敗に気が付いた時には遅く五体の甲冑は同時に剣を振り下ろそうとしたが

「戦闘中は余計なこと考えないように教えた筈

油断大敵」

筒状の物を持って居るユエが助けた

「其れにチロルは此れぐらいでやられない」

「痛かった」

「ワン！」

「バウ！」

と瓦礫からチロルが出て来た。

「そ、そうでした」

「次は気を付ける事」

「あ、はい」

其れでさっきのはユエさんが…？

魔法は直ぐに分解される筈では…」

「…此れのお陰」

と筒状の物を見せた。

「中には水が有るから其れに破断を発動すれば水が圧縮されて放出される。

飛び出た水自体は二は魔力が含まれていないから分解されない。

ハジメがシアとチロルに武器を作って置いて私の事を考え無いと思った？」

「確かにそうですね…」

と私達が有る程度倒すと

「おい、皆面白い事が分かったぞ」

「ん…」

「どうかしたの？」

「最初に差が倒した奴の残骸が無い」

と私達はシアが最初に倒した甲冑の場所を見る。

確かにシアがドリユッケンを振り下ろした跡があつたが甲冑の残骸がない

「ハジメ先輩此れって」

「おいおい待ってよ。

まさか…」

「ああ、そのまさかだ

再生している」

アテナと雷槍は甲冑を吹っ飛ばす

「ハジメ君

確かゴーレムは核をあそこまで潰したら…」

香織はヴァイスをで甲冑にヘッドショットを決める

「…それが此奴らに核を持って居ない」

「其れってまさか」

「操られている!?!」

と優香と牙十郎は甲冑を切り捨てる。

「ああ、その通りだ。

ゴーレムの核は自立行動の可能にするもので直接操る場合は必要ない」

「つまり再生も操って居る人が直接行っているとはジメは考えているんですね」

黒花は回転しながら *W e i · e r Z a u b e r e r t S c h w a r z e H e x e* を撃つ

「そうだ

このままだとキリがない

強行突破するぞ」

「でも扉は締まっていますよ」

シアがドリユッケンで纏めて甲冑を吹っ飛ばして

「壊しますか?」

チロルも手を大きくして纏めて甲冑を吹っ飛ばす。

「その必要はない

丁度新し武器の性能を試したかった所だ。

全員、耳をふさげ!」

そう言うとはジメは宝物庫から12連回転弾倉付きロケット&ミサイルランチャー、オルカンを出し、左腕に装着した。

「ええ〜何ですかそれ!?!」

初めて見る武器にシアが目を見張る中、全員がハジメの言う通りに耳を塞ぐ。

シアと同じように武器の異様さに見ていたチロルだったが、他の皆と同じように耳に指を突っ込み、ベロとベルはチロルの髪の毛に隠れ

た。

「全部まとめて吹き飛びやがれ！」

物騒な言葉と共にハジメが引き金を引くと、装填されていたロケット弾が勢いよく発射。

撃ち出されたロケット弾は寸分の狂いもなく隊列を組んで待ち構えていたゴーレム騎士達と扉に直撃。

その直後、轟音と共に大爆発を起こし、待ち構えていたゴーレム騎士とその後ろにあった扉を纏めて吹き飛ばした。

「凄い威力」

「耳があ~~~~！私の耳があ~~~~！！」

1発で上級魔法と同等の威力を出せる武器の威力にユエは驚き、うさ耳を折り畳まず真っ直ぐに伸ばしたままだったシアはもろにダメージを受けて、耳を押さえていた。

「だから、耳を塞げって言っただろうが」

「ええ？何ですか？聞こえないですよ」

「？ホント、残念ウサギ」

「聞いてなかったら私もシアちゃんみたいになってたんだね」

「バウ」

「!!よし！」

魔法が使えないのをいいことに破壊対策が薄い

だが再生する可能性がある

急げ!!」

シア、ユエ、チロルが扉に行き残った私達は後ろから来るゴーレムを片付ける。

「ハジメさん

扉の向こうに足場が見えます」

皆！ 跳ぶぞ！」

ハジメが叫ぶ。

私達は急いで扉の方に行く

その先が途切れており、5mぐらい先ある足場が見えた。

私達は簡単に足場に飛び私達は足場に着地する。

「何とか突破で来たな」

「無茶苦茶ですよ。」

「ハジメさん」

「——にしても何だ此処は」

「足場が？浮いてる？」

シアの言う通りこの空間内には複数の足場があるがそのどれもが空中に浮いていたのだ。

「不思議な空間？」

「無重力では無いのは確かに」

「なんだか常識を疑いたくなるような——」

シアが言い切る前に何か察知して

「アテナさん、雷槍さん、チロルちゃん、上です」

「シアちゃん、分かっているよ」

「だな」

アテナとチロルは其々構えて

「処理します」

と雷槍は上に飛んで

「上？」

と遅れてハジメ達が上を見ると

「なあ!？」

大きなブロック降って来ていた。

雷槍は「日輪刀」を居合切りで構えて

「雷の呼吸漆ノ型 火雷神」

自分の何十倍の大きさのブロックを真つ二つにした。

が真つ二つにされたブロックは其のまま落ちて来ているが

「はあああああ!？」

「ガルルルル!？」

アテナとチロルが砕いて小さな破片に変えた。

「シア？何で分かったんだ？」

「未来視です。」

突然何かが降って来て其れをアテナさん、雷槍さん、チロルちゃん

が立ち向かう未来が見えました。

と言つても皆さん見聞色で分かつて居ましたよね」

「ああ、そうだな」

「はい」

「私も何か来ると分かつて居たから」

と会話して居ると下からそこには今までのゴーレムとは比較にならない大ききで上半身だけで浮いており、下半身はない巨大なゴーレムが現れた

「マジかよ……」

ハジメが思わずそんな声を漏らす。

「いかにも親玉って感じですね……」

シアの言葉が切つ掛けになつた様に、その巨大ゴーレムの目が怪しく光る。

それが瞳の様に俺達の姿を捉え、私達は警戒する。
すると、

「やほ、はじめまして、みんな大好きミレディ・ライセンちゃんだよお」

そんな空気をぶち壊すお気楽な挨拶がその巨大ゴーレムから聞こえた。

「「「「「「「………は？」」」」」」」」

私達は思わず固まる。

ライセン大迷宮のボス戦 前編

「やほ、はじめまして、みんな大好きミレディ・ライセンちゃんだよ〜」

そのゴツイ外見とはイメージが結びつかないキャピキャピした少女の声が聞こえて私達は思わず膠着して

「あのねえ、挨拶したんだから何か返そうよ。最低限の礼儀だよ？
全く、これだから最近の若者は……もて「待って!!」何よ私が言っているのに遮るなんて礼儀がなってないよ」

「そいつは、悪かったな。だが、ミレディ・ライセンは人間で既に死んでいるはずだが？」

オスカー・オルクスの迷宮を攻略した時に読んだ手記にちゃんと人間の女として書かれていたぞ？」

「其れに、アーティフィシャルインテリジェンス搭載の
ゴーレムなんて私達は聞いた事無いですが？」

「だから、目論見通り驚いてやったんだから許せ。」

そして、お前が何者か説明しろ。
簡潔にな」

「おお！オーちゃんの迷宮の攻略者なんだね！どう？私について何か書いてた？」

謎のゴーレムが私達の質問を質問で返してきたが

「一言で言えばウザイ女と書かれて居ました」

黒花が代表で答えた。

「成程成程、確かに昔の私はオーちゃんウザがられて居たからね。」

「どうやら本物の様だね」

「チツ、俺らの質問無視してんじやないぞ」

「あくはいはい分かって居ますよ。」

そのあくてい何とかは知らないけど間違いなく私はミレディ・ライセンだよ。

「この姿の秘密は神代魔法で解決！詳しく知りたければ私を倒してみよ！……って感じかな？」

「おい！ それじゃ質問に「質問には答えた」

「ハジメ君、チェインクロニクルに出て来るトリスメギストスと同じと考えれば良いんじゃない？」

「そんなもんか？」

「今度は、こつちが質問する番。君達の目的は何？ 何のために神代魔法を求めぬ？」

嘘偽りは許さないと言わんばかりの、先程までおちやらけた雰囲気
を微塵も感じさせない声が聞こえた

「…俺達は無理やりこの世界に連れてこられた。

解放者^{お前等}は人を弄ぶ狂った神を倒して欲しくてこの迷宮を作ったんだろうが、俺にはそんな事関係ない。

俺の一番の目的は故郷へ帰る事。

邪魔する奴は誰であろうと殺す！」

「そっか。なるほどねえ、別の世界から？うん、それは大変」

そしてハジメは私に指を指して

「神殺しなら翼愛達が筆頭にやる」

「はい、貴方達の証言と私達が見た物をすり合わせた結果、私達の世界に間違いなくエヒトは接触して来ると考えています。

ですので神殺しをします」

「そんな事を言ってくれる人が来てくれて私は嬉しいよ」

「さあ、お前の質問には答えた。

結局、お前の神代魔法は何なんだよ？」

「んふふそれはね…教えて…あげない」

「なら死ぬ」

勿体ぶって最後には秘密にしたミレディに今までの出来事も有り
ハジメは遂に我慢できなくなった。

いきなりミレディゴーレムに向けてドンナーをぶつ放すが、あまり
ダメージを受けていない。

「ふふ、先制攻撃とはやってくれるねえ。だけど、この程度じゃ私は
倒せないよお。」

言つとくけど私は強いよ。

死なないように頑張つてね」

「悪いが俺達にはさっきのゴーレムと大差ない様に見えるがな」

「ほんつとに生意気な奴だなあく。いいよ、教えてあげる」

ミレデイがそう言うのとミレデイゴーレムの背後に、先程私達と戦っていた騎士型ゴーレムが浮遊していた。

「これが私の神代魔法。」

空飛ぶゴーレムは見た事ある？」

「確かに見た事無いです」

私はそう言う

「そうでしょ。」

これが君達に一斉に襲い掛かるわけ！

どう？

ビビった？

今謝ったら——」

ミレデイが得意げに語る中

ユエとチロルが動いて、その瞬間、ゴーレム達が細切れになる。

「…アレ？」

「浮いているだけなら只的的。」

あと、いちいちうるさい…」

「そうですね。」

簡単に倒しましたし」

「ワン」

ユエとチロルがそう言う。

ミレデイは未だに余裕を出しているが、

「おく怖い怖い。話している最中に容赦ないな」

ハジメは神結晶を加工したモノクルを付けてミレデイゴーレムを見る。

すると、

「何だ。」

お前には核があるじゃないか。

皆、心臓の位置を狙うぞ！」

ハジメが核の位置を看破し、それを皆に伝える。

「な、何なの君達!」

「ここつて魔法が使えない筈なんですけど!」

見破られた事が予想外だったのか、焦った声を漏らす。

「魔法を防いでも私達は止まらないから」

「そう言う事だ」

私達はジャンプして散開しミレディゴーレムと対峙する。

すると、シアが飛び込んで戦槌を振るうが、メイスの鉄球部分で防がれる。

シアはそのまま力尽くで押し切ろうとしたが、背後に先程細切れにされた複数のゴーレムが再生されてシアに襲い掛かろうとしていた。

「あれれ?」

忘れてたの?

ゴーレムはいくらでも再生できるんだよ?」

ゴーレムがシアに目掛けて剣を振り下ろそうとした瞬間、ゴーレムは切り裂かれ、撃ち抜かれる。

「そんな事知ってる」

「忘れてると思ったのかな?」

ユエと白崎さんがそれぞれ武器を構えながらそう言った。

「流石カオリさんとユエさんです!」

チロルちゃん、思いつきり行きますよおく!!」

「うん!!」

シアとチロルはミレディゴーレムに向かい。

先にシアがドリユッケンを振り下ろした

「中々いいコンビネーションだね。

だけど、ゴーレムがパワーで負けるはずないよお!」

ミレディゴーレムは右ストレートを繰り出した

シアのドリユッケンとゴーレムの右の拳がぶつかり合う。

「ぐぬぬぬ……………」

「中々いいパワーを持つてるね。だけど、ちよーつと力不足かな?」

そのままシアが押し切られようとした時、

「シアちゃん!!」

チロルが髪の毛操作で足に纏わせて蹴りの威力を上げてドリユツケンに蹴りを入れる。

「成程足りない威力を別の人に補う中々?」

とミレデイゴーレムが解説している間に横から飛来した「風双剣翠風」がゴーレムの右肘の関節部分を切り開いた。

「あり?」

ミレデイゴーレムが横を見ると

「私を忘れてた?」

戻って来た「風双剣翠風」を優花は手に取り得意げに笑って見せる。

その時、

「どおりやあああああああつ!!」

シアとチロルが気合を入れた声を上げる。

切り落とさせた右腕はミレデイゴーレムにぶつけて粉碎する。

「やるじゃん」

右腕を砕かれても余裕の声を漏らすミレデイ。

しかし、

「だろ?」

ミレデイの言葉に同意するような声がミレデイゴーレムの胸部から聞こえた。

対物ライフル「シユラーゲン」を至近距離から核がある部分に向けたハジメだ。

「——ッ いつの間ツ……」

ミレデイが驚愕の声を言い終わる前に引き金が引かれ、弾丸が直撃する。

煙が出てその中からハジメが反動で後ろに飛び退き、他のメンバーもハジメの元を集まる。

「…いけた?」

「手応えはあったけどな…」

「これで終わってくれないですかね…」

「シアちゃん、それフラグ」

それぞれがそう言うが、これで終わるほど甘くないだろう。

煙が晴れると

「いや〜、ちよつとヒヤツとしたよ〜。でも、まだ足りないね」

少しボロボロになったミレディゴーレムが居た。

胸の着弾地点が露になりゴーレムの装甲の下に、もう1枚黒い装甲が見えた。

「アザンチウム鉱石？この装甲を破らない限り私は倒せないよ

「ハジメ君、あれって…」

「？この世界で最も硬い鉱石だ。

俺達の装備にもいくつか使っている。

「流石オー君の迷宮攻略者。知つてて当然だよね〜。

それじゃあ、第2ラウンドいつてみよっか！」

ミレディがそう言った瞬間、ハジメ達の上に浮いていた足場が突如として落下した。

私達は破壊する。

その瞬間、ハジメの横にあった足場が横滑りした？というより横に落下したような動きを見せた。

私達は咄嗟に其れも破壊する

「へえ躲すんじゃないなくて壊すなんてなかなかやるね」

「どうも」

アテナが答える

「皆！ こいつの神代魔法は恐らく『重力』だ！

浮いているゴーレムも、動く足場もそれで全て説明が付く！」

ハジメがミレディの神代魔法に気付いたのかそう叫ぶ。

「おや、思ったより早く気が付いたね。

その通り！ 重力を操れば例えば……」

ミレディゴーレムが何時の間にトゲ付き鉄球のメイスを取り出してハジメ達に向けると、

「こんな事も出来るんだよ！」

その瞬間、鉄球が私達に向かって放たれた。

メイスに見えたそれは、内部に鎖が繋がっている、所謂モーニングスターだったようだ。

正確には私達に向かって鉄球が『落下』しているのだろうが、今はそんな事は如何でもいい。

「ここはあたしと」

「俺が何とかする！ 皆で奴の動きを封じてくれ！」

ハジメとアテナがそう言うと、左腕の義手と槍を振りかぶって鉄球に殴りかかった。

鉄球に大きく罅が入るほどの衝撃で鉄球を止める。

「？マジ？」

「これを正面から受け止めるとか…」

「似たようなトラップがあったからな」

「其れも二回止めたし」

「そして、これがお前の命取りになる！ 行け！ 皆！！」

ハジメの言葉で全員がミレディゴーレムに向かって行く。

「く、来るな！」

ミレディゴーレムは再生された右腕で薙ぎ払おうとしたが、

「シア！チロル！」

「はい！」です！」

もう一度、右腕をシアとチロルが止める。

「ふぎぎぎ…」

シアとチロルが何とか耐えている所に、

「上出来！」

「頑張れ！ シア！」

「私達には」

「この時間で十分」

「先輩方！！」

「ああ行くぞ皆」

優花、白崎、私、黒花、雷槍、牙十郎が両肩部分目掛けて其々の武器で攻撃して罅を入れる。

更に、ユエが飛び出し、

「……」

ユエの武器で罅の入った両肩を切断した。

「くっ、このおっ……………」

ミレデイが何とか逃れようとした時、

「まだですー！」

「そうだね」

右腕を抑えていたシアとチロルが、両腕を切断された事で自由になり、ドリユツケンと蹴りで思い切り振りかぶる。

そのまま思いつき振り切ってミレデイゴーレムを吹き飛ばした。足場の一つに叩きつけられるミレデイゴーレム。

「や、やるじゃないか……………でも、こんな事しても無駄だよ。

私もゴーレムだって事忘れてないよね？」

核が破壊されない限り素材があれば何度だって再生できるんだよ」

そう言いながら再生を始めようとしていた。

だが、

「——そうはさせない」

ユエがミレデイゴーレムの近くに降り立つと指に「ブリザードウィザードリング」を指に嵌めて

「——凍って」

待機状態の「ワイズドライバー」に翳して

『ブリザード ナウ』

「凍枢」

その瞬間、ミレデイゴーレムの足場に接している部分から凍り付いていき、体の大半を氷漬けにする。

「嘘!? どうしてここで上級魔法が使えるのさ!？」

ミレデイが驚愕の声を上げる。

「水を使った攻撃をしていたお陰。

これなら水を凍らせるだけで使える。

其れに此れを使えば少しだけ魔法が残る。」

「よくやったぞ、ユエ」

「…ん、頑張った」

ユエはハジメに褒めてもらって嬉しそうな声を漏らす。

「終わりだミレディ。」

「この状態じゃ再生も身動きも出来ないだろ？」

諦めて神代魔法を渡すか、それともこのまま止めを刺されるか――

――

「ピキピキ?」

私は小さいが天井に音がして上を見た。

「…おい何黙ってやがる」

「……」
「ビギユウウン」

「――つまさかコイツ…!!」

ハジメがそう言った瞬間、シアがバツと上を見上げた。

「ハジメさん!! 『未来』が見えました! 天井が降ってきます!!」

「天井は重力で支えていたみたい」

その言葉に上を向けば、

「まさかこれは?!」

ハジメが目を見開く。

天井に正方形の亀裂が無数に入る。

「…ふふふ、とっておきのお返しだよ。」

今からこの部屋の天井全てを、君達の頭上に“落とす?”

天井が正方形のブロックに分かれて落下を始めた。

ライセン大迷宮のボス戦 後編十攻略完了

私達の下に天井が正方形のブロックに分かれて落下を始めた。
この部屋の天井は重力魔法によって支えられていた物の様だ。

「さあ、見事これを凌いで見せてよ」

ミレデイが楽しそうにそう言った。

「香織、ユエー！ 俺の所まで来い！」

「ハジメ君！」

「ん……………」

「シアは私達が！」

「お願いします、ユウカさん、キバジユウロウさん！」

香織とユエはハジメに抱きつき。

シアは優花と牙十郎に抱きつき

「黒花、ニンニンジャーで」

「了解です」

言いながら「ギアトリンガー」に「ニンニンジャーギア」を取り出してセットする。

そしてハンドルを回して

『39バーン！』

『ババン！ババン！ババン！ババン！』

『font:94』ババババーン！ニンニンジャー！』

とニンニンジャーの幻影が現れて光の球に変形して私達の身体に入ると

「よっしゃー！燃えて来た!!」

アテナがアカニンジャー事、伊賀崎天晴の決め台詞を言う。

「しっかりと捕まってるよ。」

「此処が正念場」

ハジメそう言うのと私達はバラバラに散る。

私達はニンニンジャーの能力のお陰で落下してくるブロックを避けられるが落ちて来るブロックが多いので各自其々破壊しながら潜り抜けていくが破壊したブロックの破片が重力無視してこっちに

来た。

多分操作しているのミレデイと簡単に予測が着く。落ちて来るブロックと向かって来る破片で徐々に余裕が無くなっていく為破壊に専念する。

が終わる事のないブロックの嵐に私達も呑み込まれていき、ブロックに埋もれた。

やがてブロックが落ち切ると、

「ふう〜っ終わったかな?」

ミレデイゴーレムが氷の束縛を振りほどき、起き上がりそのまま各部を再生させ、

「ミレデイちゃん、ふっかーっ!!」

そのままブロックの山に目を向け、

「うーん、流石にちよつとやり過ぎちやったかなあ

でも、この位何とかできないとね。

狂った神に勝つ為には——」

ミレデイが言い切る前に私達はハジメのパイルバンカーでブロックの山を出る。

「!!なんだ…生きてたの?今度は其の玩具で挑むのもり?」

「いや…」

そう言つてパイルバンカーを宝物庫に仕舞つて「ジュウオウザライト」を取り出して

「こつちが本命だ!」

『ザ・ワールド!』

「本能覚醒!」

『ウォー!ウォー!ライノース!』

ハジメはジュウオウザ・ワールドに変身して

「世界の王者!ジュウオウザ・ワールド!」

更に

「野生……大解放!」

ハジメが叫んだ直後、ハジメの両肩からサイの角が生え、左手に狼の鉤爪、右手にはワニの尻尾が生えた。

「姿が変わったぐらいで、何度来ても無駄だよお」

ミレディゴーレムの炎を纏った右ストレートが飛んでくるが

ハジメは右手のワニの尻尾をドリルの様に真っ直ぐ伸ばして向かってぶつかっただがハジメはミレディゴーレムの右腕を

「なア!？」

粉碎して、更に宝物庫から再度パイルバンカーを取り出して

「死ねッ」

ミレディゴーレムの心臓部分にパイルバンカーを突きさして杭を打ち込む。

「ぐぬぬううう」

ミレディは悪足掻きのつもりか

左手を握って拳を作ってハジメに拳を振り下ろしたが

「させないよ。」

皆行くよ」

「「「了解」」」」

黒花、アテナ、雷槍、香織、優花が返事したが

「ごめん、魔法使えないから私はパス」

ユエはパスした

「良いよ。」

私達で片づけるから」

と其々のアイテムを取り出して

『ヘンゼルナッツとグレーテル!』

『猿飛忍者伝!』

『チェンジ全開!』

『プリキュア!トロピカルチェンジ!』

『とある森に迷い込んだ小さな兄妹の、おかしな冒険のお話…』

『とある影に忍は疾風!あらゆる術でいざ候!』

『25バーン!』

『レッツ!メイク!キャッチ!』

『ヘンゼルナッツとグレーテル!』

『双刀分断』

『ババン！ババン！ババン！ババン！』

「チーク！」

「変身！」

『font:94』ババババン！ゼンカイ！ガオーン！』

「リップ！」

「エマージェンシー！デカマスター！！」

「LBCSコネクト！オーディーンMk-2！」

『銃剣撃弾！』

『壺の手、手裏剣！』

「フェイスオン！」

「アイズ！」

『カウンタースystem起動、スキンプールド展開、コネクト・コンプレイト』

『銃でGO！GO！否！剣でいくぞ！音銃剣錫音！』

『式の手、二刀流！風双剣翠風！』

「百鬼夜行をぶった斬る！地獄の番犬！デカマスター！」

「動物パワー！ゼンカイガオーン！」

「ヘアー！」

『錫音楽章！』

『翠風の巻！』

「ドレス！」

『甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを斬り刻む！』

『甲賀風遁の双剣が、神速の忍術で敵を討つ！』

「はためく翼！キュアフラミンゴ！」

其々の変身が終わり

「黒花、ハリケンジャーを」

「はい」

「ギアトリンガー」に「ハリケンジャーギア」をセットする。

そしてハンドルを回して

『26バーン！』

『ババン！ババン！ババン！ババン！』

と待機音が流れて引き金を引くと

『font:94』バババーン！ハリケンジャー！』

とハリケンジャーの幻影が現れて其れが光の球になり私達に入る

黒花が韻を結び

「超忍法！・影の舞!!」

するとミレデイゴーレムの周りに突如あらわれた障子が閉じ、ミレデイゴーレムを閉じ込めた。

「え!?!何々此れ?」

ミレデイは戸惑っていたが

「Dソードベガ」

牙十郎の声を始めに

「合わせて下さい。」

優花、会長、雷槍

「分かって居る」

「うん」

「ハイ先輩」

私達は

『ヘンゼルナッツとグレーテル！イエーイ!』

『猿飛忍者伝!!ニンニン!』

「スナック・音・ザ・チョップ!」

「疾風剣舞!」

「インパルスベガスラッシュ!」

「雷の呼吸 漆ノ型 火雷神!」

『錫音音読撃！イエーイ!』

『翠風速読撃！ニンニン!』

と其々の斬撃でミレデイゴーレムの左腕を

「なあ!?!」

輪切りにして其れを

「行くよ」

黒花が「ギアトリンガー」を回す。

『ヒーロー！スーパーゼンカイトタイム!』

「ハートルージュロッド！」

『ゴッゴ―！バンバン！』

「グロリアスレイ！」

「ゼンカイファイニツシユバスター」

「プリキュア・ぶつとびフラミンゴスマツシユ」

『ダイゼンカイ！』

其々の必殺で輪切りにした左手を消し炭にしたが

「舐めるなア！！」

重力魔法でブロックを操作してパイルバンカーに当てた。

流石に予想外の行動で私達は予測出来なかった為パイルバンカーの破壊を許してしまった。

「ハハハ：さんねくんあと一歩だったのにねえ」

「何勝ち誇ってやがる。」

シア、チロル！！」

ハジメの後ろにシアとチロルが現れて、先にシアがドリユツケンを杭に振り下ろしてチロルはドリユツケンに目掛けてかかと落とすを振り下ろす

「なっ…何イイイ」

杭はミレデイゴーレムのコアを貫いて破壊した

コアを破壊されたミレデイゴーレムは床に倒れた。

私達は変身を解除して

「――やった俺達の勝ちだ」

「そうだね」

「シア、チロル最後のは凄い威力だった。

見直したぞ！」

ハジメがシア、チロルを褒めると

「チロルちゃん、ハジメさんが凄く優しい目をしてる気が…ちっチロルちゃんこ…此れてゆ…夢？」

「お前な…」

「ハア！！シアちゃん夢じゃないよ

現実だよ」

「まあ日頃の扱いが悪かったのは認めるが？」

ユエ、香織、私はシアとチロルに近づいて

「ハジメは撫でないから代わりに」

ユエがシアに抱きついて

「よく頑張りました」

「うんよく頑張りました」

「チロルちゃんも私達の技術をしっかりと使っていて良かったよ」

私はチロルの頭をなでる

「…ユエさん、カオリさん私…わたし…怖かったですう

何度も死んじゃうって思いましたあゝ」

「シアちゃんも私もだよ」

「ワン」

シアとチロルは気が抜けたのか泣き出した

「いい雰囲気の所悪いんだけどちよつといいかな？」

ミレディゴーレムが目に光を取り戻し、動き出していた。

それに気付くとハジメが杭を持ち、更にその後ろでシアが戦槌を準備する。

その隣でチロルが足技の準備を始める。

「ちよつとちよつと!? 待ってってば！ 少しでも話をさせてよ!!」

「シア、チロル、全力でやれよ」

「勿論！」ですう！」

「ワン！」

「大丈夫だつて！」

試練はクリア！

あんたの勝ち！

核の欠片に残った力で話してるだけ。

もう数分も持たないよ」

「其れで話つて何ですか？」

黒花が言う。

「言つとくけど狂った神を倒してくれなんて話は翼愛達に聞かせておけ」

「そうかもしれないけど一応忠告しておくね。

必ず私達『解放者』全員の神代魔法を手に入れる事。

神を殺すのも、望みを叶えるには必要な事だよ」

「なら、他の迷宮の場所を教えろ。

ほとんどが記録にも残ってねえんだよ」

「オスカの手帳も書いてなかった」

「ああ、そうなんだ……そっか、迷宮の場所がわからなくなるほど……長い時が経ったんだ……きつと、一度しか言えないからよく聞いてね。

砂漠の中央にある大火山『忍耐の試練』、『グリユーエン大火山』。

西の海の沖合周辺にある『狂気の試練』、『メルジーネ海底遺跡』。

教会総本山『意志の試練』、『神山』。

東の樹海にある大樹ウーア・アルト『絆の試練』、『ハルツイナ樹海』。

そして最後は……以上だよ。

……頑張つて……ね……」

「……随分しおらしいな。

あのウザったい口調はどうした？」

「あはは……ゴメンね。神^{ヤツ}らと戦う時の為に少しでも慣れておいて欲しくて……」

「其れはお前の勘か？」

「そうだね。

戦うよ。

君達が君達である限り……

必ず……神殺しを成す

君達は君達の思った通りに生きればいい

君達の選択が……きつとこの世界にとつて……最良の選択だ……」

限界が迫っているのか言葉が途切れ途切れになつてくる。

「さて……時間の様だね。

大丈夫……先には進めるようにしておくから……」

しおらしいミレデイの言葉。

そんなミレデイの前にユエが立つ。

「？」

「ユエさん？」

「……」

「…？何…かな…？」

ミレデイが問いかけると、

「お疲れ様。

色々考えたけど、これ以上の言葉が見つからない」

すると、白崎さんや優花、もミレデイの近くに行き、

「あの、本当にありがとうございました！」

「あの言い方にはイラツと来たけど、アンタのその信念には敬服するわ」

それぞれが言葉を贈る。

「ふふっ…ありがとね」

そう言い残すとミレデイゴーレムは停止した。

「嫌な人だと思っていましたけど、違っていたのかもしれないね」

「ん…」

消え去ったミレデイゴーレムを見てシアとユエはそう呟いた。

「もういいだろ？」

さっさと行くぞ」

ハジメはサラツとそう言ってミレデイの足場に向かう。

そしてその後を私、黒花、アテナ、雷槍が続く

「ハジメさん達…空気読んでください…」

ミレデイが用意した足場に乘ると、勝手に動き出して通路の先へ進んでいく。

「動く床で案内してくれるなんて優しいですね！」

「…ミレデイは演技してただけなのかも」

女性陣は笑みを浮かべながらそう話し合っているが、

「いいや、断言する！」

あの性根の悪さは間違いなく素だ！」

「うん、私からも言える」

「「うんうん」」

「ハジメさん達！

先ほどから空気読めてないですよー！」

その言葉と共に足場が通路の奥に辿り着き、

「あの意地の悪さは演技ってレベルじゃねえよ。

後、俺は空気が読めないわけじゃない。

あえて読んでいないだけだ」

その先にある扉が開く。

そこで出迎えたのが、

「やつほー！

さつき振りー！

ミレデイちゃんだよー！」

先程と同じ声で動く、子供位の背丈のゴーレムだった。

「やつぱりですね」

「ほらみろ。

こんなこつたらろうと思ったよ」

「だね」

ハジメ達はあっさりと納得する。

「ミレデイが消えたら、この後いったい誰が案内役をやるんだよ？」

「どうせあのゴーレムは遠隔操作ができる奴だろ」

アテナはゴーレムにトリツクを見破って居た

「あっちゃー！

あのゴーレムの事までバレてたか。

流石は私の試練の攻略者だね！」

ミレデイはあっけらかんとそう言うが、

「…さつきののは？」

ユエを筆頭に私達以外が白けた目を向ける。

「おつ？ さては白髪君達以外は消えたと思ってた？」

ミレデイの小型ゴーレムはしてやったりの笑みを浮かべ、

「ないな〜い！

そんな事あるわけないよ〜！

じゃあ女の子達にはドツキり大成功☆騙されてやんの〜！

ブークスクス！」

その言葉に私達は周りの空気の温度が下がったのを感じる。

「ハジメ君、離れようか」

「だな」

私達はミレデイゴーレムから離れる。

肝心なミレデイはゴーレムだからなのか、その変化を感じ取れないらしい。

「良かったでしょあの演出！」

やだ、ミレデイちゃん役者の才能まであるなんて…」

と、そこまで言つてようやく私達以外の周りに流れる冷たい空気に気付いたらしい。

冷ややかな視線を受けて狼狽え始める。

「あ…あの…？」

もしかしてちよつと…やり過ぎちゃった？」

私達以外が其々のアイテムを取り出して

『猿飛忍者伝！』

『ドライバーオン ナウ』

『とある影に忍は疾風！あらゆる術でいざ候！』

『シャバドウビ タッチ ヘンシン シャバドウビ タッチ ヘンシン』

『双刀分断』

『変身！』

『壺の手、手裏剣！』

『エマージェンシー！デカマスター!!』

『LBCSコネクト！オーデインMk-2！』

『チェンジ ナウ』

『フェイスオン！』

『式の手、二刀流！風双剣翠風！』

『カウンターステム起動、スキンフィールド展開、コネクト・コンプリート』

『翠風の巻！』

「百鬼夜行をぶった斬る！地獄の番犬！デカマスター！」

『甲賀風遁の双剣が、神速の忍術で敵を討つ！』

シアはドリユッケン、チロルは足技を放つ準備してベロの口から業炎、ベルから常闇か溢れ出て来る

私達以外に囲まれ、ミレデイは……………

「…………ゴメンね☆」

テヘペロという反省ゼロの態度で謝った。

「」「死ね!!」「」

「ま、待って！」

ちよつと待って！

このボデイは貧弱なお！

これ壊れたら本気でマズイからあ！

落ち着いてえ！

謝るからあ！」

しばらくの間、

『猿飛忍者伝!!ニンニン!』

「疾風剣舞回転！」

「ベガスラッシュュ！」

『エクスプローション ナウ』

「グロリアスレイ！」

『翠風速読撃！ニンニン!』

「いやあー!!!」

「ドタバタ、ドカンバキツ」

など悲鳴やら必殺音、破壊音や爆発音が聞こえていたが、私達はは一切を無視して、部屋の観察に努めた。

部屋自体は全てが白く、中央の床に刻まれた魔法陣以外には何もなかった。

唯一、壁の一部に扉らしきものがあり、おそらくそこがミニ・ミレデイの住処になっているのだろうと私達は推測する。

私達は、おもむろに魔法陣に歩み寄ると

「如何解読できる?」

「いや、相当難しいぞ」

勝手に調べ始めた。

それを見た、ボロボロのミニ・ミレデイが慌てて私達のもとへやって来る。

後ろからは、変身して居る皆がドドドドツと音を立てながら迫って来ている。

「君達いく勝手にいじっちゃダメよお。」

「というか、お仲間でしょ！ 無視しないで止めようよお！」

そんな文句を言いながらミニ・ミレデイは私達の背後に回り、六人の悪鬼に対する盾にしようとする。

「……ハジメどいて、そいつ殺せない」

「退いて下さい。ハジメさん。そいつは殺ります。今、ここで」

「うん、私も同意見だよ」

「まさか、そのネタをこのタイミングで聞くとは思わなかった。」

「会長退いていただけますか？」

それは今直ぐ切り倒します」

「だからどいて」

「バウ!!」

「いや、皆、落ち着いて」

「つていうかいい加減遊んでないでやる事やるぞ」

暫くして

「…はい、魔法陣の中に入ってそれじゃ、起動するよ？」

ミレデイの言葉で魔法陣が輝き始める。

「次ふざけたら？」

「エクスプロージョンウィザードリング」を見せて

「破壊するから」

ユエの言葉に、

「はい！ 全力でやらせていただきます！」

ミレデイは背筋を伸ばして敬礼することで答えた。

魔法陣が更に輝くと頭の中に重力魔法がインプットされていくのが分かる。

「思ってた通りだな」

「ん？重力操作の魔法」

ハジメとユエがそう言う。

「金髪ちゃんと黒髪の女の子は適性ばっちり！

そっちの白い髪の女の子と中途半端な髪の子と桃髪の女の子と赤髪姉弟はそれなりだね。

ウサギちゃんと犬ちゃんは出来て体重を変える事ぐらいかな」

「私達、適性無いんですね？」

シアが残念そうに言う。

「男の子2人はビックリするほど適性無いね」

「やかましい、錬成が使えればそれでいいんだよ」

「俺は刀で十分」

ミレデイの言葉にそう返す。

「あと君にはコレ」

そう言っつてミレデイがハジメに指輪を投げ渡す。

「攻略の証だよ。」

大切に取っておいてね」

すると、

「これだけか？」

「え？」

ハジメがミレデイに詰め寄る。

ガッとミレデイの頭を掴むと、

「攻略報酬だよ！

オルクスは他にもいろいろな物をくれたぞ!」

「ひいひいひい!」

ハジメが完全に強盗の顔になって居た

「アテナの言う通りあのゴーレムを遠隔操作してたろ。

あれはどういった仕掛けだ？」

「あれは感応石

魔力を定着させると遠くから操る事が出来る鉱石だいいお」

「よし、取り敢えず其れを寄こせ」

「パシヤ」

シャッター音が聞こえる

「どれどれ」

私は撮った写真を見る。

全員の顔が収まった写真が撮れていたので

「此れ皆配るね。」

シャルルお願い」

「はいシャル」

空間魔法から小型のプリンターが出て来て人数分の写真をプリントして皆に配る

「はい」

「ありがとう」

ミレデイも配る。

その時のミレデイは何処か懐かしそうで寂しそうな雰囲気が出ていた。

「其れで君のやることは済んだかな？」

ミレデイの言葉に私がそう返事をする、

「君には悪いけど最初に謝って置く

御免」

「何が？」

私は質問するが

「オツケー☆ それじゃ、とつとと出て行ってね♪」

ミレデイは其れを無視していつの間にかミレデイの横に垂れて来ていたロープを引っ張った。

其れを見た私は

「ああ、成程ね」

私、黒花、アテナ、雷槍は急いでワシピンク、仮面ライダーバロン、ゼンカイガオン、ガングニール・水着ギアに変身した

暫くすると、スルスルとミレデイがロープに引っ張られて宙に浮くと、突如としてこの部屋に水が流れ込むと同時に部屋の中央に穴が開く。

そしてミレデイ以外はそのまま水に飲まれる。

「おい！」

これってまさか！」

ハジメが気付いたように声を上げる。

「いやな物は水に流すに限るね！」

それじゃ、引き続き攻略頑張るんだよ〜〜〜！」

ロープで空中に退避していたミレデイが気楽な声でそういう。

「てめえ！」

覚えておけよ!!」

「許さない！」

「いつか絶対破壊してやるですう〜！」

私達はそう言うが水の流れには逆らえず、まるで便所に流されるあの様に部屋の中央の穴に呑み込まれて迷宮から強制排出されたのだった。

風呂騒ぎ

ミレディによって水に流された私達は水路の中を水の流れに乗って移動していた。

私、黒花、アテナ、雷槍は最初から変身して居た為空気の確保が出来た。

ハジメ、ユエ、香織、優花、牙十郎も水の中で変身した。

シア、チロル、ベロ、ベルは変身アイテムが無いので其のまま泳いでいる。

私、ハジメは後ろを確認するとシアが横を見て何かに驚いて水中で「ブフオアー！」

と盛大に息を吐き出してしまいシアは白目を向いて力なく流され始めた。

「!?」

チロルは急いでシアを抱きかかえて急いで泳ぎ始めて私達を抜いた。

私達も急いで泳いで水面から顔を出して変身を解除してシアとチロルの元に行く

「シアちゃんしつかりして!?」

「おいシアちゃん起きろ!」

「チロルちゃん、シアちゃんは?」

「地上に戻って来たぞ!」

駆けつけた私達は心配するが

「息してない」

「だあーもうクソツたれ!

救命処置だ。

助け!

「「「「「お——!」」」」」」

「「お、お」」「?」」」」

ユエ、チロル、ベロ、ベルはハジメが言った言葉分かって居なかつ

た。

私達は急いでシアを岸に上げて

「香織頼んだ!」

「任せて!」

香織が人工呼吸してハジメが心臓マッサージをする。

「雷槍君、AEDを用意して」

「はい分かりました……て、此処は異世界ですよ!?!」

「あ、そうだった。

シャルル」

「はいシャル」

「AEDを」

「はいシャル」

シャルルは空間魔法陣を展開して其処からAEDを取り出して準備を始めるが

「ケホッ!ケホッ!」

咳き込む音がして振り返ると

「……ハジメさん?」

シアが息を吹き返していた

「おうハジメさんだ」

意識を取り戻したシアに呆れと、安堵が混じった表情を見せる

そんなハジメをボーと見つめていたシアは

「つたく、こんなところで死にかけるじゃ……」

ハジメが話しかけている途中でシアは両手でハジメの顔を

「!?!」

掴んで無理矢理引き寄せて其のまま

「んっ!?!」

「んー!!」

デーパーキスを始めた。

「おいコラ辞めっ……んむっ」

「ぢゅううちゅ」

多分シアは自分が気絶している間にデーパーキスをしたと勘違い

をして居ると思う

その証拠に

「ぶあハジメさん…いいですよ私は何時でも…」

「ただの救命処置を勘違いしてんじやねえ！」

後したの香織なんだけど」

「またまた恥ずかしからずに行きましょう」

「くそ、コイツ身体強化してやがる」

「……」

ユエと香織の雲行きが怪しくなり始めて

「おい、離れろ。」

「そろそろユエと香織がやばい!!」

焦ったハジメは

「このっ…」

「ぎゃっ」

シアの頭を掴んでそのまま

「もう一度溺れて来い。」

「このエロウサギ!!」

ハジメはシアを泉に放り投げて

「きやあああ!!」

悲鳴を水飛沫を上げながら着水した。

「シアちゃん」

「蘇生直後に襲い掛かってくるなんて…流石の俺でも読めねえ」

悲鳴を上げて泉に落ちたシアを尻目に、深呼吸して荒くなった呼吸を元に戻す。

「しようがないでしょ

この世界には救命処置が無いから」

「そうなのか？」

「王都に居た時、ジャンル問わずに書物を読み漁ったから」

「つまりシアは(褒美のキスと勘違いしたのか」

「そうなる」

「はあ」

「取り敢えず宿に行かない?」

「だな」

私達はブルツクのマサカの宿に行き

「11名泊風呂もつけてくれ」

宿娘にそう言うハジメ。

「この前のお客様!」

その御姿は一体……」

宿娘が驚くのも無理はないだろう。

晴れているに全員がずぶ濡れだから

「まあ、色々あつてな。

出来ればすぐ風呂に入りたい。

空いてるか?」

「は……はい!」

今の時間帯なら貸し切りでご利用いただけます!」

宿娘は慌てながら準備をする。

「15分100ルタですが、何分ご利用ですか?」

宿娘の言葉に

「ん——そうだな」

ハジメは少し考え、

「二時間だ」

「につ……二時間も!」

ハジメの言った言葉に宿娘が驚く。

「そんなに使って何する気ですか!」

「いや、普通に風呂に入るだけなんだが……」

「そんなはずありません!」

この前の大部屋に泊まった時だつてきつとすごいプレ……」

後ろから宿娘にそっくりな女性が現れた

多分母親だなど思つて居ると

「痛い……」

その瞬間、母親に拳骨を落とされる宿娘。

そして気絶した宿娘を引きずつて

「すみません、そういう年頃でして、どうぞゆっくりなさってください」

「お…おう…」

そのまま引き摺られていく宿娘を見て、ハジメは若干引いた声を漏らした。

そのまま私達はお風呂に行き更衣室で男女別に別れて服を脱いで体を洗って湯船に漬かる。

「「ふう〜」」

「わ〜ん」

私、黒花、アテナ、チロル、ベロ、ベルは思わず声が出る。

「久しぶりに湯船に漬かるね」

「そうだな」

「体に沁みりますね」

「だな」

「「ですね」」

「其れにしても香織達、遅いな」

「シアちゃん達遅れて入ってるって言ってたけど…」

「「ユ…ユエ!」」さん!」

隣の男湯からハジメ、牙十郎、雷槍の音が響いて来て私達は思わず壁に耳を当てて盗み聞きをする。

「…え？」

私に背中を流して欲しい…？」

「そんな事一言も言っていないんだが!」

「なら私の方が良いかしら」

「「香織!」」先輩!」

今度は香織の声が聞こえて

「ずるいです。

ユエさん、カオリさん

私も流します!」

「お前等…」

「私も居るよ」

「…優花もか」

恋人が居る女性陣は全員男湯に突撃したか

「やっちゃったね」

「だな。」

雷槍!!」

アテナは大声で叫び

「あ、はい」

「さっさと風呂に出ろ」

「わ、分かりました」

アテナは雷槍を避難させて

「ハジメどっち!?!」

「男らしくハッキリと決めて下さい!」

「私も知りたい」

「牙十郎」

「ああ」

「貸し切りだしいいか。」

ユエ、香織頼む」

「んっ!」

「任せて」

「ええ!?!」

「優花頼む」

「うん任せて」

「遠慮く無くなつたね」

「だな。」

避難させて正解だな」

私達が会話して居ると

「お前如きがユエ、香織に勝てると思ってるのか」

「カオリさんには色々負けていますが」

ユエさんだったら胸なら私が勝ってます!

ユエさんはペツタンコじゃないですか!」

シアがユエの禁句を言ってしまった。

ユエは絶壁の私と黒花より多少胸の膨らみはあるけど香織、アテナ、優花、シア、チロルに比べると小さい部類になる

そう思っ居ると男湯の冷気が流れだして

「じゃ俺達先上がるわ」

「それじゃあユエちゃん、シアちゃんたつぷり堪能してね」

「優花出るぞ」

「そうだね」

シア以外全員避難を始めた

「皆さん待ってください!!」

シアが待ったを掛けるが皆は止まらない

「ご……ごめんなさいユエさん……つい……」

シアは声を振るえながら謝るが

「五月蠅い

お仕置き」

壁の向こう側は触手プレイのお仕置きが開始され

「いやあああ、あ、あああ、あああ♡」

シアが悲鳴を挙げる。

「シアちゃん……!」

チロルが心配している中

「何してんだコリア」

「ひいい御免なさい!!」

宿娘の声が聞こえて

「私達はゆつくり漬かっておこうか」

「だな」

私達は満足するまで使う事になった。

翌日

再びブルツクの冒険者ギルドを尋ねた私達を、キャサリンが出迎えた。

「おや、いつぞやの坊や達じゃないか。

今日はどんな用だい?」

「グリユーエン大火山の迷宮へ行きたい。

何か情報を持ってないかと思つてな」

「はいはい、ちよつと待ちな」

キャサリンは分厚い資料のページを捲っていると、
キャサリンは何かを思い出して

「そう言えばこの間、冒険者登録をここでしたよね？」

とすると、今のランクは青だね」

「なんだそのランクってのは？」

ハジメはランクの部分に疑問に思つてキャサリンに質問する。

「冒険者の実力の基準なのは分かるけど具体的や表し方には？」

「其れはお金の単価と同じだから其れを基準にしな

…と、待たせたね。

大火山の情報だよ。

これを見てみな」

キャサリンが資料を見せながらそう言ってくる。

「グリューエン大火山は大陸を西に進んだ大砂漠の中にある。

迷宮に挑戦するならしつかり準備をする必要があるよ。

おすすめは途中の『フューレン』つて所に寄ることだね。

大陸一の商業都市だから、大体の物は何でもそろはずさ。

今ならフューレンへの護衛の依頼が一件あるね。馬車で移動できるから丁度いいと思うよ。

どうするかい？」

私達は掲示板の方に行き

「んー…」

ハジメは考えて

「乗り物はあるから移動手段には困つてないが…」

ハジメはそう言いながら私達の方を振り向く。

ハジメの顔は依頼を受けてみたいとウズウズしている顔だ。

性格が変わつたとはいえ、根っからのオタクなのは変わらないらしい。

「急ぐ旅じゃない」

「他の冒険者さん達と情報交換できるかもですよっ。」

「俺もこういう冒険者らしい依頼を受けてみたいと思ってた所だ」

「私も商人の情報に欲しいから」

私達は賛成に回る。

「そうだな…たまにはいいか」

ハジメは掲示板に張ってあった依頼書を取ってカウンター置いた

「受けさせてもらおう」

「あいよ。」

それじゃそのまま正門へいっとくれ」

私達が振り向いて冒険者ギルドを出ろう歩いた時

「あ、ちよつと待ちな」

キャサリンが私達を呼び止め、何かを一筆サラサラと書き始めた。

すると、それに封をして、

「あんた達には見込みがありそうだからね」

そう言いながらそれを渡してきた。

「これは？」

「手紙？」

「嬢ちゃんの言う通り手紙だよ。」

他の町でギルドと揉めた時はそれを見せな」

「キャサリンで冒険者ギルドn…」

「おっと、詮索は無しだよ？ イイ女には秘密が付き物さね☆」

キャサリンが良い笑顔でサムズアップする。

「あんた一体何者だよ…」

「でもこれだけ言えるね」

「ああ」

「結構重要人」

「だな」

私達はブルツクの冒険者ギルドを後にした。

異世界食堂

私達はブルツクの正門に向かい護衛の依頼主である隊商が集まっている場所に足を運ぶ。

其処には責任者らしき男いた。

「私の名はモットー・ユンケル。」

この隊商のリーダーをしている。護衛をよろしく頼むよ」

「ああ、期待は裏切らないと思う」

「お願いします」

私達は握手して、モットーは私達と行動しているシアとチロルにふと目を向けた。

「…早速で悪いが、君達に相談がある」

シアとチロルの存在に『価値』を見出したであろうモットーはハジメに交渉してきた。

「その兎人族と犬人族…売るつもりはないかね？」

その言葉を聞いた瞬間、チロルはシアを守る様に出て威嚇して、香織達から非難するような目がモットーに向けられるが、モットーは慣れているのかどこ吹く風だ。

「シアとチロルを売る気は無いかだと…？」

「ええ」

「あくやっぱり目立ちますよね」

「そうですね。」

亜人族では珍しい白髪に美しい容姿の兎人族。

其れに引けを取らない犬人族。

これほど美しい商品は初めて見るものでして」

『商品』と言った時点で非難の目が一層強くなる。

シアはチロルの後ろに隠れるように移動した。

「其れに見れば随分と懐かれています様子。」

それなりの額を出しますが…いかがかな？」

「…そうだな、例えばどこぞの神が欲しがっても手放す気は無い…と言えれば分かってもらえるか？」

「其れは私も同じよ」

私達はそう言い切った。

「…そこまで言われたら仕方ない。

一先ず今は引き下がろう」

「分かってくれて助かったわ」

「其れと…」

「何だ？」

「実はお得意先から急に依頼が舞い込んでね。

その準備に少し戸惑ってね。

終わるのが…二時間後でね。

その間に昼を済ませて欲しんだ」

「分かった」

と私達は一旦正門から離れた。

「ハジメ君、何処で昼ご飯を食べるの？」

「其処が悩むんだよな」

と私達が悩んでいると

「あ、今日は土曜日じゃなかったですか？」

黒花の言葉に

「土曜日……」

「「「「「あ！」「「「「」」」」」」

思い出した

「え、何ですか？ あ!?て」

「そうだったそうだった。

ユエ頼んだ」

「うん任せて」

ユエは指に「テレポルトウィザードリング」を嵌めて待機状態の「ワイズドライバー」に翳して

『テレポルト ナウ』

私達の足元にワイズマンの魔法陣が現れて

「え!?!何ですか此れ!?!」

「シアちゃん!?!」

「ワン!?」

シア、チロル、ベロは戸惑っているが私達は転移した。

転移先はオルクス大迷宮の最深部のオルクスの隠れ家だ

「え!?え!?ハジメさん達此処何処ですか?」

シア、チロル、ベロ、ベルは辺りを見渡した

「此処は解放者が一人オスカー・オルクスの隠れ家」

「解放者……あのムカつく奴の仲間ですか?」

シアがムカ着いた口調で喋る。

「まあ、そうなるが、此処の主人はムカつく相手ではないな」

「そうね」

私達は有る場所に向かって歩く

其処には異世界食堂、洋食のねこやの扉があった。

「ハジメさん、あれ何ですか?」

「あれか?」

俺が知っている中でこの世界で一番美味しい料理店に繋がる扉だ」

ハジメがドアのドアノブを触れて開けると

「チリンチリン」

と鈴の音とともに

「いらっしやい。何名様ですか?」

「11名だ」

「それと日本語のメニュー八人分お願いね」

「分かりました」

私達はアレツタにそう言っただけで開いて居る席に座る。

「ハジメさん、此処ってどうなっているんですか?」

「詳しい事は俺でも分からないがあああの扉は土曜日の日だけ此処の世界と別の世界に繋がっているんだ」

「へ、へえ」

「其れでさつき鳴ったベルが一時的に自動翻訳の技能が付与されるの」

「確かに異世界なのに言葉が分かります」

と会話して居ると

『お待たせしました。』

「二ホンのメニニューです」

クロがメニニューを持って来た。

「其れで何するの」

私はチロルとシアにメニニューを見せる。

「と言いましても」

「私達には何が書かれているのか分かりません」

「ああ」

自動翻訳は言語理解と違って言葉の翻訳だけで言語翻訳までは分からないのだ

「それなら二人が食べたい物を言って其れに近い物を注文するから」

「ヨクアイさん、ありがとうございます」

「其れで食べたいのは？」

「私達はお肉が良いです」

「ワン!!!」

「そうなるとビーフステーキね。」

シアは「？」

「わ、私はそうですね……えっと」

「一応、日替わり定食があるけど」

「なら日替わり定食にします」

「皆は決まった？」

「皆決まったよ」

香織が代表してそう言う

「すみません」

「あ、はい」

アレツタがこっちに来た。

「皆食べたい物言つてね。」

お好み焼き広島焼、ビーフステーキ三人前、日替わり定食で」

「私はカルボナーラで」

「私はスープパスタで」

「私も日替わり定食で」

「俺達は此処で食える揚げ物全品大盛

後カレーを」

私はお好み焼き広島焼、チロル、ベロ、ベルはビーフステーキ、シアと優花は日替わり定食、アレーティアはカルボナーラ、香織はスープスタ、ハジメ、黒花、アテナ、雷槍、牙十郎は此処で食える揚げ物全品とカレー五人分を頼んだ。

「わ、分かりました。カルボナーラ、スープスタ、お好み焼きの広島焼き、日替わり定食二人分、ビーフステーキ三人分、揚げ物全品大盛とカレー五人分、ですね」

「はい」

「では」

とアレツタは厨房に向かった。

私達は料理が出来るまで待つて居ると

「おお、その後ろ姿は」

「ヒロシマヤキ、お久しぶりです」

後ろから聞いた事がある二人組の声がして私は振り返ると

「お久しぶりです」

「久しぶりでござる」

「ええ、久しぶりですね」

侍と陰陽師が居た。

「えっと……」

「すみませんが此処では好きな料理があだ名になるので」

「拙者がぶたたまでこ奴がしーふーどになるでござる」

「成程、えつとつまり私のあだ名はヒロシマヤキになるんですね」

「そうですね」

「所で二人ともお好み焼きは如何ですか？」

「今の所ふの焼が限界でござる」

「ええ、幸いにもうどん粉に変わる物と味噌が見つかりました」

「そうなんですネ」

「如何やら私達の他にも此処の料理を再現する人が多いのが有りましたので」

「だが、例のそうすがまだ作れそうにはござる」
「そうですね。」

其れよりもそろそろ席に着いた方が良いですよ」

「そうでござるな」

「ええ、失礼します」

侍と陰陽師は私から離れた。

「ヨクアイさん、先程の人は？」

「お好み焼き仲間かな」

私は「ラブリーコミッション」になっているシャルルを取り出して

「母さんに連絡入れて」

「分かったシャル」

と暫くすると

『翼愛？』

「母さん」

『久しぶりね』

「うん、其れで解放者の大迷宮をまた一つ攻略したの」

『分かったわ。』

其れで新しいギフトが欲しいんでしょ』

「はい」

後攻略メンバーの顔写真を送るね。

シャルル」

「はいシャル」

暫くすると

「写真送れたシャル」

『ええ、確認できたわ。』

確認だけど、前回のメンバー全員入って黒髪の犬の亜人と白髪の兎の亜人が新しく翼愛達の仲間になった子で翼愛抱きつかれている子は……』

「解放者のミレディ・ライセンス」

『へえ、でも確か解放者は数千年に存在した……』

「母さんが言いたいのは分かる。」

何でも神代魔法を使って今日まで生きてたみたい」

『そうなのね。』

なら一度会って見たいわ』

「多分会えると思うよ」

『そうね。』

其れで新しい新人は？』

「ちよっと待っててね。」

シア、チロル」

「はいですう」

「何ですか？」

「母さんが話がしたいって」

「分かりました」

シアとチロルがこっちに来て

「初めまして、鞆波・A・翼愛と鞆波・A・黒花の母親の蒼青の勇者、
鞆波・A・氷水よ』

「初めまして、えっとヨクアイさんの部下のチロルとベロとベルです」

「ワン」

「そんで私はハジメの女のシア・ハウリアです♡」

「おい何言っているんだシア」

『ふふ、シアちゃんにチロルちゃんね。』

それでギフトを送りたいの何が良いかしら？』

「なら、ハジメさんを惚れさせる媚y…」

『御免なさいね。』

そう言うのじゃなくて戦う武器なの』

「なら私は大槌が良いですう」

「私は格闘が主体ですな」

『分かったわ準備しておくわ』

通話が終わると

「お待たせしました。」

カルボナーラ、スープパスタ、好み焼きの広島焼き、日替わり定食二人分、ビーフステーキ三人分、揚げ物全品大盛とカレー五人分を

お持ちいたしました。

「因みに今日の日替わり定食はエビフライです」
「アレツタがワゴンで私達の料理を運んで来た。」
「そして料理がテーブルに置かれて」

「其れじゃあ」「」「」「」「頂きます！」「」「」「」

私達は其々の料理を食べた。

そして私は食べ終わったらナポリタンを食べて居る青年に近づく
「すみません」

「はい、何でしょうか」

「実は私達貴方達が使っている通貨を持って居なくて
宝石で両替したいんですが」

「そう言う事ですね。」

「なら、メンチカツさん」

「うん？何かしら？」

「彼女、宝石を両替したいみたいで」

「ああ、成程ね。」

「任せて！」

メンチカツさんがポーチから携帯式の天秤を取り出してたちまち
組み上げ

「此方になります」

私は宝石を出して

「ふむふむ、こんなもんかしら」

メンチカツさんが袋を出して私は中身を確認した。

中には金貨が多く入って居た

「はい構いません」

私は皆の元に行く。

その後メンチカツさんから両替したお金で支払いして店を出ると
段ボールが置いてあった

二回目のギフトの確認

異世界食堂から戻って来た私達は目の前に段ボールが置いてあった。

「翼愛」

「何かな？ハジメ君」

「今回は早いな。」

「前は一週間くらいあったよな」

「うんそれくらいあったよ。」

「でも開かない？」

「だな」

段ボールにはテープで止めていたので私は「音銃剣錫音」でテープを切る。

「おいおい翼愛、普通「音銃剣錫音」でテープを切るか？」

「しようがないでしょ。」

「私が今持つて居る刃物これしかないの」

「だとしても。俺が咄嗟に刃物造れるんだが」

「次回お願いするね」

「ああ、任せておけ」

私は段ボールを開けると色々が入って居た。

私は最初に手紙を取り出して手紙を声に出しながら読む

「翼愛達へ」

この手紙を読んでいるという事はギフトが届いた事になります。

前回より早く届いた理由は予めギフトを選んで置きました。

シアとチロルの分は直ぐに取り寄せたので入って居ます。

付箋が張ってありますので付箋通りに渡してね

氷水より

だつてさ」

私は段ボールの方を見ると確かに全てに付箋が張って有りに私達の名前が書かれてあった。

私は段ボールの中に入って居る奴で一番大きい袋を取り出して

「はい、雷槍君」

「あ、はい」

雷槍は渡された袋を開けると中に入って居たのは青い服と銃であった

「翼愛先輩此れは？」

「ハジメ君」

「ああ、分かって居る。」

ガンヴォルトシリーズの主人公、ガンヴォルトが使っている服一式と銃ダートライダー撃だな」

「そうなんですか」

「取り敢えず雷槍君、着替えて来て」

「はい」

と雷槍君は私達から離れた。

私は雷槍の袋より一回り小さいアタツシユケースを手に取り箱を開ける。

中に入って居たのは「ロストドライバー」と「スカルガイアメモリ」が入って居た

アタツシユケースに張ってあった名前はハジメだった。

「これハジメ君だ」

「おお、マジかこれ俺仮面ライダースカルになれるのか!!」

「取り敢えず変身して」

「おう」

ハジメは「ロストドライバー」と「スカルガイアメモリ」手に取り「ロストドライバー」を腰に付けると自動的にベルトが巻かれて今度は「スカルガイアメモリ」のスイッチを押す。

『SCULL』

「スカルガイアメモリ」を「ロストドライバー」のスロットに入れて

「変身！」

『SCULL!』

音声と共にハジメの周りに風が吹きながら仮面ライダースカル変身完了する。

「おお！仮面ライダースカル!!」

ハジメは自分が今なつて居るスカルを全身見渡した

「中々悪くないが」

ハジメは頭を触る

「やっぱりあの帽子が無いと締まらないな」

宝物庫から白い布と黒いリボンを取り出して慣れた手つきで直ぐに帽子を作って

「やっぱり仮面ライダースカルにはこの帽子が無いと締まらないな」

ハジメは作った帽子を被った

「うんうんそうだね」

私はもう一つのアタッシュケースを取り出して開けると二つの「フォースライザー」と「ライジングホッププログラムライズキー」と「ジャパニーズウルフゼツメライズキー」が入って居た付箋には黒花とチロルと書かれていた。

私はアタッシュケースから二つの「フォースライザー」と「ライジングホッププログラムライズキー」と「ジャパニーズウルフゼツメライズキー」を取り出して

「黒花、チロル、はい」

私は二つの「フォースライザー」と「ライジングホッププログラムライズキー」と「ジャパニーズウルフゼツメライズキー」を黒花とチロル投げる

「ほい、ほい」

黒花は簡単キャッチしたが

「アワアワ」

チロルは行き成り物を投げれ為慌ててキャッチが出来なかったが

「ワン」

「バウ」

ベロが「フォースライザー」をベルが「ジャパニーズウルフゼツメライズキー」を口でキャッチした。

「ベロ、ベルありがとう」

「ワン」

「バウ」

「それで早速変身してみよう」

「変身ですか？」

「それってハジメさんがやってみたいなやつですか」

「そう」

「私、此れの使い方知りませんよ」

「大丈夫」

「黒花と同じ奴だから黒花と同じ様に動いて」

「あ、はい」

「黒花」

「はい」

「まず「フォースライザー」を腰に」

黒花は腰に「フォースライザー」を付けると自動でベルトが巻かれる

「はい」

チロルは黒花より遅れて腰に「フォースライザー」を付けると自動でベルトが巻かれる

「次に此れのボタンを押す」

黒花は「ライジングホップログライズキー」ボタンを押す

『ジャンプ！』

「えっと、これですか？」

チロルは恐る恐るボタンを押す

『ジャパニーズウルフ！』

「次にライズキーを「フォースライザー」に装填する」

黒花は「ライジングホップログライズキー」を「フォースライザー」に装填する。

アラート音が鳴り響く

「クロハナさん、なんかヤバイ音が鳴っているんですか」

「大丈夫だからチロルもやってみて」

「あ、はい」

チロルも「ジャパニーズウルフゼツメライズキー」を「フォースライ

イザー」に装填してアラート音が鳴り響く

「最後に変身と言った後此処を引く」

「此処ですか」

「そう行くよ」

「変身!!」

「へ、変身」

『『フォースライズ!』』

『ライジンググホツパー!』

『ジャパニーズウルフ!』

『A jump to the sky turns to a rider kick.』

『『Break down……』』

黒花は仮面ライダー001にチロルは仮面ライダー亡に変身した。

「仮面ライダー001に仮面ライダー亡か」

「それでチロル、ベロとベルはどうなっているの」

「そう言えばベロ、ベル」

「ワン」

「バウ」

小さなベロとベルの鳴き声

「えっと、髪の毛と一緒に取り込まれたと言っています」

「そう」

私は段ボールから次の奴を取り出した。

取り出したのは「日輪刀」と「日の呼吸の巻物」だった

二つとも牙十郎と書かれている付箋が張ってあった

「牙十郎君の分」

「俺は日輪刀ですか」

「取り敢えず刀を抜いて両手で握って見て」

「はい」

牙十郎は私の言う通りに「日輪刀」を抜いて両手で強く握ると鋼色の刀身は漆黒に染まった

「日輪刀」が漆黒に染まったという事は……」

「牙十郎君の呼吸は日の呼吸だね」

私は持つて居た「日の呼吸の巻物」を渡した。

「会長のお母様なんで俺が日の呼吸の使い手と知って居たんですか」

「や……や……さあ？」

「取り敢えず雷槍君と一緒に鍛錬してみたら」

「そうします」

私は段ボールから黒い箱を取り出して黒い箱を開けると三つのペ
ンダントと注射器が入って居た

そして剣のデザインのペンダントは私、シンプルなデザインのペン
ダントはアテナ、赤い宝石のペンダントは優花、注射器は香織と付箋
に書かれていた。

「えつと取り敢えず自分の名前が書かれている奴を取ろうか」

「だな」

「うん」

「何で私だけ注射器」

其々自分の名前が書かれている物を取った。

私は母さんの手紙をもう一度読もうとするとき

『font:ul20』How^初do^めyou^まdo^し『font』

行き成りアテナが持つて居るペンダントから声がして私達はビツ
クリした

「まさか「インテリジェンスデバイス」か？」

『font:ul20』Yes^は『font』

「名前は？」

『font:ul20』Yes^は,^ル『Luciferion^シ』^{フェ}『fon
t』

「えつとルシフェリオンだと……シユテルの杖か」

「そうなる私の此れは「レヴァンティン」？」

『font:ul20』Yes^は『font』

「成程ね。」

其れで赤い宝石のペンダントと注射器の事も分かる？」

『font:ul20』Yes, the red jewel p

endant is the [Shrushagana] of
the Symphony Gear《はい、赤い宝石のペンダント
はシンフォギア》[Shrushagana]《font》
[シウルシャガナ]ね
《font:ul20》—The syringe is a Wa
rners ☆ walnut [magical syringe
e]《注射器の方はウォーナーズ☆くるみの「マジカル注射器」です》
《font》

「えつとハジメ君分かる」

「ああ勿論知っている。」

魔法少女特殊戦あすかに登場するウォーナーズ☆くるみが使っている奴だからな」

「取り敢えず皆変身してみない？」

「そうね」

「だな。」

一回パツと行こうぜ」

「うん、私少し魔法少女に憧れていたから」

私は「レヴァンティン」、アテナは「ルシフェリオン」を前に出すと

私の足元にベルカの魔法陣、アテナの足元にはミッドチルダの魔法陣現れた。

「レヴァンティン」と「ルシフェリオン」の周りに空中ディスプレイが出て来た

「マスター認証……」

「鞆波・A・翼愛」

「騎竜アテナ」

空中ディスプレイのマスターの項目に私達の名前が登録された。

「術式は古代ベルカ」

「術式はミッドチルダ」

術式の項目に登録された。

「私のデバイスの個人名を登録

ニックネーム及び正式名は「レヴァンティン」

「あたしのデバイスの個体名を登録

ニックネームは「ルシフェリオン」正式名は「ルシフェリオン星光の殲滅者」

ニックネームと正式名の項目に登録されて設定が終わって

「レヴアンティン」

「ルシフェリオン」

「セットアップ」

私達は光に包まれてバリアジャケットに着替え終わった。

私のバリアジャケットはシグナムと同じだけどアテナのバリアジャケットは少し違っていた。

バリアジャケットはリリカルなのは劇場版 Reflectio nの方で腹出しの半袖だった。

「次は私ね」

優香は「シウルシヤガナのギアペンダント」を見つめていると

「……!?!」

何かに驚いて少し考えて

「Various 純真shul 突立shagana 牙tron」

月読調と同じ起動聖詠を歌うと優花の身体が光に包まれて変身が完了した。

カラーは月読調と同じピンクだったが月読調とは武装は少し違っていた。

ツインテールの部分はマフラーになって居て足元は形状が少し丸みを帯びていた。

「最後に私が」

香織が「マジカル注射器」を高く上げると「マジカル注射器」から光の帯が溢れ出て香織の身体を包み込んで魔法少女になった。

此方もウオーナーズ☆くるみと同じナーズ服だが色が白かった。

「皆大分が変って居るね」

「まああたし達はあたし達だからな」

「うん少し違っていてもかもしれないからね」

「まあ、結果は見ての通りね」

「だな」

私はシアと書かれている付箋が張って居る箱を開ける。

「トツキユウチェンジャー」と「イエローレッシャー」が入って居た

「はいシアの分」

私はシアに箱ごと渡した。

「これが私のアイテム……」

シアはハジメに近づいて

「あ、あの……ハジメさん付けてくれませんか？

私此れの付け方知らないのよ」

シアは顔を赤くして頼んだがハジメはめんどくさい顔をして

「そんなもん腕に括り付けければ簡単だろ。」

俺が付けなくても良いだろ」

「うん、そうだね。」

私が変わりに付けてあげる」

香織はシアの腕を鷲掴みして

「痛い痛いです」

香織さんストップですう」

シアがそんな事を言っている間に

「はい付け終わった」

シアの腕に「トツキユウチェンジャー」を取り付けた

「ハジメさんに取り付けて欲しかったですう」

シアがそう言うと

「シアちゃん、何か言ったかな？」

黒い笑顔をしながら大型「マジカル注射器」を取り出した。

「いえ、何も言ってますん」

直ぐにそう言う

「それで変身方法を言うね」

「はいですう」

「先ず「トツキユウチェンジャー」の金色のボタンを押してレバーを上
げて」

「はい」

シアは私の言う通りに「トツキユウチェンジャー」の金色のボタンを押してレバーを上げた。

『変身致しまゝす 白線の内側に下がってお待ちくださゝい』

音声と共に、シアの足元から白線が出現する。

私達も私はシアの方の白線まで下がり皆はシアの向こう側の白線まで下がる

「次にトツキユウチェンジを言つて「イエローレッシャー」を「トツキユウチェンジャー」にセットしてレバーを下げれば変身が完了するから」

「はい、分かりました。」

トツキユウチェンジ！

シアは「イエローレッシャー」を「トツキユウチェンジャー」にセットし、レバーを下げると体が光に包まれ、変身を完了させた。

『トツキユウ3号』

「初変身ですう！」

初の変身にハイテンションになつて居た。

私は其れを他所に段ボールの最後にユエ宛の箱を取り出して

「はいユエちゃんの分」

「うん、ありがとう」

ユエは箱を受け取つて開けるとルービックキューブの様な物が入つて居た。

「ヨクアイ、此れ何？」

「えつと確か……ハジメ君」

私はハジメを呼ぶ

「うん、何だ？」

ハジメはこつちに来て

「此れつてもしかして」

「……ああ、間違いない」

「痛いのは嫌なので防御力に極振りしたいと思いますの……」

「神々の叡智」だな。

ユエにピッタリな奴だな」

「そうなの？」

「ああ何せ……」

「皆さん着替え終わりました」

ハジメが喋っている最中に着替え終わった雷槍がこっちに来た。

私達は雷槍を見る

服のデザインはガンヴォルトと同じだった

見られて居る雷槍は

「皆さん時間大丈夫ですか？」

「……………時間？」

私達は思わず素で返した。

「集合時間ですけど」

「……………あ！……………」

思い出して

「雷槍君、時間は」

「はい」

雷槍「ストラーダ」で時間を確認して

「後三分です」

「…………………………」

私達は固まって

「直ぐに戻ろう」

私は変身を解除した。

「……………了解……………」

皆も変身を解除して

『レポート ナウ』

ユエの転移でブルツクに戻った

馬車旅

私達はブルツクに戻って急いでモットー・ユンケルの商隊の元に戻った。

如何やら私達が最後までいただったので直ぐに出発した。

ハジメはユエが手に入れた「神々の叡智」の使い方を教え香織は其れを見つめる。

シアは仲間はずれして落ち込んでチロルが慰めている

アテナと雷槍は「ルシフェリオン」を使ってシユミレーターをして居る。

牙十郎は優花の膝枕で寝ている

私と黒花は馬車の上で風に当たりながら過ごし、他のメンバーは馬車の中で過ごした。

暗くなる同時に停まって野営の準備に入った。

野営の準備を行っている中でハジメはモットーに問いかける。

「今日はどれくらい進んだ？」

「大体三分の一ってところですか。」

「順調に行けばあと4日で着くでしょう」

「結構かかるな」

魔力駆動二輪や四輪などを使えば一日で着ける距離だっただけに思った以上のスローな移動に小さくため息をついたハジメ。

「馬車旅は基本こんなもんだから気長に行こう」

「そうだな」

「因みに食事は如何されるおつもりで？」

「一応食料の販売もしてはいますが…」

流石商人。

「こういう細かい所でも商売を忘れない。すると、

「ああ…そう言った事は心配いらない」

ハジメが視線をシアと優花に向ける。

私はハジメがやる事に気が付いて

「ち、ハズ…」

止めようとするがシアと優花の目の前に食料の入った袋が現れた。
ハジメが宝物庫から取り出したものだ。

「頼んだぞ食事係」

「お任せくださいーい！」

「了解よ」

シアと優花は離れて私は

「馬鹿ハジメ」

「いつて！」

武装色でハジメの頭を殴る。

「翼愛、行き成り何するんだ！」

「いや商人が居る前に其れ使う」

私はモットーに指を指す。

「商人…？」

ハジメは私が指を指した方を見る。

モットーは目を真ん丸にし口を開けて唾然とするしかなかった。

モットーが再起動すると

「なっ…何ですかその道具は!？」

モットーは絶叫する

「あっ…」

自分の失態に気付いたハジメが声を漏らす。

「別に隠すつもりは無かったが…」

「いや隠しなさい」

「宝物庫って言うアーティファクトだ。」

「見ての通り好きな物を出し入れ——」

「言い値で買う！」

「いくら欲しい!？」

ハジメが言い終わる前にモットーはハジメに詰め寄って叫んだ。

宝物庫と言うアーティファクトは正に商人にとっては夢のアイテムである。

馬車代、馬代、護衛代、人件費削減などが大幅に削減できる道

具だ。

商人にとつては垂涎ものだろう。

ハジメは目が血走ったモットーに一晩中質問攻めにされることとなった。

翌日

ハジメは馬車の中で香織に膝枕されながら眠そうにしていた。

私、黒花、シア、チロルが馬車の屋根の上で風に当たりながら過ごして居た

「ハジメさん、風が気持ちいいですよ！」

「ワン」

「バウ」

ハジメにそう言うが、

「ああ、そうかい」

ハジメは興味無さそうに欠伸しながら返した。

「あの後ひたすら質問攻めされて眠いんだよ…」

「宝物庫さえあれば馬車要らずですもんね」

「目が血走ってて気味悪かったぞ」

「そうですね。」

私も少しビビりましたので」

チロルは苦笑いしながら答えると

シアとチロルは街道沿いの森の方を向いてウサミミとイヌミミを向けピコピコと動かすと、のほほんとした表情を一気に引き締める

「何か見つけたの？」

私はそう言うのと

「敵襲です!!」

数は百以上、森の中から来ます！」

警告を発した。

その言葉を聞いた御者は驚愕の表情をして、

「ひゃ、百以上だと!？」

そんな数聞いた事ないぞ！」

「引き返せ！」

「今ならまだ間に合うかもしれない！」

直ぐに手綱を引こうとするが

魔物を見たハジメは、

「あー、このまま進んで大丈夫だぞ」

何でもないようにそう言った。

「何言ってる!？」

魔物が百匹も居るんだぞ!？」

御者は馬鹿かこいつと言わんばかりの表情だ。

確かに普通の人達にとっては低級の魔物百匹でもヤバいらしい。

「私達はもつとヤバい魔物百匹以上に囲まれた事もあるから全然危機感が無い。」

「ハジメ君、私達の間と一般の間とズレて来ているよ」

「そうか？」

私の言葉をハジメは曖昧で返す。

「皆、ここは私に任せて」

ユエがそう言うのと私達が居る馬車の屋根に上る。

ユエは自分の右手に「サンダーウィザードリング」と「グラビティウィザードリング」を手に持ち次に「神々の叡智」を取り出して

「魔導書庫」

ユエがそう言うのと「神々の叡智」が変形してユエの周りに本棚が現れて魔導書庫で作った魔導書を二冊取る

「姿が見えてきましたよー」

シアは慌てて

「「ガルルルル!」」

チロル、ベロ、ベルはう鳴き声を出す

ユエは落ち着いて最初に「サンダーウィザードリング」を待機状態の「ワイズドライバー」に翳す。

『サンダー ナウ』

ユエの上空真上に雷雲が集まり出して

「天灼」

ユエがそう言うのと魔導書が開き魔導書から雷球が出て来て真上の

雷雲と合わさった。

ユエは直ぐに「サンダーウィザードリング」を外して「グラビティウィザードリング」を嵌めて待機状態の「ワイズドライバー」に翳す。

『グラビティ ナウ』

「グラビティウィザードリング」を嵌めている指を天に向けて「禍天」

魔導書が開き魔導書から黒い球体が発射され黒い球体が雷雲に入ると雷雲から巨大な雷の龍が出て来て

「大雷竜」

ユエが天へ向けていた指を魔物の群れに向かって振り下ろすと、巨大な雷の龍は魔物の群れに襲い掛かった。

雷の龍は魔物達を一瞬にして蹂躪して消し去っていく。

利用した魔導書は消滅すると同時に本棚を消して「神々の叡智」を仕舞って「ディフェンドウィザードリング」を取り出して「ワイズドライバー」に翳す。

『ディフェンド ナウ』

魔法障壁を張った。

周りの人達は魔物が居なくなっただけで必要ないと思われるが私にはこの後に何が起こるのか分かる。

魔法障壁を張った直後に音と爆風がソニックブームとして遅れて襲って来た

ユエが魔法障壁を張ってくれたお陰で損害は無いけど森の大半を炭素かしていた。

「……………」

「おいおい……」

あんな魔法俺も初めて見たぞ」

「多分「神々の叡智」と「ワイズドライバー」を利用した合成魔法でしょ？」

「正確には複合魔法

私のオリジナル

雷属性の魔法にライセンスで手に入れた重力魔法を組み合わせ

みた」

ユエは後ろを向いて

「更に昨日ハジメが教えてくれた「神々の叡智」の魔導書庫は魔法をス
トック出来るから其れを使えば二倍になる」

ドヤ顔をする。

その後も魔物の襲撃はあったが私達が一瞬で片付けるので特に問
題なく進み、目的地であるフューレンが見えてきた。

「ハジメさん目的地が見えてきましたよ」

「やつとか…」

ハジメは飽きてきたのか欠伸して

「ハジメ殿、ヨクアイ殿、着く前に宜しいか？」

モットーが馬車を操作しながら話しかけて来た。

「出発前に話したその兎人族と犬人族、宝物庫。

やはり売る気はありませんかな？」

「またその話かよ。」

いい加減しつこいぞ」

ハジメは鬱陶しそうに言い。

「すみません仲間を売るつもりは有りません」

私は丁寧 to 答える

しかしモットーは話を続け、

「一生遊んで暮らせる金額をお支払いしますよ。

特に宝物庫は個人の手に余る代物。

この先厄介な事になるかもしれないぞ？

例えば彼女達のみにか起きたり…」

脅しとも取れるその言葉に、私は空気が一変したのを感じる。

私は馬車の屋根を飛び降りてモットーが手綱を握って居る馬の上に
着地して

「ヨクアイ殿!」

その間にもモットーの視界から、ハジメ、香織の姿が消えていた。

其れに気が付いたモットーは

「……………」

あれ…何処に……」

次の瞬間、

『font:ul20』Schlange, beissen!『/font』
『ガキン』

行き成りモットーの周りに金属音が響いてモットーは慌てて周りを見ると

「何故邪魔をする？」

翼愛」

「いや、腐っても私達の雇い主だから守る義務が有るから

其れに脅しをするなら弾と刃を抜いて殺意で脅しなさい

ハジメ君、牙十郎君、香織ちゃん」

私が「レヴァンティン」の蛇腹剣でハジメと香織の銃を縛り上げて

「音銃剣錫音」で牙十郎君の「日輪刀」と鏢迫り合いで抑える。

「そうか」

ハジメ達の殺気がさつきよりも拳がって来る。

あんまりの殺気に馬の歩行速度が大分落ちて来た。

「それで、それは宣戦布告と受け取っていいのか？」

「心配しなくても身を守る位の強さは身に着けているつもりです。

それでもハジメ君の敵に回るのなら容赦はしません」

「会長の命が無くとも俺は優花に手を出すものは切り捨てるつもりだ」

三人の殺気と威圧を受けて、モットーは慌てて取り繕った。

「ひっ…ち…違っ…！ わ…私はあなたがそれを隠そうとしていないので…可能性としてそういう事もあると…たっ…ただそれだけで…」

嘘か本当かは分からないが、モットーは完全に委縮してしまっている。

「と言って居るけどどうするのハジメ君？」

私の言葉を聞いたハジメはモットーは私達に敵意が無いと判断したのかハジメは殺気を収めた。

「……………ならそう言う事にしておこうか。」

だが、敵意を持って俺達の前に立った時は、ただの1人も生き残れると思うなよ」

忠告の意味を込めてハジメはそう言った。

その後、街に到着すると、

「では、私は手続きがあるのでこれにて」

「ああ」

「とんだ失態を犯しました。」

「ご入用の際は是非我が商會を」

「だったら何か手土産を持ってきたら私達を支援して下さい」

「其れは…喜んで受け溜まりましょう」

「なら…」

私はモットーに近づいて腕に抱きついて

「え…な、何よ?」

「良いから『シャルル』」

『はいシャル』

『「ラブコミュニケーション」の状態の写真撮影』

『分かったシャル』

『その後空間魔法の中で小型プリンターで写真作成』

『それも分かったシャル』

「其れじゃあこれ見て下さいね」

私は「ラブコミュニケーション」を持った右手を真上に上げて

「此れですか?」

モットーは釣ら得て真上を向いたと同時に

「パシャー!」

シャルルがシャツタを切った

次に私の真横に空間魔法陣が現れて私は其処に手を入れて万年筆とさつき取ってプリントアウトした写真を取り出して万年筆で文字を書く

「はい、モットー此れにサインして下さい」

写真と万年筆を差し出した。

「ああ、成程分かりました」

モットーは私が行った行動の意味を理解して写真と万年筆を受け取りサインする。

「此方になります」

私は受け取りサインを確認するしつかりとモットー・ユンケルが抱えていた。

私は写真を空間魔法陣に入れて

「其れじゃあいつかは頼みましたよ」

「はい」

モットーから離れて皆に合流した。

フューレンで騒動

フューレンに辿り着いた私達は周りの男達の視線がこちらに集中しているが私達は無視して適当に軽食屋で食事して居た

「人の数が凄いな」

「流石大陸一の商業都市だ」

先ずは人の多さに驚く。

ブルックとは比較にならない人口の多さ。

「これ食ったら一先ずギルドで依頼完了の報告と宿探しをするぞ」

ハジメがそう言うと、

「了解、其れとギルドで宿探ししない？」

私が提案すると

「其れ良いな流石に今日来たばかりの街じゃ分からないことが有るか
らな」

アテナが代表で答えた

「またお風呂がある所が良い。

勿論混浴で貸し切り出来る所」

「私は4人で寝れるベッドが良いです！」

ユエとシアは要望を口にする。

驚くことに、シアの言葉に香織は何も言わなかった。

香織も大分シアの事を認めと思っ居ると

不意に周りの男性よりも強い視線を感じた。

特に女性陣に対しては今まで一番不躰で、ねっとりとしたが向け
られている。

こういった視線に慣れていた女性陣だったがあまりに気持ち悪い
視線に僅かに眉を顰める。

私は気になって椅子を後ろに傾けて目を凝らして視線の先を辿る
と太ったボンボン^{オー}が居た。

肥えた体に脂ぎった顔、豚鼻と頭部にちよこんと乗っているベツト
リした金髪。

身なりだけは良いようで、遠目でもわかるほどいい服を着ている。

そんなブタ男が女性陣に欲望に濁った瞳で凝視していた。

「ハジメ君」

私がそう言うとハジメはコーヒーを飲んで

「ああ、分かって居る」

「コーヒーカップを置いた。」

オーク^{男性}は、私達のテーブルのすぐ傍までやって来ると、ニヤついた目でユエ、シア、香織、私、黒花、アテナ、チロル、優花をジロジロと見やり、シア、チロルの首輪を見て不快そうに目を細めた。

そして、今まで一度も目を向けなかったハジメ、雷槍、牙十郎にさも今気がついたような素振りを見せると

「ひゃ、100万ルタやる。その兎と犬をわ、渡せ。」

そ、そっちの女共は私の妾にしてやる。

い、一緒に来い」

これまた随分と傲慢な態度で一方的な要求をした。

ハアハア言いながらそういう男性^{オーク}に女性陣は気持ち悪さに一気に引いた。

男性^{オーク}が女性陣に触れようとした瞬間、ハジメ、雷槍、牙十郎がその男を睨み付けると同時に三人分の凄絶な殺意が降り注いだ。

「ヒイヒイヒイヒイッ!!?!」

そんな男がハジメ達三人分の殺気に耐えきれぬわけもなく、情けなく悲鳴を上げて尻餅を着きお漏らしまでしている。

直ぐにアンモニア臭が鼻に来た。

周りに人達はそそくさに離れ始めた。

「…場所を変えよう」

ハジメは鬱陶しそうに舌打ちするとそう言って立ち上がった。

「確かにアンモニア臭がね」

私も立ち上がり直ぐに皆も立ち上がった

「良いんですか?」

街中であんなに殺気を…」

シアが声を掛けると、

「いいんだ。」

周りの視線も鬱陶しかったからな」

私達がその場を離れようと歩こうとしたら

「ま…待てクソガキィ!!」

その男は私達を呼び止めた。

「レガニド!!」

あいつ等を殺せ!

私を殺そうとしたのだ!」

とは言え、自分で立ち向かう気概が無いのは見て分かる事。

近くに居た冒険者らしき男にそう叫んだ。

「坊ちゃん、流石に殺すのはヤバいですぜ」

「い、いいからやれえ!!」

「つたく、報酬は弾んでくださいよ」

口では諫めている物の、貴族? 男の言葉を強くは止めない冒険者の

男は私達の前に立ちはだかると、

「そういうことだ。」

何、殺しはしねえよ。

悪いが女の事は諦めてくれや」

自分の実力に自信があるのか、堂々とそう言って来た。

すると、周りの人々からの声が聞こえる。

「あいつ…『黒』のレガニドだぞ」

「マジかよ!?!」

金次第であんな奴の護衛もするのか…」

どうやら目の前の男は冒険者ランクは上から3番目の黒でそれな

りに有名な冒険者らしい。

ハジメが仕方なく相手をしようとした時、

「ハジメ君。」

私が相手をするよ」

香織がそう言った。

「香織?」

ハジメが何故と尋ねると、

「私が戦えるって事を周りに示せば、変な事を考える人も減ると思う

の」

「ふむ……………」

香織の言葉にハジメが腕を組んで考えると、

「そういうことなら任せた」

「うん！」

そう言っつて香織はレガニドの前に立つ。

「おいおい、嬢ちゃんが相手だっつて!？」

中々笑わせるじゃねえの」

その言葉に香織は杖を構えて

「怪我をしても私が治すから安心して。

報酬は諦めてもらおうけど……………」

「……………本気で言っつてんのか？」

俺はランク『黒』だぞ」

「私の天職は治癒師。

冒険者ランクは青。

パーティーの中の直接的な強さだけで言えば最弱だよ」

確かにギフト抜きで模擬戦すれば確かに香織は最下位だからね

「おいおい、ランク青で治癒師だっつて?」

レガニドは馬鹿にしたようにそう言う。

「レ、レガニド傷付けるなよ！」

その女共は私のだ！」

「へいへい、分かっつてますよ坊ちゃん」

レガニドは返事をする、香織に向き直り、

「嬢ちゃん、夜の相手ならしてやってもいいぜ」

「あ……………」

レガニドのその言葉に隣のハジメが青筋を立てた。

「ハジメ君落ち着いて」

私はハジメを落ち着かせて

「悪いけど、私には心に決めた人が居るの。

ハジメ君以外に抱かれるのは絶対嫌だよ」

香織は照れもせず真面目に言い返す。

「そうかい……残念だがその彼とは今日でお別れだ。運が悪かったと思つて諦めな！」

その言葉と共に、一気に間合いを詰めるレガニド。

一応言われた事は守るつもりなのか、素手で抑え付ける気の様だ。だが、白崎さんはその動きをあつさりで見切つて回避する。

「何っ!？」

余裕で制圧できると思つていたのか驚愕の声を漏らすレガニド。

「腰の剣を抜かなくてもいいの？」

手加減はするけど危ないよ?」

香織がレガニドの腰に有る剣を指を指しながらそう言うと、

「治癒師如きが大きく出たな！」

坊ちゃん、悪いが傷の1つや2つは勘弁ですぜ！」

頭に來たのか叫びながら剣を抜く。

先程とは違い、油断をしてないのか構えに隙が無い。

次の瞬間には、一気に飛び掛かつてきた。

一撃で武器を弾き飛ばして戦意を喪失させようとした攻撃。

しかし、白崎さんは片手でそれを簡単に受け止めて防いだ。

「何だ!?」

レガニドが驚愕する。

その間に香織は剣をデコピンで弾くと剣の刀身は簡単に折れて

香織は直ぐに其のまま杖を振りかぶり、

「ふっー！」

無造作に薙ぎ払つた。

「ぐはっ!？」

その一撃で吹き飛ばされたレガニドは建物の壁に罅が入るほどの強さで叩きつけられ、内臓にダメージを負つたのか口から血を吐く。

近付いてくる香織を見てレガニドは、

「…なるほどな。どうやら俺が間抜けだったらしい」

レガニドは実力の差を思い知つたと大ダメージで動こうとしない。

目の前まで歩いてきた香織に、レガニドは諦めた様に項垂れると、

「天の息吹、満ち満ちて、聖浄と癒しをもたらさん

天恵」

香織は初級の回復魔法でレガニドを全快した。

「なっ!？」

あれだけのダメージが一瞬で……!!

今のは初級回復魔法の天恵だろ!？」

白崎さんの回復魔法の凄まじさに驚くレガニドに、

「まだやりますか？」

私は何度やっても良いですよ？

ただし」

香織は「LBCS、オーディーンMk-2」を取り出して

「手加減はしませんから

大丈夫ですよ何度でも治してあげますから安心してください」

そう言つてニツコリと笑う香織にレガニドは冷や汗を流し、

「冗談じゃない……………」

両手を上げてもう敵意が無い事をアピールする。

「悪いが坊ちゃん、この依頼はキャンセルだ。

いくら積まれても割に合わなさすぎる」

体は回復したとはいえ、実力の差は十分と言えるほどに身に染みたようだ。

其れを確認すると私は皆にハンドサインで「銀魂、松平片栗虎」で送ると私、ハジメ、黒花、アテナ、雷槍は其々の銃を取り出して男に近づく

「ひっ！ ひいひいひいひいっ!! く…来るなあ!!」

その男は腰を抜かしながら狼狽える。

「わ、私を誰だと思ってる! ミン男爵家のプーム・ミンだぞ! 私に逆らったら…」

男が喋っている最中私は銃になつて居る「音銃剣錫音」を発砲して男を黙らせる。

「三秒以内に土下座しないとハチの巣にするよ」

私はそう言つたとハジメ、黒花、アテナ、雷槍は其々の銃を構えた。

私は確認すると

そう言われたので、私達はステータスプレートを差し出す。

「…非戦闘職の錬成師、治癒師、投術師、弓士、魔導士、騎士、剣士、ヴァルキюри？聞いた事の無い天職もありますか？」

騎士と剣士以外直接的な戦闘に向かない職ばかり…しかもランクは『青』……妙ですね、あちらの彼はランク『黒』なんです……ギルド職員に視線を向けられたレガニドは冷や汗を流しながら顔を背ける。

「そちらの3人もステータスプレートを宜しいですか？」

ギルド職員はユエ、シア、チロルの方を向いてそう言う。

「ああ、彼女達はプレートを無くしちまってな。

再発行はしてない…アレ高いだろ？」

ハジメは尤もらしい言い訳を言が

「でしたらギルドで立て替えましょう。

事情聴取もそちらで行います」

見事に言い捲られた。

流石に時間を掛けたくないから

「ハジメ君、キャサリンさんから貰った手紙を出す」

「ああ、あの手紙か…」

ハジメも言われて思い出したみたいで

「……こんな事ならさっさと中を見ておくべきだったな。

翼愛、頼んだ」

私はハジメの許可を貰って手紙を取り出すとギルド職員に、

「ギルド関係の揉め事が起きた時にギルド職員に困ったら渡せば解決すると私の知り合いの伝言です」

目の前のギルド職員はその手紙を受け取り、

「……拝見します」

その手紙に目を通した瞬間

「…!？」

目を見開き明らかに顔色が変わった。

「……これは…支部長に連絡を入れろ！

客人を迎える準備もだ!!」

大慌てで部下たちにそう指示する。

「…マジで何者なんだよあのオバサン…」

俺がそう呟いて。

「さあ、でも言える事はギルドの上層部の人間かな？」

私は答えた

依頼と交渉

ギルド職員にキャサリンから貰った手紙を出したらギルドフューレン支部に連れて来られて支部長室に通されると向かい合ったソファーで金髪をオールバックにした鋭い目つきの男性

「冒険者ギルドフューレン支部へようこそ。支部長のイルワ・チャングだ」

イルワと対面する。

「此方こそ初めまして私は…」

自分の自己紹介をしようとしたが

「ああ、大丈夫だよ。」

君達の名前は把握しているよ、ヨクアイ君」

「そうですか」

「ああ無論他も把握して居る。」

ハジメ君、カオリ君、ユエ君、シア君、クロカ君、アテナ君、ライヤリ君、キバジユウロウ君、カオリ君、チロル君とベロとベルであつて居るかね?」

「はい、あつて居ます」

「其れは良かった」

「所で私達の名前はあの手紙に書いて居ましたか?」

特にベロとベルも知つて居ましたし?」

「ああ、もちろん先生からの手紙に書いてあつたよ。」

将来有望、ただしトラブル体質なのでできれば目にかけてやって欲しいという旨の内容だったよ」

「あの………キャサリンさんって何者なんでしょう?」

シアが若干遠慮がちにそう質問した。

「おや、聞いてないのかい?」

イルワは突然懐かしそうな顔を見ると、懐から一枚の紙を取り出す。

「………彼女は素晴らしい女性だよ」

そう言いながらその紙を机の上に置く。

それは写真だった。

異世界は魔写や写し絵と呼ばれている
写真に写っていたのは、髪の色と顔の面影から10代後半の青年と、20代半ばと思われる女性が映っていた。

上半身しか映っていないが容姿端麗でスタイルも抜群に良く、可愛いというよりも、美しいと言った方がしっくりくるタイプの美人だ。

「王都のギルド本部ギルドマスターの秘書長だった人さ。」

辞めた後もギルド運営に関する教育係になってね。

現ギルド支部長の大半は彼女の教え子なんだ。

隣にいるのが若い頃の「ちよつと待て」わたくし

イルワがそう言いかけた時に我慢できずにハジメが突っ込んで

「誰だそれは?」

ハジメは質問して

「まさかと思いますが昔のキャサリンさんですか?」

予想を立て

「その通り、当時のキャサリン先生だが?」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

その言葉に私達全員が沈黙しながら写真を見る。

「美しさと人柄で僕らの憧れの存在だったよ。」

結婚して田舎へ転勤になった時は王都中が大荒れさ」

そう続けるイルワだったが、私達にはこの写真の美女と、何処かの食堂で働いてそうな恰幅のいいあのキャサリンが同一人物とはどう

しても思えなかった。

「そ…:…:…:…:…:…:…:」

「…:…:…:…:…:…:…:」

それはそうと、さっきの件は大丈夫なのか?

問題が無いならもう行きたいんだが…:…:…」

ハジメは目の前の現実を否定する様子を話を変えた。

「ああ、彼女の紹介なら身分証明は問題ない」

「なら…」

「その前に「ついでかい?」」

「構いませんが」

「ならドット君あれを…」

「はっ」

イルワがさっきのギルド職員、ドットに話しかけた。

そのドットという男性が俺達の前に1枚の紙を置く。

「…こちらをご覧ください」

「…依頼書ですね？」

「ああ、君達の腕を見込んでの依頼だ」

イルワが依頼の提案をした瞬間

「ことわ…」

ハジメが被せるように断りながら席を立と瞬間私は止めて

「ハジメ君、取り合えず話だけでも聞いた方が良いと思うよ？」

「ですよ？イルワ支部長」

「ああ、聞いてくれるなら、今回の一件は不問にしようと思っている」

イルワの言葉に思わず

「…ちっ」

ハジメは舌打ちをしながらソファアに座った。

「聞いてくれるようだね。ありがとう」

「あくまで聞くだけです。」

ハジメ君にも言った通り、依頼を受けるか受けないか聞いた後で報

酬と一緒に決めます。

それと受けるのを断ったからと言って、不問の件をなしにするのは

通用しませんからね？

「この場にいる全員が聞いてますし」

私は「レヴァンティン」を取り出して

「この通り言質も取ってありますので」

空中にディスプレイを展開してさっきまでのイルワの姿を再生し

て、この場にいる全員に聞かせた。

「いい性格をしているね」

「ええ、お母さんとある人に教え込ましたので。」

「其れで依頼とは？」

私は依頼書を取った

「うむ、今回の依頼内容だが、そこに書かれている通り、行方不明者の捜索だ。」

北の山脈地帯の調査依頼を受けた冒険者一行が予定を過ぎても戻って来ない」

「えつと捜索対象は冒険者の1人、ウィル・クデタ。」

クデタ伯爵家の三男ですね？」

「ああ、彼はいささか強引に同行をしてしまつてね」

「それは肌で感じさせる為にその依頼に組み込んだですか？」

「ああ、話が早くて助かる。」

それで捜索するにも、北の山脈地帯は1つ山を越えるとほぼ未開の地だ。

強力な魔物も出没している。

並の冒険者じゃ二次被害になる。

そこで君達に——」

そこまで言つた所で

「おいおい待ってくれよ！

何か勘違いして無いか？

俺達はランク『青』だぞ!？」

ハジメが口を挟んだが

「その言い訳はもう通用しないから」

私がそう言う

「彼女の言う通りだ。」

さつきそちらの彼女が『黒』を瞬殺したばかりだろう。

彼女の言つた事が本当なら彼女は君達の中では最弱だそうじゃないか。

わざとらしい芝居は止めてくれたまえ」

「ですね」

「お前はどちらの味方だ」

「まあ、今は君達しかいないんだ。引き受けては貰えないだろうか？」

「そう言われてもな…」

ハジメはぐもった声を出して

「俺達にも目的がある。」

そんな貴族の坊ちゃんに使う時間は無いんだ」

「…では君達のランクを一気に『黒』まで引き上げよう。」

普通なら滅多にあり得ない事だがどうだ？」

「いや、ランクなんてどうでもいいんだが…」

「そもそも、ギルドに登録した理由が魔物の素材をちよつとよりも高くするつもりでしたし」

「なら今後、ギルド関係の揉め事には私が後ろ盾となろう。」

ギルド全体でも相当の影響があると自負してるよ」

「…随分と気前が良くなったな」

「其処まで来るとただの貴族のご機嫌取りじゃなくて私情を挟んでい
ますね」

「…ああ此れは私の私情だ。」

伯爵とは個人的に仲が良くてね。

同行パーティーに話を通したのは私なんだ。

確かな実力のあるパーティーだから問題無いと思った。

さつきヨクアイ君が言った通り同行させてウイルに厳しさを教え
ようとしたんだが…

それがこんなことになるなんて……………」

イルワの独白を聞きながら、私は僅かに思案する。

思っていた以上に、イルワとウイルの繋がりは濃いらしい。

すまし顔で話していたが、イルワの内心はまさに藁にもすがる思い
なのだろう。

生存の可能性は、時間が経てば経つほどゼロに近づいていく。

無茶な報酬を提案したのも、イルワが相当焦っている証拠なのだろ
う。

「どうするハジメ君？」

私がそう言うのと

「……………そこまで言うなら2つ条件がある」

ハジメが口を開いた。

「1つ、ユエとシアとチロルのステータスプレートの作成。
その表記について他言無用を確約する事。

2つ、ギルド関連を含むすべてのコネクションを用い、俺達の要求に応える事」

「なっ…!?!」

何を…言っているんだ…君は…」

イルワはハジメの提案に驚いてたじろぐ、ていた

私は直ぐに

「そう言えばキャサリンさんにはステータスプレートを見せていませんでした。

黒花、改ざん無しで表示して」

「はい、分かりました」

黒花は自分のステータスプレートを机に置いてイルワの前に滑らせた。

イルワは黒花のステータスプレートを見ると

「なあ?!」

確認し絶句するイルワ。

「確かに此れはあり得ないな…そういうえばハイリヒ王国の勇者一行の中に…」

その瞬間、私の隣に凄まじい圧がイルワを撃った、詮索無用でしよう、という意味を込めて。

「わ…わかった、約束は守る。

確かにキャサリン先生が認めるのも分かる」

「物分かりが良くて助かるよ。

依頼の方は任せてくれ」

ハジメは依頼を承諾して私達は支部長室の扉に向かう。

「分かっているとあなたが犯罪に加担する要望には応えられない」

「ああ、それでいい。

依頼は本人か遺品を持って帰ればいいだろ?」

「ああ…どんな形であれ痕跡を見つけて欲しい。

ハジメ君、カオリ君、ユエ君、シア君、クロカ君、アテナ君、ライ

ヤリ君、キバジュウロウ君、カオリ君、チロル君とベロとベル」

私とハジメはイルワと握手して

「…どうか……よろしく頼む」

私達は支部長室を出てその後ギルドカウンターで支度金や北の山脈地帯の麓にある湖畔の町ウルの情報と紹介状、件の冒険者達が引き受けた調査依頼の資料を受け取り、ギルドから出て湖畔の町ウルへと出発した。

再開

現在、私達はハジメが運転する魔力駆動四輪で街道を爆走していた。

元々この世界に法定速度など存在しないが、それでもスピードの出し過ぎだという事が一目でわかる。

しかし、その事でハジメを咎めようとする者はいない。

何故なら、

「ヒヤッハーハー……！」

米だ米だ！

白飯だ……！！」

ハジメが世紀末なテンションで叫ぶ。

そう、イルワから貰った情報ではこれから向かう街、『ウル』では稲作が盛んであり、日本人である私達の主食である白飯が食べられるという事だ。

一回トイレ休憩して地図を確認する。

「このペースなら北の山脈まで半日ってところだ。

着くころには日が沈む。

ウルで一泊して早朝から搜索を始めよう」

「ハジメ…積極的？」

ユエが今回の依頼にハジメが積極的に動いている事に疑問を思っている

「多分ギルドに恩を売りたいんでしょ？」

「まあ翼愛の言う通りだ。

せつかくギルド後ろ盾になってくれるんだ。

生きてた方が感じる恩は大でかいだろ？」

「…なるほど」

地図を確認を終えてハジメと香織が鼻提灯を出しながら寝ているシアのウサミミをモフモフしてからシアを起こして移動を再開した。

移動

私達が湖畔の町ウルに到着して

この町の名所になっている湖を見ている。

「湖畔の町ウル、綺麗な所ですねー」

「ん…」

「そうだね」

「そうだ。」

皆記念に写真撮らない？」

私は液晶画面が付いて居るインスタントカメラと三脚を取り出す。

「お、良いな其れ」

「私も賛成です」

「右に同じく」

「牙十郎も」

「ああ」

「横に失礼します」

「ワン」

湖を背景に皆が集まり

私は三脚を立てさせてインスタントカメラを固定した。

最後に

「おーいそろそろ飯に行くぞー」

「ハジメ君丁度良い所に。」

記念撮影しろ」

「ふうー分かった」

ハジメが皆の所に行き其れを確認して私はインスタントカメラの

タイマー機能を入れて

「シャルルも！」

「はいシャル」

シャルルが人になって、皆驚いたが私達は皆の所に行つて。

「ハイチーズ」

私がそう言うのと

「パシャ」

と音がしてインスタントカメラからフィルムが出て来た。

私は確認すると

「バッチリ取れているよ」

そう言う

「そんじゃあ気を取り直して飯に行くぞ」

私達はハジメの言う通りにイルワに紹介した宿水妖精の宿に移動した。

水妖精の宿に着くと同時に受付にイルワから貰った紹介状を出した。

受け取った受付嬢は直ぐに理解して

「水妖精の宿にようこそ

此方が皆様がお使いになる部屋の鍵になります」

受付嬢は鍵を出して

「有り難うございます」

私が受け取り

ハジメが久しぶりの米なので我慢できずに

「ああ、食事したいんだけど席は空いて居るか？」

そう言うと

「はい皆様の為に個室を用意しています」

私は受付嬢の後を歩く

不意にユエが

「ハジメ」

「うん何だ？」

「此処に来る前に叫んでいたのはどうして？」

ユエが前々から思っていた疑問を質問する。

「ああ、それか

実はなこの町はさつき見た湖のお陰で稲作が盛んらしい」

「…稲作？」

「おうつまり米だ。

俺達の故郷…日本の主食だ

「おお、ハジメ達が居た。

世界の食べ物…」

「同じものはかは分らないが」

「モドキならあると思うよ」

「だな」

「なら私ハジメさん達が食べて居たもの食べたいです！」

「ん…私もハジメ達が食べてたものが気になる…」

歩きながら会話して居ると私達の後ろのが勢いよくを明け放たれて

「す…すみません!!」

「今なんて…」

非常に聞き覚えのある声と、聞き覚えはあるが懐かしい声で呼びかけられて私達は思わず振り返ると

「南雲君!?!白崎さん!?!園部さん!?!牙十郎君!?!翼愛さん!?!アテナさん!?!黒花さん!?!後雷槍君であって居ますか!?!」

見た目は子供だがその実25歳で教師という大人な女性の畑山愛子が居た。

思わず

「「「「「先生(愛ちゃん)?」「「「「「」」」」」」」

「…はい会っています?」

答えてしまい

「南雲君…!!やっぱり南雲ハジメ君ですよね!?!」

「いえ、人違いです。」

では」

ハジメが厄介ごとは勘弁と言わんばかりに誤魔化して立ち去ろうとした。

「へ?」

ちよつと待って下さい!」

南雲君ですよね?」

先生のこと先生と呼びましたよね?」

なぜ、人違いだなんて」

愛子が南雲の腕を掴んで引き留める。

「てか、何ですかこの腕はあつ!!」

愛子はハジメの腕が義手に気が付いて驚いた

「いや、聞き間違いだ。」

あれは……そう、方言でチツコイて意味だ」

「それはそれで、物凄く失礼ですよ！」

ていうかそんな方言あるわけないでしょう。

どうして誤魔化すんですか？

それにその格好……何があつたんですか？

こんなところで何をしているんですか？

何故、直ぐに皆のところへ戻らなかつたんですか？

南雲君！

答えなさい！

先生は誤魔化されませんよ！」

ハジメは尚も誤魔化そうとしているが

「ハジメ君、黒花、ハジメ君、香織ちゃん、優花ちゃん、牙十郎君だけなら誤魔化しは効くかも知れないけど私、アテナ、雷槍君が居る時点で誤魔化すのは無理だよ」

私はそう言う。

私、アテナ、雷槍はハジメ達とは違って外見は変わっていない。

ハジメは

「ハアア」

ため息を履いて

「あゝゝゝ、久しぶりだな、先生……」

ハジメは苦笑いしながらそう答える。

「やつぱり、やつぱり南雲君なんですね……生きていたんですね……」

「まあな。色々あつたが、何とか生き残ってるよ」

「よかった。本当によかつたです」

愛子は心底ホツとしたように息を吐いた。

すると、愛子は私達の方を振り返り、

「それから……翼愛さんとアテナさんとその弟君の雷槍君……あと、髪と瞳の色など色々違います、白崎さんと園部さんと黒花さんと白狼君ですよね？」

「はい愛子先生久しぶりです」

「おう」

「姉さんがお世話になって居ます」

「はい」

「お久しぶりです、先生」

「お久しぶりです」

愛子が奈落に落ちた私達が欠ける事無く戻って来た事に涙を流して拭いてもう一度こっちを見ると

「そう言えばそちらの初めて見る女の子達は？」

愛子はユエ、シア、チロルの方を見た

「あ！」

私とハジメも思い出して

私は咄嗟に

「黒髪の犬人族はチロルちゃんで、私達の仲間です。

いざこざを避ける為に表向きは奴隷にしています」

私はチロルの右肩を触ると

「あ、はい先程紹介されましたチロルです。

表向きは奴隷ですかヨクアイさん達の仲間です」

チロルが頭を下げると

「そうですか。」

では其方は」

ハジメは良い言葉出ずに

「あ——えっとだな……」

悩んでいるとユエとシアが

「ユエ。」

ハジメの女その2」

「シア・ハウリアですう。」

ハジメさんの女その3ですう！」

勝手にインパクトのある自己紹介をした。

「お、女？」

愛子先生は衝撃を受けた様に膠着して次に震えた。

「おい！」

ユエはともかくシアは違うだろ！」

ハジメはそう口を出す。

「私のファーストキスを奪ったのハジメさんじゃないですか！」

「いや、あれは香織がやったんだぞ」

「いやいやそんな？を言わなくても…」

シアは体をくねくねし始めた

其れを見ていたクラスメイトの奈々、昇、淳史の男子陣が、

「おい聞いたか？」

南雲の女つて言つたぞあの子達」

「くっ…何故だ!？」

俺達には出会いがないのに何故南雲があんな美人の金髪の女の子とウサ耳美少女に…!」

何やら悔しがっている。

「いやちよつと待てお前達。

それ以前にあの子達はその2とその3つて言つたぞ？」

「ハッ!」

「じゃあその1は…」

その視線は自然と元からハジメを気に掛けていた少女へと向く。

その視線に気付くと、白崎さんは苦笑し、

「あはは…ハジメ君の女その1…です」

少し恥ずかしがりながらそう言つた。

「嘘だろおおおおおっ!？」

「二大女神の1人があああああああつ!？」

血涙を流しそうな勢いで叫ぶ男子達。

すると、その叫びで愛子先生が我に返つたのか、

「南雲君？」

「あ、何だ先生…?」

「女の子のファーストキスを奪つた挙句」

「いやそれは此奴g」

ハジメがシアのファーストキスについて説明しろうと話すが

「さ、三股なんて!」

直ぐに帰ってこなかったのは、遊び歩いていたからなんですか!!」
聞く耳を持たず

「お説教ですー」

そこに直りなさい」

宿の食堂の廊下に雷が落ちた。

少し落ち着いて全員個室に移動して私達はメニュー見て私は

「此れ下さい」

「はい畏まりました」

私は先に注文する。

「皆さん、なに、物凄く自然に注文しているんですか!」

愛子のツツコミが炸裂して

「ハッハッハッ皆久しぶりの米料理を楽しみにしていたので大目に見て下さい」

「それは分かりますが」

「代わりに私が答えます。

いいよね? ハジメ君」

「構わないぞ」

「それなら分かりました。

ではハジメ君達は橋から落ちた後、どうしたんですか?」

「えつとですね。

ハジメ君が知恵を振り絞って生き残ったと」

「何故南雲君、白崎さん、白狼君、黒花さん、あと、分かり辛いですか
園部さんも髪が白くなっていますよね? それは何故ですか?」

それから、南雲君の左腕の鎧は何ですか?」

「最初に南雲君の左腕は魔物に襲われた時に食われたみたいで今は義
手です」

「ツ……………!?!?」

流星にその言葉には愛子先生達は絶句する。

私は気にせず

「それからハジメ君達のこの見た目は、魔物を食った結果です」
「なっ!?!」

「本来魔物を食べれば死ぬはずでしたが、ハジメ君が神結晶と言う強力な回復薬を作り出すアイテムを見つけてまして。

そのお陰で何とか死なずに済んだがその代償がこの姿です」

「でも、翼愛さんとアテナさんと雷槍君は外見に変化がありませんが………?」

「私達は魔物を食ってないです。

裏技を使って生き残りました」

「裏技……翼愛さんがプリキュアに変身した事に関係有りますか」

「……はい」

私は少し濁して答えた。

「そうですね」

「………何故直ぐに皆の所に戻らなかつたんですか?」

愛子の質問すると

私は服の左袖口から一枚の白紙のカードを出して

『シャルルカードに後で』
「それはですね……」

『分かったシャル』

私はわざと視線をズラすと愛子先生達は私の方を注目する。

その間にシャルルが空間魔法陣を展開して其処からペンの一部を出して後でを書いた

書き終わると左手で持ち

「うくん」

両手を合わせて背伸びすると同時に周りの皆に見られないようにカードを愛子側の右手に持ち替えて

「ハアー」

脱力する同時にカードを愛子の靴に目掛けて投げた。

投げたカードは弧を描きながら飛んで行き最後の仕上げにかかる

私は唇に人差し指を添えて

「其れは極秘です♡」

可愛らしく答えると愛子は立ち上がると同時にカードは愛子の靴に入って

「此処に来てふさげないで下さい!!」

愛子は少し怒った。

「其れは冗談で今は言えません」

「そう言う事なら先に居て下さい」

愛子が座ると

「うん？」

「どうかしましたか」

「いえ、靴に違和感が……」

「気のせいですよ」

「気のs……」

「お待ちいたしました。

　　ご注文の料理をお届け行きました」

　　ワゴンで料理を持って来た店員が来たので

「愛子先生、質問は此れで満足ですか？」

「あ、はい、満足です」

　　話は終わって注文した料理が机に並びらえた

信頼と侮辱の関係

私達は運ばれた料理が目の前に来て食事を始める。

ふとハジメが

「先生達は此処で何しているんだ？」

「其れは…少し長い話になるけど良いですか？」

「ああ飯食い終わるまでなら良いぞ」

愛子先生と至って普通の会話をして居ると

しかし、ハジメの態度が気に入らなかつたのか、愛子先生の傍らにいたイケメンな男

「おい真面目な話なんだ

ちゃんと聞け！」

叫んだ。

「あ？」

先生なんだそいつは」

ハジメが口にニルシツシルカレールー擬きを含みながら聞くと、

「あつ、紹介しますね。

こちらは私達の護衛隊長をしてくださっているデビットさんです。

聖教会の神殿の方で…」

愛子先生にそう言われると、

「よしてくれ愛子。

俺は神殿の騎士としてではなく1人の男として此処に居るんだ。

愛子の為なら教会の信仰すら捨てる覚悟だよ」

デビットを見て、ベタだと思つて居ると

「はいはい、話の邪魔だ。

黙つてろ」

ハジメが関係無いとばかりにはつきり切り捨てて先を促す。

「食いながらでも良いよな先生？」

デビットはハジメを睨むがハジメはどこ吹く風で

「は…はい私は構いません」

愛子先生の許可も頂いて愛子先生が経理を喋り始めた

「クラスメイトの清水君を覚えていますか？」

「ああそんな奴いたな」

「はい覚えています。」

フルネームは清水 幸利。

性格は根暗でオタク

南雲ハジメの現状を見てオタクをひた隠しにしているので、隠れオタクです。」

「そうなんですか!？」

愛子先生が驚いて居た。

「ハツハツハ、隠れて異世界転生小説を呼んでいた所を見かけましたので」

「そうですか、ゴホン！」

気を取り直して私は作農師としてこの町の農地改革にやって来ました。

清水君はその護衛として同行してくれていたのですが…。

ある日突然姿を消してしまつたのです。

…2週間以上前の事になります。

最初は事件に巻き込まれたのかと思いましたが。

でも彼の部屋は荒らされた様子もなかったですし…」

「その辺りのゴロツキに攫われる程弱くない…か」

「…そうです」

「彼の天職は闇術師です。」

他の系統魔法についても高い適正を持つて居ました。

ただ行方不明になる前から時々姿を消す事が有つて…」

愛子先生が喋っている時に

「ハジメ…このニルシツシルカレって料理美味しい」

「ん…?」

ああウマイよな

俺達の世界ではカレーって料理が此れに似ている」

「うん。確かにカレーに似ているね。」

ハジメ君」

「んう…おいひい…」

「ハジメさん私にも下さい」

ハジメ、ユエ、香織、シアはいつも通りのマイペースに会話しはじめた。

私は他のメンバーを見るとアテナ、雷槍、黒花、チロルは無我夢中で料理を食べて居て優花と牙十郎君はラブラブマシマシで食べて居た。

デビットは其れに我慢できずに

「貴様らっ!! 愛子の話を聞いて居るのか!?!」

椅子から立ち上がった

「翼愛が中心に聞いて居るよ。

つかこつちは食事中だぞ。

行儀良くしろよおっさん」

ハジメはチラリとデビッドを見ると溜息を吐きながらそういった。

「ふん、行儀だと!」

ガキがツその言葉、そつくりそのまま返してやる。

薄汚い獣風情を人間と同じテーブルに着かせるとはな

しかも何だそのふしだらな格好は汚らわしい!!

お前達の方が礼儀がなっていないではないか!!」

その言葉に私達は食事を止めてデビットの方を向く

「デビットさん!

なんてことを……………!」

デビットの物言いに愛子先生も椅子から立ち上がって思わず叫ぶ。

「愛子も教会から教わっただろう。

魔法は神より授かりし力。

それを使えない亜人共は神から見放された下等な種族だ」

「私達と殆ど同じ姿じゃないですか!

どうしてそこまで……………!?!」

あんまりと言えばあんまりな物言いに、思わず愛子が注意をしようとするが、

「ならばその醜い耳を斬り落としたらどうだ。

それなら少しは人間らしくなるだろう」

愛子先生の言葉でも止まらないデビットの言葉。

肝心なシアとチロルは、シアはシヨックを受けているのか俯き気味になっている。

チロルはデビットを睨みながら歯茎を鳴らしながら右手を隠して髪の手操作で鋭利な手を作っている

私達の心は今チロルと同じでゆっくりと怒っている。

私は残っている料理を駆けこんで待機状態の「レーヴァテイン」を取り出す。

皆も其々周りに気が付かれないように其々の獲物を取り出ししている

唯一武器を出していないユエは絶対零度の視線をデビットに向ける。

余波でユエのコップが凍り始めている。

其れに気が付いたデビットは

「何だ、その眼は!!」

デビットは思わずたじろっている間にユエは

「小さい男」

それは嘲りの言葉。

たかが種族の違い如きで喚き立て、少女の視線一つに逆上する器の小ささを嗤う言葉だ。

唯でさえ、怒りで冷静さを失っていたデビットは、よりによって愛子の前で男としての器の小ささを嗤われ完全にキレた。

「神殿騎士を侮辱する異教徒め…その獣風情と一緒に地獄へ送つてやる!!」

ユエの言葉に激怒したデビットは傍らの剣に手をかける。

「デビットさん!!」

相手は子供なんですよ!!」

愛子先生がデビットを止めるが

「女子供とて関係ない」

止まる気配も無く

私は「レーヴァテイン」を握りしめて

「レーヴァテイン」

「ルシフェリオン」

「セツトアップ」

『font:ul20』Einrichtun^{セツ}g『font』

『font:ul20』setu^{セツトアップ}p『font』

バリアジャケット無しで起動したデバイスを握って

「あの世で己の愚かさを——」

言い切る前に私は椅子から立ち上がり

「レーヴァテイン」

言うと「レーヴァテイン」のカートリッジシステムが作動して

『font:ul20』Schlange, deissen!『font』

目にも止まらない速さでデビットに向けて抜刀する「レーヴァテイン」の刀身が蛇腹剣になって「レーヴァテイン」の蛇腹の刀身がデビットの周りを素早く旋回し始めた。

「な、何?！」

デビットが慌てている中「レーヴァテイン」の蛇腹の刀身が十分にデビットの全体に行き渡ると

『font:ul20』Verhaftent!『font』

音声と共に「レーヴァテイン」の蛇腹の刀身が一気にデビットを拘束してから天井に吊るして

「パチン」

アテナかが指を鳴らすと今度はオレンジ色に光る輪っかがデビットを二重で拘束する。

その後皆其々の獲物をデビットに向けた。

「み…皆さん何を…」

「愛子先生すいません。」

先に彼が私達の仲間を侮辱してその上で剣を抜いて来たので殺して欲しいのと思ひまして」

「殺す!?!」

愛子先生は高校に居た頃の私では言わない言葉に驚いて居た。

「突然ですが愛子先生」

「あ、はい」

「今からとある作品に出て来たセリフを言います。」

其れは高校にいた時の私は決して言わない事を言います。

ですがよく聞いて下さい」

「其れは…」

「この世で最も大切なら信頼であるならもつとも言うべき事は侮辱する事と考えている。」

信頼を侮辱するとその人物の名誉を傷つけるだけではなく人生や生活を抜き差しならない状況に追い込んでしまう事

私達は利益や劇場やバスの席で取られたと言っては人と争ったり命を掛けたりしない。

争いは実にくだらんで愚かな人がする事

ですが侮辱する間と言う行為に対しては命を掛けるつもりです。

殺人も神は許してくれると思っている」

私が言いかけたタイミングで皆は殺意を持って武器を構い直した

「そんな事は…」

「現にデビットはユエに侮辱された理由でユエやシア、チロルを殺そうとした。」

其れに違いはありますか？」

「……」

愛子先生は黙ってしまふ

「流石に愛子先生の目の前で人殺しはしませんか。」

けじめはつけてもらいます」

「けじめ!?!」

「雷槍、黒花」

「はい、翼愛先輩」

「分かりました」

黒花は予めに取り出している「ギアトリンガー」に「マジレンジャーギア」を取り出してセットする。

そしてハンドルを回して

『29バーン!』

『ババン!ババン!ババン!ババン!』

と待機音が流れて引き金を引くと

『font:94』ババババーン!マジレンジャー!』

とマジイエローの幻影が現れて其れが黒花の身体に入ると右手に

「マジスティックボーガン」を持って居て其れを構えて

「ジー・ジジル!」

呪文を言いながら雷槍の銃ダートリーダー撃と一緒に撃った。

同時にデビットに着弾すると一瞬で

「!!」

電撃を喰らって発光しながら感電した

「「!?」」

愛子先生達は驚いて居た。

因みにデビットを拘束している私はしっかりと「レーヴァテイン」

を絶縁処理はしている。

そして感電が終わえば私は拘束を解いて「レーヴァテイン」を鞘に

戻す。

拘束されたデビットは黒焦げで口から黒煙を履きながら床に倒れ

た。

「はじめですので加減はしています。

だよね黒花、雷槍?」

「なんでお前が疑問形なんだ」

「だって任せたから」

「一応翼愛先輩がはじめと言ったので加減はしました」

「はい、お姉ちゃんが殺せと命令が無かったので加減しました」

「だそうです」

「いや良くないですよ。」

デ、デビットさん:!?」

お、お願いです白崎さん、治療魔法を…」

愛子先生は慌てながら治療師である香織に助けを求めるが、

「嫌です」

香織は即答した。

「し、白崎さん!？」

断られるとは思って無かったのか、愛子先生は驚愕の声を漏らす。

「私はその人を治したくありません。シアとチロルを侮辱したことは、私も怒ってるんです!」

「…自業自得」

「そう言う事だ」

俺達はあるた達に興味なんかない。

「ここには仕事に来ただけだ」

「そんな私達と一緒に…」

其れでも食い下がらない愛子先生を

「先生!!」

危ないって!!」

奈々が止めた。

私達は立ち上がり

「今後はお互いに不干渉でいこう」

今みたいにな事がまた会ったら次は俺が殺っちまいそうだ」

そう言っって個室を出た。

最後に私が頭を下げて

「失礼しました」

そう言っって扉を閉めた。

廊下を歩いていると

「シア」

「はい…」

「分かって居た筈だろ。」

「気にしていたらキリがないぞ?」

「はい…そのつもりでしたけど…やっぱり他の方々はこの耳は気持ち悪いのでしょうか」

シアが自分のウサ耳について疑問を持って居ると。

「私はシアのウサミミは可愛いと思うよ」

香織がシアのウサ耳を褒める。

「カオリさん……そうでしょうか？」

「神殿騎士は教会の思想を直に受けてる。

流石に一般人であそこまでの奴はツ少ないと思うぞ」

「……そう……でしょうか……」

その……ハジメさんはどう思っていますか……？」

シアは聞きたいけど聞きたくないと言った具合に耳をピコピコとさせてハジメの答えを待つが

「ハジメシアの耳はお気に入り。」

今日もシアが寝てる時にモフモフしていた」

ユエが変わりに答えた

「ユエツ!？」

それは言わない約束だろ!？」

「くふふ」

「因みにこれが証拠映像だ」

アテナが「ルシフェリオン」からハジメがシアの耳をもふもふしている時の映像を出した。

「アテナてめえなん注文を見せてくれているんだ」

「もう……そんなことしていたんですか？」

シアが笑って

「……ったく。」

良いから皆はもう休め」

「ハジメは？」

「……俺は少しやる事がある」

「なら私も良いかな。」

私も愛子先生に用事があるから。

内容はハジメ君と同じだから」

「好きにしろ」

私とハジメは愛子先生がいる部屋に移動した

真実の歴史

私とハジメは皆と別れて一旦宿に出た。

「ハジメ君どうやって愛子先生の部屋を特定するの？」

「ああ、それについては」

ハジメを目を瞑って

「見つけた」

「気配感知ね」

「そうだ。」

其れに翼愛も似たもんを持って居るだろ」

「そうだった

それで愛子先生の部屋は何処？」

「こつちだ」

ハジメは移動初めて私は其れに付いて行く。

ハジメが有る場所に辿り着くと

「此処だ」

「二階ね」

「二階だな」

「私は「レーヴァテイン」の蛇腹で上るけど」

私は「レーヴァテイン」を取り出した。

「俺は…」

両手に赤いスパークを始めて宿の壁に触ると壁から出っ張りが出て来て

「此れで上る」

「そう」

私は「レーヴァテイン」を上に乗って宿の屋根に刺さり、抜けないか引つ張って確認して上がり出した。

そして愛子先生の部屋の窓の前に辿り着いて部屋の中を確認すると愛子先生がニヤついていた。

ハジメは

「何一人でニヤついてんだ先生」

愛子先生がハジメの言葉に気が付いて

「な…南雲く…」

愛子先生が慌てて私達の名前を呼ぼうとしたが

「大声は出すな。」

他の連中に気が付かれると面倒だ」

「そうだね。」

愛子先生、失礼します」

私は愛子先生の部屋に入って

「レーヴァテイン」人払いの結界を」

《f o n t : t : 1 2 0》

『Ja, begrenzende Erweiterung』《f

ont》

一瞬で人払いの結界が展開された。

「な、何ですか!! 此れ」

「人払いの結界です。」

此れで他の人達は無意識に離れて行きます」

「助かるは翼愛」

ハジメも愛子先生の部屋に入った。

「こんな所までどうやって…」

「俺は錬成師だ。」

壁に登る位簡単だ」

「私はこの子の蛇腹を使って上って来た」

私は「レーヴァテイン」を鞘に仕舞った

「そ、そうですか。」

ではやっぱり私達と来てくれる気に…?」

「いや、それは変わらない」

「其れに私達はデビットを丸焦げにしましたから」

「そ、そうでしたね」

「あと謝る気はないので」

「翼愛さん、何か正確変わりましたか?」

「いえ、学校にいる時の考えと異世界にいる時の考えを持って居まし

て、今は異世界にいる時の考えになって居ます」

「そうですか……うん？ 異世界!？」

「其れってつまり」

「はい、私の家族、アテナ、黒花、異世界経験者です」

「なあ!？」

「……なら」

愛子先生は私達に近づいて

「皆さんを帰す事は出来るですか!？」

私に詰め寄ってそう言った。

「其れなんですか。」

多分この世界を覆っている結界のせいで元の世界に戻れないんです」

「其れってどうゆう事ですか」

「其れについては俺が説明する。」

「因みにこれが俺達が此処に来た理由だ」

「その理由は!？」

「取り敢えず此れだけは先生だけ話しておきたい事だな。」

簡潔に言う。

「この世界の神は狂ってる」

「え……?」

愛子先生はハジメの言葉に戸惑った。

ハジメは其れを理解した上で

「俺達がこの世界に召喚された理由は覚えてるか?」

「其れは魔族から人間族を助ける為に……」

「そうですね。」

愛子先生、質問を変えます。

「魔族と人間族が争っている理由は何ですか?」

「そ、其れは……」

愛子先生は悩んで

「分かりません」

愛子先生はキツパリ諦めて

「ハジメ君」

「ああ、

魔族と人間族が争っている理由は全ては奴が仕組んだ事だ」

「奴とは？」

「この世界を作ったとされている。

創世神
邪神エヒト

其の一柱は人々を駒にした戦争と言う遊戯を今でも行っているの
愛子先生は驚いて居たがハジメは直ぐに

「遙か昔其れに気づいた者達が居た。

解放者と当時呼ばれていた神代魔法の使い手達

しかし彼等は戦わずして敗北した。

神の言葉——神託によって、

神は解放者達を神に仇なす反逆者へと仕立て上げ、結局、守るべき
人々に解放者は討たれていった。

彼等は自分達では神を倒すことはできないと判断し

後世に自分達の力を残す道を選んだ。

それが七大迷宮だ」

「そんな話一体どこで……」

「迷宮を攻略して」

「オスカー・オルクスの遺言書に書いていた」

「では南雲君達は彼らの意志を継いで旅を？」

「いや、それは翼愛の担当で俺は帰る手段を捜している」

「私達が元の世界に還っても多分、邪神エヒトも付いてくると思うか
らこの世界で倒すつもり」

「それで、先生に教えたのも俺達にとって都合が良いからだ」

「其れと今でも契約書は持って居ますか」

「あ、はい此処n……」

愛子先生は懐から紙を出そうと瞬間に私は一般人の目にも止まら
ない速さで奪って其のまま見た。

「に……あれ何処に」

「此処に有ります」

私がそう言うとは愛子先生はこっちを見て

「い、いつの間に」

「改ざんされた痕跡は無いですね」

「あ、当たり前です。」

其れは生徒達が保証された契約書です。

常に肌身離さずに持つて居ましたから」

「そうですか」

ただ気を付けて下さい。

此処は異世界

何が起きるか分かりません。

今の様に一緒に手元から消えたい。

いつの間に洗脳されて契約書を渡してしまうかも知れません」

「あ、はい」

「兎に角先生には私達と緊急通信できる方法を確立します」

「ですがスマホはバッテリーが切れています」

「其れについては心配ありません」

私は「ラブリーコミヨーン」を取り出して

「シャルル」

私はそう言つて「ラブリーコミヨーン」を軽く投げた

「はいシャル」

「ラブリーコミヨーン」になっていたシャルルが妖精形態になった。

「わあ！」

翼愛さん、此れは？」

「私の相棒のシャルルです」

「紹介に預かったシャルルです。」

どうぞよろしくお願いするシャル」

「此方こそお願いします」

「それでシャルル〔ファイズフォンX〕と〔タカウオッチロイド〕を出して

後ポシエットサイズのマジックバック出して」

「了解シャルル」

シャルルは空間魔法陣を展開して其処から「ファイズフォンX」、
「タカウオッチロイド」、ポシエットサイズのマジックバックが出て来
た。

「此れは？」

「液晶画面の方は「ファイズフォンX」で鷹の絵が描いてある方が「タ
カウオッチロイド」です。

「ファイズフォンX」はガラケーと同じで操作で出来ます。

其れと555を入力した後にENTERキーを押すとショックガ
ンになります。

「護身用に渡しておきます」

「そうですか」

「「タカウオッチロイド」の方は此処のボタンを押せば」

私はウオッチモードになっている「タカウオッチロイド」にあるボ
タンを押す

『タカウオッチロイド！』

「タカウオッチロイド」タカモードになって愛子先生の頭に旋回し始
めた

「万が一通信が出来ない時には其れを私の元に飛ばして来て下さい。

其れが飛んで来たという事は愛子先生が何かあった事を示します」

「分かりました」

「其れで此れがマジックバックです」

「一見するとただのポシエットに見えるんですが」

「そうですか」

私は「ファイズフォンX」、「タカウオッチロイド」、契約書を入れる
そして入れたマジックバックは何も入って居ない状態と変わって
居ない

「あの、翼愛さんさつき物を入れましたよね。

あんまり変わってないんですか」

「はい、このポシエットには空間魔法が付与されていますのでなんで
も入ります」

「空間魔法か

確か神代魔法にそんな魔法が有ったな」

「手に入れたら作ってみる？」

「ああ、そうだな。」

空間魔法を手に入れたら作ってみるか」

私とハジメが軽く盛り上がった直ぐに収まって

「取り敢えず言うべき事は言った。」

後は先生が自分で判断してくれ」

私達は部屋の窓に足を掛けた

「ま…待って下さい！」

愛子先生は私達を呼び止めたが私達は其れを無視して其のまま飛び降りた

「よく考えるんだな」

このままだと二元の世界には恐らく帰れない」

「其れでは先生お休み」

「レーヴァテイン」結界解除」

《font:ul20》『Ja』《/font》

愛子先生の部屋に掛けてあった人払いの結界を解いて地面に着地した。

「其れじゃあ寝ましようか」

「だな」

「でもハジメ君は香織ちゃんとユエちゃんのせいで眠れないかもしれないけどね」

「其れは言わないでくれ」

私達は自分たちの部屋に戻って寝た。

探索と救助

翌日の早朝、私達は北の山脈の調査に赴き、行方不明となった冒険者達とウイルの探索をするため準備を整え「水妖精の宿」から出て街の門に目指していた。

「ハジメさん、こんな朝早くから搜索するんですか？」

「早ければ早い程生存率は上がるからな」

「其れに生きて返せば還って来る恩も大きくなるの」

「ああその通り…ん？」

ハジメが何か感じて私もハジメと同じ方向を見ると「待ってましたよ。」

南雲君と翼愛さん！

南雲君達は仕事で此処に来たんですね？

それなら人数は多い方がいい筈です

私達も一緒に同行します」

「清水の情報もこれ以上この町じゃ得られない」

「俺達にとっても都合が良いんだよ」

「何言ってるんだ？」

「お前達の都合なんて——」

「お願いです。」

南雲君

私は先生として生徒を元の世界に帰す責任が有ります。

此れだけは絶対譲れません」

「愛子先生、最初に言っておきますけど。」

私達は人数は足りていますし。

依頼人と清水君が同じ場所に居るのは低いですし」

「構いません」

「だそうだけど、ハジメ君」

「……」

……わかった、同行を許す」

ハジメはあっさりと愛子先生の同行を認めた

「ハジメ、連れて行くの？」

「ハジメさんが折れるなんて珍しいです…」

「「うんうん」」

ユエ、シア、チロル、ベロ、ベルが驚いて居た。

「!?翼愛さん」

何故か愛子先生が驚いて居た

「何ですか？」

「め、目の錯覚かも知れませんが。」

そのチロルさんの顔の横に犬の顔が見えるんですが」

「「「「「「「あ！」」」」」」」」

チロルのベロとベルが髪の毛から出ている事に気が付いた

ベロとベルは急いで髪の毛に隠れるが時既に遅しなので

「チロル、バラしていいよ」

「あ、はい

ベロ、ベル出て来た」

「彼女はケルベロスの血を引く犬人族なんです」

「はい、こつちがベロで」

「ワン！」

「こつちがベルです」

「バウ！」

「そ、そうですか」

「ゴホン、兎に角、この人の教師としての行動力はよく知ってるんなな。

放っておけば何が何でも俺達を探そうとするはずだ。

教会の力を使って指名手配をされたらその方が面倒だ」

宝物庫から魔力駆動四輪を取り出した。

「そうと決まれば急ぐぞ」

それを見たクラスメイト達は驚く。

「い…いきなり車が…!?!」

「お前達に合わせてたら時間がかかるからな。」

だか荷台に乗せても全員を乗せるのは無理だから

翼愛達は魔力駆動二輪に…」

ハジメは更に宝物庫から魔力駆動二輪を取り出そうとするが

「ああ、大丈夫だよ。

自分の奴を使うから」

「だな。

あたしは雷槍の愛車に乗るから。

雷槍」

「はい、姉さん」

雷槍はロックモード状態の「ローズアタッカー」を取り出して開錠して軽く投げるとロックモード状態の「ローズアタッカー」が変形してビークルモードになった。

私は「セイザブラスター」に「ワシキュータマ」を

『ワシキュータマ』

『セイ・ザ・チェンジ』

「スターチェンジ！」

ワシピンクに変身して「ワシキュータマ」を「セイザブラスター」から外して「ギョシヤキュータマ」を

『ギョシヤキュータマ』

をセットして銃口を私の足に向けて

『セイ・ザ・アタック』

発射すると私の姿は見る見る変わっていき最終的に※見た目、ネフテューヌバイクバイクイククになった。

『黒花、チロル』

「はい！」

黒花だけ私に乗って

『其れじゃ皆行きましょう』

「「「「「「いや！待て待て」「「「「「「」

黒花、アテナ、雷槍以外全員に止められた。

『どうかしたの？』

「どうかしたの、じゃなくてお前がバイクになるのかよ」

『別に驚く程じゃないでしょ』

「そうですよ。」

私達急いでいる時はいつもこうして居ますので」

「いや、初めて見る人は驚くわ」

『兎に角急ぎましょ』

「はあく、分かった。」

行くぞ」

黒花、チロルはバイクになった私に乗って

アテナ、雷槍は「ローズアタッカー」、残りは魔力駆動四輪に乗った。

「南雲が此れを作ったのか」

「あの時から銃作れたけどまさか車も作れたのがスゲエ…」

ある程度の場所に着くと其々降りた。

「愛ちゃん先生、顔色悪いけど大丈夫？」

「あははは…車酔いしちゃいました」

私もバイクから戻った。

「着いたのは良いけど、どんな仕事なんだ？」

「遭難者の捜索だよ」

「は？こんな広い場所をどうやって…」

淳史が質問して更に質問する前に

ハジメは宝物庫からモノクルを取り出して宝物庫を掲げて

私、アテナ、雷槍は待機状態

「レーヴアテイン」

「ルシフェリオン」

「ストラーダ」

を取り出して

「「サーチャー」」

《font:ul20》『Ja』《font》

《font:ul20》『Yes』《font》

私達の周りにピンク、オレンジ、黄色の光の弾が生成して

ハジメの宝物庫が光出してから何かが飛び出した。

其れを追いかけるようにピンク、オレンジ、黄色の光の弾も飛んで
行った。

「重力制御式無人偵察機オルニス」

「とサーチャーで上空から痕跡を探す」

「ハジメあれって…」

「ああライセンの大迷宮のゴーレム騎士達を参考にした物だ。」

重力魔法を生成魔法で鉱物に付与している。

要はオルクス大迷宮とライセンス大迷宮、二つの神代魔法の組み合わせだな。

頭部にはゴーレム騎士の眼を使っている。

俺のモノクルにも組み込んだから同じ景色が見られる。

ミレディを強請…」

此処でハジメが言葉を詰まらせて

「じゃなくて快く譲って貰った物だ」

「流石がハジメ…」

私達は無視して

「車の次はドローンかよ…」

「スゲエな錬成師って…」

俺もなるっかな…」

其れも無視して居ると

「……怪しい場所が有るな」

「見つけたの？」

「いや、だか山頂付近に大きな破壊の跡がある。」

およそ八合目と九合目の間だ」

「あ、見つけた」

「なら急ぐぞ」

そんな訳で、私達は無人偵察機とサーチャーをその辺りに先行させながら私達は冒険者達も通ったであろう山道をハイペースで山道を進んだ。

そしておよそ一時間と少しくらいで八合目と九合目の間に到着した私達は、一度そこで立ち止まった。

「此処で戦闘があったようだな」

ハジメは歪んだ盾を手に取り

「だね」

私は折れた剣を見ていた

「おい…南雲、翼愛…お前達…速すぎだつて…」

「俺達、此処じゃ一般人の数倍体力が有るはずに」

「ちよつと休憩しようよ…」

休憩する為に遺品を集めながら川の上流に向かって居ると

「ハジメさん、ここ見てくださいー！」

シアが足跡を発見する。

「この足跡は…」

「ああ、魔物だな。」

見た所…身長が2〜3m程の2足歩行つて所だろうが…」

ハジメの視線の先には

「こんな破壊の仕方出来るか？」

川の支流が新しく作られたと思えるほどに深く抉り飛ばされた大

地の後が残っていた。

「まるでレーザーで抉り飛ばしたかのような後だな…」

「まあこの世界にも高エネルギーを体内を持って居る魔物は居るかも

知れないけど」

「2人とも！」

大変！

私の気配感知に反応があったわ！

大きさからして人間だと思うー！」

優花の気配感知はハジメや香織よりも感知範囲が広いためにハジ

メが気付かない距離でも気付くことが出来る。

その為にいち早く気付いたのだろう。

「場所は？」

「こつちよー！」

優花の先導で先を進むと、皆が休んでいる滝が見えてくる。

「ハジメ君」

「ああ、俺の気配感知にも反応があった。

園部の言う通り多分人間だ。

ユエ、頼めるか？」

「…ん」

ハジメの言葉にユエが頷いて石伝いに滝の前まで行くと、

「？な…なんだ？」

「波状」

魔法で滝を割る。

「「!?」」

愛子先生達は驚いて居たがすると、

「…居た」

滝の奥に洞窟があるのが見えた。

私達は周辺の警戒しながら私達は洞窟内を搜索する。

すると、少し奥に入ったところで男が倒れているのが見えた。

「おい、おい起きろ！」

ハジメが声を掛けるが反応が無い。

「も、もしかして死…？」

愛子先生が最悪の可能性を口にするが、

「いや、まだ息がある」

気配感知で生きていることが分かっているハジメは冷静にそう言う。
う。

「顔が青ざめています！」

「急いで暖を——！」

愛子先生は身体を温めてゆっくり起こそうとしていたが、ハジメが
右手を伸ばすと容赦なくデコピンした。

「こつちの方が手っ取り早い」

「ひでえ…」

ハジメの行動にクラスメイト達も引いていた。

「う…」

その男が目を覚ます。

「き…君達は…？」

「お前がウイル・クデタか？」

「あ…ああ、僕がそうだけど…」

そこまで言った所でウィルが急にハツとなり、

「そ…そうだ！」

奴は!?

奴はもう居ないのか!？」

慌てた様にそう叫ぶ。

「何だ、奴って?」

「早くここから逃げよう！」

僕も一緒に連れて行ってくれ!!」

ウィルは取り乱しながらそう叫ぶ。

取り乱すウィルをハジメは

「落ち着け！」

拳骨で黙らせた。

頭を押さえて蹲るウィルに、

「奴って言うのは2〜3mほどの魔物の事か?」

「ち…違う!!」

ウィルは慌てて叫ぶが直ぐに思い出したのか

「い…いや、確かにその位の魔物も居たけど」

冷静に思い出そうとしている時に

「南雲！翼愛！」

私の気配感知にでかい奴が引つかかったわ!!」

優花が突然叫んだ。

その直後に、

「グウルアアアアア」

心の底から揺さぶられそうな雄叫びに私達が急いで洞窟の外に出ると、そこには真つ黒い鱗と大きな翼をもった黒竜が空中で羽搏いていた。

ウィルが顔面を蒼白になった瞬間、その黒竜がその口を大きく開け

「こ…こいつだ!!」

こいつが私達を…!!」

ウィルが叫んだ瞬間、黒竜から凄まじい炎が凝縮されたブレスを放ってきた。

「プロテクション！」

『font:ul20』Ja!^{はい!}『font』

『font:ul20』Ye!^{はい!}s!『font』

隙間を埋めて

最後に香織が魔法少女の魔法障壁を合わせて

「聖絶！」

を展開した。

そして黒龍のブレスが直絶したが複数展開した障壁によって防いで防がれたブレスは拡散して着弾して周りに大きな音が鳴る

「南雲君！」

「大丈夫です」

「ああ、ユエ」

「任せて

禍天」

ユエが黒龍の真上に重力球を作り出し、それを黒龍にぶつけて地面に叩き落とす。

その際にブレスが途切れ

「動きは封じた。

シア、チロル、ユウカ、キバジュウロウ」

「はいです!!」

「了解!!」

「任せて!!」

「ああ!!」

其々の変身アイテムを取り出して

「猿飛忍者伝！」

とある影に忍は疾風！あらゆる術でいざ候！』

『ジャパニーズウルフ！』

『変身致します 白線の内側に下がってお待ちください』

「変身」

「トツキュウチェンジ！」

「エマージエンシー！」

『双刀分断』

『フォースライズ!』

『トツキユウ3号』

『デカマスター!!』

『壺の手、手裏剣!』

『ジャパニーズウルフ!』

『変身完了です!』

『フェイスオン!』

『式の手、二刀流!風双剣翠風!』

『Break down……』

『トツキユウ3号』

『百鬼夜行をぶった斬る!地獄の番犬!デカマスター!』

『翠風の巻!甲賀風遁の双剣が、神速の忍術で敵を討つ!』

シアはトツキユウ3号、チロルは仮面ライダー亡、優花は仮面ライダー剣斬、牙十郎はデカマスターに変身して

更にシアは「シンゴウハンマー」とドリユッケンを、牙十郎は「Dソードベカ」と「日輪刀」を取り出した

チロルは髪の毛操作で足に纏わせてドリル状態にして更に武装色を纏わせた。

そしてトドメに

『猿飛忍者伝!!ニンニン!』

『ゼツメツ』

『疾風剣舞回転!』

『ユートピア』

『翠風速読撃!ニンニン!』

『ベガスラッシュ!』

『止めですう!』

其々の必殺技を繰り出したが

シアの攻撃は首を動かして避けて、優花と牙十郎の攻撃は両方の翼を傷つけながら防いで

「キヤああ!」

「くう」

跳ね返し吹き飛ばされ、チロルは尻尾を横払いで吹き飛ばした。

「ユウカさん、キバジユウロウさんにチロルちゃん」

シアは仲間が吹き飛ばされたことに思わず黒龍から目を逸らした

「シア敵から目を逸らすな!!」

「え？」

黒龍は再び頭を擡げると、近くに居るシアには構わずに再びこちらに向かってブレスを放ってきた。

ユエは咄嗟に「デイフェンドウィザードリング」を嵌めて

『デイフェンド ナウ』

魔法障壁を出した。

其れを合わせて香織も魔法少女の魔法障壁を展開して防いだ。

「チツ…」

あの野郎…」

ハジメはドンナーを取り出して発砲するが黒龍の鱗は固く

「動くぞ」

「分かった」

私達は今いる場所を降りて注意を逸らす為に攻撃を繰り返したが黒龍は其れを無視してウイルに向けてブレスを

「なっ?!」

放たれたがユエと香織の二人係で防いだ。

「にしても俺達には興味無しってか」

「無いしても可笑的い」

「何がだ」

「なぜウイルばかり狙っているのか？」

人間一人ばかり狙うのか気になる」

「言われてみればな、だかアレは俺達の敵だ」

「だな。」

ユエと香織は守りに専念してくれ。

此奴はあたしがやる」

「ん、任せて」

「分かった。」

ハジメ君

「俺達も黙って見てるわけにはいかない」

「加勢するよ!!」

クラスメイト達も黒龍に攻撃を始めた。

「ハジメ君、アテナ、大きいの行くよ」

「ああそのつもりだ」

宝物庫から電磁加速式対物ライフルシユラーゲンを取り出して

「だな。」

C r o i t z a l r o n z e l l G u n g n i r z i z z
l

アテナは「ガングニール幻獣型ギア」を纏い

「なら最初に私が放つ」

「レーヴァテイン」モードチェンジ」

『font:ul20』Ja^{はい}, Bogenformen『font』
t』

カートリッジを一発消費して私は鞘を劍の柄にくつつける。

すると鞘と劍が連結し、弓の形へと姿を変える。

『font:ul20』Bogenform.『font』
大型の弓に変わったレーヴァテインを私は黒龍へと向けて、魔力の

矢を生成して引き

「翔けよ、隼!」

『font:ul20』Sturmfalken.『font』
魔力の矢が放たれた。

放たれた魔法の矢が炎の隼となって一直線に黒龍に向かっていく。

黒龍も気が付いて直ぐにブレスを発射するが其れよりも早くレ
ヴァンテインの矢が黒龍に当たり強烈な爆炎と衝撃波を発生させて
黒煙が上がる。

黒煙から黒龍が現れるが

「待つて居たぜ」

アテナが持つて居た幻獣型ギアの槍が変形して龍の頭になって黒

龍の胴体に狙って

★DDDRAGONS∞NIGHTTSUN

青色の炎が出た

黒龍は避けてたがシユラーゲンを構えたハジメに左翼を撃ち抜かれて

「グオオオ」

落ち始めた。

ハジメは黒龍に向かって走り出して黒龍の腹に豪脚を繰り出した

「グルアア」

其のままハジメは回し蹴りを繰り出したが黒龍は効いた様子もない

「感情さや一撃の威力は確かにあるだが

攻撃は単調、凶体はデカくて当てやすい」

「其れに今のあたしの槍は龍殺しだ」

「だから」

「トドメだ」

ハジメは宝物庫からパイルバンカーを取り出した

ハジメとアテナは黒龍に向かって走り出した

黒龍はハジメとアテナに気が付いて近くにあつた岩を掴んで投げた

「無駄な足掻きだ」

ハジメが飛んで来た岩をパイルバンカーで砕いた。

岩を砕いた衝撃でハジメのスピードが落ちてアテナが前に出た。

黒龍は即席でブレスを吐いた。

「だから効くか！」

アテナは黒龍のブレスを槍で切り開いたがその間に黒龍は尻尾のフルスイングをアテナの横に当ててアテナを吹き飛ばした。

「アテナー！」

「気にするな。

ハジメ行け」

「ああ」

ハジメは黒龍の胴体にパイルバンカーを付けて杭を打ったが弾き返されて右腕を振り挙げた。

ハジメは咄嗟にパイルバンカーを盾にして黒龍は右腕を振り下ろした。

パイルバンカーは破壊されてハジメは吹き飛ばされて岩肌に当たりそうにぼる

「レーヴァテイン」

私は「レーヴァテイン」を元に戻して鞆に納めると「レーヴァテイン」のカートリッジシステムが作動して

『font:ul20』Schlange, deissen! 〽/font』

「レーヴァテイン」を居合切りで抜くと刀身が蛇腹剣になってハジメの身体に巻きついてを受け止めた。

「ハジメ君、大丈夫」

「ああ、何とかな」

黒龍は追撃しろうとこっちに來たが

「うりゃあっ!!」

シアを筆頭に皆が黒龍に攻撃する

「そうはさせませんよ!!」

「ハジメには私達がいる」

「そうだね。」

ユエちゃん」

香織がハジメを軽く回復して居た。

「其れでハジメ君作戦思いついた?」

「ああ」、丁度思いついた

試してみるか」

パイルバンカーの杭を持って

「奴らの後ろに回り込む。」

皆は足止めを頼む」

「んー!」

「りよーかいです!」

「分かった」

「はい」

「ワン」

「任せて」

「分かりました」

「やるよ」

「おう、任せろ」

黒龍はブレスを放ち私達は其々に別れて

最初にシアがドリユツケンと「シンゴウハンマー」を黒龍の頭に振り下ろした。

「シンゴウハンマー」のシンゴウが青から赤に変わり、衝撃波で黒龍の顔を叩いて更に

「日の呼吸 拾ノ型 火車」

牙十郎の日の呼吸で黒龍を地面に叩きつけた

黒龍は起きると右手を地面に置いた

黒花は「ギアトリンガー」と「ボウケンジャーギア」を出して直ぐにセツトして

『30バーン!』

ババン!ババン!ババン!ババン!

《font:94》ババババーン!ボウケンジャー!』

ボウケンレッドアクセルテクターの幻影が現れて黒花に入ると手には「デュアルクラッシュャー」を持って居て直ぐに

「デュアルクラッシュャー・ミキサ―ヘッド」

「デュアルクラッシュャー・ミキサ―ヘッド」に変えて右手に向けて撃つた。

発射された光線は右手を拘束した。

更に

「迸れ!蒼き雷霆、ヴォルティックチェーン」

黒龍の身体、全体に鎖が巻かれて

「グオオオ」

電撃が流れた

黒龍は拘束を壊す為に左手で破壊しようと腕を振り挙げたが私は「レーヴァテイン」の蛇腹で拘束した。

流石に私一人では無理なので

「優花、チロル」

「はい」

「分かった」

優花、チロルの力を借りて拘束して

「トドメ」

ユエは「グラビティウィザードリング」を嵌めて

『グラビティ ナウ』

「禍天」

そしてハジメが、

「ケツから死ぬ。駄竜が………！」

黒龍のお尻にパイルバンカーの杭を入れた

「アーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!? なのじゃあッ

!!」

自重聴取

「アーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！ツ!? なのじゃあつ!!」

ハジメが黒龍の尻に杭を突っ込んだ瞬間、黒龍から女性の声で悲鳴を上げ。

思わず私達は目の前の光景に膠着してしまう

「お尻があゝ、妾のお尻があゝ!」

「…は？」

何だこの声? こいつのか?」

ハジメは怪訝な声を漏らす。

「人の言葉を話す魔物なんて居ない筈…」

ユエがそう言うが、

「ユエ、其れは少し違うかな念話で話す魚型の魔物は存在するよ」

「ですう〜」

何故かシアが私の言葉に賛同する

「気味悪いな。」

「さっさと死ね」

「!ハジメ待つて!」

もしかしたらその竜、竜人族かもしれない」

「竜人族?」

「ん…」

竜化という固有魔法を使える一族…」

「私の種族より二百年も前に滅んだと聞いてたのに…」

「となると今いる竜は五百年以上前に生き残った子孫ね」

「其れは違うが」

「兎に角、は…話す!」

話すからお尻の奴を抜いてたもお〜」

「言葉が通じるなら話は早い。」

知ってる事全部吐きやがれ」

ハジメは尻に刺さったままの杭をグリグリ動かした

た。

「はふいん!!」

黒龍の危ない発言と同時に黒竜は黒い魔力で出来た帯に眉の様に包まれると、その大きさが小さくなつていき

「すごかった…容赦のかけらもなかったのじゃ…」

黒髪金眼のプロポーションの抜群な美女となつて現れた。

「やっぱり…」

「マジかよ…」

をしながら、

後ろから皆が来ると同時に その女性は地面の上で正座すると、

「面倒をかけた。

本当に…申し訳ない。

妾の名はテイオ・クラルス。

五百年前に存在した竜人族——クラルス族の一人じゃ

お主達を襲つたのは本意でない。

仮初の主である黒いフードを被つた男に操られていたのじゃ。

奴の計画の邪魔者を全て抹殺するように…

これがかなり強力での闇系統の魔法に関しては天才的な才能の持ち主じゃつた」

「闇魔法…?」

宮崎がハツとなる。

「まさか…」

愛子先生も神妙な顔になる。

確か、行方不明の清水の天職も闇術師だった筈。

「どうして、人里近くに?」

「竜人族は滅多に表舞台と関わりを持たない筈」

「うむ、それがじゃな…」

数ヶ月前、何者かがこの世界にやって来たと感じたものがおつてな。

流石にこの件を何も知らないまま放置はできないという結論に至り。

妾はその調査役としてやって来た。

人里に紛れ込む前にこの辺りで休息を取って居たのじゃが、眠っている間に奴に見つかってしまったという訳じゃ。

竜化は魔力消費が激しくての…一度眠ると丸一日は起きられず――

「ふざけるな」

黒竜の言葉を遮ってウイルが叫んだ。

拳を握りしめ、怒りの籠った瞳で黒竜を睨んでいる。

「操られていたから…仕方ないと言っても言うつもりか…？」

お前は隊の皆を殺したんだ!!

その罪はどうやったって消えないぞ!」

ウイルは八つ当たりに近い叫びでテイオは割り切った顔をして

「――…その通りじゃ」

「大体、今の話だって、本当かどうかなんてわからないだろう!

死にたくなくて適当にでっち上げたに決まってる!」

「真実じゃ。

竜人族の誇りにかけて嘘偽りではない」

「じゃあ其れをどうやって証明するんだ!」

「…きつと、嘘じゃない」

ユエが静かにそう言う

「竜人族は高潔で清廉。

その彼女は『己の誇りにかけて』と言った。

なら、きつと嘘じゃない」

「なっ…!!」

だからと言って…」

ウイルは思わず言い返してしまうが、

「私もユエと同じだね。

眼が先まで獣の眼をしていたけど

今は理性がある人間の目になっているし? つきの眼をしていない」

私はそう言ってユエは前に出た。

「何者じゃ？」

竜人族の在り方を今だに知っておるとは…」

「私は、吸血鬼族の生き残り。」

「三百年前に王族の在り方として竜人族の話をよく聞かされた」

「300年前…もしやあの吸血鬼か？ 確か名は——」

「ユエ」

黒竜の言葉を遮ってユエはそう言った。

「それが私の名前。」

大切な人に貰った大切な名前。

そう呼んで欲しい」

おそらく黒竜の言っていることは本当なんだろう。

それでも、割り切れない感情というものはある。

「もし又操られたらどうするんですか？」

今此処で殺しておくべきです！」

ウイルスは殺すことを主張する。

理由を述べてはいるが、本音は復讐だろう。

「その点は大丈夫だよ。」

洗脳を掛かっていた本人は丸一日を掛けていると言っていたから再度洗脳される心配は無いから。

其れと」

私は「レーヴァテイン」を首から外して

「此れにイルワがウイルスを今回のクエストに入れた理由が入って居るから」

「其れt…」

ウイルスに「レーヴァテイン」を渡した

「「レーヴァテイン」イルワの会談の後半部分の映像再生開始」

『font:ul20』Ja!『font』

私の後ろに空中ディスプレイが現れた。

私は皆の方を見た。

その間にも

「俺はさっきも言ったが八つ当たりで殺すのは反対だ」

「操られていただけ」

「まあ…それはそうだが」

「でも敵は殺すと決めちゃったからな…」

「だからこそ、よく見て」

「彼女は本当に敵かな」

「静音が支配して」

「………わかったよ」

「ハジメは杭を地面に刺して振り返り」

「下山するぞ。」

「ウイルを保護した以上此処に居る理由はない」

「………」

「テイオは再度頭を下げた」

「ハジメ…ありがとう」

「ユエの時代を知る奴だもんな無理もないさ」

「ううん違う」

「思い止まってくれた」

「敵以外を手にかければ壊れて行く」

「私達はハジメ君にはそうなっほしくないから」

「………一生敵いそうにもないな。」

「ありがとうユエ、香織——先を急ごう」

「ハジメは下山する準備を始める」

「そう言えばテイオさんを操っていた人は魔物を洗脳して何をしよう

とされていたんですか？」

「ああ、其れなんじやが」

「奴は闇魔法で操った魔物を使い町を襲おうとしておる」

「そ…そうだよ」

「その闇魔法を使う奴！」

「どんな奴か覚えてますか？」

「宮崎と玉井が問いかける。」

「奴は黒髪黒目の人間族じゃった。」

『俺が本当の勇者だ』などと口にしておったよ」

「愛ちゃん先生…」

「まだ清水君と決まったわけじゃありません…！」

「兎に角下山する準備しましよ」

『ギョシヤキュータマ

セイ・ザ・アタック』

私達は下山する準備をする

豊穰の女神

現在私達は急いで下山して居る。

その理由はティオが言っていた魔物の軍団がウルの街に辿り着く前に辿り着くが目的だ

「南雲くもうちよつと何とかしてくれ〜」

「急いで戻ってやってんだ我慢しろ」

「ティオさん！」

町を襲おうとしてる魔物って大体どの位の数ですか!？」

バイクになっている私は目だけを横に向けると

何故かティオは魔力駆動四輪の屋根に縛られていた。

「妾が見た時は三千匹ほどじゃったな〜」

そう言うが

「…いや、今はそんなもんじゃないぞ

桁が1つ追加されるレベルだ」

「確かに地面が黒く染まってる」

私達はサーチャーから届いた映像を見る。

地面は大移動する魔物で地面が黒く染まっていた

確かに3万以上の大群が居た。

「もう動き始めている。」

ウルの前までおよそ一日半つてとこだな」

その報告に全員が目を見開く。

「3万…?」

どうにか出来る数じゃ…」

クラスメイト達が動揺して混乱している中。

その時、

「あの…ハジメ殿達なら如何にか出来るのでは…」

ウィルのその言葉に、一斉に期待の眼差しがこちらに集中した。

ハジメは

「俺達の仕事は、お前の保護だ。」

仮にやるとしてもこんな山の中で殲滅戦なんてやりにくすぎる。

それに万一、全滅した場合はどうなる

町は大群の不意打ちを食らうことになるぞ」

「だから今は此処から離れてから作戦会議が出来る場所に行きましょ」

「だな」

私達はスピードをさらに上げた。

そしてウルに到着した

「おい、着いたぞさっさと降りろ」

魔力駆動四輪の荷台に居た淳史と昇は

「……………」

ぐつたりのグロツキーになっていた

「…………ウイル何処だ？」

「あれ？」

そう言えば姿が……

「ウイル君なら其処に居る」

バイクになっっている私は首をウイルの方向を見た

ウイルはギルド、ウル支部に向かっていた。

「あの野郎……」

「私達も急ぎましょう」

私達もギルド、ウル支部に移動して私は人に戻って支部長室に突撃して私達はありのままに説明した。

「馬鹿な!!」

戯言にもほどがあるぞ!」

「落ち着け!

豊穰の女神のお言葉だぞ!!」

「本当なのですか!?!」

豊穰の女神——!!」

「あの…その呼び方はちよつと……」

「そんな呼ばれ方してるのか」

ハジメは愛子先生に素朴の疑問を投げ告げて

「…あまりそこには触れないで下さい」

「そう言えば先生の技能は全て植物系のばかりですからね」
「ですからそこには触れないで下さい」

私達が今関係のない話をして居ると

「この町は危険です。」

皆さん一刻も早く非難を！」

避難を促すが

「ウイル！」

ハジメが呼び声に私達は思わず振り返る

「あまり勝手な行動をするな。」

自分保護対象だと自覚してくれ。

俺達はさっさとフューレンに向かうぞ」

「な…何を言っているのですか!？」

まさかこの町を見捨てて行くつもりですか!？」

「見捨てるも何も非難するしかないだろ？」

俺達にとって此処は観光地なんだ。

其れに避難するだけならオレが居ようと同じだ」

「まあ、其れをやると米が無くなるけどね」

「ああ、其れは其れで困るが

兎も角行くぞ」

「町の人々を置いて自分だけ先に逃げるなんて出来ません！」

ハジメ殿が何を言おうと私は残ります！」

「なんだと」

ハジメがイラつき出した

「正義感が強いのは結構な事だが…

こっちにも都合があるんだ。

俺達の仕事はお前をフューレンに連れ帰る事だ。

この町を守る事じゃない。

如何しても付いて来ないと言うなら、力づくでも連れて行くぞ」

「くっ…」

「待って下さい。」

南雲君」

愛子先生が待ったを掛けた。

「皆さんなら魔物の大群をどうにか出来ますよね？」

「……」

「三万以上の魔物だぞ？」

「いいえ出来る筈です。」

車内でのウィルさんの質問に山の中で殲滅戦なんてやりにくすぎる、と答えていました。

「其れは平地なら可能と言う事では無いですか？」

「…よく覚えてんな」

「一応可能です」

「なら如何か力を貸してはもらえませんか？」

「一日半では全員が避難出来るかどうか分かりません」

「其れを聞いた私は」

「……意外だな。」

「先生が生徒に戦えと命じるなんてな」

「そうね。」

「愛子先生」

「それは…」

「俺達の目的はウィルを連れ帰る事だと言っただろう」

「^で確かに平地なら戦闘は可能だ。」

「だが相手は三万もの大群。」

「翼愛が言ったように勝てる確証なんてない。」

「そもそも俺達にはこの町を守る理由がない。」

「なのに魔物と殺しあえと？」

「まるで教会の連中みたいな言い草だな。」

「先生は生徒の命が最優先じゃなかったのか？」

「勿論私の最優先は何時だって生徒です」

「なら情が移ったんですか？」

「そうなりますね。」

「其れと南雲君にはこれだけは聞いて下さい。」

「この町には世界は違えども私達と同じ人間が生きています。」

言葉を交わし笑顔を向け合いながら生きています。
そんな人々を少なくともできる範囲では見捨てたくない。

そう思うのは人として当然の事では無いでしょうか。

南雲君、君は此れからずっと大切な人以外の一切を切り捨てて生きて行くのですか？

その生き方はとても寂しい事だと思つたのです。

其れはきつと君にも大切な人にも幸せをもたらさない。

幸せを望むなら南雲君が元々持っていた大切なもの——他者を思い遣る気持ちを捨てないで下さい」

「……」

「此処まで言われたら簡単に引き下がれないね、南雲君？」

「だな…ひとつ聞かせてくれ。」

先生は、この先何があつても、俺達の先生か？」

そう問いかけた。

愛子先生は

「当然です」

その言葉に戸惑うことなくドヤ顔で即答で返す。

其れを見たハジメは

「言つたな。」

何が有つてもだぞ」

私達は支部長室から出ようと入り口に向かった

「南雲君どこへ…？」

「三万の魔物が相手だからな。」

流石に少し準備しておこうと思つてな。

一応出来るだけ避難させておいてくれ」

「と言つても避難する必要はないかもしれないけどね」
「だな。」

取り敢えず…」

「ハジメ」

ユエがハジメを呼び止めた

「ん？」

「テイオと戦って服がボロボロ着替えた」

唯一テイオの戦いで変身して居ないユエの服がボロボロだった。

「確かにその恰好のままって訳にはいかないな…

この際装備も新調しよう

行くぞ」

「ん!!」

「あーっユエさんと香織ばっかズルいですう。

私も買って下さい」

「シアちゃん変身して居たから必要ないでしょ」

私達は会話しながら支部長室から出る。

「妾も居るのじゃが、ハア、ハア、此れが放置プレイ…!!」

小さいながらもテイオの声が聞こえた

「あの、ハジメ君、テイオの事は…」

「無視して忘れておけ」

「分かった。」

其れとハジメ君愛子先生に何かするつもり？」

「お、分かるか」

先生にはトコトン協力してもらおうつもりだ」

ハジメは悪い笑みを浮かべた。

その後、私達は其々動いた。

ハジメは魔力駆動二輪と錬成を使って外壁を作り

愛子先生は町の住民の避難をさせて

ユエ、シア、チロル、香織は服を新調及び服を買っている

私、黒花、アテナ、雷槍、優花、牙十郎はハジメから頼まれたもの

を練習を始めた。

そして私達はハジメが作った外壁の上に居た。

「南雲君！

何とか女性と子供の避難は完了しました」

「分かった。

こつちも準備が済んだ所だ」

「そろそろ見えて来る頃ですね」

「ああ」

私達は地平線の向こうを見ていると

「妾もお主に話が有るのじゃが良いのか」

テイオがこっちに來て

「話と言うより頼みじやな。」

聞いてもらえるのか」

「頼みですか?」

私は反応して

「……………ああテイオか」

「な…なんじや今の間は!?!」

まさかお主、妾の存在を忘れておったとは…」

ハア、ハア、」

「なんて嬉しそうなんだよ…」

「お主達はこの戦いが終わったらまた旅に出るのじやろ?」

「ああそうだ」

「其れに妾も同行させて欲しいのじやが…」

「断る」

真顔の即答で断った。

「想像通りの即答…た…たまらん…」

私達はテイオの反応に引き始めた

「——だが安心せい、もちろんタダでは言わん!

此れよりお主をご主人様と呼び妾の全てを捧げよう。

身も心もすべてじや!!

如何じや?

悪い話では——」

テイオが言っている途中で

「帰れ」

「ドパン」

「ぶへっ♡」

容赦なくゴム弾を装填したドンナーを発砲してヘッドショットする。

「寧ろ土に還れ」

なあコレがユエの言っていた高潔な竜人族なのか？」

ハジメは今思ってる事をストレートに質問する。

「……」

ユエはどう答えたら良いのか悩んでいた。

「そんな…酷いのじゃ…」

ティオは私達に尻を向けて

「妾の初めてを奪っておいて…」

行き成りお尻で…

しかもあんなに激しく……」

嫌らしく言いながら尻を振った

其れを見たハジメはムカついたのかゴム弾をティオの尻に目掛けて乱射する。

「あひん!!」

それじゃ、其れが良いのじゃああゝ」

ティオにはご褒美だったみたいだ

「ハジメ君、諦めて責任持ってもらった方が良いよ」

「うん、私もそう思う」

私と香織は真顔でそう言った

ハジメは「ロストドライバー」と「スカルメモリー」を取り出した

が何かを感じたのが「ロストドライバー」と「スカルメモリー」を仕

舞った。

「もうこれじゃお嫁に行けないのじゃ…」

ティオは痛み之余韻を楽しんでいるのを無視して

「来たぞ」

私達は魔物の大群を見て

「三万どころじゃない。

更にその倍だ」

「——六万？」

たった一日で二倍に……？」

「随分凄いな」

「随分凄いな」

「ああそうだな」

私とハジメが感想を言うと

「南雲君、翼愛さん！」

私達が振り返ると

「すみません。」

私達は止めたんですが…」

「私達も戦わせてくれ！」

ギリギリ戦えそうな男性の集団が集まっていた

「町中の戦えるものを集めて来た。」

私達にも自分の街を守らせて欲しい。

私達の生活は観光業で成り立って居る。

生き延びても町が破壊されては駄目なんだ」

「ハジメどうする？」

「まあ生き証人が欲しかったんじゃない」

「そうだったな」

「なら決まりだね。」

愛子先生」

「あ、はい何でしょう？」

「私達を作った神輿に乗って下さい」

「神輿？」

と愛子先生が疑問を思っ居る中

「聞け！」

ハジメが叫び始めた

「ウルの町の勇敢なる者達よ!!」

この戦いは既に勝利が確定している!!

我々は女神の加護の下にあるのだ!!」

ハジメはどっかの宗教演説の様に芝居がかった仕草で演説をする。

ウルの人々は

「女神？」

「エヒト神ではなく？」

騒めきが広がる。

ハジメは外壁から飛び降りて

「その女神の名は」

私、アテナ、雷槍は其々のデバイスを取り出して

「「サーチャー、スポットライト」」

『font:ul20』Ja!』font』

『font:ul20』Yes!』font』

サーチャーが生成されて愛子先生を注目させるように照らす

ハジメは愛子先生の傍らに跪き、両手で愛子を指し示す。

「豊穰の女神愛子様だ!!」

堂々と叫ぶ

当の本人はフリーズしている

私達は其れを無視して次の作業に映る

「雷光」

雷槍がそう言うのと愛子先生の周りで雷が降って来て

「螺旋」

今度はアテナが炎の渦を作る。

私は「セイザブラスター」に「オトメキュータマ」を

『オトメキュータマ』

セットして「オトメキュータマ」を手前に倒した

其れを見ていたアテナは炎を操作して小さな穴を作り

私は其れに狙いを付けて

『セイ・ザ・アタック』

撃った放たれた光球は小さな穴に入って愛子先生に当たり愛子先

生の衣装が光初めた

優花は「風双剣翠風」を振ると螺旋は風にかき消されて女神と言わ

んばかりの衣服に変わっていた

黒花は愛子先生の真上に立ち

「ギアトリンガー」に「キラメイジャーギア」をセットしてハンドルを

回しながら引き金を引く

「ギアトリンガー」の銃口から光のシャワーが流れる。

「我らの傍に愛子様がいる限り、敗北はありえない!」

ハジメは外壁に戻って来た。

愛子先生は

「え？」

えっ？

てかなんですがコレ？」

我に戻ったが起きている事に飲み込めなかった。

「愛子様こそー！ 我ら人類の味方!!」

私達は彼女の剣にして盾」

ハジメはドンナーを真上に上げて信号弾を撃ちあげて

「これが!!」

愛子様より教え導かれた——」

何処からとも無く牙十郎ハジメの代役が操縦するキューブライノスが現れて

「動物合体」

『ライノス、クロコダイル、ウルフ、ウオーウオーウオー』

『9』

『7』

『8』

『トウサイジウオウオー!』

「完成トウサイジウオウオー」

そして直ぐに私達はサーチャーのスポットライトをトウサイジウ

オウオーに当てた

「女神の巨人である!」

其れを見ていたウルの人々は

「「「「「「愛子様、万歳!!」「「「「「「」」

大歓声を上げた。

その言葉に愛子先生は狼狽えながら

「南雲君、翼愛さん!」

どういふことですが!」

私達に質問して来た。

「せっかく豊穰の女神になる位いいだろう?」

「いいわけありません!!」

「因みに服は其の内に戻りますので」

「今すぐ戻しなさい!!」

「じゃあ後は任せた」

「皆の神輿の上に乗って下さい」

「「「「「「ウオオオオオ!」「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」

ウルの人々がこっちに来た。

「え!?!」

其のままウルの人々は愛子先生を胴上げした

「神輿つてこういう意味ですか?」

「なんでこんな事を?」

ユエが質問して来た。

「人々の指示を得れば先生の意見が教会や国に通りやすくなる。

下手な手出し出来なくなるはずだ

其れに特典を使っても女神の力って事に出来る。

今後俺達が旅をする上でもメリツトになるはずだ

「成程」

「俺達の先生なら此れぐらいはして貰わないとな」

「皆さーん

魔物が迫ってきていますよ」

「そうだね」

「そんじゃあ。

本番と行くか」

私達は其々の武器を取り出した

魔物駆除

私達は其々の武器を取り出して魔物の大群の方を見た

「ご主人様

最初の一撃は妾にやらせてくれぬか？」

テイオが名乗り上げたが

「何だまだ居たのか」

「あふんっ」

ほぼ漫才なやり取りを見せられて

「此処で竜になられても困るんだが…」

ハジメはそう言うのとテイオは両手に高濃度の魔力を集めだして

「まあ見ておれ…」

集められた高濃度の魔力は黒炎に変わり発射された。

発射された黒炎は魔物の大群に当たり大爆発した。

「なかなか高火力だね」

「そうじゃろ」

「なら私も

「レーヴァテイン」モードチェンジ」

『font:ul20』Ja^{はい}, Bogenformen『font』
t』

『font:ul20』Bogenform.『font』

「翔けよ、隼！」

『font:ul20』Sturmfalken^{シュツルムファルクェン}『font』
魔力の矢を魔物の大群の後方に向けて放ち炎の隼に変わり魔物の

大群の後方に弾着すると爆発した。

「お主もなかなかの」

「と言っても5発が限界かな」

「人間でそんなに撃てば十分じゃろ」

「そうかもね

其れよりもハジメ、頼んでいたチロルの専用武器できている？」「
私がそう言う」と

「私専用？」

チロルは首を傾げていた。

ハジメは

「勿論だ」

宝物庫から2つのハルコネンにハルコネンⅡ用大型弾倉から帯状の弾倉装着されている兵器が出て来た。

「チロル、これは翼愛がお前の為に用意した「ハルコネンⅡ」だ」

「私ですが」

「ああ」

「だから使って」

「分かりました」

チロルは「ハルコネンⅡ」を背負った

ハジメも宝物庫から「電磁加速式ガトリング砲、メツエライ」と「オルカン」を取り出した。

「メツエライ」はハジメ、「オルカン」は香織が持った

他のメンバーはも武器を出した。

黒花は

『28バーン！』

『ババン！ババン！ババン！ババン！』

『ババババン！デカレンジャー！』

デカレッドスクワットモード、「ディーリボルバー」二丁拳銃バージョンの幻影が現れて其のまま黒花と一体化すると黒花の両手には

「ディーリボルバー」二丁持つて居る

アテナは

「ルシフェリオン」セットアップ」

『font:ul20』^{セットアップ}set up『font』

バリアジャケットを纏っている途中で

CroitzaI ronzeII Gungnir zizz
l」

「 GANG ニール」の起動聖詠を歌い「 GANG ニール」も起動させる。

本来なら変身途中で別の変身を起こすと変身事故を起こすものだ

がF G式回天特機装束は装者の心象や外部からの影響によって特定分野に特化した形状・機能に変形する。

現にアテナは幻獣型ギア、水着ギア、怪獣ギアをトータスで発動して居るそして今回オリジナルギアを作った。

魔法少女リリカルなのはのクラブ、基に「ルシフェリオン」と「ガングニール奏ver」を合わせて新たな魔導師ギアを作った。

見た目は「ガングニール響ver」の魔導師ギアに青い部分は赤、白い部分は黒く、黄色の部分はオレンジに変わって手には槍の状態になった「ルシフェリオン」を持って居た。

牙十郎は引き続きトウサイジユウオウを操作する。

残りのシア、優花、雷槍は待機して居る

私達は手にした武器を魔物の軍勢に向けて発射した。

放たれた弾丸は何の迷いもなく魔物の軍勢に突っ込んで魔物達をひき肉に変える。

ひき肉に変えても後続は常に進み続ける為、後続もひき肉に変える暫くして

「牙十郎、チロル、そろそろ弾薬が尽きる。

×を撃て」

「了解」

「×?」

「「ハルコンネンII」の銃身を上に掲げろ」

「どうですか?」

チロルはハジメの言う通りに「ハルコンネンII」の銃身を上に掲げるとハルコンネンII用大型弾倉の上に乗っていた広域立体制圧用爆裂焼夷擲弾弾頭、ウラディールミルの部分が動いてウラディールを掴んでいるマニピュレーターが出て来た。

「え、何ですがコレ?」

「其れを銃身を穴に差し込め」

「この穴ですか?」

チロルは両手に持って居る「ハルコンネンII」の銃身をウラディールミルの穴に差し込んで

「其れを魔物に向けて撃って」

「はい」

チロルはウラディーミルを装填して居る「ハルコンネンⅡ」を魔物に向けて撃った。

風が凄かったが吹き飛ぶほどでは無かった。

牙十郎も

「トウサイー・トリプルザ・ビーストオオオ！」

トウサイージュウオーの右手のクロコダイルからキューブ型のエネルギー弾が発射された。

ウラディーミルとエネルギー弾は魔物の軍勢の真ん中に着弾して大爆発してキノコ雲が出来た。

そして雲が晴れるとクレーターが出来ていた。

其れでも魔物軍勢は多少は逃げている個体が居るが大半はクレーターを避けながら此方に向かって来る。

「たく此処までやって引くことは少数か」

「此処から接近戦で片づける？」

私は香織作の魔力回復薬を飲む。

「だな」

私は「レーヴァテイン」を弓から刀に戻して

「皆、接近戦始めるよ」

と挙げる。

其れを聞いた皆は其々アイテムを出して

「行くぞ!!」

ユエとテイオ以外、外壁から飛び降りる

「あの群れにわざわざ突っ込むのか!？」

テイオは私達を心配してくれるが

『ドライバーオン ナウ』

ユエは黙って準備をする

『シャバドウビ タッチ ヘンシン シャバドウビ タッチ ヘンシ

ン』

「無茶じゃ」

『チエンジ ナウ』

「いくらお主達と言えど…」

「ユエー！」

ハジメがユエを呼ぶ

すると黒い四角物が空から

『グラビティ ナウ』

「壊劫」

降って来た。

そして黒い四角物は地面に沈み大きな四角い穴が出来ていた。

そして地面に着地して私達は魔物の軍団に向かって行く

途中で牙十郎と合流して

「ハジメ、此れ帰す」

牙十郎は「ジユウオウザライト」を投げて

「サンキュー」

ハジメを受け取る。

そして

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

「チエンジ全開！」

『とある森に迷い込んだ小さな兄妹の、おかしな冒険のお話…』

『25バーン！』

『オーズ』

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

『ババン！ババン！ババン！ババン！』

『ロックオン♪』

『《font:94》ジャパニーズウルフ！』

『変身致します 白線の内側に下がってお待ちください』

『ザ・ワールド！』

「変身！」

「エマージェンシー！デカマスター！！」

「LBCSコネクト！オーティーンMk-2！」

Various 純真 は 突 き 立 っ 牙 と な り tron

「本能覚醒！」

『銃剣撃弾！』

『ババババーン！』

『カヒユン、カモーン!!』

『フォースライズ！』

「トツキユウチェンジ！」

『ウォー！ウォー！ライノース！』

「フェイスオン！」

『カウンターシステム起動、スキンフィールド展開、コネクト・コンプレイト』

『銃でGO！GO！否！剣でいくぞ！音銃剣錫音！』

『ゼンカイ！ガオン！』

『オースアームズ！』

『トツキユウ3号』

『ジャパニーズウルフ！』

「世界の王者！ジユウオウザ・ワールド！」

「百鬼夜行をぶった斬る！地獄の番犬！デカマスター！」

『錫音楽章！』

「動物パワー！ゼンカイガオン！」

『タトバ・タートバー！』

「変身完了です！」

『Break down……』

『甘い魅惑の銃剣が、おかしなリズムでビートを斬り刻む！』

『トツキユウ3号』

其々の変身が終わる。

因みに優花のシウルシャガナの格好は和装ギアになっている。

更に

『25バーン！』

『ババン！ババン！ババン！ババン！』

『font:94』ババババーン！ガオレンジャー！』

ガオレンジャーの幻影が現れた

ガオレンジャーは其々の武器を前の方に投げて黒花と一体化する。投げた武器は空中で合体して「破邪百獣剣」になり黒花の手に収まる。

ハジメは

「野生……大解放！」

野生大解放を発動した。

「其れじゃ……殲滅戦開始！」

私は「レーヴァテイン」を鞘に入れて

「レーヴァテイン」

「レーヴァテイン」のカートリッジシステムが作動して

『font:ul20』Schlange, deissen! 』
ont』

抜刀すると「レーヴァテイン」の刀身が蛇腹剣になって「レーヴァテイン」の蛇腹の刀身が魔物達を切り刻む。

ハジメは獣じみた戦い方で魔物を蹴散らす。

香織はオーディーンMk-2の自慢のスピードで目にも止まらないスピードで魔物を通り抜ける。

切り刻まれた魔物は遅れてバラバラになる

黒花と雷槍は雷槍は手に持って居る「メダジャリバー」に「セルメダル」を三枚入れて「オースキャナー」で

『トリプル・スキャニングチャージ』

スキャンしてエネルギーを貯めて

「邪気退散！」

同時に必殺技を繰り出す。

雷槍の斬撃は一時空間がズレるが元に戻って大爆発する

アテナは「ルシフェリオン」を構えて突撃する。

移動する衝撃で魔物をひき肉に変えながら吹き飛ばす。

シアとチロルは、最初にシアが「シンゴウハンマー」を振り下ろして地面に叩きつけると、シンゴウが青から赤に変わり、衝撃波で多くの魔物を上に打ち上げてチロルが空中で「ニホンオオカミノツメ」で縦横無尽に切り刻む。

優花は手裏剣になったアームドギアを投げる。
投げたアームドギアは一気に増えて

X 殺

裂風残車輪式

魔物達を切り捨てて一つに戻り優花の元に戻る。

牙十郎は「Dソードベガ」を使って

「日の呼吸 拾参ノ型」

繰り出して十二の型全てを連続して振るい、魔物達を葬った。
その調子で魔物の軍勢は見る見る少なくなっていく

事件処理とJudgment Time

私達の活躍で魔物の軍勢は物凄い勢いで減っていく。

私は

「ハジメ君このまま行けば全滅できそうだけど」

私の後ろに有る宙に浮いている黒い十字架「クロスビット」に話しかける。

『そうだな』

『私達に掛かれば簡単ね』

「クロスビット」を通して会話する。

そして魔物を「レーヴァテイン」の蛇腹剣で斬って居ると突然私の後ろから四つ目の狼型の魔物が二匹現れて其のまま私に襲い掛かって来た。

私は直ぐに「レーヴァテイン」の鞘と蛇腹剣で受け止めて

「レーヴァテイン」

私はそう言う「レーヴァテイン」の蛇腹剣の先端が動いて四つ目の狼型の魔物の死角になる場所に動かしたが四つ目の狼型の魔物は二匹共一緒のタイミングで私から離れて「レーヴァテイン」の蛇腹剣の攻撃を躲した。

私は一度「レーヴァテイン」を鞘に戻す。

其れを隙だと思って先程の二匹とは別の四つ目の狼型の魔物が二匹同時に襲って来た

私は劍盤モードになっている「音銃剣錫音」の持ち手を指でくるくる回しながら

『銃奏ー』

銃奏モードにして其のまま私は振り替えずに引き金を引いた。

放たれた弾丸は其のまま四つ目の狼型の魔物を二匹が同時に当たる起動だったのに其れを避けた。

私は辺りを見渡すと四匹の四つ目の狼型の魔物に囲まれていた。

『翼愛』

「ハジメ君どうかしたの？」

『この魔物は他の魔物と動きが違う』

「そうだね。」

私の攻撃のタイミングを分かかって居たわ」

『ああ、其れに洗脳されてる様子もない。』

大迷宮に居てもおかしくないレベルだ』

「私もそう思う」

『本来なら全員合流すべきだが、俺も直ぐには動けそうにない』

「奇遇ね。」

私も同じよ」

『そうかみんな同じだな。』

終わったら合流だな』

「ええ、分かった」

私は「音銃剣錫音」の銃奏モードを

『劍盤！』

劍盤モードにして其れを上投げた。

其れを合図に四匹の四つ目の狼型の魔物は同時に襲って来た。

私は鞘に納めている「レーヴァテイン」を抜いて四つ目の狼型の魔物の四匹の同時の攻撃を「レーヴァテイン」の刀身で受け流しながら躲して左手で「ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック」を取り出して開く

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

とある森に迷い込んだ小さな兄妹の、おかしな冒険のお話……』

閉じて噛みつき攻撃をして来た四つ目の狼型の魔物を「レーヴァテイン」防いで食われさせて蹴りで蹴り飛ばして上に投げた「音銃剣錫音」を右手に取り再度攻撃を繰り返して来た四つ目の狼型の魔物の攻撃を「音銃剣錫音」で防いで流して「ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック」をセットする。

「音銃剣錫音」からポップ調の待機音が鳴り響き、私の背後から襲って四つ目の狼型の魔物を偶然に上から来た巨大な「ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック」が防ぐ。

私は其のままトリガーを弾く。

『ヘンゼルナッツとグレーテル!』

トリガーを弾いた事でワンダーライドブックが開き私は「音銃剣錫音」を構える。

私の正面から四つ目の狼型の魔物が来たが私は焦らずに

「変身!」

力強く突きを繰り出した。

「音銃剣錫音」からエネルギーの斬撃が解き放たれる。

四つ目の狼型の魔物は余裕で躲して其のまま私に向かい其れに合わせて他の四つ目の狼型の魔物も襲って来たが

巨大な「ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック」から無数のお菓子が飛び出して、私の周囲を回転して四匹の四つ目の狼型の魔物攻撃を防いで其のまま私を包み込む。

『銃剣撃弾!』

銃でGO!GO!否!剣でいくぞ!音銃剣錫音!

錫音楽章!

甘い魅惑の銃剣が、おかしなりズムでビートを斬り刻む!』

仮面ライダースラッシュに変身する。

私は右手を伸ばすと先ほど四つ目の狼型の魔物に食われさせた

「レーヴァテイン」が戻って来た

「ごめんね「レーヴァテイン」」

『font:ul20』Ist^おmir^気eg^なal^さ『font』

私は「音銃剣錫音」を逆手持ちに持ち替えて四つ目の狼型の魔物に向かつてゆつくりと歩き出した

四匹の四つ目の狼型の魔物は私に襲って来た

私は「レーヴァテイン」と「音銃剣錫音」で防ぐ

防がれた四つ目の狼型の魔物は直ぐに襲ってきて四方から襲って来るが私は余裕で防ぐ。

時々カウンターを入れるが四つ目の狼型の魔物は簡単に躲す。

四つ目の狼型の魔物の攻撃を「レーヴァテイン」で防いでわざと手から離して弾かれたように誘い出す。

其れに釣られた四つ目の狼型の魔物の一匹がこっちに来た。

私は手首を巧みに使って「レーヴァテイン」を四つ目の狼型の魔物に向けて振るったが四つ目の狼型の魔物は初めから私の動きを知って居たように躲して再度攻撃を繰り出して「音銃剣錫音」で防いでその間に他の四つ目の狼型の魔物が襲って来た。

私は「レーヴァテイン」を横に振るって四つ目の狼型の魔物から離れた。

「大体わかった」

私は「レーヴァテイン」を鞘に納めて「音銃剣錫音」にセットされている「ヘンゼルナッツとグレーテルワンダーライドブック」を取り外して「ヘンガンリーダー」に

『ヘンゼルナッツとグレーテル！』

嵌めて

『イーイー！』

待機音声が鳴り響きながら「ソードオブロゴスホルダー」に収めながら座り居合の構えをする。

四つ目の狼型の魔物はチャンスと思い四匹同時に私に襲って来た。先頭にいる四つ目の狼型の魔物は一步、二歩、三歩と私の間合いに入って来て最後の四つ目の狼型の魔物も私の間合いに入った。

先頭の四つ目の狼型の魔物は私の喉笛に噛みつきこうと瞬間、「レーヴァテイン」のカートリッジシステムが作動して

『錫音音読撃！イーイー！』

私は一瞬で四匹の四つ目の狼型の魔物の後ろに移動して

「二刀流の居合斬り」

私がそう言っている間に四匹の四つ目の狼型の魔物の身体に無数の赤い線が現れて

「羅生門、乱」

と四匹の四つ目の狼型の魔物は細切れにバラバラになった。

私は「レーヴァテイン」を待機状態にして変身を解除しようとするがハジメの方から物凄い黒い殺気が来てその後

「ドオオン」

聞こえて敢えて変身を解除せずに愛子先生の元に行く。

そして最後に来たシア、香織、ハジメでハジメの手には気絶して居る清水。幸利が居た。

ハジメは地面に放り投げて愛子先生が

「清水君！」

目を覚まして下さい！」

呼びかける。

何度かの呼びかけに清水は起きた。

清水は囲まれているのに気づいて

「……!?」

「清水君、落ち着いて下さい。

危害を加えるつもりはありません！」

「愛子近づいては危険だ」

デビットは剣を手にかけたが

「危険ではありません！」

私の生徒です！」

愛子先生は膝立ちになって仰向けの状態から上半身を起こしている清水の向き合って

「清水君、先生はあなたとお話がしたいのです」

愛子先生は視線を合わせながら

「どうして…どうしてこんな事を？」

清水君の気持ちを聞かせてくれませんか…？」

問いかけた。

清水は

「…どうして？」

本当に馬鹿ばかりだな…」

清水は愛子先生の手を振り解き

「そんなの俺が本当の勇者だからに決まってるだろ

俺はただ自分の価値を示そうとしただけだ」

「お前、自分が何したか分かってんのかよ」

「愛ちゃん先生がどんだけ心配してたと思ってるのよ!？」

「玉井や宮崎など生徒達が憤りをあらわにして次々と反論する。

清水はハジメと同類の人間オタクだったようだけど。

割と公にしていたハジメとは違い、清水は徹底的に秘匿した上でそれを拗らせたタイプだ。

ので色々とめんどくさい

「町が滅茶苦茶になるところだったんだよ」

「南雲達が居なかったらきつと死人も出てた」

「あれだけの力をこんな事に使うに使うなんて絶対に間違っている…」

その勢いに押されたのかますます顔を俯かせ、黙り込む清水。

愛子先生はそんな生徒達を手で制すると

「不満を溜め込んでいたの居たのですね。

気づけなくて御免なさい」

なるべく優しく清水に語り掛けた。

「でも皆さんの言う通りあれでは君の価値を示せません」

愛子先生はもつともな事を聞く。

「みんなを見返そうというのなら、なぜ被害が出る様なことを？」

確かに私達が居なければ、間違いなく尋常な被害が出ていた

「誰がいつお前達を見返そうとした。

腕に仕込んでいた針を取り出して

「俺が力を示すのは魔族にだ」

愛子先生に針を向けた

其れを見ていた私は「音銃剣錫音」を取り出して

『銃奏！』

銃奏モードにして構える。

皆も其々武器を取り出して構えるが

「動くなあ！」

動くところいつをぶっ殺すぞ!!」

犯人が人質を取る感じになった。

「一歩でも動いてみる！」

此奴の命は無いからな！

指せば数分で苦しみながら死ぬ毒針だ。

全員武器を捨てて手を挙げる！」

完全に追い詰められた犯人の凶になって居る

「清水君…どうして…」

「魔族と契約したんだよ

畑山先生を町の住人ごと殺す。

そうすれば俺は魔族に勇者として招かれる」

清水君のあり得ない発言で愛子先生の表情は固まった

「自分は魔族から目を付けられていないとでも思ったのか？」

「豊穰の女神」ある意味、勇者より厄介な存在なんだってよ。

魔族は俺の価値を分かってくれた。

「勇者の下で燻っているのは勿体無い」ってな。

「…清水君考え直して下さい。

今ならまだやり直せますから…」

「うるさいよ。

良い人ぶりやがってお前は黙って脱出する為の道具になって居ればいい

お前達もいつまでも武器を持って居るんだ！

さっさと捨てろって言ってるんだよ！」

「くっ…」

クラスメイトは武器を捨てた

「ヒヒ…そうだそれでいい其れと…」

私達は捨てずにそのまま構える

「その厨二野郎とお前らの武器は貰ってやる」

清水君はそう言ってハジメは

「……………」

後ろを見た。

「お前の事だよ！」

そもそもお前達が居なければ計画は成功していたんだ。

魔族から超強い魔物も借りてたのに…明らかに勇者より強いじゃねえか

お前ら一体何なんだよっ!」

緊迫な空気が流れるが

「…なあ俺の見た目ってやっぱ痛いかな?」

「え!」

そ…そんなことありませんよ!」

「う…うむ! 妾も個人的で良いと思うぞ?」

「ハジメはいつでもカッコいい」

「私もユエちゃんと同じ意見だよ」

ハジメの周りにはマイペースな空気が流れていた。

「ば…馬鹿にしゃがって…!」

それ以上ふざけたら、マジで殺すぞ…!」

割と余裕なのはちやんとした理由がある。

「先生殺さないと魔族側行けないんだろ?」

だったら武器渡すだけ損じゃねえか」

「って言うか、毒針を刺してから数分間で死に至るって事は、死ぬまでに数分間あるって事でしょ?」

だったら私、普通に解毒できるけど?」

クラスメイトや騎士が『えっ?』という表情になる。

奈落の底では数分どころか数秒で死ぬ猛毒も珍しく無かったら、死ぬまでに数分も余裕がある毒など、白崎さんの前では無害に等しい。

「う…うるさい!!」

黙って言う事を聞けよ!」

私はハジメの前に移動して

「そろそろ辞めない?」

清水幸利君」

私は清水君のフルネームで呼ぶ

「何でお前が俺の名前を知って居るだ」

「嫌だな生徒会長の声を忘れたの?」

「生徒会長…まさか」

「そう、其のまさか」

私は変身を解除して

「○○高校の生徒会長であり、二年??組の鞆波・A・翼愛その本人です」
堂々と宣言する。

清水は情報の多さにフリーズした。

私は一気に踏み込んで清水君に近づいたが

何故かシアも動いていた

「避けて!!」

シアの叫び声を聞いた私は最初分からなかったが
「!?」

見聞色が発動して意味が分かり私は身体を捻って愛子先生を狙つて飛んでくる攻撃を「音銃剣錫音」を

『剣盤ー!』

剣盤モードにして防ごうとするが刀身が短くて軌道を少しずらすのが関の山でズラした攻撃は

「なっ!?!」

清水の頬に当たり

「う、うわあっ!?!」

清水は腰を抜かす。

私は地面に転がりながら直ぐに「ボウエンキョウキュータマ」を取り出して「セイザブラスター」に

『ボウエンキョウキュータマ』

セットして直ぐに

『セイ・ザ・アタック』

転がるのを止めてから発動する

「セイザブラスター」から星型のディスプレイが現れた。

そこに居た清水の話にあった魔族と思われる人物が居た。

ハジメも直ぐに「ドンナー」で発砲するが遠くに居る為中々当たらず最後の一発で左肩に当たり根元から消し吹っ飛んだ

其れでも止まらなく

私はよく狙って「セイザブラスター」から三発撃った。

光弾は魔族が乗る魔物の翼に当たり落ち始めた

「チロル!」

回収、最悪死体になっても構わない」

「はい」

チロルは足を変形させて一気に魔人族の元に行った
そして視線を清水と愛子先生に向ける。

腰を抜かした清水とその横で苦しそうに呻く愛子先生の姿があつた。

どうやら倒れた拍子に毒針が頬に掠ってしまったらしい。

「香織ちゃん」

私は香織に呼びかける。

「うん！」

任せて」

香織は頷いて愛子先生に駆け寄ると、

「万天」

詠唱も魔法陣も何もない一言で状態異常を回復させる光属性の中級回復魔法を発動させ、愛子先生の毒を一瞬で解毒する。

「ほう……………一瞬でこれだけの毒を解毒するとは見事じゃ」

ティオがそう言うのと、

「ん……………ああ、ティオか」

ハジメが長い沈黙の後でそう言った。

「何じゃ今の間は!! まさか又、妾の存在を忘れておったんじゃ……………はああ、じゃが溜まらないじゃ……………」

興奮しているティオを私達は見なかった事にする。

それはともかく俺は視線を先生に移す。

「……………はっ!?!」

愛子先生は気が付いて体を起こす。

「あ、畑山先生、気分は大丈夫ですか? 体に違和感がある所は?」

「えっ? あ、白崎さん!! だ、大丈夫です!」

何が起きたのか理解できなかったが、香織に助けられた事は理解した様だ。

其れを確認して私は清水に近付いていくと、手に持っていた毒針を狙って「セイザブラスター」の光弾を放ち、毒針を弾く。

「ひっ!？」

恐怖を感じたのか清水は悲鳴を上げた。

「く、翼愛さん！」

待って！

待ってください！」

愛子先生が私が清水を殺すと思ったのか必死に呼びかけてきた。

「殺しませんし、私は安全に話す為に弾いただけです」

俺は愛子先生にそう言った。

私は座り

「……何だよ？」

会長様よ」

「ちよつと聞きたい事が有るんだけど良いかな。

清水君は……自分が今描いている『自分の紡いできた物語』を読んで、憧れることが出来るのか？」

「な………に………?？」

いきなり分からない事を言われて?を思い浮かべていた

「別に陰険なのはいいよ。

オタクである事も構わない。

そう言う主人公の始まりもあるし。

例えば（陰の実力者になりたくて!）とかあるから

けど、清水君は自分のやっていることが心から本当に『カッコいい』
と思っっているのかな？」

悪いけど私は清水君の物語を読んでもとても憧れることも皆に広
めたいとは思えないの。

例えばこの世界に召喚された時が物語の始まりとするよ。

清水君のやってきたことは、勇者の称号を得た光輝君を僻んで、私
達が奈落に落ちて死に恐怖し、逃げ、挙句、魔族に利用されて寝返つ
て愛子先生を殺そうとし、裏切られて愛子先生共殺される。

そんな物語じゃ、私は流石に憧れることや広めたいと思わないの」
「お………これは………!」

「世界を物語と見て自分を勇者もしくは主人公だというのなら、せめ

て自分が誇れる『カッコいい』と思える行動をしろう？

『自分の物語』を読んで『自分が誇れて憧れる』ことが出来なければ、清水君の納得する主人公には成れない

清水君は『自分が納得する主人公』になりたかったただだと私は思うの

でも、現実の厳しさに中々立ち向かうことが出来ず、『自分が納得する主人公』からかけ離れて、その思いを捨てきれずに思いが歪んで、『自分が納得する主人公』になれない理由を他者の所為に移してしまっただけと思うの？

答え会って居るかな？」

私はそう言と

清水は俯き、ブツブツと呟いている。

「俺は…俺のやってきたことは……そんな筈ない…俺は主人公なんだ……だから見返して……見返す……違う…俺の憧れた主人公はそんな事……俺の…俺のやってきた事は………！」

清水は頭を抱えた。

「俺の……俺の成りたかった主人公は………！」

うわあああああああああああつ!!!」

清水が叫ぶ。

漸く自分のやってきたことを客観的に見直したんだろう。

そして、すぐに黙り込んで項垂れた。

「……笑えよ……俺はモブの癖して主人公と勘違いした大馬鹿やろうだ………笑えよ……」

清水はそのまま呟く。

「笑わないよ」

私ははそう返す。

「………畜生………だったら如何すりやいいんだよ!？」

俺は堕ちる所まで落ちちまった!

今更許してくれなんて言えねえだろ!」

清水は頭を抱えながら叫ぶ。

「大丈夫だよ」

私はそう言う」と

「許します！」

私の横から愛子先生の声が響いた。

「先生は許します！」

確かに清水君は取り返しのつかないことを『やろうと』しました！
ですが、それは運良く翼愛さん達によって防がれました！

まだあなたはやり直せます！」

「違う！」

俺はもう冒険者を殺してる！

もうやり直せないんだ！」

「そこんところどころかな？」

ティオ、ウイル

「え!？」

ウイルは急に話が振られて戸惑るが

「はて?、妾は長旅で寝ていたから冒険者を殺したのは覚えていない
のじゃが」

ティオは私の言葉の意味を理解してくれて話を合わせてくれた。

「ほれウイル坊もじゃ」

「あ、はい

自分達も魔物に追われて皆さんが私を逃がす為に殿を務めました

その後は知りません」

「それは魔族に唆されたからでしょう？」

そして今、清水君はその事に罪の意識を感じている！

それはまだやり直せる証拠です！」

「それでも許せないなら。

牙十郎君」

「はい、会長」

牙十郎は清水に近づいて「デカマスターライセンス」を取り出して
牙十郎「〇〇高校の二年??組、清水幸利、魔族に脅されて洗脳し
た魔物を使って畑山愛子暗殺未遂及びウルに住人の大量殺害未遂の
罪でジャッジメント」

依頼報告

私達は騒動を終えてウィルをフューレンに連れて帰る準備を終えて魔力駆動四輪に乗り込みしろうとしていたら

「南雲君、翼愛さん！」

「うん？」

私達が振り返ると

「…先生？」

「後…清水君？」

愛子先生達が来た。

尚清水は両手にデカマスターの「ディーワッパー」で拘束されている。

「なんだ？」

悪いがもう先生達と話す事は無いぞ」

「そういう事じゃないです。」

清水君を助けて下さって有り難う御座います」

愛子先生のお礼にハジメはきよとんする。

「別に大したことじゃ無いです」

「ああ、ほぼおまけでやったもんだ」

「ですが其れでウルの人達を救ったことは凄いです」

「其れに許されない罪をした俺にチャンスをくれた」

「生徒会長として当然です。」

「二度とあんな真似をしないでね」

「其のつもりだ」

清水からその言葉を聞いて私達は魔力駆動四輪に乗り込み

「なら行くぞ」

「じゃあいつか」

「はい」

愛子先生と別れてハジメは魔力駆動四輪を走らせる

その道中ユエ、香織、シアがハジメを見つめながら

「[[ニコニコ]]」

スマイルをして居た。

流石に

「なんだよ三人して」

「ハジメさんの頑張りがあの方々に伝わって居たと思うと嬉しくて……
ですよね？」

ユエさん、香織さん

「んっ」私達まで誇らしい気持ちになった」

「流石ハジメ君だよ」

とユエと香織は流れる様にハジメにスキンシップを取り

「ユエ、香織……」

其のまま三人だけの世界に入った

「また三人だけの世界になって居ます……」

シアは涙目になっており

「ヨシヨシ」

チロルが慰めて

「なんとも口の中が甘く感じますね」

ウイルの言葉を聞いて

「シャルル、缶コーヒー、ブラック出して」

「丁度、シャルルも丁度飲みたかったシャル」

シャルルは空間魔法から缶コーヒー、ブラックを出して

「コーヒーでも飲む？」

「頂きます」

ハジメ、ユエ、香織、シア、優花、牙十郎以外の全員分の出す。

そして私達は其れを一気に飲み干す

因みに優花と牙十郎の分が無いのはこの二人も二人だけの世界に
入って居る。

其れを見ていたシアは羨ましい顔をして居た。

其れを見たユエと香織は

「ハジメ……」

「ハジメ君」

「あ——……」

まあ…そうだよな

シア、翼愛より早く動いてよかったぞ
其れに助かった。

遅くなったが…——ありがとうな」

ハジメは照れながらお礼を言うが

シアは

「…」

素っ頓狂な真顔をして

「…誰？」

そう言ってしまう

私は咄嗟に

「ハジメさんだよ」

言うが

「ハジメさん？」

私の言葉でも信じてもらえなかった

香織とユエも急いで

「そ、そうだよちゃんとハジメ君だよ

ねえユエちゃん」

「ん！」

援護に入る

「今までの扱いを考えてたら仕方ないと思うがな。

此れでもマジで感謝して居るんだぞ。

何かして欲しい事が有れば言ってくれ。

礼と言うかご褒美と言うか…まあそんな感じだ」

「そんなに足した事じゃないと言いますが…」

シアは顔を赤くしながら慌てふためく

「お礼を言われる程の事じゃないと言いますか…

もうっ！何ですか行き成り！」

完全に恋する乙女顔になっていた

「ではご褒美として私の初めてを貰って下さい」

「其れは却下」

ハジメは即答で答えた。

「何ですか！」

其処は空気読んでくださいよ！」

「出来る範囲を考えろアホウサギ！」

「とハジメ君はそう言っていますか？」

ハジメ君と一夜を超えたユエさんと香織さんは如何でしょうか？」

「あ、バカお前！！」

「私は、シアなら別にいいのに…」

「私も良いよ」

「ユエさんとカオリさんの許可が下りましたし十分できる範囲でしょう。」

其れに知ってるんですよ。

私を遠ざけてからユエさん、カオリさんと愛し合ってるのを！

ハジメさんのヘタレ！根性なし！内面乙女のカマ野郎！！」

シアが好き勝手に言ってる」と

「おーいお主ら」

魔力駆動四輪のトランク側から私達を呼ぶ声が聞こえて思わずハジメ以外皆振り返ると

「胸がつつかえた。」

引つ張てくれんか？

荷台に一人だと流石に寂しいのじゃ。

すまぬが手を引つ張っておくれ」

トランクからティオが居て

「で…出たア〜！！」

ウィルは思わず叫んでしまい其れにビックリしたのかハジメは思わずハンドルを大きく切ってしまい大きく車体が揺れたが直ぐに収まりハジメも振り返ると

「ティオ！！」

てめえ何勝手に乗り込んでやがる！！」

ハジメは^{全弾}ドンナー^{ゴム弾}を取り出してティオに目掛けて全弾撃つ

「…何処までも妾の好みをわきまえたご主人様よ」

「黙れ変態。」

「さっさと出てけ」

「其れは断る」

「ご主人様には妾をこんな身体にした責任を取って貰うわねばならんからの」

「確かに」

「何が責任だ。」

「殺されなかつただけありがたく思え。」

「そもそもお前は竜人族としてやる事が有るだろ」

「其れはご主人様達に付いて行けば問題ない事じゃ」

「逃げてでも追いかけるからの？」

「あちこちの街でご主人様にされた事を言いふらしながら人相を伝え歩くから。」

「其れにお主らも妾をこんな身体にした責任を取った方が良いの思わないかの？」

「まあそうね」

「だな」

「はい」

「僕もそう思います」

「私も同じ意見です」

「ん」

「私も賛成」

「俺もだ」

「ええそうね」

「こればかりしようがないですう」

「私も同じです」

「ワン！」

「だから諦めよハジメ君」

「畜生！」

「俺に味方は居ないのか」

「ご主人様の仲間らも満場一致じゃのう」

「お前な…」

「嫌そうな顔をするではない。」

「妾は役に立つ、先の戦いでそれは証明したはずじゃ」

「そんな事は分かって居る。」

「生理的に無理だつて言つてんだよ」

「ハジメはそう言う」と

「んっ！♡」

「これじゃよ」

「この罵りじゃ！」

「身体を震わせながらドM発言する」

「……何を言つても無駄か。」

「俺達の邪魔だけはするなよ」

「ご主人様、其れはつまり…」

「もう好きにしろ。」

「お前の相手をする方が疲れる」

「え…其れは嫌なのじゃ…放置プレイでは興奮しないのじゃ…もつと」

「罵つて…」

「なあユエ、翼愛」

「やっぱりコイツにトドメ指していいか？」

「難しいね」

「…少し考えさせて」

「そしてその夜」

「ジュウオウザワールドに変身して野性大解放をしているハジメは」

「ティオにオオカミの左手でアイアンクローをぶちかまして」

「感じるのじゃあご主人様あ〜！」

「いちいちキモイ絶叫を挙げるんじゃないやねえド変態が！」

「そしてその後、ティオは手足を結んで焚火の上に翳してお腹の上などに蝋燭を置いて放置してから一晩過ごした。」

翌日

「フューレンに辿り着くと行列があった。」

「進まないな」

「前に来た時はこんなじゃなかった」

「これは暇じゃのう」

「タイムングが悪かったですね。」

大商隊がフェーレンに来ると検査待ちの行列が出来るんですよ」

「ウイル君、待ち時間は？」

「いえ私にも分かりません」

「あの…ハジメさんこのままで大丈夫ですか？」

シアが突然質問して来た

「何がだ？」

「この乗り物かなり注目されてますよ。」

今まで目立つ行動は取らない様にしてたのにいいんですか？」

「…ウルの街であれだけ暴れたからな。」

シア、チロルもその首輪外しても良いぞ。

もう奴隷のフリする必要も無い」

ハジメはそう言うが

「…これはこのままでいいです。」

ハジメさんから始めて頂いた物ですし…

実は最近結構気に入って居るんです」

「…ならもう少し見栄えよくしないとな」

ハジメはそう言うって左手の人差し指に魔力を籠めるてシアの首輪

に触れると首輪が宝石のように変わった

シアは嬉しさのあまり初めに抱きついた。

「チロルは？」

「私もシアちゃんと同じで気に入って居ますし

デザインもこのままで構いません」

「だそうですね」

「そうかい

其れと離れろ」

触れ合って居ると

「?どうしたウイル坊」

「……」

…テイ才殿、もし私が貴方を許したとしたら…
生き残った私を死んだ彼らは恨むでしょうか…？」

「律儀な男じやの。
許さずとも良い。」

妾にはその気持ちとあの時妾に話を合わせてくれただけで充分
じやよ」

と会話を聞いて居ると

「おい！何だこの黒い箱のようなものは！」

門番の係員が槍を武装しながらこつちに来た。

「何なのか説明しろ！」

まさか危険物じやないだろうな」

私は咄嗟に出て

「乗り物です」

「ああ、だからお前達が何もしなければ危険じやねえよ」

そう言うのと係員の一人が

「おい、待て

こいつ等…」

もう一人の係員に

「…何？」

耳打ちして

「嘘だろこんな生意気なそうながキが…」

「いや間違いない。」

その態度じや後でドヤされるぞ」

係員、二人は敬礼して

「ハジメ殿とヨクアイ殿御一行とお見受けいたします」

「イルワ支部長から直ぐ通す様にとの通達です！」

行列を作つて居る大商人の人達に見られながら言われて

「どうぞこちらへ！」

「な？」

この調子もすれば大体の地域には広まつてるだろ」

「にしても早すぎない？」

「確かにそうだな。」

「取り敢えず行くぞ」

係員の案内で其のままフェーレンに入ってギルドの支部長室に向かつてイルワが来るまで待つて居ると

「ウイル！」

「無事かい!？」

「イルワが来た」

「ウイルにに駆け寄る。」

「イルワさん、すみません…私が無理を言ったせいで…」

「何を言うんだ…本当に良く戻って来てくれた…」

「早く両親に顔を見せてあげてくれ」

「はい！」

「中央区のギルドが運営して居るホテルに居る筈だ」

「わかりました」

「ウイルはそう言うかと次に私達に」

「ハジメさん達！」

「また改めてお礼に伺いますね！」

「と言つて部屋を出て行つた。」

「本当に律儀な奴じやのう」

「別に礼なんて要らないんだかな…」

「でも貰えるものは貰おう」

「だな。」

「それで依頼は此れで良かったか」

「ああ…本当にありがとう」

「イルワ支部長が私達の向かい側に座つて」

「正直な所諦めかけていたよ。」

「感謝してもしきれない」

「生きていたのはウイルの運が良かったただけだ」

「ハジメはそう言つて出されていた飲み物を飲み始めると」

「それもあるだろうが…女神の巨人、とうさいじゅうおう」

「其れを聞いたハジメは」

限界の半分にも至っていない。
まだまだ発展途上のようだ。

あり得ない結果に流石のイルワ支部長とドットは

「……………」

あんぐりと口を開けている。

「これ程とは…しかも何故巫人が魔力を…」

「其処は私達も分からないわね」

「…それで、支部長さんよ。あんたはどうするんだ？ 危険分子だ

と教会にでも突き出すか？」

イルワ支部長は、ハジメの質問に心外だと言わんばかりの眼差しを
向けると口を開いた。

「はは…冗談がキツイよ。」

個人的にもギルド幹部としても有り得ない選択肢だね。

其れに君達は私の恩人なんだ。

あまり私を見くびらないで欲しいな」

「そうか。」

そいつは良かった」

「もし飲み込まなかったら…」

「はは…私は、約束を守るつもりだ。」

可能な限り君達の後ろ盾になろう。

動きやすい様に冒険者ランクを全員、金にしておく。

本来なら多くの手続きが必要だけど何とかするよ。

女神の巨人トウサイジュウオウと言う名声も間もなく広まるだろ
うからね。

君達は此れから如何する予定かな？」

「グリューエン大砂漠にある大迷宮を攻略するつもりだ」

「なら都合が良い。」

この手紙をホルアドと言う町の冒険者ギルドに持って行ってくれ。

君達を金ランクへ推薦するように書いてある。

キャサリン先生の手紙を合わせれば却下される事はまずないだろう」

「ホルアドか…」

「ああ、懐かしね」

思い返していると

「おや、行った事が有るのかい？」

「ああ…まだ俺が無能だったころにな」

「ハジメ…」

ユエが心配するが

「大丈夫だよね、ハジメ君」

「そうだな」

ハジメはユエの頭を撫でて

「大丈夫だ。」

少し昔を思い出してただけだよ」

「…そうだったか。」

余計な事は言わないでおこう。

今日はもう休むと良い。

ささやかな礼にはなるが宿は此方が手配しよう」

宿が決まるまで支部長室で待つて居て宿が決まって支部長室を後にした。

ホテルの出来事

私達は今イルワが用意した宿、基高層ホテルの最上階に居る。

「チロルちゃん、見て下さい」

人があんなに小さく見えますよ」

「そうだね」

「ワン」

「龍化すればもつと高く飛べるのがこの姿で見るとも悪くないのう」

「ソファアも絨毯もふかふか

シアのウサミミやチロルの毛とはまた違った良さ」

「こないいい場所で休めるのは召喚されて以来だな」

「そうだねハジメ君」

「だな」

アテナも同意して

「其れにこのホテルは」

雷槍がフェーレンのパンフレットを見てると

「なになに、このホテルはフェーレンで一番高く特に最上階のスイー

トルームは王族が止まった事が有るみたいです」

横から黒花がそう言う

「依頼受けて正解だったね。」

ハジメ君」

「ああ、そうだな」

「ハジメさん！」

今日こそは一緒に部屋で寝ましょう！」

「アホか

個室が人数分あるんだから其処で寝ろ」

「私、カオリとハジメも別々の部屋？」

「俺とユエ、香織で一部屋」

「私と」

「俺は一緒に部屋か」

「ああ、そうだな

牙十郎と優花、アテナと雷槍が其々一部屋」

「お、分かって居るんじゃないか。
ハジメ」

「僕は一人部屋でも構いませんが…」

「シア、チロル、翼愛、黒花が其々一部屋

後テイオは窓の外に吊るす」

「圧倒的に部屋数余っておるのじゃが!?

いや…ご主人様に吊るして貰えるなら其れは其れで良いかもしれぬ…

うへへ…」

テイオがドM発言して居ると

「失礼いたします」

ベロとベルは一緒にでチロルの髪の毛の中に隠れた。

其の後ホテルのメイド作業員が入って来てその後ろには

「クデタ伯爵ご一家様がお見えになりました」

ウィルと両親が入って来た

「ウィルの母サリア・クデタです」

「父のグレイル・クデタです」

「知って居ると思いますが、私は鞆波・A・翼愛で此方が南雲ハジメです」

「ええ詳しい話はイルワから聞いている。

息子が大変お世話になりました。

是非何かお礼が出来ればと思ひまして…」

グレイルがそう言うのとハジメは前に出て

「——わざわざご足労頂きありがとうございます」

ハジメは営業モードになって

「息子さんが無事で本当に良かった!」

顔は営業スマイルで振る舞いや言葉遣いが普段の面影が見えない位の演技力があつた。

ハジメがそれ位出来ると知って居る私は驚かないが

知らない人たちにしてみれば

「!!」

冷や汗をかきながらあり得ない物を見たような顔をして居た。

「報酬ならギルドから貰っているので十分」ヒイイイ」

依頼を達成しただけの事です「誰じゃ?!」

「ヨクアイさん、ハジメさんが」

シア、チロル、テイオが取り乱し始めた

「お、落ち着いて皆

ハジメ君はあんな感じの礼儀作法が出来るから」

「そんなわけないでしょうか?!」

「そうじゃ

ご主人様は妾には容赦なく攻めるお方じゃ」

「カオリさんハジメさんが重症です。

特に頭が」

「いや、大丈夫だから」

私達も一生懸命になって落ち着かせようと頑張るが止まる気配も無く

その間にも

「そんな謙虚な…「メディーック!!」「ご…ご乱心じゃああ」「カオリさん、早く治療を」

好き勝手に言うものだから

「…ちよつと失礼」

今でも騒いでいるシア、チロル、テイオの元に行く。

ハジメが近づくと流石に三人とも騒ぐのを辞めたが、もう後の祭り

ハジメは三人とも首の根っこを掴んで窓まで引きずって

「ちよつとお外で遊んでおいで」

容赦なくゴミを捨てる感覚で窓から放り投げた。

「ちよつと迎えに行つて来る」

「うん、私も」

ユエ、香織もシア、チロル、テイオを放り投げた窓から飛び降りた。
そしてハジメは

「——とはいえお二人の気持ちもありますし…ね？」
何も無く続きを始めた。

流石にクデタ夫妻は恐怖を感じている
ハジメはお構いなしに

「私達が助けを必要とした時に便宜を図って頂けませんか？」

「そ…その程度で良いのかね？」

それよりも君の連れが「いえ過分な位の報酬です」

グレイルは窓から放り投げられた三人を心配するがハジメが最初からそんな物ないと斬り捨てて話を続ける

「とんでもない厄介事の最中に助けを求めるかもしれませんが？」

「は…ははは…それもそうか…」

では可能限りにはなるがちからになると約束しておこう。

それはそうときつき女性を窓から…」

グレイルは再度三人の心配をするが

「ひどいですよ

ハジメさあくん…」

突然窓の方から声が聞こえて全員其方に向くと

「死なない程度とはいえこの高さはちよつと怖かったです…」

「人が本気で心配心配したのに…」

「妾…捨てられるなんて初めての経験じゃ…」

三人は自力で此処まで戻って来たようでその後ろには自分の魔法で浮いているユエと「LBCSオーティンMk2」で浮いている香織が居た。

其れを見たサリアは一瞬で顔が青白くなって両手を自分の胸まで持って行き

「ママ!?」

気絶した

私は直ぐに駆けつけて

「安心…」

闇魔術の幻術魔法で心をかき乱された時に心を安定させる魔法、安心を発動する。

「君達 無事だったのか!？」

グレイルは三人を心配する

「一体どうやって…」

グレイルが心配する途中でハジメは「ドンナー」を抜いて中身をゴ
ム弾に変えて無言で撃つて

「ドパン」

「あべしっ」

「ドパン」

「ぶべら」

「ドパン」

「ありがとうございますー!」

三人とも頭の眉間に命中する

「連れが失礼いたしました。」

いやあ三人共元気過ぎて困ったものです」

仲間を攻撃撃ったのに笑顔を屈さずに

「出は御礼の件…」

話を進めるハジメにグレイスは戦慄を覚えた。

「期待させていただきますね。」

わざわざ足を運んでいただきありがとうございます」

「も…もちろんだとも!」

さして!

妻が疲れているようなので此れで失礼しよう!」

クデタ夫妻は直ぐに部屋を退室して最後にウイルが

「ハジメさん、ヨクアイさん!」

助けて頂き本当にありがとうございます。

また会いましょう」

キリつと退室するが

「ウ…ウイル本当に彼が助けてくれたのか…?」

「しっ!」

父上聞こえちやいますよ…!」

かすがに聞こえてハジメは左手で顔を抱えて

「俺

何か変なこと言ったか…？」

「ハジメ君」

「自業自得って言葉知ってる？」

「ハジメ君があんな芸当が出来るのは知って居るけど初めて見る人は…」

私は窓から戻って来た三人を見る

「見て下さいよ

私まだ鳥肌が立ってます」

「うむ…流石にの妾もドン引きじゃ…」

テイオがハジメを見つめて

「ご主人様よ。

何か悩みが有るなら妾が聞…」

ハジメは一緒にテイオに近づいて

「バチン!!」

無言でビンタを繰り出して

「ありがとうございますッ！」

ハジメはソファーに寝転んで

「取り敢えず今日はもう休むぞ

明日は消費した食料の買い出しだ」

「あの…ハジメさん

その…この前の約束…」

「あ…観光区に連れて行くんだったな」

ユエと香織は初めに近づいて

「買い物は私達でしておくから行って来て」

「…いいのか？」

「うんいいよ。

ただし」

「ん…だから」

二人は同時にハジメに左右の耳に耳打ちして
「…ん」

と答えた。

「私と予定の話してたのに自然と三人の世界が始まる…

流石としか言いようがありませんね…あっはっは」

「これでめげないシアも相当じやのう…」

「はい、その上に…」

チロルはある方向を見る。

私達も其方を見ると

「優花…」

「牙十郎…」

「ああ、此方も同じだね」

「じやのう」

「なあ、雷槍」

「何でしょうか」

「あたし達てチョコレートを食べたっけ？」

「いえ、食べて居ませんが」

「だろろうな

皆は？」

「食べて居ないよ」

「妾もじや」

「私も」

「はい食べて居ません」

「ワン」

「「「「「……」」」」」

少し無言になり

「皆でコーヒーを飲まない？」

「そうじやの」

「賛成だ」

「僕もです」

「はい」

「コーヒーが飲みたいです」

「私も」

「ワン」

私達は部屋に備え付けのコーヒーを飲んだ

因みにその晩

「ふわっ！」

見て下さいティオさん！

あんなに激しく…カオリさんもユエさんも壊れちゃいますよお」

「ふおおおおお！」

ご主人様激しいのじゃ！

し、しかし、シアよ。

ユエのあの表情…正直あれはヤバイのじゃ！

同じ女である妾でも、変な気分…」

「はうろう、確かに蕩けそうな表情が堪りませんね！

物凄く幸せそうですう、羨ましいなあ」

「むう、苛めてもらえれば満足と思っておったが…ああいうのも悪

くないのお」

「ティオさんこつち！

こつちも見てください！」

「おおおおっ!？」

後ろからあんなに激しく…！

ユウカとキバジユウロウもはご主人様達に負けないの…！」

「ああっ！

あんなに激しくされてるのにあんな表情を……！」

「普段大人しめのキバジユウロウが獣のように成るとは…いやはや意

外じゃった…」

シアとティオの2人がハジメ達とキバジユウロウ達のマル秘プレ

イを覗くという出歯亀行為を行って

翌朝

私とチロルは異世界の歯磨きで歯を磨きながら窓を開けて

「シアちゃん、ティオさんおはようございます」

「昨晚のマル秘プレイの違法視聴は如何だった」

「あっはっは良かったですよ。」

それと降ろして下さい」

「ハア〜ハア〜」

一夜中裸一貫で簀巻きにされて窓の吊るされる放置プレイは中々ハードじゃったわい」

裸一貫で体中にゴム弾の銃跡と刀の切り傷があり、その上に簀巻きにされているテイオとシアが居た

「とシアは反省、テイオは反省の色が見えないけど如何する？」

ハジメ君、牙十郎君」

「シアはこの後デートがあるから降ろして、テイオは差のまま吊るし続けておけ」

「分かった。」

チロル」

「はい、今助けるね」

チロルは髪の毛操作で腕を生成してシアを掴んで

「有り難うございます」

シアを救出して

「妾は助けなのか」

テイオは無視して窓を閉めてシアは服を着て其のままテイオ以外ホテルのビュッフェ^食の朝食を取った。^放題

壊滅作業

朝食を食べ終わった私達はハジメとシアと別れて自分たちの部屋に戻り窓に吊るされたティオを回収する。

その後私達はユエとティオは食品、アテナと雷槍は食器など、私と黒花は生理用品、香織とチロルはハジメに頼まれた素材のお使いなどに分かれた。

因みに優花と牙十郎達も急遽デートを始めた。

そして一通り集め終わって昼食を含めて一角のカフェテリアに集まって外で食事する。

そんなときティオが切り出した。

「ふむ。

それにしても、カオリにユエよ。

本当に良かったのか？」

「？」

…シアのこと？」

「うむ。

もしかすると今頃、色々進展しているかもしれないよ？」

2人が思う以上にの？」

ティオが言っている事はハジメとシアがチヨメチヨメしているかもしれない事だが

「…それなら嬉しい」

「まあ、ハジメ君も満更じゃなさそうだし……」

ユエは平然と、香織は少し仕方なさげにそう言う。

「嬉しいじゃと？」

惚れた男が他の女と親密になるというのに？」

ティオは驚いて居るが

「…他の女じゃない。

シアだから」

「ユエと同じでシアじゃなかったら許してないから」

ユエがそう言い、香織が続く。

「主らは本当に変わっておるのお……女なら自分だけを見て欲しいと思わんのか？」

ティオは少ししつこく質問する。

「そう言う思いが無い訳じゃないよ。」

実際私はちよつと前までユエがハジメ君に近付くだけで嫉妬してたし……」

香織がそう言うのとティオは其処に喰らいついた

「ほう？」

今のお主からは想像も出来んが……」

「最初はハジメ君に近付く泥棒猫だって思ってた。

だけど、一緒に大迷宮を生き抜いて、一緒にハジメ君を護っていくうちに、ユエも私と同じだって気付いた」

「同じとな？」

「うん。」

ユエもハジメ君が大好きで、そして意味は違うけど私の事も好き。

私も勿論ハジメ君の事が好きだし、ユエと同じで私もユエの事も好きなんだって」

「そう……そしてそれはシアも一緒。

あの子はいつも全力。

一生懸命。

大切なもののために、好きなもののために。

良くも悪くも真っ直ぐ」

山盛りの料理を食べて居たチロルが

「ゴク、少し空振りが有りますけどね」

そう言つて食事を再開する

「そしてシアは、私達の事も好き。

ハジメ君と同じくらい……」

「…なるほどの……あの子にはご主人様もカオリもユエも必要ということなんじゃない……混じりけのない好意を邪険に出来る者は少ない。

あの子の人徳というもののか。

ふむ、2人のシアへの思いはわかったが……じゃが、ご主人様の方は

どうじゃ？

心奪われるとは思わんのか？ あの子の魅力は重々承知じゃろ？」
すると、香織がニツコリと笑みを浮かべ、

「その時は正々堂々受けて立つよ。」

負ける気は更々無いけどね」

香織はテイオに対して“あなたは如何？”と言いたげな瞳で見る。

「まあ…喧嘩を売る気はない。」

妾は、ご主人様に罵ってもらえれば十分じゃしの」

「……変態」

テイオの言葉にユエがボソツと呟いた。

食事して居ると向こうの建物から取られ慣れている気配が暴れまくっているのが伝わって来る。

取られた気配が戦鎚を大振りの構えをした。

「皆食事一旦辞めてテーブルから離れて！」

私の言う通りに全員が食事を辞めてテーブルから離れる。

其れを確認すると私は足に武装色に込めて更に込めて、椅子に座りながらテーブルを蹴り上げる。

テーブルは垂直に飛んでその直後向かい側の建物の壁が爆散して男が吹き飛んで来て私達が食事して居たテーブルが有った場所を通り過ぎて私達が食事して居たカフェテリアの建物の壁に激突した。

そして落ちて来たテーブルを私は片足一本で受け止めてからもう一度軽く蹴り上げて地面に置いた

食事を再開する

そして建物から

「ああ、やっぱり皆の気配だったか……」

「あれ？」

皆さん？

どうしてこんな所に？」

「……それはこっちのセリフ……デートにしては過激すぎ」

「全くじゃのおく、で？」

「ご主人様よ、今度はどんなトラブルに巻き込まれたのじゃ？」

「あはは、私もこんなデートは想定していなかったんですが…成り行きで…ちよつと人身売買している組織の関連施設を潰し回つていまして…」

「裏の組織って、成り行きで喧嘩するものなの？」

香織が突っ込みを入れる。

「まあ、ちようど人手が足りなかったところだ。

説明すつから手伝つてくれないか？」

私は食後のジュースが入つて居るコップを持って

「いいよ。

どうせイルワさんに話しておかないといけないから。

私が話しておくから」

「おう、助かる」

そしてハジメの話によると、シアとのデート中、ハジメの気配感知が下水に子供らしき反応を捉え、シアと2人で向かった所、海人族の少女を保護した。

その海人族の子供であるミュウは一通り介抱した後、意外と懐かれてしまったが、一緒に連れて行くわけにもいかず、保安署へ半ば強引に預けることにしたのだが、その後、その保安署が人身売買を生業しているフューレンの三本の指に入る闇組織であるフリートホーフ襲撃を受けてミュウが攫われた。

更に、そこには白髪の兎人族…シアを連れてくるようにと壁に伝言が書かれていたのだ。

そこまで聞いて私達は納得した。

「で、だ。

指定された場所に行つてみれば、そこには武装したチンピラがうじゃうじゃいて、ミュウ自身はいなかったんだよ。

たぶん、最初から俺を殺してシアだけ頂く気だったんだろうな。

取り敢えず数人残して、皆殺しにした後、ミュウがどこか聞いてみたんだが…知らないらしくてな。

拷問して他のアジトを聞き出して…それを繰り返しているところだ」

「どうも、私だけじゃなくて、ユエさんとテイオさんにヨクアイさんやアテナさん後クロハナさんとユウカさんそれからチロルちゃんにまで誘拐計画があったみたいですよ。」

それで、いつそのこと見せしめに今回関わった組織とその関連組織の全てを潰してしまおうということになりました…」

「へえ……………」

私は思わず低い声が出してしまった。

「慈悲は要らないな」

「……………それで、ミュウっていう子を探せばいいの？」

香織が聞くと、

「ああ。」

聞き出したところによると、結構大きな組織みたいでな……………関連施設の数も半端ないんだ。

手伝ってくれるか？」

「勿論だよー」

「ん……………任せて」

「ふむ。」

「主人様の頼みとあらば是非もないの」

「遠慮なくやってやるよ」

「私達も狙われてそうですね」

「断る理由は無いですね！」

「ワンー！」

「はい」

私達は食事を終えて

ハジメ、香織とユエとシア、テイオと香織とチロル、黒花とアテナと雷槍の其々3組に分かれてミュウ搜索兼組織潰しに動き出した。

私はハジメ達に「レーヴァテイン」のサーチャーを渡してから建物の屋根を伝ってフューレンの冒険者ギルドを目指す。

途中で

「「レーヴァテイン」牙十郎君に連絡」

『font:ul20』Ja^{はい}／font』

牙十郎の「デカマスターライセンス」に連絡を入れる。

「もしもし、牙十郎君」

『会長、どうかしましたか?』

「ついさっきハジメ君に出会ってね」

私はハジメの説明を其のまま言う。

『成程、合点が行きましたよ』

「うん?」

その様子じゃもう知って居るみたいだね」

『はい、俺達がデートして居ると悪意の視線がして来て』

『そんで試しにチョメチョメをしたい恋人を装って人が居ない裏地に入っただの』

『はあ、そしたら案の定フリートホーフと言うチンピラが襲ってききました』

「殺していないよね?」

『ええ、×が出た者以外殺して居ません』

「聞いてよかったよ。」

其れじゃあハジメ君が用意したマップデータを送るね

それと優花ちゃんチョメチョメしたい時はホテルだけにしなさい」

私は通信を切ってフューレンの冒険ギルドを目指す。

私はフューレンの冒険ギルドの正面扉からではなく建物の壁を伝ってフューレンの冒険ギルドの支部長室を目指す。

場所に行った時に把握して居る為簡単に辿り着いて窓から中を覗く

中でイルワさんが書類作業をして居た。

私は中を確認したので私は窓をノックする。

イルワさんが窓をノック音が聞こえて此方を向いた。

私は笑顔で手を振るとイルワは眼鏡を上に向けて目を擦る。

そして眼鏡を下げてもう一回窓を見る。

私は変わらずに笑顔で手を振るる。

イルワはため息を付いて諦めたのか窓に向かって窓を

「なんの用だヨクアイ君」

開ける

私は空いた窓から支部長室に入る。

「と言うか窓ではなく扉から入って欲しかったんだが」

「すみませんイルワさん。」

急用の用事だったもので」

「それで用事とは」

「はい現在私達、人身売買を生業しているフューレンの三本の指に入る闇組織であるフリートホーフの壊滅作業に入ってます」

そう言うと

「……すまない。」

一瞬耳が遠くなった気がする。

もう一回言ってくれないか」

「分かりました。」

現在私達、人身売買を生業しているフューレンの三本の指に入る闇組織であるフリートホーフの壊滅作 g y ……」

「もう分かった。」

其れで何で私の元に来ることになっただ？」

「依頼を発注して欲しいと」

「はあ、分かった発注しておく」

「有り難うございます。」

「レーヴァテイン」ハジメ君にテレビ電話を」

『font:ui20』Ja^{はい}／font』

空中でディスプレイが現れた。

「ハジメ君」

『あ、翼愛か』

「ついさっきイルワさんから依頼の発注が出来たから」

私はイルワさんを見ると

「あ、わっ私か。」

取り敢えず頼んだ。

後フリートホーフのボスを捕まえたは嬉しいんだが？」

『ボス……？』

ハジメが後ろを見るとシアがドリユツケンを大きく振り被って下に居る人間に振り下ろそうとしている。

「シアちゃんストップ！ストップ！」

私は大きく言う

『はい、如何しましたか？』

シアは器用に動きを固めてこっちを見た。

「ハジメ君」

『追う任せよ』

ハジメが動きディスプレイにその人物が映る様に移動する画面に映ったのが如何にも悪党にびったりな顔をして居た。

「ああ、間違いないな

彼がフリートホーフのボスのだね」

「と言う事でシアちゃん殺すのは禁止」

『そんな』

「ハジメ君は錬成で鎖を作ってね」

『任せておけ』

ハジメが地面に触るって

『錬成』

鎖が錬成されて其のままフリートホーフのボスを縛った。

「それじゃあ私に取りに行くから、ハジメは作業に戻ってね」

『ああ、分かった』

連絡が終えて

「それじゃあ取りに行つてきます」

「ああ、お願いするよ」

私は入った窓から支部長室から飛び降りて

『ワシキュータマ』

『セイ・ザ・チェンジ』

「スターチェンジ！」

ワシピンクになってフリートホーフの本部のアジトに向かう
そして到着してフリートホーフの本部のアジトの中に入ると

「あちゃー随分暴れたね」

通路の壁、天井、床にひき肉や血がこびり付いていた。

私は気にせずに歩いて奥にある扉が壊れた部屋に入ると其処には先程の通信で映っていた鎖巻きにされたフリートホーフのボスが居た

様態が気絶していたがお腹当たりの損傷が激しかったので、私は応急処置で回復させてからフリートホーフのボスを軽々く持ち上げに行きと同じ飛んで帰る。

フューレン冒険ギルドの前に人だがりが出て来ていて私は其処に行くとイルワと武装したギルド職員、冒険者等が居た。

私はイルワ達の前に着地して

「此れがターゲットですね」

「ああ、助かたつよヨクアイ君」

イルワが右手を出して来たので私も右手を出して握手する。

ドオオン

何処かの建物が大爆発して更に空が曇り出して其処から雷で出来ている龍が連続で建物を爆発させる。

イルワさんが頭を抱えて

「何かすみませんでした」

私が謝罪した

ホルアドの冒険者ギルド

ハジメ達は例の海人族の少女、ミュウを連れて帰って来て私達は支部長室に行き出されていた菓子を楽しく食べる。

イルワさん頭を抱えながらため息を吐く。

私は

「イルワさん、頭痛薬を飲みます?」

私は頭痛薬を出して

「済まない、頂こう」

イルワは頭痛薬を受け取った。

そな事をして居ると

「失礼します」

支部長室にドットが入って来て

「イルワ支部長、調査結果が出ました」

書類を差し出して来た。

「はあく、ありがとう」

ため息をつきながら書類を受け取り書類を見る。

全ての書類を見ながら

「消滅した建物9棟、倒壊した建物15棟、半壊した建物32棟、死亡

38名、再起不能44名、重傷28名、行方不明者119名

民間への被害がゼロなのが奇跡としか思えない

：何か言い訳はあるかい?」

「カッとなったので計画的にやった。

反省も後悔もない」

ハジメが堂々と言うとイルワの周りの空気が重くなる

其れをした本人たちは

「お兄ちゃんこのお菓子美味しいの」

「おう、どんどん食え」

「まあ私達もフリートホーフには手を焼いていたからね。

やりすぎだが、正直助かったとも言えるよ」

「見せしめも兼ねて盛大にやったからな」

ハジメが話している間に

突然知らないおじさんが支部長室が入っては

「よくやったボウズ!!」

そう言っ出て行つた

「なんなら支部長のお抱え冒険者つて事にしても良い

そんで何だ今のおっさん…」

「それなら相当な抑止力になるが…利用されるのは嫌うタイプだろう
?」

因みに今のは保安局の局長だ」

「世話になるしそれ位は構わねえよ。

金ランクにもして貰った事だしな」

「ハジメ君少し変わったかい？」

前は他人の事などどうでもいい様に見えたが。

ウルの街で何かあったのかな」

「…まあ、悪い事ばかりじゃなかったよ」

「なら良かった。

では別件だ。

その海人族の子についてなんだが」

その言葉にミュウがピクツとして反応する

「故郷へ戻るには二つの方法がある。

一つ目は正規の手続きでエリセンへと送還する方法、二つ目は君達
に預け依頼という形で送還してもらおう方法」

イルワ支部長はそう言っ

「ハジメさん」

シアが最初に口を開いた。

「私…絶対、この子を守ってみせます」

シアはそう宣言する。

ミュウも其れに便乗して

「お兄ちゃん……一緒……め?」

上目遣いを使ってきて

「今回は最初からそうするつもりで助けたからな。

大火山の攻略が心配だが何とかするさ」
ハジメが承認する

「ハジメさん！」

「お兄ちゃん！」

シアとミュウが満面の笑みになる。

「ミュウ。」

そのお兄ちゃんってのは止めてくれないか？

普通にハジメでいい」

ハジメがそう言うのと、ミュウは

「どうして？」

疑問を持った。

「何と言うか、むず痒いんだよその呼び方」

「ハジメ君、まだ可愛いところあるんだ」

香織はそう言う

ミュウはハジメの言葉を理解して少し考えて、

「じゃパパー」

爆弾宣言して

「！！！！」

ユエ、香織、シア、テイオの四人は電撃を喰らったかのようにそれぞれ異なる反応をした。

ハジメは

「悪い、ミュウ。」

良く聞こえなかったんだ。もう「パパ！」

空耳では無くハツキリとミュウはそう言った

「パパね…ミュウが生まれる前に神様のところにいつちやったのだからお兄ちゃんがパパなの」

「ミュウ…それは流石におかしくないか？

パパは勘弁してくれ。」

ハジメがそう言うのと

「やっ、パパなの！」

ミュウはそう言いながら走り出した

「駄目だ！

お兄ちゃんでもいいからそれだけは止めてくれ！」

ハジメはミュウを追いかける。

流石にウルスの街で一騎当千して守った本人でも子供の我儘には手を焼くみたいだ

「やーっ！ パパはミュウのパパなの〜！」

「俺は、まだ17なんだぞ!!」

「ハジメがパパならママは勿論…」

「ずるいですよユエさん！」

ハジメさんと一緒にミュウちゃん助けた私がママです！」

「ユエちゃん、シアちゃんも抜け駆けは禁止だよ

でも聖母的には私が勝って居るから私がママよ」

ハジメの嫁のユエ、香織と嫁候補のシアが言い争って居ると

「何を言ってるんじや三人共

子は親を見て育つ

妾ほど母親に適した人物は——」

子育てに一番かけ離れているドMのテイオにツツコミを入れたいがミュウを肩車しているハジメが宝物庫から縄の束を取り出して

其れを新体操のリボンの様にテイオの身体の周りに回して其処から一瞬で簀巻きにした。

されたテイオは

「あ、あふう♡」

ドMを発症して居た。

「ミュウママいるの

パパもママも一人だけなの」

ミュウの爆弾宣言で

「[[「しょぼん…」]]」

分かりやすく落ち込んでいた。

首っだけ後ろを向けたテイオは

「ご主人様よ妾ならいつでも子作り——」

「冗談は存在だけにしろ」

支部長室にはカオスが広がって居た

「という訳でイルワさん。

カオスですけど、依頼の発注をお願いします」

「ああ、そうだね。

直ぐに発注するよ。

ドット君」

「あ、はい分かりました」

イルワさんがドット君に頼んでミュウの故郷送還を発注して私達に依頼して私達は其れを受理した。

因みに今晚の宿は昨日と同じホテルの同じ部屋だった。

ホテルのミュウの面倒はシアが担当だった。

↳翌日↳

シア以外私達はハジメが運転する魔力駆動四輪に乗ってフューレンを後にする

「この乗り物すごいの！

地面の上なのに海の中みたいに早いの！

パパ凄い！

お空も飛んでだし何でもできるの！」

ミュウは楽しんでる

「あまり身体を出すと危ないぞ」

ハジメが注意するとミュウは何か気が付いて辺りを見渡す。

ユエが

「ミュウ如何したの？」

心配する

「シアお姉ちゃんが居ないの」

「あああいつなら…」

「ヴオン」

大きい音が聞こえて魔力駆動四輪の外を見るとシアは魔力駆動二輪をウイリー走行しながら

「ビヤッハーハー！… ですよ！」

かつ飛ばしていた。

「なんでシアちゃんはシユタイフーに乗ってるの？」
香織が質問すると

「ブリーゼより風を感じられて気持ちいいんだとよ」
そんな事を言っているとシアが高台からのジャンプをして着地を成功させた。

「なんでいきなり俺より乗りこなしてるんだよ…？」

余裕で高ランク難易度のバイク技を披露していくシアにハジメは呆れた声を漏らす。

「元々獣人だし、バランス感覚とかが抜群なんじゃないかな？」

私は答える

それを見ていたミュウが目をキラキラさせて、

「パパ！パパ！」

ミュウもあれやりたいの！」

とんでもない事を言いだした。

「ダメに決まってるだろ」

即駄目だしするハジメ。

「やーなの！」

ミュウもやるの！」

ユエの上で駄々を捏ね始めるミュウ。

ユエは

「暴れちゃメッ！」

ミュウはそう言われて落ち込むが

それを見たハジメが

「ミュウ。

後で俺が乗せてやるから、それで我慢しろ」

「いいの？」

「ああ。

俺となら構わねえよ

でも二輪は危ないからな。

二輪用のチャイルドシートが必要だな」

そう言い始めて

「ボディはアザンチウム鉱石にして…錬成方法は…」

「この世界最高硬度の鉱石で作るチャイルドシートを言い出した

」ご主人様は意外に子煩悩なのじゃな」

テイオはハジメに近づいて来たがハジメはチャイルドシートの設計に集中して居た。

「其の上で妾への扱いを考えると此れはなかなか…」

「南雲って……………意外と親バカ……………?」

優花はそう言う

「お姉ちゃん達なんか皆変なの…」

「気にしたら負けだよ」

「……………」

「そうだね」

「ですね」

「ワン」

「だな」

「僕も同じです」

「そうですかね?」

「だね?」

「会長と同じ意見です」

「右に同じ」

其々感想を言い私達は進む

進んで居ると

「!あれは…」

ハジメが何か気が付いて

「どうしたの?」

私達はハジメが向いている場所を向く

「あれって」

「ああ、オルクス大迷宮の入り口だ」

「ホルアドもすぐそこだ」

「そうねイルワさんから預かっている手紙の宛先も此処だし」

私達は魔力駆動四輪から降りる

「にしても思えばここから始まったんだな

落ちこぼれとしてこの先の町へやって来て

無能ながらも試作品の銃を片手に迷宮へもぐりクラスメイトの一人の手によって奈落へ落とされた。

まだ4ヶ月程前の出来事なんだな。

もう何年も前の様な気がする」

「濃厚だったからね。

その時の思い出が薄すぎだからね」

「だな」

「ご主人様よ」

テイオが

「やり直したいと思わんのか？」

皆が皆ご主人様を傷つけた訳ではあるまい

仲の良かった者もいるのではないか？」

「確かにそう言う奴もいたが、殆どここに居るしたとえやり直しても俺は何度でも同じ道を辿るさ」

「ほう…何故じゃ？」

テイオが不思議そうに言う

ハジメは魔力駆動四輪から降りるユエの

「勿論ユエに会いたいからだ…」

右手首を握る。

「そうだね。

ハジメ君はそう言うと思うよ」

香織はハジメの背中に抱きつく

「なるほど」

テイオが納得すると

「テイオさん、チロルちゃん聞きました？」

「え、何を？」

「お前達に会いたいからだ」って言う所だと思いませんか？」

「いや違う……」

チロルは違うと言おうとしたが

「いい加減あの空気を私との間に作ってくれて良いと思うんです…
いやユエさんと香織さんが特別なのは分かってますよ？」

でももう少し目を向けてくれても良くないです？

私は何時でも受け入れ態勢にが整っているのに据え膳食わぬは男の恥ですよ。

こんなに分かりやすくウエルカムしてるのにグダグダ言ってるのへタレ野郎と思ってもバチは当たらないと…」

グチグチと文句を垂れ流し始めた。

「色々溜まつてるようじゃな」

「ドンマイ」

「ワン」

私達はホルアドの冒険者ギルドに向かう

途中でハジメはある宿の壁に注目する

「ハジメ…」

「ハジメ君、大丈夫」

ユエと香織が心配する。

「ああ問題ない。」

昔、香織達と一緒に泊まった宿屋が有ってついな…」

少しだけ昔話をしてホルアドの冒険者ギルドに到着する

「パパ、ここなに？」

ハジメに肩車しているミュウは疑問に思う

「この町の冒険者ギルドだ。」

預かって居た手紙を渡すだけから直ぐに終わるからな」

そう言いながらホルアドの冒険者ギルドに入る。

冒険者達の視線が一斉に俺達を捉えた。

「ひうー！」

その眼光のあまりの鋭さに、ハジメの肩に乗っていたミュウが悲鳴を上げる。

そして冒険者の一人がこっちに来て

「おい坊ちゃん此処は女を侍らせた奴が来る場所じゃねえんだよ。
ぶっ飛ばされる前に失せな」

いちやもん付けて来た

「パパ…」

ミュウが泣き始める。

「直ぐに終わるからな。」

ちよつと目瞑つてろ」

いちやもん付けて来た冒険者は無視されてイラつき出して

「おいクソガキ返事位ちゃんとしようぜ。」

オルクス大迷宮、二十階層をクリアした紫ランクのアテウ・マデス

様を知らねえのか」

自己紹介し始めて

私は思わず言葉遊びにピッタリな名前だったなので

「当て馬です?」

そう言ってしまう

「誰の名前が当て馬ですだ。」

アテウ・マデス…」

アテウ・マデス言葉が続かなく

ハジメの威圧に当てられて泡を吹きながら失神した。

「笑え」

「「「「「え?」」」」」」

冒険者達からしたら、予想外の命令だったのだろう。

さつきとは違う意味で絶句している。

「笑えと言ったんだ。」

ついでに手も振れ。

お前らのせいで家の子が怯えたんだよ。

トラウマになったらどうする気だ?」

何気に『家の子』と言っている辺り、ハジメの子煩悩さが伺える。

冒険者達は、ハジメの威圧と言葉に逆らえるわけもなく、全員引き

攣った笑みで小さく手を振った。

ぶつちやけ怖い、後キモイ。

「ミュウ目開けて良いぞ」

ハジメに言われて顔を上げたミュウだったが、

強面の叔父さん達の引き攣った笑みを見て

「ひうううう!?!」

やはり怖かったのか悲鳴を上げた。

「どういうことだ、ゴラア!!」

「無茶言わんでください!!」

私はハジメの後頭部に拳骨を叩き込んで

「ハジメ君、怖い顔の叔父さんが子供が満足できる笑顔が出来る?」

「……無理だな」

「でしょう」

私の言葉に相槌を打つ様に冒険者達は首を一生懸命に振るった

「じゃあどうすればいいんだ?」

「私がお手本を見せる」

私はハジメ達よりも前に出て

「全員今から面白い土下座をして」

私もハジメに劣るけど殺気を飛ばす。

冒険者たちは直ぐに其々が思い思いの「面白い」土下座をし出した。

先程まで食べていた食事が乗っていた皿を頭にのせたり、ビツクリ

人間かと言わんばかりに足が背中を通して肩まで回ったなどをして

「ミュウちゃん、あれなら如何かな?」

私が言つてミュウが見ると

「ぶふっ!」

吹き出していた、ご満悦の様である。

私達は冒険者ギルドのカウンターに向かう。

「此処の支部長と会いたいフューレンのギルド支部長から手紙を預かっている」

ハジメはイルワさんから預かっている手紙を出す。

受付嬢は何の事やら分からず

「支部長からの直接の依頼という事ですか?」

質問する

「そうだ」

其れでも受け止めきれず

「ステータスプレートを拝見しても良いでしょうか」
私達は全員分のステータスプレートを出す

其れを見た受付嬢は

「え？」

金ランク!?!」

思わず声を上げた。

すると、受付嬢はハツとして、

「も…申し訳ありません！」

大切な情報を…!」

個人情報大声で漏らしてしまったのを自覚したのか、凄いい勢いで謝り始めた。

「別にいいから。」

支部長に取り次ぎしてくれるか?」

「応接室へご案内します此方へどうぞ!」

受付嬢はそのままギルドの奥へ駆け出していく。

「どんどん有名になって行く」

「もう気にしてねえよ」

「其れに有名にならないと務まらなくなったからね」

「ああ」

遠藤浩介

受付嬢がカウンターを出て5分も立たないうちに、ギルドの奥からけたたましい足音が聞こえた。

俺達は何事だとその音のする方に視線を向けると、カウンター横の通路から全身黒装束の少年が飛び出してきた。

そして、その人物はユエ、シア、チロル以外見覚えがあった。

「「「「「……遠藤^{浩介}（君）？」「「「「「先輩？」」

思わず私達は同時に呟く。

「知り合いですか？」

チロルが私に訊ねてくる。

「私のクラスメイトだ」

「か、会長!? それに……騎竜さんと黒花さん!?

あと………分かりにくいけど園部さんと白狼………だよな?」

遠藤の視線が私達の方を向き、私達の名を呼ぶ。

「正解」

ハジメが

「お前……遠藤か?」

そう言うと

「!今の声……南雲!?!」

ハジメの言葉を聞いて浩介は反応してハジメの方を見て

「南雲……生きてたのか!?!」

叫び

「久しぶりだな」

ハジメはそう言うが遠藤はキョロキョロと辺りを探し始めた。

「声は聞こえるのに姿が見当たらねえ!

生きてんなら出てきやがれえ!」

必死な遠藤の表情にハジメの顔には#が出ている。

私はハジメを手で押さえて

「えっと、浩介君?」

「会長、南雲はどこに居るんですか!」

まさか幽霊か？

やっぱり化けて出てきたのか!?

俺には姿が見えないってのか!?

「落ち着いて。」

今から確認するから。

私が指さした人の名前を言って」

私は最初に自分を指さして

「会長」

黒花に指さして

「黒花さん」

次にアテナ、優花、牙十郎の順で指さす

「騎竜さん、園部さん、白狼」

次に雷槍に指さす

「えっとアテナ……弟の……雷槍？」

「はい会って居ます」

次にハジメを指す

「まさか!？」

私の指さしに、浩介はハジメをマジマジと見つめて。

「いやいや、其れは無い」

南雲が元の世界でオタクでも流石に白髪、眼帯、黒コート。

眼帯の下の右目には如何にも特殊な義眼で、左腕は如何にもあらゆるギミックが仕込まれた金属の義手の中二病重傷患者じやあるまいし」

「はあ……こんな見た目で悪かったな。」

こんなだが、正真正銘南雲　ハジメだ」

「え!？」

お、お前……お前が南雲……なのか？」

「そうだよ。」

ここに居るのは紛れもないハジメ君本人だよ」

横から香織がそう言うと、

「も、もしかして、白崎さん……だよね？」

ハジメと同じように白髪になっている香織に浩介は呆然と返す。

「うん、そうだよ」

白崎さんは笑みを浮かべながらそう返して

「そうだ、このど阿呆」

ハジメは浩介の顔面に踏みつけてをを入れて

「世界一影の薄いお前に気づかれない位変わって悪かったな」

浩介は少し後退して鼻を抑えて

「薄くないわ！」

自動ドアくらい3回に1回は開いてたぞ！」

「3回中2回は開かないのかよ………」

ハジメはめんどくさそうに返事を返す。

遠藤浩介

私の記憶が正しければ影の薄さと天職の暗殺者を生かして偵察や
斥候で活躍する

浩介は再度ハジメをマジマジと見つめて

「いやいや変わすぎだろ

見た目とか雰囲気とか口調とか

もはや別人だぞ」

「そりゃあ変わるだろ。

奈落の底から這い上がってきたんだぞ？」

「そういうものかな？」

現に会長の一部の人は変わってないのに」

「現に会長が変わらない位強い事だ」

「そうだよな。」

最初から会長は天之河強かったしなんならメルドさんを圧倒して
居たからな

其れにあれから生きて帰って来たんだもんな

本当に生きていたんだな。

良かった……」

遠藤はホツとしたように息を吐く。

「俺達の事は別にいい

入って来た時金ランクがどうこう言ってなかったか？」

「其れもかなり慌てて居たように」

私達の言葉を聞いて

「そ…そうだよ！」

すると、遠藤はハツと思いい出して

「頼む！」

一緒にオルクス大迷宮へ潜ってくれ！

1人でも多くの戦力が必要なんだ！」

浩介はハジメの肩を掴んだ。

「落ち着けよ遠藤

勇者の天之河がいれば大抵の魔物は何とかなるだろ？

それにメルド団長もいる

あの人がいれば、あの時のような失敗も二度も起きない筈だ。

俺が行く必要なんてない」

ハジメはバツサリ切り捨てるが浩介はその言葉にガクリと膝から崩れ落ちる。

私は重大な事を察した

「浩介君、まさかと思うけど今起きている問題は魔族が起こしているの？」

「…だよ」

「あ？」

「…そうだよ。」

会長が言う通りに魔族が出たんだ。

メルド団長もアランさんも他の皆も！

迷宮に潜ってた騎士は皆死んだ！

俺を魔族の手から逃がすために！

俺のせいで！

死んだんだ！」

浩介はそう叫んだ。

「そうか…」

ハジメはドライだったが香織が浩介の胸倉を掴んで自分の方に振

り向かせると、

「雫ちゃん！」

雫ちゃんは!？」

有無を言わせぬ迫力を持ってそう問いかけた。

「あと鷹音ちゃん、刷庫ちゃん、ルーズちゃん」

私も質問する

「や、八重樫さん、狙眼さん、印紙さん、ブレットさんは無事………少なくとも別れるまでは無事だった………むしろ、八重樫さんに言われて俺はこうやって助けを呼びに来たんだ………」

それを聞くと、香織は浩介を放り投げるように放すとハジメに振り向き、

「ハジメ君……!」

懇願するような表情でハジメに呼びかけた。

「そんな顔をしなくても大丈夫だ………おい遠藤、経緯は行きがてら聞いてやる! さっさと案内しろ!」

「えっ………? 南雲………?」

浩介が声を漏らす。

すると、

「俺の客は………」

通路の方から声がして、私達はその方を振り向くと六十歳過ぎくらいのガタイのいい左目に大きな傷が入った迫力のあるオッサンが出てきた。

私達はそのおっさんが支部長だと判断し、

「パチン!」

私は指パッチンするとハジメは最初に手紙を投げ渡して次に私達は其々自分のステータスプレートを投げ渡す。

ホルアドの冒険者ギルドの支部長は慣れた手つきで全て受け止めて手紙を読む

「悪いが先約が入った!」

アンタの名で勇者パーティーの救出の依頼を出しておけ!」

「私達はブルックの受付嬢のキャサリンさんの紹介冒険者パーティー

です。

ので身勝手ながらその依頼の勇者一向の救出に向かいます！」

「そうか、任せておけ」

「後テイオ！ ミユウを頼む！」

「ふむ承知したのじゃご主人様よ」

「行つてらっしゃいな」

ハジメはそう言うと言座り込んでいる浩介のコートの襟を掴んで引きずりながら迷宮の入口へ向かう。

私も雫ちゃんに生徒会メンバーには会いたいから直ぐに迷宮に向かう

オルクス大迷宮に辿り着くと浩介は直ぐに先頭

「えつと……こつちだ！」

私達を案内するけど

「ちよつと待って」

私は止める。

「会長どうかしたか」

「浩介君、救助は早い方が良いよね？」

「そんなのは当たり前だよ。」

「だから……」

「だからショートカットを今すぐ作ろう」

私は指を下に刺した。

「何を……」

「なるほどな」

ハジメは理解したのか口元が緩む。

「雷槍！」

「はい！」

「穴を掘りたいから今すぐ雷を使って索敵して」

「分かりました」

雷槍は両手を地面に付いて目を閉じる。

直ぐに雷槍の周りに電気が走って目を開けると一気に電気が走った。

電圧は微弱で身体には何も影響がないが

「見つけました」

オルクス大迷宮のほぼ全体に広がって居る為に直ぐに皆を見つけたように

「直ぐに案内して」

「分かりました」

雷槍が先頭で走り出した。

私達も付いて行くが

「え、ち、待った」

遅れて浩介も私達を追いかける。

私達は移動していると少し開けた場所に到着して

「この真下です」

「分かった。」

黒花、アテナに「ケントロスパイカー」を」

「はい、お任せを」

「ギアトリンガー」と「キョウリユウジャーギア」を取り出して

『37バーン!』

『ババン!ババン!ババン!ババン!』

『font:94』ババババン!キョウリユウジャー!』

キョウリユウジャーの幻影が現れて其れが光の球になりアテナに入って手には「ケントロスパイカー」持って

「そんで

「Croitzalronzell Gungnir zizz
l」

と歌い「ガングニール」を纏い

「そんじゃあ行くぞ」

アテナはオルクス大迷宮の天井ギリギリに飛んで「ガングニールのアームドギア」と「ケントロスパイカー」を下に向けて「ガングニールのアームドギア」と「ケントロスパイカー」を地面に刺す。

★《xbig》GRAVITY∞PAIN

地面を物凄い勢いで掘り始めた。

直ぐに地面を掘っているアテナの光が見えなくなる位の深さになっっている。

「そんじゃ行こう」

「ああ」

「ん」

「はいです」

「了解です」

「分かりました」

「はい」

「分かったわ」

「分かりました会長」

私の呼びかけに上からハジメ、ユエ、シア、チロル、黒花、雷槍、優花、牙十郎が返事するが

「ちよつと待てい！」

浩介に止められた

「なんだ遠藤行き成り呼び止めて」

「いやこの高さを飛び降りると正気の沙汰か

一応俺達この世界ではチートだけど死ぬぞ!」

「大丈夫だ」

ハジメは浩介の後ろに回り

「大抵なんとかなる」

浩介を蹴って

「え？」

浩介を穴に落とす。

「うあああああ!?!」

「ハジメ君!?!」

「なんとかなるだろ

実際俺でもなんとかなったし」

「いやあの時は鉄砲水がクッションになっただけで今回は何も無いから」

「あ!?!」

「忘れていたのね。」

「私が何とかするから」

「私は穴に飛び降りる」

道中で

『ワシキュータマ』

『セイ・ザ・チェンジ』

「スターチェンジ!」

ワシピンクに変身して翼を広げて落下速度を上げる。

徐々に

「うわあああああ!」

聞こえて来て来ている服と影の薄いせいで認識しにくいのが浩介が見えて来る。

そして同時に穴の終点も見えて来る。

私は一気に加速して

「浩介君!」

浩介を捕まえて

「か、会長!?!」

穴の終点が見えて私は横に一回転しながら穴を出て一気に翼を広げて体を方向転回して一回浮上してからアテナの横に着地する。

「お、翼愛が先に到着したか。」

「其れに何で浩介、翼愛に抱きついてるんだ?」

「ハジメ君が蹴り落として私が急いで回収した結果かな」

「し、死ぬかと思った」

私は浩介を離して前を見ると魔物と赤髪の魔族が居たので

「それで……」

私は振り返ると

「皆ただいま」

「「「「「「会長!?!」」」」」」」」

皆驚いて居た。

「鷹音ちゃん、刷庫ちゃん、ルーズちゃん、久しぶり」

「か、会長、迷宮の下の方に落ちて行ったんじや」

「迷宮の下に出口が有ったから其処から出たの」

「「「「「出口!」」」」」」

皆は何のことか事が分からないようだが

「出口だと!？」

まさか」

魔人の女は別の意味で驚いて居た。

「その様子じゃ大迷宮の真の意味を知って居るみたいだね。

其れとクリアしたのは私達だけじゃないから」

私は浩介の手を握って私達は数歩、歩くと穴から砂が降ると香織、ハジメ、ユエ、シア、チロル、雷槍、黒花、優花、牙十郎の順で降りて来た。

再開の救助 前編

私は浩介の手を握って私達は数歩歩くと穴から砂が降って来た

最初に穴から「LBCS、オーディーンMk-2」を纏った香織、次にジユウオウザワールドに変身したハジメが穴の壁に爪を立て減速しながら降りて来て、ユエは何もせずに落下してハジメが優しく受け止めた。

シアも何もせずに落下して来た。

先に穴からベロが出て来てシアを捕まえて着地させる。

其の後、チロルはハジメと同じ方法で降りて来た。

雷槍、黒花、優花、牙十郎は其々の武器や高い身体能力で降りて来た。

ハジメは変身を解除して雫の方を見て

「相変わらず苦労してるようだな。八重樫」

何の迷いも無く雫の苗字を言う

当の本人は行き成り苗字を言い当てられてその上知り合いに言うように相変わらずを言われた為、色々混乱し始めた。

けど、次の瞬間に戻った

何故なら、香織が「LBCS、オーディーンMk-2」を解除して

雫に振り向くと、

「雫ちゃん!!」

雫の名を呼んで直ぐに雫を抱きしめる。

雫は誰なのか直ぐに分かったのか

「……………香織っ……………!」

「うん……………!」

「そうだよ……………!」

「私だよ……………!」

「雫ちゃん……………!」

香織は感極まった声を漏らしながら、雫を抱きしめる。

「遅くなってごめんね……………!」

でも、間に合って良かった……………!」

「ホントよ……!」

4ヶ月も何処ほつつき歩いてたの……!?!」

感無量で軽口が出ていた。

一時避難して居た浩介が私達の後ろに居た光輝達に
「皆……!」

助けを呼んできたぞ……!」

浩介がそう言った。

「」「遠藤（君）!?!」「」

クラスメイト達が驚く。

ハジメが一通り辺りを伺うと、

「香織、怪我した奴を治療してやれ」

香織に言う。

「うん、分かったよ。

ハジメ君!」

香織の口から出たその名前に雫は驚愕した。

「へ?」

ハジメくん?

って南雲くん?

えっ?

なに?

どういうこと?」

雫はハジメを見つめる。

まあ、話し方や鋭い眼光は、元の世界で大人しかかったハジメとは思えない。

「えっ?」

えっ?

ホントに?

ホントに南雲くんなの?

えっ?

なに?

ホントどういうこと?」

「いや、落ち着けよ八重樫。」

「お前の売りは冷静沈着さだろ？」

「そうだよ。」

「それは私が保証するから」

「雫は混乱してハジメと私がツツコミを入れる。」

一通り驚いて少し落ち着きを取り戻した雫は自分達の状況を思い出したように

「ツ……………」

「痛う……………」

私達が来る前に受けたダメージが大きかったのか身体に痛みが走っていた。

「あつ、ごめん雫ちゃん！」

「すぐ治すね！」

香織はそう言って立ち上がると左手に持っていた杖を掲げ、

「回天！」

詠唱も魔法陣も使わずただ二言だけで香織は異なる魔法を2つ同時に行使した。

杖に宿った光が雫達クラスメイトとメルド団長だけを包み、傷を癒していく。

先程まであったクラスメイト達の体の傷が、

「これは……………」

「傷が……………」

最初から無かったように消えた。

そして、浩介の言う通りに瀕死の重傷を負っていたメルド団長さえも、ほぼ完璧と言えるほどにまで回復させていた。

クラスメイト達全員驚いていた。

そして

「……………う……………」

重症だったメルド団長が気が付く。

「生きているのか……………俺は……………」

頭を押さえながら身を起こす。

「ええ、生きていますよメルドさん」

私はそう言つて

「メルドさん……………」

光輝が安堵した表情でその名を呼ぶ。

「…一瞬であれだけの人数を回復させただと…………死にかけの騎士まで…………!?!」

魔族の女は香織の治癒魔法の力に驚きの声を漏らす。

何せ先程香織が使った魔法は中級範囲回復魔法の回天だ。

それを並の治癒師達が使う上級回復魔法以上の回復力を見せた。

でも、南雲は当たり前前に

「ユエ、あそこで固まってる奴らを頼む」

「其れじゃあ私は牙十郎君と優花ちゃんとユエちゃんと一緒にクラスメイトの元に行くね」

「好きにしろ」

シアはそこに居る騎士の男を」

「ん…任せて」

「了解ですう!」

「其れじゃあ、牙十郎君、優花ちゃん行こうか」

「ええ、会長」

「そうね」

「残りのアテナ達は…………手伝え」

「おう、任せておけ」

「分かりました。」

ハジメ先輩」

「分かりました」

「了解です」

それぞれに指示を飛ばして移動する。

私は浩介君の手を握つて

「雫ちゃん、私達も」

香織に促され、雫は立ち上がる。

シアは血を大量出血で貧血を起こしているメルド団長をヒョイト

担ぎ上げる。

「うおっ?」

メルド団長が驚く。

そのまま私達はクラスメイト達が固まっている場所へ駆けていく。

ハジメ達は

「その魔族。」

死にたくなければ、さっさと消えろ。

今すぐ去るなら追いはしない」

ハジメやしい慈悲の掛け方なんだけど

「何だって?」

この状況を分かって行ってるのかい?」

魔族の女はご自慢の魔物が複数いる為楽観的になっている

「其れよりもよくもアハトドを殺ってくれたね。」

あいつは特別な魔物で…」

魔族の女は何か言いかけたが

「戦場での判断は迅速にな」

ハジメは無駄話は無用と言わないぶりに切り捨てて

「殺れ」

魔族の女は魔物達に指示する

「やっぱり今のハジメ君の慈悲の掛け方は伝われにくいね」

「あの物言いで何人が大人しく退くか疑問だけどね」

「其れにあっちはまだ余裕な戦力ですし」

魔族の女の反応に、私、優花、牙十郎は呆れた様にそう零す。

「大丈夫だ

そこに居ろ」

ハジメがわざと視線だけ後ろに向けると

ハジメ達の四方から空間が揺らめいて

ハジメはドンナーを出して左側、アテナは一瞬で「エリザ・ツェリ

スカの魔法少女の姿」になって五連ライフルを後ろに構えて、黒花は

「ギアトリンガー」を取り出してハジメの反対側の右側、チロルは両手

を前に出して

「ベロ、ベル！」

「ワン」

髪の毛からベロとベルが出て来てチロルの両手に髪の毛が巻きついて大きな犬の顔になって、雷槍は「銃撃」を取り出して上に向けて受雷針ダートを真上に撃った。

ハジメ達は其々の武器を揺らめいた空間に突き出した。

すると揺らめいた空間からキメラが四体が現れて其々の武器でキメラの動きを完全に封じた。

更に黄色のベルカの魔法陣が現れては鎖状のエネルギーが出て来て真上から襲って来たキメラを拘束して

「おいおい、何だ？」

この半端な固有魔法は。

大道芸か？」

「……………動くだけで空間が揺らぐなんて、稚拙にも程があるぞ」

「奈落じゃもつと凶悪な隠蔽能力を持った相手もいましたから」

「簡単に分かりました」

「ですね。」

ボルティックチエーン！」

を合図に其々の武器でキメラの頭部を粉碎する。

更に鎖からも電気が流れてキメラを炭に変える。

次に二足方向の魔物の群れが襲って来るがハジメ、黒花、アテナ、雷槍、チロルは慌てずに変身アイテムを取り出して

『オーズ』

『SCULL』

『ジャンプ！』

『ジャパニーズウルフ！』

『ロックオン♪♪』

「二変身！」

『『フォースライズ！』』

『カヒュン、カモーン!!』

『ライジングホッパー!』

『ジャパニーズウルフ!』

『SCULL!』

”A jump to the sky turns to a rider kick.”』

『オースアームズ!』

『Break down……』

『タトバ・タートバー!』

仮面ライダーに変身してハジメは宝物庫から仮面ライダースカルの白い帽子を被ってからドンナーと「スカルマグナム」、黒花は「Weier Zauberer」と「Schwarze Hexe」、雷槍は「メダジャリバー」を出した。

チロルは仮面ライダー亡のブーツ隙間から自身の髪の毛を出して巨大な爪を生成した。

そしてハジメ達が動いて

ドパパパパパパン!

ハジメと黒花は素早くドンナー、「スカルマグナム」、「Weier Zauberer」、「Schwarze Hexe」を周囲に発砲。

ハジメと黒花のあまりにも早い動作に私達は分かったが雫達の間では何をしているのかが分からなかった。

撃たれた二足歩行の魔物が今更ぐらりと揺れて地面に倒れ伏した。其れでも魔物達は止まらずに突撃する。

今度は黒花、チロルが前に出てその後ろに雷槍が「メダジャリバー」を構えて待機する。

『ゼツメツ』

『ライジング』

『デイストピア!!』

構えを取った瞬間、一瞬で消えた。

突撃する魔物達の周りに白い線と黄色の線が現れては目にも止まらない速さで攻撃をして突撃して来た魔物を宙に浮かして

雷槍は「メダジャリバー」に「セルメダル」を三枚入れて「オース

キヤナー」で

『トリプル・スキヤニングチャージ』

スキヤンする。

そして

「ハァー！」

一撃で全ての魔物を横一線で振るった。

横一線で振るった魔物達は空中で止まって後ろの背景ごとズレ始めてある程度止まると魔物達以外後ろの背景が元の位置に戻った瞬間にズレた魔物達は爆散した。

魔物達は其れを見ても恐れずに突撃するがハジメ達の敵では無く作業をする様に片付ける。

其れを見ていた光輝達は

「何者なんだ……彼は？」

光輝が呆然と呟く。

香織の話聞いて無かったのかな？

とは言え光輝が知って居るハジメとはかけ離れているからしょうがないか

其れを聞いていた浩介が

「はは、信じられないだろうけど……あいつは南雲だよ」

そう言う。

「「「「………は!?」」」」」

その言葉に、光輝達だけではなくメルド団長までも素っ頓狂な声を揃えて浩介の方を向いた。

浩介は

「だから南雲だよ！」

あの日、橋から落ちた南雲ハジメだ！

迷宮の底で生き延びて、会長達と合流して一緒に自力で這い上がってきたらしいぜ。

俺も思うけど……事実だよ」

「南雲って、え？」

南雲が生きていたのか!？」

「信じらんねえ……」

浩介の言葉に光輝や龍太郎が驚愕の声を漏らす。

「会長やアテナさんは見た目は変わっていないけど、他は見た目とかめっちゃ変わってるから無理も無いよな……」

浩介がそう付け加える。

すると、

「う、うそだ。」

南雲は死んだんだ。

そうだろ？

みんな見てたじゃんか。

生きてるわけない！

適当なこと言ってるじゃねえよ！」

顔を青ざめさせた檜山が浩介の胸倉を掴んでそんな事を言いだした。

「うわっ、なんだよ！

ステータスプレートも見たし、

本人が認めてんだから間違いないだろ！

其れにハジメを助ける為に足にロープを括りつけて落ちた会長も

一緒に致し」

「うそだ！

何か細工でもしたんだろ！

それか、なりすまして何か企んでるんだ！」

檜山は慌てながら否定する

「いや、何言ってるんだよ？

そんなことする意味、何にもないじゃないか」

浩介はそう言うが檜山は聞く耳を持って居なかった

檜山はハジメが生きていたことが信じられないというより、生きていたという事を信じたくないと感じる節がある。

浩介の言葉に尚も否定の言葉を紡ごうとした時、

「ドバン」

と音が鳴ったかと思うと、檜山の顔のすぐ横をすさまじい衝撃と共

に何かが通過した。

「……………」

その衝撃に檜山は固まる。

すると、

「大人しくしてくれないかな……………」

私、ハジメ君ほど銃の扱いが巧い訳じゃないから、下手に動く間違って当たっちゃうかもしれないよ……………」

それは、冷たい瞳で檜山を見下ろして右手に「ヴァイス」を構えた香織の姿だった。

次の瞬間、檜山の背後に豚型の魔物が現れ、ゆっくりと後ろに倒れる。

「か、香織……………」

光輝が呆然と呟く。

驚くも無理もない

香織がいきなり銃を抜いて発砲するとは思わなかったからだ。

私は「音銃剣錫音」を取り出して檜山の肩を触つて

「檜山君」

「ひいいい!?!」

「君には色々と聞きたい事が有るんだけど良いかな?」

「か、会長!?!」

「きききき、聞きたい事は?」

「此れが終わったらね」

私は指を口元に運んで静かにとサインした

弾丸裁判

私が指で静かにとサインしていると

「来るぞ!!」

メルド団長の切羽詰まった声が響いた。

私達は見ればハジメには敵わないと悟ったのか、魔物が私達に迫ってくる。

雫を人質に取ろうという魂胆なのだろう。

「また来た!」

結界の修復!」

「ぐっ…」

死んでも通すか」

鈴、恵里が動くが

ユエが前に出て

「大丈夫」

と言ってユエの周りに魔力が集まり

「蒼龍」

ユエが紡いだ一言。

その瞬間、集めた青い炎の龍が現れ、近付いてきた魔物達を焼き尽くした。

其れでも火炎耐性を持って居る魔物、魔法の範囲以外にいた魔物達は迷いも無く突撃して来る。

其れを見ていた光輝達は武器を取り出したが。

「必要ないよ」

私達が前に出て其々の武器を取り出す。

『変身致しまゝす 白線の内側に下がってお待ちください』

シアの「トツキユウチェンジャー」の音声と共に、私達の足元から白線が出現する

魔物側も白線が現れたが、其れでも魔物は無視して

『ドライバーオン ナウ』

「エマーゼンシー!」

『シャバドウビ タッチ ヘンシン シャバドウビ タッチ ヘンシン』

「LBCSコネクト！」

「変身！」

「レーヴァテイン」

『チェンジ ナウ』

「デカマスター!!」

「オーデインMk-2！」

「セットアップ!!」

「トツキユウチェンジ！」

シアの「トツキユウチェンジャー」から「イエローレッシャー」が飛び出して魔物達に攻撃して怯ませる。

その間にも私達の変身が続き

「フェイスオン！」

『カウンターステム起動、スキンフィールド展開、コネクト・コンプリート』

『font:ul20』Ein^{セツ}ri^トch^{アツ}tun^ブg『font』

『トツキユウ3号』

「百鬼夜行をぶった斬る！地獄の番犬！デカマスター！」

「変身完了です！」

『トツキユウ3号』

変身が完了して其々の武器を取り出す。

怯みから立ち直った、魔物は直ぐに私達に向かう。

私は「レーヴァテイン」を居合切りの構えを取って「レーヴァテイン」のカートリッジシステムが

「バッシュ」

一回だけ作動して

「恋の呼吸、壱ノ型」

『font:ul20』Schlange, deissen!『font』

「初恋のわななき」

と居合切りを繰り返す。

「レーヴァテイン」の刀身は蛇腹状になって広範囲に刀身が伸びて魔物達を切り裂く。

あんまりの早さに切り裂かれた魔物は形を保ったまま私の後ろの牙十郎達に向かう。

牙十郎達は私が切り捨てられているのを理解して敢えて無視する。魔物達は無視されているのを構いなしに攻撃を繰り返すが。

其処で初めて切られた事象が少し遅れてやってきて牙十郎は速攻で抜けて血を被うことなく通り過ぎて魔物の死体はユエの前で止まった。

其れでも魔物はまだ居て私は敢えて「レーヴァテイン」を鞘に戻して止まって

「其れじゃあ最後は決めてね」

「了解」

私は牙十郎達に任せる。

牙十郎は

「Dソードベガ」

を腰からぬき、封印を解除すると、黒ずんでいた刃が美しく光る。更に

「日の呼吸、陸ノ型、日暈の龍・頭舞い」
を繰り返す。

前に居た魔物達は豆腐を切り捨てるように簡単に斬られる。

魔物達は正面からやるのは分が悪いのを理解して牙十郎を囲むが「させるつもりは無いでしょう」

優香は「シユルシャガナ」から出来たマフラーから無数の小型の丸鋸の刃が出て来て其れを

α

式 百輪廻

投げた。

投げられた無数の小型の丸鋸の刃は牙十郎を避けながら魔物達に炸裂して切り刻む。

一方でシアと香織は先にシアが

「ハァー！」

シンゴウハンマーを地面に叩きつけると、シンゴウが青から赤に変わり、衝撃波で多くの魔物を宙に浮かして、香織が「LBCS、オーデインMk-2」の自慢のスピードで切り捨てる。

全てを切り捨てるのと其処で初めて魔物達はバラバラに崩れ落ちる。最後の巨大な亀の魔物が口を開けながらこっちに向けて砲撃を放とうと魔力を集めていた。

私は「レーヴァテイン」を鞘から抜刀して鞘を合わせると又カートリッジシステムが

「バツシュ」

一回だけ作動する。

『font:ul20』 Bogenformen『font』

弓矢になって魔力矢を生成して私は構えて

「翔けよ、隼！」

の掛け声共にカートリッジシステムが

「バツシュ」

作動する

『font:ul20』 Sturmfalken.『font』

魔力の矢を放ち炎の隼に変わり魔力を籠めていた巨大な亀の魔物の口の中に弾着すると忽ち巨大な亀の魔物は一瞬で膨張して爆発した。

私は「レーヴァテイン」を仕舞ってハジメ達を見る。

ハジメ達は簡単に魔物達を蹂躞する。

流石にこれ以上見てられずに

「地の底に眠りし金眼の蜥蜴」

詠唱を始める

「大地が生みし魔眼の主」

魔人族の女の周りに魔力が集まる。

「宿るは暗闇見通し射抜く呪い」

魔人族の女の詠唱を邪魔されないように残りの魔物達を突撃させ

る。

「もたらすは永久不変の闇牢獄」

ハジメ達は変わりなく魔物達を倒す。

「恐怖も絶望も悲嘆もなく」

魔人族の女は両手を上げると集めた魔力の濃度がさらに上がった。

「その眼を以て己が敵の全てを閉じる」

「そう言えば光輝君あの詠唱て何の魔法?」

私は危機感無しで魔人族の女に指さす。

「残るは終焉」

「この詠唱は…」

光輝は詠唱の終わり部分聞いて何かの魔法思い出そうとして

「物言わぬ冷たき彫像」

詠唱がほぼ終わりかけの部分で

「まずい」

今更思い出して

「石化魔法だ!!」

南雲気を付ける!!

その魔法は絶対に食らうなよ!

上級魔法だ!」

そう言うが

「ならばものみな砕いて」

ほぼ完成して居て

「大地へ還せ」

詠唱が完成して

「落牢!!」

集めた魔力が煙に変わってハジメ達に向かって来た

チロルとアテナは躲すがハジメ、黒花、雷槍は躲さず其のまま石化の煙に包まれる。

「南雲君!!」

「南雲………!」

雫や光輝が叫ぶ。

「だけど、私達は全く慌てなかった」

「魔族は直ぐに逃げろろうとしたがチロルとアテナが逃げ道を抑えて其々の武器を向けう」

「まあいい。」

「三人を石化しただけで魔族にお釣りが来る」

「と魔族の女はそう言うが」

「其れは石化の煙が消えてから言うものだぞ」

「石化されていないハジメが魔族の後頭部に〔スカルマグナム〕を突き付ける」

「魔族の女は振り返って何か悟る」

「すでに詰んでいた訳だ……………」

「その通り」

「石化の煙から石化して居ない黒花と雷槍も出て来て其々の武器を突き付けた。」

「上級魔法が意味を成さないなんて、アンタ達、本当に人間？」

「実は、自分でも結構疑わしいんだが、俺の他にも出来る奴が居るんだ。」

「多分人間だわ」

「……………化物め……………」

「魔族の女は忌々しそうに呟く。」

「殺す前に聞いておく。」

「何が目的で此処に居る」

「見ればわかるだろう？」

「勇者一味を殺そうとしていたんだよ。」

「最初は魔族側への勧誘だったけどね。」

「勇者が想定より厄介で予定を変更したのさ」

「…本当にそれだけか？」

「如何いう意味だい？」

「勧誘だけなら大迷宮の深部でする必要が無いだろ」

「それにこの魔物の数、迷宮を攻略していたのは明らかだ。」

「だからと言って迷宮の攻略中に偶然遭遇した訳でもない」

「明らかに勇者一味の勧誘はおまけ程度しかない」
私達もハジメ達の元へ行く

「さあ何が目的が吐いてもらおうか？」

「…人間族の有利になるような事を話すと思うのかい？
バカにされたもんだね」

ハジメはその言葉を聞くと銃口を少し下げ、

「ドンドンッ」

2発発砲する。

「あがああ!!」

魔族の女は足を撃ち抜かれ、その場に倒れ込む。

「人間族の事、何て知ったことか。」

俺が知りたいから聞いているんだ」

「この程度で口を割るとでも」

私は「音銃剣錫音」を取り出して

『銃奏！』

銃奏モードにして

「でしようね。」

其れに貴方は軍人だし割る事は無いと思うし、痛覚や快樂などの耐性も高いと思うし」

私は「音銃剣錫音」を構える

痛みを我慢しているのか歯を食いしばり。

「分かって居るんじゃないの」

「……」

なら俺の予想を言おう」

ハジメは殺されて居る魔物を見て

あの魔物達は、神代魔法の産物だろ？」

魔族の女は動揺して目を見開いた

ハジメはお構いなしに

「魔族の魔物が急に強くなったのは其れで説明がつく。

七大迷宮の一つを攻略した奴が居るって事だ。

神代魔法は強力だからな、直ぐにでも次の神代魔法を手に入れよう

と動くはずだ。

「そんな中、勇者達がオルクス大迷宮にいる情報を耳にする。其処で魔人族おまえたちはこう考える筈だ。

敵として戦うより戦力しての駒にしよう。

迷宮の攻略は困難を極めるからな。

勧誘に成功すれば人間族の戦力も大幅に減らしつつ迷宮を攻略できる可能性を大きく上げる事が出来る。

つまりお前の目的はオスカーオルクスの隠れ家を見つける事違うか？」

魔人族の女は全て言い当てられて悔しそうにして

「やはり、迷宮の攻略者は嘘だと思っていたが。

やっぱりあんた達も迷宮の攻略者って事か…

あの方と同じなら、その強さにも納得がいくよ」

「あの方…：…ね。

その魔物はそいつからの大切な贈り物だったわけか」

「…もう、いいだろ？」

殺りなよ。

こんな所で死ぬのは悔しいが…

南雲君は聞きたいことは聞き終えたと言わんばかりに銃を構えなおす。

「あたしの敵は恋人が取ってくれる」

「あの世で仲良く再開させてやるよ」

ハジメは引き金に指をかける。

でもその時、大声で静止がかかった。

「南雲！

待てくれ！

光輝が止めに入る

「…：…」

私達は光輝の方を見る

「彼女はもう戦えないんだ…

殺す必要はないだろ！

俺は勇者だ。

無抵抗の人を殺すなんて、絶対ダメだ。

南雲達は仲間だろ？

ここは俺に免じて引いてくれ。

そうだと捕虜にすればいい。

そうすれば更に情報も引き出せる筈だ」

私が居なくなっても相変わらず光輝君は人間の善意だけを信じている。

そろそろその感情異論は卒業なんだけどね。

「人間族は厄介なのを抱えてるね」

「まあ否定できないけどね」

「言っただろ。」

人間族の事何て知らねえよ」

「あー！」

私は思いついて

「ハジメ君、彼女の処分は私に任せてくれない？」

「別に構わないが」

と言って「スカルマグナム」を引いた

「南雲、分かってくれたのか」

光輝はそう感じていたが

「はあ？」

何を勘違いしている。

俺は翼愛が殺したと言って言っただけだから譲っただけだ」

「な、何を言っているんだ」

光輝は何の事か分かって居なかった

「香織ちゃん、メルドさんの容体は？」

「大丈夫だよ」

「ならメルドさんをこっちに連れて来て欲しい」

「分かった。」

メルドさん行けますか？」

「ああ行けるぞ」

メルドはこっちに来た。

私は目を細めるとメルドは私が此れからやる事に気が付いて

「好きにしろ」

「有り難うございます」

私は魔族の女の方を見て

「悪いけど教材になってもらうから」

「好きにしな。」

もうあたしが出来る事がないから」

魔族の女からも許可を戴いて

私は息を軽く呼吸して

「此れより弾丸裁判を行う。」

弁護士無し、検事無しただあるのは判決を下す裁判長のみ。

そして裁判長はこの場で一番最高指揮権を持つハイリヒ王国騎士

団団長、メルド・ロギンス団長

私の判断に承認しますか？」

「承認する」

「分かりました。」

続いてトータスの創世神のエヒトに選ばれし神の使途の一人、遠藤

浩介」

「お、俺!？」

行き成り呼ばれたことに驚いていた

私は浩介の方を見て目を細めながら

「この魔族の女の罪状を読み上げを」

言う

私の目を見て

「あー!」

理解して

「その女は俺達を最初、勧誘と言う名の誘拐をしようとしたんだが光輝がそれを蹴って交渉決裂して俺達を殺そうとしたんだ。」

それで俺は応援を呼ぼうと一時前線を離脱したが其れに気が付いて魔物を仕向けてメルドさんと合流した俺達を殺そうとしてメルド

さんはアランさん達と協力して俺を逃がそうと殿をしてくれただ
そう聞いて私は

「魔族の女、遠藤浩介の言葉に間違いはあるか？」

「いや無いね。」

やけに影が薄い奴が逃げていたから魔物は仕向けたよ」

「メルド団長は」

「ああ、その魔族の女の言うとおりで」

「双方の確認が取れた。」

其れでは判決を取る前に刑の内容を言う。

魔族の女、貴方が行った行為は重罪

なので処刑する前に貴方は王都に連れて行かれて城の拷問部屋に
で言論弾圧した後アカウント凍結してから削除案件してから処刑
する。

更に事故案件しながら禁止案件にされる」

私は念の為に見分色の覇気を使うとハジメ達以外のクラスメイト
達は青くしていた。

「ま、待ってくれ翼愛其れはやり過ぎだ」

案の定、光輝が待ったを掛けた。

私は其れを利用して

「勇者の慈悲で貴方に掛る刑をある程度軽く出来る。

貴方は何を望む

なお貴方はハイリヒ王国騎士団を殺した為、釈放は出来ない」

「其処は承知しているよ。」

ならひと思いにあたしを殺しな」

「其れが貴方を望みなら承りました

其れではメルド団長、判決を」

「ああ、判決を下す。」

汝、有罪、刑はこの場での斬首刑、処刑執行人は鞆波・A・翼愛に
決める」

私は「音銃剣錫音」を仕舞って「レーヴァテイン」を抜刀して
「レーヴァテイン」非殺傷設定を解除」

『font:ul20』Ja^{はい}『font』

「レーヴァテイン」を構える。

「ま、待て翼愛」

殺しは良くないだから…」

「これはメルド団長の命令」

勇者光輝の命令では取り消す事は不可能」

そう言うのと光輝はメルドの方を見て

「メ、メルド団長…」

メルドを使って私を止めようとするが

「これからお前たちに……特別授業を行う、心して聞け

戦に勝利した者の責務と、そして敗れし者の運命を」

メルドも無駄だと分かり私を止めようと動こうとするが

「チロル、勇者を止めろ」

「了解」

チロルが光輝を取り押さえ

「ベロ、ベル」

「ワン」

そう言うのとベロとベルは光輝を拘束する拘束道具にする。

「其れとチロル、勇者が目を閉じたり背けないように抑えなさい」

「はい」

チロルは私の言うとおりに拘束して私の方に向かせた。

「や……やめてくださいメルドさん」

翼愛も今すぐやめろ」

光輝はそう言うが私は無視して刀を振ってから魔族の女に背中を見せる。

「翼愛、分かってくれたのか」

光輝は安心するがもう斬った

「母さん直伝、水の呼吸」

私はそう言いながら「レーヴァテイン」をゆっくりと鞘に戻すと同時に魔族の女の首が

「え…」

少しずつズレて行く

「伍ノ型、干天の慈雨」

「パチン」

の音とともに魔人族の女の首は落ちてその後血が噴水の様に出血した

「目を閉じるな！

よく見て置け！

これが戦いに勝つということだ！」

戦闘終了後

一振りの斬撃が魔人族の女の命を奪った。

その事実には、周りのクラスメイト達は沈黙する。

目の前で明確な人死を見たのだ、それも仕方ないだろうが。

何故か檜山は腰を抜かしているが。

しかし、雫を始めた大半は自分達を殺しに掛かってきた相手だと割り切ろうと努力しているように伺える。

それを殺した私を非難するのは間違っていると頭では分かっているのだろう。

それでも多少は思う所はあるようだが。

全員が変身を解除すると

「お疲れ様、ハジメ君」

ハジメを白崎さんは労わる。

「おう……香織もよくやった。

ユエもありがとな。

頼み聞いてくれて……」

「んっ」

3人の周りに桃色空間が発生する。

「3人とも空気読んで下さい！」

ぞろぞろ集まって来ましたよ！」

シアが突っ込むと、メルド団長を含めたクラスメイト達が集まってきた。

「……翼愛、何故彼女を……」

天之河が私に何か言いかけた所で、

「香織！」

さつきも言ったけど、本当に無事だったのね！」

遮る様に雫が香織に駆け寄って改めて再会の感動を噛み締める。

「うん。」

ハジメ君と翼愛ちゃん達と一緒に戻って来たよ！」

その言葉に雫はハジメに向き直り、

「南雲君も無事でよかったわ。」

生きててくれて安心した……」

「……香織を悲しませるわけにはいかないからな……運の割合もデカかったとは思うが……意地で生き延びた」

ハジメはそう答える。

「優花と牙十郎君に翼愛、アテナ、黒花、雷槍君も元気そうで安心したわ」

「久しぶりの生徒会長だ」

ルーズは私に抱きついて。

「会長、牙十郎君もお久しぶりです」

「プリキュアに変身する会長があれ位で死ぬとは思えなかつたです」

鷹音と刷庫も来た

「私に掛れば皆と協力して奈落から抜け出したから」

久しぶりの会話をして居ると

「なぜ、なぜ殺したんですか、殺す必要があつたのか……」

呆然と、私へと訴えかける光輝。

「メルドさん」

「ああ、分かつて居る」

「ここでメルドはようやく隠していた事実を伝える。」

「この女はな、アラン達を殺したんだ……それでも許せと言いたいのか？」

「……」

「ならば仕方ないと思つたのか……もしかして」

虚ろな光輝の瞳の中に、メルドは答えを読み取つた。

「だったらお前の命への拘りもまたその程度だったということだ」

光輝の迷い、苦しみを十二分に理解していながらも、あえて突き放すメルド。

その拳が僅かに震える、光輝がメルドを兄と慕うのと同様、またメルドも光輝を

弟のように思っていたのだから……だからこそ、その甘さ、浅さをあえて衝いた、

衝かざるを得なかつた。

「違う……違う……こんなの……」

しかし、そんなメルドの想いとは裏腹に、光輝は未だ優しい理想郷の中にいた、

自分の理想郷を侵す者は排除せねばならないと考えがあり……そしてその矛先は……

「……何故だ、何故……あんなに優しくかった君が人を殺してしまったんだ！

翼愛っ！」

光輝の叫び、いや駄々など

「私達はこの世界の法に従いハイリヒ王国騎士団長のメルド・ロギンス団長の命令に従っただけ。

其れ以外無い」

私は歯牙にも掛けない。

其れに殺さず捕虜にすれば魔族の女がどんな悲惨な運命を辿ろうが安易に想像しやすい

何より私は好んで処刑人になるつもりもなかったし、ハジメに必要な殺しを、させたくもなかった、そんなことをしたところで自分達の世界に帰る日が遠のくだけだ。

そのことを、光輝は果たして気が付いているのだろうか？

其れに自分がメルドに”守られた”ということに。

「それでもっ、クラスメイトである限りは、リーダーであるこの俺の言葉に、従うべきだっ！

少なくとも戦闘中は」

「其れは違う。

○○高校の生徒会長並び二年??組のクラス代表は私、鞆波・A・翼愛だ

いつから光輝君が二年??組のクラス代表になったの？」

私は鷹音達を見る。

「えっと〜」

ルーズは気まずそうに眼を泳がせており

「すみませんでした」――〇／―― 土下座

刷庫がスピーディな土下座をして

「大迷宮から出て最初にクラスメイトのアフターケアに奔走して居たんですが」

今度は鷹音が

「光輝君がいつの間にかリーダーになつて居ました。

止めようと動いたんですが……」

理由を言つて

「えつとつまり光輝君のカリスマ高すぎて？まれたのね」

「はい、すみませんでした！」

「別に構わないよ。

今まで私が抑えていたから私と牙十郎が居なくなつて暴走し

ちやつたからね」

私達は光輝を見る

「ち、違う、翼愛と牙十郎が居なくなつたから代わりに俺が……」

「悪いけど、私達は頼んだ覚えが無い」

私は生徒会方を見ると全員首を横に振るつた。

「だそうだ」

「そんな……」

と落ち込んでいると

「……くだらない……ハジメ、カオリ……行こう？」

其れを見ていたユエがバツサリと冷たい声色でそう呟いた。

「あー、うん、そうだな」

「そうだね、これ以上問答しても意味無いし」

ハジメも香織もその言葉で光輝から興味を失つたように視線を切る。

だが、

「待て！」

まだ話は終わっていない！

南雲達の本音を聞かないと『仲間』として認められない。

それに、君は誰なんだ？ 助けてくれた事には感謝するけど、初対面の相手にくだらないなんて……失礼だろ？

「一体何がくだらないって言うんだ?」

「……」

ユエは言葉を交わす価値も無いと判断したのか顔を背けるだけで何も言わない。

だが、

「光輝、別にお前に仲間として認められたいなんて思ってねえよ」

アテナが口走ってしまう。

「何だと!?!」

光輝がアテナの方に振り向く。

「あたし達は元より、ハジメ達が此処に来た事だって遠藤にせがまれたとか、クラスメイトがピンチだから助けに来たとかじゃない。あくまで、香織が、雫を助けに行きたいや翼愛が依頼形式でクラスメイトの救助すると言ったからここに来ただけだ。

ハツキリ言えば、あたし達は雫が居なきや光輝達を助けに来る気は無かったって事だ」

「な、何だって……!?!」

仲間を見捨てるつもりだったのか!?!」

其れを聞いては理解しようとしないう光輝に呆れてを通り越して苦笑いしか出ない

「……だから誰が仲間だ?」

「……さっきの私の話を聞いて無かったの?」

アテナがあなた達の中で助ける気があったのは、雫、後はメルド団長ぐらいよ。

後はオマケだって言ったじゃない」

優花からも口を出す。

「園部さん!」

君はハジメ達の味方をするのか!?!」

光輝がまだつかつかて来るので

「そろそろ行かない?」

これ以上無駄な時間を取るとギルマスが編成を完成させて大迷宮に突入して来るかも」

私はバツサリを切り捨てる。

「そうね。」

「そうしましょ」

皆は出口を指して進む。

「ま、待て……まだ……」

が懲りずに叫ぼうとした瞬間、その頬を何かが掠めて迷宮の壁に突き刺さった。

迷宮の壁に深々と突き刺さったのは苦無だ。

「いい加減にして……！ 次に何か言ったら本気で当てる……！」

流石の優花もマジギレしれてるっぽい。

「ツ………!!？」

そのまま優花は歩いて天の河の前から離れると、

「天の河。」

どちらが正しいかなんて問答するつもりは無いが、少しだけ指摘させてもらう」

ハジメが天の河の前に立ってそう口を開いた。

「指摘だつて？」

俺が、間違っているとしても言う気か？

俺は、人として当たり前の事を言っているだけだ」

「お前は、俺があの子を殺したから怒っているんじゃない。

人死にを見るのが嫌だったただけだ。

殺す事に恐怖し、逃げた事で仲間を危機に陥れた自分の不甲斐なさを隠すために、無抵抗の人間を殺したというもつともらしい理由で俺を責め、覆い隠すことも含めてな」

「ち、違う！」

勝手なこと言うな！

翼愛が、無抵抗の人を殺したのは事実だろうが！」

「其れに生き残るために敵を殺す……その何が悪い？」

「なにっ!？」

人殺しだぞ！

悪いに決まってる！」

「其れは不正解、魔人族の女は自ら死を望みメルド団長の命令の指示で殺した。

これは正当な殺しなの。

でしょメルド団長」

「ああ正当な殺しだ」

「そ、そんな…」

「俺は容赦するつもりは無い。

敵は殺す。

これは俺が奈落で生き残るために培った価値観だ。

お前達に押し付けるつもりは無い。

だからお前も、俺にお前の正義を押し付けるな。

それでも気に食わないと言って俺の前に立ちはだかるのなら……」

ハジメは消えて

「例え元クラスメイトでも殺す!」

「ッ……!?!」

一瞬で光輝の顎を銃を向けて更にハジメの『威圧』によって光輝は動けなくなつて押し黙る。

「勘違いするなよ?」

俺達は、戻つて来たわけじゃないし、まして、お前等の仲間でもない。アテナが言った通り香織が八重樫を助けたいと言つたから助けに来ただけ。

ここを出たらお別れだ。

俺達には俺達の道がある」

ハジメの威圧で動けなかった光輝は、威圧が解けたことで動けるようになり、まだ納得していないと言わんばかりにハジメに向かって口を開こうとして、

「…これ以上、ハジメ君を悪く言うの、やめてくれないかな?」

「か、香織……!?!」

香織が光輝に責めるような視線を向ける。

「翼愛達と違ってハジメ君は必死なの。」

私達を護るために……私のお願いを叶える為に必死に行動してるだけなの……今回も私が雫ちゃんを助けてとお願いしたからハジメ君はそのお願いを叶える為に全力で行動しただけ……」

「何故だ!?」

最後には彼女も戦意を失ってた!

殺さなくても捕虜にして幽閉するなりなんなり、他にも方法があったはずだ!」

「今は無くても何れあの人はまた立ちはだかつてたと思うよ。」

だからハジメ君は敵として殺した」

「そ、そうならないように説得すれば……!」

「話し合って分かり合えるなら、そもそも1000年以上も争い合っ
て無いよ……」

「ッ……」

「ハジメに文句言いたいなら、ハジメと同じように奈落で2週間以上
独りで過ごしてから言え」

「光輝先輩は爪熊辺りに殺されると思いますけど」

「むしろ蹴りウサギに返り討ちに遭うんじゃないでしょうか?」

アテナ、雷槍、黒花の順番でそう言う

「…戦ったのはハジメ。」

恐怖に負けて逃げ出した負け犬にとやかくいう資格はない」

「なっ、俺は逃げてなんて……」

ユエが冷たい口調で光輝を非難する。

その時、

「よせ、光輝」

「メルドさん!」

メルドが光輝を止めた。

そして、私達を見回すと、

「お前達……すまなかった……!!」

メルド団長は土下座する勢いで頭を下げた。

「あの時……俺はお前達を助けられなかった……本当にすまなかつ
た……!!」

ハジメ達に対しては奈落に落ちてしまった事だ。

「別に起こっていません。」

落ちて新たな力が沢山手に入ったので気にして居ません」

そして、天之河達に向き直ると同じように頭を下げた。

「メ、メルドさん!? どうして、メルドさんが頭を下げるんだ?」

「当たり前だ……俺はお前達の教育係……戦争をする上で敵を殺すことは避けて通れない問題だ……本当ならもっと早く盗賊などをけしかけてお前達に殺す覚悟を教えるはずだった……だが、お前達はこの世界とは関係の無い人間だ。」

俺達の世界の都合でそのような事を教えていいのかとずっと悩んでいて、自分に言い訳をしながら先延ばしにしていた……それが今回の結果だ。

これは俺のミスだ。

本当にすまなかった」

メルド団長もどうやら天之河達の扱いについて悩んでいたらしい。騎士団長である自分と、メルド自身との間で葛藤していたようだ。そんな傍ら、勇者の救助依頼はまだなのでクラスメイト達を地上まで護衛する。

私は護衛対処の後ろに付く為に最後まで見届けるまで待機して居ると

「光輝……皆地上に戻るってよ」

龍太郎に促されようやく立ち上がる光輝、その目に女魔族の亡骸に祈りを捧げているような恵里の姿が目に入る。

「優しいな、恵里は」

いつもの調子で、あまりにもいつも通りに恵里の肩を叩き、労いの言葉を掛ける光輝、

しかしその恵里の表情までは彼は見ることはなかった、これもいつも通りに。

だから、その背中へと発せられた、齒軋りのような音にも気が付くことはなかった。

だけど私は気が付き

「龍太郎君、私、恵里ちゃんに合わせて行くから遅れるからハジメ君に
言っておいて」

「うん？」

別に構わないが」

「お願いね」

龍太郎と光輝が私達にはなれると私は

「パチン」

と指を鳴らす

恵里はさつきやった祈りを又行つて

「パチン」

又指を鳴らす。

恵里は同じ祈りをして

「パチン」

又指を鳴らす。

すると

「邪魔しないでほしんだけど」

恵里はそう言うが

「邪魔するよ。」

光輝が好きな僕っ子の恵里ちゃん」

と言うと

「いつ気がついたんだ。」

会長」

学校では見せない顔をして居た。

光輝精神改造計画

「いつ気がついたんだ。

会長」

私がそう言うのと恵里は学校では見せない顔をして居た。

「別に恵里ちゃんの演技は私でさえ確信を見分ける事が出来なかった。た。

精々恵里ちゃんが光輝君が好きな事しか分からなかったし」

恵里は眼鏡を外して

「僕も演技には自信があつただけで会長を全て騙せえなかった事か」

「そうだね。

異世界に来てから演技の質が下がって居たから」

「其れは否定しないよ。

異世界に来れた事だから合法的に殺せるから」

恵里の手が少し動いた瞬間、私が首を斬った魔族の女の死体が動いて隠し持っていた仕込みナイフ取り出して私目掛けて突きを繰り出したが私は簡単に魔族の女の手首を捻って仕込みナイフを外してから背負い投げで洞窟の柱の方に投げて

「レーヴァテイン」セツトアップ!!」

『font:ul20』E^{セツ}n^トr^ァi^ッch^プt^ンg『/font』

「バリアジャケット」を一瞬で纏って魔族の女に向けて「レーヴァテイン」で居合切りを繰り出して斬撃を繰り出す。

斬撃は魔族の女に当たって上半身と下半身と綺麗に別れた。

私は直ぐに魔族の女を持った。

魔族の女の首は動いて居て

『シャルル空間魔法』

『はいシャル』

念話でやり取りして私の隣に空間魔法の魔法陣が現れて其処に入れた。

序に体の方も入れておく

「恵里ちゃん、流石に石化魔法の耐性はまだとって居ないのに」

「あくあバレたか」

「そんでこの後如何するの？」

「国家反逆罪で僕を捌くの？」

「いやそうしない。」

私的には恵里ちゃんと光輝君が結ばれて欲しいと思うの」

私はそう言つて恵里の方を見ると素っ頓狂な顔をして居た

「…御免上手く聞き取れなかったからもう一回言つてくれない？」

「だから私的には恵里ちゃんと光輝君が結ばれて欲しいと思うの、と言つたの」

「えっと、僕が光輝君と結ばれる」

「そうその通り」

「本気で言っているの？」

「割と本気」

「いやいや、冗談でしょ。」

あの光輝君だよ

香織と雫にまだ恋を向けられていると勘違いして本気で告白した女子を容赦なく斬り落としている光輝君だよ」

「そうその光輝君だよ」

「会長も冗談を言うんだ」

「其処は否定しない。」

理由が有るの」

「理由？」

「そう、光輝君を含めた私達は二年生で来年には卒業して社会に飛び出るんだよ。」

あの行き過ぎた正義が服を着ている存在が社会に飛び出して揉め事を起こさなれないと思つているの？」

「…無理だね」

「そうでしょ。」

実際其れでピンチになつたし」

「其処は否定しない」

「この際出しその性格を直そうと思っているの」
「ふーん」

「その際に恵里ちゃんにも手伝って欲しいの
ちやんと見返りを用意するから」

見返りは…光輝君の愛が絵里ちゃんの方に向くようにするから。
其れで如何かな？

勿論会長の公認にするから」

「其れは構わないよ。」

でも如何するのあの自己中心の完璧主義者の光輝君の性格を直す
と言っても」

「其処は大丈夫。」

私に任せなさい。

其れより此処から出るよ」

私は「セイザブラスター」に「ワシキュータマ」を

『ワシキュータマ』

『セイ・ザ・チェンジ』

「スターチェンジ！」

ワシピンクになって恵里をお姫様抱っこする。

「はあくほんとは光輝君が良いんだけど」

「其の内出来るかもよ」

私は背中から翼を出して飛びアテナが掘った穴から上に挙がった。

そして最上階に辿り着いて恵里を降ろしてワシピンクの変身を解
除した。

「それでさつき言った

どうやって光輝君の性格を直すの?」

「其れはね。」

私自らこの世界のルールや人間の悪意を見せるの」

「具体的には?」

「其れはね。」

例えば私の世界とこの世界のルールの違いやこの世界の人間が
持って居る魔族の悪意をオブラート抜きで光輝君の心にぶつける

予定」

「成程ね」

「計画も頭の中で組み立てているから」

「まあ、僕は光輝君が手には居るなら何でも良いんだけどね」

私達は扉の前に立ち

「其れじゃあ契約する?」

私は右手を恵里に差し出した

「もう一回言うけど僕は光輝君が手には居るなら何でも良いんだけどね」

と言つて私の手を握手してくれた。

「契約成立ね。」

其れよりも皆の前に出るから眼鏡を付けた方が良いよ」

「そうだったね」

恵里は仕舞つた眼鏡を付け直して私達は扉を開けて出ると無数の屍※怪我人とクラスメイト達が穴を掘つて

「おい大丈夫か、光輝」

龍太郎が光輝を引っ張り挙げていた

私達は光輝の顔を見ると涙や鼻水で凄い事になっていた

「龍太郎君、何が有つたの?」

「会長か、実は……」

ハジメ達が出てミユウを誘拐しようとした犯罪集団が居たが其処はテイオが処理したんだが残っていた犯罪集団が往復に来たがハジメが処理した。

現に今ある無数の屍※怪我人は犯罪集団みたいだ。

其の後、どうしてもハジメから女性を引き離したい光輝はいちやもん付けた挙句に、ハジメを襲いかかったがハジメは咄嗟に錬成で穴掘つて其処に光輝を入れたそうさ。

「……そんで何故か光輝は鼻水に涙でグシャグシャになっているんだが?」

私は光輝に近づいて見ると

「龍太郎君、ハジメ君が穴を閉じる瞬間に何か入れなかつた?」

「言われてみれば…なんか包みたいな物を入れていたような……」

「多分催涙の類だよ」

「マジか、道理でそうなるわな」

「取り敢えずいろいろ汚れているから体を洗ってから部屋に放り込んでおいて」

「おう任せておけ」

龍太郎は光輝を抱えて移動する前に

「あ、ハジメ君は今何処にいるの？」

龍太郎はある場所を指さして

「其れなら、あそこで雫達が変な儀式をして居るぞ」

そう言うので私は其方に方を見ると

四つん這いになっているハジメの周りを雫、鷹音、刷庫、ルーズがグルグル回っていた

「確かに変な儀式だね」

「だろ」

「取り敢えずハジメに訳を言うから、後で」

「うん、後で」

私は恵里と別れて変な儀式をしているハジメ達の元に行く。

「やめろおー！」

やめてくれえ！」

「破滅挽歌」

「復活災厄」

「創造の魔王」

「さあ早くしないとこの世界でも日本でも、あなたを題材にした刷庫作の小説が出るわよ」

「わかった！」

わかったから、其れだけは辞めて下さい！

ラスボス様」

とうとうハジメは雫に土下座を始めた。

「雫ちゃん達に変な儀式をして居たの？」

「あ、か、会長」

「だから暫く光輝の精神改造に入るから暫く抜けると言っただけど？」

私がそう言うのと

「ハアああああ!!!」

全員大声で驚いた。

「翼愛それどういう意味だ!？」

「てか光輝の精神改造で言った!？」

ハジメと雫は凄い勢いで詰め寄って来た。

「ほ、ほらこれ以上光輝の考えだと通用しなくなってくるから早期早めに私自ら精神改造する予定なんだけど…」

「出来るのかご都合主義が服着た様な感じの奴だぞ」

「私も何度かしたけど無駄だったんだけど」

「一応計画は立ててあるから大丈夫だよ」

「翼愛が言うなら一応大丈夫だろ」

「お願いするわ。」

私の優柔不断がいけなかったの——今の光輝を作り上げた責任が私にもあるの」

「分かった。」

私がかすめるから。

其れと」

『シャルル、あの死体とついさつき入れた死体出して』

『はいシャルル』

私の隣に空間魔法が出て私は其処に手を入れて

「此れを直して欲しいんだけど」

其処から出したのは二人分の死体、一体目の死体はついさつき入れたばかりの魔族の女、もう一体は清水を唆した魔族の男だ。

尚魔族の女は身体が首、上半身、下半身に別れており、男性の方はハジメのドンナーで左肩から無くなっており胸には大きな穴はチロルが開けた

「此れを直して何に使うんだ？」

「其れは光輝の精神改造に使う予定だから」

「そうか」

ハジメは宝物庫に仕舞った。

「其れじゃあ私メルドさんに許可取って来るから」

「そうか」

其れじゃあ明日の朝までには完成させるからな」

「分かった」

私はハジメの元から離れてメルドの元に向かう
移動

私は神の使途の名義を使って直ぐにメルドの元に向かう

そしてメルドがホルアドで使っている部屋の前に辿り着いて

「コン、コン、コン」

ノックしてから

「翼愛です」

「入って良いぞ」

私はメルドの部屋に入る。

メルドは私見て

「そんで何の用だ」

「明日、私を特別講師として雇って私に特別授業行をさせて下さい」

「……理由を聞いていいか？」

「はい、光輝君の性格は善意と正義主義です。

それ故に戦争を含む人殺しには向いて居ません。

其れは今回で分かって居ると思います」

「ああ、そうだな。」

現に俺も殺しの教えを躊躇ってしまった」

「ですので私、生徒会長自ら光輝君を叩き落とします。

それでもしないと私達が居ないクラスは間違いなく空中分解して
しまいます」

「確かに間違いなく空中分解してしまう」

ヨクアイがあいつら旗印になってくれば」

「しますが、私は私の旅が有りますので」

「だろうな。」

せめて浩介のように……誰かに左右されることなく一人で判断できるようになるまでは」

渋面のメルド、その表情は中間管理職のそれを髣髴とさせた。

対等の立場で頼みごとをするあたり、生来の人の好きが滲み出ている、

そんな男である、団長というのはやはり彼にとって枷のようなものなのだろう。

「いつその事、平和を模索してもいいのでは？」

「誰だって理屈では分かっているさ、これ以上戦争を続けても何の益にもならぬことくらい」

私の問いにメルドは溜息交じりに応じる。

「だが……この国には親を子を友を魔人族に殺された者がどれだけいると思っっている？」

かく言う俺もついさつき部下を殺された」

メルドの語気が強くなっていく、その胸中はいかばかりだろうか？

「そんな時に神の使徒が、勇者が現れた、皆が何を思ったかはわかる筈だ」

「そうですね。」

これでやっと、魔人族に復讐もしくは滅ぼす事が出来る……と」

メルドに応じつつも、私ははつきりと答える。

「ですから私、自ら落とさないとはいけません」

其れにこれ以上光輝君が抱えて居る考えでは社会に通じないのでこの際考え方を変えた方が良いと思ひまして」

「随分思いつ切りの事をするな。」

分かったその提案は許可をする」

「ありがとうございます」

私は頭を下げる。

計画発動前夜

私はメルドから許可を頂いて直ぐに

「剃！」

六式を使って瞬間移動して恵里の元に移動する。

「恵里ちゃん、メルドさんからちゃんと許可を取ったから私が立てた作戦を話すね」

私がそう言うが、当の本人は

「……」

膠着状態に入って居た。

私は流石に心配になって

「恵里ちゃん」

恵里の顔の前で手を振るったら

「ハァー！」

私に気がついて

「恵里ちゃん、大丈夫!?!」

「いや御免。」

テレポートしたように前に出でて来た事に驚いて膠着しちやったよ」

「大丈夫だったなら良かったよ」

「其れで作成とは何なの?」

「えっとね。」

光輝君で自分の意志にはかなり固いでしょ?」

「確かに堅いね」

「それ故に周りの変化には疎すぎる

その上、殆どの事は切なく行えるから、自然と人が集まってその結果、自分が行った事は決して間違える事が無い、固定概念が生まれるの」

「其れには否定しないね」

「だから私が行う方法は孤立と言う方法。」

光輝君が白と感じている部分をこの世界では黒と自覚させて私が

鞭を打ち何が正しい正義なのかを分からなくさせる

恵里ちゃんの役目は私の反対」

「……其れって僕が光輝君に甘い飴を与える事？」

「正解

恵里ちゃんの役目は孤立したどれが正しい正義なのか分からなくなつた光輝君に手を伸ばす役目。

その時に恵里ちゃんの手腕で光輝君を何処まで落とせるが肝になつて来るの」

「成程♪」

「一応私も頑張つて光輝君の鋼メンタルは頑張つて溶かすつもりだから」

「光輝君のメンタルは鋼じゃなくてアザンチウム鉱石で出来ているんじゃないと思つているよ」

「確かにそう言えている。

シャルル空間魔法の魔法陣を出して」

私がそう言うのと「ラブリーコミション」になつていたシャルルが出て来た

「分かつたシャルル」

シャルルが手を翳すと空間魔法の魔法陣が出て私は其処に手を入れてある物を探して

「あつたあつた」

私が出したのはお香と小瓶に入つて居る薬を取り出して恵里に差し出した。

「此れは？」

「私達の世界と母さんと父さんが救つた異世界の材料を合わせて作つたお香で、効果は寝ている状態でお香の香りを嗅いだ状態で起きると少しだけ意識が朦朧するだけの効果

人に簡易な質問させるか洗脳の補佐が役目。

薬は方が一、お香を嗅いで意識が朦朧した時に呑むの」

「ふふふ、成程ね。

ありがとう」

「どういたしまして」

其れと光輝君にこう伝えて欲しい明日の早朝のホルアドのギルドに特別授業があるから皆に伝えて、尚参加は強制では無いから参加できないうら参加しなくていいと」

「そんでこのお香は光輝君が寝ているなら嗅がせる訳ね」

「そう言う事ね。」

私は全員食堂に集めて計画の説明をする準備をするから」

私は立ち上がり意識を集中して見聞色の覇気をホルアド全体に広げる。

メルド、竜太郎、浩介、鈴それから檜山と香織の代替の治癒師の女の子を見つけて

「ふう」

身体のを抜いて

「剃！」

一気に地面を10回以上蹴って、その反動エネルギーに乗って爆発的な速度で移動してメルドの元に辿り着いて。

「食堂で件の計画を話したので集まって下さい」

と言ってから又、剃を使って竜太郎、浩介、鈴、檜山、香織の代替の治癒師の女の子の順で言いたい事を伝えて最後に光輝が泊っている部屋に居る恵里の元に行く。

光輝の宿部屋の前に辿り着いて私はノックする。

「会長？」

「私」

「入って来て」

私はゆっくりと扉を開けると宿部屋の中から私が渡したお香の匂いがして来た。

私は出来るだけ呼吸しないように息を止めながら宿部屋に入る。

私は直ぐに恵里が持つて居る薬の小瓶を指さす。

「ああ此れね」

恵里は薬の小瓶から一錠の薬を出して

「此れでしょ？」

恵里は差し出して私は領いて薬を受け取り其れを飲む。

私は止めていた息を戻して普通に息をする。

「如何かな光輝君の容態？」

「ハジメの催涙手榴弾が強烈で竜太郎が体を洗っても起きる様子が無かったみたい」

「そうでしょうね。」

「迷宮の魔物を怯ませるためにかなり強力に作って居るからね」

「成程ね。」

「まあ今の僕達にとっては必要な物だったようね」

「そうだね。」

「起きたら……」

「会長が言った伝言と光輝君が虜になっちゃう甘く甘い甘く甘い飴を挙げておくね」

「うん、甘さはゆっくりとで良いから香織と雫の存在が消えてしまうぐらいの甘さでお願いね」

「分かった」

私は光輝の宿部屋から出て食堂に向かう

く移動く

私が到着すると私が呼んだメンバーが全員揃って居た。

「皆さん集まって頂き有り難うございます」

「そこで会長俺達を呼んだ理由は何だよ？」

「竜太郎が集めてた理由を聞いて来た」

「はい、其れで行き成りなんですけど本題に入ります。」

「本題は光輝君の戦争に対しての意識改革です」

「戦争に対しての意識改革？」

「香織の代替の治癒師の女の子が疑問の様に行った。」

「はい、今回の魔人族戦で光輝君は魔人族の女を殺すのを躊躇いました。」

「これは非常にヤバイ状態です。」

「大迷宮に居た時にメルドさんが言ったように殺るか殺られるかの二択しかありません。」

ですが光輝君は私達の価値観を持って来てしまい皆を危機的狀態に落としてしまいました。

此れは非常に危ない状態です。

ので早期早めに改善しないといけません。

そしてその改善の責任者に私が立候補しました」

私がそう言う

「「「「?」」」」

メルド以外食堂に居るメンバーは驚いて居た。

「此れはもうメルドさんの許可を頂いています」

私がそう言う

「ああ、ついさつき俺の権限で許可をした」

「其れで皆にやって欲しい事は、この後光輝君から明日特別講座を行う連絡が来ると思うけど其れを用事が有ると言って断って欲しいの」

「会長、其れってどうゆう意味があるんだ?」

浩介が手を挙げて

「今までの光輝君の行動を見て思った事は、光輝君が行動した行為は皆が必ず正しいと褒めまくって本人は其れに酔いしれて自分の行動が常に正しいと思ひ込みをしてしまい間違いに気がつかず自分の考えを他人に押し付けてしまう。

ので知らない人達の力を使って自分の考えが他の人達にとって間違いと自覚させます」

「そんで其れを実行する場所は決まっているのか」

メルドがそう言う

「全然ないです」

私はキツパリと言う

「「「「ズッコ」」」」

全員コケる音が聞こえた。

「しようがないもん。

オルクス大迷宮まで城に出れなかったし、其の後ハジメ達を追いかける為に飛び降りたから」

「た、確かに」

「出来ればメルドさんに紹介して欲しいです」

「まあ構わないが」

「其れで紹介して欲しい場所は三つ

一つ目は魔族の戦争で戦争孤児の孤児院

二つ目は魔族の戦争の難民キャンプ場

三つ目は極悪刑務所です」

「其れ位は構わないが念のために理由を聞いていいか？」

「はい

一つ目は魔族の戦争で戦争孤児の孤児院は魔族の戦争で両親や故郷を滅ばされた悪意を見せつける為に

二つ目は魔族の戦争の難民キャンプ場は魔族の死体を出した反応を見せる為

三つ目は極悪刑務所はこの世界の法律で正しく人が殺せる環境の確保ですね。

因みに処刑人は私達と同じくらいの年齢で、出来れば女性でお願いします」

私がリクエストすると

「……分かった。

場所はヨクアイが言った通りに手配できるが……」

「時間が掛かるなら手紙を書いて私が飛んで運びましょうか？」

「出来るのか？」

「出来ます」

「分かった。

後で俺の部屋に來い」

「分かりました。

尚、恵里にはこの事はもう伝えているから大丈夫

では解散」

私がそう言うと皆解散した。

私は光輝の宿部屋に向かって扉をノックする。

「会長？」

「私」

「入って来て」

私は光輝の宿部屋に入ると私が渡したお香の匂いがまだする。

「恵里ちゃん光輝君如何かな？」

「光輝君ならさつき起きたから会長の伝言を伝えた後にまた寝たよ。

それにしてもこのお香、凄いいよ！」

光輝君が簡単に私の言葉を受け入れたから」

「そう、流石、盾の勇者と蒼青の勇者の合同作品だね

でも気を付けないとこの言葉が聞こえていたら計画が……」

私は念の為に見聞色の覇気の覇気で光輝君の容態を確認する。

狸寝入りせずにちゃんとする寝ている

「あー！」

そうだったね。

ならこれ以上の会話は此処でしずくに別の場所で」

私と恵里は光輝の宿部屋から出た。

「何処で会話する？」

恵里がそう言う

「食堂やトイレだと盗み聞きされる恐れが有るし……」

「あそこは……あいつが居るからパス」

「あいつ？」

「会長には関係ない話だから」

「ふくん

そう言えば……」

「そう言えば？」

「もし私が手を差し出さなかったらどう言った計画を立てたの？」

後「レーヴァテイン」人除けの結界展開」

『font:ui20』Ja^{はい}font』

「レーヴァテイン」の人除けの結界を展開する。

「そうだね。

さつき会長が邪魔されなかったらあの魔族の女を使って魔族と通話して寝返って、王都に戻ったら城の関係者を片っ端から殺して僕の傀儡にしてから魔族の侵攻に合わせて王都の結界を出してい

るアーティファクトを壊す。

そこでクラスメイト達を訓練場に誘導させて僕の傀儡を周りに配置してから閃光を出すアーティファクトでクラスメイト達の目を潰してその間に簡単に動けないように傀儡が持つて居る剣で刺した上で拘束してその後、光輝君の目の前で皆を殺してから全部に傀儡する予定だったんだけど」

「その計画で上手くいくの？」

恵里は演技で降霊術は上手く出来ないと言ったけど本当は上手く扱えるでしょ

でも降霊術は確か、死体を動かせるけど精々操り人形程度でしょ？」

「其処は心配なく。」

僕が作った縛魂である程度の受け答えができるから多分誤魔化する」

「成程ね

次に光輝君とは初めて何処で出会ったの？」

鈴ちゃんと言達になる前から光輝君の事を知って居たような感じだったけど」

「ああそれか。」

あんまり話したくないんだけど…会長なら良いか」

恵里は自分の半生を話した

恵里が6歳の時に父が恵里を庇い事故死して、恵里の母親は少ししいところのお嬢様だったのだが、家の反対を押し切って父親と結婚したらしく、幼心にも恥ずかしくなるくらい父親にベツタリだった。

ので母が自分を憎む様になり、暴力を振う様になる。

11歳の時、母親が家にいかにもチンピラといった風貌・性格な上に小学生に手を出そう位の典型的なクズの大人の男を連れて来て性的暴行を受けそうになるが恵里は予測して窓を開けて悲鳴が届きやすいように備えていた為、未遂に終わり、男は逮捕される

が男が逮捕されて母が今まで以上に激昂される

あまりに悲惨すぎる環境でとうとうと心が崩壊してしまって、生き

る事に絶望して橋から飛び降り自殺しようとした所に光輝が偶然現れて自殺を止めた上にしつこく尋ねたため根負けして理由を話した。

すると、光輝が

「俺が恵里を守ってやる」

と励ましの言葉を言った

愛に飢えた上に壊れた心を持つ恵里にとって光輝は自分を救ってくれる王子様の様に感じ、光輝に異常に執着する様になってしまった。

それで男の逮捕によって虐待を疑った児童相談所が調査で恵里達の元へ訪れたが、母親と離されて光輝と会えなくなる事を危惧した恵里は、職員の前で笑顔で仲の良い母娘を演じきって母と離されるのを阻止した。

それを見て驚愕し慄く母に対し恵里は

「次は、何を奪ってほしい?」

と冗談ながら口にする、母は悲鳴を上げて家を飛び出すほど恐怖した事で完全に立場が逆転する。

「其の後、六年の年月を得て僕と光輝君は高校で再開するんだけど、光輝君は酷いんだよ久しぶりに会ったのに僕の事すっかり忘れていたんだよ」

「ああ……光輝君にとって香織と雫以外自分が助けるべきその他大勢の中の一人にいつも通りの事をしただけに過ぎずないからね」

「そうなんだよね。」

だから僕が光輝君のにとっての“特別”になるべく今日まで暗躍していた。

会長がハジメと香織をくっつけたのは手間が省けたんだけど」

「光輝君は諦めていなかったね」

「そうなんだよね」

「だから」

「此処で終止符を撃とう」

模擬戦

私は夜の六時ごろにメルドの宿部屋を訪ねて例の手紙と手紙の住所が書かれている地図を頂いて、私は腕に「セイザブラスター」を腕に装着して「ワシキュータマ」をセットして「セイザブラスター」の外側に倒す

『セイ・ザ・ゴー』

ワシピンクの専用機のワシボイジャーを出してそれに乗って最初にハイリヒ王国の王都の戦争孤児の孤児院のシスターに渡して次に王都の外れにある難民キャンプに辿り着いて難民キャンプの最高責任者に渡して最後にハイリヒ王国の最大の監獄に到着して看守長に手紙を出して私自ら罪人を見て決めた罪人はコンカイ・ダケジョウ
家族構成は両親どちらもクズで魔族の侵攻で両方とも他界している。

罪状は強盗及び放火が二十軒で

捕まる前に盗みに入った家の家主のご年配の夫婦を殺害が一件

放火する前に自警団が駆けつけて放火未遂で終わった

何処で手に入れたのかは不明だが自警団の体調が魔写のアーティ

ファクトを持って居た為物的証拠の魔写がある

夫婦の死体のどちらにも無残に体中に無数の刺し傷があった。

私は看守長にこう伝える

「彼女に伝えて下さい。」

明日来る。

勇者一向を全員騙せたら神の使徒の権限で無罪にしますと」

看守長は最初驚いたが

「安心して下さい。」

最初から許すつもりは無いですから。

勇者に人間の悪意をぶつける為に猫を被って貰わないといけませんから」

看守長は納得してくれた。

私はワシボイジャーを使って一気にフューレンに行きワシボイ

ジャーをフューレンの冒険者ギルドの上空の真上に止めてから飛び出して落下する。

飛び降りたワシボーイジャーは消えたので安心安全である。

その落下中の間にも私はフューレンの冒険者ギルドの窓に目掛けて移動して同時に「セイザブラスター」と「ワシキュータマ」を使つて

『ワシキュータマ』

『セイ・ザ・チェンジ』

「スターチェンジ！」

ワシピンクになつて翼を使ってフューレンの冒険者ギルドの窓に到着してから窓を除くとイルワが仕事しれ居たので窓をノックする

ノックに気がついたイルワに私は手を振つた。

イルワは二度見して変わらない事で諦めて窓を開けて

「ヨクアイ君、なんの用だ」

「すみません。」

連絡なしで急に来て」

と言いながらワシピンクの変身を解除する

「全くだ。」

それで今度はどんな大物組織を襲撃したんだ？」

「今回は襲撃戦はしていません。」

ただ私一人の用事です」

「君個人か…」

となると差ほどの問題では無いな」

「どうかは知らないです。」

出来れば明日の午後辺りに公開処刑したいんです」

「公開処刑か…」

私一人で決められない事なんだが…」

「処刑執行人は勇者と言つたら？」

私がそう言うと

イルワは私に言葉を理解して

「はあ」

ハジメ君も無茶苦茶だったのに君も無茶苦茶だったか」
「すみません。」

シャルル、空間魔法」

「分かったシャル」

私の隣に魔法陣を展開して手を入れて「コンドルデンワー」を取り出して

「其れは？」

「私が持つて居る長距離連絡するアーティストです。」

紙とペンを借りますよ」

私は机の上に合ったペンとゴミ箱に捨てられて居た紙を取って空白の部分にトータス字でシャルルの電話番号を描いて「コンドルデンワー」と一緒に差し出す

「取り敢えず処刑の準備が終わったら此処に書かれている番号をこのアーティストにある円盤の穴に数字が掛かれていますのでその穴に指を掛けて名一杯に回して下さい」

イルワは受け取り

「こ、こうか」

「コンドルデンワー」の「アンノウндаイヤル」の穴に指を入れて「アンノウндаイヤル」を回して私が書いた番号を全て入力する。

するとシャルルから着信音が聞こえる。

「シャルル、電話切って」

「分かったシャル」

電話の着信が消えた。

私は入って来た窓の元に行き

「取り敢えず明日楽しみにしておきますので」

私は其処から飛び降りて「ワシキユータマ」を「セイザブラスター」の外側に倒す

『セイ・ザ・ゴー』

ワシボイジャーに乗ってホルアドの宿に戻り寝た

〜翌日〜

私達はホルアドの街の出入り口に居た

「其れじゃあ私はやる事が有るから」

「ああ、翼愛、気を付けておけよ」

「お姉ちゃん元気で」

「光輝君をお願いね」

「翼愛、頑張れよ」

「翼愛先輩、気を付けて」

「そっちも気を付けてね」

「じゃあもう行くぞ」

私以外全員に魔力駆動四輪に乗り込んで

「シズシズ達、元気でねー」

「落ち着いたら連絡してね」

「うん皆も元気でね…」

「準備いいか？」

「二」「はい！」

よろしくお願いします。」「三」

魔力駆動四輪が動き出して私達は手を振って魔力駆動四輪が見えなくなるまで見送った

「それじゃあ皆聞くけど昨日光輝君から特別授業の報告を聞いた？」

「聞いたぞ」

「鈴も」

「私も」

「お、俺も」

「俺は聞いて居ないぞ」

「二」「遠藤、居たんだ」「三」

「いや最初から居たよ」

「ここに居るよ…何で会長以外誰も気付かないんだよ…」

「まあまあそんなに落ち込まないでね。」

まだ気がついてくれる人が居るから」

「なんか会長の優しさが沁みる…」

「それで皆は何て断った？」

「俺は筋トレを集中的にやりたいと」

「鈴は魔人族の襲撃が有ったから休みたいって」

「お、俺も鈴と同じ」

「其れで浩介君は気がつかずにスルーされたと」

「はい」

「其れなら良いよ

其れじゃあ解散！」

私達は解散して私と恵里が残って

「其れじゃあ行こうか」

「そうだね。」

私達の…」

「光輝精神改造計画を」

私達は光輝君が居るホルアド冒険者ギルドの訓練所に移動して恵里と別れて訓練所の隙間から覗くと光輝君が居て恵里と合流した

私は見聞色を使ってメルドを探して訓練所の扉の前に居てその元に行く

「ヨクアイか」

「はい、今日はよろしくお願いしますね」

「ああ」

メルドは訓練所に入った。

「よし、此れから特別訓練を行う！」

メルドの大きな声が響いた。

「昨日、魔人族の襲撃が合った為に急遽に殺しの覚悟などを教える！」

「殺すなんて無理です！」

意識は刈り取るので良いでしょう！

殺しなんてそんなの……」

「駄目だ。」

起きられて回復でもされて王国の兵士に奇襲を掛けられたら目も当たられない！

それ故に殺しの覚悟などを教える必要がある。

其れと教えるのは俺では無い。

入ってくれ」

私はメルドに言われるままに訓練場に入る。

「なあ!？」

光輝は驚いて居た

「どうも。」

光輝君の特別講師を務める鞆波・A・翼愛です」

自己紹介する

「翼愛、何で君が…そうか!」

罪を認めて俺達と一緒に…」

「違う。」

メルド団長に頼まれて特別授業の講師を務める事になったの」

「なあ!？」

光輝は再度驚いて

「ああ、俺がヨクアイに頼んだ」

メルドも口合わせしてくれた。

「待って下さい。」

翼愛は人を殺したんですよ。

彼女から学ぶ事なんて」

「いやある。」

其れが殺しの教えだ」

「光輝君がそれを嫌なのは分かるよ。」

其処でゲームをしましょ」

「ゲームだと?」

「そう。」

今から私達で模擬戦をする。

お互い二つの敗北条件を持った状態でひとつうちのどちらかの条件を満たしたら負けのゲーム

もし光輝君が勝ったなら殺しの特別授業は無くなる。

私が勝ったら素直に殺しの特別授業を受けてもらうから。

其れで如何かな?」

私がそう言う

「…分かったその勝負を受ける」

「決まりね。」

因みに私が特別講師なので私が敗北条件を出します
其れじゃあまず私ね。

私の条件の一つは「レーヴァテイン」セットアップ！」

『font:ul20』Ja,^はei,^いnri^{セツ}cht^トen^{アッ}『font』

私は「バリアジャケット」を纏って

「この「バリアジャケット」に一撃を入れる事」

「なあ!？」

舐めているのか!？」

「舐めていない舐めていない。」

それでもう一つの条件が、シャルル空間魔法、」

『はいシャル』

私の横に空間魔法陣が現れて私が手を入れて一つの紙を出した。

私は其の紙を半分に折って

「はい、線に合わせて切ってくれる?」

差し出した

「構わないが」

光輝君は私が指しだした紙を折線に合わせて切ってくれた。

「ありがとう」

私は受け取り其れを折り紙のように折り一枚の短刀を作った

「私の武器は紙で出来た短刀だけ

其れが私の敗北条件」

「なあ!？」

やはり君は俺を舐めているだろ!!」

「舐めていないし傲慢でもない。」

ただの強者の余裕だから。

因みに当たり判定はバリアジャケットが刃物で傷ついた時に赤く
光るから。

其れで光輝君の敗北条件は

一つは神威、及びその上の派生型の使用

と二つ目は限界突破とその上の派生型の使用

此れが光輝君の敗北条件、OK？」

「ああ、分かった」

私達は同時に背中を向いてある程度距離を取って向かい合わせになっ

「其れじゃあ始めようか。」

メルドさん、試合の判定をお願いします」

「ああ分かった」

「これより模擬戦を始める」

「はい」

「ええ」

光輝は聖剣を抜いて構えて私は構えをせずただ突っ立ってるだけ

「翼愛、構えないのか」

「もう構えを取っている。」

虚刀流零の構え無花果で」

「何処まで舐めているんだ！」

「メルドさん始めて下さい」

「分かった。」

「始め」

光輝は縮地で一気に私との距離を詰めて聖剣の腹を私に向けて振り抜いたが、私は紙の短剣に無色透明の武装色を纏わせて聖剣を受け止めた。

「なあ？！」

光輝は紙の短剣で受け止められたことに驚いて居て

「はあゝ」

此れで驚いて居たら体が持たないよ」

私は光輝の聖剣を軽く押し返す。

その時の一瞬で出来た隙の間に光輝の首を斬り飛ばすイメージを乗せた濃厚の殺気を練り上げて紙の短剣に乗せて更に光輝君の首を優しく撫でて通り過ぎる。

私からすれば優しく撫でたが

私以外だと

「こ、光輝君!？」

光輝の首が切り飛ばされた幻覚を見てしまう
現に光輝は首を斬り飛ばされたと錯覚して膝を付いてしまい聖剣
を落とす。

恵里やメルドも思わず此処に来てしまう前に私は

「パアンー」

手を叩くと

「プツは！」

首切りの幻覚が消えて

「ハア、ハア、ハア」

過呼吸なりながら息を整える。

「こ、光輝君!？」

だ、大丈夫!？」

恵里は凄く心配する

「だ、大丈夫だ」

汗をかきながら首を触って確認する。

「ヨクアイ、今のは何だ!？」

メルドが問いただして来て

「あれは刀藤流と言う流派の抜刀術の折り羽を応用したもの

効果は殺気で出来た虚像の剣で相手に斬られたイメージを見せる
事です」

「虚像の剣だと」

「はい、其れと恵里ちゃん、流石に光輝君は殺さないよ。

何せこの世界の希望になる存在だから」

「そ、そうだったね。

ぼく：私とした事が良く出来たの幻覚に取り乱したよ」

「其れで光輝君まだやる」

「あ、当たり前だ」

光輝は聖剣を取り構えてた。

「では私から一言」

自分の目で見て捉えるのがすべて真実では無い、ただそれだけ」

嘘つきの模擬戦

光輝と模擬戦を開始して

「たああああー！」

何度目かの聖剣を使った光輝の攻撃を

私は

「ふあ〜」

飽きた様に欠伸しながら無色透明の武装色を纏った紙の短剣で一回受け止めて直ぐに紙の短剣の刀身を滑らせるように受け流して光輝の体の軸をずらして一気にトリコの千代の様に胴体の骨を傷つけないように鎧と服は勿論、肉、内臓を細切れにして胴体の骨の標本のような感じにする。

そして

「パアーン！」

手を叩くと

「は!?!」

我に戻った光輝は自分の胴体を触って現実か幻なのかを判断する。

私は詰まらない様に紙の短剣が歪んで居ないか確認しながら

「いい加減に私を殺すつもりで挑んで来て欲しんだけど。」

私は殺気だけの嘘の死を体験させているのに」

確認を終えると私は紙の短剣を掌と指を使ってペン回しの同じ感じで回す。

詰まらなそうにしている私を見た光輝は

「ふ、ふさげな!!」

激怒して私に再度突撃した

今度は縮地により高速で踏み込むと、豪風を伴って私に向かって

「絶断！」

豪撃！」

二つの技能が乗った聖剣を二回降って。

私は一撃目は防いで二撃目はわざと紙の短剣を手元から真上に弾き飛ばされた

光輝はチャンスと感じて三撃目を入れようと聖剣の腹の面を私に向けようとするが私は一瞬で光輝の聖剣の間合いを潜り抜けて私の素手の間合いになって私は光輝がコントの様に弾き飛ばされて訓練所の壁に罅を入れながら激突して口から血を吐くイメージをしながら右手の掌に殺気を乗せて光輝のお腹を優しく当てると

「ぐはあ!？」

私がイメージした通りに光輝はコントの様に弾き飛ばされて訓練所の壁に罅を入れながら激突して口から幻で出来ている血が出て来た

真上に上げられた紙の短剣をキャッチして

「パァーン！」

手を叩くと

幻で出来ていた血が消えて

「お、俺は吹き飛ばされたのか?」

光輝は口元を手で吹きながら何をされたのか分からずにいた。

「発勁だよ。」

ちよつとコツを使えば少しの力で今の様に光輝君を弾き飛ばせるし簡単に内臓をぐちゃぐちゃにして人も殺せるから

それでまだやる?」

「あ、当たり前だ」

光輝は立ち上がり聖剣を構える

「そう、そう言えばさっきから光輝君ばかり攻撃して来たから今度は私が攻撃するね」

私は構えて一気に光輝がギリギリと認識できる速度で近づいて一瞬だけ私は光輝の視界の死角に移動する

光輝から見たら私が突然に消えたように感じて此れには光輝は驚いて居た。

その間私は腕を大きく構えて上段から大振りを振り下ろす構えをする。

光輝は死角に移動した私を再度目視出来て急いで聖剣を上段に構える防ごうとする。

私は殺気を光輝の顔面に叩きつける。

光輝は思わず一瞬だけ瞬きする。

瞬きする間に私は上段の大振りの構えを解いてから紙の短剣を中段に持って行き逆手持ちにする。

そして瞬きを終えた光輝に私は上半身と下半身が切断されるイメージを叩きつけて紙の短剣でお腹を撫でると光輝は膝から崩れ落ちて倒れる前に

「パァーン！」

手を叩き

「は!？」

我に戻った光輝は自分の胴体を触って現実と理解して。

「い、今のは何だったんだ?!」

翼愛の攻撃を防いだと思ったのに」

混乱している光輝に

「不可肢視劍瞬華蒼天のソウカワラ

今の光輝君には決して見破やれない技の一つ」

「何だと!？」

そんな筈は無い」

「そう、ではこの攻撃は見破れるかな?」

私も先程の様に光輝がギリギリと認識できる速度で近づいて一瞬だけ私は光輝の視界から消えてから腕を大きく構えて今度は中段の右側から大振りを振り下ろす構えをする。

私をギリギリで捉えた光輝は急いで聖剣を中段の右側に構える防
ごうとする。

私は気を使って影異世界はスマートフォンとともにの 剣を作り、影の剣の方は其のまま中段の右側から大振りを振り下ろす。

その間にも本物の方は上段に持って行き一気に振り構える
そうしている間に影の剣と聖剣がぶつかる瞬間に影の剣は聖剣を
すり抜ける様に素通りする

其れを見ていた光輝は困惑し始めて私は上段の大振りを振り下ろして、光輝の身体が左右真つ二つに切断されるイメージを叩きつけて

紙の短剣で頭を叩くと光輝は又、膝から崩れ落ちて倒れる前に

「パアン！」

手を叩く

「は!？」

我に戻った光輝は今度は身体全体を触って現実と理解して。

「又だ翼愛の太刀筋はしつかりと見ていたのに」

「此れは影異世界はスマートフォンとともの 剣と言う技

次は連続で行くよ」

私は構えて

「ち、待って」

光輝は慌てて立ち上がり剣を構えて

「瞬華&影の剣」

私は連続で瞬華と影の剣を連続で繰り出して其れに合わせて

「パアン！パアン！パアン！パアン！パアン！」

手を叩く。

一応光輝は一生懸命に聖剣で防ごうとするが瞬華と影の剣の前には意味を持たなく連続で切り刻む幻を見せつけて、とうとう光輝は膝から崩れ落ちた

「パアン！」

叩くが

「あれ？」

反応が無く

「パアン！」

もう一度叩くと

「あれ何して居るんだけ?」

あんまりにも嘘の死を感じてしまい一時的に記憶が飛んで居たよ
うだ

「大丈夫？」

相当記憶が飛んで居たようだけど?」

「あ、あ、当たり前だ」

声が震えながら立ち上がり聖剣を構えるが

「体が震えているのに?」

聖剣を持つている手に支えている腕、立って居る足が震えていた

「む、武者震いだ」

光輝はそう言い切るが

「違うよ。」

其れは死による恐怖だよ」

「そんな事は…」

「其れは如何かな?」

私は今まで使っていた殺気よりも濃度が高い殺気を光輝に叩きつける。

すると光輝の身体はさつきよりも小刻みに震え出した。

「相当体に沁みついたようだね」

「な、何でだ!？」

か、体の震えが、と、止まらない」

「だから言ったでしょ。」

死の恐怖が相当染みついたて

光輝君、正直に言うかね、私達と愛子先生が何でトータスの戦争に反対したか分かる?」

この死の恐怖をクラスメイト達に味あわせないようにしていたんだよ。

なのに光輝君で力を合わせて魔族と戦おう、と言ったんだよ

私なら私だけ戦うから、皆は戦わないでだよ」

少し言葉は違うがそう言うと

「っ!？」

私の言葉に何も言い返せなくなり。

「本当にクラスメイトを守るつもりなら、最初から命懸けの場所に隣に立たせずに戦いから遠ざけるんだよ。」

光輝君が戦う理由はクラスメイトを守るじゃなくて、周りの人間に褒めて欲しいの自己満足を満たしたいだけ」

私の言葉が光輝の核心を付いたのか何も言い返せなくなり

「……………やっ!…」

最初は小声で言い徐々に

「うるさいー」

うるさい！

うるさい！

うるさい！

屁理屈を言うな！」

ただの駄々っ子をする子供に見えてしまう

私は紙の短剣を持って居ない左手を光輝君の死角になる私の身体に運んで

「はあく、呆れた。

自分からクラスメイトを守るって言ってクラスメイトを現地の人の耳元に運んで」と一緒に仲良く魔族を殺しましょうなんて誘っておいて、色々と覚悟が出来ていないね」

『font:ul20』Ja!『font』

左手に球体が出来て私の手元から離れた。

「いい加減にそう言う性格は直した方が良いよ。

一人では生きていけないから」

「黙れ！」

黙れ！

知った口で言うな。

俺よりあっちもこっちも活躍しているくせに！」

「確かに光輝君よりは学校で活躍していると思うけど…

其れを此処に持つてくる？」

会話して居ると

『font:ul20』Master, Amangebenen Standort
Installation auf Searcher abgeschloss
『font』

念話から「レーヴァテイン」の報告を聞いて

『ありがとう』

礼を言つて

「『レビューア テイーン』光輝君の後ろに設置したサーチャー『光輝君が今の性格を捨てて私が作った死の恐怖を超えない限り』一步も成長しない」

『font:ul20』Ja!／font』

「そんな事は…」

光輝が言い切る前に私は

『コワイ』

私は念話を使ってカタゴトで伝える。

「!」

光輝は直ぐに振り返るが

無色透明のサーチャーは常に光輝の後頭部に沿って付いて来るので後ろには何も無い

「光輝君、どうかしたの?」

「い、いやなんで…」

『ヨクアイ』

コワイ』

又念話を送って光輝は又振り返る。

「光輝君?」

「いや後ろから声が…」

『ヨクアイ』

コロサレル

コワイ』

「!」

誰だ。

何処にいる!?!」

光輝は辺りをキョロキョロを始める

「光輝君、嘘の死を感じ過ぎって頭可笑しくなっちゃたんじゃ」
「違う。」

確かに声が聞こえたんだ」

『オレ』

ヨクアイ

コロサレル

イヤ

モウ

ヤダ』

「又だ

また声がする。

…まさか魔族が!」

「いやいや無いよ

幾ら魔法に長けた種族でも言葉を口に出さずに他人に伝える魔法
て有りますか?

メルドさん」

「ああ俺が記憶している範囲の魔法にはそんな魔法は無い」

「其れに昨日魔族の襲撃が有ってホルアドの強化上がって居ますよ
ね」

「実際に上がっているぞ」

「だから魔族が侵入する隙間は無いよ」

「ですが実際に…」

「オレ

マジンゾク

ジャナイ」

「!

嘘を言え

だったら何者だ!」

キョロキョロしながら叫ぶ

はたから見たら一人でキョロキョロしながら大声で叫ぶしか見え
ない

『オレ

オマエ

オマエ

オレ』

「何を言っているんだ!」

「本当に大丈夫?

光輝君、さつきからキヨロキヨロしながら大声で叫んで」

私は引き気味で言う」と

「翼愛、聞こえないのか！」

魔族が侵入して来たんだ！」

『チガウ』

オマエ

オレ

オレ

オマエダ』

「馬鹿な事を言うな俺な訳が無い！」

光輝がそう言うのと私は顔を軽く動かして恵里の方を向いて

口パクで

『黒くて煙で纏わりつく、みたいな魔法ある？』

と言うと恵里は手に持って居る杖から魔法が出て来て光輝を包む。

私は無詠唱で光の魔法を使って白い影を作り更に遠近法を用いて

目線で大体私が立って居る場所に設置して

『我は”影”、真なる”我”……!!』

ペルソナ4のシャドウの決めセリフをマルパクりする

「其処か！」

限界突破!!」

相当に頭に血が上って居て私が用意した敗北条件を破って更に

「神意よ！」

全ての邪悪を滅ぼし光をもたらしたまえ。

神の息吹よ。

全ての暗雲を吹き払い、この世を聖浄で満たしたまえ。

神の慈悲よ」

二つ目の敗北条件を破り始めた

私にとっては好都合

私は紙の短剣を逆手持ちにして今まで使っていた無色透明の武装色を今まで使っていた濃度を引き上げる

すると今まで無色透明だった紙の短剣が桜色のオーラを纏い居合

切りの構えをする

「この一撃を以て全ての罪科を許したまえ！」

神威!!」

光輝は神威を放つ。

そして神威が放たれて光輝を纏って居た黒い煙は一瞬で払われて光の影が私に変わったことに驚くが放たれた技は光輝の意志関係なく放たれ私に向かう

私は動いて

「我流、桜乱舞」

流桜を纏った紙の短剣を振り抜いて光輝の神威を両断する。

其れも一回、二回、三回と細切れにする様に切り刻み。

切り刻まれた神威は力なく飛散した

四回目ので光輝の神威は全て両断して、五回目で流桜の斬撃を繰り出して

「ガフ!!」

光輝は壁まで吹き飛ばして壁に激突更に私が追撃に壁に押し付けて光輝の喉元に紙の短剣を軽く押し当てる。

首に軽く押し当てた紙の短剣から少し出血した。

「はい、光輝君の負け」

「お、俺はま、負けて」

「相当混乱して居るね。」

少し死の恐怖を与えすぎたかな？」

「ち、違——」

言いかける前に

「いや、光輝君は死の恐怖で相当混乱して居るね。

現に、「レーヴァテイン」映像出して」

『font:ul20』Ja!『font』

空中ディスプレイが現れて映像が流れる。

やっぱり客観的に見ると死の恐怖で発狂しか見えない

「た、確かに聞こえたんだ」

「どうせ死の恐怖に耐えきれずに幻聴が聞こえたんですよ。」

兎に角光輝君貴方は敗北条件の神威、及びその上の派生型の使用と
二つ目の限界突破とその上の派生型の使用を満たしています。

よって」

私はメルドの方を見て

「この勝負、ヨクアイの勝ちだ」

純粹の悪意と仕組まれた裏切り

模擬戦を終えて私達はホルアドの冒険者ギルドを後にして宿に戻って朝食を取る。

私達は普通に食えるが

「俺は…間違えていないんだ…」

光輝は上の外になっていた。

無理もない今まで自分が行つて来た事に皆賛同してくれていたのに今回ばかり皆が賛同せずには違ふと反対にされてそのまま押し切られたからね

「光輝君、何時までウジウジしているの？」

もう多数決で決まったから受け止めなさい」

「う、受け止められるか！」

机を思いつ切りに叩いた

「たしか、魔族が侵入して光輝君に魔法を使つたて言う奴。

其れは光輝君の妄想で片づけたでしょ」

「違ふ！」

実際に魔族が侵入して俺に魔法を使つたんだ。

皆は気がつかなかつただけだ」

「其れ何度か聞いた。

だから色々と確かめたでしょ。

で結果は異状なし」

「違ふ。」

現に俺に声が聞こえて」

「はいはい。

其れは私が光輝君に死の恐怖を沢山与えすぎて一時的に意識が悪夢状態になつた事で片づけたでしょ」

「其れも違ふ！」

あの時の俺は確かに…」

「此れを見てまだ言える？」

私は待機状態の「レーヴァテイン」を取り出して

「(レーヴァテイン)あの時の映像を」

『font:ul20』Ja!『font』

私と光輝の間に空中ディスプレイが現れて

『!』

誰だ。

何処にいる!?!』

光輝は辺りをキョロキョロを始め

『光輝君、嘘の死を感じ過ぎてって頭可笑しくなっちゃたんじゃ』

『違う。』

確かに声が聞こえたんだ』

探すようにキョロキョロしながら大声で叫ぶ

『又だ』

また声がする。

…まさか魔族が!』

私は空中ディスプレイを仕舞って

「嘘の死の恐怖を感じ過ぎて一時悪夢障害に落ちていたのよ」

「でも実際…」

「はいはい、早く食事を終えて次の場所に行く役目があるから朝食を食べましょう」

私は食事を続ける

「時間は無限では無く有限

勇者様である光輝君を待つて居る人が沢山いるから早く朝食を食べ終わりましょう」

「…分かった…」

私達は食事を再開する

「俺は絶対に間違えていない…」

私達は食事を終えて私の「ワシボイジャー」を使って王都のある場所に向かう

↳移動↳

目的地に到着する前に王都のだいぶ前に「ワシボイジャー」を着地させて仕舞った。

孤児院に居る子供が凄いい勢いでこっちに来た

私は

「パアン！」

手を叩く

子供達は全員私を見て

「皆！」

私達は創造神エヒト様によって召喚された勇者様だよ！」

歌のお姉さんの感じで話す。

「迎えてくれたのは嬉しいの、でもみんな一回離れて欲しいの

身動きが出来ないから」

子供達は直ぐに私達から少し離れた。

—「其れじゃあ自己紹介するね。『シャルル、弓矢と的になるボールを出して』」

—私は勇者様の仲間の一人の弓士の鞆波・A・翼愛だよ』『分かったシャル、弓矢とボールシャルね』

私の横から魔法陣から現れて私は両手を入れて其処から弓、矢筒、的のボールを取り出して直ぐに矢筒を肩にかけて、的の用のボールは投げる。

次に私は矢筒から矢を三本取り出して弓に引っかけて引っ張る。

そして狙いは一瞬で決まり矢を放つ。

放たれた矢は投げられたボールに吸い込まれる様に迫って行きボールに一本目の矢が刺さり次に二本、三本と連続で刺さり重力に沿って地面に落ち始める。

矢の羽の方が下に落ちて、三本の矢の羽が三脚の役割を果たして立った。

其れを見ていた子供達は

「スゴイ！」

「流石ゆーしゃ様の仲間！」

歓喜を挙げていた

私は直ぐ様に

「次は恵里ちゃんの番」

「はい」

私はシスターの案内で移動する

く移動く

「この部屋です」

私はシスターの案内で部屋に入った

「それで話とは？」

「あんまり人前では話せない内容でもし他の人に話せば爆発的に広がってしまう民衆に不安や混乱を招くかもしれない」

「そんな重要な事を私にですか!?!」

「聖職者なら口は堅いでしょ？」

「確かに堅い自信はありますが」

「其れじゃあ話すね。」

実は昨日ホルアドにあるオルクス大迷宮で魔族の接触があったの

「そんな!?!」

「幸いに魔族は撃退出来ただけど問題が起きたの」

「問題ですか」

「うん、子供達に言ったと思うけど私達は異なる世界から来たの。」

それ故にこの世界と私達の世界では価値観が違うの」

「価値観…」

「それ故に勇者は魔族を殺せなかったの」

「…嘘ですよね!?!」

シスターは心底驚いて居た

「真実よ。」

殺せなかった理由は襲って来た魔族に恋人が居た事が発覚して私達の世界の価値観が邪魔をして殺せなかったの」

「ふ…ふ、ふさげないで下さい!」

シスターは怒りを露にした

「私も、あの子達も魔族に故郷も家族も友人も何もかも奪われたんですよ!」

「分かって居る。」

だから勇者を魔人族を殺せるように教育しているの。

其れで貴方にも手伝って欲しいの」

「ええ何でもやりますよ」

憎き魔人族が滅ぼせるなら」

「そうありがたい。」

其れで私が今勇者に教えているのは純粹の悪意

奪われた子供達が持って居る魔人族に対する何も混じり気のない
の悪意をぶつける予定なの。

それでもって君からも悪意をぶつけて欲しいの、其れも特別な悪意
を」

「特別な悪意とは？」

「まず一つは手を出して欲しいの、特にビンタが良い」

「分かりました」

「二つ目は暴言、限度はね……捕まって極刑なってしまうぐらいで

因みに私の権限で無罪に出来るから」

「任せて下さい」

「タイミングは魔人族を庇う発言した時に」

「はい」

「其れじゃあ戻ろうか」

そろそろ集まっている筈だから」

「はい」

私達は光輝達の元に戻った。

↳戻る↳

私達が戻ると

光輝は子供達が箱に紙を入れやすい様に前屈みになって

「はいゆーしゃ様ー」

子供は其処に紙を入れた

「翼愛、今ので全員の分が集まった」

「そうか、なら」

私は子供達が居る方向を向いて

「みんな！注目！」

『コレガコドモタチノネガイダ』

光輝は直ぐに振り返る

「勇者様、どうかしましたか」

「又だ」

「又聞こえるの？」

魔族なんて此処に居ないよ」

「そんな事は無い。

はつきり聞こえたんだ」

「はいはい」

私は他の紙を見ながら

『マジンゾクデハナイ。』

オレハオマエデ、オマエハオレダ』

「嘘を言え」

やっぱりはたから見たら虚無に話しかけているしか見えない

見ているとシスターがこっちに来て

「勇者様、大丈夫なんですか」

光輝を心配する

「大丈夫です」

私はそう言いながら

『デハウソデハナイシンジツライオウ』

「なんだ？」

『ココニイルコドモタチハゼンインナニカヲマジンゾクニウバワレタ

ソノコドモタチニマジンゾクトナカヨクナリマシヨウトイウノカ

？』

「そ、それは」

『オマエハオレノヨウニナニカヲダマセナイトイキテイケナイコモノ

ナンダ』

「黙れお前が俺な訳が無い！」

『我は“影”、真なる“我”……!!』

ナラコドモタチニシンジツライウカ？』

「ああ、言つてやるよ。」

魔族は俺達と同じ人間で」

私はシスターを見るとシスターも覚悟を決めて光輝に近づいて肩を掴んで無理矢理に自分自身に向かせて

「バヂン!!」

思いつ切り頬にビンタを入れた。

「あいつらが私達と同じ人間、ふさげないで下さい!!」

演技でもなくただの怒りで怒っていた

「？」

な、何で怒っ…」

「怒る？」

ええ、怒りますよ。

私もあの子達も皆、魔族に故郷も家族も友人も何もかも奪われたんですよ。

なのに今更仲直り」

「バヂン!!」

二発目のビンタが入った

「そんなもの出来る筈は無いですよ」

「バヂン!!」

三発目のビンタが入った。

「そんな事無理に決まっています。

全人類は魔族を根絶やしを望んでいます」

「バヂン!!」

四発目のビンタが入った。

「もうあなたは勇者様じゃない!

魔族に寝返った裏切り者!

この事は教会に報告します!」

シスターは部屋から出ようとすると

「ま、ま、待ってくれ」

光輝は急いで追いかけてシスターが部屋から出る前に手首を掴んだ

「放して、穢らわしい!」

シスターは抵抗して光輝の手から離れて
光輝に触られた部分を隠すようにしながら

「二度と触らないで下さい。」

裏切り者―」

「ち、違う俺はゆう…」

「勇者と聞いて呆れます。」

勇者と言うのは魔族を根絶やしにする者付けられる称号なんですよ」

シスターは部屋から出ていた

「光輝君、私が追いかけるから

今の内に考えを纏めてね。」

恵里ちゃんは光輝君のサポートを」

言いながら私はウインクする

「ええ」

そして私はシスターを追いかける様に部屋から出る

嘘の宣言と救い無き救い

私は部屋から出たシスターを見聞色を使って追いかける。
見聞色を使ったので直ぐに見つける。

廊下で蹲っていた

「シスターさん？」

私は呼びかけると

「ひゃあああ!？」

シスターは私の呼びかけに驚きながら私の方を見て

「勇者様方の…」

「翼愛」

「ヨクアイ様でしたか」

「えつとね…汚れ仕事を引き受けてありがとうね」

「あ…えつと、構いません。」

「其れで私がした事は罪にならないんですよね？」

「まあならないよ」

「其れは良かったです」

シスターはホツとしている。

「光輝君は元の世界のルール囚われているからこの世界のルールに染めるには徹底的に自己解釈が出来ないように間違えと言っておかないといけないから」

「其れは分かります。」

「勇者様方の世界って平和なんですか？」

「まあ、私が居た世界の住んで居た国は魔族や魔物が居なくて争いが程無く平和だよ。」

「他国だと人間同士が戦争して居るけどね」

「其れは其れで平和な方ですよ」

「そう言えるのが恨まらしよ。」

「まあ平和な国から来たもんだからどうしても皆、魔族を人間と認知してしまって如何しても殺すのを悠長してしまうの」

「エヒト様が呼んだお方達だから私達の代わりに魔族を根絶やしに

してくれると思つて居ました」

「実際貴族達も同じことを考えていたよ。

まあ戦争に参加すると発言した勇者には責任を持つて貰わないといけないから

取り敢えず私は戻るから子供たちの様子を見て来てほしいな」

「分かりました」

「其れじゃ」

私とシスターは別れて光輝達が居る部屋に戻った。

私は扉を

「コン、コン、コン」

ノックして

「光輝君、心の整理整頓は終わったかな？」

「翼愛か」

「入るよ」

「ああ」

私は部屋に入ると光輝は相当参っているようだ

「光輝君、恵里ちゃんと会話して周りから敵対されずに納得させる答えが出た？」

「正直に言々と魔族の人達を殺したくない。

だけど此処に居る子供達は…その…色々と奪われているから…嘘つきでも俺がヒーロー者にならないと…いけないのかな？」

「いや、如何して其処で疑問形になるの？」

「その…なんか騙して気が引けるから？」

「此処に居る子供たちは悪役を倒すヒーロー者である光輝君が必要なんだよ。

だから騙す必要は無いから。

なんなら教会に勇者の称号を返上して全部私とハジメ達に任せる？」

「そ、其れは其れでなんか駄目だし」

「其れに光輝君は皆を戦争に誘った責任が有るんだよ。

もし此処で引いたら今まで浴びていた注目が全部私とハジメ達に

孤児院が見えなくなると私は孤児院の子供達から貰った絵を開いて

「よく書いて居るね。」

光輝君

絵を光輝に見せる。

其れを見た光輝は

「なんでなんだ?!」

「何が?」

「なんで子供達が簡単に人を憎めるんだ」

「ああ其れね。」

簡単だよ。

子供は理性が幼いから物事の判断する力が弱く。

物事に対して善悪が簡単に付きやすいんだよ」

「だとしても…」

私は光輝が言い切る前に口を押さえて

「光輝君、町の中で魔族を庇う発言はこの世界の住人としては裏切り行為になるから気を付けて」

私は光輝の口から手を放して

「次の場所に行きましょう。」

次の目的地のタイトルは狂気の悪意だよ」

「狂気…悪意…」

「そう、人が憎き相手が目の前に居てどう反応するのか見る為だよ」

と言つて難民キャンプ場に移動する

く移動く

私達は魔族から逃げて来た人達の難民キャンプに辿り着いた。

「此処は?」

「あれ?」

光輝君知らない場所?」

「いや、一度だけメルドさん案内されただけで…」
と会話して居ると

「ゆ…勇者様方?」

勇者様方ではありませんかっ！」

私達の前から私達よりは年上であり身に着けている防具と武器は自警団位の貧相の装備している一人の兵士がこっちに来た

「ホ……ホラっ、俺ですオレ、三ヶ月前のパレードの時に握手して頂いた……」

私は光輝の顔を見ると本人は全く憶えていない顔をして居た。

兵士は気にせず

「よ、良かったらこちらに来てくださいっ！」

き、昨日赤髪の女性が来て手紙を渡して中身を見て明日勇者様方が来ると書いて有って

は、半信半疑で此処に居て本当に来て

み、皆喜ぶと思いますっ！」

「え……ああ」

兵士は意気揚々と、まるで宝物でも見つけたかのような笑顔で光輝の手を握り、

そして引かれるままに、光輝は兵士に連れられて、私達は其の後を追いかける

難民キャンプは据えたドブの臭いが鼻を衝く中、案内、と言うより連れてこられたそこは、

誰かを救護する場所とは思えぬほどの、ぼろテントやただのあばら屋が立っているだけ難民キャンプの住民は死んだ魚の目をして居る。

難民キャンプの中心に辿り着くと兵士が

「みんなあーおどろけえーゆーしやさまがおいでになってくださったぞおおおおっ！」

叫ぶ

兵士の声を、耳にした難民キャンプの住人は途端に、人々の目に生氣が宿り始め。

「夢みたいだ」

「こんな所にまでおいで下さるなんて」

「エヒト様の御使いだ」

「勇者様、どうか御手を……」

心身共に傷ついた人々は身を起こし、口々にそんな声を上げて光輝へと縋りつこうとするようにこっちに来る。

「あ……あ……あ……」

誰もが自分を信じ、そして頼ってくれる、かつて夢見たそんな場所に辿り着けたというのに、私が見せつけた光景でいつも通りの考えが出来ずに光輝の口からは喘ぎが発せられるのみだ。

そうしていると突然大衆が二手に分かれる。

その間をおそらく長老格なのだろう、白髭を蓄えた老人が通って私達の元に辿り着くと恭しく私達へと礼をする。

「こちらへ……勇者様、どうか祈りを捧げて下さらぬか」

老人の案内で私達は移動する。

同時に私達は直感する、そこから奥はもう救護所ではなく、見捨てられ、死を待つ者が最期の時を過ごす場所なのだ。

私は光輝は方を見ると光輝の身体が震えているおりその対極に恵里は何も動じていない。

私達はただ老人に従い、私達は奥へと足を運ぶ。

そこにあつたのはまともな治療も施されず、ボロ布に包まれ、

もはや、いかなる癒しも届かぬまでに壊れ果てた、人間が集められていた。

「ぐっ……」

光輝は咄嗟に口元を押さえる。

「……」

私達は動じずに居る

老人が寝転んで一人に近づいて

「まだこの娘は息があり申す、どうか安らかなる死を祈ってやって下さいませぬか

勇者様方」

それは自分とそれほど年が変わらない少女だった、

しかしその半身は無残にも切り裂かれ、全身には酷い火傷の痕がある。

「ゆ……しゃ……ヤッ……」

「そうじゃよ、勇者様方が陽の光も届かぬこんな場所にまで来てくださった、

せめてでもと我らが日夜欠かさず行つて来た、エヒト様への祈りが通じたのじゃ」

「どっ……どっ……」

少女の胸に置かれた手が温もりを救いを求め、僅かに動く。

「行きなさい」

私は光輝の背中を押す。

光輝は私に言われるままに少女の元に行きそつと少女の手を握る、

「うれしい……っ」

少女の絶え絶えの吐息の様な声が光輝の耳に届く。

「御使い様に……勇者様に……手を握つて貰えたまま、永遠の眠りに……就けるだなんて

おとぎ話のお姫様……みたい」

その言葉を最後に、少女は簡単にこときれる

「この子はエヒト様の御許へと旅立ちました、勇者様のお陰で歓びを持って」

「ええそうですね。」

「この子にとつてこれ以上ない幸せですね」

私は老人の言葉に意を唱えながら光輝を見る。

光輝の目は動揺してギョロギョロと動いていた。
相当追い詰められている

追い打ちをかける様に

「勇者様？」

新たな声がある、私達は声が聞こえた方を振り返ると、そこにいたのは芋虫の如く四肢を全て失った男、

私と恵里は平常心を保っているが、光輝は思わず息を呑み。

男に近づくと

「勇者様、この者にもどうか……御救いを、勇者様？」

老人の視線が光輝の背中へと突き刺さるのを感じつつ、

光輝はせめてでもと、額に手を当ててやる。

「なあ……母ちゃん、俺みたいならくでなしでも……勇者様は優しくしてくれるんだ……」

俺のこと……褒めてくれ……よ」

包帯に包まれたその目から涙が零れ落ち、そしてこの男も簡単にとされた

更に此処に居る人達は男の発言で光輝の元にゾンビの様に

「勇者様」 「勇者様」 「勇者様」 「勇者様」 「勇者様」

「勇者様」 「勇者様」 「勇者様」 「勇者様」

「勇者様」 「勇者様」 「勇者様」

「勇者様」 「勇者様」 「勇者様」

「勇者様」 「勇者様」 「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」 「勇者様」 「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者

様」

《marquee: normal, hidden, linear, t9, do,》

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者」

様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

「勇者様」

途切れることなく近づいてくる

「勇者様」

気づいた正義の正体

難民キャンプ場の安楽死場に居る人達全員が光輝の元にゾンビの様に近づいてくる。

皆光輝に助けを求めて集まって行く。

私は光輝の方を見る。

光輝の目は焦点が合っておらず顔から冷や汗を出しながら体が震えていた。

そして限界に達するのは簡単に来る。

「頼む！ かわる！」

光輝は限界に達して思わず香織に助けを呼ぼうとするが

「はいストップ！」

私は光輝の口元を抑えながら私が光輝に近づいて耳元で話す。

「皆治癒師の香織じゃなくて勇者である光輝君に助けてもらいたいの」

私は光輝の口を押さえていた手を緩めて

「だけど勇者で何も出来ない俺じゃなくて治癒師の香織なら……」

「其れは違う奈落に落ちてハイスペックになった香織でも出来ない事が有るの」

「出来ない事？」

「そう、人体の欠陥。」

幾ら治しても欠陥している部分は直せないの。

ましてや此処は難民キャンプもとい貧民街なの。

たとえ命が繋がってもその人の面倒を見てくれる人は居ない。

其れゆえに死期がちよつとだけ先送りになるだけ。

今此処に居る人達に必要な救いは勇者である光輝君が最後を死を見届ける事」

「死を……見届け……る」

「そう」

私は視方を変えて

「まさかと思うけど、逃げたいか思っていないよね。」

彼らは魔族に何も出来ずに苦しんで死ぬ定めだったんだよ。

其処に光輝君が現れたからせめて自分達の不自由になった体と死を見せて魔族がどれだけ残虐をして来たか知ってもらおう為に。

だから逃げないでよ」

「あ……ああ……」

私は光輝の背中を押して前に押し出す。

そして光輝は流される前に一人一人に寄りそり、直ぐに勇者である光輝に見届ける嬉しさに死をする人が後を絶たず。

私達はその間に老人にこちら辺で一番大きい場所は無いと聞いて老人は直ぐに案内してその広場に其処ら辺に合った薪や生ごみなど燃えるものを集めてある程度集まったら

『シャルル、油と花を』

『はいシャル』

私の横に空間魔法陣が現れて其処に手を入れて油と花を出して

「此れを集めておいた物に賭けておいて」

「うん」

私は恵里に油と花を渡して

私は安楽死場に戻り。

死んでしまった人達を四人同時に持って広場に戻って集めた物の場所に置く。

其れを繰り返して

「勇者様……どうか……儂より……先に……死んでしまった娘の……親子の……仇……w……」

安楽死場の最後の老婆もこと消えて

私は光輝の元に行きながら

「光輝君此処にはもう光輝君に助けを求めている人が居ないから移動するよ」

そう言うってこと消えた老婆をおんぶして光輝は虚ろの目で立ち上がり私が広場に向けて移動すると光輝も付いて行くように歩き移動する。

そしておんぶして居た老婆を集めていた物の所に置いて恵里が油

を掛ける。

私は其処ら辺に合った木の棒をボロ布に巻きつけて

「恵里ちゃん、油」

「はい」

私は恵里から油を貰って其れに浸し余分の油を落として松明が完成した。

次に私は老人の元に行き

「すみません。」

火打石ありますか？」

「ああ、もちろん」

老人は懐から火打石を取り出して

「使わせてもらいます」

私はそう言つて老人から火打石を借りて

「カン、カン、カン」

火打石で火花を散らす。

松明のボロ布に油を染み込ませている為簡単に松明に火がつく。

私は火が付いた松明を持って光輝の元に行き

「はい」

松明を光輝に差し出す。

「え？」

光輝は理解して居ない。

「え？」

て決まつて居るでしょ。

火葬だよ。

勇者である光輝君がやる事に意味が有るんだよ」

「あ…ああ…そうだな」

光輝は私から松明を貰つて私達が集めた物に松明の火を付ける。

火はまんべんなく広げた油を伝つて燃え広がって炎になる。

悪臭が多少広がるが問題ない

「勇者様方。」

死に行く者の最後を見届けるだけではなく火葬をしていただいて

誠に有り難う御座います」

「いえ、当然です。」

『シャルル、魔人族の死体を取り出して、男性の方だけで良いからあと私達が来る前に死んでしまった人達の為の供養も用意しました』

『分かったシャル』

私の隣に空間魔法陣が出て其処に手を入れてある物を取り出す。

「此れは？」

老人や周りの人達は驚きながら驚愕して居た

「ええ、皆さんをこんな不衛生な場所に住む理由を作った魔人族です」

私を取り出したのはウルの街で清水幸利を唆した魔人族の男だ。

「なぜ勇者様方が此れを?!」

老人がそう質問すると

「稲作が有名の街、ウルを落とそうとした魔人族を我が勇者である光

輝君が打ち倒しました」

私は堂々とそう言う

光輝は

「え、まってk…」

やって居ないと言ってしまいう前に

私は光輝の口を押さえて黙らせる

「そして勇者である光輝君は魔人族を憎みながら苦しい生活を送っている皆様に少しだけでも楽になって欲しくて魔人族の死体の不敗処理を施して今日まで持って居ました。

更に、恵里！」

「私の番ね」

恵里が魔人族に近づいて手に持って居る錫杖を魔人族の男性の死体に翳すと魔人族の男性の死体が一人で動き

「動きは単調ですが恨みをぶつけるのは十分だと思います」

そう言う老人は下を向いて光輝の手を握って顔を上げると泣いており

「あ、ありがとうございます。」

儂より早く死んでしまった孫の無念が晴らせます」

「…で、出来る訳…」

「光輝君はもうしちやっただよ」

私は予め取り出して居た物を取り出す

「もし私があの時私がオシユトルさんにこの契約書を書かせなかったら戦場に行きたくないクラスメイトも強制的に行かせることになっていたんだよ」

光輝は私の言葉の意味を理解したのか

「あ、ああ…お、俺は取り返しがつかない事をしたのか」

「聞くけど此れが光輝君の正しい正義なの？」

「わ、分からない、分からなくなった」

光輝は自分が信じていた正義に疑いを持ち始めた。

「なら答えを探しなさい。」

自分も周りも納得して信じられる答えを

と言っても光輝君の正義の先入観を壊した私が言える立場じゃないけどね」

「……」

恵里が半目で私を見つめる。

そんなやり取りをして居ると老人がこっちに來て

「勇者様方、今回は救いのない者達の為に色々としてください。」

有り難う御座います」

「いえいえ、今回は勇者様が申し出た事。」

偶々、私が勇者様の要望に応える物を用意出来ましたから」

「左様ですか」

「では私達はそろそろ此処を離れなければいけません。」

貴方達のように勇者の救いを求める人達は山ほどいますから」

「そうですね」

儂ら達の為に此処に居てもらえるのも救える命も皆殺しをする魔人族も出来ませんかの」

「ええ、その通りです」

「では、創造神エヒト様の加護が有らん事を」

「創造神エヒト様の加護が有らん事を」

そう言つて難民キャンプ場を後にする。

その帰りに私達を行く手を遮るかの様に広がる扉に吊るされていたのは、全部に首を括られ、男性なら男性器や女性なら乳房を切り落とされた、魔族達の遺体だった。

「はあく凄いい光景だね。」

光輝君

私はそう言つて私は光輝の方を見ると

光輝は吊るされている魔族を見ながら流れる様に座り込んで

「ハハッ……ハハハハ……ハハハハハ、アハハハハハ」

虚ろな目をしながら光輝は笑い始めて

「何が正義だ！」

何が勇者だ！

俺はただ汚れるのが怖かった……命を奪うことで、清く正しい存在でなくなるのが怖かった。

皆から特別と呼ばれなくなることが……怖かった。

だって皆から俺は特別だから、他の人とは違うから、皆に勇者と選ばれた存在だと思つていた。

でも皆が求めていたのは勇者の方なのだから、ただの普通の俺の天之河光輝に価値なんてないから……」

いつもなら自分のマイペースで突き進む光輝が私が用意した景色を見て止まり出した

「其れで聞くけど光輝君、もし過去に戻れるなら何て言う」

「……そうだな……俺には皆を救うことも出来なきや、奪うことすら……出来ないのか。」

人間も魔人もない、善も悪も関係ない、ここにあるのは生きるか死ぬか、ただそれだけで、死んでいく者たちには神も種族も国家もなく、灼熱地獄の底で生きてまま焼かれていく苦痛と恐怖があるだけなんだ……その苦痛をただの勇者で……いいや、もう勇者ですらなくなつた俺がっ！

「どうやって救つたらいいんだ！」

「其れが前半で感じた光輝君の感想？」

「そうだな。」

翼愛やハジメ達はこんな光景を見ていたんだ？」

「そうなるね」

「道理で勝てないわけだ」

「そう感じてもらって嬉しいよ」

「其れでそろそろ昼ご飯だけど何か食べる？」

「いや不思議とお腹をすいて居ない」

「其れは極度に見たくもない物を片っ端から見せられて今ご飯を食べると吐いてしまうと無意識に感じているの。」

「今は水だけにしなさい」

「ああそうする」

私は王都の食堂に向かう

罪人と光輝が決めた裁き

私達は王都の食堂に着くと光輝の勇者権限を使って個室を優先的に使用して王都の食堂の店員に光輝はあんまり喉が通らないから栄養が有るスープ系が欲しいと頼んだら直ぐに用意してくれると言ってくれた。

其れと少しの野菜と果物、牛乳、少し大きめのコップとコップの口が防げる程度の皿が欲しいと言えば其れも貸してくれた。

私は其れを最近料理の包丁化しているハジメ作の刀を使って野菜と果物を細かく切り刻み、其れを牛乳と一緒に少し大きめのコップに入れてコップの口が防げる程度の皿で蓋して

「パチン！」

指パッチンを詠唱代わりにして少し大きめのコップの中で極小のつむじ風を起こす。

つむじ風、切り刻んだ野菜と果物を更に細かく切り刻み牛乳とかき混ぜる。

そして出来たのは

「はい、光輝君

私特性の野菜と果物のスムージーだよ」

「あ、ありがとう

翼愛」

光輝は少し戸惑って受け取ってくれた。

「其れで光輝君。

やっぱり食欲は無い？」

「ああ、翼愛の言う通り食欲が無いんだ」

「そうだよね。」

あれとかあれを見せた後だからね食欲なんて出ないよね。

あれらを見て食欲が出るのはよほどあれに慣れている人か相当抜けている人だね」

会話して居ると

個室に

「お待たせしました」

食堂の店員がワゴンで料理を運んで来て

「此れ代金です」

私はお金を出して

「勇者様、少し代金が多いんですが？」

「チップです」

「そうでしたか」

食堂の店員は退室した。

私と恵里は運ばれた料理で食事をする。

食事していると

「な、なあ、翼愛」

「何？」

「翼愛て平気なのか？」

「魔族の事」

「ああ」

「まあ、慣れているかな。」

私の環境が特殊だからね」

「確かにそうだが」

「じゃあ恵里は大丈夫なのか？」

「ふえ!？」

何が」

恵里は行き成り話を振られて戸惑った

「いや、魔族のアレを見て。」

恵里つて幽霊とかホラーが苦手だったはずだから」

「ああ、私はホラーは苦手だけどスプラッター系は大丈夫。」

実際スプラッター系の映画は頻繁に見るから」

「そうか。」

俺が弱いのかな？」

「弱いね。」

弱いとか強いとかはあんまり気にせずにいるといいよ」

「でも……あの時俺は皆を守る強さが合ったのに心が弱かった。」

だから皆を危険に晒したのかな？

雫は其処ら辺強いのかな？」

光輝は見事に迷い始めている。

「雫ちゃんはいつも光輝の尻拭いをして居るから多分、心が強いよ」

「尻拭いか。」

今思い返せば、何が正しくて何が間違いなのか分からなくなってきた」

「其れだけ我が道を進んで居たって事になる」

「俺は祖父が教えてくれた正義を忠実に全うして居たのに此処じゃ意味が無かったのか？」

「無いね。」

光輝が目指していた正義はしつかりとした基盤が無ければ機能しないから」

「じゃあ、その基盤はどうやってたら出来るんだ？」

「そうだね。」

先ずは戦争してどちらが降伏する。

そして負けた方は二度と戦争しないと和平を結べば出来るよ」

「結局争わないと無理なのか」

「そうだね。」

其れに人間族と魔人族のどちらも殲滅戦を望んでいるみたいだ」

「如何して何だ!？」

そんな事をすればどちらも無事では済まないはずなのに」

「此れは長年続く政治や宗教の教えから来る物だから

私達ではしようがない」

「翼愛達は出来るのか？」

「戦争を止める事でいい？」

「ああ、其れで間違いない」

「一応出来る出来ないと言えば多分出来る方だと思う」

「出来ないとは言わないのか」

「そうなんだけど一回相手をビビらせないといけないから」

「ビビらせるか」

「まあ取り敢えず食事を再開しろ。」

「時間は無限じゃなくて有限だから」

「そうだな」

私は食事を再開して食堂を後にする。

代金はもう払っているので問題ない。

王都を出て近くの森まで移動して「ワシボイジャー」を出して次の目的地に向かう。

「移動」

目的地付近に「ワシボイジャー」を着地させて仕舞った。

残りは徒歩で歩く

「着いた此処が次の目的地」

「此処は？」

「ハイリヒ王国の最大の監獄

悪いけど光輝君は此処で初めて人を殺して貰います」

「!!」

翼愛、本気なのか?!

案の定光輝は驚いて居たが

「大丈夫、大丈夫

この世界に平和を与えたいなら必要な事だし。

其れに殺しても心が痛まない極悪人を用意したから簡単に豆腐みたいに切れるから大丈夫!」

「そんなものか?」

「取り敢えずうだうだ言っている暇は無いから行きましょう」

私は先頭を歩いてその後ろを光輝と恵里が歩く

ハイリヒ王国の最大の監獄の門番が私達を見た瞬間

「お疲れ様です。」

勇者様方」

敬礼で迎えてくれた。

「お向かれ」苦勞様。

其れで此処の看守長に伝えて欲しいから待たせるなら応接室を使わせてと」

「ハア、すぐに連絡します」

門番は同時に小屋に入って直ぐに門番の一人が出て来て

「どうぞこちらをー」

監獄の門が開いて完全に開くと

「此処から先は私が案内します」

門番はそう言うのと私の先頭に立って案内を始める。

私達は其れに付いて行く

監獄の応接室は直ぐ近くで

「では此処で待つて下さい。」

あ、茶菓子は直ぐに用意しますので」

門番は素早く応接室を出て行った。

「其れじゃあ此処で待ちましょう」

私の言葉に皆は応接室で休む。

休んでいると

「なあ翼愛」

「うん？」

「何」

「俺が殺す人って何の罪をしたんだ」

「ああ、其れね。」

光輝君が処刑する罪人はコンカイ・ダケジヨウ

家族構成は両親どちらもクズで魔族の侵攻で両方とも他界している。

罪状は強盗及び放火が二十軒で、捕まる前に盗みに入った家の家主のご年配の夫婦を殺害が一件で放火する前に自警団が駆けつけて放火の方は未遂で終わった

自警団の隊長が魔写のアーティファクトを持って居た為物的証拠の魔写がある。

看守長が写真を持って居るから後で見せて貰おうか」

「あ、ああ分かった」

待つて居ると

「お待たせしました。」

勇者様方」

偉そうな服を着た人が応接室に入って来た

「貴方が此処の監獄の看守長の…」

「ええ、タダノカン・シユチヨウです。」

「貴方が此処の勇者様ですね」

タダノカンは手を差し出して

「光輝君」

「あ、はい勇者の天之河光輝です」

握手で返した。

「それでタダノカン看守長さん、用件は昨日手紙で渡しているので分かって居ますよね？」

「ええ、勇者様が憎き魔人族を屠る為に此処の囚人を使うのですね」

「ええ、その通り尚勇者である光輝君は人殺しが此れが初めてなるので嘔吐などをしてしまいます」

「おや、食事は抜かなかったのですが？」

「ええ、人を殺してしまった罪悪感を身をもって知る為に」

「おお、なんとも」

私とタダノカンの会話をしながら光輝をチラッと見る。

光輝は私達の会話でドン引きして居た。

「其れで、勇者様に今回裁く罪人をどれだけ残虐の行為して来たのか魔写を出して欲しいのですが」

「おお、構いません」

タダノカンは懐から数枚の魔写を取り出した。

「此方が今回勇者様が裁く罪人のコンカイ・ダケジヨウが行った魔写です」

タダノカンは懐から数枚の魔写を光輝に差し出して、光輝君は受け取って魔写を見る。

「こ、此れは」

光輝は驚愕な感情をしながら見て

「コンカイ・ダケジヨウの罪状は其方の仲間から聞いていると思いますが強盗及び放火が二十軒で殺人は一件、放火未遂は一件」

そしてその魔写に収めてあるのはコンカイ・ダケジヨウ犯した殺人が収められて居ます」

そう説明するが光輝は動揺しながら魔写見ている為何も聞こえていない。

「なんで惨いことを」

「コンカイ・ダケジヨウはスラムのクズの両親の間に生まれたのでそのクズが生まれ持ったんでしよう。

死んでしまったご夫婦の為にどうか勇者の正義の裁きでこの者を断罪して頂きたいと思えます」

私は肘で軽く光輝の脇腹を突っついて

「光輝君、まさかと思わないけど逃げないよね？」

もし逃げたらタダノカン看守長の期待を裏切る事になるから、光輝君は出来るよね。

因みにその罪人は裁判を終えて有罪の死刑が下っているから殺せないと言わないよね？」

「あ、あ、出来る、出来る」

「そうよかった。」

タダノカン看守長、勇者様は自ら裁くみたいです」

「おお、其れは良かった。」

では此方になります」

私達はタダノカン看守長の案内でコンカイ・ダケジヨウが居る牢獄に向かう

移動

ある程度歩くと

「此処がコンカイ・ダケジヨウが居る牢獄になります」

私達が目にしたのは監獄椅子で私達と変わらない女の子、コンカイが拘束されて座って居た。

其れもご丁寧に亡き入りもしている

「光輝君、見て此れを見て如何思う？」

「彼女がコンカイ・ダケジヨウ？」

何か間違いじゃないのか？」

「気持ちには分かるけど、タダノカン看守長」

「間違いありません。」

彼女がコンカイ・ダケジヨウになります」

「だそうよ。」

タダノカン看守長、牢獄を開けて下さい」

「ハア！」

分かりました」

タダノカン看守長は牢獄の鍵を鍵穴に差し込んで開けて私達は入る。

コンカイは私達が入って来た事に気がついて

「反省して居ますから処刑だけはどうか、どうか辞めて下さい！」

見事な演技力であっばれの一言だ。

「其れは無理かな」

私がそう言うのと

「そんな！」

どうかご慈悲を！」

「其れは無理かな裁判も有罪の死刑と決まって居るからね。」

其れに処刑人だからエヒト様が召喚した勇者の天之河光輝が自ら
行うからあの世で自慢できるよ」

コンカイは光輝の方を向いて

「ゆ、勇者様、どうかどうか処刑は辞めて下さい。」

私は心の底から反省していますからどうかお許しを」

コンカイの顔は涙に鼻水を垂れ流しでして居た。

流石に

「なあ、翼愛、流石に此処までして居るし流石に演技じゃないよな？」

「はい、私は心の中から反省して居ますのでどうか処刑は辞めた下さい」

そう言う

流石に光輝は戸惑るが

「其れにしても光輝君いつもの君は此れを見て解放すると言うと思っ
ただけど？」

「翼愛のせいで簡単に善悪の判断が出来なくなっただよ」

「ふくん、本音は？」

「出来れば処刑したくない」

「勇者様、分かってくれるんですか？」

「だか…」

光輝は悩む

「悩むなら…」

私はハジメ作の刀を取り出して鞘から抜き取り逆手持ちにしてコンカイに近づいて

「勇者様方？」

コンカイは困惑するが、私は逆手持ちした刀を振り挙げて左手首に目掛けて一気に振り下ろして鞘に戻して光輝達が居る場所まで戻る。

コンカイとタダノカンは困惑するが

「まさかと思うけど」

「あれで判断すると良いよ」

私がそう言った瞬間コンカイの左手首が切断されて其処から大量の血が噴き出た。

其れに気がついたコンカイは

「ぎやああああああああ!!」

左手首を切断されたショックで悲鳴を挙げた

「翼愛のあれはやり過ぎだ。」

話し合いで真実探れば…」

「其れも良かったけど此れの方が早いでしょ」

私は右手でコンカイを指さす。

光輝は釣られてコンカイの方を見ると

「ふさげるな！」

勇者様を騙せば無罪になるって言うからワザワザ猫を被ったんだぞ

其れなのに手首を斬り落とすとかふさげるな！

此れじゃあ物が盗めないだろが！」

コンカイの本性剥き出しになっていた。

「勇者様が見ているんだけど？」

私がそう言うのと

「はあー！」

思い出して

「ち、違うんです。

手首を斬り落とされて気が動転したただけなんです。

決して手首を切られて本性？きだして怒ったんじゃないんです」

弁明を並べるが

「もういいー！」

光輝が叫んで聖剣をゆつくりと鞘から抜く

「ゆ、勇者様」

「取り敢えずこれ以上嘘を言うな

一思いに痛みも無く殺ろしてやる」

「ゆ、勇者様、ま、待ってください。

ど、ど、どうかご慈悲w…」

光輝は多少の迷いを持ちながら罪人コンカイ・ダケジヨウを真つ二つにした。

ひと時の休憩

光輝は罪人であるコンカイ・ダケジョウを勇者の証である聖剣で縦に真つ二つにした。

縦に真つ二つにした影響で切り口から大量な血が牢獄中に飛びついて光輝は血を浴びて私と恵里は光輝の後方に居たので血を浴びる事は無かった。

そしてある程度綺麗に真つ二つにしたので真つ二つにした後でも自立して立つて居たが徐々に傾きだして倒れた。

倒れたはずみでコンカイ・ダケジョウだった死体から内臓が飛び出して居る。

真つ二つにした光輝本人は無我夢中で斬ったようで体や意識が固まっていたが倒れた時に鳴った音に

「はあ!?!」

意識が戻り多分最初に光輝が目にしたものはコンカイ・ダケジョウだった死体、真つ二つにして出て来た内蔵、返り血を浴びた聖剣と自分の手、一般的な人達なら間違いなく発狂の類を起こしてしまう。

現に光輝も

「あ、あ、あ、あ」

目の広がる物を見て得た情報が無意識に組み立てられて頭に入っ
て行き意識してしまい

「うぐ」

光輝は口元を抑える。

私は

『シャルル、バケツを出して!速く』

『はいシャル』

私達は流れる様に私の横に空間魔法陣が出て私は其処に手を入れて木製のバケツを取り出して

「恵里ちゃん」

恵里に差し出して

「ありがとう」

恵里は木製のバケツを受け取って光輝の元に行き

「光輝君！」

光輝の前に木製のバケツを差し出す。

光輝は目の前に木製バケツを差し出されて安心したのか

「おろろろろ」

盛大に木製バケツにゲロをぶちまけた。

恵里は

「よしよしゞ（・ω・）」

光輝の背中を揺すって

「光輝君色々あるけど今は全部吐こうね」

と優しく言う。

私は牢獄に出てタダノカン

「タダノカン看守長、すみません。」

お恥ずかしい所を見せて」

「いえいえ、私も予め聞いて居ましたが、此れが勇者様の初めての人を殺す事なんですから。」

新米の処刑人も初めてはこんなもんですから」

「そうですか」

私達は光輝が吐き終わるまで待った。

ある程度待つて居ると光輝が吐き終わったのか恵里の肩を借りながら牢獄から出て来た。

顔は青白くなっており目には生気が宿っておらずハイライトになつて居た。

私は流石に心配になつて

「光輝君大丈夫？」

きついならタダノカン看守長に頼んで水浴びや、風通しが良い場所で休み」

声を掛けるが

「……………」

光輝は無反応だった

「えっと、やっぱり人を殺したのが堪えたみたいだから水浴びした後

に風通しが良い場所に移動すればいいかも」

「だっそうです。」

「タダノカン看守長」

「分かりました。」

「直ぐに手配します」

「タダノカンは直ぐに走り去って居た」

『シャルル、「オヒツジキュータマ」を』
「流石にやり過ぎたから」

『はいシャル』

私は「オヒツジキュータマ」を取り出して「セイザブラスター」に
『オヒツジキュータマ』

セットして「オヒツジキュータマ」を手前に倒して

『セイ・ザ・アタック』

スキルを発動して羊の幻影が出て来て其れを光輝は偶々其れを見
たのか

「ZZZZ」

光輝はゆつくりと静かに眠た。

「勇者様方！」

「水浴びの準備が出来ました！」

「丁度タダノカンが来たので

「分かりました。」

「少し待っててください」

「私は光輝達に近づいて

「私が肩を持つから恵里ちゃんは脚を持って欲しいんだけどいいかな
？」

「別に構わないよ」

「私は光輝の肩を持って恵里が光輝の足を持つ。」

「そして私達はタダノカンの元に行く」

「勇者様はどうかしましたか？」

「精神とかいろいろと疲れているから寝かせました」

「そうですか」

「其れで水浴び場の案内を」

「そうですね。」

「分かりました。」

「此方になります」

「タダノカンの案内である場所に向かう」

「此処が私達の水浴び場になります」

「ありがとうございます。」

「後は私達で済ませますので」

「分かりました。」

「では、必要な物が有れば水浴び場の出入り口に兵を待機して居ますので」

「分かりました」

「では、失礼します」

「タダノカンは水浴び場を後にして」

「それじゃあ、光輝君の身体を洗う担当と光輝君の鎧を洗う担当に別れたようか」

「私はそう言いながら恵里を見ると」

「こ、光輝君の…体…」

「そう言いながら鼻血を出していた。」

「えっと、恵里ちゃん、光輝君の体を洗う？」

「いいの？」

「恵里は鼻血を出しながらこっちを見た」

「私は光輝君に興味ないし、そもそも此れは光輝君と恵里ちゃんをくっ付ける為の行為だからね」

「なるほどね。」

「なら遠慮なく」

「その前にシャルル、ポケットティッシュを」

「はいシャル」

「私はポケットティッシュを空間魔法陣から取り出して」

「恵里ちゃん鼻血出ているからこのポケットティッシュを詰めて。」

「そうじゃなく、いちごっこになるから」

「おっと、僕とした事か光輝君の生まれた姿を独り占めできると浮か

れて鼻血を出すとは失態失態と

有難く使わせてもらうよ」

恵里は私からポケットティッシュを取り其れを鼻に詰め込んだ。

そして恵里は光輝から鎧や服を脱がせて光輝君の身体を洗う。

どさくさ紛れて光輝のあそこをしつこいと言わないばかりに念入りに洗っていたのは見なかった事にしよう

私は恵里が脱がした鎧と衣服を集めて桶に入れる

井戸から井戸水をくみ上げて鎧にはぶっかけて血を流して

「シャルル、タオル」

「分かったシャル」

空間魔法陣からタオルが出て来て私は其れを使って鎧に着いた水滴を拭いた。

拭き終わった鎧は石道の所に置いて次に桶を持って来てその中に井戸水を満たして

「シャルル、洗剤」

「はいシャル」

空間魔法陣から手洗い用の洗濯洗剤が出て来て適量の洗剤を桶に入れて手洗いで洗う。

一応携帯洗濯機が有るけど何処に監視の目が有るのか分からない。

常に見聞色の覇気を使うのは無理

其処は鍛錬次第になる。

私達の洗剤で簡単に血を落とした。

私は一度桶の血と洗剤で染まり切った水を捨てて又井戸水で汲み直してすすぎ洗いをして水を絞って丁度空いてた物干し竿に光輝の衣服を干す。

そして私は恵里の方を見て

「ハア、ハア、ハア、光輝君の腹筋」

光輝の身体を危ない様に見える人が居て

「恵里ちゃん、光輝君の身体は洗い終わったかな」

「ハア！」

も、も、も、勿論だよ。

別に光輝君の身体を見て興奮している訳じゃ無いから」

「なら鼻栓を変えようか。」

鼻栓が真っ赤に染まり切って居るから」

「へえ!？」

ちよつと待つてね」

恵里は私の方から光輝の方に向けて真っ赤に染まったポケットティッシュの鼻栓を抜いて直ぐにポケットティッシュから新しい鼻栓を作つて其れを鼻に入れた。

「僕としたことがまた鼻血出て居たよ。」

やっぱり好きな光輝を前にして居ると鼻血が出てしまう」

「そうだね」

私は水浴び場の出入り口向かい壁の向こうに待機して居る兵士に

「あの、すみません」

「あ、はい何でしょうか?」

「勇者の衣服を選択したので着替えの衣服が欲しいんですけど」

「はい、分かりました直ぐに用意します」

待機して居た兵士は水浴びの出入り口から離れる。

私は水浴び場に戻ると

恵里は自分の膝を差し出して光輝に膝枕をさせていた。

私はあれで空を見上げる。

暫く待つて居ると

「勇者様方、お着換えの衣服を持ってきました!」

出入り口に待機して居た兵士が戻つて来て水浴び場に入って来た

私は立ち上がり

「此方が勇者様の着替えになります」

私は受け取り

「ありがとうございます。」

着替えは私達がしますので」

「分かりました」

待機して居た兵士は水浴び場を後にした。

私は恵里達の元に行き

「はい、光輝君の着替え一式だよ。

恵里ちゃん全てやる?」

「勿論」

「そう」

私は着替えを差し出すと恵里は受け取る。

私は明後日の方を見て暫くして

「恵里ちゃん、終わった?」

「後半分かな?」

「そう」

私は水浴び場の出入り口に向かい

「すみません」

出入り口に待機して居た兵士を呼びかける

「はい、何でしょうか?」

「水浴び終わったので次は風に当たりたいのでタダノカン看守長を呼んで来て欲しいんですけど」

「分かりました。」

少し待っててください」

兵士は直ぐにタダノカンの元に行った。

私は恵里達の元に戻る

「恵里ちゃん、光輝君の着替え終わった?」

「うん、丁度光輝君の着替えは終わったよ」

私はそう聞いて光輝を見ると確かに着替えは終わって居た。

「其れじゃあ光輝君を風通しが良い場所に運ぶために先程と同じで私が肩を持って恵里ちゃんが両足を持ってね」

「うん、分かって居る」

私は光輝の両肩、恵里は両足を持って光輝を運んで出入り口に出ると丁度良い所に

「勇者様方、お待たせしました!」

タダノカンが来て

「いえ、ちょうど出た瞬間だったのでベストタイミングです。

タダノカン看守長」

「そ、そうですか」

「其れで風通しが良い場所に案内して下さい」

「あ、はい畏まりました。」

此方になります」

私達はタダノカンの案内で移動を始める

移動」

「此処になります」

タダノカンの案内で監獄の屋上に案内された。

屋上にはデツキチエアが三つ並べられていた。

「今すぐ飲み物を持ってきます」

タダノカンはそう言って屋上を後にした。

取り残された私達は

「恵里ちゃん、此処に光輝君を置こうか」

「そうだね」

私は協力して光輝をデツキチエアに寝かせ置いた。

そして私達もデツキチエアに寝っ転んだ。

「ふう、休憩休憩」

「そうだね」

私達が寝っ転んでいると

「そう言えば」

恵里がふと疑問に思った事が有って私に質問して来た

「どうかしたの？恵里」

「会長の計画は何処まで進んで居るの？」

「そうだね…」

私は見聞色覇気を使って光輝が起きて居ないか注意居ながら

「日が昇っている時にやっておきたい事は四つあって其のうちの三つはもう出来ている」

「そうなんだ」

「夜の時は恵里ちゃんには体を張ってもらおうから」

「勿論分かって居る。」

光輝君を僕のものに出来るのなら何でもやるよ」

「そう、なら帰った時に皆に説明するから」

私の話が終わった時に飲み物を持って居るタダノカンがこつちに
来るのが分かって

「これ以上の会話は盗み聞きされるから終わり」

「分かった」

私達が会話を終えると

「お待たせしました」

タダノカンが屋上に戻って来た。

両手にはワゴンを押していた

「飲み物をお持ちして来ました」

「ありがとうございます」

私は御礼を言つてタダノカンは私達に立ち止まって

「すみません。」

何分監獄なのでジュースが手を数える分しかないのです

「私達はそんなに求めていないので、お気になさらず」

恵里が答える

タダノカンはワゴンの上にあるコップにジュースが注がれて

「此方をどうぞ」

私達に差し出される

「どうも」

「ありがとうございます」

私達は受け取り私は直ぐに匂いを嗅ぐ

林檎の独特の匂いがして

「リンゴのジュースですか」

「ええ」

私は念入りに匂いを嗅ぐが林檎以外の匂いはせず私は一気に飲み
干す。

味も混じりけも無いただのリンゴのジュースだった。

「美味しいです」

「そうですか」

恵里も遅れてリンゴのジュースを飲んで

「ええ、美味しかったです」
私達は少しの休息を満喫した

下ぐしらせ終了

私はタダノカンから貰ったリングのジュースを飲み干して私は
デッキチエアから降りて立った

「会長どうしたの？」

恵里は私に質問して来た。

「そろそろメインディッシュの下準備をしておかないといけないか
ら」

「メインディッシュね」

「私はフューレンに行くから暫く光輝君と二人だけだからあんまり羽
目を外さないでよ」

私は振り返って恵里を睨みつける

「其れくらい分かって居る」

「其れなら良いんだけど」

私は歩きながら「セイザブラスター」に「ワシキュータマ」を

『ワシキュータマ』

セットして「ワシキュータマ」を外側に倒して

『セイ・ザ・ゴー』

そして監獄の屋上からなんの迷いも無く飛び降りて「セイザブラ
スター」の引き金を引く

『ワシボーイジャー』

私の周りに大型の「ワシキュータマ」が私を包み込み召還した「ワ
シボーイジャー」とドッキングした。

其のままフューレンに向かった。

〜飛行移動中〜

フューレンの上空真上に到着して私は迷いも無く「ワシボー
イジャー」から飛び降りた。

パイロットが居なくなつた「ワシボーイジャー」はその場で消えた。
落下して居る私はフューレンの冒険者ギルドに目掛けて落ち進む。

それと同時に私は「セイザブラスター」に「ワシキュータマ」を前
方に倒す。

『セイ・ザ・チェンジ』

「スターチェンジ！」

ワシピンクに変身して翼を展開してフューレンの冒険者ギルドの支部長室の窓を探す為に旋回して

「あ、あった！」

フューレンの冒険者ギルドの支部長室の窓を見つめた私は其処に目掛けて飛んで窓の前に到着してホバリングして

「コン、コン、コン」

ノックする。

反応が無く私は見聞色の覇気を使ってフューレンの冒険者ギルドの支部長室の中を見る。

フューレンの冒険者ギルドの支部長室ではイルワが書類作業しているのを確認して私は再度

「コン、コン、コン」

ノックする。

流石に気のせいだと思わずイルワが窓に来て窓を開けて

「ヨクアイか。」

この前、窓からじゃなくて扉から入って来て欲しいと行った筈だが？」

「あ、すみません」

私はそう言いながら窓から支部長室に入る。

「はあく言っている側からやらないでくれ」

「すみませんこれが手っ取り早いので」

「其れで用件は何だ？」

「昨日言っていた件については？」

「ああ、あれが一応今日の午前の会議に出したが色々と急すぎて却下されたよ」

「やっぱり急過ぎましたからね」

「すまんな。」

力にならなくて」

「いえいえ、本来ならじっくりと時間をかけて行うものですから当然

ですね」

私は支部長室扉の方に行き

「いろいろご迷惑かけて申し訳ありませんでした。

其れでは失礼します」

私はそう言つて支部長室を後にする。

その後普通にフューレンの支部長室を出て人目が付かない場所に行き

『セイ・ザ・チェンジ』

「スターチェンジ！」

ワシピンクになり猛スピードで空を飛び其処で

『セイ・ザ・ゴー』

『ワシボーイジャー』

「ワシボーイジャー」に乗り恵里達がいる監獄に戻る

〜飛行移動中〜

私は監獄の真上の上空まで戻り先程の方法で飛び降りて翼を使つて恵里達の前に着地する。

恵里と光輝はリンゴのジュースを飲んで居た。

恵里は私に気が付いて

「あ、会長お帰り」

恵里はそう言うが

「……」

光輝は私を見るなり黙り込む

私は気にせずに

「ただいま」

恵里に返して

「そんでメインディッシュはどうだったの？」

「時間が無いから無理だった」

「そうか」

「そうそうタダノカンが又リンゴのジュースを用意したから」

「ありがとう」

私は恵里からリンゴのジュースが入って居るコップを受けてデッ

キチエアに座り飲む

「……メインディッシュはなんだ？」

光輝から質問来て

「私の特別授業の最後の仕上げで、光輝君が民衆の前で罪人を殺す今回処刑だよ」

私はそう言う

「ふ、ふさげるな。」

俺にまた人を殺せというのか

光輝はデツキチエアから立ち上がり、滞納している聖剣に手を伸びて今にも抜刀の体制に入って居る。

「当たり前だよ。」

光輝君は戦争に参加するって言ったんだから此れ位はやって貰わないといけなんだよ」

私がそう言うと言とうと聖剣に手を伸ばしていた手を引いてデツキチエアに座り頭を抱えて

「……なんで俺は簡単に言えたんだ」

「多分昔の光輝君は向こう見ずの自信家だったんだよ」

「向こう見ずの自信家か？」

私は飲んで居たコップを置いて

「取り敢えずやれることはもうないから帰るよ」

私は監獄の屋上の出入り口に向かい

「タダノカン看守長さん」

タダノカンがこつちに来て

「勇者様方どうかしましたか？」

「もう帰りますので片付けお願いします」

「分かりました」

「其れじゃあ光輝君に恵里ちゃん行くよ」

「はい」

「……分かった」

二人とも私の元に来る。

其れに合わせて私も

『セイ・ザ・ゴー』

『ワシボーイジャー』

「ワシボーイジャー」を取り出して私達は乗り込む。

タダノカンに見守れながら私はホバリングしながら浮き上がり

ホルアドの方向を向いた瞬間に発進した。

くホルアドに飛行帰還中く

ホルアドの少し離れた場所で着地して後は徒歩でホルアドに戻り

「此れにて私の特別授業は此れで終わりです」

私がそう言うのと

「そうか」

光輝の顔には疲れや歓喜など色々と入り混じって居た。

『シャルル、空間魔法からあれ出して私からちよつとした贈り物が有るの』

『分かったシャル』

私は空間魔法からある物を取り出す

「此れは？」

「此れは眠りのお香。

使えば簡単に寝られる物なんだよ」

私は差し出すと

「大丈夫な物か？」

光輝は疑った

「お！

疑ったね。

其れは良い事だよ」

「と言つとっ。」

「簡単に信じすぎると後々で其れがヤバい物だと分かったとしても取り返しのつかない事になってしまうの

だから先に疑う必要があるの」

「そうか」

「其れと大丈夫だから、此れはついさっき商業都市フューレンに行った時に少し寄り道して買った物だから」

「俺は翼愛がフューレン？」

と言った場所に言った覚えが無いんだが」

「其れは光輝君が気を失っている間に行つたから光輝君は覚えていないのも無理もないよ」

「そうか」

「取り敢えず今日は色々と疲れていると思うから寝て来て」

「確かに色々と疲れたから寝るよ」

光輝は眠りのお香を受け取って自分が泊っている宿に行く。

私達は見送って

光輝君が見えなくなると

「で実際はどうなの」

「確かにあのお香なら寝れるけど私はもう一つの効果を狙っている」

「その効果は？」

「あれの本当の名前は夢を見せるお香なの

もし誰かがあのお香を使って寝ている時に近くにある程度のキーワードを言うと其れに関する記憶が夢と言う形で見せる物で

もう一つが今日一番衝撃だった記憶を振り返る様に夢で見せる効果があるの」

「ほほ」

「よく言うじゃない寝る前に見た物や寝ている時の周りの音で夢が変わる事」

「成程ね」

「取り敢えず私はメルド団長にキョウの出来事を報告するから恵里は皆を集めて」

「分かった」

私達は其々に動いた。

私は見聞色を使ってメルドを探ると直ぐに見つけた

光輝達が使っている宿で魔族の襲撃の報告を纏めていた。

私は

「刺！」

六式を使って一瞬でメルドさんが居る部屋に来て

「コン、コン、コン」

私はノックして

「翼愛です。」

光輝君の特別授業の中間報告に来ました」

「そうか、入れ」

私はメルドさんが居る部屋に入った

「大分早く終わったな」

「はい、本来予定して居た最後は急すぎて出来て居なかったようです」
「確かに色々と急すぎだからな。」

「其れで最後の奴は何だったんだ？」

「光輝君自ら罪人を大衆の前で処刑する公開処刑です」

「随分エグイことするな」

「まあ、光輝君が生まれ変わるには光輝君が持つて居る物を修復できない位壊さないといけませんから

そうじゃないとこの先に光輝君が待つて居るのは後悔、重罪、破滅ですから」

「そうだな」

「大分話がそれましたが報告しますね」

「ああ、頼む」

私は今日の光輝の出来事を全て話した。

「成程な。」

「ヨクアイ、すまん」

「いえ、全てクラスメイトを守る為に情けは捨てているので構いません」

「そうか」

「其れと今日の夜に行う作戦を説明しますね」

「成程な」

「恵里ちゃんが皆を集めていますので」

「そうか、其れで何処で会議するんだ？」

「あ」

「その様子じゃ忘れていたようだな」

「はい、すみません。」

直ぐに恵里ちゃんの元に行きます。

剃！」

私は素早くメルドの部屋を出て見聞色の覇気を使って恵里を探す。直ぐに恵里は見つかる

丁度、龍太郎に接触して居た。

その後ろに鈴が居る。

私は直ぐに皆が居る近くで止まり

「あ、会長丁度良い所に来た。

夜に行う作戦会議は何処で後時間は？」

「作戦会議は食堂で時間は晩御飯の前で」

「分かった」

「食堂で晩御飯の前なんだな」

「すずも分かった」

「私はメルドさんの元に帰るから、剃！」

私はもう一度、剃のスピードで駆け巡りメルドの部屋に戻って

「メルドさん作戦会議は食堂で晩御飯の前でお願いします」

「そうか」

「では私は失礼します」

私はメルドの部屋を出て自分に振り当てられた部屋に入ってベッドに乗り

「光輝君には悪い事をしたな」

「そうシャルね」

シャルルが「ラブリーコミュニケーション」形態から妖精形態になって人間形態になりベッドに座る

「兎に角私達が居なくてもクラスメイト全員が死なないようにやっておかないと」

「あんまり無理はしないで欲しいシャル」

「私も無理はしたくないから」

私は眠気が襲って来たので抗う事はせずに眠気に身を任せて私は寝た

作戦開始

私は夜に行う作戦を皆に伝えて

「此れが今日の夜に行う作戦の全貌です」

言う

最初に口を開いたのは

「ヨクアイ、前もって聞いているが此れは本気なのか？」

メルドで

「メルドさん、本気です。」

光輝君の考えの中核で部分を変えるにはそれなりのショック必要です」

「だか…」

「恵里ちゃんの事を心配して居るですが」

「ああ、そうだな。」

彼女にこんな危ない事はさせたくないが」

「鈴も恵里にこんな危ない事はさせたくない」

メルドと鈴が反対したが

「確かに危ないですが、恵里ちゃんの覚悟は出来ていますねえ、恵里ちゃん？」

私は恵里の方を向いて眼で

『演技』

アイコンタクトする

私の目を見た恵里は立ち上がると同時に首を振って

「私、皆に死んでほしくないの。」

だから光輝君には覚悟を決めて欲しいの、魔族を殺す覚悟を。

勿論私はもう覚悟は決めてあるから。

其れにはいつ死んで分からないから今まで胸に塞ぎ込んでいた物を光輝君に伝えたいの」

「…塞ぎ込んでいた物?…」

鈴がそう言って

「うん、私光輝君の事が好きなの」

演技でもない誠の真実を言おうと

「え？」

鈴は鳩が豆鉄砲を食ったよう顔をして

「「ええええええ!?!」」

私、メルド、恵里以外素っ頓狂な声を出した。

大介は別の意味で驚愕した顔をして恵里を睨んで居た

恵里は気にせず

「私、昔に光輝君に助けられて告白されたことがあるの。

だけど光輝君にとってそれは当たり前前の行動で助けた女性に必ず言うの」

恵里の発言で光輝の友人で有る龍太郎も流石に引いて居る。

「其れに光輝君は香織と雫に一存で告白した女性は全部蹴っている。

だけど私の初恋は嘘じゃないと思つて欲しくて光輝君の近くに居たかつたの。

でも光輝君が好き女性には他に居て其れが虐めに発展する事は多々あつたの」

恵里は髪の毛を触つて

「地味な私が皆が好きな光輝君に近付いただけで虐めの対象なるの。

だから…」

恵里は鈴の方を向いて頭を下げて

「だから誰にでも当たり前近づける鈴を利用して光輝君に近づいたの!」

鈴、今まで騙してごめんなさい」

そう言い切つた

鈴は

「やっぱりなんだ。

うすうす気が付いて居ただけで恵里が私と話しているよりも光輝君と話している方が楽しいそうだったから」

「憎んでも構わん…」

「其れで例え偽りでも、歪でも、鈴は楽しかつたっ!」

「え!?!」

「だから鈴は恵里を憎まないし恨まないよ。

だから言わせてもらおうよ。」

もう一度、友達になりたいの」

鈴の聖人みみたいな言葉に私も恵里は思わず固まってしまった。

「ええ、ぼ…私みたいな人と友達になりたいの？」

思わず素の恵里が出かけてしまう

「うん」

鈴は手を出す

「そ、それじゃあ此れからも宜しく」

恵里は鈴から出された手握って握手する。

「そ、其れじゃあ作戦の説明したから晩飯にしましょう」

私は流れる様に晩飯にする。

私は恵里の隣に座って反対側は鈴が座る。

私は

『「レーヴァテイン」透明のサーチャーだして恵里に念話を送って』

『《font:ul120》Ja!^{はい}《font》』

「レーヴァテイン」は私の言う通りに透明のサーチャーを出して恵里の後ろに付く。

そして食事が開始と同時に

『恵里ちゃん、気になる事があるの』

『何?』

私は大介の方を見る。

大介は憎悪をむき出しにしている。

『恵里ちゃん、大介君と何があった?』

『ああ、忘れていたけど大介に僕のお手伝いしたら、殺した香織を人形にする約束したんだ』

『成程ね。』

大体わかった。

ならおびき寄せる?』

『まあ、もう僕には必要ないからお願い出来る』

『分かった。』

其れと私達がオルクス大迷宮の奈落到ちた時に命綱が消えていたんだけど其れって大介の仕業?』

『……御免、其れは僕の仕業、大介はハジメに火球を撃つただけ』
『そうか。』

恵里のお陰でこの世界の真実を知れたから不当にするから』

『ありがとう』

『それで作戦は如何する?』

『なら罪滅ぼしを兼ねて僕が囷になるよ』

『なら私は更に背後から襲えばいいんだね』

『流石生徒会長』

『なら食事が終わり次第開始ね。』

タイムリミットは本作戦が開始する前に』

『了解』

恵里は立ち上がり

「ご馳走様」

そう言つて食器を片付けて食堂を出る

「……」

大介も追いかける様に食堂を出る。

私も

「ご馳走様です」

私も食器を片付けて食堂を出る。

軽快なステップを踏み恵里の後ろに隠れながら恵里を追う大介に気配を殺して堂々と後ろに付いて行く私と言う珍光景が広がっていたが尚誰もすれ違わなかった。

恵里が完全に人気のない所に辿り着いた瞬間に大介が一気に恵里に近づいて私は

「レーヴァテイン」セットアップ」

『font:ul20』Ei^セnri^トcht^アung^ブ『font』

一瞬で「バリアジャケット」を纏つて

「レーヴァテイン」

「レーヴァテイン」のカートリッジシステムが作動して

『font:ul20』Schlange, deissen! 』
ont』

大介に向けて抜刀する。

「レーヴァテイン」の刀身が蛇腹剣になって「レーヴァテイン」の蛇腹の刀身が大介の周りを素早く旋回して私が「レーヴァテイン」を強く引っ張ると一気に拘束して

「大介君捕まえた」

私は近づいて

「会長！」

大介は直ぐに脱出を試みるが

「無理だよ」

私は「レーヴァテイン」を強く引っ張ると拘束している蛇腹の刀身が

「があー！」

更に強く締まる。

「まさかこうも生徒会長が居るのに短時間で僕を襲うなんて随分馬鹿だね」

恵里は拘束されている大介に近づいて座り込んで視る。

「ふさげるな！」

お前の手伝いをすれば香織は俺の物になるって言ったのに簡単に裏切ったな」

「裏切るも何も僕は光輝君が高確率で手に入るなら裏切るよ。

正直に言うとお前がバケモン級になった香織を殺せる確率は極めて低いからね。

其れじゃあ僕が光輝君を手に入る確率も低いから

可能性が高い会長に寝返るよ」

「ふ、ふさげるな！」

俺は香織が手に入るからお前と手を組んだんだぞ」

「そうだね。

僕は光輝君、大介は香織を手を組んだけど。

正直に言ってお前は君の事を只の手駒だったんだ」

「ふさげるな！」

ぶち殺してやる！」

大介は暴れるが「レーヴァテイン」の拘束は外れるそぶりが無く。私は大介の叫び声を無視して

「其れで大介は何処に仕舞っておく？」

「僕の部屋のダンスで良いよ」

「其処に仕舞っておこうか」

「無視すr……」

「レーヴァテイン」口にバインド

『font:ul20』Ja! 『font』

大介の口にバインドで拘束した

「……！」

「……！」

大介は藻掻くが、私は大介を引きずりながら恵里の部屋に行きタンスに仕舞って

「レーヴァテイン」ダンスにバインド

『font:ul20』Ja! 『font』

タンスにバインドして出られないように閉める。

私達はメルドの部屋に集まって

「其れじゃあ皆さん集まりましたね」

「おう、全員居るぞ」

「ではお浚いします。」

私が光の魔法を使って鈴ちゃんに化けて光輝君を起こしてこの宿の屋上に案内します。

次に恵里ちゃんが……」

「私が光輝君に告白する」

「もし振られたら」

「私が屋上から飛び降りる」

「その下に……」

私は龍太郎の方を向いて

「俺とメルドさんが翼愛が作ったキャッチ布を使って恵里を受け止め

る」

龍太郎は私が予め渡していたキャッチ布を取り出して私に見せた

「練習は？」

「勿論やって置いた」

「正直に言つてメルドさんが言われた時にはコレ必要かと思つていたが恵里の事を聞いて光輝の目を覚ますには必要だな」

「そんでその下で」

私は鈴、浩介、香織の代替の治癒師の方を見る

「鈴たちが会長が作った」

「本物そっくりな恵里ちゃん人形」

「窓から落とす」

「浩介君居たんだ」

「最初から居たよ」

「兎に角作戦開始」

私達は直ぐに作戦を開始する。

私は剃を使つて一瞬で光輝君が寝ている部屋に到着して

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き、光を捻じ曲げて我の姿を歪めて求める姿に変えよ、屈折」

私の姿は鈴の姿になった

そしてゆつくりと扉を開ける。

部屋の中には光輝に渡したお香の香りが充満していた。

そして光輝君は

「や、辞めろ、お、お、俺を称えるな」

しっかりと汗を流しながら苦しそうに悪夢に囚われていた。

私は部屋の窓を開けて

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き周りに充満している瘴気を吹き飛ばせ、風壁」

風邪の魔法でお香の香りを抜いて

『シャルル、目覚めのお香と判断を鈍くする薬を出して』

『はいシャルル』

空間魔法陣から寝ている人を無理なく起こせるお香を取り出して

私は窓を閉めて目覚めのお香を炊く

そして直ぐに部屋から出て扉を閉める。

体内時計で一分間を図って部屋に再度入る。

光輝君の寝顔を確認する。

悪魔から解放されたのか少し緩やかになって居た。

私は目覚めのお香と同時に出した判断を鈍くする薬を部屋に備え付けのコップに入れて

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き空気の水分を集めて飲み水を作れ、飲水」

コップに水が入れられて私は其処をかき混ぜて判断を鈍くする薬を溶かす。

丁度

「うあああああ！」

光輝が飛び空き上がった。

「ハア、ハア、ハア」

「大丈夫、光輝」

「す、鈴か」

「すごい汗だよ。」

兎に角此れを飲んで」

私は判断を鈍くする薬を溶かした飲み水を光輝に差し出して

「あ、ありがとう」

受け取り一気に飲み干した。

「そう言えばさつき恵里に出会って光輝を呼んで欲しいと頼まれたの」

「…分かった。」

場所は？」

「この宿の屋上」

「分かった」

光輝は寝巻のまま部屋から出そうになったので

「光輝、ちよつと待って」

私は服を掴んで光輝を止める

「如何したんだ、鈴」

「汗だくの寝巻のまままで外に出ないですよ。」

他の人に見られたら色々問題だから」

「…そうか、分かった。」

なら恵里に伝えてくれ。」

少し遅れるって」

「分かった」

私は光輝の部屋から出て

『恵里ちゃん、光輝君から少し遅れるって伝号を預けている』

『了解』

私はメルドさんの部屋の下の部屋に辿り着いて

「お待たせ」

私が部屋に入ると

「「会長！」「」

鈴、浩介、香織の代替の治癒師が待機して居た。

「今から人形を作るね。」

シャルル、ダミー人形一式用意して」

『了解シャル』

空間魔法陣から人の死を偽装する人形が一式とメイク道具が入って居る箱が出て来た。

私はメイク道具が入って居る箱から様々な化粧道具を取り出して

「メイクアップ開始」

人形にメイクする。

肌の色、瞳の色、ウィッグの色など恵里に似せるために特急で仕事する。

そうしていると

『font:ul20』Mei_マst_スer_{ター}』font』

「何？」

『font:Guan_光ghu_がina_接hmen_触』Konta_まkt_し』

Er_恵und_里Gu_とan_光ghu_がina_接hmen_触』Konta_まkt_し』a_たuf

『font』

「映像出して」

『font:ul20』Ja!^{はい!}『font』

空中ディスプレイが投影されて映し出されたのは屋上に居る恵里と光輝の姿だ。

私達の重要な作戦が開始された

愛の亡霊（嘘）

私は恵里のダミー人形を作りながら「レーヴァテイン」のサーチャーから送らえる映像を見る。

恵里は屋上の手摺の上に立って居た

屋上の扉が開いて

『恵里、用事は何だ？』

光輝が来た。

『来たんだ光輝君』

恵里は器用に手摺の上で振り向いた。

『鈴から恵里が俺を呼んでいるときつき聞いたから。』

其れより恵里、其処は危ないから降りて来い』

『其処は危ないから降りて来いか。』

『そう言えば光輝君は覚えて居るかな』

『うん？』

何がだ』

『この光景を』

『何を言っただけなんだ。』

『兎に角降りて来い』

『そうだろうね。』

『取り敢えず降りるけど昔話してからで良いよね？』

『……構わないが』

『ちゃんと降りて来い』

『分かった』

恵里は私が話した自分の過去を昔話風に言った。

其れを聞いて居た皆は驚きの顔をして居た

『此れで昔話は終わり』

其れを聞いた光輝は

『そうか、取り敢えず全部聞いたから降りて来い』

光輝はそう言うが

『はあ』

恵里はため息を付いて

『光輝君この昔話を聞いて何か気が付かなの?』

『何がだ』

昔話に登場する少女が好きな恋人に再開する話じゃないのか?』

『違う!』

違う!

これは僕を題材にした昔話なんだよ。

何で分からないの?』

『ハア?!』

其れってどういう意味だ』

『光輝君鈍いよ』

僕は光輝君の事が大好きなんだよ。

だからこの際言うよ。

僕は昔光輝君に橋の上から飛び降りる所で光輝君に助けられてそ

れで大好きになりました。

だから付き合って下さい!』

告白するが

『その……俺と恵里が初めて出会ったのは鈴の友達で紹介された時だろ。

恵里が橋の上から飛び降りて助けるてうのは覚えて居んだが、恵

里の何かの間違いだろ。

其れに俺は好きな人が居るんだ。

だから恵里の気持には答えられないだ』

『其れって香織と雫の事でしょ。』

あの二人はもう光輝君の事見て居ないよ』

『違う。』

あの二人はハジメにそそのかさされて付いて行ったんだ。

いつかあの二人は取り戻すつもりだ』

何処からやって来る自身なのか分からない

『そうなら……』

恵里は手摺から降りて光輝に近づく

『もう遅いから寝よう』

光輝はそう言つて扉の方向を向いて

『光輝君』

恵里は光輝を呼んで

『どうかしたか』

光輝が振り返つた瞬間、恵里は光輝に

『！』

ディープキスをした。

皆は大人のディープキスを赤くしながらまじまじと見るが、私は気にせずに恵里のダミー人形の仕上げに取り掛かり恵里のダミー人形を完成させた。

私は直ぐ様に

「人形は此処に置いておくから投げてね」

私はサーチャーを置いてメルドと龍太郎が居る上の階に

「荊」

を使つて一気に駆け上がりメルドと龍太郎が居る部屋に辿り着き

「メルドさんと龍太郎君！

準備を！」

「もうか」

「やるぞ、リュウタロウ」

「おう」

メルドと龍太郎慣れた手つきで恵里をキャッチする棒付きの布を出す。

そうしている間にも恵里もディープキスを終えて手摺の方に向かう

光輝は行き成りディープキスをされて膠着する。

私も其処にサーチャーを置いて

「荊」

を使つて一気に屋上まで駆け上がり少し開いて扉をから様子を見る

恵里が手摺の上に立ち

「さようなら。」

「僕が愛した人」

と言つて後ろから倒れながら屋上から飛び降りた。

「レーヴァテイン」皆にバレないように人払いの結界を張つて」

『font:ul20』Ja!『font』

「レーヴァテイン」皆にバレないように人払いの結界を張つた

膠着していた光輝はやつと我に戻つて

「恵里！」

屋上から飛び降りた恵里を追いかけようにもたつきながら走る
がもう遅く私はサーチャーから送信される映像を見る

メルドと龍太郎が居る部屋からは落ちて来た恵里を用意して窓に
突き出した棒付きの布でキャッチして窓から恵里を入れる。

私は鈴、浩介、香織の代替の治癒師の方のサーチャーから

「人形投下」

私の指示を出して

『『了解！』』

私の指示通りに浩介、香織の代替の治癒師が私作の恵里のダミー人
形を持つて放り投げこもうとした瞬間に光輝が手摺に辿り着いて下
を見ろうとして居たので其れに合わせて私は光の変身魔法屈折を無
詠唱で唱えて扉をわざと大きく叩いて大きな音を出す。

大きな音の反応して私の方を見た。

その間に香織の代替の治癒師が私作の恵里のダミー人形を窓から
放り投げた。

私は指を指しながら驚愕な顔をして

「コン、光輝君

今恵里が飛び降りたと思うだけど」

「はあ！恵里は」

光輝は再度手摺の下を見た。

私も手摺の下を見ると私作の恵里のダミー人形が飛び降り自殺し
たように感じになつて居た

「そんな！」

私は両手で口を塞いで驚いたかをして居た。

「如何して何だ、如何して何だ」

光輝は壊れたテープレコーダーの様になっていた

私は光輝の肩を揺さぶって

「光輝君しつかりして恵里の元に行かないと」

「そ、そうだな」

光輝は私が言われるがままに屋上御後にして私は

「剃」

を使つて恵里が居るメルドと龍太郎が居る部屋に移動して

「恵里、向かいに来た」

「お願いね」

私は恵里をお姫様抱っこする。

「鈴にお姫様抱っこをされるのは何か不思議な感じがするよ」

「ごめんね。」

変身を解除する暇は無いから。

「剃！」

恵里をお姫様抱っこ私は剃を使い下の恵里のダミー人形がある場

所まで移動する。

光輝が辿り着く前に到着する。

「其れじゃあ」

私は恵里を置いて光の変身魔法屈折を解いて

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き、光を捻じ曲げ

て我の姿を歪めて求める姿に変えよ、屈折」

再度詠唱を言い今度は透明になる。

『シャルル、シスターのコスプレを』

『分かつて居るシャルよ』

シャルルは空間魔法陣からシスターコスプレ一式を取り出して私

は一瞬で着替える。

着替え終わると光輝が到着した。

光輝は恵里のダミー人形前に立ち止まり

「嘘だろ」

光輝は恵里のダミー人形に近づいて手に触れて

「恵里しっかりしてくれ」

恵里のダミー人形を揺さぶるがダミー人形の為反応が無い

光輝は両手で頭を抱えて

「どど、どうしてこうなったんだ」

叫ぶ

「そそ、そうだ！

はは、ハジメが行ったんだ！

お、俺と香織と雫を引き裂く為に」

幾ら思考を鈍くしても最終的には光輝自身が都合が良い結末になっ
てしまおうから

『「レーヴァテイン」サーチャー経由の念話』

『font:ul20』Ja!^{はい!}『font』

念話を使って光輝に

『違ウナ』

演技で語り続ける

「又だ。

姿を見せる卑怯者」

『卑怯？

違ウナ、俺ハオ前デオ前ハ俺ダ』

「嘘を言うな！」

光輝は聖剣を抜いた

『嘘ツキハオ前ダロ』

「何を言っているんだ？」

何度モ何度モ助ケタ女ニ俺ガ守ルト言ツテホツタラカシニシタ癖

ニ』

「なんの事だ？」

『オ前ニトツテハ女ヲ助ケル事ハ自分自身ヲ輝ク為ノアクセサリーダ
モンナ』

「違うそんな事は無い」

『ナラオ前ノ幼馴染達ハ何故オ前カラ去ツタンダ』

「其れは……ハジメに脅されたんだ。」

其れなら幼馴染の香織と雫は俺から離れたんだ」

『オウ、随分面白い事ヲ言ウナ』

「何だと？」

『オ前ガ幼馴染ガ好きナラ、何故ソノ女ハオ前ニ告白シタンダ？』

「其れは……俺が香織と雫を忘れさせるためだ」

『デハドウヤツテ、ソノ女ヲソウサセタンダ。』

先ニ言ツテオクガ魔法ヤアーテイフアクトナド以外デダ』

「其れは……」

『結局ハオ前ハ他人ヲ騙ス事デシカ人ノ上ニタテナイ存在出来ナイ俺ト同ジ小物ダ』

「黙れ黙れ、お前と一緒にするな。」

俺はお前じゃない」

『我ハ”影”、真なる”我”……!!』

ソノ女ヲヨク見テオケ』

「恵里出番だよ」

「分かって居る」

私は屈折の原理を使って屈折の派生の幻影魔法陽炎、光を発動する。

恵里のダミー人形の近くに恵里の幻影魔法で恵里の幻を出して其れに合わせて

『「レーヴァテイン」スピーカー用のサーチャーとマイク用のサーチャーを出してスピーカー用のサーチャーは恵里の幻の中にマイク用のサーチャー恵里に』

『font:ul20』Ja!』はい!『font』

「レーヴァテイン」スピーカー用のサーチャーとマイク用のサーチャーを出してスピーカー用のサーチャーは恵里の幻の中に入ってマイク用のサーチャーが恵里の口元に移動して

「恵里、演技宜しく」

「任せてよ」

恵里はマイク用のサーチャーに

『光輝君』

演技を始めた

「恵里―」

『光輝君』

恵里は再度呼ぶ

「良かった生きていたんだ」

光輝は近づいて恵里に近づいて触ろうとするがすり抜けて恵里の
ダミー人形に足を引っかけて転ぶ。

「え、恵里?」

『光輝君、僕はもう死んで幽霊になって居るだよ』

「ま、待ってくれ其れってどうゆう意味だよ」

『そんな事は簡単だよ。』

僕はあの時飛び降りて落下して死んだんだよ。

そこで自分自身に降霊術を掛けて幽霊にしたんだよ』

「そ、そんな」

『僕は光輝君が好きだったんだよ。』

なのに君はもう見向きをされて居ない香織と雫を特別扱いして
他の相手特別を普通に扱うんだよ。

酷いよね。

僕も光輝君に助けられて好きになったんだよ。

そこで勇気を振り絞って光輝君に告白したんだよ。

なのになのに君はもう見向きをされて居ない香織と雫の為に僕
の告白を断ったんだよ。

もうそんな事をされれば僕に残されたのは自殺して幽霊になっ
て光輝君を呪い殺して一緒にあの世に行って愛しあるしか残されて
居ないだよ』

「恵里」

光輝は後退りする

『だからさ、一緒にあの世に行こう。』

あの世の導き!』

私は恵里と予め話し合っただけで決めていた動きをする

光輝に黒い靄を出す。

其処から無数の黒い手が出て来てそれらが光輝の身体に触る。

其れを引きずり込む様に動かす

判断が鈍くなっている光輝は

「え、恵里や、やめて、辞めてくれ！」

お、俺はこの世界で助けないといけなんだよ」

光輝は藻がぐが

「『今更僕の気持ちを持って余していたくせに逃がすつもりは無いんだよ。』

あの世で僕と一緒にたっぷり愛し合おうよ』」

光輝が強制的に膝まづこうと瞬間に私は飛び出して

「力の根源たる聖者が命じる今一度理を読み解き、闇に変わってしまつた霊を光の鎖で捕縛して元の身体を牢獄にして捕らえよ、光縛！」

恵里のダミー人形から黄色の魔法陣から黄色の鎖が無数に飛び出して幻で出来ている恵里の幽霊を

「『なんだコレ！』

放せ！」

僕はある世で光輝君と愛し合うんだ！』」

幻の恵里の幽霊は抵抗するが抵抗は虚しく黄色の鎖に引っ張られて恵里のダミー人形の中に入って黄色の鎖は其のまま恵里のダミー人形を捕縛した。

光輝は何が起きたのかポカンとしていた。

「大丈夫ですか？」

髪型や目の色を変えてシスターのコスプレをした私が登場した。

嘘つきのシスターの診断

シスターのコスプレをした私は先程まで行われていた出来事の情報の多さに処理しきれずにポカンしていた光輝に呼び掛ける。

「貴方は？」

「紹介が遅くなりました。」

私は聖教教会の悪霊退治を生業にしているシスターのハースターです。」

シスター服のスカートを軽く摘みながらお辞儀した。

「えっと俺は……」

「殿方の事は知って居ます。」

我が主の創造神エヒトルジュエ様が召喚した勇者様方のリーダー格のアmanoガワ コウキ様ですな」

「ああ、そうだが」

「其れは良かった。」

「この出会いにエヒト様に感謝しないといけませんね」

「そ、そうだな……ああ！

恵里が」

光輝は恵里のダミー人形に近付こうとするが私は光輝のマントを履んで

「グえっ!」

光輝はカエルの様な呻き声を出して尻餅を突いて止まった。

「何するんですか」

「彼女の魂は悪霊になって居ます。」

迂闊に手を出した場合、幾ら勇者である貴方でも呪い殺されます」

「そうなのか？」

「はい、ですので専門職の私が彼女の魂に干渉して彼女が悪霊に変貌した原因を取り除きましょう」

「えっと、お願いします」

大分自分中心の自己判断が薄れてきていると感心しながら「仰せの通りに」

そう言つて私は恵里のダミー人形に近づいて恵里のダミー人形に右手を乗せて

「力の根源たる聖者が命じる今一度理を読み解き、悪霊に変わつてしまった霊の魂の記憶を今私に見せて干渉しろ、走馬灯！」

其れっばい演唱を言つて無詠唱で回りに光の弾を無数に出した。

暫くすると光の弾は徐々に黒く染まりきつて

「パリン！パリン！パリン！」

光の弾がガラス細工のように割れて更に恵里のダミー人形を縛つていた黄色の鎖が粉々に砕けて恵里のダミー人形から黒い靄が出て居ように光の幻影魔法をだして私は弾き飛ばされた様にバックステップをして光輝の近くに着陸する。

光輝は私に駆け寄つて

「大丈夫ですか？」

「ええ、大丈夫です」

私は立ち上がり。

「其れよりあれを止めないといけません」

私はコスプレのシスター服のスカート裏に内蔵している多節棍と槍を合わせた武器を取り出して槍にする。

「力の根源たる聖者がもう一度命じる！」

今一度理を読み解き、闇に変わつてしまった霊を光の鎖で捕縛し元の身体を悪霊の瘴気を漏らさない絶対的な牢獄にして捕らえよ、光縛、改！」

恵里のダミー人形の周りに先程より多く黄色の魔法陣が現れては百を超える黄色の鎖が恵里のダミー人形を包み込んでボール状態にする。

そして私は槍を自分の真上で回して恵里のダミー人形に槍の矛先を向けて

「この人の魂が悪霊になった原因である記憶が深く根付いて取り除くが不可能です。

こうなつてしまつたら幾ら私でも戻す事は不可能です。

ので悪霊化した魂を封じ込めている肉体ごと消滅させます」

「消滅…まさか！

待ってくれ」

「どうかされましたか？」

「さつき、魂ごと肉体を消滅させると…言ったのか？」

「はい、そう言いました」

「其れって恵里が死ぬのか？」

「…はい…その通りです。」

其れに彼女の魂には貴方に関する記憶が深く刻まれています。

此れでは輪廻転生しても貴方を探して彷徨い又悪霊化してしまい沢山の人の命を殺されてしまいます。

よって彼女の魂は輪廻転生が出来ないように魂そのものを消滅させます」

「…ま、待ってくれ

恵里は俺の仲間だ。

だから俺が説得して…」

私は光輝が言い切る前に槍を振るって石畳の一部を切り抜き。

切り抜いた部分の石を槍の矛先に刺して手に無色透明の武装色の覇気を槍を伝って切り抜いた部分の石に流して貯める。

そして後ろ向きで光輝の右頬を掠る様に槍を振るって切り抜いた部分の石を投げた。

投げた切り抜いた部分の石は狂いなく光輝の右頬を掠って光輝の後ろにあった建物の壁に

「ドゴーン！」

轟音を響かせながらぶつかった。

そして無色透明の武装色を纏った切り抜いた部分の石にぶつかった建物の壁は大穴を開いた

光輝は何をされたのか理解できずに後ろを振り返って私が開けた大穴を見る

「貴方があの悪霊化した仲間を説得して元に戻す…」

光輝は私の言葉に気が付いてこつちを見て

「……………ふさげないで下さいー！」

私は槍を振るって石畳からサッカーボール位の石を切り抜いて槍を巧みに扱って宙に浮かせて私は一回転して宙に浮かしたサッカーボール位の石が足の膝位の高さになった瞬間に足に無色透明の武装色の覇気を纏ってサッカーボールの様に石を蹴り、蹴りの勢いが石に伝わる前に武装色の覇気を流して貯めて遅れて蹴りの勢いが石に伝わって光輝に目掛けて飛んで行った

飛んで行った石は弾丸の如くのスピード飛んで行き光輝のお腹に「いっふっ!？」

突き刺さる様に激突して其のまま吹き飛ばされて地面に二回バウンドしてから地面に転がる様に不時着陸した。

「何を…」

光輝はお腹を押されながら何が起きたのか分からずにいた

「怒っているんですよ、私

あの人を悪霊化した原因は…」

私は槍を光輝に向けて

「貴方です。」

「勇者様」

「俺が!？」

光輝は混乱していた。

「ええ、先程私は悪霊化した原因の記憶を探る為に彼女の全ての記憶に見て触れたんです。」

そして彼女が悪霊化した理由が貴方にあるんです」

「俺にか?」

「ええ、貴方に」

私は槍を持って居ない左手を小学生位の高さに合わせて

「此れぐらいの時に橋から飛び降りる時に助けて守ると言って告白したんですよ?」

其れなのに貴方はほったらかしにしたんですよ?

そうなるかと恋焦がれてしまい悪霊化しやすくなります。

そんな無責任な貴方には任せられません」

私は恵里のダミー人形を向くと

「待ってくれ」

光輝が待ったを掛けた。

「何ですか？」

私は目線だけ後ろに向けた

「さつき、恵里に同じことを言われたんだ。

だけど俺と恵里が初めて出会ったのは恵里の友達の名前のクラスメイトから紹介された時で、そんな記憶は覚えていないだ」

「覚えていない。

無責任な駄目駄目ですね。

貴方はこの世界の人類を宣言したのに憎き魔族を殺さずに捕虜にするなど甘ったるいです。

其れでも人類を守る為にエヒト様が呼んだ勇者なんですか？」

「其れは…と、兎に角、俺は人間族と魔族が共存する為に…」

私は再度、光輝が言い切る前に私は石畳の一部を槍で切り抜き、刺して無色透明の武装色の覇気を流して纏わせて槍を振るって光輝に目掛けて投げる。

投げた石は光輝の反対側の左頬を掠って光輝の後ろにある先程私が空けた大穴の建物の壁に

「ドゴーン！」

轟音を響かせながらぶつかって建物に二つ目の大穴が空いた。

光輝は今度は振り替えずに

「何の真似だ!？」

そう質問する

私は

「はあく理解が出来ません」

如何にも理解できませんという顔をして

「私達人間族と憎き魔族は何年、何十年、何百年、何千年、何億、何兆の悠久な時間をかけて憎みながら争っているんと思うんですか。

其れをぽつと出て来た勇者である貴方がそれを止める力は有るんですか？」

「其れは、勿論有る！」

光輝は力強く言う

「ではどういう具体策を？」

まさかと思いますが戦って其の後に話し合いで解決するおつもりですか？」

「そ、そうだが」

「ふ……ふふ……あははははは」

少し慣れない独特な笑い方をして

「戦った後に話し合い？」

そんな夢見物語が叶うと思うのですか。

先程も言ったように悠久な時間をかけて憎みながら争っているんですよ。

今更話し合って解決する隙はもう存在しないですよ。

いまこの世界に有るのは相手を殺すか、殺されるかの二択に一つだけです。

そんな甘ったるい考えで大切な物を守り切る筈が無いです」

「俺なら出来る」

大切な物を守り切って見せる」

「其処まで言うなら、私の攻撃を防いでください。

もし防げたら私は引きますので」

私はそう言うのと槍でもう一回、石畳から石をくり抜き突き刺して無色透明の武将色の覇気を纏わせ、わざと槍を両手で持って大振りの構えをする。

「勇者様も構えて下さいよ。

防いだら私は引きますから、其の聖剣を抜刀して下さい」

「俺が君の攻撃を防げば引いてくれるのか？」

「そう言っ居るじゃないですか。

だから聖剣を構えて下さい」

「分かった」

光輝は聖剣を鞘から抜いて構えた

「それじゃあ行きますよ」

私はそう言つて大振りの構えから槍を振るつた。
更に振るつている時に右手を緩めて左手で槍の柄を捻つた。
其れで投擲された石は回転を加えながら光輝目掛けて飛んで行つた。

光輝目掛けて投石した石は若干音速に入つて居て光輝は反応出来ていないが幸運にも聖劍の刃が投石した石のコースのど真ん中に置いてあつた。

其のまま行けば投石した石は其のまま聖劍の刃に当たり綺麗に真つ二つになつて光輝の左右に別れて何もせずに躲せるが、其れは普通に投石された石の時だけ。

私が投石した石には無色透明の武装色の覇気を纏つており更に回転している。

光輝が持つて居る聖劍の刃と無色透明の武装色の覇気を纏つて居る投石した石がぶつかつて

「ぐっにゅにゅー！」

変な気合の入れ方で踏ん張っているが拮抗は一瞬つで崩れて

「あー！」

石の回転が聖劍の刃を持ち上げて聖劍ごと回転を始めて

更に

「なアア!？」

聖劍を持つて居た光輝ごと持ち上げた。

持ち上げられた光輝は聖劍を支えらえずに

「ガキンー！」

投石した石の回転力に巻けて聖劍が光輝の手から離れて弾き飛ばされた。

其のまま投石した石は光輝の両腕をすり抜けてお腹に

「いんぐー！」

突き刺さる。

其れでも石の回転力は落ちずに光輝を巻き込みながら後方に向かって突き進み私が大穴を開けた建物に突っ込んで行つて

「ドツガあああー！」

建物の一部が崩れる音が聞こえて

「ああやりすぎたかな」

私は頭を掻きながら光輝が突っ込んで行った建物に向かって歩き出そうとしたが

「どつがあああ!!」

建物が崩れた音より大きな音を出しながら光輝が出て来た。

「はあ、はあ、はあ」

光輝は肩で息をしながら右手を聖剣が弾き飛ばされた方に向けると聖剣が一人で戻って来て光輝は其れをキャッチして私に向けた。

「はあ」

今の一手で私と貴方の差が明確に出た筈なんですが？」

「そんなの関係ない。」

俺はただ仲間を守るだけに立ち上がっただけだ」

「そうですか。」

なら…」

私は槍を回してから槍を構えて刃先を光輝に向けて

「勇者様が二度と立ち上がれないようにへし折りましょう」

「やってみよう。」

俺は折れない」

「そうですか。」

私のスピードに遅れて大怪我を負わないように、剃！」

私は六式の剃を使って一気に光輝の聖剣の周りの前まで移動する。

「なあ!!」

魔法と技能となしで此処まで来た事に光輝は驚いて反応が一瞬遅れた。

私は槍を縦に回転を喰えるとき同時に柄に透明な武装色の覇気を纏わせて聖剣の刃に当てる。

聖剣の刃は武将色の覇気を纏った柄を斬れずに其のまま聖剣は簡単に押し出されて光輝は聖剣を持ったまま万歳する形になり

私は槍の石突を光輝のお腹に向けて一気に突き出す。

防御が出来ない光輝は其のまま

「ぐふう！」

簡単に石突を腹に突つつかれる。

其れも一度だけではなく車のエンジンのピストン運動の様に連続で突く。

「な、舐めるな！」

万歳していた両手を聖剣ごと振り下ろされた。

私は連続突きを辞めて振り下ろされる聖剣を槍の柄で受け止めて聖剣を斜めに受け流した。

受け流された聖剣は地面に刺さる。

光輝は直ぐに聖剣を抜こうとするが斜めに刺さって居る為に抜けずに私は今度槍を横に回して柄を光輝の横腹に叩き込んだ。

其れも遠心力を乗せた物で、案の定光輝は聖剣を手放されて吹き飛ばされて横にある建物の壁に激突した。

光輝更生作戦最終フェーズのタイムループ

私の槍の薙ぎ払いを横腹に叩き込まれた光輝は地面に刺さってる聖剣を手放されて吹き飛ばされて横にある建物の壁に激突した

私は地面に刺さってる聖剣を持って引っこ抜こうとするが急に重さが上がって持てなくなったが

「真庭忍法、足軽」

刀語の物体の重さを操る歩法の真庭忍法、足軽を使い紙の様に軽くなった聖剣を地面から引っこ抜く

私は聖剣を視さだめるように聖剣で軽く素振りをする。

その間にも聖剣は重さを増やすが真庭忍法、足軽を使っている私には関係なく素振りが出来る。

そうしている間に

「バツゴン！」

光輝が埋もれた瓦礫を轟音を鳴らして光輝が出て来た

「はあ、はあ、はあ」

「勇者様、まだ戦えますか？」

「あ、当たり前だ」

「そうですか」

私は聖剣を大きく振り被る。

聖剣はバカの一つ覚えに重さが増すが私には一切関係なく聖剣を豪速球を投げる感覚で投げる。

私が投げた聖剣は光輝に向かって行き私から距離が離れる度に聖剣が重くした重さに戻って行き、更に豪速球を投げる感覚で投げたので結果的に聖剣は砲弾並になって光輝の目の前に着弾して物凄い勢いで大量の土煙が出て来る。

「ゲホ、ゲホ」

光輝は咳き込んで

「勇者様、まだやると言ったんですから聖剣を手にとって下さい。」

「言っても私に勝てる見込みは零なんですが」

「やってみないと分からないだろ」

光輝は聖剣を手に取り一直線に突撃して来て大振りの上段の振り下ろしを繰りだした。

此処は槍で受け止めるの普通だけど光輝の戦意を折る為に敢えて私は左手を聖剣の刃に突き出した。

これを見た光輝はヤバいと聖剣の刀身の軸をずらそうとするが間に合わず思わず目を閉じてしまう。

「はあ〜」

私は落胆が込められた溜息を吐きながら左手を無色透明の武装色の覇気を纏わせて食指と中指だけ使って聖剣の刀身を真剣白刃取りをする。

光輝は恐る恐る目を開けて私が食指と中指だけ使って聖剣の刀身を真剣白刃取りをして居る事に

「なあ!？」

と驚いて直ぐに私から離れようと聖剣を動かそうとするがびくともせずに

「はあ〜」

私は再度溜息をついて

「これが勇者の実力とは私はガツカリです」

「なあ!？」

「私は元貴方の仲間を殺そうとしているんですよ。」

なのに私を殺す気迫も無く、私を追い払おうと見掛け倒しのコケ脅しの技ばかり。

そんな者が勇者を名乗るなんて呆れて苦笑いしか出ませんよ」

私はそう言った後に軽く押し返す。

光輝は聖剣を持って居る両手を両腕を真上に挙げた。

私は武装色の覇気を流桜に変えて左手をデコピンの構えをして其れを光輝のお腹に向けて流桜を軽く爆発させると同時にデコピンを放つ。

光輝はコントの様に飛んで行って

「勇者様って道化師ですか？」

「違う」

俺は勇者なんだぞ」

「其処まで言うなら本気で来てください。

そうしないと私は勇者様の手足の骨を砕いてからこの霊の魂を消滅させますよ」

「させる訳ないだろ！

覇潰！」

と光輝は限界突破の終の派生技能である覇潰を発動した。

確かに此れなら勇者に相応しい気迫で人間族で頂点の実力で光輝は私から結構離れていた距離を一瞬で詰めて聖剣を振り下ろしたが私は

「はあ〜」

欠伸をしながら槍で受け止めた。

「なあ!？」

光輝は何度目かの驚きをして聖剣に力を籠めて私の槍を押し切ろうとするが私にとっては軽すぎる。

「勇者様、馬鹿の一つ覚えに力任せに押し切ろうとしない方が良いでしょうよ。」

一回引いてから連続斬りに変えてみるのは如何でしょう?」

「五月蠅い。」

俺に口答えするな」

光輝は直ぐに聖剣を引いて連続斬りに切り替える。

覇潰の効果で上乘せしたスピードは人間では目視が出来ない位スピードだが、私は見聞色の覇気で聖剣のが通る道を見極めて槍を使わず最低限の動きだけで全て躲しきる。

「何で当たらないんだ」

「そんな感情任せの太刀筋では今から此処を斬りますので避けて下さいと言いついて居るものですよ。」

なら聖剣を横振りで切ってみて下さいよ。

何なら私は一歩も動きませんから、やってみて下さいよ」

「な、舐めんな」

光輝は聖剣の腹の方を使って横振りを繰り返したがる

「はあ、何度も言いますが私を殺すつもりで来てくださいよ」

私は聖剣の通り道に槍を斜めに置いた。

聖剣を横振り抜こうとした勢いを殺さずに槍の柄を伝って行く。

聖剣の刃と指がぶつかりそうになった時には手を巧みに使って聖剣の刃を躲して聖剣が私が持つて居る槍の石突に辿り着こうとした瞬間に私は槍を振るった。

光輝が聖剣を横振り抜こうとした勢いと私が振るった槍の勢いが合わさって光輝の手元から聖剣が離れて飛んで行った。

光輝は急いで聖剣に戻れと念じて戻そうとしたが。

「一度離れた獲物が自分の手元に帰って来ると思わない」

私は光輝を蹴り飛ばして吹っ飛ばす。

聖剣も追いかけるように向かおうとしたが私は聖剣の柄を掴んだ。

聖剣は私の手から抜けようと勢いが増すが私からは逃れられない私は地面に叩きつけて更に私は足を挙げながら流桜を纏い一気に足で踏む。

聖剣は地面にめり込んだ。

聖剣は地面から出ようとするが私の踏み込みが鋭く地面から抜け出せずにいた。

光輝も私の蹴りから立ち上がり再度聖剣を手元に呼び戻そうとするが私は丁度足元に良い石があったので槍を回して回転の遠心力で石を弾いて光輝の頭に当てた。

石をぶつけられた光輝は直ぐに立ち上がろうとするが

「なんで立ち上がれないんだ!?!」

立ち上がれない事に戸惑っていた。

「勇者様、立ち上がられるのはめんどくさいので脳震盪を起こさせてもらいました。」

暫く立ち上がる事は出来ません」

私は恵里のダミー人形に近づいて

光輝は私が此れから行う事に気が付いて

「待ってくれ!」

呼び止めるが

「無理です。」

これ以上戦闘をすれば封じ込めていた悪霊を封じていた魔法が解けますので魂の消滅を行います」

私は悪霊^{幻影}を封じ込めているボール状態で魔法の鎖の前に立って私の足元に其れっぽい魔法陣を出して

「力の根源たる聖者が命じる今一度理を読み解き、我が国に仇名す悪霊の魂を消滅させて永遠の死を与えたい！」

魂滅！」

槍を大きく振り被って其処から一気に振り下ろした。

槍先はボール状態の魔法の鎖を全て切り裂いた。

勿論悪霊^{幻影}化した恵里を事切り裂いた。

切り裂かれた悪霊^{幻影}化した恵里は

「ふさげるな、僕と光輝君のハネムーン」

私は巧みな魔法操作と恵里のプロ顔負けの演技力で今にも消えそうな霊を演じる

「光輝君、た、助けて？」

光輝は急いで恵里に駆け付けろうとするが脳震盪で上手く動けずにおいてそんなもって悪霊^{幻影}化した恵里は徐々に光の粒子になって

「ここ、うき、くん…」

悪霊^{幻影}化した恵里は完全に光の粒子になった

「悪霊の魂の消滅を完了」

そう言う私と私は光輝に近づくと

光輝は睨みながら私の方を向いて

「ど、どうして恵里を殺したんだ」

怒りを露にしていた

「彼女は私が元に戻せない位の悪霊化をして居ましたので他の人に被害が出ないように成仏させました」

「如何して何だ？」

俺がやると言ったのに」

「貴方ではあの霊は助けられません」

「違う、俺なら助けられるはずだったんだ」

「はあくコレ以上は話になりませんね」

私は槍を構えて光輝の両腕、両足が裁断されるイメージを槍に込めて
「折り羽」

一気に振るった。

光輝は一気に両腕、両足が裁断される幻覚に落ちつつ

「!？」

言葉にならない悲鳴を挙げた。

私は槍を光輝の顔を目掛けて構を取り

「死ねば人生やり直せるかもしれませぬ」

そう言つて光輝の顔面に槍を突きさして殺すイメージを乗せても
う一度

「折り羽」

槍を光輝の顔に刺した幻影に落ちて光輝は気絶した。

隠れていた恵里は

「光輝君は殺していないよね」

「勿論、彼には皆を率いて欲しいからね。

そんじやあこの作戦の本命行きますか」

「うん」

私は直ぐに光輝を担いで物凄い勢いで光輝の部屋に駆けこんで鎧
を脱がして寝巻に変えてベッドに寝かせる

次に光の回復魔法で全快に回復させる。

夢を見せるお香を使う。

部屋を密閉空間にして私は広場に移動した。

私は地面に減り込んで居る聖剣を引っこ抜いて

「(レーヴァテイン) 結界解除」

『font:ul20』Ja! 『font』

結界を解除した。

私が破壊した部分は最初から無かったように戻って居て人々が
いる

「(レーヴァテイン) 結界を張りなおして」

『font:ul20』Ja! 『font』

再度人払いの結界が張られて直ぐに人々は消える。

私は恵里のダミー人形を抱えて

「剃」

剃を使って其の場に消えて一回光輝の部屋に移動して扉の隣の壁に聖剣を置いて次に鈴、浩介、香織の代替の治癒師が居る部屋に移動して

「「会長！」」

鈴、浩介、香織の代替の治癒師が私に反応する。

私は飛び降り自殺を偽造する為に放り投げて落下が壊れた恵里のダミー人形を私の化粧道具で治す。

同時に

「それで皆に聞くけどあれどうだった？」

「会長凄かったよ」

「うん、私ドラマを見ていたような気分になって居たよ」

「其れにしても会長は光輝より強かったんだ」

「まあね。」

兎に角光輝の気持ち折れるまで何回も同じことをするよ」

「「了解」」

私は恵里のダミー人形を直して直ぐに部屋を出て

「剃」

を使って光輝の部屋の前まで行き外に置いていた聖剣を持って

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き、光を捻じ曲げて我の姿を歪めて求める姿に変えよ、屈折」

私は鈴の姿になって部屋に入る。

部屋の中には光輝に渡したお香の香りが充満していた。

そして光輝君は

「や、辞めろ、恵里をこ、殺さないでくれ」

しっかりと汗を流しながら苦しそうに先程の事を悪夢として見ていた

私は部屋の窓を開けて

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き周りに充満して

いる瘴気を吹き飛ばせ、風壁」

風の魔法でお香の香りを抜いて私は窓を閉めて先程出している目覚めのお香を炊く

そして直ぐに部屋から出て扉を閉める。

体内時計で一分間を囚って部屋に再度入る。

光輝君の寝顔を確認する。

悪魔から解放されたのか少し緩やかになって居た。

私は先程と同じ様に部屋に備え付けのコップに

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き空気の水分を集めて飲み水を作れ、飲水」

飲み水を入れて其処に判断を鈍くする薬と水を入れてよくかき混ぜて判断を鈍くする薬を溶かす。

そこで丁度

「うあああああー！」

光輝が飛び空き上がった。

「ハア、ハア、ハア」

「大丈夫、光輝」

「す、鈴か…」

恵里が殺されたんだ…」

「まって恵里が殺されたって光輝君はさつきまで鈴が入って来るまで寝ていたじゃん

兎に角此れを飲んで落ち着いて」

私は先程と同じ様にコップを差し出して光輝は其れを飲む。

それで

「鈴、さつき変な夢？を見た気がする」

「どんな夢？」

光輝は先程が起きた出来事を言った。

「そんな事無いじゃん。」

恵里がそんな事はしないじゃん」

「そ、そうだな」

「そう言えばさつき恵里に出合って光輝を呼んで欲しいと頼まれた

の

私の肩を握って

「其れは本当か!？」

気迫よく私に迫った

「う、うん本当だから鎧に着替えた方が良いよ」

光輝は暫く考えて

「そうだな」

光輝は鎧に着替えて聖剣を手に取り部屋を出た。

此れが光輝更生作戦最終フェーズのタイムループになる

タイムループの仕組み

私達は光輝の更生プログラムの最終フェイズのである疑似的なタイムループを行って、現在私は両手に鉄扇を装備して光輝の雑な乱撃を徹底的に防ぐ

痺れを切らした光輝は

「せいー！」

聖剣を使った大振りの中段の薙ぎ払いを

「ほいー！」

身体を回転しながら中段の薙ぎ払いよりも低くして回避して直ぐに

「カウンター」

光輝の脇腹にに回し蹴りに叩き込んで

「がはあ」

光輝を吹き飛ばして建物の方まで吹き飛ばして建物の壁に激突して建物の壁が倒壊して瓦礫に埋もれたが直ぐに出て来たが

「ぐうっ!!」

私が与えたダメージで動けなかった。

私は恵里のダミー人形に近づいて

「力の根源たる聖者が命じる今一度理を読み解き」

詠唱を始める。

其れを見た光輝は

「まあ!？」

妨害する為に私に近付こうとするが

「ー！」

私は両手の鉄扇を二つとも投擲する。

一つ目は聖剣で防ぐがもう一つは弧を描く光輝の背後に回って光輝の影を巻き込みながら地面に刺さった。

すると光輝がまるで映像の一時停止の様に動きが固まった。

「な、何をした」

「影縫いです。」

影を武器で縫い込まれたら最後影が消えるか武器を抜かれるまで決して動くことは出来ません」

そう説明しながら右手から釣り針を取り付けたピアノ線を出して。光輝が聖剣で弾き飛ばしてまだ空中にあるもう片方の鉄扇を回収し、畳んで恵里のダミー人形に向けて

「我が国に仇名す悪霊の魂を消滅させて永遠の死を与えたれ！」

詠唱の続きをする

「や、辞めろ!!」

光輝はそう言うが私は

「魂滅！」

子供騙しの偽物の魔法を発動して恵里のダミー人形を消滅したように幻影魔法で消す。

其れを見て居た光輝は

「まただ…また救えなかった…」

嘆いていた

「さて任務完了」

と言うと

「どうしてだ。」

君は何故其処まで出来るんだ」

「どうしてと言っても、此れが私の指名ですから

其れ以外にも其れ以下ありません。

それと勇者様大分私の動きを把握していますね。

まさか予知夢系の技能が目覚めたんですか？」

「そ、そうだ。」

俺は未来を知って居るんだ。

な、なのに俺が知らない動きが出来るんだ」

「簡単ですよ。」

勇者様の動きが単純で読みやすいです

其れに予知で動きを知られて居るなら武器や動きを変えるまでです」

「そ、そんな」

「取り敢えず勇者様一回頭を冷やして来て下さい」

私は光輝が反応できないスピードで光輝に近づいて手に持って居る畳んである鉄扇で光輝の頭を絶妙な力加減で叩く事で光輝は気絶した。

毎回隠れている恵里は

「翼愛、お疲れ様」

「恵里もお疲れ様。」

毎回同じ様に飛び降りて」

「うん、僕が光輝君を手に入れる為には此れ位造作もないよ」

恵里はそう言つて光輝の顔を覗く。

「それにしても大分顔色悪くなってきているね」

恵里の言う通りに光輝の顔には顔色が青く隈などが出来ていた。

「何度も未来(笑)を変えるために動いているのに結果は必ず同じ結末に辿り着くから心が潰れそうになりかけているから」

「成程ね」

「其れに夢で同じ行動を繰り返しているから実質、軽くて千、多くて億超えになつて居るからね」

「成程ね」

「さて、部屋に運ばないとね」

「其処はお願いね」

恵里は宿の方に戻り

私も光輝を担いで直ぐに光輝の部屋に駆けこんで慣れた手つきで鎧を脱がして寝巻に変えてベッドに寝かせて光の回復魔法で全快に回復させる。

夢を見せるお香の中身を変えから使い、部屋を密閉空間にして私は広場に移動して

「(レーヴァテイン) 結界解除」

『font:ul20』Ja! 『font』

結界を解除からの

「(レーヴァテイン) 結界を張りなおして」

『font:ul20』Ja! 『font』

人払いの結界を張り直してから私は恵里のダミー人形を抱えて
「剃」

剃を使って其の場から鈴、浩介、香織の代替の治癒師が居る部屋に
移動した

鈴、浩介、香織の代替の治癒師は

「なんか会長が此処に急に来る事に驚きが無くなって来た」

「確かに鈴達の高速移動見飽きて来た」

「確かにそうですね」

私の高速移動に慣れて来た三人であった。

私は気にせず落下が壊れた恵里のダミー人形を私の化粧道具で慣
れた手つきで治して

「剃」

を使って光輝の部屋辿り着いて

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き、光を捻じ曲げ
て我の姿を歪めて求める姿に変えよ、屈折」

私は鈴の姿になって部屋に入る。

光輝君は

「ど、どうしたら、え、恵里を助けられるだ？」

しっかりと汗を流しながら同じ考えがグルグル回って悪夢で見
ている

私は部屋の中で充滿している夢を見せるお香の香りを私は部屋の
窓を開けて

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き周りに充滿して
いる瘴気を吹き飛ばせ、風壁」

風の魔法でお香の香りを抜いて窓を閉めて目覚めのお香を炊く

そして直ぐに部屋から出て扉を閉める。

体内時計で一分間を図って部屋に再度入る。

光輝君の寝顔を確認する。

悪魔から解放されたのか少し緩やかになって居るのを確認して私
は先程と同じ様に部屋に備え付けのコップに

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き空気の水分を集

めて飲み水を作れ、飲水」

飲み水と同時に判断を鈍くする薬を入れてよくかき混ぜて溶かす。
それで

「うあああああ！」

光輝が飛び空き上がったり

「ハア、ハア、ハアまた救えなかった」

私は近づいて

「大丈夫、光輝」

同じ様に心配する

「す、鈴か…」

又恵里が殺されたんだ…」

「何言っているの光輝君はさつきまで鈴が入って来るまで寝ていたじゃん

兎に角此れを飲んで落ち着いて」

私は先程と同じ様にコップを差し出して光輝は其れを飲む。

それで

「なあ鈴、恵里から伝言貰って居ないか？」

「うん？」

貰っているよ」

「そうか」

光輝は直ぐに寝巻を脱ぎ始めだして

「ちよ、ちよつと待って光輝君、鈴が居るんだけど」

「そ、そうか其れじゃあ部屋に出てくれ」

私は部屋から出て光輝が鎧に着替えるまで待って部屋から鎧を着た光輝が出て来て屋上を目指す様に歩き始める

私は付いて言う様に

「光輝、そう言えば鈴が恵里から伝言を預かっているって分かって居たね」

「ああ、そうだな」

「どうして分かったの？」

「俺は何度も同じことをして居るから」

「同じことを？」

私がそう言うが

「悪いがもう屋上だから俺は行くぞ」

光輝は屋上に続く扉を潜って行った。

私も

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き、光を捻じ曲げて我の姿を歪めて求める姿に変えよ、屈折」

私の姿を消して扉が閉じる前に潜った。

恵里も毎度同じように屋上の手摺の上に立って居て

「来たんだ光輝君」

恵里は器用に手摺の上で振り向いた。

「なあ恵里、俺が好きなんだよな」

!?

そうだよ、僕は光輝君が好きなんだよ。

あの時自殺しようとした僕を助けてくれて好きになったんだよ」

「すまない！」

「うん？」

何が？」

「その、俺は覚えていないんだ。」

恵里が言っている事を思い出せないんだ」

「はあ!？」

「その…俺が幼い時に橋から飛び降り自殺しようとした子供止めた思い出が無いんだ。」

だから多分俺は恵里が思い恋焦がれている人じゃないと思う。

だから期待に答えられない」

其れを聞いた恵里は

「……」

顔が暗くて確認出来ず光輝は気が付かずに

「だから恵里には俺以外の男性と付き合って欲しいんだ」

光輝はそう言ってしまふ

「恵里なら直ぐに運命の出会いが……」

光輝が言いかけている途中で

「ハハハハハハ」

恵里が高笑いして初めて

「恵里？」

「フラれた

僕が恋焦がれた人からフラれた。

もう生きる価値なんて無いから死の」

恵里は身体を後ろに体重を傾けた

其れを見た私は

「「レーヴァテイン」行くよ」

『font:ul20』Ja!^{はい!}『font』

その間に

「待ってくれ。

自殺する事なんか無い」

恵里の手を掴んで自殺を阻止を試みるが

「放してよ

僕は光輝君が全てだったのフラれたら僕が生きる意味なんて無い

んだよ」

隠し持っていた短剣を取り出して光輝の腕に

「ぐう!？」

突き刺すが光輝は離さない

「大体なんで光輝君はまだなの二人を背中を追いかけているの

あの二人はもう光輝君の事なんか好きじゃないのは学校中知って

居るだよ」

「そうかもしれないけど…」

「其れに光輝君はあの二人に告白した事無いでしょ」

「いや、雫はもう告白した」

「いつの話だよ」

「えっと…五歳の時…」

「園児の頃なんか覚えていないじゃないの

そんなのだから周りの女子が告白して来るんだよ。

「この嘘つき」

恵里は大きく足を引つ込めていつきに光輝の

「チーン！」

「はうほう!?」

又のチ○コを蹴られて光輝は丸くなってしまふ

その間に恵里は手摺に昇り直して

「さようなら。」

僕が愛した人」

と言つて後ろから倒れながら屋上から飛び降りた。

光輝は股を抑えながら手摺の下を見た。

透明になつて居る私も手摺の下を見ると恵里のダミー人形が飛び

降り自殺したように感じになつて居る。

光輝は無言で下に向かい私も

「刺！」

刺を使って一瞬で恵里を回収して光輝が辿り着く前に恵里のダミー人形に辿り着いて

「力の根源たる蒼青の娘が命じる今一度理を読み解き、光を捻じ曲げて私の姿を歪めて求める姿に変えよ、屈折」

透明になりシスターコスプレを一瞬で着替える。

そうしている間にも光輝が到着した。

光輝は恵里のダミー人形前に立ち止まり聖剣を抜いて聖剣を地面に刺して

「……」

恵里の霊が出るを待つ

「恵里出番だよ」

「OK」

私は屈折の原理を使って屈折の派生の幻影魔法陽炎、光を発動する。

恵里のダミー人形の近くに恵里の幻影魔法で恵里の幻を出して其れに合わせて

『「レーヴァテイン」スピーカー用のサーチャーとマイク用のサー

椅子を出してスピーカー用のサーチャーは恵里の幻の中にマイク用のサーチャー恵里に』

『font:ul20』Ja!^{はい!}『font』

「レーヴアテイン」スピーカー用のサーチャーとマイク用のサーチャーを出してスピーカー用のサーチャーは恵里の幻の中に入ってマイク用のサーチャーが恵里の口元に移動して

「恵里、演技宜しく」

「はい、任せてよ」

恵里はマイク用のサーチャーに

「光輝君」

演技を始めた

「恵里、もうやめろう」

「黙れ黙れ、僕がなけなしの覚悟で光輝君に告白してフラれたんだぞ。」

死ぬ理由は其れで十分なんだよ」

恵里は激怒しているように怒る

「だからって新しい出会いを探せば…」

「光輝君は良いよね。」

皆から愛されて…僕なんか親に虐待されていたんだよ。

そんな奴に新しい出会いが有るなんて思わないですよ」

「なんで諦めんだ!」

「光輝君には言われたくないよ。」

僕の為に死んでよ。

あの世の導き!」

光輝の周りに黒い霧を出す。

其処から無数の黒い手が出て来てそれらが光輝の身体に触ろうとするが

光輝はすぐさまバックステップして回避して

「もう会話じゃ収まらないか」

光輝は聖剣を向けて

「光輝君が其のつもりなら僕は遠慮しないよ」

幽霊体の恵里の周りに手の様な触手が地面から伸びて来た
お互い、睨み合いで先に動いたのは

『行け!』

恵里で手の様な黒い靄の触手は光輝に遅いに行った

光輝は聖剣を使って黒い靄の触手を弾いて時には斬り落として防
ぐ

が私は光輝が斬り落とした黒い靄の触手から新しい触手を出す。

徐々に数が増えて来て光輝は捌ききれずに捕まり出して

「離せ!」

力任せに引きちぎるが黒い靄の触手徐々に光輝の拘束をする

『さああの世に行こうか、光輝君』

タイミングを見計らって

「力の根源たる聖者が命じる今一度理を読み解き、闇に変わってしま
った霊を光の鎖で捕縛して元の身体を牢獄にして捕らえよ、光縛
!」

恵里のダミー人形から黄色の魔法陣から黄色の鎖が無数に飛び出
して幻で出来ている恵里の幽霊を

『なんだコレ!』

放せ!

僕はある世で光輝君と愛し合うんだ!』

幻影の恵里の幽霊は抵抗するが抵抗は虚しく黄色の鎖に引っ張ら
れて恵里のダミー人形の中に入って黄色の鎖は其のまま恵里のダ
ミー人形を捕縛した。

光輝は捕まっえて居た黒い靄の触手も消えた様に演出して

「大丈夫ですか?」

シスターのコスプレをした私が登場する。

変わりゆく心

疑似タイムループを繰り返して二で十回目光輝は聖剣をシスターに変装している私に目掛けて

「はあああああー！」

振り下ろす。

対して私は手に持って居る武器、鶴嘴を使って

「はい、はい、そい」

受け流す。

夢を見せるお香で悪夢を連続で見ているがそれが睡眠学習に繋がっている為動きが段々と上手くなっているが

「勇者様まだまだ甘いですよ」

私は鶴嘴の先端を光輝のマントに搦め手グイッと引っ張る

「ぐえっ!？」

行き成りマントを引っ張られて対応が遅れてバランスを崩してしまい其処に私が飛んで

「空中三回転蹴り」

空中で三回転してその後に蹴りを

「がハア!!」

叩き込んで近くの建物に激突して壁が崩れたが光輝は出て来た

「ま、まだ、いける」

「勇者様、なんか何度も同じ出来事を繰り返していると私は思います。

正直に言つて浅はかな希望は継るより棄てた方が良いですよ。

浅はかな希望が壊れたら待つて居るのは絶望ですから」

「だから希望は壊せない」

再度私に突撃して来たが

「はあ、馬鹿の一つ覚えに突撃して」

私は鶴嘴を私の横下に四角状になる様に振るって其処に鶴嘴の先端を突き刺し其処から石材を抜いて私は構えて武装色の覇気を纏わせて即席ハンマーを作り

「はあああー！」

光輝の聖剣の振り下ろしに合わせて私も即席のハンマーを振るつた。

聖剣と即席ハンマーはぶつかって勝負が一瞬で決まった。

「わあああ!?!」

光輝は吹き飛ばされた地面に二、三回バウンドしたタイミングで私は鶴嘴の先端に付いて居る岩を切り離して飛ばして光輝のお腹に直撃して再度建物の壁に激突する。

私は

「（、口、） || 3 フウ」

一呼吸を置いて恵里のダミー人形に向かいコケ脅しの魔法を発動の準備をする

「や、やめ、ろ」

瓦礫から光輝が出て来るが私が投擲した岩が思いのほか効いたように聖剣を杖にしながらノロノロでこっちに来る。

私は気にせず

「魂滅!」

魔法を発動して恵里のダミー人形を消滅したように幻影魔法で消す。

其れを見て居た光輝は力なく倒れた。

私は光輝に近づいて

「どうしたら恵里が救えるのだ?」

独り言を言ってしまう

私は座り込んで

「だから言ったでしょ浅はかな希望は継るより棄てた方が良いと浅はかな希望が壊れたら待つて居るのは絶望ですから」

「其れでも希望を捨てずに恵里を救いたかったんだ」

「ならチャンスがあるなら次回は武力行使ではなく行動で示すのは如何でしょうか」

「行動?」

「はい、勇者様はプライドが高いです。

今度は其れを捨てて私に土下座してみるのは如何でしょうか?」

「そ、そんな事出来る訳…」

「出来ずに私と武力行使して私に負けて居るでしょか」

「ま、まだ負けて…」

「いいえ、勇者様は私に負けているんです。」

恵里と言う女性を救えない時点で勇者様の負けです。

ですから諦めてプライドを捨てて土下座して見て下さい。

そしたら私は勇者様のお願いを聞いてくれると思いますよ」

「願ひ」

「ではチャンスが巡って来る事を願っていないさかい」

私は鶴嘴を横にして振り挙げて光輝はこつちを見たが私は光輝が反応できないスピードで鶴嘴を光輝の頭を絶妙な力加減で叩く事で光輝は気絶した。

其処からは毎度同じことを繰り返す

毎回隠れている恵里は宿の方に戻り

私も光輝を担いで直ぐに光輝の部屋に駆けこんで慣れた手つきで鎧を脱がして寝巻に変えてベッドに寝かせて光の回復魔法で全快に回復させる。

夢を見せるお香の中身を変えから使い、部屋を密閉空間にして私は広場に移動して人払いの結界を解除から直ぐに人払いの結界を張り直してから私は恵里のダミー人形を抱えて剃を使って其の場から鈴、浩介、香織の代替の治癒師が居る部屋に移動して落下が壊れた恵里のダミー人形を私の化粧道具で慣れた手つきで治して、直ぐに剃を使って光輝の部屋辿り着き魔法で私は鈴の姿になって部屋に入る。

私は光輝君の容態を確認する

「恵里……」

しっかりと悪夢で見ている事を確認して

私は部屋の中で充滿している夢を見せるお香の香りを私は部屋の窓を開けて風の魔法でお香の香りを抜いて窓を閉めて目覚めのお香を炊いて直ぐに部屋から出て扉を閉めて体内時計で一分間を図って部屋に再度入る。

光輝君の寝顔を確認する。

悪魔から解放されたのか少し緩やかになって居るのを確認して私は何度も使っているコップに飲み水と同時に判断を鈍くする薬を入れてよくかき混ぜて溶かす。

それで

「うあああああ！」

光輝が飛び空き上がり

「ハア、ハア、ハア、ど、どうしたら救えるんだ」

私は近づいて

「大丈夫、光輝

なんかうなされていたけど」

私は心配する演技をする。

「鈴か……」

「取り敢えず此れ飲んで落ち着こう」

私はコップを差し出す。

「……あ、ありがとう」

少し間があつたが光輝は受け取って其れを飲んだ。

「なあ……鈴」

「うん何？」

「もし、恵里が真で悪霊になって自分では助けやれずに赤の他人にが登場してその人が恵里の魂を消滅させる魔法を使おうとしたらどうするっ…」

「うん……」

私は

「そうだね」

考えるそぶりして

「鈴は最初に力づくで止めて、其れで止まらなかったら土下座するよ」

そう言うと光輝は驚いて

「赤の他人だぞ。」

何で土下座が出来るんだ!？」

「うーん出来れば土下座したくないけど其れで恵里が死んだら元もこうもないだから鈴は自分のプライドを捨てて土下座する」

「そうなのか」

「だってほらプライドを捨てても鈴は鈴、けして変わらないから。」

其れにプライドを優先したら恵里を助けられずに後悔するから」
「そうだな。」

よしー」

光輝は何か覚悟を決めて鎧を持って風呂場に行き鎧に着替えて部屋から出た。

私は慌てて追いかけて

「其れから…」

「恵里から伝言を預かって宿の屋上で待つて居るだろ？」

「あ、うんそうだよ」

「なら行つて来る」

光輝はそう言つて屋上に向かう

其れを見た私は

「大分自己中心的な思考が薄まって来ているね」

そう言つて私も屋上に向かう

屋上に辿り着くと光輝は屋上に続く扉を潜つて行つた。

私も魔法で自身の姿を消して扉が閉じる前に潜つた。

恵里も毎度同じように屋上の手摺の上に立つて居て

「来たんだ光輝君」

恵里は器用に手摺の上で振り向いて

「ああ」

「そう言えば光輝君は覚えて居るかな」

「なんのことも良く分からないんだが」

「この光景を」

「夜景の事では無いんだろ」

「そうだよ」

「其れじゃあ何のことか分からないんだか」

「そうかなら昔話したいんだけど良いよね？」

「ああ、構わない」

ただ手摺から降りて欲しい」

「分かった」

恵里は手摺から降りて自分の過去を昔話風に言った。

「これで昔話は終わり」

其れを聞いた光輝は

「それが恵里の過去で良いだね」

光輝はそう言うが

「うんそうだよ。」

あの時の事を覚えてくれたんだ」

恵里は嬉しそうに居るが

「すまない！」

光輝は頭を下げ謝った

「はあ？」

「その……恵里が言う幼い時に橋から飛び降り自殺しようとした人は多分俺ではない。」

其れに俺には告白した人はもう居るんだ。

だから恵里が思いに答えられない」

「……」

恵里の顔が暗くなる

「本当にすまない」

光輝は土下座する。

其れを見た私は

「〔レーヴァテイン〕念のために念話で※檜山以外全員に緊急会議！」

『《font:ul20》Ja! はい！《font》』

〔レーヴァテイン〕は念話を仕掛け人全員※檜山以外全員に掛けた

『恵里、大丈夫』

『あ、うん大丈夫。』

其れで光輝君が土下座したらどうするの?』

恵里はポーカーフェイスを維持しながら心の中では慌てていた

『多分ですがこのまま通りに行い、その後私に恵里を救うために私に土下座しますのでそのまま続行してください』

『『『『了解!』』』』』』

恵里は直ぐに

「ハハハハハハ」

恵里が高笑いして初めて

「……」

光輝は顔を上げずに

「フラれた

僕が恋焦がれた人からフラれた。

もう生きる価値なんて無いから死の」

恵里は手摺の上に乗った。

光輝は決して顔を上げずにそのままの姿勢をキープする。

「さようなら。

僕が愛した人」

恵里はそう言つて身体を後ろに体重を傾けて屋上から飛び降りた。

暫くして光輝は土下座の態勢を解いて手摺の下を見た。

透明になって居る私も手摺の下を見ると恵里のダミー人形が飛び

降り自殺したように感じになつて居る。

光輝は無言で下に向かう。

私も剣を使って一瞬で恵里を回収して下に向かい魔法で透明になりシスターコスプレを一瞬で着替える。

そうしている間にも光輝が到着した。

そうしている間にも光輝が到着した。

光輝は聖剣を抜かずただ

「……」

恵里の霊が出るを待ち始めた

私達は

「恵里出番だよ」

「OK」

私は屈折の原理を使って屈折の派生の幻影魔法陽炎、光を発動して恵里のダミー人形の近くに恵里の幻影魔法で恵里の幻を出して其れに合わせて「レーヴアテイン」スピーカー用のサーチャーとマイク用のサーチャーを出してスピーカー用のサーチャーは恵里の幻の中に

入ってマイク用のサーチャーが恵里の口元に移動して

「恵里、演技宜しく」

「はい、任せてよ」

恵里はマイク用のサーチャーに

『光輝君』

演技を始めた

「恵里、聞くけど死んでも俺の事が好きなのか？」

『うん、そうだよ。』

死んでも好きだよ』

『そうかなら』

光輝は仰向けに倒れて

「なら俺を好きにして構わない」

『良いの？』

「ああ、こうなったのは多分俺のせいだ。

だから好きにしろ」

『そう、なら好きにさせてもらおうよ

あの世の導き！』

光輝の周りに黒い靄を出す。

其処から無数の黒い手が出て来てそれらが光輝の身体に触ろり沈む幻覚を見せる

光輝は

『……』

無抵抗でされるがままに流される。

私はタイミングを見計らって

「力の根源たる聖者が命じる今一度理を読み解き、闇に変わってしまった霊を光の鎖で捕縛して元の身体を牢獄にして捕らえよ、光縛
！」

恵里のダミー人形から黄色の魔法陣から黄色の鎖が無数に飛び出して幻で出来ている恵里の幽霊を

『なんだコレ！』

放せ！

「僕はあの世で光輝君と愛し合うんだ!」

幻の恵里の幽霊は抵抗するが抵抗は虚しく黄色の鎖に引つ張られて恵里のダミー人形の中に入って黄色の鎖は其のまま恵里のダミー人形を捕縛した。

そして

「大丈夫ですか?」

髪型や目の色を変えてシスターのコスプレをした私が登場した。

光輝は

「貴方ですか」

起き上がって

「有り難うございます」

頭を下げた。

「其れで彼女は…」

「あ、はい彼女は俺に告白したんですが俺には告白した人が居て断つたんですが彼女は飛び降り自殺したんです。

其れで悪霊になりました」

「そうですか」

「其れと」

「まだ何かありますか?」

「実は……」

光輝は座って

「どうか恵里を助ける為に俺も手伝わせて下さい」

土下座でお願いして来た。

「理由を聞いても」

「俺には恵里がそうなる原因になる記憶が無い。

それ故に今回の騒動を引き起こした。

だからその責任を取りたいんだ。

だからどうかお願いします」

私はそう聞いて光輝に近づいて

「顔を上げて下さい」

光輝は顔を上げて

「今回の騒動を起こしたと自首して、プライドを捨てて土下座をする事は中々できません。

「其れって……」

私は手を差し出して

「はい、本来なら弱い人は遠ざけて居ましたが今回特別に手伝って下さい」

「はい…」

お願いします」

光輝は私の手を取り立ち上がる

暴かれる記憶

光輝改心プログラムの疑似タイムループを繰り返して数十回目

「どうか恵里を助ける為に俺も手伝わせて下さい」

光輝はプライドを捨てて土下座をお願いして来た。

私は光輝に近づいて

「顔を上げて下さい」

光輝は顔を上げて

「今回の騒動を起こしたと自首して、プライドを捨てて土下座をする事は中々できません。」

「其れって……」

私は手を差し出して

「はい、本来なら弱い人は遠ざけて居ましたが今回特別に手伝わって下さい」

「はい」

「お願いします」

光輝は私の手を取り立ち上がる。

「其れでは彼女を助ける方法は教えます」

「はい」

「先程、私は彼女の記憶を覗き悪霊になった原因が貴方にあると判明しました」

「だが俺には覚えてないんだが」

恵里の間違いとかないのか？」

「ええそうかもしれません。」

「だから今から貴方の記憶を今から覗きます」

「覗く!？」

「魔法で覗きます」

そう話していると

『ちよつと翼愛』

恵里が念話で会話して来た。

『どうしたの?』

『そんな魔法有るの?』

『あるよ』

『あるならさっさと使って光輝君を落とす算段が立てられたのに』
『確かにそうだね。』

『だけど自己中は治らないよ』

『まあそうなるね』

恵里と念話して居ると

「どうかしましたか?」

光輝が心配して声を掛けて来た

『此れ以上の念話は光輝君にバレる可能性があるから』

『分かった』

私は恵里の念話を切って

「いえ、記憶を覗く魔法を使う為に精神統一して居ました」

「そ、そうですか」

「では、先ずは彼女の記憶から行きましょう」

私は恵里の方に向いて槍の刃先を向けて

「記憶イキュラス 再生エルラン」

そう唱えると恵里と私達の間光のディスプレイのようなものが出現した

此れは異世界おじさんの代名詞魔法の記憶イキュラス 再生エルランで私は使えるアニメ魔法の一つでもある。

私は光のディスプレイのようなものを操作して昔の恵里が橋から飛び降り自殺しようとした所に光輝が偶然現れて自殺を止めた瞬間を投影して更に光輝が

『俺が恵里を守ってやる』

のセリフもバツチリ移って居た。

私は光のディスプレイのようなものを閉じて

「此れが彼女の記憶に残っている記憶です」

此れを見た光輝は

「ちよつと待ってくれ…俺は本気で覚えていなのに…恵里の記憶に残って居たのか?」

「はい」

「改ざんとかじゃなくて」

「されていません」

「つまり本物」

「はいそうなります」

「マジか…」

と光輝は絶句して居た

「今度は勇者様の番ですよ」

「あ！ああ、そ、そうだな」

「では行きますよ。」

イキユラス^憶 エルラン^再

今度は光輝と私の前に光のディスプレイのようなものが現れた

映像の内容は先程の昔の恵里が橋から飛び降り自殺しようとした所に光輝が偶然現れて自殺を止めた瞬間の光輝側の光景が映し出されて駄目押しばかりに

『俺が恵里を守ってやる』

同じセリフが出て来た。

私は否定できないように先程の恵里のイキユラス^憶 エルラン^再と今流れて居る光輝のイキユラス^憶 エルラン^再を同時に再生する。

其れを見た光輝は

「……………」

光輝は絶句して居た

「勇者様どうですか？」

「マジか！」

俺と恵里が初めて会ったのは鈴に紹介された時じゃなくてこの時に助けた時なのか

「そうなりますね」

「でもどうしてこんな大切な記憶を忘れていたんだ？」

「いえ、勇者様其れは違います」

「違う」

「はい、忘れていたのではなく如何でもいい記憶と無意識に判断され

て忘れていたんです」

「其れってどうゆう意味だ？」

「はい、人間の脳にある記憶は無数にあります。

のでその人にとって大切な記憶は何時でも思い出す様に意識の本棚、長期記憶に保存されて、その反対の如何でもいい記憶は数秒から数時間しか覚えられない無意識の本棚、短期記憶に保存されます」

「そ、それじゃあ俺にとって恵里を助けた事は如何でもいい記憶に分類されたのか」

「はい、そうなります」

「いくら何でも無責任すぎるぞ、俺」

「ええ、無責任すぎる勇者様の思いが彼女の中では積もり積もった状態で死んでしまい悪霊になる条件を揃えてしまいました。

更に本来悪霊になった者は明確な意思が無ければただ厄災と呪いを撒くだけの存在に成り下がるんですか、彼女は勇者様に対しての恋の思いと天職は降霊術師が合わり勇者様にピンポイントで勇者様に取り付く悪霊になつて居ます」

「ど、如何したらいいんだ？」

「彼女が悪霊になった原因を取り除く必要が有ります。

勇者様、彼女が死ぬ前に何かありましたか？」

「何かつて……俺に告白した事しかないが」

光輝は右手を首の後ろを撫でる

「其れで其の告白は如何したんですか？」

私は内容は知って居るが敢えて知らない振りをする

「…断つたが」

「其れです！」

私は光輝に指さす

「告白の事か？」

「はい、彼女は勇者様に一途なに恋をして居たんです。

けして他の男を見向きもつせず常にただ一つ、勇者様だけ見ていて勇気を振り絞って告白したんです。

其れなのに勇者様は其の告白を断つたのです。

断られたら彼女の生きる意味は無くなってしまい反動で死にたい気持ちだが彼女の心に充満して行き最終的には最悪今回の様に自殺になります。

今日の前で起きています」

「そ、そうだな」

「そして死んだ大抵の魂はエヒト神に行きますが、自我が強い魂は目的を果たせず未練を残してこの世に留まり地縛霊になります。

で、長くこの世に留まり続けると未練の原因になった目的を一向に果たせない事に自我は悪い方に傾き悪霊になってしまいます」

「ま、待ってくれ、恵里が死んだのはついさっきだ。

君の話では死んでも悪霊になるには長年の年月が必要じゃないのか」

「はい、必要ですが例外が有るんです」

「例外？」

光輝は不思議そうに顔をする

「はい、生きているうちに悪霊化してしまう原因の行動すれば死んだ直後でも悪霊化してしまいます」

「其れって…」

「はい、他人を恨む怨念や私念

悪い事に対しての罪悪感を持たない犯罪者

それから実らない愛は呪いの類に変わってしまいます」

「つまり恵里が悪霊になった原因は…」

光輝は顔を青くして

私は腕を組んで

「完全に勇者様が原因です」

「もしこのまま復活させたら」

「其れですと

今までブレーキがかかって居たんですが死んだ事によってブレーキが壊れてしまい復活させたら目的を果たす為に動きますね。

ブレーキがかからない状態で」

私がそう言うと光輝は座り込んで頭を抱えて

「お、俺は如何すればよかったんだ。

俺には好きな人が居るのに」

「其れに付いてなのですが。」

彼女、勇者様に恋人がいらないと思って告白したんだと思います」

私がそう言うのと

「なあ！

俺には好きな女性が居るんだぞ。

其れも二人」

「其れじゃあ聞きますけど

その二人は？」

「一人は香織で俺といつも一緒に居る幼なじみでもう一人は雫で俺が幼い事から通っている道場の一人娘の子だ」

「では最初に一番最初に言った勇者様といつも一緒に居る幼なじみの香織にはいつ好きだと告白したんですか？」

「其れは勿論……」

勇者様は自信満々に答えようとするが

「……」

なかなか言葉が出ず

「あれ？」

いつ告白したんだ？」

頭を抱えだした

「其れも覚えていないんですか？」

なら私の記憶再生魔法で思い出させますか？」

「あ、ああ、た、頼む」

「ではイキュラス^{記憶} エルラン^{再生}」

私はイキュラス^{記憶} エルラン^{再生}で香織を告白した時の記憶を探るが

「何処にも無いですね。」

その記憶」

「俺は香織に告白して居ないのか」

「して居ませんね。」

昔の勇者様で、もしかして香織と言う女性から告白を貰えると思っ

ていましたか?」

「…多分…そう思う」

「そうなる就多分ですか」

その香織っていう女性はいつも勇者様と一緒に居た為、勇者様に好きと言う感情が湧かずにいたんだと思います」

「湧かなかった?」

「はい、短い期間なら勇者様の大切な物になりたいという気持ち、好きと言う感情は湧くんですが、幼い頃から付き合っていると大切から普通に変わり好きと言う感情湧きにくいんです」

「つまり香織にとつて俺は普通の幼馴染としか見られていない」

「はいそうなります」

そして勇者様は彼女が好きと勘違いして勇者様から告白せずにつか彼女の方から告白して来ると思い放置した。

その一方で香織と言う彼女は特別になりたい男性と出会ったんです」

「特別になりたい男性…まさか!」

「如何やら思い当たる節があるみたいですね」

「そんなわけがない!」

香織があいつに好きになる様事はして居ない筈」

「私は詳しい事を言えないんですが」

勇者様が言うあいつの些細なことが彼女にとって特別な出来事になりますから。

詳しい事は彼女に出会った時に話した方が良いでしょう」

「なら雫、雫は初めて出会った時に告白したぞ」

「確認します」

イキユラス^{記憶} エルラン^{再生}」

私はイキユラス^{記憶} エルラン^{再生}で光輝が言う雫を告白した時の記憶を

探る。

結果は

『雫ちゃんも、俺が守ってあげるよ!』

「確かに告白して居ますね」

私は光輝に見られないように気を付けながら遠い目をして

「よっしやー!」

光輝はガッツポーズをする。

それで

『そんな嘘だ嘘だ嘘だうそだうそだうそだウソだウソだウソだウソだウソだウソだ』

恵里は光輝の死角になる物陰で発狂して居た

『恵里落ち着いて!?!』

『殺してやる』

僕が光輝君を殺してその後で僕は自殺する』

『此処でそんな事をすれば今までの計画がパーになるよ』

『そんな事知るか。』

僕の光輝君がもう他の女に告白して居た事に絶望して居るんだ』

『それ、恵里が飛び降り自殺する前に言って居た筈だけど』

『あれは僕を引き留める為に咄嗟に着いた嘘だと思ったのに』

『兎に角まだ重要そうな記憶があるから其れを見てからにしろるか。』

現に恵里ちゃんは雫ちゃんと光輝君が付き合っ居ないと判断し

て居るんでしょ』

『うん』

『なら大丈夫』

『もしそうなら光輝君を殺して僕も死んでやる』

『兎に角、記憶を見て見るね』

私はイキュラス^{記憶}再^記エルラン^生を操作して直ぐに

「あれ?」

勇者様この記憶は?」

有る記憶を見つけて

「どれだ」

光輝が此方にのぞき込んで来て私はその記憶を再生した。

内容は小学生の時の雫がいじめのことで光輝に相談している記憶が流れる。

「ああ、その記憶か

雫が虐められていると相談して来たけど、きっと悪気はないしみんないい子達なんだ。

だから話せばわかるてアドバイスしたんだよ」

「…そうですか、では…」

私はイキュラス^{記憶} エルラン^{再生}を操作して小学生の時の雫の顔をアツプした

「なんで雫と言う女性は眼から涙を流しているんですか?」

私はそう言いながら小学生の時の雫の顔に流れて居る事を指摘する。

「確かに流れて居るが助けるまで…」

私は平行線になる前に

「!」

光輝の顔面に回し蹴りを

「!?!」

叩き込んで其のまま地面に叩きつけた

そして

「行き成り何をするんだ…」

私は光輝の胸倉を掴んで

「何が『雫ちゃんも、俺が守ってあげるよ!』ですか!!」

何も守れていないじゃないですか」

「な、何を言っているんだ!?!」

「貴方は此れを見て理由を知ったら同じことを言えるんですか?」

「何を!?!」

「彼女は涙を流して貴方に助けを求めて来たんですよ。」

なのに貴方は『きつと悪気はないしみんないい子達なんだ。』

だから話せばわかる』て言っただけ

彼女を見捨てたんですよ。」

そんな事したら愛想が尽きますよ」

「そんな事は無い!」

「なら何で彼女は貴方に助けを求めて来たんですか?」

貴方が言うきつと悪気はないしみんないい子達ならこんな記憶が

残るんですか？」

「そ、其れは…」

「そもそもあなたが雫と言う人と恋人関係になって居るなら…」

私は光輝を放り投げてイキユラス^{記憶} エルラン^{再生}を操作して今まで光輝君に告白して来た女性の記憶を全て展開する

「何で彼女達は勇者様に告白して来たんですか」

覇気を乗せて言う

ひと段落

私は光輝の胸倉を放して放り投げてイキュラス^記 憶^再 エルラン^生を操作して今まで光輝君に告白して来た女性の記憶を全て展開する

「何で彼女達は勇者様に告白して来たんですか」

覇気を乗せて言う

「告白？」

私はシスター服のポケットからこの世界の棒付きキャンディーを取り出して口をに含める

「そうですよ。」

もし香織、雫と呼ばれた女性達に好かれて居るなら他の女性達から告白をして来ません。

因みに……

私は棒付きキャンディーの棒を指で弾いて

「この棒付きキャンディーは煙草替わりです。」

流石に聖職者が煙草を吸うと色々とめんどくさくなるので」

「はあ……」

私は口から棒付きキャンディーから取り出して其れを光輝に向けて

「もう一度言いますが、彼女達は勇者様が独身と判断して告白して来ているんです」

「ま、待ってくれそれだと香織と雫は俺の事が好きでは無いって言う事が皆に知られている……」

「そうなりますね。」

告白をして居ない上に彼女達は離れていく事をして愛想が枯れたしょう」

「ち、違う」

「だったら……」

私はイキュラス^記 憶^再 エルラン^生を操作して光のディスプレイのようなものに小学生の時の雫が泣いているシーンにして

「貴方に助けを求める為に泣いている彼女を貴方は『きっと悪気はな

いしみんない子達なんだ。

だから話せばわかる』で言っただけ助けもしない。

そんな事をすれば彼女はあの時…」

私は再度イキユラス^{記憶} エルラン^{再生}を操作して

『雫ちゃんも、俺が守ってあげるよ!』

「と、この言葉が嘘だと判断されますよ」

「そ、そんな事…」

「では何で貴方を放置して慰安旅行して居るんですか?」

「そ、それは…」

「兎に角、今から私が復活秘術を使って彼女を蘇りします。

その時に彼女の記憶を操作して勇者様が告白する前に戻します。

そこでその時に彼女の告白を断るじゃなくて保留して下さい」

「保留?」

「はい、保留です。

今の勇者様には白黒はつきりした方が後悔も迷いも無くなるはずなので保留した上で鞆波・A・翼愛と言う女性に頼んで南雲ハジメと言う男性から連絡を取ってみるのは如何でしょうか」

「どうして君が其れを知って居るんだ」

「勇者様の情報は常にリアルタイムで目を通しています。

南雲ハジメと言う男性は錬成師でオルクス大迷宮に入る前は銃と言う武器の試作機を作ったそうでオルクス大迷宮に奈落に落ちて再開した時には銃の試作機よりも強力な銃を作ったそうですね」

「…くう…」

光輝は詰まらなそうな顔をした

「オルクス大迷宮の奈落に落ちて強力な銃を作れる腕前が有れば遠距離通話のアーティファクトを作る事が可能だと思えます。

その時に香織、雫から真実を聞けばいいんでしょう」

「…分かった」

「其れでは…」

私は槍を振り挙げて

「…!?!」

ちよつと待つて、何で槍を振り挙げているんだ」

「復活秘術を使いますがこの復活秘術は門外不悉なのでたとえ勇者様でも知る事は許されませんので寝て下さい」

「あ、ち、ちよつ……」

私は一気に槍を振り下ろして光輝の頭に振り下ろして

「がへ!？」

其れが当たり気絶する。

物陰に隠れていた恵里が

「其れで大丈夫なの？」

出て来てそう言う

「まあ今までの光輝君だったら此れを見せても自分が良い様に自己解釈して駄目になったけど、私が目が背けても同じ景色になる場所を見せて、更に逃げられないように人も殺させたんだよ。

そうする事で今まで出来た自分が良い様に自己解釈の思考回路がほぼ機能しなくなり其処にほぼ同じことを繰り返せば機能しない自己解釈の思考回路ので受け止める事が出来ずにダイレクトに受け止めてしまい諦めの考えが生まれて其処に繋がって自己解釈が出来るスペースがなくなり、追い打ちをかけるように過去の記憶を第三者視点から見せれば今まで自分が良い様に自己解釈で流されて居た情報を正しく受け止めて自分が間違いかもしれない、だと受け止めてしまう構造が出来る」

「成程ね」

恵里が納得する側で私は気絶して居る光輝を軽々と担ぎ上げて

「次の作業を始めるよ」

光輝の部屋に戻る

「そこで次は何をするの」

「部屋に戻り次第に夢を見せるお香を使って記憶を無意識に整理整頓させてその後に私が光輝君を言い捲つて後で恵里ちゃんがもう一回光輝に告白する。

いい捲られた光輝君は恵里ちゃんの告白を断らず保留する」

「其れで其れで？」

「恵里は保留にされた事で恵里ちゃんは自殺を辞める。

辞めた事で今までの行為が間違いだと自覚して私が眠る様に促してもう一度寝かせて記憶を無意識に整理整頓させて翌日に香織ちゃんと雫ちゃんに真実を告白すれば流石に光輝君は諦めて恵里の告白を受け止める筈だから」

「其れは楽しみだよ」

「其れじゃあ後で屋上で」

「うん」

私は気絶している光輝を光輝の部屋に駆けこんで其のままベッドに寝かせて光の回復魔法で全快に回復させる。

夢を見せるお香を使い私は部屋に出て

「レーヴァテイン」結界解除」

『font:ul20』Ja! 『font』

結界を解除して

「レーヴァテイン」雷槍の「ストラダ」かアテナの「ルシフェリオ」にテレビ電話を」

『font:ul20』Ja! 『font』

私の目の前に空中ディスプレイが現れてロード画面が出るが

「遅いね」

『font』o n t: u 1 2 0』

Bitte warten Sie noch ein wenig.

『font』

「レーヴァテイン」の言う通りに待つ、

その間に顔を基に戻す。

『font』o n t: u 1 2 0』

Danke, das Sie gewartet haben.

『font』

『font』o n t: u 1 2 0』

Es f·hrt zu [Luziferion] von Athene.

『font』

『font』o n t: u 1 2 0』

Verbinden Sie sich jetzt. / font
t』

空中ディスプレイの画面がロード画面から

『ああ、このクソ忙しい中に連絡するとかついて居ないわ』

アテナが写った。

何故か画面が真っ赤で

「えっと如何したの？アテナ

画面が真っ赤なだけで」

『実は……』

アテナが私から離れて起きた事を説明した。

グリューエン火山を目指し、グリューエン砂漠を魔力駆動四輪で進んでいる途中で大型のモンスターのサンドワームを目撃したが獲物の周りをグルグル回ってるだけで襲い掛かろうとせずまるで微妙な食べ物の前にして、食べようか如何か迷ってる光景を全員見とれて居たら後方から別のサンドワームが襲って来たので魔力駆動四輪の搭載された特殊ギミックを作動させてそれでサンドワームを爆散させたのは良いがサンドワームの血と肉片が雨の様に降り注ぎ、魔力駆動四輪をべちゃべちゃと汚した上に全員が目撃して居たサンドワームも襲って来たがユエの凍獄で氷漬けにしたそうだと

其れでサンドワームが見ていたのは人だった。

白い服を身に纏った20代半ばぐらいの男性、ただ苦しそうに歪められた顔には大量の汗が浮かび、呼吸は荒く、脈も早く服越しでもわかるほど全身から高熱を発して居て極め付けは内部から強烈な圧力でもかかっているかのように血管が浮き出ており、目や鼻といった粘膜から出血もしている事

治療師である香織が魔法少女の姿になって診察する魔法浸透看破を使って病状が判明する

体内で摂取した毒物が魔力が暴走する、外生中毒性の魔力の過剰活性化暴走と診断された。

症状は発熱、意識混濁、全身の疼痛、毛細血管の破裂とそれに伴う出血で、体外への排出不可の状態なってる

原因は体内の水分に異常であると診断が出た

香織は魔法少女の力でパパッと治して

先程の男性が目を覚ました。

最初に眼に入った香織を

「……………女神？　そうか、ここはあの世か……………」

香織に見惚れた様にそう言っただけで香織に触れようと手を伸ばし始めた所で、暑さと砂のウザさにイラついていたハジメはそんな行為を看過することが出来ず、その男の腹を踏みつけて香織と雫は驚きながら慌てて制止に入った。

ハジメを落ち着かせたあと、脱水症状の危険もあるのでその人物を魔力駆動四輪へ招き入れる。

走らせながら自重聴取をする。

助けた男性はアンカジ公国の領主ランズィ・フォウワード・ゼンゲンの息子で名前は、ビイズ・フォウワード・ゼンゲンだ」

四日前にアンカジ公国は全土において突然原因不明の高熱を発生し倒れる人が続出した。

初日だけで人口二十七万人のうち三千人近くが意識不明に陥り、症状を訴える人が二万人に上ったという。

直ぐに医療院は飽和状態となり、公共施設を全開放して医療関係者も総出で治療と原因究明に当たったが、進行を遅らせることは何とか出来ても完治させる事は出来なかった。

処置を受けられなかった人々の中から死者が出始め、発症してから僅か二日で死亡するという事実に絶望が立ち込める。

そんな中、一人の薬師が飲み水に液体鑑定をかけた結果、その水には魔力の暴走を促す毒素が含まれていることがわかった。

直ぐにアンカジのオアシスが調べられたのだが、やはりオアシスそのものが汚染されていたらしい。

砂漠地帯においてオアシスはまさしく生命線であり、それが汚染されたとなればあつという間に人々は干からびてしまうだろう。

故にどうしようもなくなつて汚染された水を飲み、感染してしまうという悪循環が発生する。

ただ、唯一患者を救える方法も見つかっており、静因石と呼ばれる鉱石を必要とする方法で、この鉱石はその名の通り魔力の活性を鎮める効果を持っており、それを粉末状にして飲めば体内の魔力を鎮めることが出来るだろうという事だ。

ただ、その静因石は希少な鉱石で、砂漠のずっと北方にある岩石地帯かグリュューエン大火山で少量採取しか採取できないらしい。

しかし、北方の岩石地帯は遠すぎて往復に少なくとも一ヶ月以上はかかってしまい、アンカジの冒険者、特にグリュューエン大火山の迷宮に入って静因石を採取し戻ってこられる程の者は既に病に倒れてしまっている。

仮にそれだけの実力者がいても、どちらにしる安全な水のストックが圧倒的に足りない以上、王国への救援要請は必要だった。

本来、アンカジの現状を調査するための調査員が派遣されたり、面倒な手続きがあったりするのだが、そんな事を悠長に待っていていられない為、強権を発動できるゼンゲン公か、その代理たるビイズが直接救援要請をする必要があった。

ビイズの家族も全員が感染していて、静因石を飲んで命の危機は脱したものの、衰弱が激しくとても王国に赴く事など出来そうになかった。

それでビイズが救援を呼ぶためアンカジを出たのだが、ビイズもすでに感染しており、アンカジを出て一日経ったつい先ほど症状が現れて倒れてしまったそうだ。

その際に護衛も居たそうだが皆サンドワームやられてしまい、残ったビイズは逆に感染していた事でサンドワームを躊躇させ命が助かった。

説明を一通り終えると、ビイズは衰弱した身体を必死に動かし、アンカジ公国領主代理の名目でハジメ達に正式にと救援依頼と採集依頼したそうだ。

全員賛成側で一番の決め手は、ミュウでグリュューエン大火山が目的だった為おまけ程度で採集依頼と救援依頼を受理したそうだ。

其の事にビイズは感極まった様に涙を流した。

直ぐにアンカジ公国に向かった

アンカジの入場門は高台にあり、そこから街が見渡せるようになっている。

アンカジの建物は乳白色で彩られており、全員見ても美しい都だと思った。

しかし、都は美しくても人々の活気は全く無く、建物の扉は固く閉じられており、人通りは殆どない。

ビイズは活気ある街を見せたかったと残念そうにそう言っていたが、今は一先ず問題の解決が先だという事で宮殿へ向かうことになった。

アンカジを出て一日で戻ってきたビイズに領主であるランズイは大層驚いていたが、そのランズイも衰弱している筈なのに執務室で気合いと根性で仕事に励んでいたのも、よほどの人格者らしい。

ビイズがランズイに事のあらましを説明し、トントン拍子で話が進んだ後、手分けして問題の解決に乗り出すことになった。

香織はシアと雫、生徒会は医療院と患者が収容されている施設で患者の治療

残りのメンバーは水の確保とオアシスの水質調査領主

先に水の確保をする為に二百メートル四方の開けた場所の農業地帯に行きユエの壊劫で人工池の地盤を生成してハジメが水が地面に浸透しないように地盤にコンクリートを錬成して其処に塗装した後、に汜渦浪で一気に水を満たして水の確保を終えて次にオアシス水質調査をする。

案内係のランズイの案内でオアシスに辿り着いたハジメ達は感知系の技能を持って居る全員でオアシスを探るとオアシスの底には何かあると分かった。

ハジメはオアシスの底にアーティファクトでも沈めっているとランズイにそう問いかけるが、オアシスの地上の周りにオアシスの警備と管理のアーティファクトしか設置して使われていない

疑問に思ったハジメは雷槍の雷であぶり出すとオアシスのからでつかいスライムみたいな魔物が出て来て直ぐに撃破する

その後ランズイの部下の一人が水質の鑑定を行ったが汚染された
ままだったが

ユエが用意した水のお陰で気にして居ない

ハジメの予想では魔人族の仕業でアンカジ公国を狙った根拠はア
ンカジは食料関係の要所だそうだ

その後香織、ミュウをアカンジ公国で留守番させて静因石採集を兼
ねたグリユーエン火山の攻略する為に向かった

グリユーエン大火山の報告

香織とミュウをアンカジでお留守番してハジメ達はグリユーエン大火山の大迷宮に向かった。

グリユーエン大火山は、グリユーエン大火山を中心に天空の城ラピュタの様に砂嵐が覆われて其れを抜けて、グリユーエン大火山の岩石地帯を登ってから始める大迷宮。

ハジメ達は魔力駆動四輪で砂嵐を切り抜けるが途中サンドワームに襲われるというアクシデントがあったが、ユエとテイオの風魔法、更には魔力駆動四輪に搭載されていた手榴弾をばら撒き、即行で片付けて先へと進んだ。

グリユーエン大火山に辿り着いたハジメ達は迷宮の入り口は頂上にあるという事なので、魔力駆動四輪で登れるところまで登ってその後は徒歩で向かったが、グリユーエン大火山の熱気が襲い掛かって来て

その時の暑さはただの暑いではなく火の傍に居る時のような熱さが体中に感じたそうだと。

ハジメ達は急遽一旦魔力駆動四輪の中に戻って暑さ対策してから迷宮の入口へと向かった。

迷宮内部は色んな意味でトンデモない光景だった。

マグマが重力魔法に掛かって居るように空中を流れているのだ。

更に、突然壁からマグマが噴き出してきて、偶々近くに居たシアに掛りそうだったが熱源感知を使ったハジメがシアを引っ張ってそのマグマを躲す。

このように至る所からマグマが噴き出すことがあり、普通の人間にとって非常に危ない大迷宮だったそうだと。

グリユーエン大火山の大迷宮の中に居た魔物はマグマを纏っている牛、マグマを翼から撒き散らすコウモリ型の魔物、壁を溶かして飛び出てくる赤熱化したウツボモドキ、炎の針を無数に飛ばしてくるハリネズミ型の魔物、マグマの中から顔だけ出し、マグマを纏った舌をムチのように振るうカメレオン型の魔物、頭上の重力を無視したマグ

マの川を泳ぐ赤熱化した蛇などが居たようで多種多様な魔物が多く襲い掛かってきた。

その都度、ハジメ、香織、黒花、アテナが即ドパンしたり、ユエ、ティオが無数の魔法で消し飛ばしたり、シアはドリユッケンで吹っ飛ばしたり、雷槍は雷魔法でオート殲滅、優花は風魔法と手裏剣類、牙十郎は刀で切り裂く。

時々雫、鷹音、刷庫、ルーズにも魔物を一匹寄こして四人係で仕留める様だ

そうしている間にハジメに宙を流れるマグマの川と静因石の在処が密接に関係していると見抜き。

その法則に従って探すと次々と大量の静因石を見つけ出して掘り出して必要な量は確保できたものの、ハジメ達が調子に乗って無作為に掘り続けた結果、マグマの流れが急変して危うくマグマに呑まれそうになったがユエとティオが結界魔法で足止めしながらハジメが即席の船を作って其れに乗っていける所までは行くショートカットを実行したのだがマグマの粘性を無視したスピードでのマグマ下りに

マグマコウモリが襲い掛かってくるわけだが、

シア、ティオが即席船の制御しながらハジメ達が射撃の的宜しく撃ち落としながらマグマの流れに沿ってトンネルとなっている空間を抜けると、一気に視界が開けて直径が3kmほどもありそうな広大な空間になった

底一面は僅かに点在する足場以外殆どマグマに覆われており、中央に島が見えしかも、その島はマグマのドームで覆われていた。

ハジメ達はそこが解放者の住処と判断して

「最後のガーディアンがいるはず……じゃな? ご主人様よ」

ティオの疑問に

「ショートカットして来たっばいですし、とっくに通り過ぎたと考えではダメですか?」

道中の楽すぎる道のりに、冗談交じりでシアが言いうが

「大迷宮がそんな甘いわけないでしょ」

シアの期待するような言葉を優花がバツサリと叩き切った。

案の定、優花の言葉を肯定するかのようにはマグマの海から宙を流れるマグマの川なチューブが出て来て其処からマグマの弾丸が飛び出してきた。

ハジメ達は、即席舟を放棄して近場の足場に散開する。

先程まで乗っていた小舟は、大量のマグマの弾丸が降り注いで粉碎されマグマの海に沈んだ

散開したハジメ達を追ってマグマの弾丸を各自で対応するが止まらない攻撃の原因の手掛かりになりそうな中央の島を調べる為、ハジメは空力を使って移動して、あと一歩という所でマグマの海から巨大な口を開けたマグマ蛇が出て来てハジメを飲み込もうとしたがハジメは躲してカウンターのドンナーを蛇の頭部に照準を合わせて引き金を引いてマグマ蛇の頭を捉え、弾き飛ばすが、その中身が無くただマグマだけで出来ていたのだ。

今までの魔物は、マグマの鎧を纏った魔物だった為にハジメは驚愕する。

驚愕している間にマグマ蛇は再生して再度ハジメに襲い掛かって来たが義手の仕込む銃で再度頭部を破壊して離れてハジメ達は近くの足場に降り立つと、円陣を組んで360。すべてを警戒する。

すると、その周りにマグマ蛇と同じものが20匹現れ、ハジメ達を取り囲んだ。

ハジメ達は直ぐに対応してマグマ蛇の核になる魔石事、撃破するが、次の瞬間には逆再生の様に元通りになってしまった。

ハジメが謎を考えて居るとシアが中央の島の壁に何かあるのを見つける。

ハジメ達も中央の島に視線をやると、確かに、岩壁の一部が拳大の光を放っていた。

ハジメが遠視で確認すると、光っている鉱石の他に、光っていないが同じような鉱石がズラリと並んでおり、それは大よそ100程であった。

其処からハジメはグリュウエン大火山の最終試験がマグマ蛇を百体倒すつてのがクリア条件と分かり各自マグマ蛇を撃破する

途中でテイオ、ユエ、シアで誰が一番多く倒せるかで競い合い、ハジメを独占する権利を得ようとする始末。

無論零達にもマグマ蛇を一体倒してハジメが最後の一匹に向かって跳躍して最後の止めを刺さんとドンナーを向けた瞬間が居たその場に極光が降り注いだ。

マグマ蛇ごとハジメがその極光に呑み込まれ数十秒後、その光は途切れる。

ハジメは大怪我を負った上に自由落下をするが、ユエがキャッチして直ぐに神水を飲ませて怪我を治すが徐々に治り始める。

しかし、その治りは本来の神水の効果と比べると遥かに遅い。

その後真上から追撃の光線が放たれる。

防御魔法やギフトをフル活用して防いでその後

「……看過できない実力だ。

やはり、ここで待ち伏せていて正解だった。

お前達は危険過ぎる」

真上からおびただしい数の竜と、それとは比べ物にならない巨躯の白竜が飛んでおり、その白竜の背に魔人族の男がいた。

ハジメは傷ついた体に鞭打って魔人族の男を引き出そうとしたが、魔人族の男は釣れなかったが人間領に攻めて来た魔人族の事を出しにしたら魔人族の男は、眉をほんの少し吊り上げて先程より幾分低くなった声で答えた

魔人族の男の名前はフリード・バグアーで、魔人族の女に件の魔物を与えた張本人で更に使役する魔法ではなく魔物を作る類の魔法と判明した。

ハジメ達はフリードに攻撃するがフリードに当たる前に、射線上に亀型の魔物を背負った灰色の竜が入り込んで亀型の魔物の甲羅が赤黒く輝き正三角形が無数に組み合わさった赤黒い障壁を出現させて攻撃を防ぐ。

しかし、ハジメ達の攻撃が絶大である為障壁にヒビが入るが、他の亀型の魔物を背負った灰竜が射線に入り障壁を展開してことごとくを防いでその間にフリードが神代魔法の詠唱に入って、其れを見た

ハジメ達は攻撃の手を激しくするが、障壁は破れずにフリードの詠唱が完了する

「界穿！」

神代魔法を発動すると同時に、白竜と共に姿が消えた。

シアが咄嗟に警告をして全員が振り返ると、全員の眼前に現れた白竜。

しかも、口内には、既に膨大な熱量と魔力が臨界状態まで集束・圧縮されている。

アテナが「レヴァンティン」と「ガングニール」を使って真正面から打ち消して各自ギフトを使ってフリードに傷をつけるがフリードの部下がグリューエン大火山の要石を壊してグリューエン大火山の噴火を使ってハジメ達を焼き殺そとする。

フリードは大迷宮の脱出経路を使って逃げる。

先程の戦闘で龍化したティオが追いかけるが灰竜が足止めする。

ハジメは静因石が入った宝物庫をティオに預けて先に脱出させてリューエン大火山の神代魔法を手に入れた。

手に入れた神代魔法は空間魔法で先程のフリードも使っていた魔法だった。

その後大迷宮攻略の証のペンダントと神代魔法を手に入れたハジメ達は脱出する為に考えるが、ハジメが

「マグマの中を泳いでいくー！」

そうハジメが言っただけが何言っているの？と言いたげな目でハジメを見てハジメが説明する。

グリューエン大火山を攻略した後にメルジーネ海底遺跡を攻略する為に潜水艇を造ってティオに渡す前にその近くに宝物庫から取り出して放置した

潜水艇の装甲板はマグマの熱に溶けずに残って居た。

その後ユエは、念には念を入れて聖絶を三枚重ねにして全員が包み込む。

全員の準備も完了し、扉の前に立ってマグマで満たされた外へと扉

を開く。

扉が開くと同時に部屋の中にマグマが入り込んで、あっという間に視界全てが紅蓮に染まる。

ハジメ達は急いで外へと出て、潜水艇に辿り着いてそのままハジメ達は潜水艇に乗り込んで噴火で脱出する予定がマグマが下に流れて潜水艇も下に進んで

「現在此処と」

『はいその通り』

「成程ね。」

其れで雫ちゃんに話したいだけどいいかな」

『ちよつと待つてろ』

アテナは空中ディスプレイから消えて暫くすると

『お待たせ連れて来たぞ』

空中ディスプレイにアテナと雫が出て来た

「翼愛、何の用？」

「実は此れを見て欲しいんだけど」

私はイキュラス^{記憶} エルラン^{再生}を操作して光のディスプレイを出して小学生の時の雫が泣いているシーンを移す。

「此れ光輝君から抜いた記憶の一部でこの当時の雫ちゃん虐められていた？」

そう言う雫は

『…ええ…そうよ』

そう答えた

「良かった。」

光輝君を構成する為についてい出鱈目を言っちゃったからもし間違えて居たらどうしろうと悩んでいたけど大丈夫だった」

『そう言えば光輝君は如何したの？』

「光輝君は自分が都合いい自己解釈が出来ないように洗脳が終わったから後は雫ちゃんが真実を言えば歪んだ愛を断ち切る事が出来るから」
『そう……』

「雫ちゃん、其れに光輝君の面倒を見てくれる後釜を確保して居るか

ら切り離しても大丈夫だから」

『……分かった』

「其れじゃ通信を切るね」

『おう』

私は通信を切って顔を変装して光輝の部屋に入った

変わる未来（嘘）

光輝の部屋に入った私はいつも通りに風魔法で換気して目覚めのお香を炊き私は光輝が起きるまで息を止めて待つ。

待っている間に鏡で変装のズレが無いように検査する。

勿論光輝が狸寝りして居ないか見聞色

三分後に

「……」

光輝は目を覚ましてベッドから起き上がった。

変装の検査を終えた私は近づいて

「えっと……」

「お目覚めですね。」

勇者様」

光輝は私の方を見て

「ああ、思い出した。」

確か復活秘術は門外不出と理由で俺を気絶してさせられて」

「はい、其の後私が気絶した勇者様をこの部屋に運びました」

と言いながらコップに水を汲んで

「取り敢えず、此れを飲んでスッキリしましょう」

私は差し出す。

「……ありがとう」

光輝は其れを受け取り飲んだ。

「其れでは彼女を助ける為の作戦を説明します」

「ああ……」

「では、まず彼女の告白は決して拒絶しないで下さい。」

してしまつたら先程の悪霊化します。

更に私が記憶操作して居る事もバレてその怒りで悪霊化した彼女はさらに強くなってしまつて私達の手には負えなくなり魂ごと肉体を消滅させる必要が有ります。

ですので絶対に拒絶せずに保留して下さい」

「答えなくて良いのか？」

光輝は不思議そうに見る。

「ええ、保留程度なら流石に悪霊化しません。」

其れに勇者様は未練を先に解決しないといけません」

「……確か、翌朝に翼愛に頼んで雫と会話してあの時の真実を聞くのだな」

「はい、その通りです」

私はそう答えると

「……」

光輝は顔を下に向けた。

私は光輝の顔を覗き込むと

光輝は気まずそうな顔になる。

「まさかと思いますが勇者様真実を知るのが怖いのですか？」

「……ああ、本当に雫を守れたのか疑問を持って居る。」

はあくいつもの俺だったら迷いも無く信じ切れるのに何でこんなに迷うんだ？」

私は右手の人差し指を唇に付けて

「其れは多分、翼愛が勇者様を色んな所に連れまわしたからじゃないですか？」

私がそう言うと

「？、俺そんな事一言も言った事が無いぞ」

「それはイキユラス記憶エルラン再生で記憶を探っている時についてに見ましたので」

「そうだったな」

光輝は納得する

「其れでイキユラス記憶エルラン再生で記憶で見させてもらいました
が

多分勇者様は御爺様の憧れの影響で正義を掲げるようになった」

「確かにその通りだ」

「其れで最初に人助けなど積極的に行って行くうちに周りの人間が勇者様を褒めまくり勇者様はその気持ちよさに溺れたんです」

「俺が溺れた!？」

「はい、勇者様は色々出来るが故に怒られるような欠点は無く怒られない。

それ故に周りは怒られるのを見て自分は間違いはしないと無意識にそう思い込んでしまった。

実際、最後に怒られたのは覚えていますか？」

「……確かに怒られた事があるまない」

「はい、勇者様の周りに居た人間は褒める人間しかおらず怒ってくれる人があんまりにも居なかつたんです。

だから勇者様が間違いを犯しても周りの人間は勇者様の間違いではなく仲間の間違いだと思ひ込んでしまひ仲間を責めて勇者様が収める事で周りの人間が其れに納得してしまふ。

俗に居る悪循環が生まれてしまひます」

「悪循環……」

「はい、ですので翼愛いう女性とメルド団長はその悪循環を断ち切る為に今回の騒動を起こしたんでしよう。

もし魔族の戦闘で勇者様以外仲間が全員戦死してその上で負けてしまったら、その責任は誰の元に行きますか？」

「……俺か？」

「はいその通りです。

勇者様はトータスの人々の希望です。

其れ故に期待は高い。

ですので負けた暁にはトータスの人々は手のひら返して勇者様を責めます。

責めて誰からも助けを伸ばさない状況で怒られた事が無い勇者様の心は耐え切れませんか？」

「………多分、無理だと思ふ」

「ええ、その通りです。

だから翼愛と呼ばれた女性は人々の平和手に入れる為には魔族を根絶やしにしないといけないと教えてんでしよう。

それ故に魔族に故郷、家族、恋人、友を奪われた痛みを味あわせてんでしよう」

「だけど、魔族にも故郷、家族、恋人、友が居るんだ。

其れを俺が奪って良いのか？」

私は近づいて

「其れは分かりません。」

まだ答えが見つからないのなら保留にして守りに専念するのは如何でしょう」

「守り？」

「はい、守りに付けければ魔族を責めずに逆に私達を襲って来た魔族に正当防衛という名目で心が苦しまないと思います」

「そうか、そうだな」

「其れで少しは心が軽くなりましたか？」

「其れは分からないけど。」

まず俺がやらないといけない事は分かる」

「では彼女の元に行きますか？」

「ああ、恵里を悪霊にしない為に」

「では行きましょう」

「ああそうだな」

私達は部屋を出て恵里が待つて居る屋上に移動する。

（移動中）

屋上の扉の前に辿り着いて私達は

「あ！

勇者様、少し良いですか？」

「何だ？」

私は手のひらを光輝が見える様に出して

「レーヴァテイン」サーチチャーを」

私は念話で「レーヴァテイン」にそう指示して

『font:ul120』Ja!『font』

私の手の掌に光の弾基サーチチャーが現れた

「レーヴァテイン」今度はサーチチャーを透明に」

『font:ul120』Ja!『font』

サーチチャーが透明になり

『其れを光輝君に』

『《font:ul20》Ja!^{はい!}《/font》』

透明になったサーチャーは光輝の周りを旋回する

『勇者様、聞こえますか?』

『なあ!?!』

『勇者様驚かないで下さい。』

此れは念話として今勇者様と念話で会話して居るんです。

ですので今勇者様が考えて居る事が聞こえますので気を付けて下

さい』

『すまない』

『此れである程度指示を出しますので行つて下さい』

『ああ、分かった』

光輝は屋上の扉を開いて恵里の元に行く

「来たんだ光輝君」

毎度の様に恵里は器用に手摺の上で振り向いて

「ああ」

「そう言えば光輝君は覚えて居るかな」

「ああ、俺が鉄橋の上で飛び降り自殺しようとした恵里を助けた事か」

光輝はそう言う

「うんそうだよ。」

あの時の事を覚えてくれたんだ」

「半分言えば忘れていたんだがある人が思い出させてくれたんだ。

其れに俺が恵里と初めて会った場所でもある」

「うんうん、その鉄橋こそ僕と光輝君が最初に出会った場所だよ」

「そして俺を此処に呼んだのは恵里が俺に告白する為」

「そうそう、その通りだよ。」

だから僕は光輝君が好きです。

付き合つて下さい!」

恵里が告白した

「その……」『此れ如何した良いの?』

光輝は念話で助けを求めて来た

『私が言った事を時分なりに言っして下さい。』

先ずは告白したのは嬉しい』

「……告白してくれたのはうれしい」

「其れって僕の告白を受け取ってくれるの」

『だけど、今この場で答えるはまだなんだ』

「だけど、今この場でその告白の答えるのはまだなんだ」

「如何言う事?」

『知って居ると思うが俺は好きな人が居るがだがある人が其れは違うと答えてくれたんだ』

「知って居ると思うが俺は好きな人が居る」

「香織と雫の事だよ」

「ああ、だが其れは好きではなく一方通行な恋愛行動と教えてくれたんだ」

「其れじゃあ……」

「だけど幼い頃、雫に告白したんだ」

「其れって」

恵里は顔を暗くするが

「だけど、俺は本当に雫を守れたのか分からなくなった。

だから翌朝、翼愛に頼んで雫に連絡して真実を聞いてから恵里の告白を答えたい」『で良いのか?』

『やあ?』

私は念の為に光輝の念話を切ってから

『恵里、OK?』

恵里に念話を駆ける

『まあぼちぼちな。』

其れに雫は守り切れなかったて答えるでしょ?』

『其れは間違いない。』

先程雫ちゃんに通話したから』

『なら良いよ』

「わかった。」

その答えが僕にとって最高の物を祈って居る」

恵里はある行き出して屋上の出入り口の扉に手を掛ける。
私は咄嗟に屋根に張り付いて、恵里は気にせずに屋上から後にした。

私は恵里が見えなくなったら天井から逆さまで光輝の様子を見る。
光輝は棒立ちして

「……」

其処から腰が抜けた様に座り込んで

「変わった……やつと未来を変えられたんだ」

何度も疑似的にタイムループを体験して体験した分恵里を救えなかったからね。

当然に涙も出る。

丁度朝日も出て来た

私は天井から降りて近づいて

「ぱちーぱちー！」

拍手する

其れに気が付いた光輝は

「何の真似だ？」

「いえ、此れで勇者様の目標を達成出来ましたね」

「ああ」

「私は此れでこの町を離れます」

「？最後まで見ないのか？」

「ええ、私の勘が正しければもう彼女は悪霊化しません」

「？、其れってどういう意味だ」

「さあ、その意味を知るのははるか先かもしれませんよ」

私は

「剃ー！」

六式の剃を使って姿を消して自分の部屋に戻りコスプレのシスター服を脱いで

「シャルル、此れ仕舞って」

「はいシャル」

シャルルの空間魔法でシスター服しまう。

その後は食堂に移動して食事すると鎧姿の光輝が食堂に入ってきて

『そして私の元に行き』

「翼愛、頼みがある」

「何かな？」

「雫に連絡が取りたい」

「出来るけど今すぐの方が良い？」

「出来れば今すぐが良い」

「……分かった」

「(レーヴァテイン) 雷槍の「ストラード」かアテナの「ルシフェリオ」にテレビ電話を」

『font:ul20』Ja!^{はい}『font』

私の目の前に空中にディスプレイが現れた。

今度は

『よう急に通話を寄こして如何したんだ』

直ぐにアテナが出た。

「別に大した事は無いけど光輝君が雫に連絡したいって言って来たから通話しただけ。」

其れより画面が赤いけど？」

『ああ、今マグマの中を潜航して居るからな多少赤くなる』

「大丈夫なのか!？」

光輝が割り込んで来たが

『ああ大丈夫だ一回南雲が潜水艦の部品をマグマに落として解けなかったから大丈夫だ』

「良かった」

光輝は安心する。

『其れで雫だな。』

ちよつと待ってろ』

アテナは画面から消えて暫くすると

『お待たせ、連れて来た』

アテナが雫を連れて来た

「雫……」

光輝が静かにそう言っ

「雫、聞きたい事がある」

『何?』

「俺が初めて雫と出会った日に行き成り、『雫ちゃんも、俺が守ってあげるよ!』と言って告白したよね」

『……ええそうね。』

確かに昔の貴方にそう言われたわ』

「其れで昔、雫に泣いて俺に助けを求めて来た。

其れでその時の理由が虐めが有ったんだよね?

その虐めて……終わって居なかったんだよね?」

そう言っ

『……ええそうよ』

「それじゃあ、俺は知らない間に雫を守り切れなかったのか……」

一呼吸して

「南雲ハジメ出て来い!!!」

行き成り大声で叫んだ。

私は光輝が行き成り大声で叫んだことに驚いた。

そして

『なんだ?』

ハジメが出て来て

『運転大丈夫か?』

『一応流れは同じだから取り敢えず呼ばれたから来ただけだ。

それで何の用だ。

手短に話せ』

ハジメがそう言っ

「香織と雫を頼む!」

土下座した。

ハジメと雫は眼を丸くして

「俺は雫に守るって言ったのに、不甲斐なさと雫を傷つけた。だから寄り添う資格はない。」

が言わせてくれ、あの時言った事を破って本当にすまなかった
其れに俺は香織が傍から消えてハジメの隣に行かれるのが怖くて
檜山大介の虐めを許してしまった。

今更許しを請うつもりは無いが此れだけで言わせてくれ
どうか香織を幸せにしてくれ。

どうか！」

私は画面を見ると香織も入って来て

『『……』』

三人共停止して最初に出た言葉が

『『誰？』』

そう言われて光輝は土下座スタイルでこけて

「あの、クラスメイトの天之河光輝君だよ」

と言うが

『いや俺達知って居る天之河光輝はそんな土下座して他人にお願い
する奴じゃべねぞ』

『『うん、うん』』

辛口コメントが来た

終了と合流

『いや俺達を知って居る天之河光輝はそんな土下座して他人にお願いする奴じゃべねぞ』

ハジメがそう言って

『うん、うん』

香織と雫が頷く

確かに今までの光輝の行動を考えればそうなる。

「ぐう、確かに俺も昨日までの俺だと考えられない行動して居るのは自覚して居る」

『自覚して居たんだ』

「翼愛、気が付けさせてくれたんだ。

今まで俺がやって来た正義は自分が自己満足で終わって居た薄っぺらい正義だと」

光輝が力強く言うが

『翼愛、こいつ光輝に化けた魔人族なんかじゃないか？』

『光輝は自分の失敗を認めないというか自覚して居ない部分がある』

「ガは!?」

血反吐出た様な仕草をして膝から崩れた。

「まあ私がたつぷりと指摘したから流石に光輝君も理解して居るから」

『……』

ハジメ、雫の三人はジト目になる

「だ、大丈夫だよ。」

光輝君には逃げられないように信念を捻じ曲げてこの世界の住人が求めている正義を目を背けられないようにしっかりと見させてその上で人殺しもさせたから今まで通りの正義は震えないから」

私はそう言うと

『……翼愛がそう言うなら確かなんだろう』

『確かに翼愛は私達が旅に出る時にそう宣言して居たから……』

「其処は俺もそう思う」

「取り敢えず、此れからは光輝君は雫ちゃんと香織ちゃんに固着する理由は無くなったから安心して慰安旅行楽しんでね。」

後で合流するけど何か回収したい物はある？」

『回収する物って言うところ……』

雫が考えて居るけど

『香織とミュウ、其れからティオだな』

ハジメがそう答える。

「前回の通信でアンカジで香織は病人の看病で、ミュウはお留守番、ティオは静因石を運んでいるんでしょ」

『ああ其れで合っている』

「其れじゃあ私はアンカジで合流するね」

『ああ分かった』

『其れじゃあ通信切るぞ』

「分かった」

通信は切れて私は「アクセサリ―状態のレーヴァテイン」を仕舞う。

「なあ、ちよつと良いか？」

「うん？」

何が？」

「さっきアンカジで香織は病人の看病で言ったけど何が起こって居るんだ？」

「ああ、実はアンカジにあるオアシスが魔族が放った魔物で汚染されてそのオアシスの水を飲んだ人が病気にかかったんだけどハジメ君達が簡単に解決したんだよ」

「そうか……はあく、召喚された時はあんなに弱かった彼が今では誰よりも強い存在になるとはね。」

俺はやっぱり、ただ強い力を持っただけの弱い存在か」

私は光輝の肩に手を掛けて

「そう思うなら君の思い人と一緒に強くなればいいんじゃない？」
後ろを振り向かせる。

其処に居たのは

「こ、光輝君」

モジモジして居る恵里が居た。

「そ、其れで光輝君昨日の夜の告白の答えを聞かせて欲しいんだけど」
「ああそうだな。」

スウ……ふう〜」

光輝は一呼吸を置いてから

「昔に俺が零に告白は身勝手な自己満足で意味が失くしてしまった」

「う、うん其れは聞いていた」

「翼愛に正義が何なのかを教えられたがまだ何が正しいのが分からな
いけど誰に言われた正義じゃなくて俺だけの正義を見つけるつも
りだ。」

だから付いて来てくれるか？」

光輝は恵里に手を差し出す

「……はい喜んで」

恵里はその手を握る

「パチパチ」

私は無言で拍手する。

その後光輝は光輝と恵里をくっ付ける作業に手伝ってくれた、メル
ド、龍太郎、鈴、浩介、香織の代替の治癒師に食堂で恵里に告白した
と発表した。

皆は知って居るが黙ってくれた。

その後朝食を終えて一旦解散した時にメルドに接触して見聞色の
覇気で周りを確認しながら

「メルド団長、勇者光輝の意識改変終わりました」

「ああそうだな」

「なので後で光輝に特別授業終了を教えさせていただきます」

「ああ、頼んだ」

とメルドから離れて恵里の部屋に移動して

「恵里居る？」

「居るよ」

恵里の呼び声で恵里の部屋に入って

「会長が此処に来たのは」

恵里は私の「レーヴァテイン」のバインドで固定されているタンスを見て

「大介の回収だね」

「そうそう「レーヴァテイン」バインド解除」

『font:ul20』Ja!『font』

タンスに掛けていたバインドは解除されて私はタンスを開けると

「!!」

大介は私に気が付いて

「!!」

暴れるが、タンスから転落してしまう。

私は大介の顔が見える位置まで移動して

「作戦は成功で終わったよ」

私がそう言うのと

「!？」

大介は眼を大きく見開いて

「!!」

暴れ出したが「レーヴァテイン」の蛇腹剣の帯が外れるそぶりを見

せない

私は見聞色の覇気を出して恵里の部屋の周りに誰も居ない事を確

認して更に

「レーヴァテイン」人払いの結界を張って」

『font:ul20』Ja!『font』

恵里の部屋を中心に人払いの結界が張られて

「レーヴァテイン」口だけ解放して」

『font:ul20』Ja!『font』

大介の口のバインドが外れて

「ふさげるな、俺が香織を手に入る計画がどうなるんだ!？」

「決まって居るじゃん。」

その話は打ち切りだよ。

もともと僕が君にその話を持ち掛けたのは僕が光輝君を手に入れる為だよ。

だから光輝君を手に入れたからこの話は無かった事になる」

「ふ、ふさげるな！」

殺してやる！」

より一層激しく暴れるが其れでも帯が外れる様子は無い

「そろそろ私は離れるから寝てもらおうよ」

私は「セイザブラスター」を腕に取り付けて「オヒツジキュータマ」を取り出して

『オヒツジキュータマ』

セットして「オヒツジキュータマ」を手前に倒して

『セイ・ザ・アタック』

スキルを発動して羊の幻影が出て来て其れを大介は思わず其れを見たのか

「Zzzz」

直ぐに寝た。

「シャルル、遺体処理用のバックを取り出して」

「はい、分かったシャル」

シャルルは空間魔法から遺体処理用の大きめのバックが出て来て私は慣れた手つきで大介をバックに入れてチャックを閉じて

「ほい」と

私はバックを持ち上げる。

「レーヴァテイン」張って居た人払いの結界を解除して」

『font:ul20』Ja!『font』

恵里の部屋を中心に張られて居た人払いの結界が解除されてある場所に向かう。

移動

私はある場所に辿り着く。

その場所はホルアドの門でメルド達が待つて居た。

「メルド団長」

「団長は堅苦しぞ

メルドで十分だ」

「ではメルドさんお世話になりました」

「お世話になったのはこっちだ。

俺達を救ってくれた上にコウキの意識改革をしてくれたんだ」

「ああだからお礼を言うのは此方の方だ」

「そうですか。」

「なら彼の処遇をお願いします」

「私は持つて居たバックルを地面に置いて

「処遇？」

メルドは首を傾げる

「私はバックを開けると

「なあ!？」

メルドは驚いた。

「何せバックの中に「レーヴァテイン」蛇腹剣の帯で拘束されている
大介が居た。」

「彼は本作戦で邪魔になる存在で早期拘束で閉じ込めて居ました」

「そ、そうか」

「其れに彼は香織を自分のものにする為に……」

「私は気まずそうに恵里の方を見て、恵里は察したのか

「僕がある話を大介に持ちかけました」

「ある話」

「はい……僕は光輝君に告白しても香織と雫が居ると言って相手にされないと分かって居たので僕は降霊術で王国を国家転覆させる位光輝君が好きだと告白するつもりでした」

「「「「「なあ!？」」」」」」

「皆は驚いて居た」

「で、でも恵里はお化けが苦手と言っていたじゃん」

「あれは嘘、

「僕は最初から降霊術は使えたの。」

「だから奈落に落ちたクラスメイトが生きているのは分かって居たの。」

「だから僕は大介に僕の計画を手伝ってくれたら香織を降霊術で大介の好みの人形に変えて僕は光輝君が結ばれると計画して居たんだ」

「そうだったか」

「もう僕の願いは叶っただからどんな罰でも受けるつもりです」

恵里がそう言うのと光輝が

「恵里、此方こそすまなかつた!」

光輝も謝りだして

「俺も恵里の気持ちに気が付かずに放置していたから

其れに俺も罪を重ねていたから、翼愛、檜山を起こしてくれ」

「分かった」

私は大介の頬つぺたを

「起きろ!」

ぺちぺちと叩いていた

その間に

「其れで恵里ちよつと良いか?」

「何が?」

「その……国家転覆は未遂か?」

「うん未遂

会長に殺された魔族の女を触媒にして他の魔族に接触してから国家転覆の準備を始めろ思っていたけど会長が邪魔して出来なくなつたの」

「そ、そうか」

「其れと翼愛が使って居た命綱を切つたのも僕の仕業なんだ」

「なあ!」

「香織が居無くなれば少しでも僕の事を見てくれると思っていた。

だけど意味がなかった。

だからごめんなさい」

「い、いや現に香織達が生きていたから良かったけど」

光輝はメルドの方を見て

「メルドさん其れで恵里の処遇はどうなるんですか?」

光輝が口にする

「そうだな。

未遂だが魔族とつながりを持つとうとした者は全員死刑対象にな

るが

エリは勇者の一向故に罪を軽く出来るが仲間を殺そうとしたのは見逃せないが、恵里の頑張り次第で罰を軽く出来るかも知れない」「そうですか」

私は聞き耳を立てながら聞いて居ると

「う、ううん」

大介が起きて

「こ、此処は？」

「大介君が起きました」

私は離れて

「か、会長！」

其れに光輝！」

皆の存在に気が付いて

「こ、光輝、恵里は魔人族と釣るんで国家転覆を企てているぞ!!」

大介は恵里に裏切られたので恵里を落とす為にそう言うが

「知って居る上で言う俺は恵里を許す。

俺のせいで恵里は国家転覆を企てたんだ

だから恵里の罪は俺の罪だ。

其れに檜山、俺は幾度も檜山を許した。

だけど其れはダメな事だったんだ俺と一緒に元の世界に戻れたら

一緒に罪を継ぐなろう」

「ふ、ふさげんな!!」

今まで見逃してくれたのに今更そんな事を言つて納得するつもりねえぞ！」

大介は拘束されながら暴れる。

「寝かせます」

私は再度

『オヒツジキュータマ』

「セイザブラスター」に「オヒツジキュータマ」をセットして

『セイ・ザ・アタック』

スキルを発動して羊の幻影が出て来て其れを大介又其れを見て

「Zzzz」

直ぐに寝た。

「では私はこれで失礼します」

私は「セイザブラスター」から「オヒツジキュータマ」を外して代わりに「ワシキュータマ」をセットして「セイザブラスター」の外側に倒す

『セイ・ザ・ゴー』

ワシピンクの専用機のワシボイジャーを出してそれに乗って浮上する。

下を見ると光輝達が手を振るっていた。

私は敬礼してワシボイジャーアンカジに向けて飛んだ

くワシボイジャーで飛行く

ワシボイジャーで飛行して居るとアンカジと高速で移動する龍化したテイオを見つけ、そのままテイオはアンカジ目掛けて減速せず、に其のまま突撃した。

私は急いでアンカジに入って騒ぎの場所に行くとテイオと香織を見つけた。

その後私達は持つて居る情報を交換してアンカジ全体が完治するまでアンカジに留まり続けた

エリセンと再会

私、香織、ティオ、ミュウはアンカジが復刻するまで作業して

「今日で私達の処置が必要な患者さんは居なくなりました。」

後は安静して自然治癒に任せるか」

「アンカジの医療院の人達に任せる方針だね」

「うん」

其れで私達を向かいに行きます」

「ふむ」

そうじゃな妾もそろそろ動くべきと思っておった」

「そうだね。」

私もそろそろ皆に会いたくなつたから」

「パパ！」

パパを迎えに行くの？」

「で流石にミュウちゃんを火山に連れて行くのは愚策だよね」

「そうじゃな…」

其れではご主人様がミュウを此処預けて言った意味がない」

「其れに私がハジメ君達と通話して上じゃなくて下に進んで居るみたいだから…」

「多分グリユイエーン火山じゃなくて海の中の海底火山の方に出ると思うから先にエリセンに行つてミュウちゃんをママさんに合わせてあげるの」

「運が良ければハジメ君達と合流できると思うから」

「ふむ…其れが妥当じゃな。」

ならば妾の背に乗つて行くがよい」

ティオは龍化の事を言つて居る事は私達は理解して居るが

「??」

まだティオの龍化を見ていないミュウは何の事が分かつて居ない
「であれば善は急げじゃ早速発つとしよう」

私達はアンカジの結界の外まで出て其処でティオは龍化して黒龍
になった。

私と香織はミュウを抱っこして高い身体能力で黒龍化してテイオの背中に乗った

「テイオ乗ったよ」

『分かったのじゃ。』

しっかりと捕まっておくのじゃ』

テイオは背中の翼で空を飛ぶ。

ふと下を見るとアンカジの人達が手を振って見送ってくれた。

く移動く

私達は現在海の真上を飛んで居る黒龍化してテイオの背中に乗ってエリセンに向かって居る

移動に起きる風圧は私と香織の障壁魔法テイオ事全体を防ぐ。

其れも空気抵抗を出さない形で張る。

テイオがエリセンに辿り着く間に私達はトータスの世界地図を広げて

「あともう少しでエリセンに辿り着くね」

「本来なら一カ月くらいかかる所をテイオさんの猛スピードでそんなに時間は掛からなかったね」

『当然じゃ妾に掛れば朝飯前じゃ！』

「有能なのは分かるんだけど…」

「変態のせいでマイナスなイメージが定着しちゃったね」

『あう！』

あ！見えたのじゃ』

私達は身を乗り出して下を見る。

海から飛び出ている岩場を足場にして木の板で足場を増やして居る集落が見えた

「あれがミュウちゃんの海人族の生まれ故郷の」

「エリセンだね」

私達が上空からエリセンを見下ろして居たら

「あ!!」

ミュウが何かを見つけ出して

「とう!!」

何の迷いも無く黒龍化してテイオの背中から飛び降りた
後方には結界を張って居なくて其のまま自由落下する

私達は急いで下を見て

「『えええええ!!』」

私達は驚く

私は飛び降りたミュウの更に下の方を見るとハジメが作ったよう
な物体が有った。

更に見慣れた髪の毛の色や被り物をして居る人物を見つけた

「多分ハジメ君達見つけた」

「本当!」

『確かに!』主人様の気配がするのじゃ』

「それじゃあミュウちゃん!」

「ハジメ君を見つけて飛び降りたんだと思う」

『そうなのか!?!』

急にテイオは急降下して

『うおおーっ』

勝手に飛び降りおって何とお転婆なのじゃ』

「テイオ急いで!」

テイオと香織は慌ててミュウを追いかける

そんな事をしなくても大丈夫なのに何せ

「ミュウ!」

下からハジメが来ているのだから、其のままハジメはミュウを
キャッチした

其れを確認したテイオは急降下を辞めて

『!』主人様!』

と安堵する。

その後ミュウ、香織、テイオはハジメに抱きついて其れを見ていた
ユエとシアは文句を入れて来た。

私は

「!』わがっだ!!」

ようかんやらうみのまものにおぞわれでじぬがどおもっだ!!!」

刷庫に泣き捕まえられる

「よく頑張ったね。」

其れで依頼を報告したいから放して欲しいんだけどいいかな？」

「わかりました」

刷庫は私を放して

「すみません。」

冒険者ギルドのフューレン支部の支部長イルワ・チャングさんの指名依頼で海人族の子供、ミュウちゃんの帰還依頼です」

私はステータスプレートとイルワから貰った手紙を出す。

「確認させてもらう」

この場に居る王国兵士で一番偉そうな人が私のステータスプレートとイルワから貰った手紙を受け取り内容を確認して

「依頼の完了を承認する、鞆波殿」

ステータスプレートを返してくれた。

私は受け取り

「ハジメ君の疑いが晴れたようで良かった」

「まさか金ランク…」

ギルド支部長の指名依頼とは…」

「フューレンでトラブルが起きたので自然と私達に白羽の矢が立ちました」

「それで、ひとまずこの子を母親に会わせたい。

いいよな？」

「仕方あるまい…」

しかし先程の竜やあの船の事等、王国兵士としては看過できない」
「其れなら時間が出来たら話すって事で良いだろう？」

エリセンにはしばらく滞在するつもりだしな」

「そうか…話す機会があるならそれでいい」

その子を母親の元へ」

そう指示が有ったので私達はミュウの案内でミュウの家に向かう。

「パパ早く！」

「こつちななの！」

「おいおいミュウ

そんなに慌てるなって」

通りの先で騒ぎが聞こえだした。

「落ち着くんだレミア

その足じゃ無理だ！」

「レミアちゃん！」

若い女性の声と、数人の男女の声だ。

若い女性は足に包帯を撒いといて建物の壁を伝って何とか歩いている状態だ

「ミュウが帰ってきたのでしょう？」

私が迎えに行つてあげないと……！」

話の流れからしてミュウの母親と分かる。

案の定

「ママーっ！」

ミュウがその女性に向かって、精一杯大きな声で呼びかけながら駆け出した。

「ママー！」

「ミュウちゃん」

レミアは咄嗟に座り込んでミュウはレミアの胸元へ満面の笑顔で飛び込んだ。

レミアはミュウを抱きしめて

「ミュウ……良かった。

ごめんなさい

守つてあげられなくて」

ポロポロと涙を零している。

「ママ、大丈夫なの。

ミュウはここにいるの」

このやり取りに私達含めて周りは感化された

ミュウがふとレミアの脚を見て

すると、突然ミュウが叫び声を上げた。

「ママー！」

あしどうしたの！ けがしたの!？」

ミュウの言う通り、彼女のロングスカートから足は、包帯でぐるぐる巻きにされていた。

これが先程聞いた怪我なのだろう。

ミュウはハジメの方に無理向いて

「パパあ！」

ママを助けて！

ママの足が痛いの!」

間違いない大しけになる爆弾発言をした

「えっ：：パパ?」

レミアは若干混乱して、ミュウの言葉を聞いた周りの御近所の人達は、

「今パパって言わなかったか!？」

「レミアちゃんという関係なの?」

大慌てを始めた

ハジメは若干戸惑ったがミュウとレミアに近づいて

「大丈夫だミュウ

ちゃんと治る。

だから、泣くな」

ハジメはそう言つてレミアを

「悪いが、ちよつと失礼するぞ?」

ハジメはレミアさんをヒョイとお姫様抱っこで抱き上げる。

初めて会う未亡人を何の恥じらいも無くお姫様抱っこで抱き上げるとは中々の物

背後で悲鳴と怒号が上がっていた。

ハジメはナチュラルにそれを無視すると、ミュウに先導されて家中へと入っていった。

私達も遅れて入る。

周りの人達は窓から覗いて来た

此れには私が説明して納得してもらった
その間に

「成程な

その怪我はミュウを攫った奴らのせいで…」

怪我の経理を聞き出して

「香織、どうだ？」

香織は魔法少女のウォーナーズ☆くるみの姿になって

「うん、大丈夫。

私の治癒魔法で十分治せるよ。

念のために明日一日かけて、ゆっくり治そうと思う」

香織の言葉を聞き、

「ママ良かったの！」

「あらあらまあまあ。

もう、歩けないと思っていましたのに…

何から何まで…

どうお礼を言ったらいいのやら…」

皆が満足そうな顔をして居ると

「えつと…そういえば

皆さんはミュウとはどのような…

それにどうして、ミュウは貴方の事を『パパ』と…」

色々と落ち着いて来たのか、レミアはハジメにそう尋ねた。

「あー…

まあ話せば長くなるんだが…」

ハジメは、事の経緯を説明する。

フューレンでのミュウとの出会いと騒動、そしてパパと呼ぶように

なった経緯など。

その間にミュウはレミアの膝枕で寝ちゃった

全てを聞いたレミアさんは

「本当に、何とお礼を言ったらいいか…」

「このご恩は一生かけてもお返しします」

「気にしないで下さい。」

ミュウちゃんのお母さんなんですから」

「でも…」

レミアは考え始めて

「でしたら、せめて我が家をお使いください。

エリセンに暫く滞在なさると聞きました。

これ位はさせて下さい」

「いや俺達は大丈夫だ。

この辺りで宿を探すよ」

ハジメは立ち上がり立ち去るつもりでいたが

「でも…貴方が居てくれた方がきつとミュウも喜びます」

レミアの言葉を聞いたのか

「？ パパ、どこかに行くの？」

ミュウは目をパチクリさせて首を傾げる。

「あらあら、パパが、娘から距離を取るなんていけませんよ？」

「うっ…」

ハジメは気まずくなる

「いずれ、旅立たれることは承知しています。

ですが…だからこそ、お別れの日まで『パパ』でいてあげて下さ

い」

流石に此れは

「まあ…それもそうか」

いい捲られてミュウの家で寝泊まりにすることになった

「うふふ」

別にお別れの日までと言わず、ずっと『パパ』でもいいのですよ

？」

何か気まずそうな空気が流れそうな気配がして

「『一生かけて』と言ってしまいましたし…」

その言葉が聞こえた瞬間、ハジメの後ろに居るユエ達からダークマ

ターが出た

香織は「LBCSオーデインMk-2」を取り出してユエは

『ドライバーオン ナウ』

「ワイズドライバー」を起動させる

更にシアは

『変身致しまゝす 白線の内側に下がってお待ちください』
トツキユウ三号に変身を体制になつた。

あと何故かテイオも混じつて居た

私達は慌てながら其々変身アイテムを取り出して抑止になり

「ははは…そういう冗談はよしてくれ」

ハジメは冷や汗をかきながら打開策を探るが

「あらあら、おモチになるのですね。」

ですが、私も夫を亡くしてそろそろ五年ですし、ミユウもパパ欲しいわよね？」

その言葉を聞いていた覗き見達が

「レミアが再婚だと」

「緊急集会だ！」

「こりゃあ荒れるぞ！」

と

「オーう…この展開は読めませんでしたね」

「上等…」

『シャバドウビ タッチ ヘンシン シャバドウビ タッチ ヘンシン』

前も後ろも大しけ級の荒れている

当の本人は

「あらあら、うふふ」

大人の余裕と言わんばかりに微笑んで居た

「お部屋は自由に使つて下さいね。」

幸い我が家にはゆとりがありますから

ハジメさん、夫婦ならご一緒しますか？」

その言葉にシア、香織、ユエに雷が降った

ハジメも其れを察して

「いや俺は…」

切り抜けるうとするが

「パパとママと一緒にねるのーっ」

「あらあら、ですってパパ♡」

ミユウとレミアの発言にまたユエ達からダークマターが出て来て私達は其々変身アイテムを取り出そうとするが、直ぐにダークマターは飛散して全員ハジメに抱きついて

「レミアさん

私達は皆で一緒に寝ますので！」

「ハジメさん

ここは危険ですう

早く行きましょう」

「だーっ！

良いからお前等離れろ！」

ハジメの絶叫が夜のエリセンに響く

異世界食堂 in エリセン

エリセンに到着して三日たって

「ハジメ君、今日が土曜の日だよ」

「ああ言われてみればそうだな」

「……うん、確かに其の日」

「大迷宮クリアしましたね」

「と言っても大迷宮をクリアした後が強烈だったもんな」

「姉さんの言う通りですね」

「と言う事は……」

「洋食のねこやの日だね」

「楽しみです」

「ワン」

「バウ」

「右に同じく」

「私は料理の研究が目的ね」

と会話して居ると

「ねえちよつと良い？」

話が付いて来れなかった人達が雫を代表して

「うん？」

雫ちゃん何？」

「その……土曜の日や洋食のねこやとか何なの？」

「そう言えば雫ちゃんは知らないもんね」

洋食のねこやと言うのは……」

「香織、説明するより実際見た方が早いぞ。

ユエ、頼む」

「うん」

ユエはいつの間にか指に「テレポトウィザードリング」を指に嵌めて「ワイズドライバー」に翳す

『レポート ナウ』

家の中にワイズマンの魔法陣が現れる

「其れから……」

ハジメは隣の部屋に移動して

「パパと食事に行くの」

「楽しみですねフフフ」

ミュウとレミアが来た。

ミュウがワイズマンの魔法陣を見て

「パパ、此れを潜れば良いの?」

「ああ、此れを潜れば一瞬でパパの行きつけの店に辿り着くぞ」

私達は其々のタイミングでワイズマンの魔法陣を潜りオスカー・オルクスの隠れ家に辿り着く

雫が

「此処は?」

「オルクス大迷宮の最深部のオスカー・オルクスの隠れ家」

「「「なあ!?!」」」

雫達は驚いて

「其れ本当なの!?!」

「本当だよ。」

雫ちゃん」

香織がそう答えて

「会長其れだと大事件ですよ」

「此れ発表したら歴史が動きますよ」

鷹音と刷庫が剣幕で話しかけて来た。

私は冷静に

「そうだね。」

「だけどまだその時じゃないの」

「え、どうしてですか」

ルーズが質問する

「教会」

「「「あ!」」」

四人は私が言った意味が分かった。

何せ昨日の夜に世界の真実を言っているのでもし発表した後の流

れが分かって居た。

「大体流れが分かって居るなら説明はしないよ。

其れよりもあそこに私達の目的がある」

私はとある場所を指さす其れを見た雫達は

「……扉？」

「あれって会長が立てました？」

「違うよ」

「其れじゃあ誰が立てたんですか？」

「さああんまり分かって居ないけど扉自身だと思う」

「扉自身？」

「兎に角入るぞ」

ハジメは洋食のねこやの扉を

「チリンチリン」

開いて入る

其れに続いて皆は居る

私と香織は

「雫ちゃん行こうか」

香織は雫の手を握って

「行けば分かるよ」

私はそう言つて皆にそう言つて誘導して扉の中に入る

「いらつしやいませ。」

開いて居る席に座つて下さい」

アレツタは私達にそう言つて其々開いて居る席に座る。

「「「「……」」」」

雫、鷹音、刷庫、ルーズ、レミア、ティオは情報の量で思考が停止状態になる

ミュウは

「パパ、此処何処なの？」

異世界食堂の中でも平常運転して居て

「此処は俺が今まで食べた中で一番美味しい店だぞ」

とミュウと楽しくしている

「……」

まだ思考が停止状態から治って居ない雫達に

「雫ちゃん！」

私の呼びかけ

「ハア！」

我が戻って

「翼愛と香織！、此処ってどこなの!？」

すごい剣幕で詰めかけて来た

「兎に角落ち着いて！」

取り敢えず席に着いて」

「あ！」

そうね」

雫達も席に座る。

レミア、ティオはハジメ達の席に座る

「其れで此処って何処なの？」

見た感じ日本の感じがするけど」

「此処は洋食のねこや、実際日本にある洋食亭

詳しい原理は私達でも分からないけどあの扉は土曜日の日だけ異

世界に繋がる扉になるの」

「へえーそうなんですか」

「ちよつと待っててください!？」

其れなら……」

「ハア！」

此処を経由すれば元の世界に戻れる!？」

雫はそう言うが

「其れは無理、クラスメイトは異世界召喚されたじゃん

周りの人達は確実性のある神隠し事件として残ると思うよ」

「確かに残るはず」

「で実際此処の店長に東京の××市の○○高校のクラス一斉が行方不明
事件を聞いたんだけど事件も知らなければ××市の○○高校も知らな
いだから実質別世界の日本に繋がって居るの」

「このお方は龍の中の龍、いや龍神じゃあ

このお方の前ではあのクソ神のエヒトでも一撃で屠る実力を持つて居るのじゃ。

正しく神じゃ」

このメンバーの中で一番寿命が長いティオの言葉は何故か説得力がある。

まあ変態に落ちてしまったのが一番残念な所だ

『取り敢えず顔を上げて』

「仰せのままに」

ティオは顔を上げて

『此処は神殿じゃなくて皆で食事をする所

其れに私を崇めても何も良い事なんか無いから』

「左様でございませうか」

ティオは少し残念そうな顔をして席に座る

ハジメは

「俺達は此処で食える揚げ物全品大盛で後カレーを」

「私はお好み焼き広島焼」

「ビーフステーキ三人前お願いします」

「私はカルボナーラで」

「私はスープパスタで」

「私は日替わり定食で」

「私も同じもので」

前回洋食のねこやに來ている私達は前回と同じ私はお好み焼き広島焼、チロル、ベロ、ベルはビーフステーキ、シアと優花は日替わり定食、ユエはカルボナーラ、香織はスープパスタ、ハジメ、黒花、アテナ、雷槍、牙十郎は此処で食える揚げ物全品とカレー五人分を頼んだ

「分かりました。

カルボナーラ、スープパスタ、お好み焼きの広島焼き、日替わり定食二人分、ビーフステーキ三人分、揚げ物全品大盛とカレー五人分、です。ね。

「其れから他は？」

「取り敢えず先に大量の揚げ物を上げといて」

「あ、はい、分かりました」

「アレツタは私達から離れて」

「取り敢えず雫ちゃんはゆっくりとで良いから好きな物を選んでね」

「分かったわ」

「はい」

「ええそうさせていただきます」

「と言つてもそう言われると悩むな」

雫、刷庫、鷹音、ルーズはメニューを見ながらそう言う

私はハジメの方に聞き耳を立てる

「ミユウはお子様ランチにするの」

「其れじゃあ私はこの海鮮パエリアにしますね」

「龍神様のお勧めの料理は？」

『チキンカレー』

「妾もチキンカレーをお願いするのじゃ」

もう決まつて居るみたいだ。

私はのんびり待つて居ると

「ヒロシマヤキ、お久しぶりですね」

「数か月ぶりだな」

後ろから話しかけられて私は振り返ると

「お久しぶりですね。」

豚玉侍さんと海鮮陰陽師さん

お好み焼きの豚玉を頼む侍さんとシーフードミックスを頼む陰陽師が居た

「確かに私はよくシーフードミックスを頼みます」

「確かにその通りでござるな」

と会話して居ると

「翼愛、ちよつといいい？」

「何？」

私は雫の方に向く

「この人達は？」

「この人達はお好み焼きが好きすぎて元の世界でお好み焼きを再現しようとする人達です」

「その通りでござる」

「今は鯉節の研究して居ます」

自己紹介した

雫が代表で

「翼愛とはどういった関係で？」

言った

先に言ったのは私で

「私がお好み焼きについて教えたの」

「ええ、今まで謎だったお好み焼きが彼女のお陰で解明が出来ました」

「後は此処で食べるお好み焼きの味を似た様に出せる食材を集めるだけだ」

「今ではふの焼を広められました」

「うどんこやみそは異世界食堂に来る客人から作り方や原材料などを少々分けてもらったの」

「今では味噌やうどんこを使った料理が日夜開発されています」

「おお其れは良いですね」

「其れで大分連れが多いですね」

「確かにそうだな。」

今回は拙者は別の席で食事しよう

「ええそうですね」

侍と陰陽師は私達から離れた

「其れで決まった」

「ああ!?忘れていた」

雫達は急いでメニューを見て

「私はデミグラスハンバーグのライスセットで」

刷庫はデミグラスハンバーグを

「私はスコッチエッグをお願いします」

鷹音はスコッチエッグを

「私はかつ丼で！」

ルーズはかつ丼を

「わ、私は日替わり定食で」

雫はシアと優花と同じ日替わり定食を選んだ

私は黒の方を見ると

『畏まりました』

私だけ念話を送って来た

「耳が良い店員さんが皆の言葉を聞いて居たから注文する必要ないよ」

「へえそうなんだ！」

「と言つてもさっきティオさんが土下座した相手だよね」

「そうとも言う」

私達は待つて居ると

「お持たせました。」

揚げ物全品大盛とカレー五人分、お好み焼き広島焼、ビーフステーキ三人前、カルボナーラ、スープパスタ、お子様ランチ、海鮮パエリア、チキンカレー、デミグラスハンバーグのライスセット、スコッチエッグ、かつ丼、日替わり定食三人分です。

因みに今日の日替わり定食はコロツケです」

アレツタとが私達が頼んだワゴンに乗せて来た

其々ちゃんと席に合わせて乗せている

私達はアレツタ、ハジメ達はクロが担当するようだ

アレツタは配膳するが

「手伝います」

私達も配膳のお手伝いをする

「あ!？」

すみません」

ハジメ達の方は

「龍神様、配膳は妾が行いますので」

ティオが手伝いして居る。

そして配膳が終わって

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

私達は洋食のねこやで食事する。

雫達は久しぶりの日本食でかなり喰らいつく雫に関して

「雫ちゃん、泣く位美味しい」

泣きながら食事して居た

異世界食堂 in エリセンとその後

異世界食堂で食事を終えた私達は其々別れて行動して居た

「食った食った」

ハジメ達は食後の余韻に浸って居て

「すみません」

シア達はメニューを開きながら

「はい！」

「此れツと此れをください」

デザートの追加注文をして居た。

私は

「シャルル」

私の前に「ラブリーコミュニケーション」になって居るシャルルが現れて

「はいシャル」

「ラブリーコミュニケーション」から妖精になった

「母さんに電話をかけて」

「分かったシャル。」

所で翼愛は今回の大試練して居ないけど……」

「其れを含めて電話する」

「了解シャル」

シャルルは「ラブリーコミュニケーション」に戻って母さんのラケルに電話をかける。

暫くすると

「ラケルに掛かったシャル」

「ありがとう」

私は「ラブリーコミュニケーション」になっているシャルルを手に取り電話をかける仕草をして

『翼愛?』

「母さん、久しぶりね

『うん、電話を掛けて来たとなると又解放者の大迷宮を攻略したの』

「うんそうなんだけど。」

私はして居なんだよね」

『と言うと?』

「光輝君の改心をして居てその間にハジメ君達が大迷宮を攻略したんだよ」

『其れじゃあ翼愛の分の特典は……』

「其れから今回攻略した大迷宮の近くにあった国が病気が蔓延していて香織ちゃんが其れを対処して居たから、香織ちゃんの分の特典も抜いて居おいて」

『分かったわ。』

其れで新しく加わった子達居るのかしら?』

「ちよつと待つててね」

私は一回「ラブリーコミュニケーション」一回顔をから離して

「ティオ！」

一回こつちに來て」

私はティオを呼びつけて

「なんじゃあ?」

ティオがこつちに來た

私は「ラブリーコミュニケーション」に顔を付けて

「新しい新人を紹介するね」

私は「ラブリーコミュニケーション」を机に置いてスピーカーをオンにした『えつと、初めの人は初めまして。』

私は鞆波・A・翼愛と鞆波・A・黒花の母親の蒼青の勇者、鞆波・

A・氷水よ』

「会長のお母さん久しぶりです」

「何時も会長にお世話になって居ます」

「現在でもお世話になって居ます」

「と言うかあの時翼愛が言った事は本当だったんだ」

雫、刷庫、鷹音、ルーズは其々答える

私はティオの方を見て

「妾か

この小箱に話しかければ良いのじやの」

ティオは「ラブリーコミュニケーション」に近づいて

「妾の名はティオ・クラルス。」

この世界の時間で五百年前に存在した竜人族——クラルス族の一人じゃ

今はご主人様のハジメ殿とヨクアイと一緒に旅にご同行して居る

一人のじゃ」

『そう

それでギフトを送りたいの何が良いかしら?』

「私は刀ですね」

「私は魔導書主体の魔法使いなので魔導書を」

「私は二丁拳銃が良いです」

「私はクレセントローズの様な可変機構搭載して居る鎌が良い」

「妾は龍をモチーフにした力がいいんじゃないが」

『そう、分かったわ準備しておくわ』

「後で写真を送るから」

『そう、楽しみにして居るわ』

私は電話を切ってハジメの元に行く。

「ハジメ君」

「うん?なんだ」

「さつき母さんに電話して雫ちゃん達の分を追加発注したから少し遅れるみたいで、だからグリユーエン大火山を攻略したメンバーで記念撮影したんだけどいいかな?」

「俺は別に構わないが流石に此処で記念撮影するのは気が引けるぞ」

「そうね。」

出た後に記念撮影して一週間後に又此処に来て送れば良いよね」

「そうだな。」

現にミュウが此処を気に入っただけだからな」

ハジメはミュウの方を見て

「ミュウ、此処気に入ったか?」

ミュウはお子様フォークを高く上げて

「はいなのー!」

と答える。

「取り敢えずシアの様にスイーツを頼んで母さんから連絡が来るまで待って居た方が良いよ」

「そうさせてもらうわ」

私は自分の席に座ってメニュー表を開いて

「すみません！」

「はい、今行きます」

アレツタがこっちに来て

「ショートケーキをお願いします。

皆は」

私がそう言うのと

「私は会長と同じ物を」

ルーズは私と同じショートケーキを頼んで

「私はコーヒージェリー」

「私も同じものをお願いします」

鷹音と刷庫はコーヒージェリーを頼んだ。

「えっと」

雫は悩んでいたが

「プリンをお願いします」

「はいショートケーキが二つ、コーヒージェリーが二つ、プリンが一つで

宜しいでしょうか」

「はい」

アレツタは私達から離れる。

私はハジメ達の方を見るとクロが対応して居た。

私は再度

「シャルル、もう一回母さんに電話をかけて」

「構わないシャル」

シャルルはもう一度電話をかけて

「掛かったシャル」

「ありがとう」

『翼愛再度電話を掛けて来て如何したの?』

「その記念撮影の件だけど一週間待つて欲しいな。

流石に店の中で記念撮影は気が引けるから」

『そうゆう事なら分かったわ。』

先に特典を送るから一週間後にちゃんと記念撮影した写真を送りなさい』

「分かった」

と電話を切った。

そして頼んだ物が来るまで待つて

「お待たせしました。」

ショートケーキ、二つにコーヒーゼリー、二つとプリンが一つです」
カットされたショートケーキが二つにミニパフェグラス盛りつけられたコーヒーゼリーとプリンが運ばれて出された。

其々カトラリーを手に取り食事をする。

鷹音と刷庫はコーヒーゼリーにミルクを掛けてからコーヒーゼリーを崩しながら食べる

雫はミニパフェグラスに乗って居るプリンを

「プリン」

振るわせてその様子を眺めていた

ルーズはもうショートケーキ食べ終わって居て

「薔薇の紅茶有りますか？」

薔薇を使った紅茶を頼んで居た

私はショートケーキのテッパンに乗って居る苺をフォークで突き刺して其のまま食べる。

苺が口に残っている間にハジメ達の方を見る

ユエ、黒花、シア、香織、ティオ、レミアの女性陣はケーキスタンドと紅茶で女子会になって居た。

ハジメはミユウと一緒にケーキを食べて居た

優花と牙十郎は

「はいあ〜ん」

デートして居る恋人が必ずやりそうな事をやって居た。

アテナと雷槍も

「雷槍あーん」

とやって居たが

「姉さん恥ずかしから辞めて」

雷槍は恥ずかしを理由に断って居た。

私も

「すみません」

『はい何でしょうか?』

クロが来た。

「アップルティーを下さい」

『畏まりました』

クロは厨房に向かった。

私は待つている間にケーキを食べる。

そう言えば異世界食堂の洋食のねこやのケーキ類はねこやビル一階のケーキショップ、フライングパイプで作られている筈、まあパンはベーカリーキムラから仕入れているみたいだしパンもケーキを作って居たら重労働になつて居るからな

と私はそう思いながらショートケーキをフォークで切つて口に運ぶ。

そしてショートケーキを食べ終わった直後に

『お待たせしました。』

アップルティーです』

アップルティーが入って居るティポッドとティーカップが置かれた。

私はティーポッドを持ってティーカップにアップルティーを入れて一回ティーポッドを置いてシュガー スティックスを一本取つて其のまま蓋を開けアップルティーに入れてスプーンでかき混ぜてから飲む。

母さんから電話が来るまでのんびりと待つ、勿論ねこやに迷惑にならないように

く十分後く

洋食のねこやに入店してから十分が経った。

時々追加注文するがそろそろお腹がいっぱいになるので私は立ち上がってハジメの元に行き

「ハジメ君、そろそろ洋食のねこやから出ない？」

「……そうだなもうお腹いっぱいになったからな」

「支払いは私が行っておくから」

ハジメは椅子から立ち上がり

「頼んだ。」

「支払いは翼愛に任せて皆出るぞ」

そう言つて出口に向かう

私は「ラブリーコミュニケーション」になって居るシャルル

「御免、シャルル、鬱陶しいかもしれないけどまたラケルに電話を掛けて」

「しようがないシャルね。」

まあやっておくシャル」

シャルルは電話を掛ける。

暫くして

「繋がったシャルよ」

「ありがとう」

私は耳に近付けて

「母さん何度も電話を掛けてごめんなさい」

『別に構わないわ』

「其れでそろそろねこやから出ようと思つて後はオスカーの隠れ家で待つつもり」

『そう、分かったわ』

「ねこやから出るから通話は出来なくなるから」

『ええ分かったわ』

「其れじゃあ電話を切るね」

私は電話を切つてレジカウンターに向かい

「すみません会計をお願いします」

「はい、少し待つて下さいね」

ねこやの店長が来て値段を提示してくれた。

私はメンチカツが課金してくれたお金をお釣りが出ないようにピツタリと出して

「お願いします」

「ええ確かに受け取りました」

私は洋食のねこやの出入り口を出る。

扉が閉まった瞬間扉が消えた。

「おい翼愛」

ハジメに呼ばれて

「取り敢えず此処で待てば特典が来るんだよな」

「まあそうなるね。」

多分母さんが今雫達の奴を選んでいる筈だから」

「そうかい、なら来るまで待たせてもらうか」

私達は母さんの贈り物が来るまでオスカーの隠れ家で待つ

〜一時間〜

「なあ翼愛」

「何？」

ハジメ君」

「俺達此処で待つて大体一時間が経つんだが」

「そうだね」

「何時まで待つ必要が有るんだ？」

「さあ今取り寄せているんじゃないの？」

「そもそも何処から取り寄せているんだ？」

「さあただ母さんがカエサル？と言う神様と友達でその人から特典を

貰って居るんだって」

「俺達転生者じゃないのにそんな事をして大丈夫なのか」

「一応母さん邪神殺しの必要経費で落としてくれるみたいだよ」

「サイですか」

とハジメと会話して居ると私達の前に

「ポトンッ！」

段ボール箱が落ちて来た

「如何やら来たようだな」

「そうだね。」

ハジメ君は皆を呼んでおいて」

「はいよ」

ハジメは皆を呼ぶ為に立ち上がり私は立ち上がってハジメの反対方向の段ボールに向かい

慣れた手つきで「音銃剣鈴音」を取り出して段ボールのガムテープを切て段ボールの中を開く

中には確かに様々な物が入って居た。

私は丁寧に段ボールから取り出して並べて並べ終わると

「翼愛、全員集めておいたぞ」

ハジメが皆を集めてくれた

「あ、其れって今回の大試練クリアの特典ですよね」

「そうだね。」

勿論雫達の間もあるよ」

私は雫達の分を見せる

「其れで誰から始める？」

因みに私と香織は大試練のして居ないから無いから」

「うん分かって居る」

私は皆の方を向いて

「其れじゃあ始めようか

特典の確認を」

私はそう言うと皆は身構える

ギフトの整理整頓

私は今回も送ってくれたものを皆の前に並べて

「其れじゃあ始めようか」

私はそう言うど皆は身構える。

「そんなに身構えなくても良いよ」

そう言った私は段ボールに使用して居るテープを〔音銃剣鈴音〕を使用して斬る。

「翼愛、毎回言うけどな。

聖剣で段ボールに使用して居るテープを切るな。

刃物は俺が作るぞ」

「御免丁度良い刃物だから

ちゃんと手入れはして居るよ」

「兎に角次回から此れを使い」

ハジメがカッターナイフを私に投げた。

「此れって?」

「俺がこの世界の素材で使ったカッターナイフだ

刃物に使用して居る素材は勿論アザンチウム鉱石を使用して居る」

「武器としても使えるね」

「ああ」

私は懐にカッターナイフを仕舞って

「取り敢えず配るよ。

因みに私と香織ちゃんの分は無いから」

「確か私達はグリユイエル大火山を攻略して居ないから」

「そうそう」

「うん、分かった」

「其れじゃあ始めようか」

私は段ボールから取り出した物を手に取り付箋が張って居て其処に書いていた名前を呼ぶ

「最初に黒花」

「はい分かりました」

黒花が前に出て

「これが黒花のギフト」

黒花のギフトである「キャリア・ターセルのデバイス」を投げて

「有り難うございます」

黒花は受け取る

「其れは「キャリア・ターセルのデバイス」

オタクであるハジメが答える

「と言うと魔法少女リリカルなのはの登場人物ですか」

「ああ其れもゲストキャラクターに関わらずながら妙に気合の入ったキラキラなセットアップシーンにエンドカードへの出演と中々の好待遇持ちの上に最終回にも登場している。

ネームドキャラクターだ」

「成程」

「早速デバイスの軌道を行おう」

「はい」

黒花は「キャリア・ターセルのデバイス」を操作すると「キャリア・ターセルのデバイス」が起動して

《font:ul20》—『How do you do. I do n't have my name, so bas 《初めまして。私の名前は無いので基本私の名前》—ically my name is. [Carrier Tercel's device].』《は「キャリア・ターセルのデバイス」になります》《font》

「其れなら私が名前を付けても」

《font:ul20》『It was in awe. 《font》 『yes, it doesn't matter』《font》 「ならイエローキャットで」

《font:ul20》『It was in awe. 《font》 『Change the device name from [Carrier Tercel's Device] to [Yellow Cat].』

「其れじゃあ変身してみようか」

《font:ul20》『Yes』《/font》

「イエローキャット」セットアップ！」

《font:ul20》『setアップ』《/font》

「イエローキャット」の両方から羽の様な装飾が出て来た

そのまま着て居る衣服は変わって行き最終的に「キャリー・ターセルのバリアジャケット」になって居た

「此れが「バリアジャケット」ですか」

「そうなるわね。」

因みにキャリー・ターセルはパワー・スピード・テクニクの三拍子が揃っている。

かなりの強者なんだけど」

「その……リンネ・ベルリネツタの囁ませ犬で此れツといった活躍が無いんだよな」

「其のお陰であだ名が8位の人と呼ばれて居るんだよね」

「そうそう」

「でも決して弱くないですよね」

「そうなんだけど」

「なら構いません」

「なら次行こうか」

私は次の物を手に取り付箋を読み

「次アテナ」

「あたしの番か」

アテナが一步前に出て私は其れを差し出した

「そんで此れは確か仮面ライダーギヤレンの変身アイテムの……」

「「ギヤレンバツクル」だな」

ハジメが変わりに答える

「取り敢えず動作確認する必要があるから」

私は「チェンジスタッグ」を差し出す。

「サンキュー」

アテナは「チェンジスタッグ」を手取る

「それで「ギャレンバックル」には差し込み口があるから其処に「チェンジスタッグ」差し込め」

「此処か」

ハジメの言う通りに「チェンジスタッグ」を「ギャレンバックル」の「カードスロット」に差し込む。

「で此れを腰に付ければ勝手にベルトが出て来てその後に変身と言って「ギャレンバックル」のハンドルを引っ張れば変身できるぞ」

「おう、ハジメ説明ありがとうな」

とアテナは「ギャレンバックル」を腰に付けるとベルトが掃除機のコードの巻き戻しを逆にしたように一気に飛び出して腰に装着されて

「変身！」

言った後に「ターンアップハンドル」を引っ張る。

『Turn Up』

「ギャレンバックル」の「カードスロット」からダイヤのマークに変わリアテナの前方にオリハルコンプラチナと呼ばれる特殊金属を原子分解した物質で満たされた「オリハルコン・エレメント」と呼ばれるエネルギースクリーンが放出さ、そのままアテナに向かって行きアテナの身体を通過して仮面ライダーギャレンになった。

「此れが仮面ライダーギャレンか」

「毎回思うか必ず本物だな」

ハジメはそう言いながら仮面ライダーギャレンに変身して居るアテナの腰に有る「アームズマウント」から「醒銃ギャレンラウザー」から引っこ抜いて「オープントレイ」を展開する。

「ダイヤの「ラウズカード」は全てそろって居るな」

と言った後に「オープントレイ」を戻して

「戻しておくぞ」

「醒銃ギャレンラウザー」を「アームズマウント」に戻す

「確認も出来たから次に行こうか」

私は手に取り付箋を読む

「雷槍」

「はい！」

アテナとすれ違う様に雷槍が前に出て

「これが母さんの贈り物」

私は手にした者を差し出す

「眼鏡ケース？」

雷槍はそう言いながら受け取り眼鏡ケースのジッパーを開けて雷槍、私、ハジメはその中を覗く

「眼鏡ですね」

「眼鏡ケースだから眼鏡を入れるのは当たり前だよ」

私と雷槍はそう言うが

「ちよつと良いか」

ハジメがそう言つて眼鏡を取り見渡して

「この眼鏡ペルソナ4の主人公の眼鏡だわ」

「え!？」

本当」

私もハジメが持つて居る眼鏡を見る

確かにフレームは黒セルのレンズタイプはスクエア

「確かにハジメ君の言う通りにペルソナ4の主人公の眼鏡だね。

取り敢えず掛けて見て」

「あ、はい」

雷槍はペルソナ4の主人公の眼鏡をかけると雷槍が突然周りを見渡した。

「どうかしたか？」

アテナが心配する

「いや誰かに呼ばれた気がして…」

「取り敢えずペルソナを呼んでみようか」

「よ、呼ぶって…」

と雷槍が言いかけている途中で自分から言いかけて
「本当に如何したん…だ…」

雷槍の斜め上から一枚のカードが落ちて来た。

カードには愚者のイラストが描かれていた。

雷槍は思わずそれに手を伸ばして

「ペ」

そう言った瞬間に雷槍の周りに青白い光のサークルが現れて更にカードの裏面と同じ模様が浮かび上がった

「ル」

二言目で光のサークルが突風吹き荒れる

「ソ」

今度はカードから青い炎が出て

「ナ」

最後にカードを握りつぶすとさつきよりも突風は強く吹き荒れた

そして雷槍の背後に外見は黒い長ランに白ハチマキを締め、長得物を携えたまさに番長に相応しい巨人が現れた。

「ハジメ君此れは」

「ああ間違いないねえ」

主人公の眼鏡が入って居たからまさかと思っていたがマジで出すとは思わなかったな

「ええそうね」

私がそう言うのと

「翼愛先輩、ハジメ先輩、此れの正体知って居るんですか」

「ああもちろんだ」

名前はある程度作品ごとに変わるが決まった名があるならこの名だな

「ペルソナ4の主人公である鳴上悠使うペルソナ」

「「イザナギ！」だ！」

見事にハジメとハモって

「翼愛ちゃん、なんかハジメ君と仲良いね」

「うん」

香織とユエに白い目で見られた

「た、偶々だよ」

「っ、次行こうか」

「あ、そうだな」

「あ、話題逸らした」

私は無理矢理話題を変える為に近くにあつた物、基、箱を手にとって付箋を見る。

「ハジメ君」

「ああ俺の番か」

ハジメが前に出て私から箱を受け取り箱を開けると銃のパーツが入って居た。

香織とユエは覗き込んで

「ハジメ君の贈り物は銃？」

「でもハジメはもう持って居る」

と言う。

ハジメは無言で箱に入って居る銃を組み立てて完成させる

ハジメは其れを持って構える

香織は其の銃を見て

「あーハジメ君其の銃って」

「ああ香織が想像した通りだ

まさか俺が「浪漫砲台パンプキン」を手に入れる時が来るとは」

その状態から「浪漫砲台パンプキン」の引き金を引いた

すると「浪漫砲台パンプキン」の銃口から少し太めの光線が飛び出してオルクス大迷宮の解放者の住処の岩壁に当たった。

「間違いなく本物だな」

「そうね。」

次行つていいよね？」

「ああ構わない」

と言つてハジメはウキウキの足取りで私から離れた

私は次に鎖で物理的にロックされている本を手に取り付箋を見て

「ユエ」

と呼んで

「うん」

ユエは私に近づいて私は本を差し出してユエは其れを手を取った瞬間、本が浮いて更にオーラを発して

「——ドクン、ドクン」

本から心臓の鼓動に発して其処から一気に

「……………バキィィン!!」

本を物理的にロックしていた鎖が砕けて開いて

《f o n t : u 1 2 0》
『I c h e n t f e r n e i n e V e r s i e g e l u n g . . . : A n f
シ ー ラ ン ト を 除 去 し ま す . . . 開
《/font》

そして本から赤、紫、緑、灰色それから銀色の光の弾が現れてユエの前に停まって人型になり

「…闇の書の起動を確認しました。」

「!？」

「我等、夜天の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士にございます」

「夜天の主に集いし雲…」

「ヴォルケンリッター」

リーダー格のポニーテールの女性に、金髪の大人の女性、犬耳付いた筋肉質の男性、赤毛の少女、更にロングヘアの白髪の女性が居た

「さあご命令を」

五人はそう言う

肝心なユエは宙に浮いていた本を手に取り

「…ちよつと待て」

待機命令の様な感じになったけど

「…「はあー…」」

五人は大人しく待機する

その間にユエはハジメの方に行き

「ハジメ」

「うん？」

どうかしたのかユエ？」

ユエは手に持って居た本を始めに見せて

「さっきこの本に触れた瞬間なんか起きて人が出て来た」

ハジメはその本を見て

「ああその本は魔法少女リリカルなのはに出て来る「闇の書」…いや

「夜天の書」か？」

ハジメは五人の方に行き

「ああ其の五人に聞きたいんだが」

「はい何でしょうか？」

「お前達はこの本から出て来たんだよな」

「ええじゃあ聞くけどこの本は「闇の書」か？」

其れとも「夜天の書」か？」

ロングヘアの白髪の女性

「夜天の書」そうか。

そうだろうなお前が此処に居るからけして「闇の書」ではないな

「夜天の書」総合管理者のリインフォース・アインスで合っているか？」

「ええ会って居ます」

「それでハジメはこっちの四人は何者？」

「ああ、聞くけどさつき登場した時ユエに自分達が何者か説明したか？」

今度はリーダー格のポニーテールの女性が

「ええ説明しました」

「そうか、本人が混乱しているから信用できる俺が説明して良いか」

ハジメがそう言つて四人をお互いの顔を見てからユエを見てから

「本人が納得する形なら構いません」

「そうか」

ハジメはユエにヴォルケンリッター、リインフォース・アインスや

「夜天の書」の説明して

一通りの説明を聞いたユエは

ヴォルケンリッターとリインフォース・アインスに近づいて

「私の名前はユエ、此れから宜しく」

「ハア仰せのままに」

特典確認 中編

ユエが夜天の書のヴォルケンリッター達とコミニケーションを取って居る間に私は新たな物を手に取り付箋には優花の名前が書いてあった。

「次は優花ちゃん」

「私の番ね」

優花は前に出る。

私は手にして居る物を差し出す

「此れはブーメラン？」

「うん、シャングリ・ラの主人公の北条國子の巨大なブーメランだよ」

「知らない作品ね」

「知らないのは無理もないよ」

何せ2008年に漫画化、2009年にTVアニメ化されたからね」

「わく相当古いわね。」

物語の内容はハジメから聞くは其れで此れは？」

「さっきも言ったけど此れはシャングリ・ラの主人公の北条國子が使って居た、巨大なブーメラン。」

素材はカーボンナノチューブ製だから戦車の装甲をも切り裂くけど強度が心配ならハジメ君に頼むことをお勧めするよ」

「そうさせてもらうは」

優花は私から離れた

私は次に近くに有った箱を取り付箋にはチロルの名前が書かれて居た

「次はチロル！」

「あ、はっはい」

チロルが前に出て

「はいコレ」

箱を差し出す

「有り難うございます」

チロルは私から箱を受け取り箱を開ける

「えつと此れは……なんですか」

チロルは箱の中身を私に見せた。

箱に入って居たのは黒いスライム？が入って居た。

「えつとね……」

私は記憶を手探りで探すとこれと似た物を思い出す。

「試しに其れに魔力を流してみて」

「あ、はい」

チロルは恐る恐るスライム？に魔力を流すと

「!?!」

スライム？は突然動き出してチロルの身体に纏わり付く

「え、え？」

「ワン！」

チロルは戸惑ってしまい反応が遅れて、ベロとベルは直ぐにスライム？からチロルの身体を守る為に噛みつくが流体であるスライム？効果が無く徐々にチロルの身体に纏わり付き更に

「ワン!?!」

ベロとベルまで纏わり付き行き全身が纏わり付くと今度はチロルの身体のラインに沿って行き、最終的にチロルの服装が変わって居た。

「!?!」

チロル、ベロ、ベルは姿が変わって居る事に驚いた。

「此れは何ですか!?!」

「思ってた通りだ。」

其れは陰の実力者になりたくて！に登場する組織シャドウガーデンの戦闘服のスライムスーツ」

「スライムスーツ……?」

「この世界だとスライムの事をバチエラムと言うから言い換えるならバチエラムスーツね」

「其れは分かりませんが如何してバチエラムが私の衣服になるんですか？」

「そのバチエラムはもう死んでいるから残って居るのは自由自在に変化する機能しかないの」

「そうなんですか」

「上手く動かすのは使い手次第だから上手く使いこなせるように頑張ってるね」

「あ、はい頑張ります」

チロルは下がる

私は下を見て近くにある箱を取り付箋にはシアの名前が書いてあった

「次はシア」

「私の番ですね」

シアは前に出て私は箱を受け取り箱を開ける

「これはハジメさん達が使ってる物と同じ物ですか？」

シアは箱の中身を見せて来て私は其れを見る。

中に入って居たのは「デザイアドライバー」、「仮面ライダーシーカーのライダーコアID」、「パワードビルダーバツクル」、「ギガントコンテナバツクル」が入って居た

「そうだね。」

私達が使ってる仮面ライダーの変身アイテムだね」

「ふふ、これでハジメさんとお揃いになりました」

シアは両手で万歳して喜んでいた

「其れじゃあ変身の仕方を説明するね」

「あ、はい」

「お願いします」

「それじゃあ早速「デザイアドライバー」を腰に装着して」

「分かりましたです」

シアは箱を地面に置いて「デザイアドライバー」、「仮面ライダーシーカーのライダーコアID」を手に取り「デザイアドライバー」を腰に付けると自動で「ライドルライン」が伸びて腰に装着する

「次に変身と言って「デザイアドライバー」の中央の窪みに「仮面ライダーシーカーのライダーコアID」を差し込んで」

「分かりました。」

変身！」

シアは変身と言って「デザイアドライバー」の中央の窪み、へパーフェクターコアに「仮面ライダーシーカーのライダーコアID」を差し込んで

『ENTRY』

するとベルトから装置が現れて上下に別れてシアは仮面ライダーシーカーになった

「それが仮面ライダーシーカーだよ」

「シーカー……鹿！」

「この仮面ライダーのモチーフって鹿ですか」

「そう、鹿だよ」

「兎がモチーフの仮面ライダーは？」

「あるけど今シアが使ってる仮面ライダーシリーズには無いね」

「そんな……」

シアは分かりやすくガツカリする。

「まあこのバックルを使えばガツカリなんて吹き飛ばよ」

「そうなんですか」

私は地面に置かれている箱から「パワードビルダーバックル」と「ギガントコンテナバックル」を取り出してシアに差し出す。

「ヨクアイさんがそう言うならそうなんですね」

シアは受け取り

「パワードビルダーバックル」を「デザイアドライバー」の右側にと「ギガントコンテナバックル」は左側にセットして」

「はい分かりました」

シアは「パワードビルダーバックル」と「ギガントコンテナバックル」を「デザイアドライバー」の左右のへホップアップアセンブルにセットするとPOWERED BUILDERとGIGANTIC ONTAINERが現れる。

『SET WARNING』

右手でパワードビルダーバックルのレバーを押し込んだ。

するとシアの後ろに変身エフェクトだ出て来て“Safety first?”と書かれた赤い帯上のグラフィックがシアの前に現れると同時に黄色と黒の警戒色で構成された巨大な建物がシアの後ろに建築されて行き。

『WOULD YOU LIKE A CUSTOM SELECT ION』

その後シアの後ろからの黄色のアームが2つ伸びてきてそれぞれのロゴに被さりスクリーンしてロゴをアーマーへと変化させる。

そのままシアにアーマーの装着した

「これが仮面ライダーシーカー パワードビルダーフォームだよ」

「確かに私好みのデザインですが

ですがハンマーは有るんですか？」

「勿論「ギガントコンテナバツクル」に青い色のハンマーが有るでしょ」

私がそう言うときシアは「ギガントコンテナバツクル」を見て

「えっとこれですか？」

「ギガントハンマーバツクル」を手に取る。

「そう、それ

其れを「パワードビルダーバツクル」の窪みにセットして」

「はい」

シアは私の言う通りに「パワードビルダーバツクル」の窪みにセットしてレバーを操作する。

『GIGANT HAMMER』

シアの左足のコンテナが開いて其処からハンマーが出て来てシアはキャッチした

「確かにハンマーは出ましたがドリユッケンより小さいんですが」

「壊すなら小さいけど試しに地面に振るってみて」

「？」

分かりました」

シアは両手で持って大きく振り被って地面に振りかざした瞬間シアの目の前に地面から壁が生えて来た

「え!？」

「此れなんですか?」

シアは壁を指さしながら言う

「(パワードビルダーバツクル)には破壊、再生、創造の三拍子が揃って居るだ」

「な、成程」

「詳しい話はハジメに聞くことが良い」

「分かりました」

シアはハジメに向かって走り出した。

私は次に何をするか選んで居ると一際大きい箱が二つあったので小さい方の箱を取り付箋を見ると牙十郎が書かれて居た。

「次は牙十郎君の出番」

「分かりました会長」

牙十郎は前に来て私は箱を開けて差し出すとメカメカしい蠍が牙十郎の肩に乗った。

「会長、此れは?」

「此れは仮面ライダーサソードの変身アイテムの(サソードゼクター)だね。

となると入って居るのは……」

私は箱に手を入れて取り出すと

「やっぱり(サソードヤイバー)だったね」

「サソードヤイバー」が出て来て

「はい」

私は「サソードヤイバー」を渡す

「其れで使い方の説明するね」

「お願いします」

「変身と言った後に(サソードゼクター)を(サソードヤイバー)にセットする」

「其れだけですか?」

「うん、其れだけ」

「兎に角変身して」

「分かりました

変身！」

と私が言われるがまま変身と言った後に「サソードゼクター」を「サソードヤイバー」にセットした

『HEN—SHIN』

仮面ライダーサソード マスクドフォームになった。

「其れが仮面ライダーサソード マスクドフォームだよ」

「確かに仮面ライダーですが」

俺の戦闘スタイルに微妙にズレている気がするんですが」

「其れは大丈夫「サソードゼクター」の尾を押しした後にはキャストオフと言って」

「はい」

牙十郎は「サソードゼクター」の尾を押しすと仮面ライダーサソードのマスクドフォームのアーマーが一部外れて

「えっと、キャストオフ！」

そう言った瞬間

『CAST OFF』

仮面ライダーサソードのマスクドフォームのアーマー凄いい勢いで弾き飛び、私目掛けて飛んで来たアーマーは裏拳で弾き飛ばす。

その間にも

『CHANGE SCORPION』

仮面ライダーサソード ライダーフォームになった。

「其れが仮面ライダーサソード ライダーフォーム

要望通りスピードタイプだよ」

「確かに俺の戦闘スタイル会って居ます」

「少し動かしの方が良いよ

もう貰って居る人達は勝手に模擬戦を始めたから」

「ええ俺も行ってきました」

牙十郎は私から離れた

次の物を手に取り付箋を見る

付箋には印庫の名前が刻まれて居た。

「次、刷庫ちゃん！」

「あ、はい」

少し緊張した刷庫が私の下に来て私は無言で差し出して其れを見て

「あの、会長、間違えて居ませんか？」

「その……付箋に刷庫ちゃんの名前が書かれて居て……」

「だからと言って何で私の特典がラスボスの一歩前のボスが使ってた仮面ライダーソロモンの変身アイテムなんですか!？」

「知らないよ。」

文句は母さんに言って。

取り敢えず変身して」

「わ、分かりました」

刷庫は仮面ライダーソロモンの「オムニフォースワンダーライドブック」、「ドゥームズドライブバツクル」を手に取り「ドゥームズドライブバツクル」を腰に装着する

「説明は要らないね」

「はい私見て居ましたので変身の仕方は知って居ます」

次に「オムニフォースワンダーライドブック」を手に取りページを開く

『オムニフォース 伝説の聖剣と、選ばれし本が交わる時、偉大な力を解き放つ!』

「オムニフォースワンダーライドブック」を閉じて「ドゥームズドライブバツクル」にセットすると音楽が響き

「ドゥームズドライブバツクル」のボタンを押して「オムニフォースワンダーライドブック」が開くと同時に刷庫の後ろに巨大な「オムニフォースワンダーライドブック」が現れて開くと赤茶色の煙が出て来て

「へ、変身!」

金色の粒子が出て来て

『OPEN THE OMNIBUS FORCE OF THE
GOD!』

KAMEN RIDER SOLOMON!

仮面ライダーソロモンに変身して

『FEAR IS COMING SOON!』

右手には「カラドボルグ」を持って居た。

そして刷庫は自分の姿を見て

「やっぱり変身して居るんじゃないですか!!」

と刷庫の絶叫がオルクス大迷宮の隠れ家に鳴り響く

特典確認 後編

仮面ライダーソロモンに変身した刷庫は現在、ソロモンの状態で体
育座りをする。

「はあく何で私がラスボスの一步手前のボスが使って居た変身アイテ
ムが送られるんですか」

「だから知らないよ。」

多分刷庫ちゃんは普段から物語を書いたり本にしたりいろいろ
やって居るんじゃないかな

だから母さんも其れを見越して刷庫ちゃんに其れを渡したんじゃない
かな

「だとしてももう少しましな奴にして下さい」

「私に言っても意味が無いんだけどね」

「兎に角皆さんに八つ当たりしておきます」

刷庫は勝手に模擬戦して居る皆の方に行く

「刷庫ちゃん、気を付けて」

私はそう叫んで次の物を手に取り付箋を見る。

付箋には鷹音の名前が書いてあったので

「次鷹音！」

「私の番ね」

鷹音は私に近づいて来たので私は

「はい」

手に持って居た物を渡す。

鷹音は受け取ると

「えっと此れはリリカルなのはの「クロスミラージュ」だよね」

「そうだね。」

私やアテナ、雷槍、黒花が使って居るリリカルなのは産のデバイス
だね」

「幾ら私がStrikerS時代のティアナ・ランスターに似ている
からって安直すぎる気がするんだけど」

「まあ選んだのは私じゃないから文句は受付しないよ」

「其れは分かつて居るわ。」

「そんでどうやって起動するの」

鷹音は「クロスミラージュ」を指で弾くと

《font:ul20》『How do you』《font》

「クロスミラージュ」から行き成りしやべりかけて来たので

「!？」

鷹音の手から滑り落ちてしまい

「!？」

鷹音は「クロスミラージュ」を落とさないように両手を我武者羅に動かす。

私達から見ればジャグリングの様に思えてしまう。

暫くすると

「あ」

右手に触れた瞬間に「クロスミラージュ」を高く打ち上げてしまい

「ほいっと」

私は高くジャンプして高く打ち上げられた「クロスミラージュ」をキャッチして上手く着地して

「はいコレ」

私は再度鷹音に「クロスミラージュ」差し出す。

「……有り難うございます」

間を置いてから鷹音は「クロスミラージュ」を受け取る。

「えっとさつきは驚いて手から落として御免」

《font:ul20》『No, don't』《font》

《font:ul20》『There is a person who spoke』

There is also this person who spoke

《font》

「其れじゃあデバイスの管理設定を行いたいんだけど」

《font:ul20》『Yes, aware』《font》

《font:ul20》『Now, let's declare the transformation』

Now, let's declare the transformation

《font》

「変身コール!？」

えつと……リリカルなのはアレ？」

《font:ul20》『Yes, that,』《font》

「分かった……」《クロスミラージュ》セツトアップ」

《font:ul20》『set up』《font》

すると鷹音の衣服は分解されて魔力からバリアジャケットが生成される。

「クロスミラージュ」も待機状態のカード形態から活動モードの拳銃形態に変わってリリカルなのはStrikerS時代のティアナ・ランスターのバリアジャケットの姿になった。

「まさかと思っていたけど此処まで同じ姿になるなんて、どんだけ私StrikerS時代のティアナ・ランスターにそっくりなのと思うわ」

「細かい説明は実践しながら「クロスミラージュ」から直接説明を聞く方が良いよ」

「あそこに……」

私と鷹音は勝手に模擬戦をして居る方を見ると

人型形態になった無数の「カラドボルグ」達をハジメ達が其々のアイテムを使って応戦して居た。

「あそこに飛び込む勇氣あんまりないですが遠距離からやらせてもらいます」

鷹音もみんなの所に行った

私は流れるように次の物を手に取り付箋を見る。

付箋には雫の名前が書いてあったので

「次は雫ちゃん」

と言うと

「次は私なのね」

雫は前に出て

「はいコレ」

私は差し出すが雫は何躊躇う

「どうかしたの?」

「いや正直に言っただけを貰っていいのかわからなくて」と言うよ」

「正直に言っただけグリュイエル大火山では私達はある程度活躍して居ないの」

牙十郎と優花の援護で魔物を怯ませてからハジメ君から貰った武器で倒して居たの」

「成程ね。」

其れでステータスプレートは何て」

「えっとこんな感じかな」

雫はステータスプレートを差し出して、私は受け取り見て

「うん大丈夫。」

母さんのアイテムを受け取る資格は持って居るね」

「其れって如何の意味？」

「えっとね。」

此処に空間魔法が有るでしょ」

私は雫のステータスプレートのある部分を指をでなぞる

雫は私の隣に来て指でなぞった部分を見る

「確かに空間魔法って書いてあるわね」

「ハジメ君や香織ちゃんから説明を聞いて居ると思うけど此れは神代魔法で億単位の長い年月でいつ生まれるかわからない

そんで解放者は後世で自分達の意志を引き継いでくれる人の為に魂に直接に魔法を付与させる魔法陣を作成して更に試練も作った。

其れを突破して魔法陣に魔法を付与されたなら使う資格はあるよ」

「そう言ってもらえると心が軽くなったよ」

「其れじゃあ此れをどうぞ」

私は再度手に持って居る物を差し出す。

「此れは少しぶん大きいわね」

雫は受け取る

「其れはアサルトリリイの登場人物船田純が愛用して居た武器（フルンティング）だよ」

「えっと……確かヒュージと呼ばれた怪物をリリイと呼ばれる少女た

ちがCHARMを持って戦う話だっけ？」

「其れで合つて居るよ」

「なら確か使用者契約をしないといけないんだっけ？」

「そうそう其れじゃあ始めようか」

「ええ分かつたわ」

私は小箱から指輪を出して

「雫は知つて居るともうけどお浚いを含めて説明するね」

「ええうる覚えだから助かるわ」

「ある程度バツサリと切り捨てるけどアサルトリイの世界線における人類の敵はヒュージで多種多様な形態を持つて居る

ごく小型のスマール級からミドル級のもは通常の戦力で倒せるけど、ラージ級になると太刀打ちできない。

其の為、通常兵器では敵わないミドル級以上の強力なヒュージには唯一とどめを刺せる決戦兵器CHARM、因みに正式名所はCounter Huge ARMSの略称で、科学と魔法の力を結集して作り出されたマギクリスタルコアと呼ばれて其れを使ったコンピュータ制御された魔法Ⅱマギをマギクリスタルコアでコントロールされており、CHARMの起動には一定量のマギを用いねばならない。

其の為、人間のそれぞれが有するマギの総量および出力量には個人差があり、特に一度に出力可能なマギの量は0から100の数字の名称をスキラー数値と呼ばれて其れを計測される。

このスキラー数値が50以上の者がCHARM使えるユーザーであり、男性の呼び方は分からないけど女性のCHARM使用者をリイと呼ぶ。

スキラー数値50以上のCHARM使用者のほとんどが10代の女性であるため、CHARM使用者とリイはほとんど等号で結ばれるといつても過言ではない」

「な、成程」

私は小箱を開けて

「その肝心のCHARMの制御核であるマギクリスタルコアに接続する為に必要な指輪が此処に在ります」

雫に差し出す。

「これでCHARMのマジクリスタルコアと接続するんだ」

「因みにアサルトリイ登場人物の全員は人差し指じゃなくて中指に刺して居たよ」

「そうなのね。」

確かに人差し指に指輪を嵌める事は婚約指輪の意味になるわね」

雫は「フルンティング」を一度地面に置いて指輪を手に取り中指に指輪を刺した。

「次に手の掌をこのカッターナイフで切り付けて」

私はハジメから貰ったアザンチウム鉱石で出来ているカッターナイフを渡す。

「ええ分かったわ」

雫はアザンチウム鉱石製のカッターナイフを受け取り其のまま

「……！」

手のひらに切り付ける。

傷口から血が出て来る

「後は「フルンティング」を持てば「フルンティング」のマジクリスタルコアの接続作業に入る」

「待つだけで良いのね」

「うん」

雫は切りつけた手で「フルンティング」を持つと血は下の方に垂れて行き血が指輪に触れた瞬間に指輪が光った。

「光ったわね」

「そうだね。」

後はマジクリスタルコアに文字が出るまで待機してね」

「分かったわ」

「その間に……」

私はもう一つの物を手に取り付箋を見る

付箋にはルーズの名前が書いてあったので

「次にルーズ」

「はいはい、私の番だね」

ルーズが私の所に来て

「はいルーズの分」

ルーズの分を差し出す

「これが私のアイテムなんだ」

ルーズは私から差し出された物を見る

「と言うか会長が使って居る奴と同じ物だよね」

「そうだね」

私が使って居る「セイザブラスター」である。

「そんでルーズはシシレッドになってもらう」

私は「シシキュータマ」を差し出す。

ルーズは受け取り

「其れじゃあ会長も一緒に変身しろうよ。」

説明を省く事が出来るから」

「そうだね。」

一緒に変身しようか」

私は「セイザブラスター」と「ワシキュータマ」を取り出して

『シシキュータマ』

『ワシキュータマ』

『セイ・ザ・チェンジ』

『スターチェンジ！』

私はワシピンクになりルーズはシシレッドになった

ルーズは全身を見て

「此れで会長達とお揃いになった」

「武器などの説明は？」

「大丈夫！」

私はこう見えて宇宙戦隊キュウレンジャーは全話見ているので」

言いながら「キューザウエポン」を取り出して慣れた手つきで

「キューザウエポン」のキューシツクルを

「簡単に武器を組み立てる事が出来ます」

組み立てていた

「それなら、シシボイジャーも」

「勿論呼びだせます」

「なら此れ以上の説明不要と皆の所に行つていいよ」
「了解」

ルーズは私の下から離れた

私は最後の物を手に取りテイオを向くと

「如何やら最後は妾の番じゃの」

「そうですね」

私は差し出すとテイオは受け取った瞬間

「があああ」

テイオが片手で頭を抱えながら苦しみ出した

「!?」

テイオ大丈夫!?!」

私は心配する暫くして

「だ、大丈夫じゃ。

じゃが何故急に頭痛がしたんじゃ?」

「あく多分湖を見えれば分かると思うですけど」

「!?」

取り敢えず私達は湖に向かう

湖に辿り着いた私達は湖を見る。

湖の表面には私達が覗き込む私達が写つて居る。

すると水面に細長い物が見えて来た

私は正体を知つて居るが

「!?」

テイオは上を向いては下を向く仕草して

「なあヨクアイ?」

「何かどうかしたの?」

「妾の目が可笑しくなつたんか水面に細長い龍の様な物が見えて上を

向いたら何も無いんじゃが」

「視えて居るなら湖から離れた方が良いね」

私は急いで湖から離れて

「其れつて如何有意味じゃ」

テイオも遅れて湖から離れる。
すると湖から水飛沫を出さずに

「!!」

竜が飛び出して来た。

因みにハジメは模擬戦が激しくなつて気が付いて居ない

「な、何じゃこれは」

「此れは仮面ライダーリュウガの契約ミラーモンスターのドラッグブラッカーです」

「聞きなれない単語じゃがこの後は如何するんじや」

「ちよつと失礼」

私は「Vバックル」から「コントラクト」を取り出して

「テイオさんあれも龍ですので何方が上が分からせてください」

「そう言う事なら容易いのじや」

するとテイオから龍のような殺気が出て来て

「……………」

ドラッグブラッカーは怯んで頭を下げた

「如何やら何方が上か理解したじやの」

「其れじやあ此れをドラッグブラッカーに翳して」

「其れは先程抜居た奴じやの」

私は先程抜いた「コントラクト」差し出す。

「此れを翳せばいいのじやな」

テイオは「コントラクト」を翳すとドラッグブラッカーに突入して来て「コントラクト」吸い込まれると同時にテイオが発光して私は思わず顔を両腕防いで光が収まるとテイオの姿は仮面ライダーリュウガになつて居た。

気が付いたテイオは自身の身体を見て

「此れが今の妾の姿か」

「その鎧の名前は仮面ライダーリュウガ」

「成程少し龍をもじっておるのじやな」

「其れで説明は」

「そうじやのご主人様直々に指導される貰うつもりじや」

「ならみんなの下に合流しましょ」

「そうじゃの」

ティオは模擬戦して居る皆の所に行く

「雫ちゃん如何かな」

「丁度終わった所よ」

「フルンテイング」のマギクリスタルコアを見せて来る。

私は「フルンテイング」のマギクリスタルコアを見ると確かに^{エイワズ}yと^{エイワズ}eのルーン文字が刻まれて居た。

「yは過去にけじめを付けて新しいことを始める意味を持つてと^{エイワズ}eは急速な変化を恐れずに変化に乗って進む、仲間を信頼して助け合うの意味を持つて居てるの」

「私にピッタリな言葉だね」

「其れで皆と交わる？」

「いや流石にあそこに交わるのは度胸無いわ代わりに」

「フルンテイング」をランチャーモードに切り替えて

「こつちを教えて」

「了解」

私達も皆と交わる

メルジーネ海底遺跡 メルジーネ海底遺跡

母さんからギフトを貰って二日経ち私達は潜水艦の前に待機して居た

迎えにミュウとレミアが迎えに来てくれた

「ぐすっ…パパほんとうに行っちゃうの？」

ミュウはハジメから離れるのが嫌なのか今にも泣きそうになる

レミアはミュウを抱っこして

「ミュウ…パパはやらなきゃいけない事が有るの」

ハジメはミュウの方に行き

「ミュウ、心配するな必ず戻って来る」

ハジメの言葉を信じたのか

「パパ…行ってらっしゃい！」

その表情はもつと傍に居て欲しいが残っているが、ミュウは元気よく言う

更に、

「うふふ…私からも、行ってらっしゃい、あ・な・た♡」

と、微笑みながら見送る

普通に仕事に行く夫を見送る妻と娘なのに香織、ユエ、シア、ティオが

『ドライバーオン ナウ』

『SET WARNING』

『シャバドゥビ タッチ ヘンシン シャバドゥビ タッチ ヘンシン』

ユエは「ワイズドライバー」、シアは「仮面ライダーシーカーのライダーコアIDをセット済みのデザイアドライバー」に「パワードビルダーバツクル」、ギガントコンテナバツクル」をセットして居る。

香織は「LBCSオーデインMk-2」ティオは「リュウガのVバツクル」を取り出して居た。

私達は其々変身アイテムを取り出して抑えていた。
勿論、リンフォースアイン、含めたヴォルケンリッター達もこつち側だ。

色々であったが潜水艦に乗り、大海原へ出航した。

「レミアさん…何処まで本気だったんでしよう」

「大人の余裕って奴かな？」

「本心が分からないよ……」

「寧ろ子持ちの余裕…？」

「そうかも知れない」

「全くご主人様も満更でもなさそうにデレデレとしおって」

「アあっ!？」

「誰がデレデレしたって!？」

ハジメは潜水艦を運転しながらドンナーをティオに向けて

「ドパツ」

「あふうん！

これじゃこれ」

と変らない風景があった。

そして私達はメルジーネ海底遺跡があるかも知れない場所に移動した。

その後其々自由に過ごす。

香織、ティオ、ユエ、シアは潜水艦に備え付きのシャワー室でシャワーを浴びている。

尚シャワー室は最大四人までなのでリンフォースアイン、シヤマ、鷹音、アテナはシャワー待ち

私、刷庫、ヴィータ、黒花はシャルルの空間魔法に収納して居たボートゲームを遊んでいる

雫、チロル、ザフィーラ、シグナムは組手をして居る

牙十郎と優花は潜水艦の外装で夕日を見てイチャラブをして居て。
残りのハジメと雷槍も潜水艦の外装で

「ハジメ先輩、夕日が綺麗ですね」

「ああ、近くであんなことをされたらコーヒーを飲む羽目になったが

な」

とハジメはそう言つてイチヤラブをして居る牙十郎と優花を見てからコーヒーを飲んだ

「其れにしても随分増えましたね」

「ああそうだな」

と会話して居ると

「どうしたの考え事？」

「いや…ちよつと日本を思い出して居たんだよ。

こういう自然の光景は何処へ行つても変わらねえなつて」

「うん…そうだね。

向こうの海で見た夕陽とそっくり

まだ半年も経つていないのに何だか凄く懐かしい気がするよ」

「こつちでの日々が濃すぎるんだよ」

ハジメが呆れた様にそう言う。

はたから見たらいい絵になつて居る。

「私も忘れて困る」

ユエが二人に入り込んで来た。

その後、シアとテイオも現れて

「おい

お前等…」

「なんかいい雰囲気だったのでぶち壊しに来ました♪」

「んっ！」

「貴方達ねえ…」

でもこんな日々が続くと良いね」

「そうだな」

その後、リンフォースアイン、シャマル、鷹音、アテナ、私、刷庫、ヴィータ、黒花も潜水艦の外装に出て来てBBQをして片付けも終えて私達は月を見る

「場所は此処で合っている筈だが…」

ハジメは何か思い出したのか

「ハジメさん何を？」

有る物を取り出した。

其れを見たティオは

「グリユーエン大火山の攻略の証じゃな」

グリユーエン大火山の攻略の証のペンダントだ

ペンダントは、サークル内に女性がランタンを掲げている姿がデザインされており、ランタンの部分だけがくり抜かれていて、穴あきになっている。

暫くするとペンダントに変化が訪れた。

「わあ！」

光って居ますよ」

シアが驚きの声を上げる

シアの言う通りにランタンの部分に徐々に光が溜まって居る

「ホント……不思議ね。穴が空いているのに……」

香織が同調するように瞳を輝かせる。

そして光が溜まったのか、ランタンに光を溜めきったペンダントは全体に光を帯びると、その直後、ランタンから一直線に光を放ち、海面のある場所を指し示した。

「粋な演出……」

「ミレディとは大違い」

「全くだ。」

すんごいファンタジーっぽくて、俺、ちょっと感動してるわ……」

「月の光を溜めるって、結構ありがちな設定だと思ったけど、実際に見るとそんな事どうでも良くなるな」

「ミレディと比べちゃ駄目でしょ？」

『おいでませ〜』だからね」

ユエ、ハジメ、アテナ、優花、私の順でそう評する。

「何か酷い言われようね……そのミレディって人……」

何も知らない雫がそう零すが、

「どんな所なんですか？」

刷庫が私に質問して来た

「私達は耐え切ったけどハジメ達がブチぎれてギフトを使って周りに

八つ当たりをした場所だから」

「何とそんな場所が有るのか」

テイオは色んな意味で驚く

手掛かりが出来た私達は直ぐに潜水艦に入って、早速光が差す方向に潜水艇を進めた。

黒く染まった海の中を、ペンダントが示す光に従って進む潜水艇。辿り着いた場所は、海底の岩壁地帯だった。

ハジメはさらに細かく潜水艇を動かし、光が差す場所へ進めると、ペンダントの光が海底の岩石の一点に当たった時、変化が起きた。

「ゴゴゴゴゴゴッ」

という音と共に岩盤が動き出し、新たに道が広がったのだ。

「成程…道理でいくら探しても見つからないわけだ。

運良く見つかるかもなんてアホなこと考えるんじゃないかった」

「…：暇だったし、楽しかった」

「そうだよ。」

異世界で海底遊覧なんて、貴重な体験だと思うよ?」

実はこの場所は昼間にも探した場所だったので、無駄な徒労だったとガツカリするハジメにユエと香織がそう言った。

すると

「うおっ!?!」

突然潜水艇に衝撃が走った。

そして潮の流れが変わり、潜水艇が振り回されたのだ。

「んっ!」

「わわっ!」

「きゃっ!」

「何じやっ!?!」

「うおわっ!?!」

「くっ……………!」

「わああああっ!?!」

「きゃああああっ!?!」

「うわっ!?!」

「ぬおっ!？」

「うわあっ!？」

「わああああっ!？」

「きやああああっ!？」

「うわっ!？」

「ぬおっ!？」

「うわあっ!？」

「うおわっ!？」

「くっ………!？」

「うう——このぐるぐるの感はもう味わいたくなかったですう」

暫く振り回されると回転が止まり

「もう大丈夫だ」

すると

「ハジメ、後方から魚類系の魔物が来ている」

優花がそう言う

「ああ分かって居る。

武器を試すのには丁度良い」

ハジメは潜水艇に内蔵されている魚雷を魚群の魔物に向けて射出して目標である魚群の魔物にヒットしてミンチになる

「うわあ〜ハジメさん死んだ魚の目をした何かが泳いで居ます」

「シアよ…」

其れは紛う事無き死んだ魚じゃ」

私達は余裕で探索して居ると

「ハジメくん、あれ!」

香織が指さす先は

「あれはメルジーネの紋章か?」

五芒星の紋章があった

洞窟の数カ所にメルジーネの紋章が描かれており、円環状の洞窟の五ヶ所

ハジメはまだ光を残しているペンダントを取り出して

「このペンダントの光が残つてる——と言う事は」

ペンダントのランタンの光が紋章に伸びる。そして、光が紋章に当たると、紋章が刻まれている岩盤が動き出して先に進む道が開かれた。縦真つ二つ別れ、真下へと通じる水路へ潜水艇を進める。

すると、突然、

「おお？」

「んっ」

「ひゃっ!？」

「ぬおっ」

「はうう！」

「うおわっ!？」

「くっ……………!？」

「わあああああっ!？」

「きやあああああっ!？」

「うわっ!？」

「ぬおっ!？」

「うわあっ!？」

「わあああああっ!？」

「きやあああああっ!？」

「うわっ!？」

「ぬおっ!？」

「うわあっ!？」

「うおわっ!？」

「ぬおっ!？」

浮遊感を感じながら落ちて着水する

私達は潜水艦から周りを確認すると洞窟の様な空間に出た。

私達は警戒しながら潜水艇の外へ出ると、そこは大きな半球状の空間だった。

如何いう原理かは分からないが、上を見れば水面があり、水滴一つ落ちることなくユラユラと波打っていた。

「あそこから落ちて来たのか」

ハジメは、潜水艇を“宝物庫”に戻しながら、洞窟の奥に見える通

路に進もうと俺達を促す。

「海底遺跡っていうよりただ洞窟だが…」

「ユエ、香織」

「んっ」

「うん」

ハジメの呼びかけに頷くとユエは「ディフェンドウィザードリング」、香織は「マジカル注射器」を取り出して

『ディフェンド ナウ』

香織は魔法少女の姿になり其々障壁を展開した。

その直後、頭上からレーザーのように水流が襲いかかってくる。

香織とユエの障壁の強固さは良く分かっていてるため、私達は声は上げない。

しかし、

「ぎゃあっ!?!」

仲間になって日が浅い雫達は攻撃の激しさに軽い悲鳴を上げ、よろめいて雫が転倒しそうになったが

「おっと……………」

倒れそうになった雫の腰をハジメが支える。

「ぐ、ごめんなさい」

「いや、気にするな」

八重樫さんは気を取り直して上を見ると、レーザーのように水流が飛散して

「よくやったぞ ユエ、香織」

私達は歩いて広いの部屋に入った。

「随分広い所に出ましたねえ…」

私達が部屋が入って暫くして振り返った直後、入り口がゼリー状の物体で塞がれたのだ。

「何だ、こいつは?」

「入り口が塞がれちゃったよ」

「私とヴィータさんでやります!」

シアがそう言ってバリアジャケットを纏ったヴィータが

「おう。」

「シア行くぞ！」

「はい！」

「うりゃあ!!」

「行くぞ「グラーファイゼン」！」

『font:ul20』E i n v e r s t a n d e n . 『font』^解

「たああ!!」

シアとヴィータが入り口を塞いだゼリー状の物体にドリユツケンと「グラーファイゼン」を振るう。

しかし、表面が飛び散っただけで壁は破れない。

そしてゼリー状の物体が飛び散ってその一部がシアとヴィータに付着して

「ひゃわ！」

「何ですか、これ！」

「バリアジャケットが溶けているだど？」

及び衣服が溶け出していた。

「シアとヴィータ、動くでない！」

咄嗟にテイオが絶妙な火加減でゼリー状の飛沫だけを焼き尽くした。

少し皮膚にもついてしまったようでシアとヴィータの肌が赤く腫れている。

「溶解液って奴ですかね？」

「刷庫がそう眩く。」

「また来るぞ！」

ハジメが叫ぶと、今度は天井から先程と同じゼリーのような物で出来た触手が襲い掛かってくる。

「皆！ 集まって！」

香織がそう言つて香織とユエが障壁を展開する。

更に、テイオが炎を繰り出して、触手を焼き払いにかかった。

「正直ユエと香織の防御とテイオの攻撃のコンビって、反則臭いよな」
確かに本場の結界師顔負けの展開速度と強度に、それに護られなが

ら攻撃可能。

一国の大軍でも正面からやれる布陣である
そう思つて居ると、シアがハジメに近付き、

「あのお、ハジメさん…火傷しちやっただので、お薬塗ってもらえませんかあ」

「…お前、状況わかつてんの？」

「いや、カオリさん、ユエさんとテイオさんが無双してるので大丈夫かと」

「そう言うのなら本職であるシャマル先生に見せなさい」

「その通りですよ。」

私が診断しますよ」

「うう、分かりました」

シアはシャマルの下に行き、シャマルがシアの火傷を治してしまつた。

「むう…」

「…ハジメ君。」

このゼリー、魔法も溶かすみたい」

香織の言葉に障壁を見ると、じわじわと溶かされている。

「ふむ、やはりか。」

先程から妙に炎が勢いを失うと思つておつたのじゃ」

テイオもそう言う。

すると、部屋中から液体の様なものが出し、空中に留まるように集まつて形を成していきクリオネ状態になった

「何ですかアレ！」

シアが叫ぶ

「大迷宮らしくなってきたな」

ハジメがそう言う

巨大クリオネは予備動作無しに全身から触手を伸ばし、更に頭部らしき場所から先程のゼリーの飛沫を飛ばす。

それを香織とユエのW障壁で防ぎつつ、ユエはテイオと一緒に巨大クリオネに向けて火炎を繰り出した。

「まだよ！
火炎攻撃は巨大クリオネに命中し、その身体を爆発四散させるが

反応が消えてない！

何これ……………？

魔物の反応が部屋全体に……………」

優花が警告を発する。

優花の感知能力は部屋全体に魔物を捉えている様だ。

直後、爆発四散したはずの巨大クリオネが元通りに再生する。

「再生した…」

此れが主が言っていた大迷宮の魔物か…」

シグナムはそう感想を言った

「ご主人様よ。

何度もに再生されては敵わん…魔石はどこじゃ？」

「そういえばこいつ…透明の癖に魔石が見当たりませんか？」

ティオをシアがそう言うが、ハジメは困惑した表情を浮かべている。

「ハジメ？」

ユエが問いかけると、

「…ない。

こいつには、魔石がない…」

ハジメが驚愕の事実を言い放った。

「魔石がないって…それじゃあ、あれは魔物じゃないってこと？」

「わからん…だが強いて言うならあのゼリー状の体、全てが魔石だ。

俺の魔眼石には、あいつの身体が赤黒い色一色に染まって見える。

奴だけじゃないこの部屋全体もだ

俺達は既にあいつの腹の中にいるのかもしれない！」

つまり一片すら残さず焼き尽くすなり消滅させるなりしないといけないと

そう思っ居ると再度巨大クリオネが攻撃を再開して来た。

香織とユエは障壁を維持しながらハジメは火炎放射器を取り出して、壁を焼き払う。

壁は擬態しているクリオネの一部らしく、ボロボロと剥がれていく。

しかし、ユエ達による本体への攻撃も激しさを増し、巨大クリオネもいよいよ本気になってきた。

「しつこい奴ですねぇ」

「何か手は無いかのう」

考えて居ると

「一度、態勢を立て直すぞ」

ハジメの手には、パイルバンカーを持って居た

「地面の下に空間がある。」

どこに繋がってるかわからない。覚悟を決めろ！」

「んっ」

「了解ですう」

「承知じゃ」

「わかったよー！」

「ええー！」

それぞれが了承の意を示すが、

「その必要ない」

私は待ったをかけた。

全員が私に振り向く。

「丁度適任者がいる」

私は刷庫の方を向いてそう言う。

「私!?!」

「……………とりあえず手があるなら試してくれ。無理だと判断したら即撤退だ！」

ハジメはとりあえずやらせる様だ。

「ありがとう。」

其れじゃあ刷庫、ソロモンゾーンを」

「ソロモンゾーン……………はあ!?!」

そうでした。

私にはそんな機能が有りました」

刷庫は直ぐに「オムニフォースワンダーライドブック」を手に取りページを開く

『オムニフォース 伝説の聖剣と、選ばれし本が交わる時、偉大な力を解き放つ!』

「変身!」

『OPEN THE OMNIBUS FORCE OF THE GOD!』

KAMEN RIDER SOLOMON!』

仮面ライダーソロモンに変身した

『FEAR IS COMING SOON!』

「仮面ライダーソロモン……………?」

ッ!

そうか!」

ハジメはそこで私と刷庫がやろうとしている事に気付いた。

「オムニフォースワンダーライドブック」を一度閉じた後に開いて

『OMNIBUS LOADING!』

「ドウムズドライブバックル」の起動スイッチを3回押して

『SOLOMON ZONE!』

部屋の真ん中に本が現れて開いて巨大クリオネのゼリー状の身体を片っ端から吸い込んでいく。

巨大クリオネに苦戦した理由は破壊しても飛び散ったその一部が集まって即座に再生しまう事にある。

その際に完全に焼き尽くせるのも極一部だろう。

しかし、ソロモンゾーンは自身が構築した戦闘用の空間に自身や周囲の人物を転移させる技や、ワンダーワールドを模した空間を作り出し、その中で隕石や斬撃、巨大なカラドボルグを飛ばして攻撃するなど様々で自身が構築した戦闘用の空間に自身や周囲の人物を転移させる技を使って居る

つまり巨大クリオネがバラバラにしても再生するというのなら、その身体の全てを別の空間に送ってしまえばいいというのが私の考えだ

その間にも壁の隙間から次から次へと染み出して来るが、染み出してきた傍から全てを本へ吸い込んでいく。

かなり長い時間吸い込み続けていたが、やがて品切れになったように染み出してきたクリオネの身体がパツタリと止まった。

「優花？」

私は優花に確認すると、

「ん……………感知範囲内に魔物の反応は無いわ……………多分、終わったと思う」

優花がそう言うのと私が頷き、

「刷庫、もういいよ」

私がそう言うのと本が閉まり、その本自体が光の粒子となって消えていった。

本が消えたことを確認すると、刷庫は仮面ライダーソロモンの変身を解除して

「お疲れ様」

私は刷庫を労う。

「いえ、会長のひらめきが無かったらこんな事しません」

刷庫はそう返す

「香織とユエの防御とテイオの攻撃が反則って言ったが、前言撤回するわ」

ハジメは呆れた様に頭を掻き、

「一番の反則はラスボスの一歩手前のアイテムを使って居る刷庫だ！」

ハジメはズビシツと刷庫を指差してそう言い放った。

戦争と和平

刷庫の仮面ライダーソロモンの必殺技、ソロモンゾーンで生成した本で巨大クリオネを飲み込んで

それ以降巨大クリオネ以外に厄介な敵は存在せず、私達はサクサクと先へ進んでいくと岩石地帯に出た。

そこにはおびただしい数の戦列艦の帆船が半ば朽ちた状態で横たわっていた。

そのどれもが100mはありそうな戦列艦の帆船ばかりで、遠目に見える一際大きな船は300mはありそうだ。

「船の墓場ってやつか？」

「凄い：帆船なのに、なんて大きさ……」

私達はその中を警戒しながら先へ進む。

「それにしても戦艦ばっかだな……」

「其れも世界が世界だけに中世に活躍した戦列艦ばかり」

「うん：でも見て」

香織が有る場所を指さす。

私達は其処を見る。

「あの一番大きな船は雰囲気が違うみたい：客船っぽくない？」

香織の言う通り周りの船は私達が映画などで見る海賊船などの様に、船の側面に大砲が並んでいる戦列艦に対してあの船には大砲などは装備されておらず見た目重視なデザインになって居る。

私達が考察して居ると

「……………うお

お お お お お お お お お お お お

!!!!

「……………ワア

ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア

!!!!

行き成り大量な雄叫びを聞いて

「何だ!？」

私達が周りを見ると

「皆

周りがっ！」

優花が思わず声を漏らすと、周りの景色がぐにやりと歪み、気が付けば私達は岩石地帯の地面ではなく戦列艦の甲板に立っていた。

其れも大海原の上に浮かんでいた

そして、周囲に視線を巡らせば、岩石地帯の船の墓場などなく、何百隻という帆船が二組に分かれて相対し、大砲や魔法などでドンバチして居る、海上戦闘の真ん中に居た

「な、何よ此れ……」

「わ……私達……夢でも見てるのですかね……？？」

鷹音とが呆然と呟く。

「……………ありがちな設定からだ、これは過去の映像を流してることか？」

ハジメはふと思った予想を口にする。

「でもこの迫力……………ただの映像とは思えないわ。雄叫びによる空気の震えがビリビリ来るもの……………」

ハジメの言葉に対して優花がそう言う。

「そうね。」

私の予想が正しければ此れは幻影魔法の上位互換の魔法だね」

そうこうしている内に、どちらか撃った魔法や砲弾が私達に目掛けて迫って来た。

ハジメは咄嗟に「浪漫砲台パンプキン」を素早く組み立てて発砲する。

其れに合わせて私は銃奏モードにした「音銃剣鈴音」、黒花は「ギアトリンガー」、アテナはアテナは「ギヤレンバツクル」を取り出して「変身！」

『Turn Up』

仮面ライダーギャレンに変身して「醒銃ギャレンラウザー」、雷槍は「銃撃」、優花は「北条國子の巨大なブーメラン」、シアは「仮面ライダーシーカーのライダーコアIDセット済みデザイアドライバー」、

「パワードビルダーバツクル」、「ギガントコンテナバツクル」を取り出して

『SET WARNING』
「変身！」

『WOULD YOU LIKE A CUSTOM SELECT ION』

仮面ライダーシーカー パワードビルダーフォームに変身して直ぐに「ギガントブラスターバツクル」を取り出して「パワードビルダーバツクル」にセットする

『GIGANT BLASTER』

「ギガントブラスター」を取りだす鷹音は「クロスミラージユ」を取りだして

「クロスミラージユ」、セットアップ

《font:ul20》『set^{セット}up》《font》

バリアジャケットに着替えて待機状態のカード形態から活動モードの拳銃形態に変わり、雫はシューティングモードの「フルンティング」を構えて、ルース「セイザブラスター」と「シシキュータマ」で

『シシキュータマ』

『セイ・ザ・チェンジ』

「スターチェンジ！」

シシレッドに変身して「キューザウエポン」を取り出してキューショットで構える

ティオは「仮面ライダーリュウガのカードデッキ」を取り出して偶然にも自分自身の姿を映せる剣が有り「仮面ライダーリュウガのカードデッキ」を翳すとティオのお腹に「Vバツクル」が装着されて「変身」

「仮面ライダーリュウガのカードデッキ」を「Vバツクル」にセットすると仮面ライダーリュウガに変身して「ブラックドラグバイザー」に「ストライクベント」をセットして

『STRIKE VENT』

右手に「ドラグクロ」を装着して

最後にヴィータが左手に鉄球のような魔力弾を精製して

「シュワルベフリーゲン」

「グラーフアイゼン」で打ち付けて飛ばす。

其れに合わせて私達も発砲する。

先にヴィータの魔力弾は逸れる事無くその火球に直撃して消滅した

続いて私達の攻撃が火球に直撃したが此処で可笑しなことが起きた

鷹音、雫の攻撃は先程のヴィータの魔力弾の様に火球に直撃して消滅したがハジメ、私、黒花、アテナ、雷槍、優花、シア、ルーズ、テイオの攻撃は擦り抜けて其のまま此方に向かうて来る

「何っ」

私達は驚く中

「皆ー」

私達に向かって来た攻撃に対し、香織、ユエ、シャマル、ザフィーラは其々の障壁を展開して防ぐ

「さて何故俺達の攻撃はすり抜けたのに対してヴィータ、鷹音、雫の攻撃はヒットしたのを考えようか」

「と言っても私は普通に「フルンティング」で発砲しただけ」

「私はヴィータと同じ魔力弾しか撃って居ないわ」

「そうだな私も其れしかやって居ない」

「共通点は…」

ハジメが考えて居ると

「魔力が纏って居るとか…」

刷庫が言う

「根拠は？」

私がそう言うと

「あ、はい「フルンティング」などのCHARMには弾丸に自動的にマギを籠められるので」

「其れだ！」

ハジメは直ぐにこっちに向かう攻撃を風爪を発動すると向かって

来た攻撃は簡単に飛散した。

「やはり！皆、魔力を使わないと影響を与えられない！ 魔力を伴う攻撃を！」

ハジメは皆にそう叫ぶ。

ハジメは風爪、私とシグナムは「レーヴァテイン」、黒花はキャリー・ターセルのデバイス「イエローキヤット」、アテナ「ルシフェリオン」、雷槍「ストラーダ」、優花は魔力を乗せた手裏剣、牙十郎は「日輪刀」に魔力を乗せる。テイオは「ドラグクロ」に魔力を乗せた、ユエは障壁を維持しながら魔力で其々応戦する

その時、俺達と同じ船に乗っていた乗組員の1人が負傷し、近くに倒れる。

「大丈夫ですか……?!？」

「直ぐに治療するわ」

香織とシャマルは放っておくことは出来なかったのか、回復魔法を行使する。

すると、傷が治るところかその乗組員は光の粒子となって消えてしまった。

「えっ？ えっ？ ど、どうして……」

シャマルは戸惑って

「魔力さえ伴ってれば、攻撃魔法に限定する必要は無いって事かな？」

ハジメが、乗組員が消えてしまった理由を推測する。

その理由に納得したのか、皆も頷く。
すると、

「全ては神の御為にい！」

「エヒト様あ！ 万歳い！」

「異教徒めえ！ 我が神の為に死ねえ！」

血走った目に涎を垂らしながら叫ぶその姿はまさしく狂人だ。

「気持ち悪いわね……」

優花が顔を顰めながらそう呟く。

「狂信者という奴かのう？」

「この全員がか？」

ハジメはやれやれと肩を竦めると、

「さて、どうすれば、この気持ち悪い空間から抜け出せるんだ？」
とりあえずこの場の解決策を模索する。

「一番分かり易いのは全員倒す事だろ」

「ま、それが妥当だろうな。」

これだけの数を殲滅するのは面倒だが、回復魔法も効果があるならやりようはあるな。

香織

「うん、分かってる」

香織はハジメの言葉に頷いて「LBCS オーディンMk?2」を取り出して直ぐに変身して天高く跳んで、

「聖典！」

上級範囲回復魔法を発動させた。

普通の魔法使いなら10数人がかりで、その上長時間の詠唱とバカでかい魔法陣が必要になり、半径500m以内の全員を纏めて回復させるものだ。

しかし、それを香織は詠唱、魔法陣無しノータイムで行使し、その上その効果範囲は半径数キロに及び届かない範囲はオーディンMk?2の高い飛行能力で直ぐに効果範囲に入れる

効果範囲内にいた船の兵士達は全員が消え去る。

この大海原の大艦隊はたった香織、1人によって、一分と掛からずに全滅した。

最後の兵士を倒した時、再び景色が歪んで俺達は元の場所にいた。

「今の、何だったのかな？」

地面に降りて来た香織が疑問を口にする。

ハジメは、少し考えたあと推測を話した。

「おそろくだが、昔あった戦争を幻術か何かで再現したんだろうな。」

…まあ、迷宮の挑戦者を襲うという改良は加えられているみたいだが…あるいは、これがこの迷宮のコンセプトなのかもしれない」

「コンセプト？」

「ああ。大迷宮にはそれぞれ、『解放者』達が用意したコンセプトがあるんじゃないか？」

「つてな。」

「それが当たっているとすれば、ここは……」

「…狂った神がもたらすものの悲惨さを知れ…かな？」

「ああ、そんな気がするよ」

余所者の私達だから狂った奴らだなと他人事で済んだが、この世界の人間からすれば自殺ものかもしれないな。

私達がさらに進み香織が最初に指さした船の墓場で一番目立つ300mほどもある木造の豪華客船の残骸の下へ辿り着いた。

残骸と言うよりも、原型は留めている。

「やっぱりこれだけ他の船とは違うね……」

私達はその船を見上げながら呟く。

「ああ、木造の船でよくもまあこれほどの船を仕上げたもんだ」

ハジメは感心したように言う

私達は豪華客船の最上部にあるテラスへと降り立つ。

豪華客船の最上部にあるテラスへと降り立つ。

すると案の定、周囲の空間が歪み始めた。

「またか……皆、気をしっかりもてよ。」

「どうせ碌な光景じゃない」

ハジメの推測に俺達がさっきよりもエグイ光景を予想していた。

しかし、景色が完全に変わると、そこは煌びやかなパーティー会場だったことに、俺達は呆氣にとられた。

時刻は夜で、満月が夜天に輝いており、テラスから見える眼下の甲板は豪華な料理と着飾った人々で賑わっていた。

「これは…パーティー…だよな？」

「ああ。随分と煌びやかだが人間族だけじゃなく魔族や亜人族もいるな、メルジーネのコンセプトは勘違いだったか？」

ハジメは肩透かしを食らった気分になっている。

すると、背後の扉が開いて数人の乗組員が談笑しながら一服し始めた。

その話の内容によると、この海上パーティーは、終戦を祝う為のものらしい。

長年続いていた戦争が、敵国の殲滅や侵略という形ではなく、和平条約を結ぶという形で終わらせることが出来たのだという。

「こんな時代があつたんですね……亜人族も居ますよ」

「ん……あそこに居るのは魔族」

シアやユエが甲板を見下ろしながら指差し、各種族が種族の壁を越えて談笑している。

「終戦のために奔走した人達の、まさに偉業だな。」

終戦からどれくらい経っているのか分からないが……全てのわだかまりが消えたわけでもないだろうに……あれだけ笑い合えるなんてな……」

「きつと、あそこに居るのは、その頑張った人達なのね……皆が皆、直ぐに笑い合えるわけじゃないだろうし……」

雫もそう言う。

「そうだな……」

ハジメも頷く。

「でも可笑しくくないですか」

刷庫がそう言う

「刷庫先輩どうかしたのか？」

「何か気になる事が有るのか」

騎竜姉弟は口にする

「いえ、この迷宮の解放者は、何でこの光景を見せようと思ったのかと思つて……良い意味で考えれば、各種族は争う必要なんか無い。

こうして手と手を取り合えるんだって事を証明したいって意味になるんですが……」

何故今日も争っているのか」

「言われてみれば……」

「確かにそうですね」

皆が考えて居る中私はこの光景の事で何か思い出そうとした時

甲板に用意されていた壇上に初老の男が登り、周囲に手を振り始め

た。

それに気がついた人々が、即座におしやべりを止めて男に注目する。

「どうやらよほどの男性は敬われている様だ。」

私は考えを辞めた時ふとその近くには側近と思目に入ったとは別に、いかにも怪しげなフードを被った人物が目に入った

「諸君、平和を願い、そのために身命を賭して戦乱を駆け抜けた勇猛なる諸君、平和の使者達よ。」

今日、この場所で、一同に会す事が出来たことを誠に嬉しく思う。

この長きに渡る戦争を、私の代で、しかも和平を結ぶという形で終わらせる事が出来たこと、そして、この夢のような光景を目に出来たこと……私の心は震えるばかりだ」

男性の演説に、パーティーの参加者たちは涙ぐんだり、遠い目をしてたりしている。

話を聞いていると、どうやら演説している男は人間の国の王様のようだ。

相当初期から和平の為に取り組んでいたようで、各種族問わず敬意の視線を向けられている。

だが、演説が終盤に差し掛かるにつれ熱に浮かされた様に盛り上がる………と言うより、何かに取り憑かれたように声に力が入っている。

そして、

「こうして和平条約を結び終え、一年経って思うのだ……実に、愚かだった……」

その言葉に一瞬パーティー会場が静まり返る。

私達も同時に声を失った。

「そう……実に愚かだった。」

獣風情と杯を交わすことも、異教徒共と未来を語ることも愚かの極みだった。

わかるかね、諸君。

そう……君達のことだ」

「い、一体、何を言っているのだ！」

アレイストよ！」

一体、どうしたと言う…」

魔人族の男性が言いかけている途中で

「がはっ!？」

人間族の男性が槍で魔人族の男性の背中から貫かれた。

そのまま崩れ落ちて

「さて、諸君、最初に言った通り、私は、諸君が一同に会してくれ本当に嬉しい。」

我が神から見放された悪しき種族ごときが国を作り、我ら人間と同等のつもりでいるという耐え難い状況も…」

その後、おそらく乗組員に扮していたであろう兵士達がパーティーの参加者たちを囲う様に現れ

「創世神にして唯一神たるエヒト様に背を向け、下らぬ異教の神を崇める愚か者共を放置せねばならん苦痛も…今日この日に終わる！」

全てを滅ぼす以外に…平和などありえんのだ！」

それ故に、各国の重鎮を一度に片付けられる今日この日が、私は、堪らなく嬉しいのだよ！」

さあ、神の忠実な下僕達よ！ 獣共と異教徒共に裁きの鉄槌を下せえ！」

甲板は阿鼻叫喚な地獄に変わり殆どの者はパーティー目的で来ていた為武装が殆どなく簡単に殺され、海に飛び込んだ者も、予め予想していたのか兵士達が乗った小舟が船を囲む様に配置されており、1人も逃がさないとばかりに容赦なく殺された

人間族の男性は

「ああ、エヒト様！ 見ておられますかあ!!!」

天を仰いで哄笑を上げる。

「酷い……………どうして……………?」

雫が口を押さえながらそう零した。

その時に私は思い出した瞬間、再び景色が歪んで俺達は元の場所に戻っていた。

「今ので終わりかな？ 私達、何もしてないけど……」

「この船の墓場は、ここが終着点だ。」

結界を超えて海中を探索して行くことは出来るが……普通に考えれば、深部に進みたければ船内に進めという意味なんじゃないか？

あの光景は、見せることそのものが目的だったのかもな。

神の凄惨さを記憶に焼き付けて、その上でこの船を探索させる……中々、嫌らしい趣向だよ。

特に、この世界の連中にとってはな」

私達は甲板に降り、船の中の探索を開始した。

「さっきの光景……終戦はしたが、あの王が裏切ったということなのかの？」

「そうみたいだな……ただ、ちよつと不自然じゃなかったか？

壇上に登った時は、随分と敬意と親愛の籠った眼差しを向けられていたのに……内心で亜人族や魔族を嫌悪していたのだとしたら、本当に、あんなに慕われると思うか？」

「……そうだね……あの人の口ぶりからすると、まるで終戦して一年の間に何かがあって豹変した……と考えるのが妥当かも……問題は何かあったのかということだけど」

「まあ、神絡みなのは間違いないな。めっちゃ叫んでたし。

危ない感じで」

「うん、イシユタルさんみたいだった……トリップ中の。

痛々しいよね」

「単純に一番怪しいのはあのフードの人物だな。洗脳や思考誘導の類。」

もしくは完全に別人が入れ替わったか、あるいは中身だけが別物になったか……」

「其れに思い出した。」

アレイスト王はこのトータスで初めて亜人族や魔族に和平条約を結んだが其の一年後に狂行に走り再度戦争が起きて

その後晩年、狂気に侵されその身に千もの傷を自ら刻み、命を絶つ

たとトータスの世界歴史に乗って居た。

だから多分洗脳説が濃いと私は睨んで居る」

私達は先程の出来事から何が起きたのかを予想しながら進む。

「雫何処だ！」

二人そろって叫ぶ
すると

「此処だよ

ハジメ君、香織」

雫が現れた。

私はシャマルの「クラールヴィント」を覗く

「クラールヴィント」には確かに雫の反応が出ている

「雫無事だったか？」

「ええ大丈夫よ…」

「ごめんなさい…皆の脚を引っ張って…」

雫はそう言っつてハジメと香織に近づいた時に

「！」

ハジメはドンナー

「！」

香織はヴァイスを取り出して雫に突き付けた

「ハジメ君!」

香織!」

何するの?」

「何を?」

「そんなの決まっつて居る」

「敵を殺すんだよ」

二人は郵貯なくトリガーを引いて

「[「パアアアン」]

私達は同時ないが

「嘘!」

「撃つちやつた」

「会長!」

ルーズ、鷹音、刷庫は驚いて居た。

その間に雫は尻餅を突いて

「行き成り何するのよ…」

「雫ちゃんの声で勝手に話すな」

「雫の身体で勝手に動くな」

二人の言葉に

「会長、其れって」

刷庫が代表で私に質問して来た

「其のままの意味」

私の言葉にハジメが

「ああ、此処に居る全員の殆どが全て見えてんだよ」

「雫ちゃんに巣くったゴミクズの姿がな」

「ふっ…フッフ…」

雫の声が別の女性の声変わった。

「其れが分かっても如何する事も出来ない」

現在雫の身体は女性の霊に取り付かれている状態になって居た

「もうすでにこの女は…」

女性の霊は自分が有利な立場に居ると勘違いして居るのか

「残念、貴方を雫ちゃんから引きはがす方法はもう持って居るの」

「ハア？」

香織は杖を雫、基女性の霊に向けて

「はいー！」

杖から暖かい光が出てその光が雫に移って

「ああああ成仏するー！」

と光が収まる頃には

「あいつの気配はもう残っていないようだが…」

「一応雫ちゃんの魂が傷つかないように成仏させたんだけど」

二人は暫く雫を見つめると

「ん…」

雫が目を覚まして

「えっと…」

「ごめんなさい。」

「さつきまで霊に…」

雫が言い切る前に

「！」

香織が抱き着いて

「香織！」

急に如何したの」

「良かった。」

正直に言つてあの時、雫ちゃんの身体を引きはがす時に雫ちゃんの魂を消滅させたかもしれないとドキドキして居たの」

「…香織、ありがとう」

貴方のお陰で私は助けられたから」

「うん！」

「なら行くぞ」

ハジメは雫をおんぶした。

「は、ハジメ君!？」

急に抱っこして!？」

「ああ、色々とあったからかな今は休んで居ろ」

「そうだよ。」

ハジメ君はこんなサービスは滅多にしないから」

「そうだとしても……」

「兎に角今は甘えなさい」

「そうそう、今まで我慢して居たからな」

「翼愛先輩と姉さんの言う通りです」

「はい、私もそう思います」

「ああいつも光輝の面倒を雫に任せていたからな」

「そうそうタマには息抜きが必要よ」

「其れに此れは雫ちゃんの慰安旅行だから」

「と言つても休まる事して居ないんですけどね」

雷槍とクラスメイトはそう言うのと雫は諦めて

「そうさせてもらうわ」

ハジメに抱き直して船倉の奥の方で転送用だろうと思われる魔法陣が輝いていた。

私達はそこに足を踏み入れ、転送の魔法陣が輝く。

次の瞬間には、神殿の様な建物の中にある4つある魔法陣の1つに転移していた。

「……………魔法陣が4つあるって事は、ここに来るルートも4つあったって事か」

ハジメがそう零して。

「そうみたいだね。」

あの中心が証拠だね」

私は指を指して皆は其処を見る

神殿の中央の祭壇らしき場所には精緻で複雑な魔法陣が描かれていた。

それを見たハジメが目を見開いた。

「……………あれは魔法陣？ まさか、攻略したのか？」

「えっと、何か問題あるの？」

大迷宮攻略が初めての雫達はそう聞くが、

「いや、もうクリアだとは思わなくてな」

他の迷宮に比べると少し簡単だった気が…」

「そうだね……………他と比べると確かに少し簡単だったね」

ハジメの言葉に香織も同意する。

其れに対して

「いやいや！ ちょっと待ちなさいよ！ 十分大変な場所だったわよ。」

「『そうそう！』」

雫、鷹音、刷庫、ルーズはツツコム

「最初の海底洞窟でこの世界の人達は普通は潜水艇なんて持って居ないから、クリアするまでずっと沢山の魔力を消費し続けるし、下手をすれば、そのまま溺死するよ！」

「クリオネみたいなのは魔物は、私が居て良かったですが、あれこの世界の基準で有り得ないくらい強敵です」

「亡霊みたいなのは物理攻撃が効かないから、また魔力頼りになる」

「その上で、大軍と戦って突破しなきゃならないのよ？」

十分、おかしな難易度よ！」

四人は其々ツツコミを入れる。

「むっ…そう言われればそうなんだろうが…」

「まして、この世界の人なら信仰心が強いだろうし

あんな狂気を見せられたら…」

「……それだけで終わる可能性もあるって事か」

まあ雲が言いたいことは私達が強すぎるといふ事だ。

気を取り直して魔法陣に入る俺達。

すると、

「あれ？ 私達、攻略者として認められたの？」

「そうみたい。」

正直言って刷庫みたいになにか貢献した記憶は無いんだけど……」

案外簡単に認められた事に雲達は戸惑って居る

私は

「案外、心を折らずにここまで来ること自体が試練なのかもしれない」

黒花がそう言う。

そして手に入れた神代魔法は、

「ここでの魔法か…大陸の端と端じゃねえか。解放者め」

「…見つけた『再生の力』」

床から小さな祭壇がせり上がって淡く輝き光が人の形を形成する。

輪郭がはつきりと、一人の女性が映し出された。

エメラルドグリーンの長い髪と扇状の耳から察するに、彼女は海人

族と関係のある女性と分かった。

オスカー同様に

『私はメイル・メルジーネ

冒険者達によくぞここまで辿り着きました』

自己紹介から始まり

「ミュウちゃんと同じ髪色と耳ですね」

「ああ…」

どうやら解放者の一人は海人族と関係ある人物だったようだな」

『……どうか、神に縋らないで。』

掴み取る為に足掻いて。

己の意志で決めて、己の足で前へ進んで。

神が魅せる甘い答えに惑わされないで。

自由な意志のもとにこそ、幸福はある』

解放者達の真実を語りと最後は

『貴方に、幸福の雨が降り注ぐことを祈っています』

攻略者達に向けての言葉だった

そして光は霧散して、彼女が居た祭壇の上の小さな魔法陣からメル

ジーネの紋章が掘られたコインが置かれた

「これが此処の攻略の証か」

「これで四つの証が揃いましたね！」

シアが喜んで居る間にハジメはコインを手を取った瞬間に拠点が揺れる。

すると、周囲から水が一気にせり上がり始めたのだ

「うおっ

強制排出か!？」

「もうライセン大迷宮みたいなのは嫌ですう」

「兎に角各自武装しなさい」

私は流れる様に言って其々変身アイテムを取り出して

「Croitzalronzell Gungnir zizzl」
人^と死^して^も戦^士と^生き^る

「Variousshulshagana tron」
純^真は^突き^立つ^牙と^なり

アテナは「ガングニール・水着ギア」優花は「シウルシャガナ・水着ギア」を纏い

「チェンジ全開！」

『ジャパニーズウルフ！』

『変身致しまゝす 白線の内側に下がってお待ちください』

『オムニフォース 伝説の聖剣と、選ばれし本が交わる時、偉大な力を解き放つ！』

『バナナ』

『ワシキュータマ』

『シシキュータマ』

『25バーン!』

『ザ・ワールド!』

「変身!」

「トツキユウチェンジ!」

『ロックオン♪♪』

『セイ・ザ・チェンジ』

『ババン!ババン!ババン!ババン!』

「本能覚醒!」

『フォースライズ!』

『トツキユウ3号』

『OPEN THE OMNIBUS FORCE OF THE

GOD!

「変身」

「スターチェンジ!」

『ババババーン!ゼンカイ!ガオーン!』

『ウオー!ウオー!ライノース!』

『ジャパニーズウルフ!』

「変身完了です!」

『KAMEN RIDER SOLOMON!』

『カヒユン、カモーン!!』

バナナアームズ!ナイト オブ スピアー!』

「エマーゼンシー!デカマスター!!」

「LBCSコネクト!オーティーンMk-2!」

『Break down……』

『トツキユウ3号』

『FEAR IS COMING SOON!』

と変身して鷹音、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザファイラ、リ
インフォース、ユエはバリアジャケットを身に纏ったが
「ち、ちよっと待って!」

私、纏うものが無いんだけど」

特典が武器だけの雫は其のまままで無慈悲に私達は水に飲み込まれ

た

ひと時の別れ

「強制排出か!？」

とメイル・メルジーネの無理矢理な排出基無茶苦茶なショートカットに私達は其々変身アイテムを取り出して変身して無慈悲に私達は水に飲み込まれてメルジーネ大迷宮の天井が開いて海水が勢いよく流れ込んでくる。

その流れに巻き込まれて海中に放り出された。

ハジメが宝物庫から出した潜水艇に乗り込み、

「ハア、ハア皆居るか?」

ハジメはそう言うと言った

「点呼！」

黒花

「居ます！」

「アテナ」

「居るぞ」

「雷槍君」

「居ます。」

翼愛先輩

「チロル、ベル、ベロ」

「はい！」

「ワン」

「ユエ」

「うん」

「リンフォース」

「此処に」

「シグナム」

「私も此処に」

「ヴィータ」

「ああ居るぞ」

「シャマル」

「私も無事よ」

「ザフィーラ」

「ああ」

「香織ちゃん」

「翼愛ちゃん、大丈夫」

「シアちゃん」

「生きています」

「テイオ」

「優花ちゃん」

「ええ居るわ」

「牙十郎君」

「居ます会長」

「ルーズちゃん」

「目が回りますが居ます」

「刷庫ちゃん」

「し、死ぬかと思いました」

「……鷹音」

「ええ生きて此処に居ます」

「雫ちゃん」

「ぷぴゅー」

「全員生きて居るね。」

「香織ちゃん雫の体内にある海水を抜いてね」

「了解！」

「香織は雫に近づいて

「雫ちゃん大丈夫」

「雫の体内にある海水抜き始めた

「ハジメは潜水艦を動かして」

「ああ任せておけ」

「私達はエリセンに戻る。

「数日後」

メルジャーネ海底遺跡の攻略から数日が経った。

私達はミュウとレミアの家でお世話になっている。

現に夜戦して居たハジメ、ユエ、香織が居る部屋に

「パパ」

ミュウが突撃して

「ん…」

「パパ！」

朝なの！

起きるの」

「ああおはようミュウ」

と言うが

「パパ達なんで裸なの？」

「パジャマ無いの？」

ミュウに夜戦して居た事を言われて

「みゆ…ミュウはまだ知らなくていいんだぞ」

誤魔化す。

その後朝食をする。

如何して私達は此処に留まって居る理由は

「パパ」

「今日は何して遊ぶの？」

「え!？」

そ、そうだな。

今日は新しい装備を作ったり…とかかな」

「じゃあミュウもお手伝いするの！」

「お、おうありがとうな」

ハジメがミュウちゃんとのお別れの踏ん切りがまだつかないらしい。

「それで其のまま海で

「此れから皆で鬼ごっこするのー」

「よーしじゃあ私達全員が鬼だよ」

ハジメと私以外のメンバーで鬼ごっこするようだ

因みに私はハジメと一緒に釣りをして居る

「ミュウちゃん、待て—ですう—」

シアとミュウが追いかけてっこして

「あれ？」

ミュウちゃんどこ行っちゃいました？」

シアはミュウを見失って居て突然

「ザバア」

行き成り突発的な波が

「うわあ！」

シアを襲った。

突発的な波を起こしたのは

「とったのー!!」

ミュウで、左手には

「うえええ——!!」

水着がっ」

シアの水着が持って居た

「ミュウちゃん！

鬼ごっこってそう言う遊びでしたっけ!？」

「そうなの」

ミュウは逃げてシアが追いかける

私は微笑ましい光景を見て

「ハジメ君そろそろ出発しないの」

「そうだろうな。」

いい加減に出発しないとな…

ミュウに何て言うべきか」

ハジメは少し考えて

「ハア…

泣かれるかな、泣かれるようなあ…」

ハジメは再度考えて

「恨むぞ先生…」

「愛子先生を思い出して居たの?」

「……」

と軽い会話をして居ると

「ハジメさんと！」

私達が振り返ると

「レミア」

レミアが居た。

レミアが呼んだのはハジメなので私は後ろに下がった。

「有り難うございます。」

ハジメさん」

「いきなりなんだ？」

礼を言われるような事はしてないと思うが？」

「娘の為にこんなにも悩んで下さるんですもの」

母親としては御礼の一つも言いたくなりますよ」

「はは…バレバレか」

一応隠してたつもりなんだが」

「あらあら知らない人は居ませんかよ？」

ヨクアイさん達も考えて下さっているようですし…」

「まあ私達もミュウちゃんが泣かないように考えて居ます」

「ミュウは本当に素敵な人達と出会いましたね」

ハジメさん、皆さんは十分すぎる程良くして下さいました。

ですからどうか悩まずすべきことの為にお進みください」

「レミア…」

「皆さんと出会って、あの子は大きく成長しました。」

甘えてばかりだったのに、自分より他の誰かを気遣えるようになって…」

た…」

レミアが有る方向を見て私達も其れに合わせてそっちを見ると

シアが右手で胸を隠しながら

「返して下さい」

ミュウを追いかけて

「や—なの—」

追いかけてっこして居た

「あの子も分かかって居ます。」

ハジメさん達が行かなければ、ならない事を
まだまだ幼いですからつい甘えてしまいます。
けれども…

其れでも一度も「行かないで」とは口にしてないでしょう?」

私は今までの出来事に思い出して

「確かに行っていないね」

「そうでしょ」

あの子もこれ以上ハジメさん達を引き留めていないと分かって居
るのです

だから…」

「幼子に気を遣われちゃ世話無いな

分かった。

今夜ハッキリと告げる事にするよ

明日の朝出発するって」

「じゃあ今夜はご馳走にしましょう。」

ハジメさん達のお別れ会ですからね」

其れを聞いた私はハジメとミレアに近づいて

「其れなら洋食のねこやが良いです。」

洋食のねこやの扉が土日しか開かないので…」

「ああそこは美味しですからね

貴方」

「確かに美味しいが…」

「ハイ!期待して居ますね。ア・ナ・タ♡」

「いや、だからその呼び方は…」

後ろに気配がして

「ハッ」

私達が振り返ると

「レミア…いい度胸」

「レミアさんいつの間油断も隙も無いよ」

そしてテイオは何か思いついたのか

「ふむ…見る角度によってはご主人様にご奉仕してる。」

様にも見えるのう

露出プレイとはナイス」

テイオが言いかけている途中でハジメが「これ以上言わせるか!」
と言わんばかりに高速のパンチを

「ブヘッ

ありがとうございます!!」

其のまま海に転倒した。

その間に

「ミュウちゃんそろそろ水着返して下さいよお」

「えー

あー!」

ミュウが何か思いついたのかシアの水着をハジメに差し出して

「パパに上げるの!」

と言い出して

「え!?!」

流石にハジメは驚き

「ま、まさかミュウちゃんハジメさんに頼まれて私の水着を!?!

もうハジメさんたら言ってくれればいいのに!」

シアが勘違いして

「!?!」

余計に驚いて

其れに続いて

「ハジメ…私もあげる」

「わ、私だってハジメ君が欲しいなら」

ユエ、香織は水着に手を掛け始めた

「はあ!?!」

ちよ待て」

ハジメが慌てて止めるが

「あらあらじゃあ私も♡」

レミアも便乗し始めて

「上と下どちらがいいですか?」

その言葉が凄まじく一瞬でユエと香織が正常に戻り

「れ、レミアさん、冗談はやめて下さい!」

「あらあら?」

私は構いませんのに」

「ハジメ…」

レミアは危険…」

その後の夕方にミュウとお別れを告げる。

着ているワンピースをギュツと握り、泣くのを堪えていた

「もう…会えないの?」

「……ミュウ…」

「パパは離れても…」

「ずつとミュウのパパで居てくれる?」

「……ミュウがそれを望むなら…」

「なら…いってらっしやるの」

「それで今度はミュウがパパを迎えに行くの」

「迎えに…ミュウ…俺は凄く遠い所に行くつもりなんだ。

だが

「でも行けるならミュウも行けるの」

「だってミュウはパパの娘だから!」

「ハジメは周りを見てから口元が笑って

「ミュウ 待って居てくれ

全部終わらせたなら必ずミュウの所へ戻って来る、

皆を連れてミュウを迎えに行く」

「ほんと!」

「ああ俺がミュウに嘘を付いた事が有るか?」

「戻ってきたら今度はミュウもつれてってやる

「其れで俺の故郷…生まれた所を見せてやるよ」

「パパの生まれた所!」

「きつとビックリするぞ」

「俺の故郷はビックリ箱みたいな場所だからな」

「見たいの!」

ミュウがハジメに抱きついて

「楽しみか？」

「すっごく！」

「なら良い子で待ってろよ

危ない事はするなよ？」

ママの言う事をよく聞いてお手伝いを頑張るんだぞ？」

「はいいななの♪」

「パパ！」

「ママもママも一緒？」

「あああ…それは…」

ハジメは戸惑るが

「もちろん、私だけ仲間外れなんて言いませんよね？」

「いや…其れはそうだがマジで此処とは別の世界だぞ？」

「娘と旦那様が行く所に着いて行かないわけじゃないんじゃないですか

♪

「そうか。」

「ユエー！」

「うん」

『テレポート ナーウ』

私達はワイズマンの魔法陣を潜って異世界食堂の洋食のねこやの扉を

「チリンチリン」

扉の中に入る

「いらっしやいませ。」

開いて居る席に座って下さい」

私達は其々の席に座り其々が食べたい物を注文を頼んでから

私は

「シャルル！」

「はいシャル」

「母さんに電話」

「分かったシャル」

「ラブリーコミュニケーション」で母さんに電話を掛けて
『翼愛！』

試練突破したのね』

「うん、メルジーネ大迷宮突破したから」

『なら送っておくわ』

「ありがとう」

私は電話を切って一方で

「連れて行くの？」

「反対か？」

「其れがハジメの決めた事なら」

「そうか」

「少し驚きましたけどねー」

「うん」

今のハジメ君ならお別れすると思っ居たから」

「ミュウと出会ってご主人様も少し変わったかのう？」

「でも…タイミングを選べなかつたら…？」

「物語とかだと帰る手段を手に入れても其れがいつでも好きな時に使

えるとは限らない…」

「どうでもするさ…」

何が有つてもミュウの所に戻るし日本だつて見せてやる

物語のような展開でミュウを置いて世界を超えちまったのなら、何

が何でもこの世界また戻ってくればいい

何でも世界を超えればいい

其れだけの事だろ？」

「ん…それだけの事」

「そうだね」

ハジメ、ユエ、香織が甘い雰囲気を作り出した

「パパー！」

ミュウの言葉でハジメは甘い雰囲気から抜けて

「ごはんが来たの」

「よーしいっぱい食うぞー」

「おー♪」

「お持たせました」

その後料理やデザートにドリンクを堪能して、その後私が支払いして異世界食堂の洋食のねこやを後にすると私達の前に

「如何やら届いたようだな」

「そうね」

私は近づいて其れは正しく今回攻略したメルジーネ大迷宮のクリア報酬だった。

ギフトの整理整頓 in エリセン

私は近づいて其れは正しく今回攻略したメルジーネ大迷宮のクリア報酬のダンボールの蓋を閉めているガムテープをハジメが作ったアザンチウム鉱石製のカタターナイフで切って蓋を開けると色々が入って居た

「其れじゃあ皆配るよ」

「……………「……………」おとおお!!……………」

私は取り敢えず適当に取りだす。

手に取ったのは何か入って居る箱。

私は箱を開けると何かのチップと端末が入って居てピンクの端末には付箋に私の名前

黄色の端末は付箋に黒花の名前が書いていた

「黒花」

私が呼べば

「はいー」

黒花が私の元に行き

「母さんからの贈り物」

私は黄色の端末を黒花に差し出して私はピンクの端末を取りだして箱を地面に置いた

ハジメは私達に近づいて

「其れはロックマンシリーズのロックマンエグゼの5作目のロックマンエグゼStreamに登場する端末の「プログレスPET」だな」
「それで私の「プログレスPET」はロールマークで黒花の「プログレスPET」はジャイロマンのマークだね」

「そうだな」

私とハジメは確認した後

「取り敢えず電源を入れようか」

「はい」

私と黒花は「プログレスPET」の電源を入れた

入れた「プログレスPET」は初期起動少しよロードしてから完全

に立ち上がって

『初めまして』

「プログレスPET」から声がして私達は「プログレスPET」の画面を覗く

私の「プログレスPET」の画面にはメインカラーはピンクで髪の毛は黄色の少女

黒花の「プログレスPET」の画面には

『あんたが俺のオペレーターか』

色は黄色でヘリコプターに変形が出来そうな長身なロボット？が居た

私達は取り敢えず

「初めまして私の名前は鞆波・A・翼愛でこっちが」

「鞆波・A・黒花です。」

宜しくお願いします」

『ええ宜しくね』

其れで私の名前がロールで』

『俺がジャイロマンだ』

早速だが俺達の役目はあんた達の母親から細かい事は聞いている。

であんた達は今魔物が居る異世界に現実世界に居るのに対して俺達はインターネットなど繋がって居るないPETだけの電脳世界に居る

このままじゃあ俺達は役立たずだ』

『其処で活躍するのが「シンクロチップ」』

「「シンクロチップ」……あ！

「「プログレスPET」と一緒に箱に入って居たチップの事ね」

『そうそれ』

私は箱を再度手に取り箱に入って居るチップ「シンクロチップ」を二枚とって

「はい」

黒花に渡す

「ありがとう」

「其れでクロスフュージョンはデイメンシヨナルエリアが必要じゃ」
『其処は大丈夫』

『俺達と一緒に送られた「シンクロチップ」には「デイメンシヨナルチップ」のデータが入って居るからデイメンシヨナルエリア無しでもクロスフュージョンは出来るぞ』

「シンクロ率の方は？」

『それも大丈夫翼愛ちゃんのお母さんが翼愛ちゃん達のDNAデータを私達に組み込んだからシンクロ率は90%越えだから』

「成程ね」

黒花！

「はい」

私と黒花は「シンクロチップ」と「プログレスPET」を持ち直して

「ロール！」

「ジャイロマン」

「「シンクロチップ」スロットイン」

「「プログレスPET」のスロットに「シンクロチップ」を入れて

「クロスフュージョン!!」

私達の衣服や髪の毛の飛び出して居る部分が収納されてアーマーのパーツ単位で続々に装着されてアーマーが完成して私はクロスフュージョンロールで黒花はクロスフュージョンジャイロマンに変身完了した。

「此れがクロスフュージョン」

「此れは凄いですね」

私達はクロスフュージョンした格好を見て私だけ変身を解除して

「次行ってみよう」

私は段ボールを探つて有る物を取りだす。

取り出したのはダンボール戦機の無印のラスボスのLBX、イフリートだった。

其れも装甲娘のLBCS版のイフリートで付箋にはアテナと書かれて居た。

「次はアテナ」

「私の番か」

「アテナは装甲娘の「LBCCSのイフリート」みたい」

私は「LBCCSのイフリート」を差し出す

「そうか」

アテナは「LBCCSのイフリート」を受け取り

「LBCCSコネクト！イフリート！」

『カウンタースystem起動、スキンフィールド展開、コネクト・コンプリート』

「LBCCSのイフリート」が消えて香織の身体にイフリートのようなアーマーが現れて徐々に衣服が変わり変身が終わった。

「これが私の新しい力か」

「黒花、アテナは新しい力鳴らす為に組手して来たら？」

「そうですね」

「だな。」

行くぞ

黒花とアテナは離れて組手を始めた。

その間にも私は段ボールから探って居ると小箱を掴んで開けると電子戦隊デンジマンの変身アイテム「デンジリング」が入って居た。

付箋には雷槍と書かれて居たので

「次は雷槍君」

「はい」

雷槍が前に出て

「これが雷槍君の新しい特典だよ」

雷槍に差し出して

「ありがとうございます」

受け取り

「指輪ですか？」

「うん、名前は「デンジリング」

電子戦隊デンジマンの変身アイテムだよ」

「そうなんですか」

雷槍は「デンジリング」を箱から取り出して

「翼愛先輩付ける指、決まって居ますか？」

「分からないけど原作じゃ全員右手の薬指に嵌めて居たよ」
「ならそうします」

雷槍は「デンジリング」を右手の薬指に嵌める

「其れで後は如何すれば良いんですか？」

「えっと確か……ハジメ！」

「なんだ？」

翼愛

「デンジマンの変身の仕方分かる？」

「もちろん知って居るぞ」

「デンジ・スパーク！」の発声とともに「デンジリング」に付けている右手の拳を突き出すことで、内部の亜空間フィールドで圧縮されているデンジ強化服の圧縮を解除し、装着する。

「だろ」

「そうみたい。」

早速やってみよう」

「あ、はい」

デンジ・スパーク！と言った後に右手の拳を突き出す」

すると「デンジリング」の内部の亜空間フィールドで圧縮されているデンジ強化服が圧縮を解除して出て来て其のまま雷槍の身体に装着する。

「此れがデンジマンの……」

「そうデンジイエローだ」

「武装は何が有るんですか？」

「そうは言ってもデンジマンはスーパー戦隊では最初の奴から四作目だからあんまり知らない」

ハジメは知って居る？」

「一応知って居るがいつ俺の特典が出るのか分からないんだが」

「其れもそうか……あ！

雷槍「デンジリング」が入って居た小箱に説明書とか入って居ない

？」

「ちよつと待って下さい」

「デンジイエローに変身して居る雷槍は「デンジリング」が入って居た小箱を調べると

「あ！

ありました」

小箱から降り畳まれた紙が出て来た

降り畳まれた紙を開くと

「デンジマンの説明書です」

「なら先ずは説明書を読んで内容を把握したら模擬戦に行ってみよう」

「はい」

雷槍は私達から離れて説明書を読む

私は次に取りだす物を再度段ボールを調べる

すると同じ大きさの箱が二つあったので私は同時に取りだして一つ目の箱の蓋を開ける

中に入って居たのは、ブドウのような形状で、房に稲妻のようなものがあり、帯が実全体に巻きついていて居る外観をしているが入って居る果物が入って居た。

もう一つの箱を開ける。

入って居たのは先程の果物に負けない位に元の世界やトータスでも見ない色合いの果物が入って居た

其々のフルーツに付箋が貼って居て付箋に書かれて居た名前はハジメとチロルだ

更にフルーツの他に紙が入って居たので私は取りだして紙に書かれて居た文字を読む

翼愛へ

この手紙を呼んでいる事はこの箱を開けた事になります

箱の中身はONE PIECEの名物、悪魔の実です。

因みにハジメ君には「ジキジキの実」、チロルちゃんは「イヌイヌの実モデル狼」です。

食べるか食べないかは本人が決めて下さい

氷水より

と手紙を一度折り畳んで箱から「ジキジキの実」と「イヌイヌの実モデル狼」を取り出して

「ハジメ君とチロルちゃん！」

と呼び

「俺達の番か」

「そうですね」

私の元に来たハジメとチロルに「ジキジキの実」と「イヌイヌの実モデル狼」を差し出す

「ヨクアイさん、此れなんの木の实ですか？」

「パウ？」

チロル、ベル、ベロは不思議そうに「イヌイヌの実モデル狼」を見つめる中ハジメが

「な、なあ翼愛まさかと思うけど此れってONE PIECEの名物、悪魔の実じゃないだろうな？」

私は無言で氷水の手紙を差し出して

「……」

ハジメはその手紙を受け取って見る

そして

「やっぱり悪魔の実じゃないか」

と叫ぶ

「あ、あのハジメさん

その、悪魔の実って何ですか？」

「悪魔の実はな食べると人体が特別な能力が手に入るんだが欠点として水や海水に浸かると一気に力が抜ける。

つまり金槌になる」

「そ、そうなんですな」

「それで俺があらゆる磁力を操る事が出来る「ジキジキの実」でチロルの方が「イヌイヌの実モデル狼」だ

能力として人体に狼の能力を出せる上に骨格などを狼に変形する

事が出来る」

「へえー、其れで味の方は？」

「俺は食べた事が無いが食べた奴は全員口を揃えて不味いと言ってるぞ」

「そ、そうなんですネ」

チロルは「イヌイヌの実モデル狼」を見つめて

「ベル、ベロ、覚悟は良い？」

「ワン！」

チロルが覚悟を決めて口にしろろうとした瞬間に

「言っておくが一口でも食べると実に宿っている特殊な能力を手に入れることが出来るからな」

「そうなんですか」

良かった全部食べないと行けないと思って居ました」

そう言った瞬間に

「「がブ」」

チロル、ベル、ベロは同時に「イヌイヌの実モデル狼」を口にする

「「——」」

食べて数秒後に

「まっず!!」

「オエ！」

と原作通りに悪魔の実は味は非常に不味いようだ

「チロルちゃん、大丈夫ですか」

「一応大丈夫だけど」

体の変化起きていますか？」

チロルは自身の身体をクルクルと見る

「変化……もともと狼人族だから変化が」

「そうですもんね」

「何か腕を狼の腕にとか顔を狼の顔に変形させると思うのは」

「腕を狼の腕に……」

と違って居ると腕から体毛が生えると同時に腕の骨格が変わって来た

「うわ!？」

チロルが驚いて腕が元に戻った。

「今、髪の毛操作をして居ないのに腕が変わった」

「其れが悪魔の実だな」

ハジメがそう言っただけで居る「ジキジキの実」を見て

「チロルも食ったから俺も食うか」

ハジメは覚悟を決めたのか「ジキジキの実」を食べて

「――」

少し口で噛み締めて

「やっぱりまず」

そう言っただけで残った「ジキジキの実」を纏雷を発動して「ジキジキの実」を炭になるまで燃やした

「ですよね。」

私もそう思います」

チロルも「イヌイヌの実モデル狼」を炎魔法で燃やして捨てる

「取り敢えず俺達は自分達の能力を試しに行くわ」

そう言っただけでハジメとチロルはそう言っただけで私から離れた。

私は再度段ボールから次の物を探っただけで取り出す。

ギフトの整理整頓 in エリセン 其の二

私は再度段ボールから次の物を探って取り出した

取り出したのはアタッシュケースで付箋に書かれて居たのはユエなので

「次ユエ！」

「うん」

ユエが私の元に来て

「これがユエの特典」

私はアタッシュケースを開ける

アタッシュケースの中は下の段は二丁のハンドガンがあり上の段は六個のマガジンが入って居た。

ユエ「これは？」

ユエは二丁のハンドガンをアタッシュケースから取り出して見る

「其れは魔法科高校の劣等生の主人公・司波達也のCAD「シルバー・ホーン・カスタム・トライデント」だね」

私はそう言うが

ユエは私の方を見て

「？」

ユエは頭のクエスチョンマークを作って居た

私達の世界の知識だから無理もない。

其れに、私はハジメの方を見る

「……」

ハジメは先程「ジギジキの実」を食べて磁石人間になって今は磁力の操作を覚えようと集中している

私は諦めてユエの方に向き直して

「取り敢えず其れは一見としてハジメが使っている銃に見えるけど杖だよ」

「杖？」

ユエはそう言うて「シルバー・ホーン・カスタム・トライデント」を周りをよく見る。

「まあそう反応しても可笑しくない」

詳しく言うとCADはユエの時間軸から見て未来の技術で作られた術式補助演算機、キャストイング Casting アシスタント Assistant Deviceの略称

其れで今ユエが持つて居るのはCADの技術を一步、二歩進ませた技術者が使つて物だよ」

「おお!!」

私はアタツシケースの中に入って居る「シルバー・ホーン・カスタム・トライデント」の動きを止めるスポンジを退かすと下に説明書が入つて居たので

「詳しい事は此れを見て」

私は説明書を差し出して

「うん」

ユエは受け取り説明書の内容を見るが

「ヨクアイ、読めない」

「あ!」

ユエは技能に言語理解が無いから日本語が読めないんだ

「えつとほらリンフォース達なら読めると思うよ」

「あ!?!」

ユエはリンフォース達の方をに行き

「読める?」

ユエはリンフォース達に見せる。

「待つて下さい」

リンフォース達は「シルバー・ホーン・カスタム・トライデント」の説明書の内容を読む

「ええ読めます」

「なら読んで」

「分かりました、主」

ユエはリンフォース達と一緒に「シルバー・ホーン・カスタム・トライデント」の説明書を読み始めた。

私は其れを確認してから新しく段ボールから小箱を取り出した。

付箋にはシアと書かれて居た。

「シア 君の番」

「私のですね。」

「楽しみです」

私は小箱を放り投げてシアは小箱受け取って小箱を開ける

「此れって宝石ですか？」

小箱に入って居たのは宝石基「ソウルジエム」が入って居た。

「其れは「ソウルジエム」だね。」

色合いから見て深月フェリシアの奴だね」

「其れでヨクアイさん、此れの使い方は？」

「えっと……私「ソウルジエム」持って居ないから説明できないから。」

エリザ・ツェリスカの「ソウルジエム」を持って居るアテナから説明を受けてね」

「わ、分かりました。」

にしてもヨクアイさんにも説明できない事が有るんですね」

「まあね。」

「使い方とか分からないから……」

「そう言う事ならアテナさんの所に行きます」

シアは「LBCSのイフリート」を使っているアテナの所に行く

私は次に段ボールからまた小箱を取り出した。

付箋にはテイオと書いてあったので

「次はテイオさん」

「妾の番か」

テイオが近づいたので小箱を開けると

「何じゃこれは？」

「何かの血？」

小箱には針が無い注射器が入っておりその注射器の中には血の様に赤く顔の様な物が蠢いていた。

「御免説明書を見る」

私は小箱に入って居る説明書を取り出して小箱をテイオに押し付けて説明書の内容を読み始める。

「……」

そして全て読み終わってティオの方を見る

「其れで何と書いてあったのじゃ？」

「えっとですね。」

この針が無い注射器に入って居るのはDragon Marked For Death、直訳すると死の刻印を押されたドラゴンと言う作品に登場する龍血の一族と言うの皇女の龍跡が入って居るみたいです

「なんじゃその不吉な名前の作品は」

「えっとですね、作品の話の内容は……」

私はDragon Marked For Deathを説明する

「成程妾達よりも逆境を生きて来た物達の力なのか

なら妾も使わせてもらう」

「分かった」

私は小箱から針が無い注射器を取り出して

「使い方は説明書に書いてあった。」

先ほども言ったようにこの注射器には龍血の一族の生き残りの皇女の龍跡が入って居る

此れを体の右腕に打ち込めば皇女の龍跡の力が入る。

だけど打ち込んだ瞬間に激痛が走り右腕は永遠に元に戻らない」

「そう、

じゃが妾は構わない、やってくれ」

ティオは着物を捲って右腕を出した。

「その前に口に布を噛ませた方が良いと思うよ」

「その必要はない

妾達より逆境生きていた者達、その中の皇女が使って居た力

なら、竜人族の未来を引っ張る妾もその痛みを知る権利が在るのじゃ」

「そうなら後悔しないでね」

私は針が無い注射器を振るってから

「!」

テイオの右腕に針が無い注射器を突き刺す。

突き刺した針が無い注射器は仕組みに従って針が無い注射器の中に入って居た龍血の一族の皇女の龍跡がテイオの身体に入って行き

「……」

完全に入って行った事を確認して私は素早くまだ色々入って居る段ボールを抱えてテイオから離れて

「……」

暫く待つてテイオは自身の右腕を見ていると

「!?!」

突然テイオは右腕を抱えて苦しみ出して

「――」

言葉にならない悲鳴を挙げ初めて其れに合わせて右腕が赤色に変化したと思ったら右腕の形が變形して針が無い注射器に入って居達の様顔が無数に浮かび上がった

そして次に衣服も右腕の様に無数の顔に変わって行く

「テイオさん!?!」

私は待機状態の「レーヴァテイン」を取り出して

「レーヴァー……」

「ま、待て……」

テイオが静止した

私は思わず止まる

「さ……さつきも、言ったが

妾、はす……進んで、この者達……痛み、を味わ……ている。」

テイオは一呼吸を置いて

「だからこんなもん妾だけで押されるわ」

テイオが力を入れると無数の動き回って居た顔はピッタリと止まって徐々に引つ込み始めた

そして完全に右腕を基の形に戻した

「ハア、ハア、ハア」

テイオは荒い呼吸をしていて

「テイオさん、大丈夫ですか？」

「ハア、ハア、な、なんとかの」

テイオは右腕を見る

「随分と変わったの」

テイオの言う通りに右腕が異形な形をしていた

「其れで上手く扱える？」

「そうじゃの……」

テイオは暫く右腕を見ています

「！」

テイオの右腕が巨大な龍の顔になった。

「少し操作に戸惑るじゃの」

「なら大丈夫だね」

「そうじゃの」

妾も操作に鳴らす為にご主人様の元に行くの」

テイオはハジメ達の元に行く

私は次に段ボールから小箱を取り出して付箋は香織と書かれて居た。

「香織ちゃん」

「はい、私の番ね」

香織は私の元に来て小箱を開いて見ると指輪が入って居たが

「この指輪見た事が有る」

「ああ、此れってシャマルさんが使っている「クラールヴィント」だね」

「確かにシャマルさんが使っている「クラールヴィント」だね」

「なら私が説明するよりもシャマルさんの説明の方が良いね」

「そうだね」

私、シャマルさんの元に行くわね」

香織は「クラールヴィント」が入って居る小箱を私から受け取ってシャマルがいる方に行く

私は気を取り直して次の物を段ボールから取り出す。

取り出したのは袋に入って居る服だ。

付箋には

「次、牙十郎君」

「俺の番か」

牙十郎は私に近付いて

「牙十郎君の特典は「剣の装」」

待機状態の「剣の装」を袋から取り出して渡す

「〔剣の装〕は確かキルラキルの結構重要なアイテムだったはず」

牙十郎は受け取り私は「〔剣の装〕と一緒に入って居た紙を取り出して

て

「その通り
さらには言えば此れには成長補正が入って居る」

「成長補正?」

「そう、牙十郎君が強くなれば「〔剣の装〕」から「〔剣の装・改〕」、「〔剣の装・更改〕」、「〔剣の装・奥義開眼〕」と姿が変わるんだよね」

「成程俺向きという訳か」

「そうなるね」

「では……」

牙十郎は「〔剣の装〕」を着る為に今着て居る服を脱ごうとしたので
「ちよつと待った。」

シャルル、空間魔法陣を出して」

「はいシャルル」

シャルルは空間魔法陣を展開して有る物を取り出した。

取り出した物は早着替え用の輪っか付きのカーテンを取りだして
輪っかかを牙十郎の真上に持ち上げて

「この中で着替えて」

とカーテンを出す。

牙十郎は

「あー!」

気が付いたようで

「会長、すみません。」

忘れて居ました」

「まあ優花ちゃんが一線を越えたからしょうがないけど、私達はまだ

「線を越えていないから」

「ごもつともです」

「後早く着替えて」

「あ、はい！」

牙十郎はカーテンの中で牙十郎は「剣の装」に着替えて

「会長、もういいですよ」

私はカーテンを下に降ろすと牙十郎は「剣の装」に着替えていた

「其れじゃあ会長早速行きますね」

「了解」

バックステップ少し下がって

「！」

牙十郎は「剣の装」の変身を始めたが

「あ、忘れていた」

「剣の装」を含めた「三ツ星極制服」変身する際必ず裸になる事を忘れていた

「「「きやああああ!!」」」

ルーズ、刷庫、鷹音、雫は行き成り裸になった牙十郎に悲鳴を挙げ

てしまい

「あー、ちよ、待って」

牙十郎の制止も虚しく「剣の装」は「剣の装・改」、「剣の装・更改」

に変形して変身が完了して名乗る場面だが

「……」

先程の出来事に思わず固まってしまい少し数秒間の時間を待つて

「えっと、「剣の装」は「剣の装・改」を飛ばして「剣の装・更改」……」

少し気まずそうな空気になる

「えっと……牙十郎君御免、「剣の装」を含めた「三ツ星極制服」変身

する際必ず裸になる事を忘れていた」

「会長もう少し早く言っして下さい」

「取り敢えず八つ当たりに行く?」

「はい、行かせてもらいます」

牙十郎は新しい特典で模擬戦を始めているハジメ達の方を向いて

「！」

ハジメ達の方に向かってジャンプして向かった

「「「「……」」」」

私達は思わず無言で見送った

私は気持ちを切り替える為に段ボールから新しい物を取りだす。

今までは適当に選んでいたけど今度はちゃんと付箋を見ながら選んでアタツシユケースを取りだす

「えつと……次は優花ちゃん」

「私ね」

「優花ちゃんの特典は忍者戦隊カクレンジャーのニンジャーホワイットの「ドロンチェンジャー」です」

「なんか最近私の特典忍者寄りだけど」

「そうだけど前は「北条國子の巨大なブーメラン」だったじゃん」

「そうだけど」

取り敢えず使い方は

「ドロンチェンジャー」を胸の前に掲げた後、

「スーパー変化・ドロンチェンジャー」の発声とともに印を結んでスイッチを入れる事で、「忍」の文字が刻まれたエンブレムが開いて内部にはめ込まれた忍メダルが現る。

精神エネルギーを受けて膨張した忍メダルからエネルギーが放出されるとともに圧縮収納されていたカクレスーツが装着されるニンジャーホワイトになるの」

「成程ね」

其れじゃ行くわよ」

優花は「ドロンチェンジャー」を胸の前に掲げた後

「スーパー変化・ドロンチェンジャー」

発声とともに印を結んでスイッチを入れると、忍の文字が刻まれたエンブレムが開いて内部にはめ込まれた忍メダルが現れ

優花の精神エネルギーを受けて膨張した忍メダルからエネルギーが放出されるとともに圧縮収納されていたニンジャーホワイトのカクレスーツが優花に装着される。

「此れがニンジャーホワイトね
取り敢えず牙十郎の元に行くわ」
優花は牙十郎の元に行く

ギフトの整理整頓 in エリセン其の三

優花に「ドロロンチェンジャー」を渡してニンジャーホワイトに変身して「三ツ星極制服 剣の装・更改」を纏ってでハジメ達に八つ当たり

している牙十郎の元に行く

私は引き続き箱からアタツシユケースを選んで付箋に書かれている名前を読む

「次、ルーズ！」

「はいはい私の番」

ルーズは私の前に立って

「はいルーズの分」

小箱を渡して

「私の特典なんだろう？」

アタツシユケースを開ける。

ルーズと私はアタツシユケースを覗き込む

「此れって？」

「此れは仮面ライダージオウに登場する仮面ライダーウオズの変身アイテムの「ビヨンドライダー」とキーアイテムの「ミライドウオッチ」
其れも全種類が入って居るね」

私の言う通り小箱に入っているのは仮面ライダーウオズの変身アイテムの「ビヨンドライダー」とキーアイテムの「ミライドウオッチ」の「ウオズミライドウオッチ」、
「シノビミライドウオッチ」、
「クイズミライドウオッチ」、
「キカイミライドウオッチ」、
「ギンガミライドウオッチ」が入って居た。

「会長のお母さんは此れが何処が私にピッタリだと思ったんだろう」
「うくん……えつとね。」

仮面ライダーウオズの専用武器「ジカンデスピア」は槍、鎌、杖の三段階変形できる

多分鎌の部分と、「シノビミライドウオッチ」を使った素早さ重視のフューチャーリングシノビが相応しいと思ったんだと思うの」

「成程」

「早速で悪いけど変身してみよう」

「了解！」

「……で如何やって変身するの？」

「今から説明するね。」

この「ビヨンドライバー」と「ウオズミライドウォッチ」を取り出して

アタツシユケースは私が預かるから」

「お願いします」

私はルーズからアタツシユケースを受け取ってルーズはアタツシユケースに入って居る「ビヨンドライバー」と「ウオズミライドウォッチ」を取り出した

「最初に「ビヨンドライバー」を腰に宛てて、因みにレバーが右側になる様に」

「こうですか？」

ルーズはレバーが右側になる様に「ビヨンドライバー」を腰に宛てると自動的にベルドが出て来て腰に巻きつく

「次に「ウオズミライドウォッチ」の上の部分のボタンを押して」

「えつと……此処だね」

ルーズは「ウオズミライドウォッチ」の上の部分のボタンを押して『ウオズ！』

「次に「ビヨンドライバー」のレバーに「ウオズミライドウォッチ」をセットして下さい」

「此れを此処にと」

ルーズは私の言う通りに「ビヨンドライバー」のレバーに「ウオズミライドウォッチ」をセットして

「先程「ウオズミライドウォッチ」で押したボタンをもう一度押して」「はい」

「ウオズミライドウォッチ」のボタンをもう一度押して『アクション！』

するとルーズの後ろにスマートウォッチが現れてルーズの周りを

レーザーが囲む

「最後に変身と言ってレバーを倒せば変身が完了する」

「会長達が言っている奴ですよ」

「そう」

「なら変身！」

レバーを閉じて

『投影！』

ドライバーの中央ディスプレイに画像が浮び

『フューチャータイム！』

スマートウォッチの液晶にはライダーの文字が浮かび上がり其処からライダーの文字が飛び出て

『スゴイ！ジダイ！ミライ！』

ルーズの身体を銀色と緑のボディが纏われて

そして顔には

『仮面ライダーウオズ！ウオズ！』

先程飛んで行ったライダーの文字がのっぺらぼうな部分に入った

「此れがルーズちゃんの新しい特典仮面ライダーウオズだよ」

「成程成程」

「で武器は？」

「私も詳しく分からないけど多分意識すれば出て来るよ」

「其処は会長も分からないんです」

「まあね、私使った事が無いから」

「取り敢えず意識してみます……」

ルーズは少し意識を集中すると右手にいつの間にか専用武器「ジカ
ンデスピア」が握られて居た

ルーズも自身の右手に「ジカ
ンデスピア」が握って居た事に気が付いて

「此れが仮面ライダーウオズの専用武器「ジカ
ンデスピア」？」

「そうなるね」

「因みに……」

私はアタッシユケースを置いて「シノビミライドウォッチ」、「クイ

ズミライドウオッチ」、「キカイミライドウオッチ」、「ギンガミライドウオッチ」を取り出して

「フォームチェンジは変身した時と同じだから」

ルーズに差し出す

「そうなんだ」

ルーズは受け取り

「口で説明するよりもハジメと模擬戦しながら覚える事をお勧めするよ」

「そうするよ」

ルーズは渡した「ミライドウオッチ」を両腕のホルダーにセットして其のままハジメの元に行く

見送った私は段ボールから次の小箱を取りだして付箋を確認した

「次は刷庫！」

「わ、私ですね」

刷庫はおどおどしながら私から

「どうぞ」

「どうぞ」

小箱を受け取り小箱を開ける中に入って居たのはシアと同じ宝石が入って居た

「会長、此れってまどか☆マジカの「ソウルジエム」ですよね」

「そうだね。」

色以外ならシアと同じ物だね」

「一応色合いで分かるんですが、原作：平松正樹、作画：天杉貴志の芳文社の漫画雑誌『まんがタイムきららフォワード』にて連載されていた漫画、魔法少女かずみ☆マジカ ～The innocent m alicie～に登場する御崎海香の「ソウルジエム」ですよね。

「うん……」

私もマジアレコード 魔法少女まどか☆マジカ外伝で何回が見て居るけど確かに御崎海香の「ソウルジエム」だね。

まあ詳しい事はアテナから聞くことをお勧めするよ」

「そうします。」

刷庫は直ぐにアテナとシアの元に行く

私は段ボールを見る。

段ボールには残り二つになって居た

残って居たのはアタツシケースと札が張られている細長い箱だけだった

私は札が張られている細長い箱を後回しにしてアタツシケースを先に取りだしていつも通りに付箋を見て

「次は鷹音」

「私の番ね」

鷹音が私の元に来て

「これが鷹音の特典」

アタツシケースを差し出して

「どうも」

鷹音は受け取りアタツシケースを開く私と鷹音はアタツシケースを覗き込む

アタツシケースに入っている居たのは仮面ライダーバルキリーの変身アイテムの「エイムズショットライザー」、 「Z―CONバンド」とキーアイテムの「ラツシングチータープログライズキー」、 「ライトニングホーネットプログライズキー」、 「サーバルタイガーゼツメライズキー」が入って居た

「鷹音ちゃんの特典は仮面ライダーゼロワンシリーズに登場する女性ライダーの仮面ライダーバルキリーだね」

「まあ私にピッタリな特典ですね」

「そうだね。」

早速変身してみよう」

「分かりました」

鷹音は左手に「エイムズショットライザー」、右手に「Z―CONバンド」取って

「使い方は？」

「言わなくても大丈夫です。」

私この仮面ライダー好きなんで」

と言って鷹音は右手に持って居る「ZーCONバンド」を勢いよく腰に宛ててその弾みを利用して一回転させて装着して左手に「エイムズショットライザー」を右手に持ち直して空いた左手でアタツシユケースから「ラツシングチータープログラムライズキー」を取り出して「ラツシングチータープログラムライズキー」の「ライズスターター」押し

て
『ダツシユ！』

「ラツシングチータープログラムライズキー」を「ショットライザー」の「ライズスロット」に

『オーソライズ！』

差し込んで直ぐに「ラツシングチータープログラムライズキー」の「キーコネクタ」を動かしてそこで初めて

『Kamen Rider... Kamen Rider...』

待機音声が鳴り響く中、鷹音は「ショットライザー」の「ショットライズトリガー」を引いて

『ショットライズ！』

「ショットライザー」の「ショットライズマズル」から「SRダンガー」が発射されて其れが鷹音の周りを一周してから「SRダンガー」が空中分解し、中から強化アーマー「ライズベースアクター」が展開されて其れが鷹音の身体に次々とアーマーが装着され

『ラツシングチーター！』

鷹音は仮面ライダーバルキリーに変身した

『Try to outrun this demon to get left in the dust.』

鷹音は両手をグッパ―して自分の容態を確認する。

「鷹音ちゃん、如何かな？」

「なんの問題は無い」

「其れは良かったよ。」

「サーバルタイガーゼツメライズキー」は別の日にして、「ライトニングホーネットプログラムライズキー」を其のまま使う？」

「そうね。」

使ってみるわ」

鷹音はアタツシユケースから「ライトニングホーネットプログラィズキー」を取り出して「ライズスターター」を押して

『サンダー！』

「ショットライザー」の「ライズスロット」にセットして居る「ラツシィングチャータープログラィズキー」を抜いて

『オーソライズ！』

差し込んで直ぐに「ラツシィングチャータープログラィズキー」と同じ様に「ライトニングホーネットプログラィズキー」の「キーコネクタ」を動かして

『Kamen Rider.: Kamen Rider..』

待機音声が鳴り響き其のまま「ショットライザー」の「ショットライズトリガー」を引いて

『ショットライズ！』

「ラツシィングチャータープログラィズキー」と同じ様に「ショットライザー」の「ショットライズマズル」から「SRダンガー」が発射されて其れが鷹音の周りを一周してから「SRダンガー」が空中分解し、中から強化アーマー「ライズベースアクター」が展開されて其れが鷹音の身体に次々とアーマーが装着され

『ライトニングホーネット！』

仮面ライダーバルキリー ラツシィングチャーターから仮面ライダーバルキリー ライトニングホーネットになった

『Piercing needle with incredible force.』

「其方も以上ない」

私がそう言うのと鷹音今の状態を確認して

「はい、無いです」

「なら其のままハジメ達と模擬戦行ってみる」

「まあ返り討ちに会うかも知れませんが行ってみる」

鷹音はライトニングホーネットの「ホーネットエール」を展開して飛行する。

そして最後に

「最後は私なのね」

雫は前に出て来た

「そ、そうなんだけど」

此れを見て欲しいんだよね」

私は段ボールに入って居る最後の奴を見せる

「え？」

何よ此れ」

雫は段ボールに入って居る最後の物を取りだす。

無数の札が張ってある木箱だった

「兎に角置いて見て」

「う、うん」

雫は木箱を置いて

「取り敢えず開くね」

私は木箱に張ってある札を丁寧に剥がして木箱を開ける

中に入ってたのは

「刀？」

鎖で固定されている刀があった

「妖刀だね」

「妖刀？」

私が言ったように鎖でがっちり固定されている刀は時々動いている

「鎖でよく見えないけど鞘や持ち手からして痛いのは嫌なので防御力に極振りしたいと思いますに登場する妖刀、身喰らいの妖刀・紫だね」

「紫……」

「こうも鎖でがっちり固定されていると間違いなく使い手がいない状態だね」

「翼愛の母さんなんで危なっかしい物を送って居るの」

「多分雫ちゃん悩んでいる頃合だと思っっているんじゃないの？」

「……否定できないわ」

「兎に角ここでやるのはリスクだと思うから此れ私が預かるわ」

「ええお願いするわ」

私は木箱を閉じて札を張り直して

「シャルル、此れ仕舞って」

「はいシャル」

木箱を空間魔法に仕舞う

リリアーナ・S・B・ハイリヒ

母さんから送られてきたギフトの整理整頓を終えて翌朝
私達はミュウをエリセンで分かれる

その時にミュウから人数分の貝殻を渡される

「これは…」

「お守りなの」

「キレイ…」

「ミュウちゃんありがとうね」

「宝物にしますね」

「ふふ…妾もじゃ」

其々感謝の言葉を言つて

「皆ミュウとお揃いなの」

ハジメはミュウの視線になる様に腰を落として

「ありがとうなミュウ」

御礼を言つて

「じゃあ…行つて来る」

此の時ミュウは泣きそうになったが我慢して

「行つてらしゃいなー！」

ハジメを抱きしめて

「……」

ハジメも抱きしめ還す

ミュウは次にユエ達の方に行き

「お姉ちゃん達も」

「ミュウちゃん、必ず戻つて来るからね」

「其れまでお利口に待つておるのじゃぞ」

別れの挨拶をしてレミアも

「どうかお気を付けて…」

「ああ…」

そして私達は潜水艇を使ってエリセンから離れた。

其の後陸地について魔力駆動四輪でそうこうして居ると

優花が

「……………南雲、この先で戦闘が行われてるみたいよ」
魔力駆動四輪を運転するハジメにそう進言する。

「……………あれか」

ハジメにも見えたようでそう呟く。

そして私達も見えて

「ハジメさんあれってなんか襲われて居ませんか」

「ああ…相手は賊みたいだな」

ハジメの言う通り隊商を盗賊が囲んで居た

「あの戦力差で拮抗してるのはすげえな」

ハジメが感心するように言う

「ん…あの結界は中々」

「ふむ…さながら城壁の役割じゃな。」

結界越しに魔法を撃たれては、賊もたまらんじやろう」

ユエとティオがそう推測する

「でも一向に引く気配がありませんよ?」

「そりゃあんなデカイ結界召喚組でもなければそう長くは保たない

時間はかかるが待つて居れば勝手に解ける」

ハジメがそう言っている間にも結界に罅が入り始めた

見ていると

「ごめん南雲君。」

ちよつと気になることがあるから、あそこの隊商と合流してほしい

んだけど……………」

突然雫がそんな事を言い出した。

「何でだ?」

「もしかしたら、あそこに『彼女』が居るかも……………」

「あの結界の構成はリリイの物なんです」

「リリイ…」

私その言葉を聞いてなんか忘れていたような記憶があると思って
記憶を探ると

「ああ〜!」

「急に何だ！

翼愛」

「思い出したリリイはハイリヒ王国のリリアーナ・S・B・ハイリヒだ
ハジメ君出して」

私の言葉にハジメは何の事だと首を傾げるが、とりあえず私の言う
通りに合流することにした。

隊商の近くまで魔力駆動四輪で近付くと、隊商の人間たちが何だ何
だと騒ぎ始める。

一方でハジメは一向に魔力駆動四輪のスピードを一向に緩めない
其れに気が付いた雫が

「あ…あの南雲君？

スピード一向に緩めないけどまさかとは思うけど…」

「犯罪者を見たらアクセルを踏め…教習所で習う事だろ？」

「習わないよ

勝手に交通ルールを歪めないで！」

雫はそう言ってハジメの狂行を止める為に

「皆もなんか言ってる…」

全員に求めようとしたが全員が武装の準備して居て

「御免準備して聞いて居なかった」

「……」

そうしている間に盗賊は魔力駆動四輪から伸びた刃で胴体を切り
裂き跳ね飛ばしをした

其の後停車して

「総員盗賊を殲滅！」

其の後三分を経たずに盗賊を殲滅

香織、シヤマルは盗賊に襲われて怪我した人の治療を終えた

まあ私達が来る前に息途絶えた人は幾ら香織、シヤマルでも無理

其の後盗賊を殲滅して

「雫！」

女性の声がして声がした方向を見ると

フードを被った人物がこっちに来る

その時にズレたフードから覗く金髪と碧眼、そして整った容姿が見て取れた。

雫に向かって駆けよった。

「リリイ！ やっぱり、リリイなのね？ あの結界、見覚えがあると
思ったわ。まさか、こんなところにいるとは思わなかったから、半信
半疑だったけど……」

「私も、こんなところで雫に会えるとは思いませんでした。

…僥倖です。

私の運もまだまだ尽きてはいないようですね」

「リリイ？」

それってどういう……」

雫が『リリイ』と呼んだ彼女の言葉の意味を図りかねている。
すると、

「あっ！ 誰かと思えばリリアーナ王女！」

香織がパンと手を叩いて思い出したと言わんばかりにそう言った。
リリイはその反応に慌ててフードを深く被り直すと、口の前で人差
し指を立てて静かにと言うジェスチャーをした。

「……………知ってんのか、香織？」

ハジメがそう聞いた。

「へっ？」

思わずその相手が素っ頓狂な声を漏らす。

「あ……ハジメ君。」

ハイリヒ王国の王女様なんだけど、覚えてない？」

「気さくで人当たりのいい性格で、誰にでも分け隔てなく接する優し
い王女様って有名だったじゃない」

雫と香織の言葉に頭に指を当てて記憶を辿ると、

「……………

ああ」

記憶を辿った末に、ほんの僅かに見覚えがある事を思い出した。

「ぐすっ、忘れられるって結構心に来るものなのですね、ぐすっ」

何やら泣いているが、

「牙十郎君と優花ちゃんは覚えてる？」

雫がそう聞くと、

「まあ、香織が言った名前で思い出したわ」

「俺は優花と同じぐらいのタイミングで……」

牙十郎と優花がそう言う

「ぐすつ……私って、そんなに印象薄かったでしょうか……？」

「リリアーナ王女の印象が薄かったというより、奈落での印象が強すぎただけだから……！」

別にリリアーナ王女が印象薄いわけじゃないから……！」

何故か香織が彼女を慰めているが、

「其れに印象に差があったと思うから」

「差？」

私の言葉に優香が聞き返すと、

「えっと、まず最初に香織ちゃんと雫ちゃん。」

2人はハジメ君が奈落到ちるまでの2週間の間に、どれだけの頻度でその王女サマと会っていた？」

私はそう聞く。

「えっと……ほぼ毎日かな？」

「そうね……勇者である光輝のグループにいたからかもしれないけどでも雫ちゃん程じゃないと思うよ。」

私ハジメ君の工房に居たから」

2人はそう答える。

「次に優花ちゃん。牙十郎君、ルーズちゃん、鷹音ちゃん、刷庫ちゃん。皆はどれぐらいの頻度で会っていた？」

「そうね……2日か3日に1回位だったと思うわよ」

「俺も其れ位」

「私も」

「ええそうね」

「まあそこそこできるメンバーの一人でしたからある程度合ってます」

「で、最後にハジメ君と私、黒花と其れからアテナと雷槍君だが

……俺は白崎さん達と一緒に会った事を除けば、最初の顔合わせ以外では会った記憶は無いな」

「……………俺はそいつと会った記憶は香織達と一緒に居る時だけだ」

「私は……………工房と廊下ですれ違った位ですかね？」

「私は黒花と同じ意見だな」

「僕も姉さんと同じです」

「というわけだ。」

ハジメ君を中心に王女さまの印象が薄いのは当たり前で。

そもそも会っていた回数違います。

要は王国にとって、戦力として使える『駒』に対しては良い印象を与えて、仕えない『駒』は如何でもいいって事がハイリヒ王国の重人達の悪い思考が漏れ出ているんです。

因みにリリイお久しぶりです。

翼愛です」

私は、ハイリヒ王国の重人達の香織、雫とハジメの扱いの差をそう評する。

リリイは

「そ…それはそうですね

ヨクアイさんの言う通りです。

王国があなた方を『駒』として見ていた節があるのは否定できません。

事実、そうなのでしょう……………

後…そ、その久しぶりですねヨクアイさん」

リリイそうハッキリと口にする。

「ですが、私は誓って一度たりともあなた方を『駒』だと……………戦争の道具と思っただ事はありません……………！」

と言うかだいたい前にヨクアイさん指摘されましたので」

リリイは私達の目を真っすぐに見つめてそう言い放つ。

「やはり貴方は王族の中でも一番道徳を持って居る。」

リリイ

「ええありがとうございます。」

「……………それで、リリイは如何してこんな所に居るの?」

雫の質問にリリアーナ王女はハツとして、

「そのお話をする前にこちらへ来ててください。」

特に香織の力が必要です」

そう言つて俺達をとある馬車に案内する。

そこには、

「恵里……………」

馬車に寝かされ、毛布を掛けられた恵里が横たわっていた。

其れも右腕が無い状態で出血が酷く苦しそうな表情をしている。

「何故恵里がこんな所に?」

それにこの怪我……………さっきの盗賊……………じゃあねえよな? いくら

なんでも召喚組の一人である恵里が奇襲を受けたとしても、後れを取るとは思えねえ」

ハジメがそう言う。

「はい、全てお話しします。」

ですがまずは恵里の治療を……………香織、お願いできますか?」

リリイの言葉に香織は頷き、

「再生…」

その一言で治癒魔法を発動させ、恵里の傷を一瞬で治癒して更に切り落とした右腕も再生して完治した

恵里の呼吸は落ち着いたが、まだ意識は戻らない様だ。

それでもリリイはホツとした表情を見せる。

「それで? 何で恵里や王女であるアンタがこんな所に居るんだ?」

ハジメが単刀直入にそう聞くと、

「それは……………」

リリアーナ王女は口を開いて

「……………愛子が攫われました」

驚愕の一言を言い放った。

取り敢えず私達は隊商に別れを言つて魔力駆動四輪に乗り込む走りながらリリイは王国で何が起きたのか説明してくれた

「王宮内の空気が可笑しいと私はずっと違和感を覚えていました。」

父もこれまで以上に聖教教会に傾倒し、…熱に浮かされたようにエヒト様を崇め信仰心を強めて行きました

最初は正教教会との連携を強める為だと納得して居たんですが、違和感が消える事はありませんでした…

それからです…まるで病気でも患ってるかのように覇気や生気の無い騎士や兵士が増えだしたんです…

その事をメルド団長に相談しようとしたんですか少し前から姿を見えず結局会う事は出来ませんでした…

ナグモさんやヨクアイさんの異端者認定の話もそうです…

オルクス大迷宮やウルの町での功績や愛子さんの異議・反論も、全てを無視して…私はお父様に猛抗議した。

ですが何を言ってもナグモさん達を神の敵とする考えを変える気は無いようです…

お父様は…次第に私の事も敵を見るような目で見えるようになってしまいました…

私は恐ろしくなり愛子さんの元へ相談に向かったんですが…
其処で私は見てしまったのです…

銀髪の教会修道服を着た女が愛子さん気絶させて連れ去って行くのを…

あの修道女がこの異変の黒幕か…それとも黒幕と繋がっている…
私はそう考えました」

「……………ねえ、思ったんだけど、その国王や重鎮達の変わりようって……………」

刷庫が思い当たることがある様にそう口を開く。
「リリイと刷庫の考えて居る事は有って居ると思う。」

私達はこの間でメルジーネ海底遺跡の神代魔法でアレイスト王の狂行に走った瞬間を目撃したのは、その時にリリイが言っていた銀髪の教会修道服を着た女が居たんだよ」

「そうですね、あの時の私の考えは正しかったのですね。」

その後私は誰かに伝えなくてはならない…でも王宮内は見張られて居ると考えるのが妥当です。」

ならば誰かに協力を…

真つ先に香織さん達の事が頭に浮かびました。

西に向かったと恵里から聞いて居たので…城から出ようとした時に恵里さんが何故か牢屋に入って居るダイスケさんが剣で右腕を斬り落としているのを目撃したのです」

「大介が

其れは可笑しい

私自ら光輝君考えを根本的に変えて其のまま牢屋に入れを決めたのに」

「ヨクアイさんの言う通りです

其れにその時のダイスケさんは黒くて禍々しい鎧を着て居ました。

私は咄嗟に魔法で目くらましをして

後にご存知の通りです…

ひとまずゼンゲン公の助力を得る為に隊商の方々にお願いして便乗させて頂く事にしたのです。

でもまさか…その途中で香織さん達と会えるなんて…少し前までなら神のご加護だと思ふところですが…しかし私は…今は教会が怖い…一体、何が起きているのでしょうか」

リリアーナ王女は恐怖に震えるように自分の身体を抱きしめている。

「まさかメルジーネ海底遺跡の試練で見た。

あの過去映像の再現だな……」

牙十郎はそう言う

「…まあ取り敢えず、先生を助けに行かねえとな」

ハジメの言葉がリリアーナ王女にとって意外だったのか、

「宜しいのですか？」

そう確認した。

それに対し、ハジメは肩を竦める。

「勘違いしないでくれ。

王国のためじゃない、先生の為だ。

あの人が攫われたのは俺が原因でもあるし、放って置くわけにはい

かない」

「愛子さんの……」

「先生を連れ去ったのは修道女なんだろう？」

なら先生は奴らの総本山神山に連れて行かれた可能性が高い

神山は七大迷宮の一つだ。

こちらとしても都合が良い

まあ、先生を助ける過程で、その異変の原因が立ちはだかればぶっ飛ばすけどな……」

「では、私は、そうであることを期待しましょう。宜しくお願いしますね。南雲さん……」

私達を乗せた魔力駆動四輪はハイリヒ王国を目指す

王都襲撃

ハイリヒ王国に到着した私は魔力駆動四輪から降りて直ぐに作戦会議する。

作戦会議している途中で恵里が起きたので恵里を含めて分担する。リリイ、香織、雫、恵里、私、優花、牙十郎、鷹音、刷庫、ルーズはリリイの案内で隠し通路から王城へ向かっていた。

ユエ、リンフオース、シグナム、ヴィータ、シヤマル、ザファイラ、シア、テイオ、チロル、黒花、雷槍は有事の際の為に王都で待機して、ハジメとアテナは愛子先生の救出の為に神山へ向かった。

ハジメとアテナSIDE

ハジメは空力、アテナは「ルシフェリオン」の「バリアジャケット」を身に纏って空を飛んで

「あそこだな」

「だなあそこに愛子先生が居るんだな」

神山の聖教教会の総本山の教会に向かう

「それでハジメ

愛子先生はあの建物に居るのを確定としてどこの部分に居るだ？」

「其処は任せろ」

ハジメは眼を閉じて

「……」

暫く静かにするとハジメが目を見開いて

「見つけたー！」

と言ってハジメは先に移動して其の後にアテナが追いかける。

聖教教会の総本山の教会に近付いた時に

「！」

ハジメは気配を消して其れに合わせて

「！」

アテナも気配を消して聖教教会の総本山の教会の右側の塔の方に

向かいその一つの鉄格子を覗くと

「居た」

体育座りで座って居る愛子が居た。

ハジメは早速周りに罣が無いか調べると

「イレギュラー…もしかして南雲君…?」

愛子が無意識に吐いた言葉に

「おう、なんだ先生」

ハジメが反応して

「ほわっ」

愛子は驚いた

「え?」

辺りを見渡す

「こつちだ先生」

「え!」

愛子が声がした鉄格子の方を見て

「ななな…南雲君!」

盛大に驚いて居た

「よお先生元氣してるか?」

「まあ驚きながらハジメの名前を言う位には元氣みたいだね」

「うえええつ!!」

ななな南雲君とアテナさんですか!」

私の存在にも気が付いた

「え?」

「ここは最上階で…神山で…えええつ!」

「あー…うん、取り敢えず落ち着け先生

もうちよつとでトラップが無いか確認が終わるから」

暫くするとトラップが無いと判断したのか錬成で愛子が居る牢屋

の壁を壊してハジメとアテナが入った。

愛子は

「……」

色々あつて放心状態になる

「何でそんなに驚いて居るんだよ

俺達が来ている事に気が付いてたんだろ」

「え!？」

ハジメの言葉は愛子は寝耳に水だった。

「気配は完全に遮断したはずなんだが…」

「へ?」

気付いて…ええっ!!」

「いや、だって俺の名前を呼んだじゃないか

気配を察知したんだろ?」

ハジメの言葉を聞いた愛子は少し考えて何か思い出したのか

「あ…あれはその…!」

無意識で呟いたって言うか…いや!

そうじゃなくて」

「ハジメ、愛子先生は偶然にハジメの名前を言ったらハジメが反応しただけ」

「そ…そうですね!」

其れよりも如何して此処に!？」

「そりゃあ…もちろん助けに」

「わ…私の為に…南雲君がが?」

わざわざ助けに来てくれたんですか!？」

うええ…!」

わ…私の為に」

愛子は吊り橋効果なのか色々妄想しているので

「愛子先生、私が居るのを忘れないで下さいね」

「あ!」

あ、アテナさん!？」

す、すみません」

ハジメが行き成り

「ドン」

「ひゃああっ」

左手で愛子の後ろの壁に壁ドンして

「ダメっダメです南雲君っ」

愛子の左手首を

「あっ」

握って

「そんないきなり！」

わ…私は先生だからあ」

妄想がR15からR18に突入しかけて居たので

「愛子先生何が勘違いして居ませんか？」

「え？」

ハジメは愛子の左手首が見える様に動かして

「いや…これ外すだけだから…」

「ふえ？」

ハジメは屈んで

「魔力封じられてたら不便だろ？」

魔力封じのアーティストを外す作業を始める

「其れとも外したら何かあるのか？」

「え!？」

あー…」

愛子はハジメが何をやって居るのかを

「そう言う事ですか…」

理解した

「一体なんだと思ったんだ」

「いえ…スミマセン」

何でもありません！」

愛子は顔を真っ赤にした

「まさかと思いましたが先生と生徒のやってはいけ……」

アテナが言いかけている途中で

「わああああ！わああああ！」

愛子は耳を塞いで叫んでしまう

ハジメとアテナSIDE

←

翼愛達SIDE

リリイ、香織、雫、恵里、私、優花、牙十郎、鷹音、刷庫、ルーズ
はりりイの案内で隠し通路を移動して居た

「リリイ

この通路から王宮内に潜り込めるのね」

「そうです

私は王宮外に抜け出した時に使った道です」

ある程度移動するとリリイが上を見て止まり私達も止まり上を見
上げると戸があり其処から入ると確かに王宮内に入れた。

「この時間なら皆さん自室で就寝中でしょう」

「そうだね光輝君の部屋に移行

あいつが何かしでかして居ないと良いんだけど」

私達はリリイと恵里の案内で光輝君の部屋に向かおうとしたがそ
の途中で

「ドオオオオオ」

凄まじい爆発音と同時に王都全体に響き渡るガラスが割れるよう
な音がした。

実際私達の近くのガラスが砕け散った

「今のは？」

「ま…まさか」

リリイが何か思い当たる物が有るのか割れた窓から外を見ると

「大結界が…砕かれた…!?!」

王都の夜空には、大結界の残滓たる魔力の粒子がキラキラと輝き舞
い散りながら霧散していく光景が広がっていた。

「そ…そんな信じられません！

如何してこんなに脆くなっているのです」

「多分あいつの仕業だな」

恵里が何か思い当たるのがそう言って

「檜山？」

私はそう言う」と

「翼愛の言う通りだよ」

そもそも僕が翼愛に背中を押されなかったら王宮内の人間を片っ端から殺して僕が新しく作った魔法を使って人形を作り其処から大結界を発生する装置を壊す予定だったんだけどもう光輝君に告白したから計画は破棄したんだよね」

「聞くけど檜山に大結界の仕組みとか言った？」

私がそう質問すると

「あー！」

恵里が何か思い出した様で

「御免檜山に計画全部言っちゃた」

恵里は気まずそうに頭を掻きながら答えた

『……』

恵里以外全員ジト目で恵里を見つめる

「ちよ、ちよつと待って！」

僕は大結界の発生装置の場所は知らない

オルクス大迷宮から戻った時に調べるつもりだったから

檜山には計画しか教えて居ないんだよ。

其れにこの計画の重要な部分を翼愛に破壊されたんだよ？」

「重要な所？」

雫が其処を付いて来た。

「…大結界を破壊した後に魔族を招き入れて王都を滅ぼそうとしただけだよ」

恵里はそう言う」と

『……』

再度恵里以外全員ジト目で恵里を見つめる

「だけど翼愛に魔族の連絡を入れる死体を奪われたから連絡して居ないから」

今檜山がやって居る事は意味が無いだよ」

恵里がそう言う」と

『聞こえておるかのう？』

香織からテイオの声が聞こえて香織はミュウから貰った貝殻を取りだして

「テイオ」

『おおく感動良好じゃ♪』

貝殻からテイオの声が聞こえる

ミュウから貰った貝殻にハジメが生成魔法を使って念話を付与した。

これで連絡の落差が無くなった

「うん、こつちも良く聞こえてるよ」

香織がそう返す。

「其れでテイオから見て何か変化有った？」

雫が質問すると

『王都の南方1km程の位置に魔人族と魔物の大軍じゃ。』

あの時の白い竜もおるぞ

結界を破壊したのは奴のブレスじゃ』

テイオの報告を聞いて私達は思わず恵里から離れる

「まっつて本当に何もしていないから」

恵里は必死に代弁する

『其れよりも、主の魔人族が姿が見えんのう』

『……』

「まさか本当に敵軍が？…どうやってこんな所まで…」

国境警備隊は何をやって居たのです？」

テイオの報告に、リリアーナ王女が表情を険しくしながらも疑問に眉をしかめる。

此処で

「多分ですけどにあった神代魔法の空間魔法じゃないでしょうか？」

刷庫が予想を建てる

「おく成程グリューエンの時のアレですね」

「でも大軍を移動させる事が本当に出来るの？」

香織の質問に刷庫は

「其れはユエさんでも道具無しでは難しいですが道具などの補助があ

れば簡単に出来ると思います」

『ふむ…実際にこうして王都の目と鼻の先におるのじゃ、其れ以外考えられんじやろうな』

白竜が攻撃していながらその背に乗ってないと言う事はもしかしたら奴は今なんらかの代償を払って動けない状態なのやも知れぬ』

「其れで如何するの?」

『安心するのじゃ』

もうユエ達が動いているのじゃ。

妾がこうして待機して連絡して居るのじゃ』

「そう、ならそつちは任せたから」

『では切るぞ』

とテイオの念話が切れて

「其れじゃあ皆行くよ」

「「「「「おー!」」」」」」

「お、おー」

翼愛達SIDE



ハジメとアテナSIDE

愛子に取り付けられていた魔力封じのアーティストを外し終えて

「ありがとうございます、南雲君とアテナさん…」

でも如何して私が囚われてる事を知って居たんですか?」

「姫さんと恵里から聞いたんだよ」

「姫さん…リリアーナ姫ですか?」

「正解!」

「先生が攫われる所を目撃してたんだよ」

王宮内は監視されて居ると考えて王都を抜け出して来たんだよ

俺達に助けを求める為にな」

「リリースさんが…」

南雲君達は其れに応えてくれたんですね?」

「まあな…この状況は俺にも責任がありそうだし」

「其れに翼愛が捕まえて牢屋に入って居る檜山が脱獄して良からぬ事を建てているみたい」

「!？」

檜山君が脱獄して居るんですか？」

「其の上で恵里を半殺しにして居る」

「そんな…」

「前にも言ったがあいつは気に食わないと理由だけっで俺を殺そうとしたんだ

話を振って裏切った恵里を殺す事なんか躊躇なんか無いぞ。

兎に角、先生は会いたくなかっただろうが…他の連中と合流するまで我慢してくれ」

ハジメは手を差し出して

「……」

愛子は少し戸惑るが

「!」

ハジメの手を握り

「会いたくなかったなんて事はありません

助けに来てくれて本当に嬉しいです。

私を女神として祭り上げたのは理解して居ます」

「そうかい…」

取り敢えず行くぞ

天之河達の所には姫さん達が行っている筈だ

合流し此れから如何するか話し合えばいい」

「分かりました。

南雲君気を付けて下さい。

教会は頑なに君達を異端者認定しました」

「其れはリリイから聞いた」

「そうですね。

其れに私を攫った相手はもしかしたら……」

「分かっている

どつちにしろ先生を送り届けたら俺達の用事を済ませる必要があるし、多分その時に教会連中とやり合う事になる」

「其れに愛子先生を誘拐した奴の目星も付いて居るから」

「全ては覚悟の上…と言う事ですか？」

「そうだ」

「だね」

と会話して居ると

「ドオオオオ」

「!!?!」

音の発信源はかなり遠いにも関わらずかなり大きい音が響いた

「な…なんですか、今の音？」

愛子は戸惑って、ハジメは直ぐに念話を発動した

「遠くで何かが砕けた様な…」

「……」

ちっ…なんてタイミングだよ。

まあある意味好都合かもしれないが」

「南雲君…？」

「何が起きた」

「先生、アテナ魔族の襲撃だ」

さっきのは王都を覆う大結界が破られた音らしい」

「ま…魔族の襲撃!？」

それって…」

「ああ現在ハイリヒ王国は侵攻を受けて居るって事だ」

仲間から念話で知らせが来た

魔族と魔物の大軍だそうだ。

完全な不意打ちだな」

「そ、そんな大変です」

「先生は取り敢えず天之河と合流しな

話は其れからだ」

「は…はい」

ハジメは慣れた手つきで愛子を

「ひゃっ」

お姫様抱っこした瞬間

「ハジメー！」

「分かって居る」

外で眩い光が発光した。

ハジメとアテナは眼にも止まらない速さで外に出るとさつきまで居た建物が跡形も無く消滅して居た

「そ…そんな

建物が一瞬で…」

愛子は啞然としてハジメは

「まさか分解したのか…？」

予想を建てると

「ご名答です

イレギュラー…」

上から声がして全員が上を見ると月の光を背に純白なワルキューレの様な女性が居た

「ノイントと申します

神の使徒として主の盤上より不要な駒を排除します」

今回の事件の黒幕が現れて

「ハッ

殺れるもんなら殺って見ろ

神の木偶が」

「だね」

アテナは「ルシフェリオン」をノイントに向ける

ユエ達SIDE

「ノイントと申します」

神の使徒として主の盤上より不要な駒を排除します」

神の使徒と名乗る今回の事件の黒幕、ノイントが現れた

アテナは「ルシフェリオン」、ハジメは愛子先生を抱えながら「ドナー」を向ける。

一方でノイントが左手を出すと背中^の光の翼がより一層と光出して

「消えなさい

イレギュラー達」

翼から無数の光の矢を発射された

「ルシフェリオン」カートリッジシステム！」

『font:ul20』Yes!『font』

「ルシフェリオン」のカートリッジシステムが起動して空薬莖が排出されてプロテクションが展開されるがノイントの光の矢を二、三発受け止めるとプロテクションはガラスが砕け散る様に砕け散った。

「ちっ！

ハジメ回避に専念しろ」

「分かって居る」

アテナとハジメはノイントの光の矢の回避に念戦して

「ハジメ！

愛子先生を連れて逃げよ

此処はあたしが抑えるから」

「その方が良いな

先生、逃げるぞ！」

「あ、はい」

ハジメはノイントから逃げようとしたが

「逃がしません」

ノイントの宣言で

「！」

逃げようとしたハジメを囲む様にノイントに似た人物が現れた。

「其れは私の劣化版ですが、今は足手纏いが居る貴方にはピッタリです」

ノイントは私達が説明を求めて居ないのに勝手に説明をしてくれて

「ちっ」

「！」

ハジメは舌打ちして

「テイオ！」

おいテイオ！

聞こえるか！」

ハジメは念話でテイオに入れる。

『ぬおっ！』

ご主人様!？」

どうしたのじゃ?』

「ヤバいのが出て来た

先生を預かって欲しい

抱えたままじゃ全力が出せねえ！」

と念話しながら劣化版のノイント達の攻撃を回避しながら「ジキジキの実」で手に入れ磁力の力を利用して四丁のドンナーを取り出して磁力の力で空中に浮かせてマシンガンの如く発砲する

『承知した

直ぐに向かうのじゃ!』

と念話が消えてノイント達と戦闘する

ハジメとアテナSIDE

←

ユエ達SIDE

ハイリヒ王国の城壁に千差万別の魔物が押し寄せて来て魔物達は城壁を攻撃して飛行できる魔物は城壁を超えようとしたが

ユエの隣にリンフォースが来て

「仰せのままに」

手を差し出してユエは其れを掴んで

「ユニゾンイン！」

するとユエとリンフォースは光に包まれて

仮面ライダーワイズマンの白いローブは黒く染まり、琥珀色の仮面はルビーに変わって居て、背中には黒い羽が付いて居て、左手に「シユベルトクロイツ」、右手に「シルバー・ホーン・カスタム・トライデント」が握られてユエの右側に「夜天の書」左側に起動している「神界書庫」が浮いていて、その後ろにシグナム、ヴィータが居て

「殲滅する」

「ハア！」

其々のアームドデバイスを変形させて構えて

「邪鬼退散！」

「イザナギ！」

「ウロボロス 二連!!」

「翔けよ、隼！」

『font:ul20』Sturmfalken.『font』

「轟天爆砕！」

ギガントシユラク！」

六人の攻撃で王都を責めていた魔物達は殆ど全滅して残りの魔物達は蜘蛛の子を蹴散らす様に逃げて行った

シア、ザファイラ、シャマルと言うと

シアは仮面ライダーシーカー パワードビルダーフォームに変身して

『ALL MIGHT』

『GIGANT ALL MIGHTY』

全ての拡張武装である「ギガントソード」、「ギガントハンマー」、「ギガントブラスター」を装備して

「♪♪♪」

鼻歌を歌いながら魔物が攻撃した城壁を壊れた部分を「ギガント

ソード」で抜き取って「ギガントブラスター」で抜いた部分を埋めて
「ギガントハンマー」で城壁を強化して

「ハアあああ!!」

「!」

ザファイラとシヤマルが魔法で更に城壁を強化する。

「終わりました」

そう言って拡張武装を全て仕舞い、シアの所にユエ、黒花、雷槍、シ
グナム、ヴィータが来て遅れてチロルも来て全員が集まって最初の言
葉が

「あのゴミ野郎は見つけた?」

「あのふさげた事をしてくれたクソ野郎は何処ですか?」

ユエとシアの質問に最初に答えたのは

「シアちゃん、私は見付けていない」

チロルで次に

「ごめんなさい

私の方でも見つけられなかったわ」

シヤマルが答えた。

「シヤマルでも見つけられないってどんな奴なんだ?」

「確かに俺達が出会う前に会ったと聞いているが」

「うん」

「それにしても、あの野郎一体何処にいやが:「ゾクッ」!」

シアが何か感じて

「皆さん!

上です」

シアの言う通りユエ達の真上から極太の光線が来て其々回避して
事なきを終えたが

「やはり予知の類か:」

真上から声があったので再度真上を見るとゲートが開いて其処から
白竜に乗って居るフリードが下りて来た

「忌々しい奴らめ:」

まさかあの状況から生還するとはな:

やはりあの男に垣間見た、悍ましいほどの生への執念は危険すぎる
まずは奴らの仲間である貴様らから確実に仕留めさせてもらうぞ
…」

フリードの言葉に

「殺れるものなら殺ってみろ」ですう」

ユエとシアが代表で挑発して

「いいだろう…」

フリードがその挑発を受け止めるとフリードが乗って居る白竜の
口から光線が放たれる

「さっきの倍返し」

『テレポート ナウー！』

ユエの前にワイズマンの魔法陣が展開して其処に白竜の光線が入
る

「何っ!？」

フリードが驚いて

「驚くのは早い」

ユエがそう言う「神界書庫」の本棚から一冊の魔導書が一人でに
取り出されて開かれて魔法が発動される。

すると

「!？」

フリードの周りにワイズマンの魔法陣がフリードを囲む様に無数
に出て来て

「!」

無数に出て来たワイズマンの魔法陣から白竜の光線が放たれて

「ぐううう…!」

フリードと白竜は乱数回避行動を取って何とか全て躲しきった

「おのれ…!」

ユエの実力に驚愕する

それをやった当の方人は

「クイクイ」

更に挑発する

「貴様…」

フリードが睨んで居ると

「フリード様」

フリードの後ろに

「我等も共に奴らを」

「黒鷲部隊か…」

黒鷲部隊と呼ばれた部隊が居た

フリードは手を挙げて

「総員聞け！

私は黒いローブを身に纏った術師を殺る

お前達は全員でその他を殺るのだ。

引き離して連携を取らせるな」

「了解!!」

そう言うのとフリードとユエは直ぐにその場から離れて遅れて黒鷲部隊が突撃して来た

するとシアが

「シヤマルさんあの鷲みたいな魔物を従わせている黒鷲部隊を私とチロルちゃんできらせてくれませんか」

「シアちゃん!？」

チロルは驚く

「まあ私の我儘ですけどハジメさん達と一緒に旅をしていて何処まで強くなったか知りたいんです」

「シアちゃん…」

そう会話して居ると

『シヤマルシアの我儘に答えて

私も今のシアとチロルの実力を知りたいから』

「分かりました」

「残っている方は私達でやっておきますので」

「シアさんとチロルさん思う存分に暴れて下さい」

「ああ、そうだな」

「シア！

私が教えたハンマーの動かし方忘れたと言うんじゃねーぞ」

「後の事は俺達に任せておけ」

「皆さんありがとうございます。」

「其れじゃ行こうか」

「うん」

「其れじゃ行くわよ」

クラールヴェイント！」

『！』

シア、チロル、黒鷲部隊はシャマルが生成した隔離結界に入った。

シアは仮面ライダーシーカーのまま「ドリユツケン」を取り出して、

チロルはエリセンで食べた「イヌイヌの実モデル狼」で得た狼の力を

発動した

黒鷲部隊の戦闘に居た魔族の男性が風魔法を放ったが

「でやあああつー！」

「ドリユツケン」で打ち消したが突っ込んで来て

「貴様等だけは必ず殺す!!」

シアと魔族の男性の間に

『！』

チロルが割り込んで攻撃を防いで弾く

魔族の男性に乗って居る黒鷲の魔物はその場でホバリングをし

て

「その仮面越しでも分かるヘラヘラした顔…反吐が出る！」

四肢を引きちぎって貴様の男の前に引きずって行ってやろう！」

と魔族の男性がそう言うが

「何処かで会いました？」

そんな眼を向けられる覚えが無いんですが？

チロルちゃんは？。」

「私も無い。」

と言うか初対面」

「ですよね」

「赤髪の魔族の女を覚えているだろうか？」

貴様らがオルクス大迷宮で殺した女だ!!

「ああ…あの人」

「ヨクアイさんが殺した人ですか」

「其れがどうかしたんですか?」

「カトレアは!」

お前等が殺したその女は俺の婚約者だ」

「あー…成程

それで」

「よくもカトレアを…

優しくして聡明でいつも国を思っていて居たあいつを…」

「知りませんよそんな事」

「うんうん」

「な…なんだと?」

「死にたくなければ戦わなければいいでしょう?」

そもそも挑んで来たのはあの人の方ですし」

「其れにハジメさんは最初に逃げる事を進めましたよ」

「そうそう「逃げるなら追わない」って

愛しき人を殺されれば恨みを抱くのは当然ですけど

殺した相手がどんな人だったか教えられても興味ないですし

貴方なら聞きますか?」

今まで殺して来た相手の人生とか聞かないでしょう?」

「黙れ!」

魔人族の男性は頭に血が上って風魔法を無差別に放ってきた

「貴様等に…カトレアを殺した貴様らに…俺の苦しみが分かるものか

!」

魔人族の言葉を聞きながらシアとチロルは避けて

「ピーピーやかましい人ですねぇ

彼女さんの方がよっぽど潔かったですよ?」

「其れに殺したのはヨクアイさんですよ。

私達を恨むの違うと思いますよ」

シアとチロルがそう言うのと魔人族の男性は歯ぎしりを建てて

「カトレアの仇だ…苦痛に狂うまでいたぶってから殺してやる」
両手に魔力を集めて
シアとチロルは構える

シア&チロル

「カトレアの仇だ…苦痛に狂うまでいたぶってから殺してやる」

ミハイルの両手に魔力を集めて

シアとチロルは構えて

「シアちゃん行くよ」

「はいです」

ミハイル集めていた風の魔力がミハイルに乗って居る鳥型の魔物に風が集まって

「行くぞ鹿の鎧を着た兎人族と狼になった犬人族ツツ!!」

鳥型の魔物は旋風を纏って突っ込んで来て

「!!」

シアとチロルは其々の武器を取り出してミハイルと鳥型魔物の連携を連続で防いで

「ぐぬぬ

近づくじゃねーです

この変態っ!」

シアとチロルは真上に飛んで回避するがシアとチロルよりも真上にミハイルの部下、四人と四羽が待機して居て

「馬鹿め!」

空は我々の領域だ!!」

と勝ちを確証して居たがシアとチロルの靴にはハジメが生成魔法で空力が付与されて居て空力で生成された足場を一気に踏む混んでシアは「ドリユツケン」、チロルは「スライムスーツ」陰の実力者になりたくて!産の伸縮性を利用して鉤爪に変形させて二人の間合いに入った瞬間に

「しやらくせ!!」です」

シアは「ドリユツケン」、チロルは「スライムスーツ」陰の実力者になりたくて!産の鉤爪でミハイルの部下、四人と四羽を秒殺した

「なっ!」

ミハイルは驚いて居たが直ぐに立て直して

「チイツ

シアの攻撃を

「スカッ」

回避できる

其の後も

「うりゃー！」

「スカッ」

「おりゃあー！」

「スカッ」

「だりゃああー！」

「スカカカッ」

と連続で攻撃を躲されるがチロルの方は

「うわあ！」

なんだコレ!？」

「直ぐに解け!!」

「!!」

「うわあああああ!?!」

陰の実力者になりたくて！産

「スライムスーッ」のスライムを利用してスパイダーマンの様な縦横

無尽の三次立体移動で魔人族を倒していたが

「はあああああ!!」

鳥型の魔物攻撃でスライムのロープが切断されて

「あの黒いロープの様な物が取り付けられたら直ぐに誰かが斬るんだ」

直ぐに対策が取られてしまう

シアとチロルは集まってお互い背中合わせになり

「だ——ッ！」

チヨロチヨロと鬱陶しいですう！」

「私にも対策が取られた」

「ムキー」

こうなったら全身ボツキボキにしてやります！」

シアはそう言って鎖付きの鉄球を取り出して其のまま「ドリユツケン」に接続して

「し、シアちゃん」

「どっせえええええええ——い!!」

360度に鉄球を振り回してシア達から離れている魔族と鳥型の魔物をミキサーの様にする潰す。

チロルは狼由来の身体能力と反射神経でシアの広範囲攻撃を躲して

「シアちゃんやるなら言うて!!」

「さつきチロルちゃんやった事のお返しですよ」

口喧嘩しながら行動している

ミハイルはシアが起こした突風に顔を腕で防ぎながら

「おのれ…奇怪な技を…!」

上だ!

上空は奴の範囲外、天頂より集中攻撃しろ!!」

魔族達はシア達よりも高く跳ぼうとしたが

「チロルちゃん」

「了解!」

チロルは六式の月歩を連続で使って魔族の鳥型魔物よりも早く高く跳んで

「なあ!?!」

「俺達よりも先に上を捕らえただと」

「落ち着け黒いロープの攻撃に気を付ければ……」

「ベロ!ベル!食事」

「ワン!!」

ベロとベルの顔が大きくなり

「え!?!」

黒鷲部隊の誰かの魔族が吐いた瞬間にベロとベルの口を大きく開いて黒鷲部隊の殆どが口に入った瞬間

「バウ!!」

噛みついた

そしてそれをシュレッターの如く連続で噛みつく

「た、助け…てく…れ」

「死にたく…無い…」

阿鼻叫喚の絶叫が響く

ベロとベルのかみつき攻撃を躲した黒鷲部隊は直ぐにチロルに攻撃するが「スライムスーツ」で防ぐ

魔人族達は直ぐにシアに向けて魔法を飛ばすが

「それならー！」

鎖付きの鉄球の「ドリユッケン」を真上に掛けて回転させると魔人族が放った魔法をかき消した

「くっ…鉄球の回転で魔法をかき消しているのか!？」

「しかしこれでは奴も身動きがとれまい、

俺達は真上で仲間を食っている犬人族を狩るぞ」

「狩れるのか疑問だな」

黒鷲部隊のミハイルの部下の言う通り鉄球を真上で回して居るシアにミハイルは近づいて

「貰ったぞ!!」

風の砲撃の様な魔法を繰り出すのが、シアは自ら「ドリユッケン」を手放してミハイルの風の砲撃を躲した

「何っ!？」

ミハイルが驚いている間にシアは自由落下している「ドリユッケン」を回収して其れと同時に鉄球に

「しゅーとおっ!!」

サッカーボールの如く蹴って鉄球は其のままミハイルが乗って居る鳥型魔物に当たって

「おおおッ」

其のまま上空に吹き飛ばされる

「ミハイル様!!」

「私に構うな！」

奴らに攻撃を集中しろ!!」

ミハイルの指示を聞いた部下は魔法攻撃と鳥型魔物の固有魔法なのか石針を飛ばす。

シアとチロルは攻撃を捌いていると鳥型魔物の石針が二人の身体

にほぼ同じタイミングで刺さって

「!」

直ぐに刺さった部分を見ると

「これは…!?!」

「石化!?!」

鳥型魔物の石針が刺さっている部分が石化初めて更に徐々に石化が広まり始めた

「やったぞ!」

コートリスの針が刺さっている」

「お前はもう終わりだ」

「石化ですか…」

「不覚を取っちゃった

だけだ」

「この程度の状態異常なら」

「私達の」

二人とも体に力を籠めて無理矢理に抜いて

「再生魔法でえええっ!」

力づくで抜いて石化を解いた

「な

なんだと!?!」

「馬鹿な…!?!」

「さあ、チロルちゃん行きますよ」

「うん」

下はシア、上はチロルの

「!!」

息があった連撃で

「ガツカ」

ミハイル以外の黒鷲部隊の隊員は全滅した

生き残ったミハイルはシア達よりも高く空に居て

「天より降り注ぐ無数の雷!!」

避けられるものなら避けてみろツ!!」

濃密な雷の弾幕的な魔法を繰り出した。

シアは

「ス——ッハ——ッ」

一呼吸を置いて

「天啓視!!」

シアはミハイルが放った濃密な雷の弾幕を遊ぶ様に避ける。

天啓視はシアの固有魔法未来観の新たな派生で最大二秒先の未来を見る事が出来、ある程度連続使用も出来る。

それ故に

「右！」

左！

前！

後ろ！」

自分に向かって来る雷が前もって分かり回避するのは朝飯前になった

一方でチロルの方は「イヌイヌの実 モデル狼」で狼の人獣型から狼の獣型に姿を変えた。

元々、チロルはケルベロスの力を宿して居た為、狼よりも完全にケルベロスになっている

狼の獣型に変え終わった時には雷が目と鼻の先に迫っていたが「！」

一瞬で姿が消えて雷を避けて別の場所に現れてまた姿を消して別の場所に現れる

狼の身体能力を最大限まで高めて自分に迫っている雷を仕分けて動物の狼由来の筋肉のしなやかさと六式の剃を利用して瞬間移動をしたような速さで雷を回避する

「此れも日々の鍛錬の成果ですう！」

「だね！」

濃密な雷の弾幕的な魔法を繰り出したミハイルは

「馬鹿な……こんな」

驚愕して

「こ…この化け物がああッッ」

やけくそ気味に魔力を集めたが其れよりもシア達は到着してシアは「ドリュツケン」を構えてチロルは「スライムスーツ」と髪の毛を合わせて巨大なハンマーを生成した

それを見たミハイルは

「ハ…ハハハ…」

完全に諦めてしまい

「なんなんだ貴様等は…?」

思わず質問してしまう

「ちよつと特別の犬人族と」

「ただのウサミミ少女です♪」

先にシアが

「!」

「ドリュツケン」を振り下ろして先端の鉄球が

「ドゴッ」

ミハイルに炸裂して遅れてチロルが

「!」

「スライムスーツ」と髪の毛で合わせて作った巨大なハンマー振り下ろして

「ドゴオオオオッ」

シアよりも重厚な音を出してシアが使って居た鉄球を砕いて其のままハンマーを振り抜いて

「ズドオオオオ」

地面に叩きつけた

シアとチロルは最後にミハイルが言った言葉が木霊して

「化け物…ですか

ふふっ…ようやく私達もそう呼ばれる程度には強くなれたみたいですね」

と言いながらシアは仮面ライダーシーカーの変身を解いて

「だね」

狼の獣型から元の姿になり

「そう言えばシアちゃん

私達のレベルが化け物ならハジメさんやヨクアイさんは何て呼ばれるだろう?」

「魔王とかじゃないですか?」

「まあ実際呼ばれて居ますから」

「だね」

軽く雑談して

「さてユエさん達の方は…」

シアとチロルはユエ達の元に向かう